

2014 年度博士論文

ろっかくどうのうまんいんこうぼう りつそうけんかい
六角堂能満院工房と律僧憲海

松尾 芳樹

目次

序章

第1節	はじめに	1
第2節	研究史	2
第3節	研究の方法	9

第1章 六角堂能満院粉本

第1節	《田村宗立旧蔵仏画粉本》の概要	14
第2節	白描図像と粉本	22
第3節	粉本筆筭	28
第4節	能満院粉本の特質	40

第2章 憲海と憲里

第1節	憲海の生涯	47
第2節	出自と剃度	53
第3節	長谷寺交衆	61
第4節	会津亀福院住持	70
第5節	入洛から能満院へ	76
第6節	資僧憲里	84

第3章 憲海の師と人脈

第1節	正法律と憲海	96
第2節	鏗慶と信正	102
第3節	高山寺と僧護	108
第4節	豊山能満院海如	116
第5節	冷泉為恭と高山寺	120
第6節	憲海と冷泉為恭	125

第4章 憲海の発願

第1節	発願し奉る誓の文	136
第2節	交衆期の諸山巡歴	140
第3節	空海資料	146
第4節	悉曇研究	151
第5節	声明業	160
第6節	憲海の視座	164
第5章 粉本と儀軌		
第1節	粉本と別尊法	169
第2節	経法部の粉本	172
第3節	能満院粉本経法函への増補	183
第4節	別尊法粉本の諸相	188
第5節	図像の校合	196
第6章 恵心院本		
第1節	能満院粉本と恵心院本	204
第2節	恵心院本にみる南都芝座絵師	210
第3節	恵心院本と憲海	216
第7章 長谷川本		
第1節	長谷川家と能満院粉本	237
第2節	左近と宗伯	241
第3節	宗也以後京都長谷川家譜	249
第4節	憲海と長谷川家	258
第5節	幕末期の絵仏師	271
第8章 憲海と開版		
第1節	印施千種の大願	281
第2節	能満院の開版事業	286
第3節	法雲による開版	297

第4節 収集版画	302
----------	-----

終章

第1節 本論の概要	307
-----------	-----

第2節 今後の課題	310
-----------	-----

初出一覧	313
------	-----

別表

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録	1-1
----------------------	-----

別表2 《田村宗立旧蔵仏画粉本》版本目録	2-1
----------------------	-----

別表3 智山書庫等憲海関係書籍文書目録	3-1
---------------------	-----

別表4 憲海略年表	4-1
-----------	-----

序章

第1節 はじめに

京都市中京区にある紫雲山頂法寺は平安京遷都以前の創建になる古刹として知られる。この僧院の境内にかつて能満院という塔頭があった。

頂法寺は、本堂が六角形の構造を持つため、一般には六角堂の名で知られる。創建にかかる縁起として、聖徳太子が大坂四天王寺建立のため用材を求めにこの地に立寄った際建立したとされ、京都に現存する寺院の中でも有数の古格を誇る。造営当初は、壮大な規模を誇った平安京も、天災・人災を含めた様々な理由により荒廃が進み、中世には室町通を中心とする上京と下京の町域に縮小した。頂法寺は、二臂如意輪観音を本尊とする観音霊場としての信仰を受けて、古くから参詣者が絶えなかったが、中世には町堂としての機能を持つようになる。近世においてもその鐘楼は時を告げる鐘として下京の庶民の生活の中で重要な役割を担い、頂法寺は下京の中核として繁華な人の流れの交差する場所となっていたのである¹。



図 1-1 六角堂『都名所図会』

能満院はこのような立地により、人が集中するただ中にあった僧坊で、安永9年(1780)に刊行された『都名所図会』に収められた頂法寺絵図(図1-1)に建物の一部が描かれている²。絵図から見る限りその位置は六角堂西方の烏丸通側にあたり、現在商業ビルの建つ場所から現烏丸通の一部にあたる一画と思われる。この寺の開創については伝わるところがないが、虚空蔵菩薩を本尊とする寺で、能満院という名は、虚空蔵菩薩の能満諸願すなわち諸々の願を満たす功德に由来する。江戸時代末期には新義真言宗智積院の直末であった。この寺は元治元年(1864)7月19日に起きた長州藩と京都守護職との戦闘に始まる政変事件、いわゆる禁門の変によって発生した大火により焼失した。

能満院は江戸時代末には無住であったとされ、豊山に修行し会津若松の亀福院の住職を

務めていた無言蔵憲海という僧が、弟子大成とともに嘉永年間に入寺し、仏画の制作や開版活動を行った。大火により焼け出された憲海は避難した蓮光院でまもなく遷化するが、彼の弟子達はその後、仁和寺で行われた《御室版両部曼荼羅》の開版に深く関わり、その事業を助けたことで知られる。この能満院工房で使用された作画開版資料は元治元年の火災で焼失したと伝えられているが、実際には火災から避難した資料があった。絵画関係資料は京都市立美術工芸学校³へ、書籍文書資料は智積院へと大正期に寄付され、現在、美術工芸学校に寄付されたものは京都市立芸術大学芸術資料館に、智積院に寄付されたものは智積院山内の智山書庫に保管されている。

幕末期の律僧憲海がこの能満院に設けた工房は、仏画を制作するほか開版事業により図像や聖經の普及に努め、正法すなわち釈迦在世当時の仏教のありかたを理想とした布教活動を行った。それは一方で近世の護法思想の流れを汲む活動と見ることが可能であり、慈雲飲光が提唱した正法律一派における実践的活動の事例と見なされる。また一方で、古刹において貴重な図像聖經の収集活動を行って、近世的な仏画粉本群を形成し、絵仏師との交渉の中に近世の仏画制作の状況を記録する点でも興味深い活動とみなされる。本論は、憲海の思考とその実践の場となった能満院工房について考察するものである。

第2節 研究史

能満院工房を主宰した憲海を紹介する最も古い記述は、天台僧願海が高山寺の密護からの伝聞を書き留めたものである。吉沢義則旧蔵『梵学津梁総目』の「願海付記」⁴の中にみえる。『梵学津梁総目』は飲光が編纂した『梵学津梁』の目録だが、この吉沢義則旧蔵本は願海が安政4年（1857）に弟子の亮海に写録させ、そこに願海自身が付記を加えたものである。憲海に関わる部分は以下のとおりである。

「六角堂塔頭能満院律師、名は林岳奥州会津人なり、此師今時佛菩薩等尊像の真を失するを憂へ自らも絵事に於ては妙手なる故に発願すらく、今時猶如_レ是何に況や将来をや、願くは方今名区旧跡に現存する所の諸曼荼羅諸佛菩薩より天仙鬼類、又は佛器調度の具は申すまでもなく、我佛法僧にあづかるものは大小となく悉く摸_レ之写_レ之一集に大成し、名山石窟の中に収め将来の衆生に送らむと_云、其為法為人の深志可_レ尊々々、然し最早其年六十一二とかや承はる、其成就如何覚束なし佛天哀愍し給へ、梅尾山吉祥雲院密護阿闍梨余の為に話_レ之」

憲海在世中の伝聞として記されたもので、願海に語った密護は、憲海の師であった高山寺の慧友僧護の弟子であり、師からの伝聞とともに実際に憲海に直面していたと考えられる人物である。この短い評伝の中に憲海の事業とその趣旨について客観的な評論がなされていることが貴重で、「願くは（中略）我佛法僧にあづかるものは大小となく悉く之を摸し之を写して一集に大成し、名山石窟の中に収め将来の衆生に送らむ」という言辞を憲海の言葉として伝えている。憲海は仏教絵画を初めとする仏教文化財の集成を試みていたとしている。

次いで管見に及ぶもののうち憲海について評論するものは大正2年（1913）に大村西崖が著した『三本両部曼荼羅集』⁵である。「京都六角堂能満院大願和尚（諱は憲海、無言蔵と号す。有部の律僧。法印。元治元年八月十九日六角堂兵火に罹りし後、姉小路大宮蓮光院に移り、その年九月三日寂す。歳六十七。画に長じ、高雄、東寺の曼荼羅等数本を摸写し、又能くみづから版を刻す。印施一千種の願ありて、七八百種を満ぜり。大曼荼羅印行の願ありしかども果さず。）」とある。また、大正4年（1915）の『智積院誌』⁶においても「六角堂能満院憲海は会津若松の人字は林岳、大願又は無言蔵と号す、元治元年九月三日六十七歳を以て寂す、仏画に巧みにして、又木版刀刻の伎を有し、幾多の刻本ある中、大随求大仏頂両陀羅尼、仏遺教経は今も世に行はる、又漆工、裁縫に巧みにして、其衣服、法衣の如きはすべて自ら縫へり、又筆記に熟達し、或時豊山海如比丘と朝より夕に至る迄共に十行二十字の筆記をなせしに海如比丘は八十枚、和上は百二十枚に及べりといふ。田村宗立画伯談」とある。この二つの評伝は、憲海の弟子であり能満院工房の一員であった田村宗立の在世中であり、まだ憲海と直接面識のある人物からの伝聞を収集することのできる時代のものである。

すでに憲海没後半世紀が過ぎており、密護が語るような憲海の事業に対する記憶は薄れ、能満院の開版事業の記憶がかろうじて遺されているに過ぎない。当初は図像収集事業によって知られていた憲海だったが、《御室版両部曼荼羅》の開板との関係から再認識されるころとなると、関心は憲海の開版事業に重きを置いたものとなったのである。興味深いのは、『智積院誌』に田村宗立の蔵書から憲海の著作目録を作成して掲載し、憲海の学殖に対する接近が見られることである。しかしながら、これら著作への関心もただ憲海が学匠であることを示すにすぎず、憲海の思考への言及には至らなかった。

大正7年（1918）に田村宗立が亡くなり、翌年彼が管理していた能満院旧蔵資料が遺族より現在の所蔵先に寄贈された。これによって、初めて能満院工房の存在が民間に知られ

る機会を得たが、この時点で新たな展開はなかった⁷。例えば、京都市立美術工芸学校に寄付された粉本は画家田村宗立個人の粉本として認識され、その内容に対する正確な認識のないまま、ほとんど利用されることはなかったし、智積院の蔵書においても、目録が公表されないまま、人の知るところとなっていない。ただ宗立逝去との関わりにおいて、大正8年（1919）年に竹田黙雷が宗立を追悼する一文を『藝苑』上に著した際⁸、憲海（大願）について触れている点は、一般書にその名を紹介する嚆矢として注目してよい。

やがて、大正13年（1924）に田中海応が『海如和上傳』⁹を著す。光雲海如の師として憲海を採り上げているが、記述は『智積院誌』の憲海伝を再掲しており、新たな知見は加えられていない。憲海の評論について新たな展開が生まれるのは、昭和3年（1928）に発行された『密宗学報』における小田慈舟及び小原洪秀の論文¹⁰が発表されるのを待たなければならなかった。両氏は、『御室版両部曼荼羅』の制作に関わった大成憲里、十方明宗立らの師として憲海を紹介しており、大村西崖が紹介する憲海像の延長にある略伝が提示された。『御室版両部曼荼羅』に対する憲海の弟子たちの活動に焦点をあてるものだが、弟子達の活動の根底にこの憲海の思考と事跡が深く関わっていることがようやく意識されはじめている。

小原論文では先の「願海付記」と『智積院誌』と『三本両部曼荼羅集』の記事を合成し、若干の新知見を加えた中野達慧の編集による憲海伝を採り上げている。憲海の著作については先の『智積院誌』で採り上げられていないものが加えられている展開がある。小田論文はその内容が『御室版両部曼荼羅』の直接の制作者に及んでいるため、大成、宗立、雲道の各々の略伝に触れている。彼らの師憲海についても多くの記述が見られ、憲海の評伝について、「願海付記』『智積院誌』『三本両部曼荼羅集』の記事を参照しつつこれらを統合し、さらに新たな情報を加えている。先の三著に記述がなく、小田論文によって初めて一般に知られることになった点をまとめてみると、黙住信正による受戒の事、能満院が無檀無祿である事、憲海が晩年仁和寺にて図像抄と覚禅鈔を謄写した事、禁門の変の頃憲海の弟子が8人に及んだ事、憲海が会津亀福院の住持であった事、禁門の変にて焼失を免れた経本図像があり、絵画専門学校¹¹と智積院に寄付された事と、かなり多くの情報が加えられていることがわかる。小田は論文の中で、田村宗立の未亡人田村ともと、憲里に師事したと伝えられる要憲住からの聞き取りを伝えている。田村ともへの聞き取りについては、土宜法龍に伴われて行ったことが書かれているが、法龍は幼き日に憲海から剃度を受けており¹²、法龍が大正12年（1923）に入寂することから考えても、この小田の聞き取りはま

さに憲海所縁の人物との最後の接点にあたる時期であったと思われる。

昭和6年(1931)の『密教大辞典』の刊行において、憲海の項目が立てられ、『密宗学報』に報告された内容が再録されることにより、従来流布していた憲海伝に一応の整理が図られ、固定化することになった。現代の憲海研究及び六角堂能満院研究の出発点は、以下のような憲海伝である。

ケンカイ 憲海 一七九八～一八六四

字は大願、林岳又は無言蔵と號す。奥州会津若松の人寛政十年生る。壮时会津侯祈願所喜福院を董す。有部律を奉じ、持律堅固にして信徒大に帰敬せり。而も性画技に巧にして、心密かに京師に上り仏画の大道場を建てんと欲し、信徒の諫止するを斥け、喜福院を去つて入洛す。文政十一年七月悉曇を長谷能満院海如に学び、天保三年三月黙住信正に就いて進具す。その上洛するや六角堂境内能満院に住せしも、当院は無祿無檀常人の能く耐ふる所に非ず。乃ち徒弟大成と共に仏画を描き、僅に口に糊し専ら密法弘伝に尽瘁す。当時兼綜衆藝の阿闍梨に乏しく、坊間流布せる仏画は多くは信念なき職業画師の作にかゝる。師これを慨き、一意深信の下に筆を執る、その端巖称嘆するに堪へたり。晩年仁和寺に覚禅鈔・尊容抄の古本あるを聞き、請ひて之を謄写して優秀なる仏画の粉本を作り、人の需むるや必ずこれに基きて仏像を画けり。此に於て正確なる両部曼荼羅を印行せんとする大願を發し、大成・雲道・皆了・宗立等の弟子八人と共に励精せしが、元治元年八月十九日幕末擾乱のため能満院炎上し、師弟僅かに身を以て免かれ、姉小路大宮西蓮光院に避難す。かくて多年苦心蒐集せし所の経卷図像大半烏有に帰す。師此災によりて身心を打撃する甚しく、越えて九月三日蓮光院に寂す。寿六十七、臘三十二。嗣法に大成・雲道・宗立等あり。皆画を能くし、尊峯法雲の囑を受けて高雄曼荼羅を模写し、明治三年六月上梓して憲海の本願を果せり(→御室曼荼羅)。憲海は木版刀刻漆工裁縫の技に通じ、幾多の仏典を彫刻殺青し、印施千種の願を立て、大仏頂・大随求両荼羅尼・仏遺教経等無慮七八百種を印行せり。其衣服法衣の如きも自ら之を縫ひ、又写字に熟達し、曾て豊山海如と共に其技を争ひ、朝より夕に至り十行廿字詰百二十紙を写せりと云ふ。著作に大般若経真読記一卷・梵学宗要章一卷・悉曇吉祥略頌紗一卷・輯悉曇関係頌文稿本・大施餓鬼百味供養文一卷・梵学秘要編一卷・四度次第四卷・蔵経中略写若干卷・経論譬喩説一卷・諸説類集記一卷等あり。(密宗学報百七十八)

この『密教大辞典』の憲海伝を見ても、「願海付記」に記された憲海の図像収集の態度に

つについてはかなり簡単に記述されており、能満院工房を主宰した憲海の思考に対する接近は見られない。また、小田論文と真逆の内容となる憲海が海如から悉曇伝授されたとする誤記が見られ、混乱を招いている。しかし、憲海という僧の存在とその事跡について多くの人々の視界の内に提示した意義は大きい。

『三本両部曼荼羅集』では憲海の事跡が、大成、宗立、雲道という《御室版両部曼荼羅》の原画作者の紹介に付随する形で提示されたため、大成、宗立、雲道の伝も記されている。『密宗学報』の論文も基本的に『三本両部曼荼羅集』と同様に《御室版両部曼荼羅》の功績者の視点から彼らの事跡を捉えているため、『密宗学報』では大成、宗立、雲道の伝記についてもより深く情報を収集している。その成果を受けて『密教大辞典』には憲海と同じく『密宗学報』を典拠として大成の項目が立てられた。その内容は以下のようなものである。

ダイジョウ 大成 一八八七の頃

御室版曼荼羅下画揮毫者。諱は憲理、字は大成、越後南蒲原郡新出村の産、水野彦蔵の子なり。性仏教を慕ひ、幼時會津若松市喜福院に入り、大願に師事して剃染す。大願會津を去りて上京するや、伴はれて共に六角堂能満院に住し、師と共に仏画を研鑽し其の妙域に達す。元治元年八月能満院火災に罹りしかば、一時姉小路大宮蓮光院に避難せしが、其の歳大願寂す。後二年同法雲道・宗立と共に仁和寺塔頭尊寿院に寄寓す。偶々尊峯法雲高雄曼荼羅を印行せんとするの挙あり、大成の仏画を善くするを聞き其下画を揮毫せんことを請ふ。大成亦先師の遺志を紹述するを喜び、雲道・宗立と共に日夜鞠躬之に従ふ。而も毫も其報を求めず、自営自活備さに艱苦に耐へて其業を卒へたり。其画く所の版四印会七紙不動尊一紙あり。年六十一の頃郷に帰り、小庵を結びて淡生涯を送り、明治二十年の頃に寂す。遺墨今猶所々に散在す。(密宗学報百七十八)

以後、憲海及び能満院工房の事跡については、この『密教大辞典』の略伝によって普及することが一般的になる。岩波書店の『国書総目録』の編纂に従って編集された昭和 51 年 (1976) 『国書総目録 著者別索引』によって、憲海の著作目録が新たに示されたものの、そこに記された略伝は『密教大辞典』から進展を見ない。さらに平成 4 年 (1992) の『日本仏教人名辞典』¹³においても同様である。そのため、能満院工房を主宰した理由とも云うべき密護が語る憲海の思想については、検証の機会がなかなか生まれなかったが、それは能満院工房の遺産である仏画粉本と智山書庫の蔵書がほとんど一般に知られてこなかつ

たことが影響していた。

その後近年に至るまで、憲海の事跡に関する新たな展開は生まれていない。ただ、昭和39年（1964）に大成と郷里を同じくする坂井栄信が『雑林抄』に寄せた、憲海、大成、宗立に関する聞き書き¹⁴にはそれまでの評伝に語られていない内容が含まれており、研究の進展とは別に、伝承に厚みが生まれている。

戦後、京都市立絵画専門学校が組織改正を経て、京都市立美術大学に昇格する中、昭和24年（1949）から赴任した佐和隆研により《田村宗立旧蔵仏画粉本》の価値が認識されるようになるが整理の目途はたたず、ようやく京都市立美術大学が芸術大学へと改組した後、昭和51-52年（1976-1977）頃粉本を管理する同大学附属図書館において整理が行われた¹⁵。その後、一部が日本画専攻学生の教材として利用されることはあったものの、一般の知るどころではなく、憲海らに対する認識に明確な変化は生まれなかった。

やがて、京都市立芸術大学において文部省科学研究費の補助を受けて昭和61年（1986）から平成元年（1989）まで行われた「密教図像と粉本の調査研究」によって大きな転機が訪れた。田村隆照を中心に行われた本研究により、資料全点の撮影が行われ、同研究の報告書¹⁶では、粉本全体の約8割にあたる資料の棒目録が作成された。同報告書により、この能満院所縁の粉本の存在とその収集の中心人物であった憲海との関係が初めて具体的に報告されたのである。しかしながら、この研究の主たる目的は仏画粉本の現況を具体的に把握することであったため、憲海その人に対する研究としては、旧来の略伝に多くを加えるに至らなかった。

平成16年（2004）には、同研究の成果をさらに発展させて、法蔵館から『仏教図像聚成：六角堂能満院仏画粉本』¹⁷が刊行された。粉本群全体の4割が図録化され、主要な図像の大半を掲載して、本粉本の価値がようやく広く公開されることとなった。また、本書において田村隆照、榊原吉郎、定金計次、筆者により、能満院旧蔵粉本に対する個別研究の先鞭がつけられたことも重要である。

この刊行を契機として、一部研究者の中で憲海に対する関心が高まり、新たな研究成果が生まれるようになる。特に会津若松市自在院の阿住義彦が、会津地域の憲海関連資料を探索したことによって、憲海研究は大きな転機を迎えることになった。従来の憲海研究が京都を中心とする視点から行われていたため、憲海の出自については曖昧であり、結果として複数の憶測が重なり誤伝を発生していたことが明らかとなったのである。会津における憲海研究については鈴木素友の「安佐野傑僧」という文章が早いものとされるが、その

原本の所在は管見におよばない。渡邊春雄が昭和 39 年 (1964) に私家版として発行した『湖南村郷土史 中野郷土史考』¹⁸に、素友の文章が抄録されたところから、人の知るところとなっている。素友の語る憲海伝は、極めて説話性が強く、情報の誤りもあって脚色されたものとなっているが、この文章のイメージが以後の会津における憲海伝の祖型となっている。

それでもなお、私家版では普及に限界があったため、この憲海伝が地域に拡大するには、昭和 53 年 (1978) の『湖南の史蹟と文化財』¹⁹の刊行を待たなければならない。依然として伝説性の強い憲海像が踏襲されているが、素友の憲海伝を地域に定着させることに有効だった。またこの書物の編纂にあたり、湖南地域 (猪苗代湖) の文化財調査が行われ、憲海関係の資料が発掘されて、本書に収録されていることが貴重である。憲海と会津との関わりは早くから指摘されていたものの、憲海の出自が湖南地域にあたり、現在は郡山市に属していることが、研究を遅らせる要因になったと考えられる。

このように、会津地方において説話的世界の住人だった憲海を、客観性、正確性のある事実確認によって、現実の世界に引き寄せたのが阿住義彦による『自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲理」の足跡』²⁰の刊行である。会津若松市にある自在院は、憲海が会津で住職を勤めた亀福院を幕末期に兼帯した寺で憲海所縁の資料が現在も伝えられている。また自在院が豊山長谷寺末となっており、阿住自身が長谷寺と深く関わりを持つところから、憲海が豊山の所化であったことを長谷寺の文書から確認したことは重要である。自在院の所蔵資料をはじめとする阿住の調査により、会津及び越後地方の憲海関係資料の探索が進展したことで、憲海及びその弟子の動向について京都において記された伝記の欠落を補うことが可能となったのである。奇しくも、京都とともに憲海の事跡において重要な拠点となった会津、大和の情報が結びつくことにより、憲海研究は新たな展開を見せることになった。

憲海に関わる資料の公開が進むにつれ、憲海や能満院粉本に対する認識も徐々に拡大していく。筆者は、《田村宗立旧蔵仏画粉本》の性質と憲海の事跡について幾つかの考察²¹を加えており、これが本研究の基礎となっている。そして、現代の仏画制作者の立場から中村涼應、中村幸真も憲海及び能満院粉本に対する考察²²を加え、現図曼荼羅の研究者としての憲海について評価を試みている。粉本に対する研究が展開する一方で、憲海の学問に対する研究も少しずつ進展を見せ、小池満秀は、飲光と憲海の関係を仏教の近代化の系譜の中に位置づけ²³、また、憲海の学問の中でも重要な要素を示す悉曇については、高橋尚

夫、佐久間秀紘が憲海の代表的著作のひとつ『梵学秘要篇』を校刊²⁴して広く公開し、さらに新井弘順は憲海が高野山で書写した進流声明の口訣『佳水耳日言』の考察や、憲海が開版した『両部讀草昏』『佛遺教経』などの声明譜に関する研究²⁵を通して声明研究者としての憲海に対する評価を行うなど、近年憲海の思想につながる研究も端緒に就き、学匠としての憲海の視座も明らかになりつつある。

第3節 研究の方法

六角堂能満院に置かれた工房は宗教活動として運営され、肉筆画制作のほか開版も行った。いわば絵仏所と寺院版方を兼行する事業内容を持っていた。能満院旧蔵の粉本群が図版として公開された現在、能満院で収集された粉本に対する直接的な関心と評価は、仏画粉本としての審美的価値や宗教図像としての歴史的価値に向けられることは当然であろう。それは本資料群の文化財としての価値に直接関わるものである。本資料群の絵画史における価値は、一義的なものとして今後もさまざまな研究の中で考察の対象にされるものと考ええる。

しかし他方で注目すべきは、これら粉本群が正法律を堅持し宗団と独自の距離をとった宗教実践者である憲海の思考を反映していると考えられる点である。憲海は極めて寡黙であり、声高に自身の思考を語らないが、幸い彼の旧蔵書が智山書庫に残されていることから、能満院粉本への理解は憲海の思考研究という経路によっても接近が可能となるのである。本研究の目的は、独自の性格を持つ能満院工房の歴史的役割を、美術史的、文化史的側面から明確にするために基礎的な情報を確認することにある。

具体的考察を行うにあたり、二つの方針を立てる。ひとつは憲海及びその周辺の人物の事跡を検証し、彼らの人物像を明確にすることである。従来伝説的な部分も多く漠然と認識されていた憲海の行動と人物像をできるかぎり客観的に検証し、その背後にある思考を理解するための基本作業とする。そしていまひとつは、彼の思考の実践の場となった工房の遺産についてその構造を読み解くことである。能満院が旧蔵する粉本には絵画制作の参考品である粉本としての性質と、宗教上の問題を内在させる図像としての性質の双方に対する考察が可能である。ここでは粉本個別の考察に優先して粉本群の構造に関わる特質を取り上げて検討の対象とする。智山書庫などの書籍文書類とともに、粉本書付の情報を検証することにより憲海の思考の発露を考察するのである。

以上のような方針に従って、本論は以下の8章により構成する。

「第1章 能満院粉本」では、《田村宗立旧蔵仏画粉本》の来歴と絵画資料群としての基本的な特質について考察する。この粉本群は白描図像と版本により構成され、能満院粉本がその中心をなす。江戸時代末期に憲海らの手によって制作されたものが大部分を占めており、これらは古代・中世の密教図像とは異なり絵画制作のための粉本として収集され、粉本箆笥に分類された状態で保管されていた。能満院粉本の構造を理解し、絵画資料としての特質を考察することで、憲海研究の基礎資料を確認することが目的である。

「第2章 憲海と憲里」では、六角堂能満院工房を主宰した大願憲海とその弟子として憲海と行動を共にした大成憲里の生涯を検証する。憲海の生涯を生活の基盤とした場所を基準に五つの期間に分けて考察を行い、会津における憲海の出自の検証から始め、長谷寺交衆後会津亀福院住持を経て入洛し、能満院に工房を開いて「印施千種」の大願を立てた憲海の生涯を検証する。加えて憲海の事業に関わる重要人物である弟子憲里の事跡についても検証する。憲海が能満院工房を主宰するに至る思考の形成過程を考察するために、もうひとつの基礎作業として、彼らの事跡の確認を行うことが目的である。

「第3章 憲海の師と人脈」では、憲海在世期の思想潮流を背景に、憲海の師僧の中でも憲海に大きな影響を与えた三人の僧の事跡と彼らを中心とする人々の交流について考察する。慈雲飲光の提唱した正法律の流れに連なる慈光寺の鳳寛鏤慶と長栄寺の黙住信正、そしてはじめこれに連なり後に離れた高山寺の慧友僧護の思考及び事跡を検証し、憲海の思考の形成に正法律が与えた影響を考察するのが目的である。また、当時の復古的思潮を背景に憲海周辺に生まれた学芸上の交流についても論じる。具体的には憲海と異なる立場で正法律を護持した光雲海如や、高山寺に通った復古大和絵の絵師冷泉為恭の存在など、僧護のいる高山寺を場として興味深い交流が生まれていることを検証し、憲海の活動が当時の大きな学芸潮流の中にあつたことを確認する。

「第4章 憲海の発願」では、憲海が真言僧として納めるべき研鑽とは別に、独自の研究態度を示した主題について、その萌芽と展開を考察する。憲海がその著書『梵学秘要篇』に記した「発願し奉る誓の文」は、空海への敬慕から生まれ、図像経疏の後世への継承と正法に範を求める信仰生活への立願が示されるが、その思考が形成される過程は、長谷寺修学時代の諸山巡歴の中に検証することができる。その中で形成された悉曇及び声明への研究態度を考察する。空海は正法律一派においても尊重されるが、憲海の空海研究は、書画といった実物資料を介して行うことを重視しており、そこから展開した声明、悉曇研究

においては独自の見識を示すに至っている。憲海の修学研究過程の中にその思考の形成を検証するのが目的である。

「第5章 粉本と儀軌」では、能満院粉本と抄物や図像集との関わりを検討し、憲海の白描図像に対する認識について考察する。能満院粉本の分類には図像集との関係が見られ、中世以前の白描図像に基盤を置くことが理解されるが、顕教図像や肖像などが含まれる中で、これら図像に事相面での役割は期待されていない。その一方で図像の典拠や正当性に対しては高い関心が保たれ、図像の収集が校合図像の制作という目的のもとに行われていることを検証する。古代・中世の白描図像と近世の粉本である能満院粉本との差異を確認し、能満院工房の活動が憲海の思考をどのように反映しているのかを考察するのが目的である。

「第6章 恵心院本」では、憲海の思考と能満院粉本との関わりを理解する資料として、恵心院本について考察する。宇治の恵心院が旧蔵したとする39点の粉本は、中世の南都絵所のひとつであった芝座の絵師による粉本を入洛後の憲海が一人で書写したものである。これらは中世末期の芝座の絵師に関して新たな情報を提供する貴重な資料となっており、憲海の中世粉本に対する敬意は、粉本としての図像という近世的な立場が、憲海の意識の中で徹底していることをうかがわせる。入洛後の憲海が特別な態度を以て書写にあたった恵心院本の特質を検討することにより、憲海の粉本に対する思考を考察するのが目的である。

「第7章 長谷川本」では、会津を離れた憲海が入洛後精力的に書写した絵仏師長谷川家の粉本と憲海の事業との関係を考察する。この近世京都の長谷川家は桃山期の画家長谷川等伯の息子宗也の末裔で、江戸時代中期以降絵仏師の家となり明治初期に至るまで活動した。これまであまり検証されることのなかったその累代について概説する。憲海は豊山交衆期から長谷川家と知己であり、憲海の入洛後、長谷川家は援助の手をさしのべている。能満院での事業の準備を進める憲海にとって、大きな影響を与えたと思われる絵仏師長谷川家について考察し、憲海の事業における役割を検証するのが目的である。

「第8章 憲海と開版」では、憲海及びその弟子たちによる開版事業の実態について考察する。憲海が関わった開版事業の展開と能満院における「印施千種」の大願について、彼の思考や学問との関わりを検証することが目的である。憲海が能満院で「印施千種」の大願を立てるまでに経験した開版事業とその背景を考察し、「印施千種」による開版をはじめとする能満院工房での開版の実際を考察する。また憲海没後、憲海の弟子が御室版兩部

曼荼羅をはじめとする尊峰の開版事業に関与した事例についても検証し、憲海の開版事業の文化史上の意味を考察する。

以上のように、考察を進めた結果、はじめは《御室版両部曼荼羅》開版の立役者であった大成、宗ら画僧の師として認識されていた憲海が、彼の遺した多数の仏画粉本や書籍文書の検証と研究の進展にともない、彼の思考そのもののが、御室版開版を導く先駆であったことが改めて確認され、憲海の思考を研究することの価値が理解されるに至った。

本論は、正法律を堅持する律僧憲海が、独自の信仰の方法を選び、その思考の実践として能満院工房を主宰して行った近世末期における特異な仏教図像経疏の普及活動について論じ、彼の思考研究の先鞭とするものである。

【注】

- ¹ 『京都市の地名』（平凡社、1979年9月）、p. 784。
- ² 秋里籬島著、竹原春朝齋絵『都名所図会』巻一（『新修京都叢書』第6巻、臨川書店、1994年4月、p. 67）。
- ³ 明治13年開校の京都府画学校を淵源とする学校で、現在の京都市立銅駝美術工芸高等学校の前身。明治42年（1906）に上級学校として京都市立絵画専門学校が併設され、これが現在の京都市立芸術大学の前身となっている。
- ⁴ 吉沢義則旧蔵書として、京都大学附属図書館が所蔵する。
- ⁵ 大村西崖『三本両部曼荼羅集』（仏書刊行会、1913年5月）。
- ⁶ 林田光禪『智積院誌』（総本山智積院、1915年11月）「著作開版 頼如能化」p. 215。
- ⁷ 中村涼應、中村幸真『正系現図曼荼羅の研究』（日本放送出版協会、2010年10月）、p. 75において「大成入寂後、末弟子の宗立は瀧東村に赴き、大成が所持していた二千五百枚余りの仏画の粉本を貰い受けて京都に持ち帰っている。」としているが、こうした事実を裏付ける記録は確認されない。
- ⁸ 竹田黙雷「田村月樵翁」（『藝苑』帝国美術社、1919年7月）
- ⁹ 田中海應『海如和上傳』（徳藏寺、1924年12月）。
- ¹⁰ 小田慈舟「御室版両部曼荼羅の開版と其功労者」、小原洪秀「印行曼荼羅について」（『密宗学報』第178号、1928年6月）。
- ¹¹ 実際は京都市立美術工芸学校に寄付されたもので、小田の誤解がある。
- ¹² 土宜法竜著、宮崎忍海編『木母堂全集』（六大新報社、1924年6月）「土宜法龍和尚傳」p. 1に「安政五年午年即ち五歳の時、伯母貞月尼に伴はれて伊勢國宮崎家に轉じ、同年同國河藝郡白子町観音寺に入り、京都六角能満院大願に従ひ剃度し、法龍と稱し」としている。
- ¹³ 日本仏教人名辞典編纂委員会編。（法蔵館、1992年1月）。
- ¹⁴ 坂井栄信「雑林抄」（智山『宗報』第167-169号、1964年6-8月）。児玉義隆編『栄信和尚遺稿遺墨集』（豊中不動寺、1980年11月）、pp. 11-13。
- ¹⁵ 図書館の河本昭を中心に、後に《田村宗立旧蔵仏画粉本》の整理や研究に関わる宮本道夫、広瀬幸子（現中村幸真）らがあたった。
- ¹⁶ 昭和61・62・63年度科学研究費補助金研究成果報告書「密教図像と粉本の調査研究」（課題番号 61450007）。研究代表者は田村隆照。研究分担者は榊原吉郎、定金計次、廣田孝、

宮本道夫、安藤佳香、岩間香。

¹⁷ 京都市立芸術大学芸術資料館編『仏教図像聚成一六角堂能満院仏画粉本』（法蔵館、2004年3月）。

¹⁸ 渡邊春雅『湖南村郷土史 中野郷土史考』（私家版、1964年）。

¹⁹ 湖南史談会『湖南の史蹟と文化財』（1978年8月）。

²⁰ 阿住義彦『自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲理」の足跡』（自在院、2006年5月）。

²¹ 拙稿「六角堂能満院仏画粉本－画僧大願と幕末期の仏教図像」（『民族芸術』Vol. 11、民族芸術学会、1995年4月）同「田村宗立旧蔵仏画粉本における仏教版画について」（『京都市立芸術大学芸術資料館年報』第14号、2005年3月）。同「恵心院本仏画粉本と南都絵所芝座」（『京都市立芸術大学芸術資料館年報』第15号、2006年3月）。同「六角堂能満院大願憲海の会津における事跡について」（『京都市立芸術大学芸術資料館年報』第16号、2007年3月）。同「智積院の大願憲海旧蔵書について」（『京都市立芸術大学芸術資料館年報』第17号、2008年3月）。同「大願憲海と長谷川家の粉本」（『京都市立芸術大学芸術資料館年報』第23号、2014年3月）。

²² 中村涼應・中村幸真「大願律師と御室版高雄曼荼羅」「慈雲と大願」（『正系現図曼荼羅の研究』、NHK出版、2010年10月）。

²³ 小池満秀「仏教の「近代」－慈雲の系譜学」（『密教学研究』第36号、2004年3月）。

²⁴ 高橋尚夫・佐久間秀紘『越後乙宝寺蔵 無言蔵大願著 梵学秘要篇』（ノンブル社、2012年8月）。

²⁵ 新井弘順「弁明と江戸後期の豊山声明－『般若理趣經常用』の刊行と《三箇秘韻》相承一」（『豊山学報』第51号、真言宗豊山派総合研究院、2008年3月）、同「新義方進流声明末葉無言蔵大願－進流口訣の書写と『两部讚草帋』等の刊行」（『豊山学報』第54号、真言宗豊山派総合研究院、2011年3月）及び同「遺教会と仏遺教經譜本の刊行」（『豊山学報』第55号、真言宗豊山派総合研究院、2014年3月）。

第1章 六角堂能満院粉本

この章では、《田村宗立旧蔵仏画粉本》の来歴と絵画資料群としての基本的な性質について考察する。第1節では、《田村宗立旧蔵仏画粉本》の来歴と現況を確認し、粉本群を構成する作者を把握するとともに制作年代を考察する。第2節では、本資料を考察するにあたり、関係する資料分野である古代・中世の白描図像と絵画の下絵として機能する粉本の特質を概観し、本研究に必要な基本的認識を確認する。第3節では、粉本を保存していた粉本筆筒の分類から能満院工房における粉本群の構造を検討し、工房主宰者が粉本を分類する際に従った思考について考察する。第4節では、能満院粉本の絵画資料としての特質を明確にし、憲海の思考との関係を確認する。《田村宗立旧蔵仏画粉本》の主要な構成要素である能満院粉本が持つ特質を理解するために、物理的特徴をはじめとする考察の基盤を検証することが目的である。

第1節 《田村宗立旧蔵仏画粉本》の概要

京都市立芸術大学が所蔵する《田村宗立旧蔵仏画粉本》は、大正8年(1919)11月10日付で田村宗立の未亡人である田村ともから京都市立美術工芸学校に寄付されたものである。『明治四十三年以後沿革史 京都市立美術工芸学校』¹という記録の大正8年の項に「全日(筆者注:11月10日のこと) 旧職員田村宗立氏遺族ヨリ同氏所蔵仏画粉本ヲ寄贈セラル」とある。受け入れの記録としては『圖書臺帳 第貳冊 京都市立美術工芸学校』²に「一〇・二 仏画粉本 一部 一八九八冊 二〇〇〇円 田村月樵摸 九年五月 田村とも寄付」と記されている。

小田慈舟はこの資料について次のように述べている。「大願師珍藏の経本図巻等は焼失を免れた小部分が宗立師即ち後の田村月樵画伯によりて相承護持されたが、画伯の歿後未亡人によって画伯の遺品三二と共に京都絵画専門学校と大本山智積院とに寄贈せられたそうである。大願師が智山派の出身であったから智積院に納めたと聞く。多分喜福院が智山末なのであろう。」³

小田は、現存する能満院旧蔵品を「小部分」と称して、能満院が所蔵していた書籍図像が膨大なものであったことを想像させるような記述を見せ、それが当時の伝承となっていた状況を推測させる。これらは本来、京都市立美術工芸学校に寄付されたものであるが、

当時は校長も事務室も図書室も美術工芸学校とその上級学校である京都市立絵画専門学校と共通であったため、絵画専門学校のものに見なされている。

粉本の旧蔵者である田村宗立は、弘化3年(1846)に丹波園部に生まれた。安政2年(1855)京都で大雅堂清亮に南画を学び、六角堂能満院の大願に剃度をうけ、仏画を学んだ。明治3年(1870)開版の《御室版両部曼荼羅》制作に参加。同年京都府中学校に入学し英語を学ぶ。京都栗田口病院に雇われた際、医師ランゲックに油彩画を学び、明治10年(1877)ころ東京の松田禄山に銅版や石版を学んだ。明治8年(1875)第4回京都博覧会に水彩を、明治10年第1回内国勸業博覧会に油彩画を出品。明治13年(1880)京都府画学校出仕拝命、翌年西宗副教員となり、明治22(1889)年退任。まもなく私塾明治画学館を開設した。明治34年(1901)の関西美術会の結成に参加。別に月樵の号で道釈画を描き、大正7年(1918)に没した⁴。

略歴の通り、宗立は京都市立美術工芸学校の前身である京都府画学校の教員を務めていた。宗立は京都における洋画の草分けとして知られ、京都府画学校では西宗すなわち西洋画専攻の教員を務めていたが、彼の画業の出発点は南画であり、初めて本格的に学んだ絵画が仏画であった。六角堂能満院の大願憲海の資として、憲海及び兄弟子の憲里に画を学んだ。伝えられるところでは、高齢の憲海よりむしろ憲里に学ぶことが多かったという⁵。

六角堂能満院は、元治元年(1864)の禁門の変に起因する大火によって焼失したため、憲海をはじめとする工房の僧らは、神泉苑の南に位置する真言宗蓮光院に避難した。その時彼らが被災の中から救出したのが現在遺される書籍及び粉本である。憲海はその後この蓮光院で遷化し、工房の絵師たちも当座はこの蓮光院に寄寓して、能満院工房の事業を継続していたと考えられる。憲海の弟子憲里と宗立と雲道は、憲海の歿後、尊峰が発願した《御室版両部曼荼羅》の開版に貢献しており、彼らの名が現代まで語り継がれる主な理由となったのが、この事業の存在である。工房の画僧で最後まで京都に留まっていた宗立が、これら工房の財産を管理するところとなり、最終的な所有者となったと考えられる。図像類が書籍とともに智積院に寄付されなかったのは、宗立の経歴から美術の世界への関与が強かったため、遺族が絵画の専門教育を行う学校を仏画粉本の寄付先に選んだと考えるのが合理的である。

粉本は小さな紙片程度の資料も含めて2673点にのぼる。大半は楮紙もしくは楮を主原料とする薄手の和紙を、まくりのまま折り畳むか卷子状に巻いたものである。冊子状に綴じたものもあるが数は極めて少ない。一部に油紙の使用が見られ、これらは紙の劣化が他の

紙本に比べて進行している例が多い。

楮紙は、粉本に使用される紙としては最も一般的である。楮紙は繊維が長く、薄くても十分な強靱さを持つため、粉本に適した性質がある。模写には、画を傍らに見ながらその姿を写す臨模のほか、画の上に紙を置き透いて見える画を写す謄写があり、薄くても強度のある楮紙は謄写に向く。臨模の場合当りの線は取るとしても、相似的な正確さという意味では意に満たないことが多い。正確な図像の継承を意図する密教図像の場合は、謄写を求めることが一般的であった。また、こうした需要から、画用としては使いにくさがあるものの、薄く滑らかな表面を持つ斐紙を使用するほか、油紙を使用して紙の透明度を高めて謄写を行うこともあった。

油紙は桐油や荏胡麻油など速乾性の油を和紙に引いたもので、経年変化したものは黄褐色を呈する。謄写用の紙としてはよく透き通り重宝であったが、油の質によっては酸化が進行し紙自体の耐久性を損ないやすいことから、絵画では白描図像以外にあまり見られない。遺例としては仁和寺が所蔵する図像群に使用されている例が知られている。

一般的な粉本の特徴として模写本と新図があり、模写本の場合は、そのまま保存するものと、胡粉で塗りつぶすほか、貼紙によって修正を加えるなどして新図に改められる場合がある。新図は依頼された本画制作の下絵や版画の版下として制作されることが多く、いわゆる粉本の中心機能である画稿として使用される。

こうした制作用具として粉本を使用する場合、法量の拡大縮小が行われることがあった。粉本から制作する場合、通常は原寸を意識して行われるが、注文主の希望に従って、法量を変更せざるを得ない場合、あらたに図を起こさなければならない。能満院では、ゴノメ（碁ノ目）により、これを行った。対象となる粉本に朱線で一定の感覚の格子を描き、それを元に依頼された大きさの紙に格子を描いて拡大あるいは縮小するという単純なものである。写すときに間違えないように、各格子の升目には、イロハにより記号をつける配慮がある。粉本の中にはこうした、制作工程を留める状態のものが少なからず認められる。

粉本の中には木版墨摺 277 点が含まれており、全体の一割が版本にあたる。残る九割が白描粉本となっており、遺された墨書、印影を見れば、その過半数で作者を鑑定することができる。版本については、画の作者と開版者の関係に多様な事例が生じ、原画の制作と開板の間に時間的な隔たりが生じる他、開版者の移転がある。そのため、刊記などが正確に記されていない限り、その制作状況を明確に把握することは困難であり、しかもそうした事例はかなり少ない。そこで版本についての検討は別章で行うこととし、版本を割愛し

た白描粉本 2396 点を対象に粉本の作者を概観したい。

鑑定された人名は、個人を特定できないものも含めて、39 名にのぼる。その過半数は 1 名につき 1 点のみ遺された粉本で、大半は外部から入手した粉本と考えられる。粉本には、多数の墨書と印影が遺されている。墨書の内容は個々に特徴のあるものが見られるが、基本となるのは、書写年月日、書写場所、書写者であり、必要に応じて「本云」として原画の墨書、裏書などを書写している。全体の約三割に何らかの印章が捺されている。

墨書と印影に従って、白描粉本の作者を概観すると、作者の中で作例が最も多いのは、宗立の師であり能満院工房を主宰した憲海である。憲海の手が入る粉本は 813 点になる。これは白描粉本の 1/3 にあたる。憲海による粉本は文政 3 年（1820）のものが最も古く、遷化する元治元年（1864）まで遺されている。概ね毎年粉本を制作しているが、天保 5 年（1834）から同 15 年（1844）にかけては、長期間にわたり年に 1 点あるかなしかという状態で推移している。

墨書としては、法諱の「憲海」、字の「林岳」、法号にあたる「無言」、「無言蔵」、「大願」の記入が見られる。捺された印影にはいくつか種類がある。主要なものを「図 1-1 能満院粉本主要印影一覧」にまとめた。まず、憲海の蔵書印が三種類ある。「憲海／書籍」（3 印）と記すものは、文政 3 年（1820）から文政 5 年（1822）にかけて書写された粉本に捺されており、憲海の所蔵印としては最も古いものと考えられる。「釈林岳／書籍記」（4 印）は文政 5 年書写の《十種神宝図》[1203]（〔〕内は「別表 1《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録」通番。以下同じ。）とその封紙にのみ見られる印である。「無言蔵／図書記」（5 印）は文政 5 年の使用例が最も古く、文政 11 年（1828）頃まで使用されており、177 点の使用例がある。使用期間から判断すれば、憲海、林岳、無言蔵という順に所蔵印を製作し、使用したものと思われる。印文は形式としても蔵書印の体裁を採り、これらの蔵書印は概ね文政年間に使用されていたことになる。

次いで憲海の法号印が二種見られる。「無言蔵」（7 印）は文政 4 年（1821）から文政 10 年（1827）までの使用が確認されるが、使用例は 40 点と比較的少ない。「無言蔵」（6 印）は 103 点の使用例が見られる。古い粉本に捺したと思われる例が少し見られるが、文政 10 年頃から使用されはじめ、「無言蔵」印に交代して使用されたことが推測され、嘉永 4 年（1851）まで使用している。ただ、途中天保 2 年（1831）から嘉永 3 年（1850）までかなり長い不使用期間がみられる。

憲海粉本の場合、墨書によって作者を示しているものが六割に達するが、墨書に加えて

憲海印を伴う例は憲海粉本全体の四割にあたり、憲海は比較的丁寧な款記を入れる傾向がある。印を捺すのみのもの 55 点についても、単に所蔵者を示すだけでなく、その制作者を示すとみて問題ない。憲海における粉本の扱いは概して几帳面な態度を見せ、年紀の記されたものが 3/4 を占めるとおり、記録に対する意識が安定して見られる。

次いで弟子の大成憲里の手が入る粉本が 159 点みられる。憲里は自身の所蔵印を使用していないため、おのずから墨書によってその筆者を知ることになる。法諱である「憲里」、「憲理」、法号の「星高」、「大成」が書き込まれている。粉本中で最古のものは天保 11 年（1840）に制作されており、明治 21 年（1888）のものまで含まれている。これは憲里が憲海入寂後も、かなり長い間これら粉本と接触する機会を持っていたことを表す。憲里粉本の二割程度に、後述する能満院の工房印が捺される。

次いで現光の手になる粉本が 147 点ある。現光は、憲海の弟子であったと考えられるが、不明な点が多い。弘化 2 年（1845）から嘉永 6 年（1853）までの年紀を持つ粉本が現光粉本の 2/3 を占める。活動期間が短いにもかかわらず集中して書写にあたったことがわかるが、印はなく、墨書により名を記すのみである。能満院の工房印を捺すものが 3/4 に達する。

そして工房の粉本を最後まで保管していた宗立の粉本が 105 点でこれに続く。宗立の手になる粉本として最も古い年紀は安政 5 年（1858）であり、明治 38 年（1905）のものまで含まれている。宗立は若かったが、最後まで粉本の傍らにいたことから、粉本と接触した期間は相応に長い。墨書は法諱「宗立」のほか字の「十方明」が記され、後に使用される雅号の「月樵」を用いるものもある。印は朱文円印「宗立」をはじめとして、朱文壺印「宗立」朱文方印「沙門／宗立」「十方明／宗立」など多様な種類が見られるが、宗立の印影が見られるのはわずか 14 点で、大部分が墨書によって名を記している。宗立粉本の中に「大願」「正法伝」という印が捺されたものがあるが、これは師憲海が賛に捺した印である。

能満院工房の絵師としては、皆了のものが 19 点見られる。皆了は法諱を憲能という。印はなく、墨書で「皆了」の字のみが記される。嘉永 6 年（1853）から文久 3 年（1863）までの年紀が見られ、作例のほぼ全てに年紀が記される。

数は 8 点と少なくなるが、憲海の弟子雲道のものもある。雲道の法諱は憲伝といったが、款記は全て雲道である。「雲道」印はわずかに 1 点のみあり、文久 2-3 年（1862-3）の粉本が遺る。また憲応という僧の粉本が 3 点あるが元治元年（1864）のもののみであり、現在確認できる工房の画僧の中で最も遅れて入ったのはこの憲応と思われる。

圖 1-1 能滿院粉本主要印影一覽

		
<p>1 (朱文重郭方印) 王城中真六角堂 頂法寺内能滿院</p>	<p>2 (朱文方印) 王城中真六角堂 頂法寺内能滿院</p>	
		
<p>3 (白文方印) 憲海／書籍</p>	<p>4 (朱文方印) 釋林岳／書籍記</p>	<p>5 (白文方印) 無言藏／圖書記</p>
		
<p>6 (朱文円印) 無言藏</p>	<p>7 (朱文円印) 无言藏</p>	<p>8 (朱文円印) 宗立</p>

粉本の制作に関わったことが確認できる憲海の弟子は、上記のとおり、憲里、現光、宗立、雲道、皆了、憲応である。憲海を含めて彼ら能満院工房関係者の手になることが確認できる粉本は1227点あり、白描粉本のほぼ半数を占めている。1点のみ存在する憲暢は字を淳如といい、憲海が会津に帰る直前に弟子とするが、その後の関わりは不明である。

そして、「王城中眞六角堂／頂法寺内能満院」(1印)と記す朱文重郭長方印はこの工房の印として捺されたもので、印影を持つ粉本773点のうち六割にあたる445点がこの印を捺したものである。天明9年(1789)の年紀を持つ粉本《某僧像(合掌)》[2105]がこの印を捺す最も古いもので、憲海が入手した古粉本に捺印していることがわかる。ただ嘉永6年(1853)以後の年紀を持つ粉本にこの印を捺す例は極めて稀であり、嘉永5年(1852)までに使用が終了した可能性がある。能満院に入ったのが嘉永4年(1851)頃と考えられるため、能満院に工房を開いた際、所持していた粉本を整理するために使用したものと思われる。しかし、年紀のある粉本を見れば、その当時所持していた全ての粉本に捺印しているわけではない。また、手本として蓄蔵すべき粉本にのみ捺印したと考えるには、貴重な粉本ながら無印のものもあるので、何らかの方針があつて捺印しているようには見えない。例えば文政12年(1829)に憲海が写した《孔雀明王像》[204]や天保4年(1833)にやはり憲海が写した《理趣経曼荼羅図》[1791]は、重要な粉本であつたと考えられるが無印である。また工房印には「王城中眞六角堂／頂法寺内能満院」(2印)と同じ印文を記す小型の朱文方印もある。嘉永6年(1853)の使用例が最も古いため、1印よりやや遅れて使用が開始されたと思われるが、使用例は11点に止まりあまり使われていない。能満院工房印と見なされるのはこの2点である。

嘉永6年(1853)以後は新たに製作した粉本に工房印を捺すことは極めて例外的であり、宗立や雲道が試みに印を捺す例が見られるのみである。従つて印章の使用状況を概説すれば、次のようになる。文政年間頃憲海の蔵書印を使用していたが、やがて文政末頃法号印を使用するようになり、能満院に入る頃まで使用する。能満院工房が開かれた頃、古い粉本をはじめとする所有する図像の整理のために、工房印が使用されるようになり、以後憲海自身の印を使用する例はない。能満院工房が実際に機能し始めると、工房印を粉本に捺すことそのものが減少している。

能満院工房外の作者が示されているものについて、人物が特定できるものは少ない。比較的点数が多いものとして、遠藤弁蔵、遠藤満智の二人の名を含む遠藤家の粉本54点が目を引く程度である。また、山口春水、山口城照、山口明雅、山口蘭舟の4名については、

表1-1 能満院粉本の作者と制作年

		憲海	大成	現光	憲海・大成・現光	憲海・現光	憲海・宗立	大成・現光	皆了	雲道	宗立	憲応	憲暢	作者不詳	その他の作者	小計	
1668	寛文8年														1	1	
1701	元禄14年														1	1	
1715	正徳5年													1	1	1	
1747	延享4年													1	1	1	
1765	明和2年														1	1	
1770	明和7年													1	1	1	
1774	安永3年													1	1	1	
1779	安永8年													1	1	1	
1785	天明5年														1	1	
1789	天明9年														1	1	
1791	寛政3年														2	2	
1792	寛政4年														4	4	
1793	寛政5年													1	1	1	
1794	寛政6年														1	1	
1798	寛政10年													3	1	4	
1800	寛政12年														3	3	
1801	享和元年														1	1	
1802	享和2年														5	5	
1803	享和3年														2	2	
1804	文化元年														2	2	
1805	文化2年														1	1	
1806	文化3年													1	1	1	
1809	文化6年														2	2	
1813	文化10年														1	1	
1814	文化11年														1	1	
1816	文化13年														1	1	
1817	文化14年														1	1	
1818	文政元年														1	1	
1820	文政3年	3														3	
1821	文政4年	3													3	6	
1822	文政5年	13												2	1	16	
1823	文政6年	2												1	2	5	
1824	文政7年														1	1	
1825	文政8年	4													3	7	
1826	文政9年	19													1	20	
1827	文政10年	32												3	2	37	
1828	文政11年	8														8	
1829	文政12年	26												2		28	
1830	文政13年	2												1		3	
1831	天保2年	7												2		9	
1832	天保3年	5											1	1		7	
1833	天保4年	4												1		5	
1838	天保9年	1														1	
1840	天保11年	1	1												1	3	
1842	天保13年	1														1	
1843	天保14年	1	1												1	3	
1844	天保15年	1													2	3	
1845	弘化2年	14	1	2											1	18	
1847	弘化4年	23	23	50											3	100	
1848	弘化5年	11	1	7											4	23	
1849	嘉永元年	17	5	9	12	2		1							5	51	
1849	嘉永2年	37	30	10											5	82	
1850	嘉永3年	56	10	2			1								5	74	
1851	嘉永4年	9	21	1											3	34	
1852	嘉永5年	25	9	4											7	45	
1853	嘉永6年	18	8	4												58	
1854	嘉永7年	10	6												1	29	
1854	安政元年	2													12	29	
1855	安政2年	12	1												9	26	
1856	安政3年	10													5	15	
1857	安政4年	9	1												5	16	
1858	安政5年	9	7							2					4	23	
1859	安政6年	6	3							2					7	21	
1860	安政7年		1							4					1	6	
1860	万延元年	3								7					7	20	
1861	万延2年									1					3	4	
1861	文久元年	1								14					5	21	
1862	文久2年	2	2							6					7	22	
1863	文久3年	52	2							3	19				9	86	
1864	文久4年									1					1	1	
1864	元治元年		1							9		3			6	19	
1865	元治2年									2					1	3	
1866	慶応元年									6					2	8	
1866	慶応2年									6					1	7	
1867	慶応3年														1	1	
1868	慶応4年														1	1	
19世紀	江戸時代	339	8	43					1	1	12				897	38	1339
能満院粉本小計		798	142	132	12	2	1	1	19	8	91	3	1	1064	92	2366	
1869	明治2年										3				1	4	
1870	明治3年										3				4	7	
1881	明治14年															1	1
1883	明治16年										1						1
1884	明治17年		1														1
1886	明治19年		3														3
1888	明治21年										1						1
1898	明治31年										1						1
1904	明治37年														1		1
1905	明治38年										1				1		2
19世紀	明治時代										3				4	1	8
大成宗立粉本小計			4								13				11	2	30
白描粉本合計		798	146	132	12	2	1	1	19	8	104	3	1	1075	94	2396	

年齢の間隔を見ると世代の異なる一族と考えることができるため、確証を得られないものの山口家の粉本として一群をなすと考えておく。この遠藤家、山口家とも絵仏師の家と考えられるが、憲海が仏画粉本を収集する以前のもが含まれており、憲海が入手した粉本であることが明白である。遠藤家の粉本にも山口家の粉本にも工房印の捺されたものが含まれ、能満院工房開設以前に入手したものと思われる。萩原盤山（1772-1846）、嶋貫盤月は会津の絵師であり、憲海が会津亀福院の住職であった時代の知己である。山本探淵は京都の絵師で、原在中の仏画の師として知られている。鈴木百年（1828-1891）も京都の絵師で、幕末から明治初期にかけて大きな勢力を見せた鈴木派の祖である。探淵も百年も『平安人物志』に画家として名を連ねる京都の名士であるが、探淵のものは後に入手したものと思われる。百年の粉本は憲海が依頼して描いてもらった普賢延命像用の《象図》[464]である。北川林笙も逸伝の絵師と思われるが、能満院工房印があるため、能満院開業以前に入手したものと思われる。

これらの白描粉本全体を見ると、何らかのかたちで製作年が推定されるものは全体の六割近くとみなされ、比較的良好な時系列を辿ることができる粉本群である。能満院焼失後に作られたと考えられる粉本は少なくとも59点あり、概ね憲里あるいは宗立に関わる粉本と考えられる。年齢は元治元年（1864）から明治38年（1905）年までのかなり長い期間にわたっている。明治改元頃までは、蓮光院に移ってはいたものの能満院工房事業の延長上にあり、憲海在世時の活動を部分的に継続していたと考えられる。明治維新以後は、尊峰による開版事業との関係が深くなるため、能満院時代と事業主体に変化が表れており、この時期の活動を、一様なものととらえることは難しい。両者を区別するほうが能満院工房そのものの理解を容易にすると考える。《田村宗立旧蔵仏画粉本》の白描粉本のうち、幕末期以前の白描粉本群を特に意図するときは「能満院粉本」と記して区別し、30点とわずかな点数ではあるが、維新後の一群を区別するときは作者の通称により「大成宗立粉本」とする。こうした制作者と制作年の関係は「表 1-1 能満院粉本の作者と制作年」にまとめている。

第2節 白描図像と粉本

図像という語は、図と像という類似する語を合成したもの、あるいは“像を画く”の意である。図はその正字の圖という字形からわかるように、耕地の様子を四角い平面に写し

取ったもの、すなわち地図を意味するとされる。従って単なる絵ではなく、描かれた形状に具体的な情報もしくは実用性が備わる絵と考えなければならない。また、像は”かたち”の似ることを表し、様の字とも通用するという⁶。総合して考えれば何らかの意味のある図を描きかたどる意で、その描いたものそのものも指したのである。『大漢和辞典』によれば図像は図象と同義とする⁷。像が象と同義であるから理解しやすいが、図象とする用例は白描仏画では見られない。

9世紀に入唐した円珍が請来した多くの経疏の中に《胎蔵図像》がある。仏菩薩の姿を白描で描いた画像に対し図像の名を付していることは、図像の語が唐ですでに使用されていたことをうかがわせる。円珍の請来本には同じく胎蔵曼荼羅の図像である《胎蔵旧図様》も含まれているが、こちらの名称では図様と呼ぶ。どちらも空海による現図曼荼羅に先行する胎蔵曼荼羅の図像を描くものだが⁸、遺例から判断する限りこの二つの語が同じ性質のものを指しているのは間違いなく、様が像と通用であったといわれることを確認することができる。ただ、空海から宗叡に至る入唐諸僧が将来した絵画類の目録をみると、今日でも一般的に使用される図、像という名称にさらに様の字をつけているものがあり、必ずしも像と様が同義として使用されたものではなかったことがわかる。例えば最澄が将来した「金輪仏頂像様」や「七俱胝仏母像様」⁹のように、その尊像の絵像である内容を表すための像の語と、白描図像としての形式を表すための様という語を併用するのを見ればその使用を区別していると考えられる。また恵雲が将来した「五仏頂曼荼羅禎子苗」¹⁰のように、請来品の中には、また別の形式で白描画であることを表記する場合もある。このように9世紀に請来され今日では共通して白描図像と呼ばれるものに対して、当初はその表記が揺らいでいることがわかる。

空海が『御請来目録』において「密藏は深玄にして翰墨に載せ難く、更に圖畫を假りて悟らざるに開示す。(中略)経疏秘略はこれを図像に載す」あるいは師恵果の告げるところとして「真言秘藏の経疏は、隱密にして図画をからずば相伝する能わず」と語った¹¹ように、密教の教義を正確に伝えるためには、経疏とともに画図の役割が重要と考えられた。

直接の遺物として確認できないものの、法隆寺金堂の壁画が紙型を利用して描かれたことが想定されていることから¹²、仏画を描くために必要な草稿や手本画の存在を否定することはできない。従って、実際には純密が請来される以前から、舶載あるいは模写により仏教の図像は存在していたと考えられる。これらに対する明確な呼称は前述の通り不明瞭で、その起源を明らかにすることはできないが、後に絵本や紙形と呼ばれるものと同様の

機能を持つものであることは推測の範囲である。

例えば東大寺の《俱舎曼荼羅図》が、《法華堂根本曼荼羅》《六宗厨子扉絵》《戒壇院厨子扉絵》の図像を再構成して制作しているように¹³、古画の模本あるいは共通の手本画により図像を流用して構成する絵画の存在は、古代の仏画制作における絵本の存在理由をうかがわせるものである。従って、仏教絵画における絵本の存在は版画における版のごとき自明のものと考えられていたと理解されるが、それだけに絵本に対して絵画制作過程上の実用品としての理解を超えることはなかったと考えられる。国分寺などの造営による仏画の需要の高さや、比較的保護される立場にあった絵仏所がありながら、絵本が承継される例が少ないのは、このような絵本に対する認識の存在を想定する必要がある。

空海が純密を伝えたことによって、この国で改めて認識された、師資相承の正当を担保するため秘密裏に伝授する画像の存在は、従来の絵本観に大きな変化をもたらしたと考える。図像によらなければ、正確な付法がかなわないというのは、言い換えれば正確な情報の伝達を求めているのであって、絵画の実用的な性質に加えて、継承性の必然を求めるものであった。いわゆる白描図像がひとつの分野として成立したのは、従来から存在する絵本の文化の中に、そこに含まれる情報性の認識と、その継承を必然とする価値観を持ち込んだことによる絵本の再発見を促した結果であろう。これに図像という呼称を与えることは、その語義から理解しても、絵本という言葉では伝えられない情報の規範性という内容を表現しており、適切な言葉の選択であったと考えられる。

図像の語が今日いうところの白描仏画を示す概念へと定着する過程は明かとはいえず、12世紀に永巖・恵什が編纂した図画を伴う図像集である『図像抄』¹⁴の登場までは、厳密な峻別を想定するよりも基本的に画像を表す普通名詞として認識されていたと考えるのが自然である。しかし、その語感には本質的な説得力がある。

現在理解されている日本の白描図像史を概述すれば¹⁵、9世紀の入唐八家にはじまる唐本、宋本図像の請来により、比叡山や三井寺などに図像が蓄蔵されたが、その多くは他見を許されず秘蔵され、師資の間に授受されるに過ぎなかった。初期の図像研究が必ずしも図画をとまなうものでなかったことは、真寂の『諸説不同記』¹⁶など10世紀の両部曼荼羅研究の展開や、小野流における仁海の『敦造紙』、広沢流における寛助の『別行抄』¹⁷のような別尊法の研究例からうかがうことができる。やがて、両部曼荼羅から別尊曼荼羅へと事相研究の中心が移りゆく中、事相法流の細分化が進み、相互の比較検証が必要になると、図像は相互に書写されるようになる。それは唐本の再認識と図像の開放につながった。法流

の正当を示すため本来秘蔵されるべき図像ではあったが、宗団から離れて貴顕の宝蔵に蓄蔵されるものも増加し、そのため、研究対象として書写されることも増加した。こうした活動として鳥羽僧正覚猷の図像研究はよく知られている。図像を取り巻くこのような環境の変化は、『図像抄』をはじめとする図像集の編纂を促し、12世紀から13世紀にかけて『別尊雜記』¹⁸『覚禅鈔』¹⁹『阿娑婆抄』²⁰など浩瀚な図像集が編纂され、図像の網羅性が高まった。そのため、白描図像が本来持っていた正当性を担保するための秘密性は失われ、事相研究の停滞へと結びつくのである。

白描図像の歴史において『図像抄』は、事相と絵画の関係に大きな影響を与えたと考えられる。本来秘密裏に伝授されるべき図像の公開は、事相家にとって意に染まないものであったが、現実に秘匿の対象ではなくなっていた図像を公開し研究資料として提示することの利便には多くの支持があり、優先されたのである。一線を越える行為を伴う図像研究が展開した背景には、宗団の中でも複雑に分化した別尊法に対して検証の必要が生まれていたことと、新興の宗団と競合する中で、密教の教学に対する再確認の必要が求められたことがあり、不可避の流れがあったと思われる。

『図像抄』は、その編集方針が典型的な図像を聚成するものであったこともあり、図像集にひとつの基準を作り、その後続く図像集はその形式に従うことになる。図像という語の使用もこの書物の影響下に定着したと考えられている。こうした図像集の体裁として、七集と呼ばれる、梵号、密号、種子、三昧耶形、印相、真言、図像といった基本的な事項を整理し、必要に応じて作法を加えるなどして事相研究の成果を著している。中でも印相、持物、形姿、色彩といった尊容の表現に関わる内容は重要な要素とされ、画図の力を借りることによってかなり具体的に伝えることが可能となった。

12世紀から13世紀にかけては、浩瀚な図像集が編纂されるとともに、宋からもたらされた新来の図像や意楽によって国内において新たに生み出された図像が転写され、図像に単なる事相研究上の必然に関わらない芸術性への視点をも加えはじめている。

白描図像の機能については、浜田隆が伝承性・収集性・粉本性に集約したことがある²¹。錦織亮介が図像を描法から大別した「第一は、密教僧が教学上の必要から描いた心おぼえ、メモといった素朴な図像、第二は、整理保存あるいは伝承の意をもって、きれいに浄写した図像、第三は、本尊画に近い大きな紙面に、感情を抑えたゆるやかな線での確に形をとらえた図像」という分類も、浜田の分類に対応するものであり、白描図像にこうした性質があることは、一般に理解されるどころである。田村隆照が、佐和隆研や小野玄妙の白描

図像観を対比させ白描図像の粉本的性質について評価する立場を取るのも、先の分類において前二者が白描図像の本来の機能と見られることに対する批判として行われている²²。もともと師資相承の証しであった図像が、事相研究の中で公開されていく過程を見れば、伝承性と収集性は図像にとって一義的なものといえるが、像あるいは様という語が「似ること、形を写すこと」の意であることを考慮すれば、図像の語に正しい複製を作るための機能が本質的に含まれていると考えるべきであろう。図像は基本的に呪符ではないから秘匿されることに意味はなく、写されることに本義がある。

ここで、白描図像に類縁する術語である粉本について触れておきたい。粉本は、もともと中国で用いられた術語である。朱景玄の『唐朝名画録』の呉道玄の項に「臣无_レ粉本_一。并記_レ在_レ心_レ。」²³とあって唐代には用いられていたと思われるが、その語義については明確に示されていない。元の湯垕『画論』に「古人畫藁謂_レ之粉本_一。前輩多寶蓄_レ之。其草々不_レ經_レ意處。有_レ自然之妙_一。宣和紹興、所藏粉本、多有_レ神妙_一。」²⁴と記すのを見れば14世紀には術語として成立していた言葉である。古人の描いた素描あるいは草稿を指すと考えられるが、語源については未だ明らかではない。明・屠隆の『畫箋』においても「古人畫藁謂_レ之粉本_一。草草不_レ經_レ意處。迺其天機偶發。生意勃然。落筆趣成。自有_レ神妙_一。有則宜寶_レ藏之_一。」²⁵として元代の説からほとんど展開していない。清代になって学者が立説するものとして方薰が『山静居画論』に「畫稿謂粉本者。古人於墨稿上。加描粉筆。用時撲入縑素。依粉痕落墨故名之也。今畫手多不知此義。惟女紅刺繡上様。尚用此法。不知是古畫法也。」²⁶と記すように、絵画制作の際、粉本すなわち下絵の描線を粉末顔料によってなぞり、これを絹布に打ち付けて付着した粉の痕跡を利用して描くためという説をあげている。すでに時代は18世紀を迎えているが、粉本の語が単なる古人の草稿をさすのみならず、作画のための下絵として使用する意味を含むと考えていることがわかる。このような粉本概念の拡大は本来のものであったか、付加されたものかは知ることができない。しかし、粉本が絵画制作に利用するための絵画であることに対する基本的な共通理解があるから成立する説であろう。

また、張彦遠の『歴代名画記』によれば謄写による模本を搨本と呼んだ²⁷。唐代には関連性のある言葉として粉本と搨本があった訳だが、日本にこれらの語が伝来した時期は不明である。恐らく渡来した中国人や中国に渡った僧侶学生らによって、その語が語られることはあったと思われる。しかし、室町時代に至るまで粉本の語が使用された例は見られない。多くの仏教図像についてもこれを粉本と呼ぶ例は見られず、結局この語が日本に定

着するようになるのは、中世末期に舶載されるようになる中国の画譜画論書の影響を待つほかないのである。わが国で絵画制作に用いる下絵草稿類に対し、古代中世の記録類では絵本あるいは紙形と呼んでいる。

元の夏文彦が表した『図絵宝鑑』²⁸は、室町時代に舶載され、画論、画伝をまとめる便利さから大きな影響を与えた²⁹。この書物には「粉本」の項が立てられ、先の湯屋の説を収録して、日本に粉本の語が定着する契機をもたらした。ただこの説は古人の画稿というところに重点が置かれているため、当然のことながら、後に方薰が述べるような絵画制作のための資料と見る視点は表れていない。

狩野一溪（1599－1662）が元和9年（1623）に著した『後素集』³⁰に、『図絵宝鑑』の粉本の項がそのまま収録されるのは、日本人が粉本の語を紹介する早い例であろう。しかし、日本人の画論としては早いものである延宝8年（1680）頃著された狩野安信（1614－1685）の『画道要訣』³¹ではまだ粉本の語は定着していない。承応元年（1652）の『図絵宝鑑』和刻本³²の刊行や、享保6年（1721）に画家の門流の中で伝えられていた画論を一般に公開した林守篤『画筌』³³の出版などを嚆矢とする和漢の画譜画論書の普及に伴って、粉本という語が広く定着をはじめたものと考えられる。

『画筌』においては、念紙の作法の中で「描べき紙の上に炭粉の貼たる方を下になし、蓋置て又其上に粉本を重て竹篋にて推寫し、其下に寫りたるを證として描也、是を念推と云。」³⁴と記しており、粉本の語源に対する説明とも思われる方薰の説に類似する用法を記している。粉本の語が定着する過程で、新しい情報を吸収しながら、単なる参考図にとどまらない粉本の利用へと概念が拡大している様子が見える。

もともと中国の術語の使用は権威化に有効であるから、室町時代から成立する狩野派や土佐派のような絵画門流において吸収されやすい傾向はあった。例えば土佐光起（1617－1691）著と伝えられる『本朝画法大伝』には「六曰傳謄摸寫〔師匠たる人より畫本を借りて膠地紙に傳寫し、是を貯置第一の寶とす、是を粉本といふ。臨にするはあしく、臨にすれば筆勢不調、唯其形を似せたるばかりにて用にたゞず、寫に心付有べし。畫本に不似して宜あり、不似して惡あり、似て宜あり、似て不宜あり、其畫を學ぶには粉本を寫を第一とす。粉本を持ざれば習事あたはず、目利もならず、粉本を寫間にしぜんとそれぞれの筆格彩色も覺るなり〕」³⁵として参考とすべき絵画の模本を絵本として利用することが書かれており、『図絵宝鑑』に示された「古人画藁」の思考の吸収が見られる。

粉本の語が定着するにしたがい、従来から絵画制作の素材を表すために使用された絵本

や紙形の語の使用は減少する。これは粉本が従来の絵本や紙形の意味をも包括するに至ったことを意味し、粉本と絵本の語義は次第に通行になる。先の中国画論において古人画藁が画作の下絵として機能する経緯に等しく、実作者の立場からすれば粉本と絵本の合流は自然の展開であった。近世の画譜画論書を見る限り、粉本の語を使用する例が優位となっている。

先人の草稿という意味の粉本という語に、絵本のような絵画制作の素材としての機能が付加された時、白描図像と粉本概念は、近似するものとなる。「古人の画稿」は、白描図像における伝承性を担保するものと読み替えられ、それは基本的に収集されることに意味があるとするのも同様である。伝承性・収集性を以って白描図像の一義とするのは、本質的な理解として合理的であり、粉本性として捉えられる白描図像の性質というものが、実際には、絵画制作上の機能として絵本と通行であることも理解されよう。白描図像の伝承性を担保するものが事相の存在であることを考えれば、図像と絵本とが錯綜する中で両者を分かつものは事相面の評価であったと考えられる。

白描図像の研究が隆盛を見た 12-3 世紀では、粉本の語は日本で未だ認識されていないため、白描図像の粉本性という表現には矛盾があるが、これを絵本や紙形が果たす絵画の制作上の役割に「古人画稿」の思考を加えたものとして理解するならば、両者は同じ機能をもつ存在といえる。密教図像が請来する以前も、「古人の画稿」は舶載された。それらは主に絵本として仏画制作に使用されたと考えられる。後に粉本という術語に包括される絵本は、模写することによって再生産できるから、優れた絵画性を持つ図像が、絵本として繰り返し用いられることは当然のことであった。ここでは、粉本の機能が絵画の制作面の問題として意識されたはずである。白描図像を粉本として認識するのは絵画制作者の視点なのである。

第3節 粉本箆筒

《田村宗立旧蔵仏画粉本》が寄付された際の状態は、工房で使用された当時のまくりの状態に折り畳まれたまま、二つの粉本箆筒に収められており、幸い粉本と共にこの箆筒も現存している。

二つの粉本箆筒（図 1-2）は白木製で、左右側面に移動用の鉄製取手を付ける。箆筒甲は 95.0×41.0×53.5（奥）cm、箆筒乙は 93.0×42.0×53.0（奥）cmと若干の法量の違いが

ある。内部を九段二列に区画して抽斗式の18の函を配し、右上から縦方向の順に墨書で番号を付す。番号は二つの箆筒で通し番号とされているため、「一」から「卅六」までの函があることになる。

各函には鉄製の引手が付き、外寸は38.0×24.5×9.0(深)cm。内側に粉本を押さえるための薄板を備える。箆筒前面に儉飽蓋が付き、これにも鉄製取手が付くが、現在は箆筒甲の蓋は失われている。箆筒乙の蓋の裏面には何か貼り紙があった痕跡があるが、それがどのようなものであったかはわからない。

粉本箆筒には、能満院の旧蔵品であることを示す墨書印影の類はみられず、蓋裏の貼紙に情報が書かれていたと考えるのが合理的だが、現在では確認する方法がない。従って、この粉本箆筒が能満院工房で使用された蓋然性を検討しておく必要があるだろう。

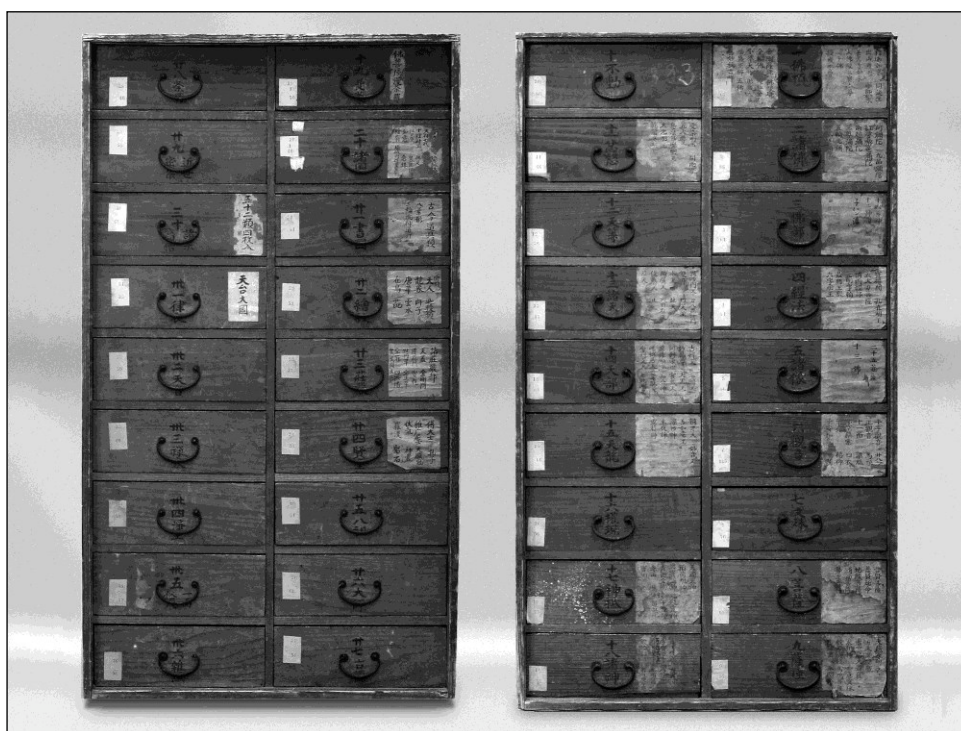


図 1-2 能満院粉本箆筒 (右: 甲) (左: 乙)

まず外観の所見からすると、粉本箆筒には擦れや黒ずみ、傷などかなり長期間の使用の痕跡がある。また貼紙には虫喰いや擦れ、破れの損傷が見られる。仮に被災後に調整されたものと考えれば、憲海入寂後にこれらの粉本が相当の頻度で使用されたと考えなければならないが、現実にはそうした事実は確認できず箆筒の傷みの理由が説明できない。加えて、箆筒の所有者を示す墨書等が見えないため、あえて他所で使用されていた書箆筒を転用したと考える根拠はない。避難直後に経費支出を伴う備品調達の高難性を鑑みれば、こ

れを能満院焼失後に調製したと考えるのは困難である。

また、能満院被災時に粉本の避難を可能とした現実には、粉本が被災時に携帯に都合のよい状態にあったことを想定しなければならない。左右に持ち手の付くこの粉本筆筒がこうした携帯に好都合であることは言うまでもない。筆筒一棹は2人いれば運び出すことができる。禁門の変の頃、能満院には8人の弟子がいた³⁶とされ、相当数の典籍や法具及び工房諸具などの避難を考えるならば、4人で運べる筆筒二棹は避難の状況によく適合している。諸々の状況を総合すると、能満院で使用されていた粉本筆筒が被災し運び出されたと考えるほかないのである。二つの筆筒には若干の大きさの違いがあるが金具をはじめ各函の仕様は共通しており、同一の工房で製作されたものと見られる。

各函の墨書は、数字を頭に二文字程度の表題を続け、函前面中央に記す。現状では、その墨書の左右の空間に貼紙したものがあり、函に収納する粉本の内容の一部を注記している。各函の名称と貼紙の墨書は以下のとおりである。

【筆筒甲】

- | | | | |
|---|----|-------------|------|
| 一 | 佛頂 | 釋迦如来 | 同誕生 |
| | | 出山釋迦 | 薬師如来 |
| | | 善光寺如来 | |
| | | 大佛殿三寶本尊 | |
| | | 三千佛 | |
| | | 授戒本尊」(右貼紙) | |
| | | 金剛薩埵 | 佛眼佛母 |
| | | 金輪佛頂 | 大勝金剛 |
| | | 金界大日 | 胎藏大日 |
| | | 熾盛光佛 | 五佛 |
| | | 善妙稱吉祥」(左貼紙) | |
| 二 | 諸佛 | 阿彌陀 | 九品彌陀 |
| | | 紅婆梨色彌陀 | |
| | | 山越彌陀 | |
| | | 三尊彌陀 | |
| | | 五輪光彌陀 | |

- 彌陀」(右貼紙)
- 三 佛部 十六善神
十二神將
子ハシ像」(右貼紙)
- 四 經法 宝樓閣 孔雀明王
五大力菩薩
請雨經部
光明字輪
最勝王經
六字明王」(右貼紙)
- 五 諸像 二十五菩薩
十三佛」(右貼紙)
- 六 觀音 千手觀音並二十八部衆
正觀音 馬頭
十一面 準胝
不空羼索 白衣
葉衣 楊柳
子安 如意輪
□間」(右貼紙)
- 七 文殊
- 八 菩薩 普賢菩薩
普賢延命
地藏菩薩
彌勒菩薩
勢至菩薩」(右貼紙)
- 九 薩埵 大隨求明王
五大虛空藏
虛空藏大菩薩
求聞持 如意寶珠
般若菩薩 馬鳴菩薩

		五秘密	金剛波羅密」(右貼紙)
十	不動		
十一	忿怒	愛染明王	同兩頭
		五大尊	
		烏瑟沙麼明王	
		太元明王	
		乾闥婆明王」(右貼紙)	
十二	天等		
十三	諸天	毘沙門天	刀八毘沙門
		雙身	四天王
		水天	地天
		焰魔天	大自在天
		伎藝天	日天
		月天」(右貼紙)	
十四	天部	吉祥天	三福天
		妙見尊	大黒天
		訶利帝母	寶藏天
		囊虞梨童女	和合神
		吒枳尼天	韋馱天
		摩利支天	七九曜星」(右貼紙)
十五	天龍	辨才天	妙音天
		善如竜王	
		深沙神	
		主夜神	
		靈符神」(右貼紙)	
十六	權現		
十七	神祇	天満天神	
		稻荷明神	
		三寶荒神	如来荒神
		青面金剛	三十番神

	赤山	日向	道祖神
	寶相福神」(右貼紙)		
十八 諸神	□□□ □□□ □□□		
	藏王権現	高野四所	
	宇寶童子	八幡□	
	聖徳太子		
	春日童子	九頭龍	
	鍛冶神	春日曼荼羅」(右貼紙)	

【箆筒乙】

十九 曼荼	佛菩薩曼荼羅」(右貼紙)		
二十 諸圖	南天鐵塔	瑜祇塔	
	天神七代	□□□□	
	十種神宝	佛足石	
	社日祭	梵篋圖	
	如意	念珠	
	桧扇	瑜祇内作業三形」(右貼紙)	
廿一 書図	古今道具類		
	八葉形		
	三輪流神道汀」(右貼紙)		
廿二 繪紋	雲間ベリ		
	天人	迦綾頻	
	龍象	獅子	
	唐草	雲水	
	花鳥	葩」(右貼紙)	
廿三 莊嚴	諸莊嚴部		
	天蓋	金剛門	
	蓮花門	賢瓶	
	牡丹草	宝生草	
	宝冠	四摂幡	

		袈裟図並注尺」(右貼紙)	
廿四	賢聖	傅大師	孔子
		維摩居士	大職冠
		伏氣	神農
		羅漢	岩石」(右貼紙)
廿五	八祖		
廿六	大師		
廿七	古徳		
廿八	荼羅		
廿九	近世密宗		
三十	諸宗高僧		五十二類四枚入」(右貼紙)
卅一	律衣		天台大圖」(右貼紙)
卅二	天台		
卅三	禪家		
卅四	浄土		
卅五	一向 俗人		雑画」(左貼紙)
卅六	雑画		

函の数である18ないし36は仏教ではしばしば名数として用いられる。各函の墨書を見ると、二つの筆筒には大きな区分を想定したものと考えられ、筆筒甲が尊像を収録し、筆筒乙が絵図と肖像を収録する。一般的に仏教図像として認識される対象は尊像であるため、神像を含めてこれを筆筒甲に区分したものと考えられる。しかし、函名称の付与には厳密な統制を見ることはできず、函名墨書と貼紙墨書の内容には関係が曖昧な例も見られるため、大区分を想定した上で、該当する図像の分類を各函に適宜あてはめて記したものと考えられる。こうした貼紙墨書の状況は、筆筒の調製後収録内容が変化したことをうかがわせており、函名と貼紙墨書の間にはしばしば見られる齟齬は、筆筒を調製した際の分類の思惑を越えて、実際の粉本が増加した過程を物語るのである。以下粉本筆筒各函の分類を個別に検討する。

『図像抄』、『別尊雑記』、『覚禅鈔』といった古代・中世期の大部な図像集においては、多数の図像を集成するためその内容を主導または種類によって分類した。この考え方は能

満院粉本にも継承されており、筆筒甲の中では「一 佛頂」函から「十五 天龍」函までの粉本が、先の白描図像集に対応する範囲となる。この部分の各函の構成は図像集の分類を合成させたもの思われ、その対応を「表 1-2 能満院粉本筆筒函区分と図像集部立て」に表わした。

如来部関係としては「一 佛頂」「二 諸佛」「三 佛部」「五 諸像」をあげることができる。「一 佛頂」は『別尊雑記』『図像抄』『覚禅鈔』にも見える分類名として、仏頂及び仏母を収録する函と考えたものと考えて問題ないが、貼紙墨書を見れば実際の粉本の整理においてはこの函にかなり広範な図像を配している。本来の函名にちなむ仏眼佛母や佛頂尊に関わる粉本は数が少ないこともあったのか、この函に金胎大日を含む五佛をあてるとともに、顕密に関係なく釈迦、薬師など阿弥陀以外の如来部諸尊を配しているのである。そして、「二 諸佛」は全体を阿弥陀の独尊または三尊を顕密に関係なく収録し、「一 佛頂」「二 諸佛」の二函で佛頂部及び如来部をまとめたかたちになっている。そして「三 佛部」としている函は涅槃図や釈迦十六善神、薬師十二神将など「一 佛頂」に収録した諸佛の眷属らが含まれる画像を集めて「一 佛頂」を補う役割を与え、「五 諸像」に、顕教に基づく阿弥陀聖衆来迎図を配して「二 諸佛」を補うとともに、やはり密教の経軌から離れた十三佛粉本を集め、全体として密教と関係の薄い諸尊集会図を配している。

区分	能満院粉本筆筒	図像抄	別尊雑記	覚禅鈔
如来	一 佛頂	五仏 仏頂等	仏頂部	仏頂部
	二 諸佛		如来部	仏部
	三 佛部			
	四 經法	經		
	五 諸像			
菩薩	六 觀音	觀音上・觀音下	觀音部	觀音部
	七 文殊	菩薩	菩薩部	文殊部
	八 菩薩			菩薩部
	九 薩埵	秘法等		
明王	十 不動	忿怒	忿怒	明王部
	十一 忿怒			
天龍星宿	十二 天等	天等 上 天等 下	天等部 甲 天等部 乙	天部
	十三 諸天			
	十四 天部			
	十五 天龍			

このように、函名とその中に配分された粉本を示す貼紙墨書には齟齬がある。本来の使用方法を想定すれば、「一 佛頂」には諸佛頂尊をそのまま集め、「二 諸佛」「三 佛部」

に如来とその眷属など関連する図像を集め、「五 諸像」には顕経に従う仏部を本尊とする諸尊集会図を配するものであったと考えるのが合理的である。かつて事相研究の一部として行われた図像集の編纂では、顕教の図像を考慮する必要がないため、変相図や仏伝図などを編入する必然はなかったが、収集対象が拡大している近世仏画の世界にあっては、古代・中世期の白描図像に属さない多数の図像が収集の対象となるためである。

筆筭を調製した当初から「五 諸像」は設けられた。この「諸像」が、「四 経」の後ろに配置されているのは、一から四の函が基本的に旧来の白描図像の概念に充当するものとして想定されたため、顕密を分離しようとした可能性が考えられるのである。しかし、粉本員数の多寡により結果として一から五の分類が整合性を保つ配分を許さず、本来の意図から乖離した配置となったものであろう。

「四 経法」函は、『図像抄』と『別尊雑記』と『覚禅鈔』とほぼ同じ概念のまま能満院でも整理された。六字経曼荼羅、宝楼阁曼荼羅、請雨経曼荼羅、孔雀経曼荼羅、仁王経曼荼羅などがこの函にあてられているが、顕教の諸尊集会図である最勝王経曼荼羅や本質的には別尊法の本尊とは言い難い光明真言字輪曼荼羅がここに入るのは、憲海による拡張と思われる。

「六 観音」「七 文殊」「八 菩薩」「九 薩埵」はいわゆる菩薩部にあたる。観音にひとつの部をたてることは、その尊像としての重要性から理解しやすく、『図像抄』『別尊雑記』『覚禅鈔』においても同様の扱いである。ただ、文殊に対してひとつの部を立てるのは『覚禅鈔』のみであり、これを採った理由については不明である。確かに八字文殊曼荼羅は別尊法として重視されるが、一つの部を立てる理由としては弱さを感じる。あるいは憲海がかつて住職をつとめた会津亀福院の本尊が文殊菩薩であったことが関係している可能性もあるが、粉本にさほど古いものが見受けられず文殊像粉本と亀福院との関係を明確にする資料は見えない。「九 薩埵」は『図像抄』における「秘法等」に該当し、五秘密や求聞持虚空蔵、大隨求明王など密教における特別な修法の本尊を集めたものとして、経法を補うものだが、これは『別尊雑記』以後は諸尊個々に配分されて消滅した区分である。

「十 不動」「十一 忿怒」はいわゆる明王部にあたる。『別尊雑記』と『図像抄』の忿怒にあたり、能満院ではここから不動明王を独立させて2函としている。尊像としての重要性から不動明王に一函を与えることに不自然さはない。一般的には天部に配され童子経法の本尊となる乾闥婆は忿怒に配されている。

「十二 天等」「十三 諸天」「十四 天部」「十五 天龍」はいわゆる天部にあたる。4

つの函に分類される傾向を見ると、一種の語呂合わせではあるが「十二 天等」に十二天の集合粉本を集めている。そして、「十三 諸天」に十二天の個別尊像と四天王、特に両者に含まれる毘沙門天像を集める。「十五 天龍」は龍蛇の性質を持つ弁財天や善如龍王に靈符神のような道教由来の神像を含めている。「十四 天部」は他の函に分類されにくい天部および星宿部でありこの函が天部における雑部のような役割を持っている。天部については、『別尊雑記』と『図像抄』においても、特に分類があるわけではなく、能満院において4つの函に納めやすい配分方法を考えたと理解するほかない。このように15函までの粉本によって、粉本群全体の四割余りが占められることになる。

続いて、「十六 権現」「十七 神祇」「十八 諸神」と、垂迹神と民俗神の図像3函が続く。この一群の粉本は、垂迹思想を受けて仏教と関わる部分もあるが、総じて民間に生まれた図像が混在し、従うべき経軌のないものである。本来の仏教図像とは言い難いものを含むが、一度描かれた図様が繰り返し描き伝えられて固定し、図像化する例もある。中世以来浸透する垂迹思想を反映して神像を図像の範疇とすることを肯定する様子がうかがえる。権現、神祇、諸神の函名はあるが、貼紙の墨書を見る限り、この函名はほとんど意識されていない。権現に貼紙がないのは、便宜的に権現と記された像を集めたものらしいが、徹底されておらず、少なくとも、この神像群に対して分類を試みようとした形跡は見られない。また、人を神として崇敬する日本においては、神像と肖像との境界が曖昧であることから、箆笥乙の賢聖あるいは俗人に入るほうが適切である聖徳太子が諸神に配されている。

これら箆笥甲の18函に分類される粉本は、全体のほぼ半数にあたる。これは粉本群全体のうち尊像を描くものが概ね半数であることを示している。質量ともに、尊像の比重の大きさが理解される。

次に箆笥乙の函の分類を考察したい。こちらの箆笥で特徴的なのは、上部の「十九 曼荼」「二十八 荼羅」の二つの函である。その函名から分かるとおり、この二つの函によって別尊曼荼羅あるいは両部曼荼羅に関する資料が集められたものと思われる。「佛菩薩曼荼羅」の貼紙がある「十九」がいわゆる別尊曼荼羅の函であろう。従って、「十九 曼荼」「二十八 荼羅」の函は、箆笥甲のうち古代・中世の図像集に対応する14箇の函を補う役割を果たしたと考えられる。また、箆笥甲には記されていない阿字観本尊のような観法のための本尊像については、無記載であるため両部曼荼羅関係とともに「二十八 荼羅」に配したと考える。

「十九 曼荼」 「二十八 荼羅」は一具として使用する二つの函である。構成上は、筆筒甲の垂迹関係函と入れ替えてもよく、むしろその方が白描図像を集中させることができるが、尊像を集中させる方針を優先してこれは行わなかった。筆筒乙は絵図が分類される筆筒であるため、曼荼羅粉本との親和性は悪くない。そして、筆筒乙に収まる18箇の函の最上段という、取り出しやすい場所に配置していることは、これらの函に効率のよい利用方法が求められた結果と考えるべきであろう。それだけ上位の価値を見られている粉本ということがいえる。今日のようなデータベースシステムのない時代、分類と配置こそが、資料活用の基本であったから、こうした函の配置には必ず意味があったはずである。尊像と絵図肖像の粉本を筆筒により大別した理由を考えるならば、粉本が工房の中で使用される用途を踏まえて整理されたことを想定しなければならない。

かつて図像研究のために『曼荼羅集』³⁷が編纂されたように、諸種の別尊曼荼羅を一度に閲覧できることの有益性は早くから理解されていた。曼荼羅関係の粉本を取り出しやすい場所に集中させることの利便性は、教学上の問題のみならず、制作者側の立場にとっても有益であった可能性を示唆している。

「二十 諸圖」 「廿一 書図」 「廿二 繪紋」 「廿三 莊嚴」と4つの函があり、いわゆる仏教図像とは異なる内容の粉本が集められる。「二十 諸圖」は仏教或いは神道に関わる画像や器物の模本である。尊像を描かない三昧耶形はここに配され、塔図、仏足石図がここに収められ、両部神道に関わる図像は尊像ではなくこの諸図に納められる。「廿一 書図」は古器物の写生や実測図及び拓本が核となり、これに敷曼荼羅のように定規やぶんまわしを使用して製作した実用的な絵図が加えられている。「廿二 繪紋」は絵画制作に必要となる諸々の意匠文様類で、仏画に限らず使用できる汎用性の高い図様の粉本が収められる。

「廿三 莊嚴」は、仏画の中で尊像周辺の莊嚴に用いられる仏画特有の意匠粉本で、天蓋にはじまり宝冠に到るまで、仏画の制作工房らしい粉本として特徴付けられる。飲光の思想を受ける袈裟の資料は古物を集めた「書図」ではなくこの莊嚴に振り分けられており、袈裟図が単なる古物への興味として集められているのではなく、実際の仏画制作の資料として捉えられていることを教えてくれる。

以下「廿四 賢聖」から「卅五 一向 俗人」まで、肖像粉本が続く。こうした高僧像の粉本は、本来儀軌などに関わらないものであるが、多くの寺で礼拝の対象となるため、図像化も早かった。空海が師恵果からの伝授の結果、祖師の肖像を贈られたことは、こうした肖像画が、法を継承する証しとして機能したことを教える。特に禅宗では頂相によって

伝法の証しとするなど、高僧像には大きな宗教的役割がある。真言八祖像や空海像のように、継承されるうちに図像化する画像が多数生まれていることには留意する必要がある。

「廿四 賢聖」は道教及び儒教における神または聖別される人物で、これに仏教の側から羅漢と居士が配される。なぜか藤原鎌足がここに配されるのは維摩居士の化現とする『三国伝灯記』の説に従うのであろう。「廿五 八祖」は真言八祖像をさし、真言八祖の集合図または組み物を集めている。「廿六 大師」は八祖に分類されたもの以外の空海関係の粉本である。「廿七 古徳」は真言僧のうち古代・中世の高僧像を集めており、弘法大師十大弟子や益信、聖宝、覚鑿、頼瑜ら古義、新義に関わらず高僧像が集められている。「廿九 近世 密宗」は近世の真言僧を集めたものと思われるが、智積院に関する僧侶のほか、必ずしも像主が判明しない。その意味で高僧像を制作する仏画工房の特質をよく表す函ともいえる。「三十 諸宗 高僧」は南都諸宗の高僧にあたる。この函にかなり新しい紙片で「五十二類四枚入」という貼紙が張り込まれている。これは《釈迦涅槃図周縁図》[183-186]を指しており、かさばることから本来あるべき「三 仏部」から溢れて別の函に間借りをするようになったものと思われる。「卅一 律衣」は正法律をはじめ、諸宗における律僧である。憲海肖像はここに入る。この函に貼紙された「天台大図」については何を意味したのか、現在残る粉本からは推測し難い。「卅二 天台」は天台系の高僧にあたる。「卅三 禪家」は禅宗諸僧で達磨と諸師にはじまり、臨済、曹洞に関係なく収集している。「卅四 浄土」は善導と法然を中心とする浄土宗の諸師である。「卅五 一向 俗人」親鸞及び蓮如をはじめとする浄土真宗高僧と俗人画で、分量としては俗人を描くものが多い。貴顕を含む歴史上の人物の他、像主は不明ながら一般人の肖像にあたるものも含まれる。

最後の「卅六 雑画」は六道絵をはじめとして諸種の画題を見せる粉本の他、罨紙など絵画制作に用いる雑粉本が主たるものと思われる。現状は分類困難な粉本の収納場所となっているが、これは本資料全体に付随した雑資料を整理のためこの函に収めていることによる。そのため手控えや書付などいわゆる若干の文書資料が含まれている。こうした雑多な資料が次第に増加してきた状況は、「卅五 一向 俗人」に「雑画」の貼紙があつて他函に溢れていることから理解される。

このように甲乙二つの粉本筆筭の函の分類を検討すると、第一群として仏頂から天部に至る古代・中世の白描図像を継承する尊像群があり、これに垂迹神、民俗神尊像の第二群を加えて、筆筭甲にまとめている。次に別尊曼荼羅、両部曼荼羅群を集めた第三群と、古器物群、絵図粉本をはじめ絵画の装飾に使用する意匠粉本など絵図粉本をまとめた第四群

があり、さらに僧侶から俗人に至る肖像粉本をまとめた第五群に雑部の第六群を加えて筆筒乙にまとめているのである。これは言い換えてみれば、筆筒甲はこの資料群の内容が持つ白描図像性を示し、筆筒乙はこの資料群の機能が持つ粉本性を示すものといえる。能満院粉本の性格をよく表わしている構造である。甲乙二つの粉本筆筒が収蔵する粉本の数はほとんど変わらない。中世まで事相法流の正当を確認するために行われた図像の収集が、近世末には絵画制作のために行う収集へと変化していることを、直接視覚的に理解させるものとなっている。

第4節 能満院粉本の特質

本粉本を昭和61-63年(1986-1988)に整理した際、粉本の画題に従って再分類したため、現在は当初の分類構成は失われている。これは、各函の内容が整理を開始した時点でかなり混乱していたため、再整理の必要が生まれた理由があるが、本論では能満院粉本の構造を検討することが課題であるため、現状の分類を参考に、函名、貼紙墨書に従って能満院粉本を粉本筆筒による旧分類により再構成する作業を行った。それが「別表1《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録」である。厳密に言えば、観法曼荼羅や権現と明神など復元にあたってどの函に納めるべきか迷うものもあるが、憲海の分類の思考を辿りつつ行った試案として理解されたい。各函の粉本数については「表1-3 能満院粉本筆筒函別粉本数（白描粉本のみ）」にまとめているが、各函が量的な均衡を以て粉本筆筒に蓄えられているわけではないことから、現実に粉本の保管に混乱が生じていたのが寄付受納時の状態ではなかったかと考える。

粉本の収蔵には量と数の物理的問題が必ずつきまとい、基本的に筆筒のような限られた空間の中で整理するには限界がある。函による分類の混乱は、まさにこうした問題が露呈したものといえよう。しかし、憲海が能満院工房を開いた当初、憲海はこれほど規模が拡大することを予想していなかったと思われる。

能満院粉本のうち憲海が関わる粉本は814点ある。そのうち年紀を有する粉本は474点あるのだが、能満院に入る年と思われる嘉永4年(1851)時点で所有していた粉本数を見れば306点にとどまり、2/3にすぎないことになる。年紀のない粉本が多数あることから、これがそのまま嘉永4年時の所有数ではないが、憲海の非年紀資料についても同様の割合で収集されたと仮定すれば、814点の2/3にあたる526点程度を所有していた可能性があ

ることになる。これは、現在の総粉本数の1/5強にすぎない。これに、入洛後精力的に書写にあたった憲里と現光の粉本についても同様の手順で嘉永4年時の仮想点数を想定して加えてみたが³⁸、その数736点にすぎず、現状総数の1/3にも満たないのである。これが、能満院入寺の時点での中核となる粉本であったと仮定するならば、遠藤家本、山口家本などその他追加すべきものを加えたところで、粉本筆筭を調達する時点で所有していた粉本は現在より遙かに少ないものであったと考えなければならない。粉本筆筭を調製した当初、憲海はその収納にまだ余裕を見ることができたのである。

表 1-3 能満院粉本筆筭函別粉本数(白描粉本のみ)

	函名	能満院粉本	大成宗立粉本	小計
1	佛頂	71	1	72
2	諸佛	57		57
3	佛部	66		66
4	經法	51		51
5	諸像	50	1	51
6	觀音	104	3	107
7	文殊	48		48
8	菩薩	79	3	82
9	薩埵	67	1	68
10	不動	71		71
11	忿怒	40	1	41
12	天等	68		68
13	諸天	34		34
14	天部	65		65
15	天龍	64	1	65
16	權現	24		24
17	神祇	79	1	80
18	諸神	73	3	76
19	曼荼	57		57
20	諸圖	44		44
21	書函	119	2	121
22	繪紋	89		89
23	莊嚴	93		93
24	賢聖	33	1	34
25	八祖	50		50
26	大師	48	1	49
27	古徳	114	4	118
28	荼羅	28		28
29	近世 密宗	44	1	45
30	諸宗 高僧	70		70
31	律衣	36	2	38
32	天台	86		86
33	禪家	117	2	119
34	浄土	74		74
35	一向 俗人	67	1	68
36	雜画	86	1	87
	合計(点)	2366	30	2396

このことから、各函に書かれた函名と貼紙墨書の齟齬がみられる理由は、能満院工房開設後の粉本の急激な増加にあることが首肯される。この事実は、現存する粉本筆筭が能満院工房を開設した初期の段階で調製されたものと考えられる根拠となる。そして、筆筭による粉本整理の枠組みが、能満院工房主宰者である憲海自身の思考を反映すると考える理由ともなる。

それでは、二棹の粉本筆筭に収められた粉本群は、憲海のどのような思考の跡をとどめているのだろうか。小原は元治元年（1864）の兵火により、大半の粉本が失われたと伝えたが、かろうじて残された粉本筆筭は、分類の配分においても、年紀資料の分布においても、著しい欠失が見られず、むしろゆるやかな網羅性すら感じさせるものとなっている。本資料群には、開版に関わる粉本が著しく少ないことを考えると、焼失したとされる部分については、出版に関わるまた別の一群であった可能性がある。これら二棹の筆筭は、狩野派における絵本庫宜しく³⁹、参照用資料群と考えるのが適切と思われ、そのため、非常持ち出しの対象となっていたと考えられる。従って、ここに遺された粉本群には、ある一定の選択された意思が反映しているものと思われ、粉本の性質を検証することが、憲海の思考を理解するために有効であると考えられる理由である。

少なくとも明代までの中国画論書においては、先人の画稿を手本として蓄蔵するものを粉本の本義としている。それをどのように使用するかという技術的視点は語られていない。これはもちろん語られていないだけで、実際にはそういう視点が存在する可能性はあるのだが、それをあえて語るものはなかった。方黨のように粉末顔料を介して下絵を写すなどの説が、後世によく説かれるものの、日本の絵画制作の現場からすれば、従前から行われている行為を、わざわざなじみのない漢語を通して理解する必要はなかったのである。

従って、『図絵宝鑑』に説かれる輸入語としての粉本に、技術的資料である絵本や紙形概念が混入するのは近世的な出来事といってよい。古代末期に完成する白描図像の概念に近世用語である粉本の語を使用するのは、誤解を生む可能性がある。

先にも示したとおり、白描図像について考察する場合、その制作利用の側面から粉本の語がよく使用される。白描図像の持つ継承性に注目するならば、確かに輸入語である粉本が持つ“古人画稿”の性質に従うものといえるが、古い中国の術語である粉本は日本で定着するまで時間を要しており、それも中世以前からある絵本や紙形と呼ばれた絵画制作資料との合流の結果として認識されたと考えられる点から見ると、白描図像の粉本性とはむ

しろこれを絵本として使用する機能論として語るべきなのであろう。

高野山、東寺、醍醐寺、仁和寺、石山寺などかつて活発に事相研究が行われた密教寺院には、現在もなお大量の白描図像が所蔵される⁴⁰。これらの古刹に継承される白描図像と能満院粉本を比較すると、その収集年代の違いを超えて大きく異なる点がある。それは、寺院側の図像収集を行う目的である。本来の機能からいえば密教寺院では事相面からの必要性が主たる関心事であり、絵画制作に起因する需要はむしろ従属的なものであろう。その収集は編纂物である図像集を収集するほうが効率的であり、個別の図像を体系的に集める機能は学匠個人の研究にゆだねられている。一方能満院工房においては、これが逆転して、基本的には絵画制作に対する需要が主たる関心事となり、粉本の収集は良質の図像を得るための基本的な活動として重要視されている。粉本には同一系統の図像が複数存在し、良質の画像への校合と選択の過程を見ることができる。良質の図像の探究とは、依拠する経典を選び、その絵画的表現の追求と見られ、事相面の関わりはむしろ従属的なものとみなされる。

能満院の粉本群は、図像が構造化された状態で集積しており、これは他の密教寺院では見られない状態である。しかし、尊像と曼荼羅に限定して対象を比較するならば、基本的に諸尊像を網羅することを指向して古代・中世の図像集と共通する点がある。粉本の収集そのものは図像集のような編纂行為ではないため、基本的な図像を収集する態度と特異な図像を収集する二つの態度を持つことが可能であり、やはり、中世以前の密教寺院が図像を収集する態度と変わるところはない。そして白描図像の持つ絵本としての機能は、絵画制作の下図をも提供するに至る。古代・中世に収集された事相研究のための図像は概して小さなものだが、やがて新図の舶載や意樂などにより新たな図像が生まれると、そのまま下絵となるような大きなものが作られている。これは白描図像の絵本化の動きと見られ、近世の工房である能満院粉本ではこちらが基本的な粉本の存在理由となった。

能満院粉本の構造からうかがえる特徴として、以下のような四点をあげることができる。

- 一 収集の対象となる尊像が密教に限らず顕教図像や民俗神に広げられていること。
- 二 全体の構成について一定の構造化がなされていること。
- 三 諸宗の祖師像から俗人肖像に及ぶ広範囲な肖像を収集制作すること。
- 四 法具、古器物の記録を収集すること。

一は古代・中世の白描図像との最も顕著な違いである。密教の事相研究においては、別尊法や曼荼羅に関わる尊像諸図が対象となったが、鎌倉新仏教の台頭以後、浄土宗や禅宗

において用いられる礼拝対象の絵像や、本来仏教とはかかわりのない六道思想を反映した十三佛仏図などの図像化が進み、古代からの顕教図像をはじめ浄土変相図や阿弥陀来迎図が加えられている。粉本群全体としていわゆる密教図像という概念は失われている。また、中世以後拡大した垂迹美術の展開により、民俗神を含めたかなり広範囲の尊像を収集の対象としている点も顕著である。

二は先に述べたとおり、古代・中世の図像集の分類を発展して粉本の構造化を図ったことである。粉本筆筭は36函に分けられ、内容を大きく6つに分けることができる。図像部として中世以前の白描図像の範疇に入るもの15函があり。佛頂如来部に4函が宛てられ、経法が1函、菩薩が4函、忿怒部が2函、天部等が4函となっている。その函名は先学が遺した図像集の分類を踏襲して『図像抄』『別尊雜記』『覚禅鈔』の部建てを援用している。この分類にはもとより厳密性を期待したものではなく、むしろ先学への敬意を表してのものとするのが正しい理解であろう。そして垂迹部として3函、曼荼羅部として2函が宛てられ、諸図に4函、諸宗高僧等に11函、雑画用の函を1函準備している。曼荼羅部は別尊曼荼羅と両部曼荼羅に宛てられたと考えられ、先人が両部曼荼羅研究や別尊曼荼羅集を編纂したことに倣ったものと思われる。中世以前の仏教図像の範疇を離れた広い範囲の区分を持つ一方で、高僧伝絵や縁起絵など全く関わらない分野があることが指摘できる。

三は、諸宗の祖師像をはじめ、有名無名にかかわらず俗人肖像に及んでその量が多いことである。天台における祖師供や東密の御影供などの法事のために諸高僧の画像が制作され、そのため肖像の図像化も進んだ。能満院では諸流派の高僧像の制作に対応した粉本があり、彼らがこの分野に努力を重ねていることがわかる。当時の絵仏師の工房においてこうした肖像の制作が重要な事業として位置づけられていたことが、能満院工房にも影響していると思われる。

四 憲海は絵画に限らず、古物に対する興味が強く、法具はもちろんのこと、由緒のある文化財に対しても写生採寸や模写を行っている。江戸時代後期は復古的潮流と実証主義的研究が歴史研究の分野に大きな影響を与え⁴¹、松平定信(1759-1829)らの『集古十種』⁴²の編纂や藤原貞幹(1732-1797)の『集古図』⁴³編纂など、文化財の情報を収集する活動が各所で見受けられる。憲海は文政5年(1822)に《弘法大師五輪塔婆拓影》[1249]を採集しており、早くから古文化財の記録化を試みている。能満院粉本にはいわゆる図像研究とは異なる視点が存在しており、実証主義的歴史認識を背景とする憲海の独自の思考が記録されていることがうかがえる。

以上でこの章の考察を終える。《田村宗立旧蔵仏画粉本》は、憲海が主宰した六角堂能満院工房の旧蔵粉本を主とした 2673 点の資料からなる。その一割は版本であり、残る白描粉本には款記印影により作者が判明するものが多い。能満院の憲海や憲里らの手により書写されたものが多数確認されるが、工房内では原則的に粉本筆筭に分類して使用されていたと考えられる。粉本筆筭の存在は、粉本を構造化して集積させたことを示し、社寺の蔵書としては珍しい形態を見せる。中世以前の白描図像の区分に倣う分類を取り入れているが、顕教図像のほか、垂迹神や肖像を大量に含み、古文化財の記録資料も含まれている。また、仏画工房として必要となる意匠文様粉本も確認され、いわゆる密教図像から収集の対象が拡大した結果、総体に絵画制作の参考資料となるべく整理されていることが確認される。

【注】

- ¹ 京都市立芸術大学芸術資料館に複写資料がある。原本の所在不明。
- ² 京都市立芸術大学芸術資料館に複写資料がある。原本の所在不明。
- ³ 小田慈舟「御室版両部曼荼羅の開版と其功労者」(『密宗学報』第 178 号、1928 年 6 月)、pp. 291-292。
- ⁴ 大橋乗保「田村宗立考」(京都工芸繊維大学工芸学部研究報告『人文』第 10 号、1962 年 3 月)。真鍋俊照「月樵道人と仏画」(『三彩』第 350 号、三彩社、1976 年 10 月)。竹田黙雷「田村月樵翁」(『藝苑』帝国美術社、1919 年 7 月)。
- ⁵ 大橋乗保「田村宗立考」(京都工芸繊維大学工芸学部研究報告『人文』第 10 号、1962 年 3 月)、p. 2。
- ⁶ 白川静『字統』普及版(平凡社、1994 年 3 月)「凶」p. 483。「像」p. 551。「様」p. 851。
- ⁷ 諸橋轍次『大漢和辞典』第 2 巻、p. 100。「【凶像】画像。又、像を画く。凶象に同じ。」
- ⁸ 石田尚豊「恵果・空海系以前の胎蔵曼荼羅」(『東京国立博物館紀要』第 1 号、1981 年 12 月)、pp. 31-36。
- ⁹ 『傳教大師將來越州録』(『大正新修大蔵経』No. 2160、第 55 巻 p. 1058 下)。
- ¹⁰ 『恵運律師書目録』(『大正新修大蔵経』No. 2168B、第 55 巻 p. 1091 下)。
- ¹¹ 『御請来目録』(『大正新修大蔵経』No. 2161、第 55 巻 pp. 1064 中、1065 中)。
- ¹² 松本榮一「「かた」による造像」(『美術研究』第 156 号、1950 年 9 月)、河原由雄「金堂壁画—壁画による仏殿荘嚴の東遷」(『法隆寺金堂壁画』、朝日新聞社、1994 年 11 月)、pp. 88f。
- ¹³ 森下和貴子「俱舎曼荼羅図」(『東大寺：美術史研究のあゆみ』里文出版、2003 年 9 月)、pp. 282-294。
- ¹⁴ 『凶像抄』は 10 巻からなり『十卷抄』『尊要抄』とも呼ぶ。12 世紀前期。永嚴の命で恵什が編纂したとされる。142 図収録。『大正新修大蔵経』凶像部第 3 巻。
- ¹⁵ 佐和隆研『白描図像の研究』(法蔵館、1982 年 11 月)。浜田隆『凶像』(至文堂、1970 年 12 月)。錦織亮介「凶像と鏡像—線だけの尊像表現」(『日本美術全集』第 7 巻、講談社、1991 年 6 月) pp. 175-181。古川攝一「清雅なる仏画—白描図像の集積・解析・再構成に関する一試論」(『清雅なる仏画—白描図像が生み出す美の世界』展図録』、大和文華館、2012 年 10 月)、pp. 8-23。
- ¹⁶ 『大日本仏教全書』第 44 冊(名著普及会、1987 年 5 月)、pp. 1-194。

- 17 『大正新修大蔵経』No. 2476。第 78 卷 pp. 125-186。
- 18 『別尊雜記』は 57 卷。12 世紀後期。心覚による編纂。仁和寺に自筆本がある。『大正新修大蔵経』図像部第 3 卷。
- 19 『覚禅鈔』は 126 卷。12 世紀末から 13 世紀初期。覚禅が編纂し写本による関数の変動が著しい。図像集の編纂経過を留める。『大正新修大蔵経』図像部第 4・5 卷。
- 20 『阿娑縛抄』は 228 卷にのぼるが図像は 100 図程度である。13 世紀後期。天台宗の承澄の編纂はその没後に及んだ。『大正新修大蔵経』図像部第 8・9 卷。
- 21 浜田隆『図像』（至文堂、1970 年 12 月）、pp. 26-29。
- 22 田村隆照「白描図像考断章」（『仏教藝術』第 150 号、毎日新聞社、1983 年 9 月）。佐和隆研の説は佐和隆研『白描図像の研究』（法蔵館、1982 年 11 月）から、小野玄妙の説は小野玄妙『仏教之美術及歴史』金尾文淵堂、1922 年 7 月から収録する。
- 23 唐・朱景玄『唐朝名画記』（『美術叢書』二集第六輯。江蘇戸籍出版社版、1986 年 6 月）、p. 1001 下。
- 24 元・湯屋『画論』（『美術叢書』三集第七輯。江蘇戸籍出版社版、1986 年 6 月）、p. 1707 上。1328 年頃（兪崑『中国画論類編』華正書局、1984 年 10 月、p. 476）。
- 25 明・屠隆『畫箋』（『美術叢書』初集第六輯。江蘇古籍出版社版、1986 年 6 月）、p. 337 下。1590 年頃（兪崑『中国画論類編』華正書局、1984 年 10 月、p. 1236）。
- 26 清・方薰『山静居画論』（『美術叢書』三集第三輯。江蘇古籍出版社版、1986 年 6 月）、p. 1482 下。1780 年頃（兪崑『中国画論類編』華正書局、1984 年 10 月、p. 229）。
- 27 唐・張彦遠『歴代名画記』（岩波書店、1938 年 2 月）、p. 62。
- 28 元・夏文彦『圖繪宝鑑』（『元人畫學論著・六如居士畫譜』。世界書局、1975 年 4 月、p. 6）1365 年自序。
- 29 瀧精一「図繪宝鑑と日本人の画論」（『国華』第 302 号、1915 年）、pp. 3f。
- 30 狩野一溪の父は狩野松栄門人。『後素集』（坂崎坦『日本絵画論大系』第 2 卷、名著普及会、1980 年 1 月）、p. 82。
- 31 狩野安信は中橋宗家を継ぐ。延宝 8 年（1680）述。自筆写本が確認されている。『[定本] 日本絵画論大成』第 4 卷（ペリかん社、1997 年 2 月）。
- 32 承応元年（1652）版後印本が『和刻本書画集成』第四輯（汲古書院、1976 年 7 月）に収録。長澤規矩也の解題に初印は正保慶安頃と推測する。
- 33 著者林守篤は筑前直方の藩士で狩野派に学ぶ。正徳 2 年（1712）著、享保 6 年（1721）刊。坂崎坦『日本絵画論大系』第 1 卷（名著普及会、1980 年 1 月）、pp. 3f。
- 34 坂崎坦『日本絵画論大系』第 1 卷（名著普及会、1980 年 1 月）、p. 24。
- 35 土佐光起は近世土佐派の中興者。元禄 3 年（1690）奥があるが、文政 5 年（1822）の内田邦之写本が遺るのみ。坂崎坦『日本絵画論大系』第 5 卷（名著普及会、1980 年 1 月）、p. 29。
- 36 小田慈舟「御室版両部曼荼羅の開版と其功労者」（『密宗学報』第 178 号、1928 年 6 月）、p. 291。
- 37 『大正新修大蔵経』図像部第 4 卷。3 卷。興然。
- 38 憲里粉本は 76 点、現光粉本は 118 点となった。
- 39 橋本雅邦『木挽町画所』（『国華』第 3 号、1889 年 12 月）、pp. 15-20。
- 40 佐和隆研『白描図像の研究』（法蔵館、1982 年 11 月）pp. 44-63。浜田隆『図像』（至文堂、1970 年 12 月）、pp. 62-96。
- 41 斎藤忠『日本考古学史：新装版』（吉川弘文館、1995 年 10 月）、pp. 27-40。
- 42 小林めぐみ「集古十種の編纂-その目的と情報収集」（図録『あるく・うつす・あつめる 松平定信の古文化財調査 集古十種』福島県立博物館 2000 年 3 月、pp. 100-111）。
- 43 拙稿「藤原貞幹の「集古図」（『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』第 36 号、1992 年 3 月）、pp. 67-90。

第2章 憲海と憲里

この章では、六角堂能満院工房を主宰した僧憲海とその弟子として憲海と行動を共にした大成憲里の生涯を検証する。第1節では、その生涯を生活基盤とした場所にに基づき五つの期間に区分する。そして、彼らの事跡を検証するための資料として能満院粉本とともに重要な役割を担う智山書庫資料ほかの文書群の解題を行う。第2節では、憲海の出自を検証し、広伝寺での剃度に始まる安佐野での生活までを検証する。第3節では、長谷寺初交衆から下山に至るまでを検証し、憲海の受法の実際を確認する。第4節では、会津亀福院に住持する時期を対象とし、会津における学修と弘通活動を検証する。第5節では、入洛後山王寺での仮寓期を経て能満院に入り、工房での開版事業に専心した後、蓮光院で遷化するまでを検証する。第6節では、弟子大成憲里の出自を検証し、憲海の資としての生涯と、明治維新を経て故郷新潟で遷化するまでを検証する。憲海が能満院工房を主宰するに至る思考の形成を考察するための基礎的作業として、客観的な事跡の確認が目的である。

第1節 林岳憲海の生涯

序章において述べたとおり、憲海の事跡については、ごく最近まで《御室版両部曼荼羅》開版の功労者としての側面から語られることが一般的であった。それは一面の真実ではあるが、憲海という人物の本質を伝えるものではない。近年の憲海研究の展開は、《田村宗立旧蔵仏画粉本》研究の進展と、智積院による『智山書庫所蔵目録』¹の刊行。そして会津若松市自在院の阿住義彦による憲海の顕彰活動により促されたものである。特に重要なのは、それまで晩年の活動の中心となっていた京都における憲海の事跡が中心であったところに、憲海の出生地である会津地方での事跡と大和長谷寺における修学期の様相が加えられたことである。

福聚山満蔵寺自在院は福島県会津若松市相生町にある。近世において自在院は、江戸護持院の末であったが、近代以後豊山長谷寺末となっている。自在院は、憲海が住持となった亀福院を幕末期に兼帯した経緯があり、亀福院から継承されたと思しき憲海関係資料が遺されている。また同寺が豊山末であることから住職である阿住自身も豊山の内実に詳しく、長谷寺に修学した憲海の事跡が確認されたことも大きな成果である。その他阿住の調査により確認された会津地方の憲海関係資料としては、「自在院資料」「金剛寺文書」をは

はじめとして、「川島家文書」、「長福寺資料」、「広伝寺資料」がある。京都、会津、大和という、憲海に深い関係を持つ地域の情報が次第に集積して、略伝によって偏向した憲海像は実像に近づきつつある。そして明らかになってきた人物像は、強烈な個性を持つ僧侶の信仰の記録として解釈することが可能であり、事跡の価値をより豊かなものになっている。



図 2-1 宗立筆 大願（憲海）像 [1932]

憲海の生涯には幾つかの転機がある。その区画については、生活の基盤を置いた場所に応じて形成されると見るのが、彼の行動を理解するためにも合理的である。ここでは、次のような五期に分けて考えたい。

第一期 赤津安佐野時代

寛政 10 年（1798）～文化 8 年（1811） 1～14 歳

会津藩領赤津富永（現福島県郡山市）において百姓定右衛門を父に生まれ、二本松藩領内安佐野の広伝寺（現福島県郡山市）において、憲梁（1753-1828?）を師として出家し、沙弥として修行した。

第二期 豊山長谷寺交衆時代

文化 8 年（1811）～天保 4 年（1833） 14～36 歳

広伝寺を出立し、江戸を経由して畿内に入り、14 歳の沙弥ながら豊山長谷寺に交衆する期間である。沙門となり、慈光寺（大阪府東大阪市）の鳳寛鏝慶（1748-1829）に

伝法灌頂を受け、所化として修学すること 22 年に及ぶが、在山中に長栄寺（大阪府東大阪市）の黙住信正（1765-1833）に進具して正法律を護持するに至り、豊山を下りた。凶像経疏の書写を行いながら豊山で修学を続けた期間である。

第三期 会津亀福院住持時代

天保 4 年（1833）～弘化 2 年（1845） 36～48 歳

江戸を経て会津若松（福島県）に入り、八角神社別当亀福院の住持を務めた期間である。この時、生涯の随僧となる大成憲里（1828-1891）を越後から迎え、弟子とした。開版事業を行い弘通に努めるが、自ら住持を辞した。

第四期 入洛山王寺寄寓時代

弘化 2 年（1845）～嘉永 4 年（1851） 48～54 歳

憲里とともに入洛し、山王寺などに寄寓しながら、凶像経疏の収集に努める時期である。この時期、絵仏師長谷川家が所蔵する粉本を多数書写し、一方で能満院に工房を開く準備をした。

第五期 能満院住持時代

嘉永 4 年（1851）～元治元年（1864） 54～67 歳

洛中頂法寺境内にある智積院未能満院の住持として、仏画の制作や開版印行を行う工房を主宰し、印施千種の大願を立て実践する期間である。能満院の焼亡により、避難先の蓮光院で遷化した。

憲海の生涯は決して平坦ではない。しかしそこに外的な要因により強いられたものはなく、むしろ自発的に当時の僧侶の生き方として特異な道を選択しているといえる。以下各期の区分を意識しつつ憲海の事跡を整理するにあたり、検証に使用する基本的な資料群について解題を行う。

序章に示した略伝の他に憲海の事跡を物語る最大の資料群は《田村宗立旧蔵仏画粉本》である。これについては第 1 章で検証した。次に豊富な情報量を持つのが「智山書庫蔵書」である。「智山書庫蔵書」は真言宗智山派総本山智積院の蔵書を保管する「智山書庫」中の憲海関連典籍文書類である。量的にも充実しており、あまり多くを語らない憲海の思考

を文献によってうかがうことが可能な資料群として貴重である。京都市東山区にある智積院はもともと紀州根来寺大伝法院の塔頭であったが、戦火に堂舎を失い、やがて家康により京都に寺地を受けて再興したものである。中世以来の学問所であり、近世においても修学の寺として機能した²。『智積院史』によれば、山内の聖教記録類を「智山書庫」として、ひとつにまとめたのは、智積院第五十二世青木栄豊能化（1857-1936）が昭和3年（1928）に境内東南隅に書庫を建築したことにはじまるという³。小笠原弘道が報告する「智山書庫」蔵書の構造によれば、「智山常盤寮蔵本」という所蔵印が捺される山内常盤寮蔵書と「智山大衆蔵」という蔵印を持つ山内共有文庫⁴の蔵書が中心となって、山内にあまたある学寮の蔵書や学匠の蔵書を集めて構成したものとしている⁵。常盤寮蔵本について、小笠原は蔵書の四分の一に及ぶ可能性を示唆し、林田光禪の説を次のごとくまとめている。「隆瑜が、能化職を退き、大報恩寺に移られて後、浄光（安房出身）、元瑜（宝珠院住職）など房州ゆかりの先師の著書や写本が散逸してしまうことを憂慮し、また隆瑜自身の蔵書も保管するため、学侶の管理を行う大仲に学侶育成のための助成金などを納め、弘化四年（1847）経蔵を建立した」とする。すなわち、智山書庫の原型は、安房出身の僧らによる記念文庫の設立であり、その整備は江戸時代末期ということになる。弘化4年は憲海が会津を離れて京都に入ったことが確認できる年である。その後憲海が能満院の住持となるための交渉が行われる背景として、こうした智山内で教学興隆に対する意識の高まりがあったことは注目してよい。

小笠原によって報告される「智山書庫」蔵書は、『智山書庫所蔵目録』に収録される写本の総数として5119点にのぼるとし、このうち3340点が書写年代のわかるものだという⁶。ここで数える点数は件数の意と思われ、実際の冊数はこれを上回る。小笠原は憲海の手になる写本を91点として報告するが、『智山書庫所蔵目録』を改めて検討すると、目録上で憲海の手になると判断される典籍文書は103件あり、点数にすると136点となる。これに憲海が受けた伝受の記録が6件12点、能満院工房の画僧の手に成るもの2件10点、作者名を明らかにしないが年紀と書写場所から能満院工房のものと判断されるもの4件4点、海如より憲海に送られたもの1件1点を見いだすことができる。すなわち116件163点が憲海に関わる能満院工房の旧蔵書であったと考えられる。『智山書庫所蔵目録』には所蔵印の記録がないため、奥書のない写本ではその来歴を知ることが難しいが、資料の精査が進めば能満院に由来する写本は今少し増えると考えられるべきであろう。

智山に憲海蔵書が寄付されたのは、憲海が遷化して半世紀も後のことである。すなわち、

内容は近世資料であるが、山内から移転されたものではなく、近代になって寺外から収集されたものである。その意味では、智山書庫蔵書の大半である山内伝世資料とは異なる後世の収集資料である。智山書庫が設立する以前に寄付を受けているため、恐らく当初は山内のいずれかの文庫に収められたものと思われるが、そのまま昭和初期の智山書庫開設時に既存の資料とともに整理されたため、来歴が分かりにくくなったものと考えられる。

田村家から智積院に寄付された典籍文書については、『智山書庫所蔵目録』の刊行により、ある程度確認できるようになった。先に述べたとおり小田慈舟は現存する能満院旧蔵品を「小部分」と称しているが⁷、それがどの程度現実を反映するのか、能満院旧蔵書の全体像が不明な現在では確認する方法がない。しかし、智山書庫に入った憲海蔵書は伝えられる経緯を見る限り、火災を免れ能満院から救い出された写本の一部を構成したものであることは疑いない。

智山書庫憲海旧蔵書中に記された書写の年紀を、先に述べた憲海の活動区分に適用して数えると以下のようなになる。

第一期	赤津安佐野時代	寛政10年(1798)～文化8年(1811)	0件
第二期	豊山長谷寺交衆時代	文化8年(1811)～天保4年(1833)	37件
第三期	会津亀福院住持時代	天保4年(1833)～弘化2年(1845)	13件
第四期	入洛山王寺寄寓時代	弘化2年(1845)～嘉永4年(1851)	10件
第五期	能満院住持時代	嘉永4年(1851)～元治元年(1864)	55件 ⁸

最も古い資料は文政3年(1820)の鏝慶による憲海への伝授関係文書2点(書-014・書-116)であり、憲海の手になる写本としては文政5年(1822)の『摩怛利神法』(書-069)ということになる。長谷寺交衆以後に書写されたものとわかる。

全てが憲海による書写とは限らないが、年紀の分布状況をみれば、第五期に属する資料が多く、一年平均にすれば4点もの資料を収集していることがわかる。これが収集の最も活発な時期となる。第二期については、期間の長さに対して点数がさほど多くないが、実質的に文政3年(1820)の鏝慶からの伝授以後にこうした書写活動が活発になることを考慮すれば、年平均3点近くの収集を行っていると思なすことができるので、実際にはかなり活発に活動していたことになる。逆に第三期は亀福院の住持として職責があるため点数が少ない。行動の限界と開版事業に関わる状況が考慮され、研究に没入し難い状況があったものと推測される。年平均1点程度となる停滞した印象は、憲海の繁忙を伝える証左と考えてよい。概ね資料の残存状況は活動内容に比例しており、極端な偏りはない。

目録から、写本の内容を判断すると。経、儀軌、真言、陀羅尼の類は54件（60冊）あり、疏、論のほか、作法、次第、法則の口訣などが42件（63冊）あって、経疏類が件数基準で全体の8割を超す。他に伝授の際に授与される文書が6件（12枚）、その他研究評論書の写本が9件（19冊）、絵図が5件（3巻と6枚）という内訳になる。絵図5件は全て宗立旧蔵粉本と系統を同じくするものであり、寄贈の際に分類が徹底していなかった様子が見える。

能満院粉本の構成から、憲海が収集する図像が尊像中心であることは、第1章に述べた。憲海の出自からして、密教関連の仏書が多いことは当然だが、諸尊の像容に対する興味は自ずと別尊法、経法に関する経疏の収集を促し、憲海の興味の対象を示して興味深い。憲海の書写活動が、研究に裏付けられたものであることを、これらの書物からうかがうことができる。

そうした、憲海の幅広い学殖を想定するとき、憲海が蓄蔵して不思議のない書物でありながら、見あたらないものが存在することは、これらの蔵書が全体の一部であることを教えている。例えば、正法律に関わる書物は全く含まれておらず、能満院粉本に関連資料が含まれ、憲海が深く関心を持っていたと思われる⁹神祇灌頂にかかわる書物も含まれていない。また、憲海が再三利用したことが粉本の墨書からうかがえる抄物や図像集も失われている。これらは、被災時に焼失したのか、後に譲渡紛失により散逸したのか、さまざまな憶測は可能だが、彼の思考を研究するには、大きな欠落を感じずにはいられない。この方面は新出の資料に期待したい。

次に、「金剛寺文書」について述べる。金剛寺は会津若松市七日町にある真言宗豊山派の寺で12世紀以来の歴史を持ち、近世は醍醐無量寿院の末として、会津真言宗四箇寺のひとつであった。この金剛寺に伝えられる文書は「金剛寺文書」としてかつて福島県歴史資料館に寄託されていたが、膨大な資料の全貌はいまだ明らかにされていない。しかし、整理済みの資料1028点は目録化¹⁰されており、憲海に関係する資料はこの中にある。憲海関係資料は13件（10冊12枚）を数え、憲海自筆の書状1枚と刊本3冊を含んでいる。写本類は基本的に憲海自筆本から他の僧が書写したものであり、間接的に憲海蔵書を伝える資料である。金剛寺の由緒から考えても、この寺と憲海の関係は会津における真言役寺との関係にとどまるものであったと見るべきで、むしろその関係は僧侶間の私的な交流にあったと考えられる。豊山在山を続ける憲海の学問は、郷里においても重んじられたものと思われ、憲海の学問が会津の僧の学修活動の痕跡として遺された資料ということができる。

「長谷寺文書」は豊山長谷寺（奈良県桜井市）に遺される記録文書中の憲海に関わるも

ので、具体的には憲海が長谷寺に交衆する状況を伝える『交衆帳』と『座位帳』である。公刊はされておらず、山内の重要な文書として保管されており、阿住による報告によって知ることができる¹¹。「自在院資料」は、阿住が住持を務める自在院に所蔵される資料である。自在院は、応永30年(1423)長巖法印によって草創した真言宗の寺で、近世では触頭役寺として会津真言四箇寺の一を務めるとともに、常法談林所として教学の興隆に与った¹²。先にも述べたとおり、幕末期にかつて憲海が住持を務めた亀福院を兼帯することになり、明治初期に至っては神仏分離により亀福院が廃寺となるにあたり、その本尊文殊菩薩像を遷した歴史がある。自在院には亀福院から移転された憲海関係資料の他、阿住が収集した資料があり、これらをまとめて「自在院資料」とする。

「川島家文書」は、南会津町川島にかつてあった南照寺に伝わる文書で、修験関係の資料として同地の川島家が所蔵している。南照寺は会津本山派南岳院の配下で、本山派泉明院の観章という山伏から山伏本浄に伝授された文書を中心とする蔵書が流入したものである¹³。本浄は安政4年(1857)に六角堂能満院において憲海より『請雨経』の伝授も受けている¹⁴。

これらの典籍文書資料については別表3「智山書庫等憲海関係書籍文書目録」にまとめられており、本論において目録中の資料を提示した場合はその目録番号を付している。

第2節 出自と剃度



図 2-2 赤津富永集落遠望

憲海の出自については、序章で述べたとおり、会津出身として伝えられてきた。郡山市湖南町の歴史や伝承をまとめた『湖南の史蹟と文化財』¹⁵に次のように記されている。

「安佐野の傑僧林岳憲海大願和尚は赤津富永半沢吉次郎の次男に生まれたが、幼少より寄

才縦横、その異才を認められて広伝寺一世法印憲梁の弟子として六才の時この寺に入った。」

この伝承は鈴木素友の著す「安佐野傑僧」という一文が典拠となっているとされるが、残念ながらその原文は未見である。また、『湖南村郷土史 中野郷土史考』¹⁶には、鈴木同書からの引用として「林岳は赤津村富永部落の半沢定次郎農家の出身にして幼少より寄才縦横であるのでその異才を惜むあまり当時郷村で知られた真言宗広伝寺中興第十一世法印憲梁の弟子とされたのは六才の時である」とあり、誤記と思われる部分はあるものの、概ね同様の事跡を伝えているところから、原本とされる素友の記事の要旨を伝えるものと見てよい。

素友の伝による憲海に関する記事については、誤解や誤った伝聞が含まれ、必ずしも信頼できるものではないが、憲海が赤津富永の半沢家の次男として生まれ、6歳のとき憲梁法印の弟子として安佐野の広伝寺に出家したとする伝承は、事実が発生した地域の記憶に基づくものであり、なおかつ数少ない憲海の出自に関する記述として貴重である。

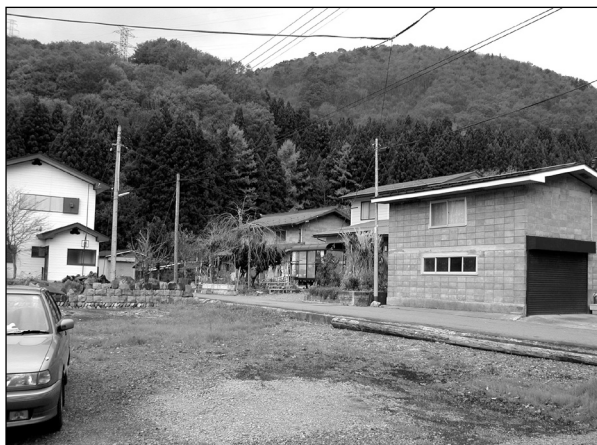


図 2-3 憲海生家跡

赤津村というのは、現在の福島県郡山市湖南町赤津のことで、猪苗代湖の南方、湖岸より2 kmばかり内陸に入ったところに位置する。会津藩では福良組に属した。赤津は、若松と白河を結ぶ幹線道であった白河街道の宿駅であり、若松までは原、赤井の宿を経て滝沢峠を越えて入る五里十二町の道である。富永は、この赤津本村から北北東に1 km弱離れた小名で、三方を低い山に囲まれ、南東に向かって開けた地勢をみせる。また、富永から湖岸までは1 km余り、そこには湖上運輸の重要な湊として機能した秋山河岸が控えていた。赤津は湖南における交通の要地の一つであった。

憲海の生家とされる半沢家は、寛政2年(1790)越後国西蒲原郡吉田富永から当地に移住し開村した九軒の農家の一つと考えられている¹⁷。すでに半沢本家は絶えており、近年

まで存在した生家も跡地を遺すのみだが、幸い分家はその住宅跡の傍らに現在も屋敷を構えて血脈を伝えており、少し離れた山麓にある半沢家の墓所を守っている。

半沢家の墓碑によれば、半沢家は初代以後代々定右衛門を名乗った。ただし、父の名が伝承の通り吉次郎あるいは定次郎であったかは定かではない。兄には14歳離れた吉蔵（二代目定右衛門）がおり、母は憲海の生後まもなく亡くなっているため、次男という憲海に他の男兄弟はなかったようである。憲海は母の顔を知らなかった。姉がいたかどうかは定かではなく、幼名を伝えるものもない。現在の半沢家には、憲海との関わりを伝えるものとしてわずかに《稻荷明神像》版木が遺されている。これは田村宗立旧蔵粉本の中に同じ墨摺¹⁸が含まれているもので、憲海の下絵をもとにした版面を、後に復刻したと思われる版である。

従って、憲海と半沢家の関わりを裏付ける唯一の資料といえるのは、同じ赤津集落内の臨濟宗長福寺に所蔵される《釈迦十六善神図》¹⁹の旧箱蓋裏墨書である。

この《釈迦十六善神図》には「安政二年乙卯正月吉日 王城中眞六角堂 能満院大願弟子皆了雲道彩色之」と金泥書がなされている。能満院粉本中にも、参考にされたと思われる粉本²⁰が遺されており、款記のとおり大願すなわち憲海と皆了及び雲道らによる能満院工房作とみてよい。その旧箱の蓋裏墨書に「安政二卯年／善神一幅自畫／京六角堂／能満院大願／寄附之／出所富永定右エ門／二男」とある。憲海による寄付と見て間違いなく、憲海を赤津富永出身とする伝が確認できる唯一の資料となる。

一向宗が大きな力を持つ越後から移住した富永集落では、越後から阿弥陀如来を遷座し、集落に安置するほど、強い信心を持っていた。この時建立されたのが、現在も富永集落に遺る富永阿弥陀堂である。憲海の信仰の出発点は、この定右衛門家の信心であったと考えてよい。ただ、寺請制度のもとでは、檀那寺が必要であったため、富永集落の多くは、赤津にある真言宗蓮蔵寺の檀家となり、半沢家は同じ赤津の臨濟宗長福寺の檀家となったという。憲海と長福寺の関わりはここに由来することになる。

長福寺には、嘉永7年（1854）に憲海が仲立ちとなって、会津異三郷から当寺に寄進された黄檗版「大般若経」600巻がある²¹。この経を以て行う大般若経転読会の本尊として憲海が寄進したのが先の《釈迦十六善神図》と考えてよいだろう。その外箱に出自が記されているのも、生家が檀家であったことから理解される。後にも触れるが、憲海は大般若経には因縁があり、この蓋裏墨書は、憲海の出自を示すばかりか、その宗教活動の実際を伝える貴重なものといえる。

『安積郡赤津邨分限帳』によれば²²、天保9年（1838）憲海の甥にあたる三代定右衛門が会津藩より袴御免の役を得ている。そこには、年代不詳ながら苗字を許されたことも記されているので、半沢という苗字が使用されるようになったのはそう古いことではない。半沢家の墓碑において、初代のものには半沢の苗字を使用しておらず、安政6年（1859）になくなった二代定右衛門の墓碑から認めることができるため、天保9年の袴御免を受けて以後、半沢の苗字を名乗る機会が生まれたと考えると問題ない。

ただここに疑問がある。半沢という苗字がもともと郷里越後で使用していたものか、会津において初めて使用されたものかという問題である。江戸時代でも農民が苗字を持つ例が多いことはすでによく知られている²³。半沢家にあっても、越後在住期以前より苗字を持っていたと考えるほうが現実的である。

このあたりを伝える記録はないのだが、半沢という苗字は、武蔵国に本幹を持つ榛沢に由来する苗字²⁴で、越後には極めて縁の薄いものである。一方、地理的歴史的なつながりから、榛沢など同系の苗字は関東から東北南部にひろがっており、宮城、福島あたりではとくに、半沢、半澤の集中が見られる。従って、富永の半沢家についても、与えられたか、自ら進んで選んだかはわからないが、地域への親和度を高めるために、苗字公称を許されたとき、新たに選びとった可能性があると考えている。定右衛門の身近なところでは、秋山河岸の船問屋に半澤家があった²⁵。

半沢姓にこだわり、このような詮索を加えるにはもちろん理由がある。憲海の弟子田村宗立は、明治13年（1880）に開校した京都府画学校の画学校出仕となっているが、そのとき提出した履歴書に、師の名を「大林無言号大願亦林岳」と記したことが伝えられている²⁶からである。国民皆姓が義務付けられたのは、憲海没後の明治8年（1875）だったから、憲海自身が俗姓を名乗る機会はなかった。また、彼の生家が半沢を名乗るのは、彼が出家してかなり後のことであり、もし、定右衛門家が苗字を改めたものであったならば、憲海自身が半沢の苗字を語ることはなかったはずである。

すでに苗字公称を許されていた時期にあたる「十六善神図」旧箱蓋裏墨書においても、定右衛門としか記されておらず、少なくとも憲海が生家の半沢姓を意識していなかったことは、認めなければならないだろう。従って、憲海の身近にいた宗立がその師名を大林と記すには、何らかの根拠があったと考えなければならない²⁷。つまり弟子の宗立に出自の物語をする際、そのかつての俗姓を漏らすことがあり、それを記したのではないかと考えている。

こうした憶説を今少し支持してくれるのは、憲海の弟子憲里が明治以後やはり大林という姓を用いたという、坂井栄信の記事²⁸である。明治8年(1875)になって平民苗字必稱義務令により僧侶も含めて、苗字が必要になったとき、憲里の選んだ苗字が大林だった。憲里はこれを血縁のある小林家から改めたと語ったというが、実際には父とも慕った亡き師の俗姓をとったと考えるほうが理解しやすい。ただ、現実の養子となったわけでもなく、これを師の姓と言うのは後ろめたさがあったのだろう。半沢家には旧苗字大林があり、憲海の俗姓を大林と考えることで、これらを説明することができる。

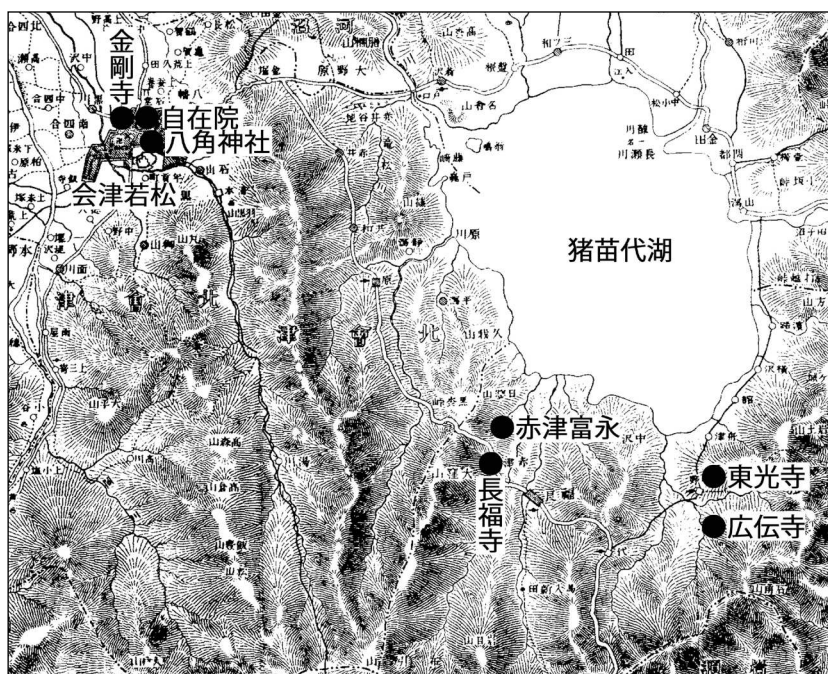


図 2-4 会津地方憲海関係地図

赤津という地名からもわかるように、猪苗代湖に面したこの村域の北側は常夏川の河口に開けた低湿な地域である(図2-4)。現在富永集落の前に広がる水田は、この低湿な環境を利用した新田と考えられる。先の「安積郡赤津邨分限帳」によれば、三代定右衛門の時代、米十五石七斗七升五合の耕作をしており、六百本の杉林を持つ半沢家は、集落における有力者の一人であった。入植以来の厳しい新田開発ではあったと思われるが、三代定右衛門の資産をみれば、その努力は十分に成果をあげている。裨御免を受けたのも経済力を背景としたものであったと考えるのが合理的である。従って、労働力は不足こそすれ、余ることはなかった。伝承にあるとおり、憲海が幼少より見せた才気が、周囲をして出家の道に導かざるを得ないものであったことは十分理解される。ただ、憲海が6歳にして出家したと伝えられる理由のひとつには、母の早世も影響したのではないかと考える。

このように憲海の出自について考察すると、彼が赤津富永の百姓定右衛門家の次男であることは、まず誤りのないところである。ただ、憲海の家出当時、半沢という苗字を使用していた可能性は低いと考えるので、半沢家の出とは言い難い。未だ確証は得られないが、憲海生家が本来使用していた苗字として最も可能性があるのは大林ではないかと考えている。

長谷寺に残る『交衆帳 従享和三年（至）文化十年』（付表 D-1）に文化 8 年（1811）の記録として「初入 同（十月朔日） 奥州二本松領安積郡安佐野村廣傳寺弟子 廓然房 憲海 主坊 京音 堯智」とあり、広伝寺の出身であることが記されている²⁹。そして、憲海という法諱とともに、廓然という字が記されており、彼が林岳以前に廓然と称したことがわかる。伝承にある広伝寺での出家が確認できる貴重な記録である。



図 2-5 広伝寺

安慶山広伝寺（図 2-5）は、古くは明星山無量庵と称した。開基は地頭の佐藤能登守、元亀 2 年（1572）に勧請した春日神社の別当とされたところから、永禄年間（1558-69）の草創と考えられている³⁰。天正 3 年（1575）この無量庵が焼失したため、天正 15 年（1587）、五世宥山の時、現在地に移転し改名したとされる。元和 6 年（1620）の火事により本堂を失い、天和 2 年（1682）中興一世宥長がようやく再建したものの、これも弘化 3 年（1846）に焼失したため、嘉永元年（1848）に再建したのが現在の本堂である。

広伝寺には、正徳 3 年（1713）5 月 20 日、江戸弥勒寺の秀慶より広伝寺の中興二世宥法に与えられた報恩院流定濟方の血脈及び印信などの文書が伝えられている³¹。秀慶（1653-1720）は、長谷寺で修学した後、江戸弥勒寺に入り（在住 1707-1716）、その後長谷寺に戻り、18 代能化（在職 1716-1720）を務め、入寂した僧なので、広伝寺は早くから豊山との繋がりが強かったと思われる。現在の広伝寺は真言宗豊山派長谷寺を本寺としているがこれは、明治になって以後のことである。文書には寺の火災と文書焼失のこと、秀

慶以前から弥勒寺と関わりのあることが記されており、元和の火災で失ったものの重さを伝えると共に、宥長の代には弥勒寺の末となっていたことを推測させる。

憲海の師とされる憲梁の事跡については、不明な点が多い。生年は、広伝寺の《咒百万遍日課塔》碑銘³²から宝暦3年(1753)とわかるが、広伝寺に遺る憲梁墓碑に年紀が確認できず、寂年は定かではない。可能性として、会津領内中地の東光寺の記録³³に見る、憲梁に関わる最後の年紀である文政11年(1828)を遷化の年と考えておく。この年憲梁は76歳である。東光寺の記録からは、同寺に住持ののち広伝寺に隠居したようにも見えるが、二つの寺の記録や碑銘を見る限り、むしろ両寺を兼帯していたと見るべきだろう³⁴。



図 2-6 東光寺

憲梁が住持となったとされるもう一つの寺、小倉山東光寺(図 2-6)は、会津藩領内中地にある。この寺は、中地大仏として知られる阿弥陀堂の別当として建立された草庵を濫觴とする。阿弥陀堂は、伝説に天喜元年(1053)八幡太郎義家が戦勝祈願のために建立したとの伝があり、3km 東方の山中にあったものを現在地に移転したというが、現在残る丈六仏は鎌倉後期のものと考えられているので、伝承に不明な部分があるのは否めない。寺名は、現境内の近くにあった小倉城の東に位置することに由来したものらしく、16世紀後半に小倉城を治めた伊藤氏特に伊藤盛恒との関わりが深いと思われる。この寺が弥勒寺末となったのは、元禄2年(1689)とされるので、広伝寺とほぼ同じ頃と考えてよい³⁵。

広伝寺のある安佐野は、もともと会津領であったが、寛永20年(1643)から天保4年(1833)までの90年間、二本松領に編入されていた。そのため、憲海の生まれた頃は、中地川に沿って会津藩領にくさびのように食い込んだ奇妙な境界を作っていたという。広伝寺から東光寺までは1km余りの距離しかなく、中地川にかかる橋が藩領の境界となっていた。よく似た由緒を持ち、地理的にも近く、共に弥勒寺末であったところから、両者を兼帯する僧

がいたとして疑問はない。

東光寺に所蔵される「大般若経経箱」の箱裏には「奥州安積郡會津中地村／東光寺什物／大般若経六百軸／石井十右門／柏木甚右門／明和五子年中／箱寄進／石井茂兵衛／願志主憲海／惣箱再興／文化十一甲戌八月日／石井庄右門」という墨書がある³⁶。この憲海の名を明和5年(1768)の箱寄進の年紀に結びつけて解釈するか、文化11年(1814)の惣箱再興の年紀に結びつけて解釈するかによって、資料の意味は異なってくる。東光寺ではこれを明和の年紀との関わりでとらえており、経箱墨書の憲海を林岳とは別人と見ている。広伝寺側の資料である「三宝院流血脈」に「憲海－英雄－宥仙－密傳－憲梁」と憲海の師憲梁の四世前に同名の僧である憲海がいることから、そのように考えるのが合理的である³⁷。しかし、後述するとおり文化11年8月時、憲海は豊山を中下りしており、安佐野に戻っていたと思われるので、この惣箱再興に関わる可能性は否定できない。というのも、憲海が豊山に修学する頃、後の師となる鏝慶が豊山で曼荼羅の講義をしていた³⁸。鏝慶は大般若経勧進を行った実績があり³⁹、豊山で両者が出会ったとすれば、憲海が郷里で信仰されるこの經典に対し、特別の関心を見せたとしても不思議はないためである。ただ、憲海と東光寺との関わりはあくまで間接的なものだったし、16歳の沙弥が担うことのできる役割を想定することは難しく東光寺の解釈に従うのが妥当であろう⁴⁰。

慶長15年(1610)開基との伝承を持つ新義真言宗の寺弥勒寺は、江戸触頭四箇寺の一であり、その末寺である広伝寺も東光寺も、格院の寺格を持っている。弥勒寺は触頭の中で豊山担当とされたので、両寺と豊山の関わりは、江戸時代中期以後、明確になったと思われる。

広伝寺には、憲梁によって建立された文化10年(1813)《光明真言二百万遍供養塔》と、文政8年(1825)《咒百万遍日課塔》がある⁴¹。この時期憲梁が広伝寺の住持を務めていたと考えてよい。なおかつ、憲海の出所を広伝寺と伝える先の『交衆帳』の記事から考えて、憲海が出家した時点での広伝寺住職も憲梁と考えるのが妥当であり、憲梁が住職となったのは享和3年(1803)以前にまで遡る可能性があることになる。伝承のとおり、憲海が広伝寺の憲梁に師事したとする伝承に矛盾がないだけに、憲梁が広伝寺の住持を務めた期間はかなり長いものであったと考えざるを得ない。

格院である広伝寺は、当然ながら本寺弥勒寺によって住持が任命された。曖昧な措置があったとは考えにくいだが、憲梁が兼帯した実態は不明である。広伝寺文書の血脈によれば、憲梁は須賀川市稲にある東雲山赤城寺に関わる僧である可能性がある。また、今は確認す

る機会を持たないものの、憲梁が豊山に修学したことは間違いないであろう。ちなみに出所不明ながら「湖南村郷土史 中野郷土史考」が伝える、憲梁の人物像は「第九世を憲梁法印（俗に威張法印）という相貌魁偉氣宇稜々 嚴然胆大であって山の如く心小なるは秋毫に比するが如き人である。」⁴²というものである。

一向宗の信心を持つ家に生まれ、檀那寺を禅宗とする環境の中で、憲海が、わざわざ真言宗の寺に入れられることになったのは、憲海の資質によるものと考えざるを得なく、近郷において傑僧といわれた憲梁に託すべく判断されたのであろう。

「湖南村郷土史 中野郷土史考」には、鈴木素友の文章の抜き書きとして、安佐野時代の憲海に関する逸話を伝えているので再録しておく。

「十四才の時郡山如宝寺に大施餓鬼があった。法印憲梁は林岳を伴ってこれに随喜したが、一僧が大角塔婆をまたいで揮毫に懸命であったのを見た憲梁は、大徳であるが一面気骨のある老僧である。この有様を見るや大叱一声止めよと叫んで曰く、いやしくも万人が礼拝する塔婆を跨って書くとは何事ぞと止めさせ、それを削らせて白木のまま建てさせた。そして憲梁は吾弟子に書かしめよと林岳を前に出した。人々はその幼少であるのに驚いたが、憲梁は梯子を命じて数人をしてこれを掛けて、林岳に登らせて書かせた。林岳は表面と両側を一度で書き終えたが、その美事な出来栄えに観衆かたづをのんで驚いたという事である。」⁴³

この伝承を裏付ける資料はない。先の『交衆帳』に見るとおり、憲海は14歳の年すなわち文化8年（1811）10月に長谷寺に上っているので、事実なら、その直前の出来事であったことになる。沙門は基本的に20歳以上の出家者をいう。未だ14歳の憲海は一沙弥にすぎない。本山修学のために登山をする年齢としては、尚早とあってよい。沙弥憲海には、交衆に堪えるだけの学問を、実質として修めていなければならなかったはずである。従って、少なくとも彼の資質の高さは認めなければならない。誇張はあるのだろうが、この伝承に見るような逸話に近い事実があったとしても不思議はない。6歳で広伝寺に入ったことを裏付ける資料はないが、彼の学問の水準を推測すれば、伝承には十分現実味がある。

第3節 長谷寺交衆

先の『交衆帳』に見るとおり、憲海は文化8年（1811）14歳の年の10月、初めて畿内に入り、豊山勸学院に交衆している。「主坊 京音 堯智」とあるので、指導僧は堯智であ

り、京音寮に入った。二年の修学の後、文化10年（1813）10月28日一旦中下り⁴⁴しており、翌年11月に再び長谷寺に戻って居継している⁴⁵。このとき安佐野に帰ったと思われるが、明確な記録はない。

阿住が紹介する長谷寺の『座位帳』に見る憲海の記載は次のとおりである。

『文化八年冬座位帳』 文化8年（1811） （書-109）

堯智 奥州 廓然 紅葉

『文化十年春座位帳』 文化10年（1813） （書-111）

十月廿八日中下 堯智 奥州 廓然 紅葉

『文化十二年春座位帳』 文化12年（1815） （書-112）

堯智 奥州 廓然改名林岳 紅葉

『文化十二年冬座位帳』 文化12年（1815） （書-113）

堯智 奥州 林岳 紅片

『文政七年春座位帳』 文政7年（1824） （書-114）

鳳雲 奥州 申五月七日中下リ 林岳 楊柳

『天保四年春座位帳』 天保4年（1833） （書-115）

廿三年 最勝 林岳割座 白心

『座位帳』は春と冬に行われる報恩講における席次を示すもので、山内の僧侶の在籍状況を示すものとなる。報恩講は祖師に対する恩徳に報い感謝するために行われる法会であり、新義真言においては宗徒の必修としている。この法会が重視されるのは、そこに論議の場を設け問答を交わすことで宗祖覚鑿に報謝し、教学を重んじる宗団の立場を明らかにするためである。天保4年（1833）の春の報恩講に憲海は参加していないことが分かるので、春の報恩講前に長谷寺を発ち、会津に向かったことになる。

そして、先の座位帳に見る通り文化12年（1815）18歳の時、字を廓然から林岳へと改

名する⁴⁶。この時期もいまだ主僧は堯智である。この改名には、何者か師僧の存在を想定すべきだが不明である。いまだ20才には満たないものの、この改名が沙弥から正式な僧侶である沙門となったことを契機として行われた可能性は高い。

文化13年(1816)になると憲海は珠光院に随住しており、「金剛寺文書」「川島家文書」には、この時期の憲海の修学を伝える貴重な記録が遺されている。

『大疏第三重』 写本(5冊) 文化13年(1816/02_/18)

(第三冊奥書) 于時文化十三丙子春二月十八日於豐嶺珠光院随住之砌以快道公御本校写之了<梵字2字>憲海」于時文政十年丁亥秋七月四日於豐嶺方丈写之了/釈沙門榮山主」(書-098)

『論草談判 快道記』 写本(1冊) 文化13年(1816/05_/02)

(奥書) 文化十三丙子年仲夏五月初二日寓豐嶺珠光庵之砌以/快師御校記之本書写此一卷畢 奥州會陽釈沙門林岳憲海」文政九年丙戌年九月十有三日書写之畢會津沙門慈文榮弘」(書-099)

この二つの写本は、快道の所持本を沙門憲海が書写したものを、後人が書写したものである。両書とも報恩講における論議に関わる資料であり、会津の僧と覚しき栄山も栄弘も、憲海の写本を借覧書写したのである。克明に書写された写本は19才の憲海の修学の深さをうかがわせ、教相面の研究の進展を理解させる資料となっている。また、同年8月3日には、長谷寺月輪院において、院主より悉曇の伝授を受けたとされる。このとき書写した川島家文書『悉曇十不可大事』(書-001)にも「奥州會津釋沙門世壽拾九歳林岳憲海」と記しており、19才の憲海が沙門として、改めて学問を深める様子がうかがえる。

沙門としての自覚は、郷里においても促された。憲梁が兼帯していた広伝寺の欄間に「于時 口政元戊寅六月十五日 當寺現(住) 憲海代/細工 原村右京」という墨書があり⁴⁷、憲海が文政元年(1818)広伝寺の改修事業に関わったことがわかる。先にも触れたように、広伝寺の本堂は弘化3年(1846)に火災にあったが、嘉永元年(1848)の再建の際には、焼失を免れた部分が再利用されたい。憲海に関わった欄間は、天和2年(1682)に再建された本堂もしくはこれに付随する建築物の一部に使用されていたことになる。

文政元年(1818)の時、21歳の憲海は初交衆から7年を経ているものの、いまだ修学中

の身である。中下りした形跡がないことから、帰郷は短期間であったと思われる。広伝寺は弥勒寺末の格院であるため、その住持の資格として原則的には、20年の修学と本山における6年の在山が要求された、従って年齢としては40歳が基準となる⁴⁸。単なる地方の末寺門徒であるならともかく、格院ともなればそれほど破格の人事は信じがたく、憲海が正式に広伝寺の住職となっていたとは考えにくい。

例えば「金剛寺文書」のひとつである明治2年(1869)『分限帳』⁴⁹によれば、会津の役寺四箇寺の住持の年齢について、40歳代2人、50歳代1人、60歳代1人となっており、また、住持のいる本寺11箇寺の住持の年齢については、30歳代2人、40歳代3人、50歳代3人、60歳代以上3人であり、同じく格院11箇寺についても、30歳代以下3人、40歳代3人、50歳代3人、60歳代2人となっている。明治2年の時点においても、住持の資格は原則として守られていると考えられ、これを半世紀遡る時点を考えるとき、より曖昧に措置されていたとは考え難い。憲海の果たした役割は不明なのだが、欄間墨書が語るころは、憲海が住持の代理として、荘厳修復の差配にあたったことではなかったかと考える。版刻に繋がる彫刻技術と憲海との出会いはこのあたりから確認されるのである。

文政2年(1819)には会津からの初交衆である滋文・順祐・恵光の主坊となっている⁵⁰から、勸学院内においてもその役割が進展していることが分かる。しかし、少し行動の自由が生まれるこの頃から憲海の活動には変化が見られるようになる。

文政3年(1820)2月20日慈光寺において鳳寛鑊慶より報恩院流の伝法許可灌頂を受けて阿闍梨となり⁵¹、独自の道を歩みはじめるようになる。しばしば豊山を離れて他山に赴き、凶像経疏の書写を行うようになるのである。報恩院流は三宝院流憲深方のことで、東密三十六流の一である。報恩院開祖の憲深(1192-1263)を流祖とし、小野方の主流である三宝院流の嫡流となり新義古義ともによく行われた法流である⁵²。本願方とあるのは伝法院流本願方のことで覚鑊の弟子兼海(1107-1155)を流祖とする。

この時鑊慶から憲海に与えられた文書が「智山書庫」に納められている。この他憲海が文政10年(1827)に受けた伝法の記録が智山書庫にあり、憲海が受けた伝法の一部がわかるので併せて紹介する。広沢方の西院流を深融及び龍肝(c.1777-1838)より受けている。

『伝法灌頂諸作法 幸心』

写本(1冊)

文政3年(1820/02_/20)

(奥書) 右諸加持五枚折紙文政三庚辰年於河州髮切山慈光律寺伝受之砌奉書写之了無言藏」(書-014)

『伝法許可灌頂印信』 原本（2紙） 文政3年（1820/02_/20）
伝燈大阿闍梨苾芻鑠慶→憲海 文政三年（歳次庚辰）二月二十日丙午（尾宿日曜）於
慈光律寺 （書-116）

『本願方 印信 血脈』 原本（2紙） 文政10年（1827/03_/11）
（印信）阿闍梨前法務権僧正法印大和尚位禅忍→阿闍梨憲海 文政十年歳次丁亥三月
十一日
（血脈）大日如来→阿闍梨憲海 （書-117）

『西院流大事並血脈』 原本（2紙） 文政10年（1827/03_/23）
深融→憲海 文政十年三月二十三日 （書-118）

『西院流大事』 原本（1紙） 文政10年（1827/03_/23）
深融→憲海 文政十年三月二十三日 （書-119）

『伝法許可灌頂紹書血脈』 原本（3紙） 文政10年（1827/03_/30）
大阿闍梨僧正法印大和尚位淳覚→法印憲海 文政十年（歳次丁亥）三月晦日乙巳水曜
畢宿於醍醐山報恩院 （書-120）

『西院流大事印信並血脈』 原本（2紙） 文政10年（1827/08_/26）
大阿闍梨法印権大僧都龍肝→憲海 文政十年八月二六日乙亥火曜尾宿授与 （書-121）

憲海が仏教図像の書写を積極的に行うのは、文政3年（1820）の鑠慶からの受法以後のことである。同年4月に慈光寺において《童子経曼荼羅図》[1146]を写したものが、現存する憲海の図像収集の最も早い作例である。この年憲海23才であり、真言僧としての学修を着実に重ねる旁ら行っていることがわかる。

同時代の豊山の学僧として知られる海如（1834-1873）については、伝授の記録がかなり詳細に伝えられている⁵³、これを参考にするまでもなく、当時の豊山において諸流遍学は当然のように行われていたから、憲海においても記録をとどめていない伝授がさらにあつ

たとえるべきである。文政10年（1827）8月に豊山方丈にて安祥寺流伝授に用いる受者座である《灌頂受者座図》[1336]の書写を行い、入洛後の嘉永4年（1851）6月に「安流八字文殊念誦法要」（書-051）が能満院で模写されていることを見ても、安祥寺流の伝授についてもすでに受けていたと考えるべきである。

また、憲海が亀福院を去り入洛した頃、勸修寺流の作法を書写している。

『勸流息災護摩次第』

写本（1冊）

嘉永2年（1849/04_/19）

（奥書）嘉永二年己酉卯月十九日梅尾山経庫之本 東第十二箱 方便智院朱印右表紙
御修復依令奉修補了因之早々写得之了 無言藏皇都山王寺寓中」（書-028）

『勸流伝法灌頂三卷式全』

写本（1冊）

嘉永2年（1849/08_/25）

（奥書）嘉永二年己酉八月二十五日於皇都室町通高辻上ル山王町書写了 無言藏」
（書-017）

この二つの勸修寺流の写本は山王寺で写されているが、奥書に記されているとおり高山寺の蔵書からの書写である⁵⁴。書写の理由はさまざまに考えられるが、過去の伝授の存在を背景として収集されたと考えなければ、その必要性が理解できない。

憲海自身が記した学法の記録は遺されておらず、彼の受法の全貌を確認するすべはないが、ここで重要なことは、彼が正法律に進具する以前に、真言僧としての受法を重ね、学匠としての存在を確立していたことである。

また、文政11年（1828）の書写にかかる『梅尾山伝授次第』（書-072）の存在をみれば、高山寺の慧友僧護（1775-1853）からも伝授のあったことが推測され、正法律と深く関わる僧護との交わりも疎かなものではなかった。憲海が伝授を受けた鑊慶も、慈雲の弟子であったから、正法律に関わる学僧との交わりが、彼の学問の形成に大きな影響を与えたことは間違いない。長谷寺在山時の憲海の修学については、他の交衆僧と明らかに異なる視点が働いていた。

一方で憲海は阿闍梨として、授法することもあった。長谷寺交衆中、憲海が授法を行った例がある。憲海は悉曇研究に専心した菅生寺において淳如憲暢という弟子を伴っている。多くの戒律で行動を制約される律僧には、随僧の存在が一般の僧以上に重要な役割を担っていた。黙住に進具した直後であることを考えると、この僧がそうした役目を果たしてい

た可能性がある。憲海にちなむ法諱を得た僧と思われるが、憲海が亀福院へ出立した以後、両者の交渉を示す資料はない。能満院粉本の中には、この憲暢の書写によるとみられる粉本が2点含まれる⁵⁵。達筆とはいえないが、的確な描写をみせており、憲海が弟子に図像書写を行わせる、早い例を示している。

菅生寺で憲海が憲如に与えたのは『十八道念誦梵本』（書-018）『十八道念誦梵本行法真言集』（書-019）である。どちらも空海の著作といわれ、この十八道法というのは、密教における重要な修行である四度加行の一である。四度加行の制度は空海が定めたとも伝えられ、伝法灌頂を受けるものは、十八道、金剛界法、胎蔵法、護摩法の四つの修法を修めなければならなかった。憲海の写本にはこの四つの修法に関わる資料が少なからず含まれており、憲海も他の阿闍梨同様、こうした修法を行っていたことを示している。憲海旧蔵書に含まれる両部曼荼羅関連の資料の多くは真言や念誦に触れており、伝授における金剛界法、胎蔵法に関わるものとみられる。

憲海は天保2-3年（1831-32）頃、海如に報恩院流の伝授を行った。長谷寺時代、求められれば状況の許す限り阿闍梨としての務めを果たしていたと思われる。また、『不動護摩私記』（書-027）には、「於羽州永居郷亀岡大聖寺伝授砌持参本無之故書写之了」と墨書があつて、亀福院時代に、遙々羽州にまで伝授のために赴いた記録がある。憲海の学殖からすれば、地方において、遠方からの伝授を請われて不思議はない。さらに亀福院や能満院においては住持を務めていたのだから、弟子に対する授戒、伝授は当然行われたと考えなければならない。幼少の土岐法竜（1854-1923）が晩年の憲海により剃度を受けたことも伝えられている⁵⁶。憲海の授法は、積極的に行つたものかは不明だが、長谷寺時代、亀福院時代、能満院時代を通じ、機会に臨んで行われていた。憲海旧蔵書中に、伝授にかかわる口訣や作法次第が少なからず見受けられるのは、彼の日常を伝える資料でもある。

長谷寺で修学を続ける憲海は、慈光寺における鏤慶からの伝授を出発点として、精力的な畿内巡歴を開始する。智山書庫蔵書あるいは能満院粉本の奥書款記などを見れば、書写がさまざまな場所で行われていることがわかる。これは憲海が、長谷寺交衆中から、豊山における所化の務めと平行して、独自の研究態度を持っていた証左となっており、その地理を時系列で整理したものが「表 2-1 憲海長谷寺交衆期諸山巡歴一覧（文化12年～天保3年）」である。所化としての勤めのある豊山からの交通に支障のない範囲にとどまる限界はあるものの、その巡歴先が、豊山派のみならず、智山派や古義真言の寺院に及んでおり、律寺や修験系寺院が含まれている点が興味深い。この研鑽の中、興味深い出来事として公

表 2-1 憲海長谷寺交衆期諸山巡歴一覽(文化12年～天保3年)

年号	時期	寺院	所在地	典拠*	備考
文化12	1815				林岳憲海と改名。恐らくこのころ沙門となる。
文化13	1816				8月: 悉曇の伝授あり(於長谷寺月輪院)
文化14	1817				
文政元	1818				
文政2	1819				
文政3	1820	2月・4月・6月 慈光寺(正法律)	大阪府東大阪市	智・宗	2月: 鏝慶により報恩院流「伝法許可勅頂印信」を受ける(於慈光寺)。
文政4	1821				
文政5	1822	1月 竹林寺(不詳)	奈良県桜井市	宗	
		6月 仏隆寺(新義)	奈良県宇陀市榛原区	宗	
		8月 高貴寺(正法律)	大阪府南河内郡河南町	智・宗	
文政6	1823	9月 智積院遍照院(新義智山)	京都府京都市東山区	宗	
		12月 智積院(新義智山)	京都府京都市東山区	智	
文政7	1824	1月 内裏紫宸殿(後七日御修法)	京都府京都市上京区	金	
		3月 高野山如意輪寺(古義)	和歌山県伊都郡高野町	智	3月: 弘栄に進流声明を学ぶ(於高野山南室院)。
文政8	1825				12月: 神祇灌頂志願の表明あり(場所不明)。
文政9	1826	7月 久修恩院(真言律)	大阪府枚方市楠葉	宗	
		9月 醍醐寺三宝院(古義)	京都府京都市伏見区	宗	
		醍醐寺遍智院(古義)	京都府京都市伏見区	宗	
		智積院(新義智山)	京都府京都市東山区	宗	
文政10	1827	3月 醍醐寺三宝院(古義)	京都府京都市伏見区	智	3月: 禅忍より伝法院流兼海方「印信血脈」を受ける。 3月: 深融より「西院流大事並血脈」を受ける。 3月: 淳覚より報恩院流「伝法許可灌頂紹書血脈」を受ける(於醍醐寺報恩院)。
		醍醐寺報恩院(古義)	京都府京都市伏見区	智	
		5月 慈光寺(正法律)	大阪府東大阪市	宗	
		6月 仁和寺(古義)	京都府京都市右京区	宗	
		高山寺(古義)	京都府京都市右京区	宗	
		閏6月 仁和寺心蓮院(古義)	京都府京都市右京区	智	
		高山寺(古義)	京都府京都市右京区	宗	
		7月 平等心院(真言律)	京都府京都市右京区	宗	
		8月 仁和寺心蓮院(古義)	京都府京都市右京区	宗	8月: 龍肝より「西院流大事印信并血脈」を受ける。
		9月 高山寺十無尽院(古義)	京都府京都市右京区	宗	9月: 僧護より悉曇伝授を受ける。(於高山寺十無尽院)。
		10月 高貴寺(正法律)	大阪府南河内郡河南町	宗	
		12月 与喜寺(新義豊山)	奈良県桜井市	宗	
文政11	1828	7月 高山寺十無尽院(古義)	京都府京都市右京区	智	7月: 僧護より華嚴の作法を学ぶ(於高山寺十無尽院)。
		8月 仁和寺(古義)	京都府京都市右京区	宗	
		高山寺(古義)	京都府京都市右京区	智	
文政12	1829				1月: 長谷寺版版本完成。
		5月 長久寺(不詳)	不明	宗	
		6月 高山寺(古義)	京都府京都市右京区	宗	
		9月 安楽寿院明照院(新義)	京都府京都市伏見区	智・宗	
		12月 吉野山瑠璃光院(不詳)	奈良県吉野郡吉野町	宗	
天保元	1830	6月 菅生寺(古義)	奈良県吉野郡吉野町	智	
天保2	1831	4月 菅生寺(古義)	奈良県吉野郡吉野町	智	
		7月 高貴寺(正法律)	大阪府南河内郡河南町	智	
		11月 菅生寺(古義)	奈良県吉野郡吉野町	大	
天保3	1832	3月 高貴寺(正法律)	大阪府南河内郡河南町	智	3月: 黙住により具足戒を受ける(於高貴寺)。
		4月～6月 菅生寺(古義)	奈良県吉野郡吉野町	智	6月: 『梵学秘要篇』を著す。
		8月 高野山光勝院(古義)	和歌山県伊都郡高野町	宗	

*智=智山書庫所蔵憲海旧蔵書。宗=田村宗立旧蔵仏画粉本。大=大正新修大蔵經。金=会津金剛寺文書

務ではあるが、文政7年（1824）宮中紫宸殿における御七日御修法に憲海も参加しており、空海請来の法具などを閲覧していることがある。

そして、文政5年（1822）7月頃から、字の林岳とは別に無言あるいは無言道という号を使用しはじめる⁵⁷。この号を用いはじめた経緯に関する資料はなく、長谷寺の座位帳を見れば、天保4年（1833）まで林岳の字を使用している⁵⁸。公的には林岳を用いて、ながく併用期間が続いたようである。

文政7年（1824）5月、憲海は中下りし、翌年居継している⁵⁹。この間、憲梁の《咒百遍日課塔》が建立されており、師憲梁に助力するため郷里に戻った可能性がある。実は、文化10年（1813）の中下りも、憲梁建立の《光明真言二百万遍供養塔》刻銘年紀の直後にあたる。実際の碑の建立は憲海の帰国後行われた可能性もあるので、これも文政7年中下りに同じく、師憲梁に助力するための帰郷であったのかもしれない。

広伝寺には、文政10年（1827）夏に豊山において龍肝が開版した紙本墨摺に著彩を加えた《涅槃図》一幅がある⁶⁰。憲海は文政10年龍肝から西院流の伝授⁶¹を受けているので、龍肝は師となる。軸の由来は定かではないが、先に記したように憲梁の遷化を文政11年（1828）とするならば、憲海が師の供養のため、前年に龍肝が開版した墨摺に著彩して納めたものと見ることができよう。その後憲海が広伝寺に戻ることは、ほとんどなかったらしく、特に記すべき記録は見えない。ただ、伝承として、広伝寺が別当を務めた安佐野の春日神社に文久三年（1863）憲海が寄進した《春日明神神号》一軸があったという記事⁶²があるので、憲海がこの地と無縁となったわけではない。

憲海が会津八角神社別当亀福院の住持となった経緯については、不明な点が多い。そもそも、憲海が望んで移ったか、請われて移ったかが不明であり、なぜ亀福院なのかという疑問もある。この時の憲海の転身は、大きな決断だったためである。

天保3年（1832）時、35歳の憲海は豊山在山22年を数えていた。豊山での席次は在山年数に応じる。おおむね在山20年で後側に、25年で前側（菩提院結衆）に、30年で集議になるという⁶³。憲海の席次は菩提院結衆がすぐ間近な位置であり、このまま在山を続ければ、数年をして菩提院結衆となることができたのである。菩提院結衆とは10名の集議を含む30人で構成されており、豊山の諸決議を行う機関であり、宗団の幹部である。集議ともなれば、移転寺住職となる可能性を持っており、これは、豊山における昇進の階梯であった。

一般的には、地方から登山する僧侶の場合、本山で6年の修学を終えれば、国元に帰り

修行を続けることで、やがて中本寺、格院、直末や常法談林所の住持となる道が生まれる⁶⁴。従って、不退住山を続ける憲海は、国元への帰山を望んでいたとは考えにくく、集議への道を歩んでいたことは間違いない。

しかし、憲海は天保3年（1829）3月河内高井田長英寺の黙住信正（1765-1832）により具足戒を受け、正法律を堅持して生きる道を選んだ。豊山を離れる決意をした理由はわからない。あえて推測を加えるならば、恐らくそれが勸学院における所化としての生活と両立しがたいものという認識があったと思われる。ただ、憲海の下山が、進具を契機としたものか、会津からの要請を契機としたものかは分からない。あるいはその両者が相呼応した可能性もある。

第4節 会津亀福院住持

天保4年（1833）春の座位帖に憲海（林岳）の記載がある⁶⁵ので、天保3年冬の報恩講までは勤めていた。このときの座位帖では憲海の指導僧は後に第49世豊山能化となる最勝通濟（1788-1872）となっている。憲海の下山は天保4年の早春であったと思われ、2月には江戸麻布不動院に滞在していることがわかる⁶⁶。このとき不動院で憲海は『作法集雑記』（書-077）を書写しており、粉本の制作としては下野国安国寺伝来《鑑真像》[1937]を写している。これはかつて戒壇が置かれたことで知られる下野薬師寺医王山不動院の流れを受ける寺の什宝ということになる。江戸麻布の五大山不動院は高野山真言宗の寺で、江戸開府以前からあるとされるが、特に憲海との接点が見出しにくい。この寺が僧侶の移動に際し、宿所のような役割を分担していた可能性がある。

憲海は空海が著したとされる『大悉曇章』（書-004）を、天保4年（1833）4月に自在院において授与しているため、少なくとも4月までに会津若松の亀福院に入っていることがわかる。憲海が度々会津と大和を往復する際どのような経路を取ったのかは不明である。ただ長福寺との関係などを見ると、赤津を通過する白河街道を用いたと考えるのが合理的であろう。

亀福院は、現在の会津若松市宮町にある八角神社（図2-7）の別当であった。『新編会津風土記』⁶⁷には「亀鶴山ト号ス、高野山南谷心南院ノ末寺真言宗ナリ、天正ノ頃阿闍梨宥繁ト云僧当社ノ別当トナリ再ヒ絶タルヲ継リ、初ハ宝寿院ト云何ノ頃ニカ今ノ号ニ改ム、又昔ハ亀を喜ニ作ルト云」とある。本尊は八角神社境内にある文殊堂本尊の文殊騎獅像で

あった。八角神社は大同2年(807)の創建を誇る古社で、伊邪那岐命・伊邪那美命を祀る。歴代藩主から尊崇を受けており、蒲生秀行(1583-1612)以来社領として五十石を与えられていた。経済的にはさほど豊かとはいえない寺だが、松平正容(1669-1731)から会津総鎮守の扁額を受けるほど重要な位置を占めた神社だから、その別当である亀福院には重さがあったことだろう。



図 2-7 八角神社

ここにも記されているように、亀福院は高野山真言宗の寺である。本山とされる高野山南谷の心南院は、学侶方に属した子院で、明治以後廃絶し、跡地は現在の増福院内にある。法流としては古義真言宗に属しているものの、憲海が住持となる以前にすでにこの寺が教相において新義の寺となっていたことをうかがわせる資料がある。

金剛寺文書中の明治2年(1869)『分限帳』⁶⁸を見ると、その時の自在院住持である啓伝の出自として「若松鳥居町前亀福院祥明弟子」とある。幕末期、憲海が住持を務めたことのある亀福院から、自在院に住持が移ること三代に及び、明治維新时期に亀福院が無住となった時は、自在院がこれを兼帯した縁がある⁶⁹。

萬海 (自在院住嘉永4年6月～嘉永5年9月)

宗諄 (自在院住嘉永5年10月～文久元年6月頃か?) 師弥勒寺宗運

啓伝 (自在院住文久元年6月28日～明治3年12月12日寂) 師亀福院祥明

すなわち亀福院からの最後の移転僧がこの啓伝である。

啓伝の師である祥明房快遵は、文化8年(1811)4月11日長谷寺に初交衆したという⁷⁰。憲海よりわずかに早く交衆しているため、文化12年(1815)冬の『座位帳』まで山内の座位は憲海の一つ上であった⁷¹。同郷でもあり、憲海と同じ学寮にいたこともあったから、当然知己であったと考えてよい。

祥明と憲海のいずれが年長であるのか確たる資料はない。ただ、祥明が憲海に先行して亀福院の住持となったことを推測させる資料はある。金剛寺文書中の、六角堂能満院憲海が弥勒寺に宛てた嘉永5年(1852)12月付書簡である⁷²。そこに萬海の隠居について所感が述べられている。これは嘉永4年(1851)に亀福院から自在院に移った萬海が翌年9月に隠居したことを受けての記述と思われる。田舎本寺である亀福院から常法談林所役寺である自在院への移転は栄転であったが、何かの問題があつて、わずか1年余で隠居せざるを得ない状況になったことが推測される。この用件は書簡の冒頭に記されており、憲海が書簡を送った第一の目的はこの一件に関するものと考えられる。その文面からは憲海が萬海の後見に立っていた状況をうかがわせ、憲海が亀福院を去った後住として、萬海が入った可能性がある。すると、天保4年(1833)以後の亀福院の住持は憲海－萬海－宗諄－啓伝－(無住)と続くことになり、祥明は憲海が住持となる前に亀福院に住したと考えるほかないのである。

また、憲海が亀福院に入ったのは天保4年(1833)の夏以前なので、祥明の弟子啓伝が亀福院に入るのは、当然これ以前でなければならない。啓伝は文政6年(1823)生まれ⁷³だから、11歳以前の出家となり、亀福院祥明の弟子となる可能性のある期間は極めて限られていることになる。一方、祥明が亀福院を去った時期は、憲海の入寺直前でなければならないから、祥明の後に憲海が入ったと考えるのが自然であろう。むしろ、憲海は祥明より後住を託された可能性が高いと考えている。

また金剛寺文書中に、僧栄弘が文政8年(1825)に亀福院において憲海の手になる写本を写したものが遺されている⁷⁴。このとき憲海は、中下りして広伝寺に帰っていたと思われる時期なので、祥明がすでに亀福院の住持となっていたとすれば、憲海の訪問を受けて不思議はない。中下りしている憲海は自在院における報恩講に参加するため若松に出ている可能性が高いからである。向学心に導かれ栄弘が、憲海の滞在する亀福院を尋ねた状況をうかがうことができる。祥明の亀福院入を文政8年以前と考えることにより、現存する文献の関係は理解しやすくなるのである。

金剛寺の『分限帳』によれば、高野山心南院の末寺である亀福院ではあるが、二つの末寺があり、本寺扱いとなっている。従つて、その住持たる資格としては原則として、20年以上の修学と6年以上の本山在山ということになる。恐らく一旦下山した祥明も、中下りの制度を利用して修学したに違いない。文政8年時、憲海は28歳である。祥明が比較的若くして住持となったとしても、30代後半から40歳台と考えるのが妥当であり⁷⁵、彼は憲

海より年長であったと考えなければならないだろう。

祥明の前住以前が果たして新義の僧であったかは分からない。ただ、憲海の亀福院入りに、豊山出身の祥明の存在が大きな影響を与えたことは間違いない。かねてより、正法律に強い関心を見せていた憲海は、年長の祥明にその胸中を明かすことがあったとして不思議はない。奇しくも、祥明に何らかの支障が生まれた時、憲海に後住を提案したと考えることは可能であろう。またそういう動きの中で憲海が自分の学問や信仰のありかたを模索したとも考えられる。憲海が亀福院に入ったのは36歳であり、40歳が基準となる住持の年齢としては若いのだが、特に看住として入ったという痕跡はない⁷⁶。不明な点もあるが、憲海が亀福院の住職として入ったことを裏付ける資料は多く、48歳で会津を離れる弘化2年(1845)まで、亀福院の住持を務めたことに疑問はない。

『分限帳』の記された明治2年(1869)には、亀福院は二つの末寺とともに無住となっており、自在院啓伝の兼帯となっていた。啓伝が移転した文久元年以後、無住となったのである。そして、亀福院が事実上の廃寺となるのは、この『分限帳』がまとめられた明治2年に発せられた神仏分離令によって、本尊の文殊菩薩騎獅像が自在院に、自在院の天満天神像が八角神社にそれぞれ遷座された時である⁷⁷。

亀福院に入った憲海は、その学殖と技芸を活かして、積極的に活動した。亀福院に遺された資料に、当時の憲海の活動を物語るものがある。

『大宝積經百二十卷真讀竟文書』 原本(1枚) 天保4年(1833/05_/27)

(墨書) 奉真讀大寶積經百二十卷/時天保四年癸巳從四月八日至/同五月二十七日五十箇日/未申二時/奉為高祖大師一千御遠忌報恩/謝德并為庄藺泰平五穀成就/御武運長久諸人快樂/奉廻向供養」小比丘無言藏」(書-122)

『大宝積經』 写本(3卷1冊) 天保5年(1834/04_/11)

(卷56奥書) 于時天保五甲午年卯月十一日奉写得之了 右五十五六兩卷以自在院藏經之本校書 無言藏」(書-081)

『大宝積經』は大乗仏教の頭教經典であり、自在院の蔵書を閲覽した際、読了の証として最終巻に添付した書付がある。空海千年忌にあたり報恩謝徳のために天保4年(1833)4月8日から5月27日の50日間で120巻を読了したことがわかる。長谷寺を離れた憲海

が、会津に於いて最初に足跡をあらわした資料である。自在院には一切経があり、常法談林所として教学の拠点となっていた。長谷寺で参加出来なかった報恩講に参加するため、自在院を訪れたと考えられる。同じく自在院に所蔵される『大悉曇章』（書-004）は同年4月に憲海が自在院の則貞に授与したものであり、この文書の内容を裏付けるものといえる。ちなみに、憲海の悉曇伝授は会津において支脈を広げており、先に示した『悉曇十不可大事』によれば憲海19歳時の写本を翌5年8月に山伏の観章が書写している。観章は会津若松一箕にあった本山派修験泉明院の山伏であり、この観章から嘉永5年（1852）に伝授を受けたのが本浄なのである。憲海が向学の者に惜しみなく伝授したことがわかるが、本浄が観章から伝授されたものが憲海から受けたものだとするならば、本浄が書写した『悉曇四重大事ノ口決』『悉曇四重大事』『悉曇十八章口決』といった悉曇伝授の証しとなる文書も憲海から受けたものかもしれない⁷⁸。

「智山書庫」には憲海旧蔵の『大宝積経』写本（書-081）が遺されており、翌天保5年（1834）4月にこの自在院蔵経を校書したことが記される。この中に収録される巻第55と56は『佛爲阿難説處胎會第十三』『佛説入胎藏會第十四』にあたり、いわゆる『入胎教』である。憲海が大宝積経を教養として読むことが目的ではなく、研究対象としていたことがわかる。また、憲海が亀福院において出版活動に関わったことも、次ぎの資料からうかがうことができる。

『方服歌讚儀』 刊本（1冊） 天保4年（1833/03_/00）

（刊記）右方服哥賛以印施志趣真實佛弟子常不離法衣／願遍照金剛尊像但三衣頭陀行三昧奉仰御本誓／正當一千歳御遠忌禮拜為報恩謝德聊發願敬白／天保四年癸巳三月吉祥日／汚道沙門弘賢／執筆沙門無言藏」（書-130）

『八角宮喜福院無言藏書刻 金剛壽命陀羅尼經』

刊本（1冊） 天保7年（1836/08_/00）

（刊記）日日受持此經者／宿縁業障忽消滅／無病患更増壽命／諸願圓滿皆言祥」○秘密高祖弘法大師和讚請中 印施」奥州會津總鎮守八角宮社中 喜福院現住／天保七丙申年八月吉辰 小比丘無言藏敬書」（墨印）會陽／森川昌茂／施經」（書-082）

『科注 佛遺教經 施印』 刊本（1冊） 天保12年（1841）

(刊記) 天保十二辛丑二月日 奉書寫 <梵字 5 字・無言藏>」(書-084)

『**両部讚草帋／初夜金剛界／後夜胎藏界**』 刊本(1冊) 天保13年(1842)

(刊記) 右両部讚草帋者灌頂會讚頭之／順次曼荼羅供等取捨通用法則／隨阿闍梨之所傳天保五年甲午／高祖大師一千年爲報恩集記畢／于時新義開山興教大師七百年／正當天保十三年壬寅夏安居中／書寫彫刻記 聲明業進流末葉無言藏」(書-021)

『方服歌讚儀』(書-130)は飲光の著書『方服歌讚』の解説書である。空海千年遠忌にあたり弘賢が開版したものとされるが、本書の刊行がどこで行われたのかは定かではない。2月にはまだ江戸にいた憲海だが、執筆した憲海が編集にも関わったと見るべきであり、会津入りに先行して制作された可能性もある。『金剛寿命陀羅尼經』(書-082・書-083)は、現在のところ亀福院で開版されたことが確認できる最も早いものである。本經は空海所縁の經典として延命法に用いられる。『遺教經』は、釈迦最後の説法をまとめた經で、持戒の重要性を説く。古く高辨が高山寺において本經を用いて『四座講式』による涅槃会を行ったことで知られる。後に天台宗の大報恩寺でこの經が読まれ、大報恩寺が智山末となったため智山に伝わるものとなった。自在院にはこの經の写本及び先行する刊本があり、憲海はこれらを参照して博士や注記を加えた読經の便と、本經を重視した禅家の注釈書による經典理解の便を兼備した本書を刊行した。憲海の戒律護持の姿勢がよくわかる事跡である⁷⁹。本書の刊行の翌年、覺鑊七百年遠忌にあたり『両部讚草帋／初夜金剛界／後夜胎藏界』(書-021)を刊行する。これは伝授に際し行われる金剛界法、胎藏法で用いられるもので、憲海の悉曇声明研究の成果が表れる⁸⁰。これについては後に述べる。この時期の憲海は、寺務と学修に専心していたと考えられ、悉曇や声明の研究を進めつつ、律僧として自らが生きる方向を模索していたものと考えられる。

亀福院には何人か弟子がいたことが考えられるが、その中で重要なのは憲里である。憲海のもとに越後から新しい弟子が来たのは、遅くとも天保10年(1839)頃と思われる。憲海に剃度を受けたまだ12歳の沙彌は法諱を憲里といい字を大成といった。憲里は、若くはあったが、画才に恵まれていたらしく、早くから憲海に絵の手ほどきを受けている。憲里については本章後節に詳述する。

憲海が、近くに住む萩原盤山(1772-1846)と交流するのも憲里が弟子となって以後と思われる。憲海はこの盤山との交流の中で、画技を深めていったことがうかがえる。盤山

の画系については不明な点もあるが、その作品を見る限り狩野派に連なる絵師と思われる⁸¹。ただ棚木家や加藤家といった狩野派に学んだ会津藩御用絵師の家系は、すでに無実となっており、盤山なども独自に画を学んだらしい。会津藩においては、財政上の問題もあり、御用絵師の制度はかなりゆるやかなもので、町絵師から登用することもあった。萩原盤山はこうした町絵師ながら藩の御用を与った絵師として大いにもてはやされたと伝えられる。

憲海は故郷会津において広伝寺の着色欄間制作に関わったこともあり、彫刻ばかりか着色についても知見があったと思われるし、長谷川家との接触や古画の模写など絵画に接する機会はあったものの、体系的に絵画教育を受けたことはなかったから、すぐ身近な場所で本格的な絵画制作の現場を見ることに、大いに触発されるところがあったと思われる。憲海は蕃山に対して先生と呼び⁸²、敬意を表している。

憲海にとって、亀福院での安定した日常を引退するという選択肢が、当初から想定されていたものか不明である。しかし、亀福院時代、憲海は他山の祖師像(《額足院某僧像》[2034])を描いており、絵仏師ではないのに絵事から離れていないところを考慮すれば、律僧としての生活を送る一方で、自らが果たすべき役割について、漠然とした未来像を描いていた可能性はある。すでに幾つか行ってきた出版事業にある程度の手応えを実感していたと考えてもよい。そうした憲海にひとつの決断をさせたのは、この憲里という弟子の存在であったと考える。憲里は絵事の才を見せ、憲海の宿願を共に果たすための協力者として憲海にとって得難い人材であった。もとより律僧の生活は多くの戒律を守るために制約が多く、随僧の存在は不可欠であり、憲海は憲里という同じ道を歩むことのできる弟子を得て、ようやく思い切った行動が可能となるのである。自身の本願を実現するための条件が整う中で、憲海は次第に亀福院を退くことを考えたものと推測する。

第5節 入洛から能満院へ

憲海が亀福院を去ったのは弘化2年(1845)である。このときの状況を物語るものはないが、以後憲海と豊山との関係がきわめて疎かになることから、憲海からの一方的な引退であったことは想像される。会津から憲里とともに江戸に向かった憲海は、7月から9月にかけて新義真言宗の役寺である江戸護持院に一旦立ち寄っている⁸³。

護持院を離れた後、京都に入るまで、憲海らがどのような行動をとっていたのかは不明

である。この間、特に図像経疏の書写を行った様子が見えないため、おそらく、律僧としての本分を堅持しての旅であったことは想像しやすい。すでに豊山との関係も薄れていたため、長谷寺に立ち寄ったかどうかはわからない。ただ、足がかりとなる拠点もままならない状態なのは確かだった。



図 2-8 山王寺跡（日吉神社）

憲海らの入洛が確認できるのは弘化4年（1845）6月である。京都に入るなり、師である僧護のいる高山寺に立ち寄っている。このとき僧護に命じられて《瑜祇三昧耶形図》[1223]を模している。この高山寺滞在は短く、まもなく洛中山王寺に仮寓の地を見つける。山王寺（図 2-8）というのは、京都市下京区室町通仏光寺下ルにあった山王神社の別当天台宗山王寺総持院のことで、かつては延暦寺の別院として、天台座主によって山王祭の宵宮行事が執行された場所といわれる⁸⁴。明治維新後廃寺となり、現在は境内も大部分が失われ、日吉神社が同地にひっそりと残るのみである。

天台寺院であるこの寺に憲海らが寄寓することになった経緯については不明である。律行は諸宗兼行うものであったから、宗派が異なるとはいえ、律僧たる憲海が寄寓する余地がないわけではない。ただそれでも何か契機は必要であったろう。ひとつの理由として考えられるのは、この山王寺境内のすぐ東側に、烏丸通に面する絵仏師の長谷川家があったことであろう。長谷川家は、桃山時代の絵師長谷川等伯の末裔である。この長谷川家の絵師等叔は、憲海の豊山修学時代に《長谷寺版両部曼荼羅》の原画を描いたことで知られるが、この時憲海が長谷川家と接触を持っていたことが推測されている。入洛後憲海らが長谷川家にも立ち寄った形跡があるのは、かつての憲海との交わりによるものである。自ら退いた豊山をたよることはなかったと考えられる。

憲海の山王寺での活動は弘化4年（1847）から嘉永3年（1850）ころまで続く。この時期は能満院の仏画工房を開く前の準備期間にあたり、憲海らは300枚を越す粉本を作り出

している。その中でも長谷川家の粉本を多数模写していることから、両者の深い交流を読み取ることができる。この長谷川家と憲海の関係については第7章に詳しく述べる。また、先にも触れたとおり、亀福院時代の天保11年(1840)に、憲海はその画技を生かして天台宗高僧の画像を描いたことがあった⁸⁵。この時の人脈が、あるいは天台寺院への仮寓に何らかの後援するところを得た可能性がある。

このとき、山王寺で長谷川本の模写にあたる一方で高山寺をも訪れて諸種の図像を写しており、どちらかといえば憲里が山王寺を守り、憲海が高山寺に赴くといった様子であったと思われる。5月には僧護の依頼により智積院所蔵本の《寛深像》[1828]を写している。これは山王寺で描いており借覧したものであろう。そしてその二日後に文政12年(1815)模写の《孔雀明王像》[204]について、僧護の命により、智積院において彩色の調査と原本との校合を行っている。6月になると憲海は高山寺に移ったらしく高山寺本の模写を開始する。《五髻文殊菩薩像》[405]そして8月に最澄請来の《普賢延命菩薩像》[470]を写し、空海請来の《不動明王像》[605]を写している。同月《僧形八幡神像》[1085]《法隆寺文房具図》[1305]、9月には空海筆という《虚空蔵菩薩像》[561]、《不動明王二童子像》[638]《不動明王像》[606]唐本の《勝敵毘沙門天像》[795]、11月には高辨護持本として著名な《仏眼仏母像》[23]を写している。

憲海は、豊山時代京都を訪れることはあったが、居住するのは初めてである。ましてや後ろ盾となる宗門の協力もなく、憲海は会津で決意した信仰の道を、弟子憲里と唯二人で、開拓しなければならなかった。とはいえ、この時憲海には憲里のほかにもうひとり弟子がいた。字を現光といい東国の出身らしいが、どのような経緯で憲海に資したかはわからない。現光については、全く伝記を欠く。憲海が会津亀福院を去って、畿内に入る際、関東より同行したらしい。嘉永元年の粉本に「沙弥現光」とあり、憲里とさほど年齢が変わらないことが推測される。ただ、その手になる粉本を見れば、かなり高い画技を持っていたことがわかる。現光に関わる粉本は約150点含まれており、弘化2年(1845)に江戸で模写したと思われる2枚を除けば、弘化4年(1847)から嘉永6年(1853)までの7年間の書写に限られている。しかもその6割は弘化4年(1847)から嘉永2年(1849)までの3年間で集中的に書写される。これは憲海らが山王寺に寄寓する時期であり、現光粉本の1/3は絵仏師長谷川家の粉本を写したものである。嘉永元年に高山寺において写された《普賢延命菩薩像》[470]には「無言蔵並資現光」とあり、現光は憲海の弟子となっていたことが確認される。

現光は、弘化2年(1845)の模写が江戸愛宕下金剛院と四ッ谷愛染院のものであることから、もともと関東に縁のある画僧ではなかったかと考えている。嘉永6年(1853)5月以後、その消息は不明で、亡くなった可能性もあるが、墓を伝えていないことからすれば、むしろ畿内を離れた可能性が高い。嘉永4年(1851)9月には山王寺を離れて三輪平等寺において模写を行い、嘉永5年(1852)3月は江戸浅草長楽寺の智浄から《地藏菩薩像》[495]の注文を受けたほか、佐渡宝蔵坊の憲堂からの依頼による絹本の《如意輪観音像》[344]を描き、翌6年5月には宇都宮延命寺文鏡の取次により《阿弥陀如来像》[86]の注文を受けるなど、独自の行動を採ると共に、かなり頻繁に東国からの依頼に応じている。これは現光の出自に関して関東に何らかの基盤があったことを推測させるが、確証につながるものは発見されていない。

そして現光は、憲海と憲里が能満院に移った後は、行動を別にしたと思われる、能満院に入った痕跡がない。現光が山王寺に仮寓していることが確認できるのは嘉永3年(1850)10月までである。憲海と憲里は嘉永4年(1851)4月までは山王寺に在るが、6月には能満院に移っている⁸⁶。このとき、現光は大和三輪に移っているため、能満院には入っていない。その後も、嘉永5年(1852)は3月中旬のみ、翌6年も4月末の年紀の粉本のみ遺るところから、他山を巡っていた可能性があるだろう。画技に優れ、その遺作から見る限り憲里よりやや年長ではなかったかと思われる。明治13年(1880)に建立された蓮光寺の《憲海墓塔》には「亡弟」として現光の名があるので、このころまでには亡くなっていたらしい。

こうして、入洛を果たした憲海の日常生活は大きく変化した。以前は学修のために行っていた図像経疏の書写が、日々の目的となったのである。仮寓の身ではあったが、京都に拠点を得て、憲海と憲里は早速温めていた構想を実行に移した。憲海は嘉永元年(1848)に印施千種の大願を発する(《勝敵毘沙門天像》[795])のである。憲海は立願以後、自ら大願と号するようになるが、しばらくは豊山時代から使用していた無言蔵という号と併用している。

この頃の憲海らの動きをうかがわせる資料が《孔雀明王像》[204]である。豊山時代の文政12年(1829)に長谷川等鶴の享和元年(1801)模本を写したもので、原本は智積院方丈のものとしている。それが、山王寺時代の嘉永元年(1848)に高山寺僧護から写しを制作するよう命じられ、智積院の原本彩色を校合し模本を制作しているのである。僧護との関わりの深さが理解されると同時に、憲海と後に住持となる頂法寺能満院の本山たる智積院

との関わりがうかがえる。嘉永元年（1848）は憲海が印施千種の大願を發した年だが、別の視点から見れば、能満院工房への道のりが開かれた年でもあった。

大願という号については、能満院に入る嘉永4年（1851）頃から本格的に使用しはじめたものと考えているが、天保3年（1832）の年紀のある「發願し奉る誓の文」に、「無言藏大願（卅五）」と記していることから、その使用を遡らせる可能性が提示されるが⁸⁷、この説については否定的にならざるを得ない。

まずこの写本そのものが安政6年（1859）に記され、出版を前提に作成された草稿であること。そして、「發願し奉る誓の文」が転写された文章であり、署名に改変が加えられている可能性があること。「能満院粉本」中の墨書であって、大願号と年紀に同筆で組み合わせられているもののうち、最も古いものが嘉永4年（1851）であり、天保3年とあまりに隔たりを見せること。しかもその間に確実な使用例がなく、連続性を欠くこと。また、「無言藏大願」という号を二重に重ねて書く署名が実際に資料の中で確認できるのが、墨摺木版に刻された二例しかなく、それらは嘉永元年以後に施印されたものであること。それから、智積院智山文庫の『十八道念誦梵本』（書-018）の奥書に「天保三年壬辰初夏中旬於龍門山修行寺蘭若令書写校合弟子淳如房憲暢授与之 小比丘無言藏」と記しており、同じ天保3年に修行寺（菅生寺）で記された記事に見える署名に必ずしも大願が使用されていないことを見れば、「發願し奉る誓の文」に見る、「無言藏大願」を、そのまま大願号の使用例とみなすことは困難である。

また、智山書庫にある『請雨秘決』（書-037）『請雨経龍王名字』（書-038）『清瀧肝脳神泉苑密』（書-036）には皆「無言藏大願」の署名があり、文政12年（1829）から同13年にかけて憲海が書写した請雨法関係文献であるが、安政2年（1855）の2月から3月にかけて再写されているところから、これも「無言藏大願」の名は安政再写時の記入と考えるのが合理的である。このように現存する資料を見る限りこの署名を用いる資料は、能満院開設後の版本またはその草稿本と考えられ、開版にのみ使用する号として「無言藏大願」を使用したものと考えべきである。

やがて嘉永4年（1851）、憲海はようやく頂法寺内能満院に移ることになる。すでに述べたとおり、頂法寺は天台宗であり、能満院は本山を智積院とする真言宗智山派の寺である。山王寺から能満院に移る経緯については全く記録がない。ただ、高山寺の僧護が何らかの重要な役割を果たした可能性がある。僧護は智山の出身であり京都に長く在住し、早くから学僧として聞こえていた。それに嘉永元年（1848）には智積院において伝法院流、保寿

院流の伝授を行うなど、智山との関わりは晩年に至るまで継続している。先にものべたように、僧護は一度ならず憲海に智山での画事を命じている。こうしたことが契機となって、智山僧からの作画依頼や、智山所蔵本の模写が行われており、智山本の模写に至っては、寺外である山王寺に借り受けて行うことが許されている。高齢の僧護が、志ある弟子憲海のため、智積院に諸種の配慮を求めた可能性が考えられる。



図 2-9 頂法寺（六角堂）

とはいえ、これは能満院が無壇無祿の寺で、寺を維持することすら困難な状況にあり、住持が得難いからこそ成立したものであろう。ちなみに、能満院を無壇無祿の貧寺とする伝承については、あまり明確なことが分かっていない。村磯栄俊が智積院の大仲財政について調査した内容を見ると、「六角能満寺」は安永6年（1777）に智積院大仲から100両の金を借用している⁸⁸。智積院の大仲は山内の学侶を指導監督するための組織だが、18世紀ころからその経営を助けるため出資金を募り、その金を元本として山内寺院に貸し付けて利息収入を得ていた。村磯は「主要な貸付先は、宗内の有力寺院である。現在の銀行と同じで、貧寺には融資しなかった。」と考えており、100両の融資を受ける「能満寺」は、当時決して貧寺とはみなされていなかった。やや遅れて大仲から200両の融資を受ける「六角愛染」はいうまでもなく頂法寺境内にあった愛染院のことで、「六角能満寺」が「六角能満院」の誤記であることは明白である。ちなみに10年返済の融資ながら天明5年（1788）及び寛政11年（1799）の貸付返済表に「六角能満寺」の名は見え、不良債権化している様子がうかがえ、この衰退が能満院を無住とする何がしかの理由を物語るようである。

僧院の最小単位が4人であることを考えれば、憲海は弟子を入れることに積極的であったと考えられる。嘉永6年（1853）に存在が確認できる憲能（皆了）は最初のひとりであったかもしれない。他に弟子がいたとしても、画事にかかわったのは当初この3名であった。やがて、安政3年（1856）には宗立が弟子となり、文久2年（1862）には憲伝が弟子

となった。憲海の能満院時代は少なくとも足かけ14年にわたる。憲海は、その信仰の具体的表現として印施千種を掲げたのである。

能満院に入ってから「王城中心六角堂能満院」の印が作られ、概ね能満院入寺以前に収集された粉本に捺された。これは所蔵印として機能したが、能満院時代に制作された粉本にはほとんど捺されていない。憲海たちは基本的に戒律を守る僧侶としての生活を重視したと考えられ、画像の収集はあくまで、その生活の中で可能な範囲にとどめられていたと思われる。遠方への訪問は決して多くない。弟子が増えた後はむしろ他山での収集を弟子達にまかせる傾向も見られる。

憲海の印施千種の立願は能満院に入って以後、ますます進展し、嘉永6年（1853）ころから大願の号のみを用いるようになっていく。憲海は文久元年（1861）仁和寺において『図像抄』『覚禅鈔』を模写する機会を得たとされる。その作業は、文久3年（1863）にまで及び、憲海が眼を痛める原因になったと伝えられるが、残念ながらこの憲海写本の行方は確認できない⁸⁹。

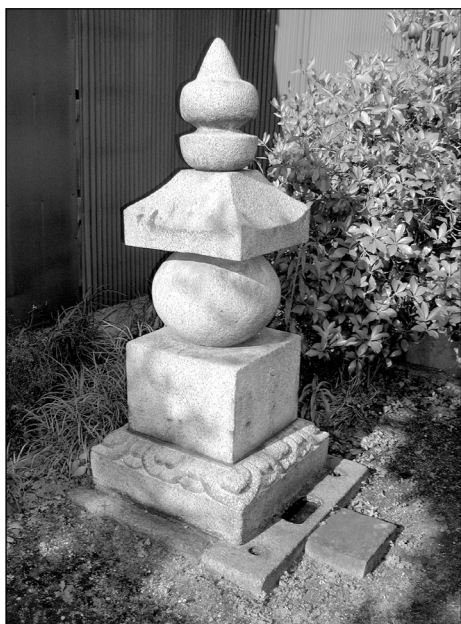


図 2-10 蓮光院憲海墓

六角堂能満院のありし日の姿を想定するなら、六角堂の西、本坊たる池坊の南西に小さな庫裡と本堂を構え、庫裡には授与所が構えられていたと考える。それは、小さな出版工房であり、書店でもあり、時に絵所ともなった。能満院は開版事業を民衆教化のための使命として行ったが、その基本として揺るがないものは僧としてのあるべき姿であった。開版事業においても、図像の収集においても苛烈な姿勢は見られず、律僧としての生活の中で、自分たちのできることを、またすべきことを黙々と倦むことなく継続していた。それは

高辨が語る「あるべきようわ」⁹⁰を実践する姿である。能満院は単なる工房や絵仏所とは異なるものであった。我々はともすれば、異常な行動や業績にのみ目を奪われがちであるが、憲海の興味深い生きざまは、僧として生きることを日常の中に実践しつつ、黙々と一代の中で多数の画像を収集し、開版によって民衆教化に役立てようと事業化した静的な生活の中にある。それは、覚鑿が行った無言行⁹¹の異なる方法の実践であったかもしれない。

元治元年（1864）7月19日におきた長州藩と京都守護職を中心とする幕府との武力衝突は、激しい戦闘となった。戦闘は長州側が敗北するが、長州勢は長州藩屋敷に火を放ち逃走、会津勢も長州藩士の隠れているとされた中立売御門付近の家屋を攻撃して炎上させた。これらの火災は広範囲に広がり21日朝にかけて「どんでん焼け」と呼ばれる大火となって、北は一条通から南は七条の東本願寺に至るまで洛中が焼亡した。市街中心にあった能満院もこの火災によって焼失している。この時、能満院には8人の資僧がいたと伝えられるが、ほとんど目が見えなくなっていた憲海を背負い、多くの版木などを残したまま、持ち出せるだけの書籍粉本を救い出すのがやっとのことだったと思われる。

憲海たちが、一時難を逃れたのが蓮光院⁹²であった。宗立の語るところによれば、このとき一旦は御室付近まで火勢を逃れてから、北向不動として知られるこの寺に移ったという。憲海が兼帯していたというのが仮寓の理由とするが⁹³、憲海はそのまま体に変調を来し、ついに9月3日この寺において遷化したのである。67歳であった。墓はそのまま蓮光院に仮埋葬され、明治13年（1880）6月、弟子の憲理・宗立・徳実・萬海・萬行らにより墓塔（図2-10）が建立された。墓塔は御影石製五輪塔で基礎からの高さは155cmある。地輪の四面に銘が彫られるが、風化が進んで読みにくいところがある。東国の僧が多いのは亀福院時代の資と考えられる。萬海は亀福院において憲海の後住となったと考えられる萬海と同一人であろう。

蓮光院憲海墓塔銘

（正面）南面

元治元甲子年／六角堂／能満院住／大願和尚／九月三日化」

（左側面）西面

遺弟／武州中仙道桶川宿宜下日出谷村／知足院住／萬海法印／同 鴻巣宿宜下細谷村
／明王院住／萬行法印」

（背面）北面

野州佐野並木村／安樂寺住／得實法印／當所蓮光院住／大成法印／王城住／宗立十方
／明治十三年辰六月吉日建立」

(右側面) 東面

亡弟／□□法師／□□法師／現光法師／皆了法師／雲道法師」

また、会津若松市金剛寺の過去帳⁹⁴に憲海の名が記されている。忌日は一日ずれている。

傳燈大阿闍梨権大僧都法印憲海大和尚<スミケシ>

字ハ林岳奥州之産中年之比會津城下住龜福院專學律

老テ移平安六角堂住能満院而今于皆元治元九月二日寂然卒ス

金剛寺には憲海の墓も位牌もない。この短いが要領よくまとめられた記述は、学僧の私的交流のあったことを伝えている。この交流が金剛寺文書に憲海関連文書が存在する理由である。

第6節 資僧憲里

憲里については、憲海同様に不明な点が多い。ただ、その一生の大半が憲海とともにあったことだけは間違いない。

これまで語られるところでは、その出身を越後国蒲原群瀧東村水沢新田（みさわしんでん）とし父を水野彦造とする⁹⁵が、これは誤りである。確かに地元では「彦造和尚」と称されたと伝えられるほど、水野家と関わりの深い憲里であるが、現在も幕末期と同じ場所に居住する水野家に伝わる記録⁹⁶及び、山辺習学のメモ⁹⁷から判断する限り、彼は水野家の人間ではない。坂井栄信の随筆⁹⁸においても、憲里は、《御室版両部曼荼羅》の制作後、郷里の家がすでに絶えていたため、姉のいる水野家に寄寓するところとなったとしている。

水野家の墓は同村横戸集落にある菩提寺浄土真宗長徳寺にある。憲里墓は水野家の人間ではないためか、同じ境内の離れた所にあるのだが、その墓には「水野彦造建之」の銘があるため誤解が生まれたのであろう。

水野家では初代、二代とも同じ横戸集落内の小林家の血筋から嫁を迎えており、両家の縁には強いものがあつた。そして、帰郷した憲里にしてみれば、既に生家はなく、母方の

実家である小林家にしても、おそらく伯父（叔父）はすでに他界していたと思われる。そこで、血は濃くとも面識のない小林家よりも、姉が暮らす水野家に寄宿するところとなったと考えるのが妥当である。水沢新田をはじめ、この周辺は幕府領となっており、その当時三代彦造が当主をつとめる水野家はかなり規模の大きい農家であった。憲里が身をよせるにあたり窮屈な思いをする必要はなかった。

水野家に遺る記録と水野家からの聞き書きから判断すると、憲里の姉ソカは水野家二代興造の妻である。ソカと憲里の姉弟の父母については、母の在所が潟東村水沢新田の小林家の出ということがわかるだけで、父の名と在所は不明ということになる。また、初代彦造の妻も小林家から嫁いだというから、これは憲里の伯母（叔母）であったことになる。幕末のことだから、憲里の母が、小林家からさほど離れたところに嫁いだとも考えられず、またその家から姉ソカが嫁いできたのだから、憲里の出生地をこの水沢新田の近隣の集落と考えることは妥当である。

坂井の随筆には、憲里は自らの姓を大林と名乗ったといい、これは母方の実家の姓の小林からとったものと語ったという。なぜ、憲里が父方の姓を名乗らなかったのかは不明であり、また小林を大林と改める必然がどこにあったかもわからない。ただ、先にも触れたように、京都府画学校に田村宗立が提出した履歴書に、その師を「大林林岳憲海」と記しているのを見れば、この大林という姓は本来憲海のものであり、苗字必称令以後、師の俗姓を用いることで、師との絆を感じたのではないかと考えている。

憲海の郷里赤津富永の人々のふるさと吉田富永まで、ここから南西に三里ほどである。川の氾濫で、しばしば田畑を流されるこの一体では、出稼ぎも多く、会津へ出る者も少なくなかったという。人の交流は情報の交流でもある。憲里が会津の亀福院に入ることになった背景には、常態化していた会津と越後の労働力の移動があったと考えてよい。このように、憲里の出自については、農家の出であること以外、幼名も父母の名も不明で、出生地にしても越後国蒲原郡潟東村水沢新田周辺と推測できるに止まる。

憲里が亀福院に入った時期は定かではないが能満院粉本中の憲里本の年紀に、天保 11 年（1840）《恵心院大僧正像》[2035]がある。13 歳の憲里による臨画と考えられる。しかし、今少し早く亀福院にいたことを示す資料が、湖南町山崎在住個人所有の「文殊菩薩像」である⁹⁹。この山崎には文殊堂があり、その本尊にちなむものとして、昭和 30 年代に会津若松で求められたものという。左に「釈大成十二歳敬書」と墨書があり、右下隅に「大成本」という印影を有する紙本着彩画である。この図と同図同寸の図像が、憲海の手になる

粉本《文殊菩薩像》[441]である。その墨書に「文政五壬午六月廿一日手本匳」とあり、憲里本よりかなり早く憲海の手元にあったことがわかるので、この粉本が手本となったと考えてよい。憲海自身が「手本匳」というとおり、形くずれの見られる粉本だが、それをいまだ画技未熟な憲里が懸命に模している様子がかがえ、憲里の若書きと見て問題ない。

すると憲里の亀福院入りは少なくとも十二歳以前とわかるが、同時に彼が出家して間もないころから絵画制作に手を染めていることも教えてくれる。『密教大辞典』をはじめ、大成の諱を憲理とするが、これは憲里が晩年に改めたもので、憲理の法諱が使用される最も早い例としては、明治11年(1878)4月に写された自在院蔵『いろは帳』(書-129)の奥書に見る「沙門大成憲理」である。憲里は、文久3年(1863)の《虚空蔵菩薩像》[567]までは使用が確認される。憲理の名がよく知られるのは、恐らく《御室版両部曼荼羅》製作の時には憲理が用いられていたため、作者としてこの名が伝えられたことが理由と考える。あるいは憲海の遷化を契機として改めたのかもしれない。字は当初から大成を用いたことがわかるが、会津において憲里が描いた粉本は極めて少なく、天保14年(1843)の《辨才天像》[884]があるのみである。会津時代はいまだ仏画工房はなく、憲里は亀福院の沙弥として日々を過ごした。ただ、憲海が多くの開版事業に手を染めていたことから、憲里がその補助をしていたことは考えられる。

憲里が憲海に伴われて会津を離れるのは、弘化2年(1845)である。江戸にしばらく滞在した後、畿内に入る。この時護持院において憲里は《不動安鎮曼荼羅図》[1140]を模写している。宝永元年(1704)に護持院の隆光が江戸城二の丸で修した不動安鎮法の本尊を模写したものである。会津を離れた憲里が、憲海の本願により始めた図像の収集に憲里も参加し始めたことがわかる粉本である。憲海に従って弘化4年(1847)頃山王寺寄寓の後、ともに嘉永4年(1851)頃六角堂能満院に移っている。この間の経緯は憲海と同じである。

入洛後、弘化4年から嘉永2年(1849)にかけて、星高の号を使用することがあるが、字の大成の使用例の方が多く、戯れて大乘と記すほか、師憲海の号に習って「大成蔵」と記すこともある。憲里が能満院工房で図像の書写にあたったのは、弘化4年から嘉永7年(1854)を中心としており、この時期に模写された粉本は、憲里の手になる白描粉本の八割に及ぶ。憲里の書写した粉本のうち、絵仏師長谷川家に関わる粉本が80点あり、憲里の書写の大部分が山王寺において行われている。安政2年(1855)から元治元年(1864)までの10年間で制作した粉本は18点にすぎず、能満院における憲里の仕事は、図像の収集ではなく、開版事業に集中していたことが考えられる。能満院に入った時、憲里はまだ

沙弥であり、律僧憲海の従僧を勤めながら工房の仕事を手伝ったと思われ、「無檀無禄」と云われる能満院の経営もまた、憲里の仕事であったと考えなければならない。そのため、現実の問題として憲里はかなり多忙であったに違いない。

憲里は、生涯憲海にのみ従って信仰生活を送ったと考えられる。18歳の時亀福院を離れたため、本山への修学の機会はなかった。ただ上洛後、嘉永2年22歳ころから粉本の留書に沙門と記すようになる¹⁰⁰ので、僧侶として必要な学問は納めていたと思われるが、伝授に関わる記録は残っていない。その意味では、亀福院以後の憲海との生活の中で得られた受法のみが憲里の学問の全てであったといえる。新義の僧として一寺の住職となる資格は得られなかったであろう。憲里は人生を、憲海の従僧として生きることに費やしたといつてよい。

元來僧院を構成するのは4名を以て最小の単位とする。能満院においても憲海と憲里のみでは身動きがとれないところがあったが、新たに雲道や皆了、宗立などの弟子が加わり、その活動は次第に拡大していった。しかし、元治元年(1864)の兵火により能満院は焼失し、憲海たちは蓮光院に寄寓を強いられた。憲海は同年9月入寂。憲里はその後も蓮光院に寄寓した。《御室版両部曼荼羅》開版の事業が開始したのは、御室山内の尊寿院に仮住まいしたが、事業終了後は、再び蓮光院に戻ったと考えられ、自在院が所蔵する『いろは帳(宥真)』には「明治十一年寅四月二十七日書／京姉小路大宮西入姉西町／蓮光院／沙門大成憲理／五十一才／宥真法印様」とあり、明治11年(1878)に蓮光院に仮寓していることを伝える。憲里は恐らくここで憲海の墓塔建立事業に尽力したと思われ、明治13年(1880)6月に宗立らとともに《憲海墓塔》を建立している¹⁰¹。明治16年(1883)の末から翌年初にかけて越後にて『普通真言蔵』『大仏頂大随求』を書写した記録がある¹⁰²ため、この明治13年(1880)から同16年(1883)の間に、越後に帰国したものと考えられる。坂井の随筆ではこれを明治15年(1882)に帰国したと伝えている。

憲里は、水野家の蔵の軒下に自ら草庵を設けたといい、その蔵は今も現存する。草庵といえば聞こえがいいが、蔵の壁によりかかるように建てられた仮小屋であったと伝えられる。憲里は一切の生臭ものを嫌ったため、鉢と箸は自分のものを常に懐にし、生臭ものを使った什器と接することがないようにした。その日常は、水野家とは切り離された形で送られていたらしい。この憲里の暮らしぶりは、能満院での憲海らの生活を彷彿とさせるものである。

越後での憲里の生活を記録したものはなく、その全ては伝承である¹⁰³。例えば、彼は食

事の際、必ず傍らに一口分をとりわけ鳥獣に与えたといい、またある日、子らが泥鰌を捕らえていたところに憲里が出くわし、たまたま錢を持っていたので、子らからその泥鰌を買い求め、田に放してやったところ、泥鰌は何度も水面に浮かんではおじぎをしたといった話がある。昔話のようなその記憶は、地域の住民の間でも、次第に薄れつつあるとは聞くが、越後の人々にとって親しみのある良寛のイメージと、憲里の暮らしぶりを重ね合わせて語るが多かったようである。



図 2-11 長徳寺憲理墓

越後にいた憲里であったが、明治 19 年（1886）の夏 5 月から 7 月の間に、再度京都に出てきたらしい。同年 5 月に開版された《六地藏像》の版木が横戸集落に遺されているので、この頃郷里にいたことがわかる一方で、同年 7 月花園法金剛院の要地藏院において《地藏菩薩像》[505]の版下を描き、同年 9 月花園法金剛院において《舍利弗・目連像》[1555]を写しているためである。この時の入洛の理由は不明だが、花園法金剛院に寄宿したと思われる。そして、智山所蔵本を原本とする《興教大師覚鑿像》（版-045）を開版するため、明治 21 年（1888）5 月憲里に縮写を依頼した旨、墨摺の封紙（版-046）に見えるので、京都滞在はかなり長期であったことがわかる。

時期は不明ながら、その後憲里は越後に帰り、明治 24 年（1891）7 月 25 日水沢新田の水野家に於いて 64 歳で入寂した。憲理が故郷において折りに触れ制作をしたことが、現在も同地に伝えられる作品群から理解される。必要な画材を全て郷里で揃えることはかなりの困難性があることを考えると、ある程度の画材は携行したかもしれない。作品を見ると、粉本の若干の写しは蓄えていたか、あるいは在京時に新写したことが推測される¹⁰⁴。長徳

寺の墓（図 2-11）は甥の三代水野彦造によって建立された。この時、姉のソカは未だ存命している。

以上でこの章の考察を終える。会津で生まれた憲海は若くして出家し、14歳で本山である長谷寺に交衆した後、鏝慶からの伝法灌頂を受けて阿闍梨となる。小野広沢の伝授を重ねる中、諸山を巡錫して図像や聖經の書写を行うようになり、やがて飲光の正法律への接近を強め、信正により進具した。まもなく長谷寺を下り、会津八角神社別当亀福院の住持として、戒律を守りつつ開版事業に関わるが、越後の憲里が資となり、憲海は自らの大願を果たすため入洛を決意する。入洛当初の憲海らは、山王寺に寄寓し積極的に粉本経疏の書写を行い、やがて六角堂能満に入ると、印施千種の願を立て開版事業を行う。元治元年の兵火により能満院は多くの版木ともども焼失し、憲海は避難した蓮光院において遷化するのである。越後に生まれた大成憲里が憲海の資となり、憲海を補佐したことで憲海はその大願の実現に専心することができたのであり、その存在は憲海の事業において重要な契機を生んでいる。憲海の事跡については会津地域の資料と畿内の資料を結びつけることによってかなり明確になっており、従来略伝を大きく補うことが可能となった。

【注】

¹ 智山伝法院編『智山書庫所蔵目録 第一巻』（真言宗智山派宗務庁、1994年3月）、智山伝法院編『智山書庫所蔵目録 第二巻』（真言宗智山派宗務庁、1995年5月）

² 林田光禪『智積院誌』（総本山智積院、1915年11月）、p. 228。

³ 村山正榮『智積院史』（弘法大師遠忌事務局、1934年4月）、pp. 359f。

⁴ 「運敵蔵」（林田光禪『智積院誌』（総本山智積院、1915年11月、p. 230）。

⁵ 小笠原弘道「江戸時代後期智山学匠の聖教筆写活動—智山書庫収蔵筆写本聖教の奥書から」（『現代密教 第17号』、智山伝法院、2004年3月）、pp. 164-166。

⁶ 小笠原弘道「江戸時代後期智山学匠の聖教筆写活動—智山書庫収蔵筆写本聖教の奥書から」（『現代密教 第17号』、智山伝法院、2004年3月）、p. 170。

⁷ 小田慈舟「御室版両部曼荼羅の開版と其功労者」（『密宗学報』第178号、1928年6月）、pp. 291f。

⁸ 能満院旧像書の智山への寄付は大正期であり、明治17年（1884）に憲里が書写した『普通真言蔵』5冊が含まれるため、総数は1件少ない。

⁹ 「十種神宝図」[1204]「文政八年乙酉十二月廿四日／神祇汀志願者無言蔵」とあるほか、「天照大神像」[1083]「天照太神／高貴寺神道ノ中尊」、「天神七代像」[1188]「文政五年八月十三日詣于河州葛城山高貴律寺而／慈雲大和上御書神祇之次第等拜之刻御草案之一紙／令書写之畢／釋沙門無言／憲海」といった雲伝神道関係の図像を模写している。

¹⁰ 『歴史資料館収蔵資料目録』第21集（福島県文化センター、1992年3月）に「金剛寺文書」として、現在整理の終わった1028点の目録が収録される。現在は金剛寺に戻され、金剛寺書庫に収蔵し非公開である。

- 11 豊山長谷寺（奈良県桜井市）に遺される記録文書。『交衆帳』などがあるが、公刊はされていない。『自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲里」の足跡』（阿住義彦編、自在院、2006年5月）に一部が紹介される。
- 12 『福聚山満願寺 自在院誌』（自在院、1984年11月）、p. 8。
- 13 藤田定興『近世修験道の地域的展開』（岩田書院、1996年9月）、pp. 296-302。
- 14 南照寺跡には、現在川島家が管理する「旧南照寺修験資料館」がある。同所には他に本浄が書写した『大方等大雲請雨経』があり、その奥書に「安政四丁巳年九月八日於王城中眞六角堂能満院奉寫得了／同院現住大願尊師御年六十数之時奉伝授了／會津■■■別當■■■院本浄三十四之時」とある。
- 15 湖南史談会『湖南の史蹟と文化財』（1978年8月）、pp. 59f、167、216、375-7、391。
- 16 渡邊春雅『湖南村郷土史 中野郷土史考』（私家版、1964年）、pp. 32-35。
- 17 『新編会津風土記』第五卷（歴史春秋出版、2003年3月）、p. 35。湖南史談会『湖南の史蹟と文化財』（1978年8月）、p. 191「富永阿弥陀堂」の項。
- 18 田村宗立旧蔵仏画粉本《稻荷明神像》（版-012）
- 19 本作品は軸装紙本著彩で、本紙法量は129.5 cm×70.0 cmである。湖南史談会『湖南の史蹟と文化財』（1978年8月）p. 188のほか、『会津寺院風土記（湖南・湊編）』（半沢卯右衛門、石井義八郎著、小島一男編、会津寺院調査委員会、1987年7月）p. 12に、関係記事が収録される。
- 20 能満院粉本《釈迦十六善神図》[136]（憲里筆、嘉永4年長谷川等鶴写本より写す）及び《釈迦十六善神図》[146]（筆者不詳）。
- 21 湖南史談会『湖南の史蹟と文化財』（1978年8月）、p. 188のほか、『会津寺院風土記（湖南・湊編）』（半沢卯右衛門、石井義八郎著、小島一男編、会津寺院調査委員会1987年7月）p. 12に、関係記事が収録される。
- 22 『安積郡赤津邨分限帳』は嘉永5年（1852）に作成された村民各戸固定資産明細帳にあたるもので、古川米治『赤津の足あと』（歴史春秋出版、1989年12月）に収録される。定右衛門家についてはp. 336に見える。
- 23 豊田武「苗字の歴史」（中央公論社、1971年9月）、pp. 139-146。
- 24 太田亮『姓氏家系大辞典』第3巻（角川書店、1963年11月）、pp. 4847f。
- 25 湖南史談会『湖南の史蹟と文化財』（1978年8月）、p. 22。
- 26 「画学校出仕人名簿」の田村宗立の紙葉に記されている。この簿冊は、京都府画学校に出仕した画家の履歴書の内容を控えたもので、原本の所在は現在不明となっているが、電子複写が京都市立芸術大学芸術資料館に遺される。
- 27 大林という苗字は、現在でも中京以西に多い苗字であり、江戸時代末期の越後においても多かったとは考えにくい。ただ、会津と越後の中間に位置する福島県耶麻郡山都町（現喜多方市）に大林の地名があり、古くからこの磐越地域に交通のあったことを考えれば、大林の苗字がこの地域に点在する可能性は否定できない。
- 28 坂井栄信「雑林抄一画像大成」（智山『宗報』第167号、1964年6月。児玉義隆編『栄信和尚遺稿遺墨集』（豊中不動寺、1980年11月、pp. 11f）「大林という姓は京都で新会によって届出たものであるが、母方の姓小林を改めたのだと語られたという。」とある。坂井栄信（1904-1979）は憲里と同郷の真言僧で、悉曇に通じた。
- 29 『自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲里」の足跡』（阿住義彦編、自在院、2006年5月）、p. 15。
- 30 湖南史談会『湖南の史蹟と文化財』（1978年8月）、pp. 215fのほか、渡邊春雅『湖南村郷土史 中野郷土史考』（私家版、1964年）、pp. 30-32。
- 31 「三宝印流血脈」1紙、「伝法許可灌頂印信」1紙。「秀慶書状」1紙。広伝寺蔵。現在広伝寺の開山を秀慶とするのは、これら文書の記録に従ったものである。秀慶以後の血脈をそのまま示すと「(弥勒寺) 秀慶－廣傳寺(宥長)－宥法－栄戒－宥浄－興通－仙慶－仙真－憲海－英雄－宥仙－密傳－憲梁－堯観－證如－祐慶－密嚴－俊乗－秀道－密鑊－宥覚－

大道…」となる。

³² 湖南史談会『湖南の史蹟と文化財』(1978年8月)、p. 338。「文政八年乙酉年」「憲梁春秋七十三」とある。

³³ 湖南史談会『湖南の史蹟と文化財』(1978年8月)、p. 212。「文政十一年(一八二八)東光寺住広伝寺閑居憲梁。」とある。

³⁴ 中興以後広伝寺の住持は、不明といってよい状況である。鈴木素友の記した伝の中に憲梁を広伝寺11世としているのは、広伝寺文書の「三宝院流血脈」(前掲注31)に書かれた名前を数えて記したに過ぎない。「三宝院流血脈」の記事には、広伝寺の寛政11年(1799)建立《大乘妙典一石一字塔》に「当山現住憲榮」と刻された憲榮の名がないなど、不明な点が多く、史料としては曖昧さを禁じ得ない。この「三宝院流血脈」と東光寺の記録から伝えられる住持名を比較して見れば、憲海、密鑊、憲梁の名が見えるところから、彼らの兼帯が推測されるのだが、その実態はきわめて不明瞭である。

³⁵ 湖南史談会『湖南の史蹟と文化財』(1978年8月)、pp. 212f。渡邊春雅『湖南村郷土史 中野郷土史考』(私家版、1964年)、pp. 29f。

³⁶ 『自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲里」の足跡』(阿住義彦編、自在院、2006年5月)、p. 30。

³⁷ 注35に示す資料では、この憲海を明和5年の箱寄進に関わる僧とみ、広伝寺を兼帯した人物と見ている。この見解を補うものが、「三宝院流血脈」(前掲注31)である。林岳憲海が広伝寺の住持となった可能性はないので、ここに記された憲海を林岳とすれば、それは単に伝授を示すものとしなければならないが、それでは、憲海の師は仙真という僧になり、憲海は憲梁の法流の上に位置してしまう。一方、明和期に憲海という僧がいて、両寺を兼帯したとすれば、憲梁の上において不思議はなく、血脈の時系列から見ても違和感がない。憲海という僧が、林岳憲海以前に存在したと考えることが合理的である。

³⁸ 天保5年(1834)3月21日「刻両部大曼荼羅附言」(『現図両部曼荼羅』解説。長谷寺、1981年9月)。

³⁹ 尾崎安啓「近世後期の大般若経勸進について－寝屋川市長栄寺経奥書の分析－」(『歴史研究』第33号。大阪教育大学歴史学研究室、1996年2月)

⁴⁰ 後に長福寺の大般若経勸進に尽力するなど、憲海と大般若経との関わりの深さを思えば、東光寺大般若経惣箱再興に関わる可能性を考えることは興味深い見解である。しかし、広伝寺には林岳憲海以前に憲海という僧が別にいたと考えなければ、「三宝院流血脈」に示される法流の疑問は解決されない。

⁴¹ 湖南史談会『湖南の史蹟と文化財』(1978年8月)、p. 338。

⁴² 渡邊春雅『湖南村郷土史 中野郷土史考』(私家版、1964年)、p. 30。

⁴³ 渡邊春雅『湖南村郷土史 中野郷土史考』(私家版、1964年)、pp. 32-34。

⁴⁴ 中下りは新義真言宗において享保3年(1718)に制定された制度である。学侶の修学はその本山在山年数に従い、下山すれば在山を数えられなかったが、この制度により、田舎での報恩講出席を以て本山在位に数えられることとなり、本山在住の必然性が薄れた。

⁴⁵ 『自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲里」の足跡』(阿住義彦編、自在院、2006年5月)、pp. 9、30。

⁴⁶ 『自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲里」の足跡』(阿住義彦編、自在院、2006年5月)、p. 17。

⁴⁷ 『自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲里」の足跡』(阿住義彦編、自在院、2006年5月)、p. 9。

⁴⁸ 櫛田良洪『真言密教成立過程の研究』(山喜房仏書林、1964年8月)、pp. 1057-1064。

⁴⁹ 「金剛寺文書」－「7 分限帳(会津真言宗寺院籍帳)1冊」(『歴史資料館収蔵資料目録』第21集(福島県文化センター、1992年3月)、p. 55)。役寺を努める金剛寺が会津の真言宗寺院に在籍する僧侶らの出自、役職、名や年齢などを明治2年9月に整理して目録としたもの。

- 50 『自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲里」の足跡』(阿住義彦編、自在院、2006年5月)、p. 9。
- 51 智山書庫の『伝法灌頂諸作法 幸心』(書-014)、『伝法許可灌頂印信』(書-116)。
- 52 西弥生『中世密教寺院と修法』(勉誠出版、2008年11月)、pp. 199-220。
- 53 田中海応『海如和上傳』(徳蔵寺、1924年12月)、pp. 25-27。
- 54 所在が書かれているため『高山寺経蔵聖教内真言書目録』「真第十二護摩」に収録されるものと分かる。(『高山寺経蔵古目録』東京大学出版会、1985年2月、p. 105)
- 55 能満院粉本に、「高野山光勝院蔵／辰八月二十四日／仏子憲暢写之」の墨書のある《秘鍵大師像》[1645]がある。《弘法大師空海像》[1640]にも、「高野山光勝院蔵／八月廿四日／佛子十如写之」とあり、淳如と字した憲暢と同一人物の可能性もある。
- 56 土宜法竜著、宮崎忍海編『木母堂全集』(六大新報社、1924年6月)「土宜法龍和尚傳」p. 1に「安政五年午年即ち五歳の時、伯母貞月尼に伴はれて伊勢國宮崎家に轉じ、同年同國河藝郡白子町観音寺に入り、京都六角能満院大願に従ひ剃度し、法龍と稱し」としている。
- 57 能満院粉本の文政5年7月2日《五髻文殊菩薩像》[406]に「無言」と署名があり、同年8月14日《弘法大師五輪塔婆拓影》[1249]に「無言道」と署名があり、文政8年4月17日《辨才天像》[882]に「無言蔵」と署名がある。ただし、智山書庫中の文政3年の資料『伝法灌頂諸作法 幸心』(書-014)や能満院粉本の文政4年《葉宝山僧正像》には「無言蔵」の記載があるが、使用例に連続性がなく、後筆の可能性を考えるべきである。
- 58 『自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲里」の足跡』(阿住義彦編、自在院、2006年5月)、p. 31。
- 59 『自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲里」の足跡』(阿住義彦編、自在院、2006年5月)、pp. 9、30。
- 60 143.8×94.5 cmの大型の版画で「文政十年丁亥夏為四恩報謝再彫刻之豊山龍肝施印」と右下に刻銘がある。湖南史談会『湖南の史蹟と文化財』(1978年8月)、p. 391にも紹介される。文政10年(1827)8月に憲海は龍肝に伝授を受けており、開版には憲海が参加した可能性もある。
- 61 智山書庫の『西院流大事印信並血脈』(書-121)。
- 62 湖南史談会『湖南の史蹟と文化財』(1978年8月)、p. 167。「社宝 正一位春日大明神御神号 壹軸 王城中心六角堂勅願寺能満院大願 文久三癸亥年正月広伝寺納 用明天皇御勅願寺京都六角堂住職 元広伝寺社僧林岳憲海上人謹筆」とある。現在その存在は確認できない。
- 63 『長谷寺略史』(真言宗豊山派宗務所、1993年12月)、pp. 209-211。櫛田良洪『真言密教成立過程の研究』(山喜房仏書林、1964年8月)、pp. 1201-1205。
- 64 櫛田良洪『真言密教成立過程の研究』(山喜房仏書林、1964年8月)、pp. 1057-1064。
- 65 『自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲里」の足跡』(阿住義彦編、自在院、2006年5月)、p. 31。
- 66 智山書庫の天保4年2月18日写『作法集雜記』(書-077)及び、能満院粉本の天保4年2月23日写《鑑真像》[1937]に「於江戸麻布六軒町不動院」と留書がある。
- 67 『新編会津風土記卷之十八』「伊舎須弥神社」の項(『新編会津風土記 第一卷』、歴史春秋出版、1999年1月、p. 260)
- 68 前掲注49書。
- 69 『福聚山満願寺 自在院誌』(福聚山満願寺自在院、1984年11月)、p. 14。『自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲里」の足跡』(阿住義彦編、自在院、2006年5月)、p. 8。
- 70 『自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲里」の足跡』(阿住義彦編、自在院、2006年5月)、p. 8。
- 71 『自在院史料集 第二集 六角堂能満院「大願」－「林岳房憲海」「大成房憲里」の足

跡』(阿住義彦編、自在院、2006年5月)、pp. 8、16f。

⁷² 「書状(京六角能満院より会津若松弥勒寺法印) 子11月16日 一通」(書-123)。萬海に関する部分は「然者萬海事隠居願之通ニ而退化之由風説ニ候。何角不行届。身分儀。年も人並故。此方ヨリ指図等ハ難申入。先其国元引取ニ相成候ハ、満足之至ニ存候。実ニ世上浮沈轉變無情之事ニ候。」とある。書簡には、世間話も交えた和やかな雰囲気もあり、会津を離れたのち、六角堂能満院に落ち着いた消息を伝える意図もあったらしい。

⁷³ 『分限帳』に「自在院 啓傳 巳年四十七歳」とある。巳年は明治2年(1869)をさす。

⁷⁴ 『一字塔及び高祖大師御真筆写』(書-135)。栄弘(1802-1840)は、憲海の四歳下で、豊山に学び自在院の三十一世住持となるが、天保11年(1840)に早世している。

⁷⁵ 『分限帳』に見るとおり、幕末において30代で格院の住持を務めている例もあり、人材確保の困難さや経営問題などから、厳密な適応に耐えられない状況があったものと思われる。

⁷⁶ 《理趣経曼荼羅図》[1791]には「天保四年巳八月初三日亀福院現住無言蔵」とある。

⁷⁷ 『福聚山満願寺 自在院誌』(福聚山満願寺自在院、1984年11月)、pp. 35f。

⁷⁸ 藤田定興『近世修験道の地域的展開』(岩田書院、1996年9月)、pp. 299-302。

⁷⁹ 新井弘順「遺教会と『佛遺教経』譜本の刊行」(『豊山学報』第55号、2012年3月)、pp. 2-9、19-21。

⁸⁰ 新井弘順「新義方進流声明末葉無言蔵大願一進流口訣の書写と『両部讚草帋』等の刊行一」(『豊山学報』第54号、2011年3月)、pp. 28-36。

⁸¹ 坂井正喜『会津人物事典(画人編)』(歴史春秋出版、1989年12月) pp. 31、144f。盤山は佐竹永海(1803-1874)の会津における師として知られ、坂井は狩野派を学ぶとするが、その根拠となる記録は管見に入らない。

⁸² 《散華葩図》[1437]「散華葩。二十枚。盤山先生彩色手本」(5白文方印)無言蔵/圖書記。

⁸³ 智山書庫の『瑜伽集要焰口施食儀』(書-073)に「(奥)弘化二乙巳年二月十八日於会津八角宮以蔵経本写得之了」とありいまだ会津にいたことが知れるが、能満院粉本《十二天像袋》[724]に「神齡山護国寺所蔵本/無言蔵/弘化二乙巳年七月十六日」とあって、江戸護国寺に滞在していることがわかるので、この間に会津を発っている。

⁸⁴ 山王寺については、秋里籬島『拾遺都名所図会』卷一「山王社」(天明7年(1787)刊) (『新修京都叢書』第7巻、臨川書店、1994年5月、p. 88)、碓井小三郎『京都坊目誌』下巻第十一学区之部「山王神社」(大正5年(1916)) (『新修京都叢書』第20巻、臨川書店、1995年5月、pp. 250f)に記事がある。

⁸⁵ 能満院粉本の憲海筆《額足院某僧像》[2034]に「天保十一庚子正月下旬/山門額足院様御壽像/無言蔵写」とあり、天台僧の寿像を描いている。

⁸⁶ 能満院粉本の憲里筆《不動明王二童子像》[640]に「嘉永四辛亥六月十六日於六角堂能満院彩色之大成蔵」とあるのが古い。また智山書庫の『安流八字文殊念誦法要』(書-051)に「嘉永四年辛亥六月十四日於京六角能満院書写一校了」とある資料も憲海の手になる可能性がある。智山書庫の『宝篋印陀羅尼経』(書-088)の「嘉永四年辛亥卯三十日於京都山王寺以亮汰鈔三卷書写之了追而可遂清書者也 沙門無言蔵」とある墨書から4月までは山王寺にいる。

⁸⁷ 佐久間秀紘「大願著『梵學秘要篇』について」(『越後乙宝寺蔵 無言蔵大願著 梵学秘要篇』高橋尚夫・佐久間秀紘 2012年8月、ノンブル社)、pp. 18f。

⁸⁸ 村磯栄俊「江戸時代後期智積院大仲財政について—大仲供料金を中心に」(『現代密教第16号』、2003年3月)、pp. 124、125、130。

⁸⁹ 竹田黙雷は「田村月樵翁」(『藝苑』帝国美術社、1919年7月)の中で、大正期に憲海本『覚禅鈔』を閲覧したことを伝えており、少なくとも能満院の火災からは救出されたことがわかる。

⁹⁰ 「梅尾明恵上人遺訓」(『明恵上人集』、岩波書店、1981年5月)、pp. 201-216。

⁹¹ 榎田良洪『覚鑿の研究』（吉川弘文館、1975年2月）、pp. 342-364。

⁹² 弘仁山蓮光院は京都市中京区にある高野山真言宗の寺院。弘仁3年（812）に真然の開基と伝えられ。本尊不動明王は旧神泉苑南門安置仏という。（『京都市の地名』平凡社、1979年9月、p. 813）。天明8年（1788）の大火で伽藍を失い、憲海が入った頃は仮堂であった。宗立はこの寺を無檀無祿といい、憲海が兼帯したというので、いつしか無住となり真義の寺となっていたらしい。現本堂は明治35年（1902）の建立である。（大橋乗保「田村宗立考」（京都工芸繊維大学工芸学部研究報告『人文』第10号、1962年3月、p. 26）。

⁹³ 黒田天外「<田村宗立氏>『名家歴訪録』中編」（『京都の洋画—資料研究』京都市美術館、1980年3月、p. 39）。

⁹⁴ 折本。金剛寺所蔵。

⁹⁵ 小田慈舟「御室版両部曼荼羅の開版と其功労者」（『密宗学報』第178号、1928年6月）、p. 289に「大成氏は越後國南蒲原郡水沢新田村の産で、父を水野彦蔵と称した。」とあり、その後『密教大辞典』においてもこれをそのまま祖述している。

⁹⁶ 水野家に伝えられる法名簿及び水野家の現当主で水野家七代にあたる水野瑞雄からの聞き取り調査による。

⁹⁷ 中村涼一「江戸末期仏画の資料紹介」（『密教学研究』第13号、1981年3月）p. 43に憲里と郷里を同じくする浄土宗の碩学山辺習学（1882-1944）のノートからの抜き書きが紹介される。「明治初期に於ける真言宗最後の画僧、御室の大曼荼羅鏤刻の大業を完成した。私の郷里なる叔母と姉と姪のいる水野家に寄留。鼠と中食を共にしつつ方丈に清き生活を送る。生涯画筆を棄てず。自宅蔵の”愛染明王”はその一つ。」

⁹⁸ 坂井栄信「雑林抄—画像大成」（智山『宗報』第167号、1964年6月。児玉義隆編『栄信和尚遺稿遺墨集』（1980年11月、豊中不動寺、pp. 11f）。越後での憲理の姿を伝える貴重な記録であるため、主要な部分を再録する。「大成師は幼少のころ、どういう縁で結ばれたのか今は知り得ないが、会津若松の喜福院の大願和尚に隨身して宗学および画技を受け、天保年間に和尚に伴って上洛、六角堂の塔頭能満院に住して聖教の出版・古鈔本の模写・仏像曼荼羅の製作等に従った。けだし大願和尚は、衆芸兼綜の阿闍梨として近世密教復興の中で彩画の面が最もおこなっているのを慨き、彩画の職業仏師によってみだされた斯道の覚醒が出京の目的の一つであり、大成師は出藍と称せられた画筆を揮ってこれを助けたのである。」

大願和尚遷化（元治元年六十七才）の後、姉小路大宮の蓮光院に住して師業を継がれたが、たまたま高雄曼荼羅（御室版両部曼荼羅）印行の企てが法雲尊峯師から持ち出され、先師の宿願であったこととて同門の宗立（後の田村月樵）・雲道をひきいて参加し、下絵・彫り・摺り等開板一切の指揮監督に当られた。事業は仁和寺（御室御所）の庇護を受けて明治三年に完成したが、時勢の非運に災されて僅か百部ほど世に出たに過ぎなかった。幸に版木が仁和寺に所蔵され、大正二年に仏書刊行会が再摺し、さらに大正新修大蔵経にも収録されたので、漸く識者の注目をひき、関係者の名も伝えられるに至った。

大成師は私の郷里（新潟県西蒲原郡瀧東村水沢）の出身で、明治十五年に帰郷、生家は既に絶えていたので、親戚水野家の地所内に小庵を結び、廿四年七月十五日七十一才（推定）で入寂された。大林という姓は京都で新会によって届出たものであるが、母方の姓小林を改めたのだと語られたという。和尚さまと呼ばれ、恬淡で如法な生活ぶりは幾多の逸話を伝えている。私の弟子水野公栄の祖母は、十才前後の数年間、母屋（おもや）の娘として使い役をしていたので、身近かな思い出話を聞かせてくれた。村人の請に応じて描かれた仏画が三十余幅残っているが、謹厳な画法で一般受けはしない。弘法大師御影の版木を新刻して寄付したのに対し、智山事務所から贈られた賞状が現存している。今私の手もとには郷里での作の愛染明王と、京都で求めた朝熊権現（天照大神）がある。」

⁹⁹ 紙本著彩一軸、76.5×33.8 cm。湖南史談会『湖南の史蹟と文化財』（1978年8月）、pp. 375-377。

¹⁰⁰ 田村宗立旧蔵粉本のうち《某僧像（持仏子）》[2133]に「于時嘉永二己酉二月六日四ツ

時於山王寺／以長谷川本写之沙門大成房憲里」とある。

¹⁰¹ 京都市中京区姉西町にある蓮光院の西に位置する墓地内に立つ五輪塔。明治13年(1880)6月、萬海、萬行、得実、大成、宗立によって建立された。

¹⁰² 智山書庫中の『普通真言藏』(書-010)に「右普通真言藏從明治十六年未十月二十八日詣行村満福禅寺借寄松尾村仙城院藏中当本並大仏頂大隨求写書始半月逗留十一月十一日帰村昼夜精進書写苦辛終翌十七年申一月十一日写得了／于時明治十七年申一月十一日 王城中真六角堂能満院大願和上弟子 沙門大成憲里五十六歳」とある。仙城院は新潟市西蒲区松野尾にあり、満福寺は新潟県南蒲原郡中之島町大字中野中にある。

¹⁰³ 新潟市の水野瑞雄、星野五郎より聞き取りを行った。

¹⁰⁴ 中村涼一「江戸末期仏画の資料紹介」(『密教学研究』13号、1981年3月)、pp. 35-41。

第3章 憲海の師と人脈

この章では、憲海が生きた時代の思想的潮流を背景に、憲海に大きな影響を与えた三人の師僧を中心とする人の交流について考察する。第1節では、学芸の復古的思潮が高まる中で、三人の師僧が師事した慈雲飲光の提唱する正法律の流れを検証する。第2節では、正法律に連なる慈光寺の鳳寛鏤慶と長栄寺の黙住信正の事跡について検証する。第3節では、正法律に進具しこれを離れた高山寺の慧友僧護の事跡について検証する。第4節では、憲海の資僧であり異なる立場で正法律を護持した光雲海如の事跡を憲海との対比の中で考察する。第5節では、大和絵の絵師冷泉為恭と海如との交流と両者の接点としての高山寺について考察する。第6節では、高山寺を場として生まれた僧護を介在する憲海と為恭の交流の痕跡について考察する。憲海の思想の形成に正法律が与えた影響と、復古的思潮が様々な支脈を作る中で生まれた学芸上の交流について考察することが目的である。

第1節 正法律と憲海

憲海の生まれた寛政10年（1798）は、伊勢国松坂の国学者本居宣長（1730-1801）が35年の歳月をかけた『古事記伝』を脱稿した年である。『古事記』の注釈書として生まれたこの書は、近代に通じる実証主義的態度を以て、日本の古代研究に大きな影響を与えた。この『古事記』研究を見てもわかるとおり、宣長の学問は、日本の思想文化に対し文献を拠り所として考察するものである。それは、日本の精神文化を古代人の思考から読み解くものとして、古学のうちに国学を大成するところとなった¹。古代研究は現在を考える方法としての意味が求められたことになる。古文献を主たる研究対象とするため、ともすれば古代に理想を求めるような復古的側面を持つものの、それは単純な原理主義とは異なり、合理的な精神に裏付けられる部分も多かった。江戸時代には、思想文化のさまざまな局面に、こうした思考の傾向があらわれている。憲海の生きた時代は、古典研究の進展にともなう復古的思潮が大きくなるとなるとして学芸宗教に深く影響していた²。憲海の生涯にもこの社会の動きはゆるやかに関わるのである。

憲海の生涯を眺めたとき特徴的なのは、鏤慶、僧護、黙住といった正法律に関わる僧侶との師系が重なることである。正法律は江戸時代中期の僧慈雲飲光によって提唱された思考である。この正法とは三時説にいうとおり、釈迦入滅後その教えが正しく伝えられ、多

くの信者が証果を得られる時代をさす。すでに末法に入って久しい当世に、釈迦在世時の信仰のありかたから仏教の姿を問いかけたのである。

日本では、仏教伝来当初から戒律の理解が曖昧であり、鑑真が渡日したのも日本に正しい戒律を伝えるためだった³。しかし、日本は仏教が政治体制の中に組み込まれていたため、教団を形成する僧侶の存在に直接関わる受戒すら統制の対象となった。戒壇が国によって管理され、受戒が制限されていたため、正式な受戒をしない僧が多数生まれる状況が制度的に作られたのである。この時鑑真が伝えたのは『四分律』であった。『四分律』は部派仏教の一つで仏滅後三百数十年後に発生したと考えられている法蔵部すなわち曇無徳部の律である。同じく上座部に属する、化地部すなわち彌婆塞部の律である『五分律』及び一切有部すなわち婆多部の律である『十住律』に、上座部と異なる大衆部の律と考えられている『僧祇律』を加えた四種の律が漢訳四大律として中国における戒律の基本となった。しかし、実際には中国における受戒は『四分律』によることが一般的であり、鑑真が伝えたのはそのうち道宣の唱えた律すなわち南山宗であったと考えられている⁴。戒壇は日本では南都東大寺と筑紫観世音寺、下野薬師寺に設けられた。大乘の思想が主流となっていた日本では、これらの戒壇を小乗戒壇として特殊なものと考え、度牒を得るための場として機能させたため、戒壇としての本質的機能は形骸化していった。

やがて、最澄、空海の入唐僧により、戒律についての新しい解釈が加えられ、日本の戒律は思想的に大きく変貌を遂げることになる。最澄は天台教学を伝えるとともに、大乘戒を説いて聖俗の区別のない授戒を提唱して、具足戒と修業に対する必然性を否定し、また空海も、密教と顕教を区別するところから、別に三昧耶戒を提唱し、相対的に具足戒を根本的な問題から退けている。特に最澄によって提唱された大乘戒の思想は、『梵網経』に説かれる菩薩戒を比丘比丘尼に適用して、僧侶における戒律の認識に課題を残すものとなった⁵。これは、中世に本覚思想が展開する背景となり、鎌倉新仏教は、その批判を展開しながらも戒律への回帰に至らなかった。一方これらの動きと対照的に南都を中心とする旧仏教では、戒律復興の動きが見られるものの、叡尊らの行った戒律復興の運動は、自誓受戒を起点として律蔵によらない通受と呼ぶ独自の授戒方法により、大乘戒の浸透に努力するものだった。小乗戒と考えられた『四分律』による受戒は、別受として、依然として特別視された。近世に入ると、諸宗に戒律復興を考える僧侶が現れる。天台に妙立・靈空が安楽律を提唱し、日蓮宗に元政が草山律を提唱、浄土宗には性激が律院を開いた。そして、叡尊の流れを受ける真言律には禎尾の明忍が出て、やや送れて慈忍慧猛が、真言律の諸系

統を統合して青龍派を成立させ、河内延命寺の浄嚴が顕密二戒の統合を進めている。また真言宗においても妙瑞らが有部律の再興を企てている⁶。

こうした流れを受けて現れたのが飲光である。真言僧として出発しながらも、宗派を否定し、釈迦在世時の戒律の護持を提唱した。これが正法律である。当時の戒律の混乱を正し、僧侶は僧侶としての、在家は在家としてのあるべき姿を求め、それを実践することを問いかけたのである⁷。憲海はこうした潮流の中に進具し、律僧として生きる道を選ぶ。憲海は、師僧をとおして飲光の思想に触れたと考えられ、憲海自身は語らないが、その師系と高貴寺への往来を見ればその心の動きは明白である。憲海の思考に対する飲光の影響を考察するためには、飲光の事跡を確認する必要がある。

飲光の伝記については、飲光自らが記した『略履歴』『千師伝』⁸や弟子の明堂諦濡(1750-1830)が師の没後20年にあたる文政7年(1824)著した『正法律興復大和上光尊者伝』⁹などを基礎資料としてまとめられている¹⁰。

彼は享保3年(1718)7月28日に大坂中之島(現、大阪市北区)の高松藩蔵屋敷内川北又助の家に生まれた。父は播磨の人上月安範、母は阿波の人で川北家の養女であったお清(はじめお幸)である。両親とも摂津法楽寺(大阪市東住吉区)の洪善普撰に帰依して信心が深かった。父の遺命により13歳の時に法楽寺で忍網貞紀に従って出家した。忍網貞紀の師であり、野中寺慈忍の弟子である洪善普撰が中興となった法楽寺は、青龍派の律院である。飲光は貞紀から密教と梵語を学んだ。飲光の忍網に対する尊敬の念に偽りはなかったが、仏教に対しては懐疑的な見解を捨てきれなかったという。しかし、15歳のとき、四度加行において神秘的体験をし、仏教批判の非を悟ったという。仏教者としての飲光の出発である。

16歳のとき、忍網の命を受けて京都に行き、堀川の伊藤東涯に古学派の儒学を学ぶ。当時は依然として儒者による排仏論が横行しており、慈雲自身幼い頃に排仏論の影響を受けていたところから、師の忍網が彼我ともに知ることの必要性を教えたことになる。ここでは、詩を学び儒学の知識を深めたばかりでなく、古典に示された思想を古典から直接に学ぶことの重要性を改めて認識したものと思われる。その意味では、当時の復古的学問の潮流を直接意識する契機となった。

19歳になると南都の諸寺に遊学し、顕教(法相・唯識・華嚴など)、密教などを学び、元文元年(1736)河内の野中寺(羽曳野市)に籍を置き、『四分律』をはじめとする戒律の研究に目覚める。秀嚴に沙弥戒を受け、元文3年(1738年)、21歳のとき通受による具足

戒を受けた。翌年には忍網から譲られて法楽寺の住職となり、忍網より西大寺流の伝法灌頂を受ける。二年後に寺を照林にまかせると、観想に専念し、信濃に曹洞宗の大梅を訪ね、禅の修業をする。禅に成果を得ず悩むが、弟子愚黙の勧めにより正法護持のため教化の道を進むことを決める。

一旦野中寺を退いていたが、忍網の命を受け1744年（延享元年）長栄寺（東大阪市）の住職となり青龍派に復した。長栄寺を僧伽として整備し、延享3年（1746）愚黙に別受による具足戒をさずけた。これは久しく絶えていたものである。寛延2年（1749）「根本僧制」五箇条を定め、正法律を確立した。そこでは律蔵を基本とすることにより宗派の別を否定している。翌年有馬の桂林寺を兼住し、ここで『方服図儀』を著した。これは正法律復興の一貫として、僧侶の正服である袈裟を釈迦在道の有様に戻す意図があった。飲光は、高野山や堺など諸処で仏法興隆のため講義を行った。

1758年（宝暦8年）から生駒山中の雙龍庵という草庵に隠居した。禅観のかたわら、梵本を読み、やがて弟子らを集め梵語研究を行うようになり千巻にも及ぶ大著『梵学津梁』を編纂した。その内容は、密教で行われてきた梵字の呪術的解釈を排し、梵語の文法を研究して、梵文で書かれた仏教教典の原典の内容を正しく読解しようとするものであった。明和3年（1766）には、如法の袈裟を寄進してもらい千衣裁製が始まる。

明和8年（1771）請われて京阿弥陀寺に移り、在家の人々に法を説いた。これらの講義を弟子がまとめたものが安永4年（1775）の『十善法語』である。これは戒律に基づいた民衆教化の証しである。安永5年（1776）に河内の高貴寺（南河内郡河南町）¹¹に入寺した。慈雲に深く帰依した大和郡山藩主・柳沢保光の支援を受け、高貴寺の堂舎を整備し、天明6年（1786）幕府の許可を得て高貴寺を正法律の本山と定めた。高貴寺は役行者を開創とし、空海も留錫した古刹である。高貴寺において神道古典を研究して、独自の神道説を唱え、磐船神社を根本道場とした。この慈雲の提唱した神道はのちに雲伝神道または葛城神道と呼ばれた。一方で密教の研究も深め『両部曼荼羅隨聞記』や『理趣經講義』が著されている。文化元年（1804）療養のため京都の阿弥陀寺に赴くが、その地で生涯を終えた。遺体は高貴寺に運ばれ埋葬された。千衣裁製が結願するのは、飲光入寂の翌年のことである。

このように飲光の生涯を概観すると、非常に幅広く雄大な展開を見せて巨人ぶりを示しているが、その要所をあげると、空海敬慕、戒律復興、梵学研究、千衣裁製、十善法語、雲伝神道、両部曼荼羅となるだろう。正法回帰、民衆教化、神道研究、密教研究と言い換えて、飲光の関心の所在を表すこともできる。さきに述べた憲海の事跡のさまざまな部分

がこの飲光の事跡に連なっていることが理解されるのである¹²。

憲海が会津に生まれた年、飲光はまだ81歳で高貴寺にあった。飲光の遷化は憲海が出家してまもなくである。会津に正法律を伝える人物の存在も確認できず、憲海が飲光もしくは飲光の思想に接したのは豊山の交衆となって後のことと考えるほかない。従って、憲海が、正法律に接近する契機となったのは、悉曇であった可能性が高い。会津における伝承に於いても、憲海が沙弥のころから梵書に秀でたとしており¹³、豊山において先ず伝受を受けたことが確かなものが悉曇であったためである。憲海が豊山での修学中、悉曇に興味を深めて行くにしたいが、悉曇研究に大きな成果をなしていた正法律一派への関心が高まりを見せたものと考えられる。憲海の思想の形成を正法律との関わりの中に検証したい。

会津の広伝寺は、江戸本所弥勒寺末であり、これが新義真言触頭四箇寺であることはすでに述べたとおりである。そして関東の新義真言宗の僧禄をつとめていたのは、護持院である。憲海は当然この護持院を経由して本山との接触をなすことになるのだが、この護持院とともに將軍家の祈願所をつとめていたのが、浄厳覚彦（1639-1702）を開基とする靈雲寺であった。浄厳は戒律の復興に努め、また悉曇研究において知られていたため、もし、憲海が関東に於いて、戒律や悉曇への興味を示す契機があったと考えるならば、この靈雲寺を経由して、西大寺や野中寺への接触があった可能性もあるが、畿内においてこうした真言律に興味を示した形跡がほとんどない¹⁴。これに比較して高貴寺、慈光寺といった畿内の正法律に関わる寺との接触が多いところから、関東に於ける真言律への接近は考えにくい。長谷寺登山の後に戒律への傾倒を見せるようになったものと考えられる。

そして、憲海と正法律を結びつける直接の架け橋となったのは、鏝慶（図3-1）であったと考えられる。彼は武蔵国の出身で、豊山派の昇覚寺から長谷寺に交衆した。正法律一派ではあるが、豊山の真言僧でもある。後に豊山で両部曼荼羅の講義をすることに障害はない。また鏝慶は大般若経勧進を一度ならず行っており、憲海が交衆する所に前後して長栄寺、慈光寺で大般若経を購うための勧進に努めている。この大般若経勧進については、後に憲海自身が生家の檀那寺である長福寺において類似する活動を行っており、沙弥時代の憲海が会津東光寺において大般若会に関わってきたであろうことを考え合わせると、憲海の思考と通じる部分があったものと思われる。

鏝慶に師事する中で、憲海は正法律との接触を果たしたと考えられるが、豊山の交衆である憲海が鏝慶から学ぶものは、まず密教であった。報恩院流の伝法許可灌頂を受けたとき憲海は23歳、鏝慶は73歳である。この伝法灌頂は、密教において人の師となるだけの学

識見識を備えた僧侶が受ける灌頂でこの灌頂を受けた者は阿闍梨と呼ばれる。また許可灌頂は、法流の伝授を行う灌頂である。憲海がこのときまでに密教の多くを学び、阿闍梨たるべき人格を養う過程には、鏝慶の薫陶の成果も加わっていたのであろう。

憲海は師の鏝慶に、民衆教化の姿を学んだ。鏝慶の勸進は、寺に經典を備えるために民衆から寄進を募るものであるが、これは師の飲光が実践した、千衣裁製の變形と見ることが出来る。そして、鏝慶は飲光の曼荼羅講義により曼荼羅の知識を深め、後進に伝えた。鏝慶から伝法灌頂を受けた憲海は当然これを学んでいる。憲海は鏝慶との出会いによって、飲光の思想を間接的に吸収することになったのである。



図 3-1 憲海筆 鏝慶像[1928]

やがて、憲海は飲光の弟子黙住信正によって具足戒を受ける。天保3年（1832）3月のことである。師である鏝慶は三年前に、また飲光の事実上の後継者である明堂諦濡も二年前遷化しており、飲光の直弟子たちには次第にこの世を去る者が増えていた。憲海が直接飲光の訶咳に接した弟子に師事する機会は失われつつあったのである。まだ若い憲海ではあったが、ここで大きな決断により正法律の一門に加わった。場所は長栄寺であり、当然四分律による別受であったと考えられる。

次いで、憲海は慧友僧護と出会う。その契機を知らないが、京都という歴史都市との往還と、戒律に対する興味の発達から、導かれたものと思われる。まず慧友僧護という僧であるが、もともとは智山出身の真言僧で、学殖を以て知られた。飲光より具足戒を受け一時は正法律の一門となるが、まもなく一派をはなれ、高山寺での隠遁を送ることになる。

憲海は、豊山交衆の時代から京都を訪れており、恐らく版刻に優れ、古美術に強い関心を持っていた性質から、いつしか豊山内の出版事業に関わる場所があったと思われる。当時の豊山絵所は京都の森田家であり、豊山と京都の往来は何かと重ねられていたのである。京都は飲光入寂の地である阿弥陀寺があるほか、かつて真言律の復興の舞台となった槇尾や、北京律の中心泉涌寺もあって、憲海の時代からすれば、やや古層にあたる戒律復興の中心地であった。歴史遺物に興味を抱く憲海にとって、魅力的な土地である京都とのつながりは早くから生まれている。そして僧護との出会いは、鏝慶を通じた学問上の探究心によるものと思われるが、憲海と正法律との関わり方の問題においても重要な意味があった。恐らく憲海は、正法律に対する異なる視点からの意見も求めることができたためである。憲海が正法律を堅持しながらも、そのまま高貴寺一派と行動をともにしなかった大きな要因が僧護の存在にあると考える。

第2節 鏝慶と信正

憲海が文政3年(1820)2月20日慈光寺の鳳寛鏝慶より報恩院流の伝法許可灌頂を受けて阿闍梨となり¹⁵、同年慈光寺において《童子経曼荼羅図》[1146]の書写をして、独自の道を歩みはじめるようになったことはすでに述べたとおりである。豊山に学ぶ憲海と鏝慶との接点はどこにはじまるのだろうか。まず、当時鏝慶が住持を務めた慈光寺について検証したい。

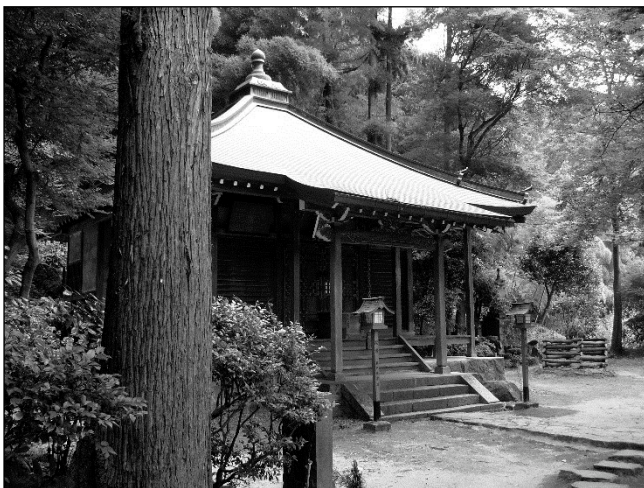


図 3-2 慈光寺本堂

生駒山の南西にある暗峠は大和と河内の境界となる奈良街道の要所である。この峠の北方に、髪切山慈光寺がある。近世では時鳥の名所として知られ、『河内名所図会』¹⁶にその

姿が伝えられるが、創建は奈良時代に遡る。役行者が生駒山近くの鬼取山で二妖を捕らえて前鬼・後鬼として使役するようになり、その頭髪を切り埋めた地に観音像と自刻肖像を安置したことにはじまる。9世紀になると、荒廃したこの寺に弘法大師が訪れ歡喜天像を勧請し、諸堂を整備したという。平安時代には葛城修験の霊場として発展したと考えられているが、室町時代後期には戦火で衰退した。17世紀に亮海により復興を遂げ、寛文6年（1666）に安信が入り律寺となる。額田の雙龍庵に隠棲した飲光が訪れ、慈雲復興の高井田長栄寺の末となり、文化9年（1812）に鏝慶が入山し寺勢が興隆した¹⁷。

修験の寺として長い歴史を持つ慈光寺だが、憲海との接点を見るならば、この寺が江戸時代に律寺となり、正法律一派としてそこに鏝慶が入寺していたことを理由と考えるほかない。

鏝慶について記す基本文献としては、慈光寺が所蔵する《当寺中興鏝慶大和尚像》¹⁸の表具裏識語が重要である。この鏝慶像は文久元年（1861）の鏝慶の三十三回忌のため万延元年（1860）に唐招提寺弥勒院の本常の依頼により憲海が描いた紙本着彩の肖像である¹⁹。表具裏の本常による識語は次のようなものである。

「正法律中鳳寛大和上、姓新屋氏、諱鏝慶武州葛飾郡東浮田邨人也。初其生国東葛西領浮田邑中割昇覺寺、後移河州髮切山留錫数十年、中興慈光寺、師嘗習瑜伽教於豊山究野沢諸流之源底於是、遐邇、欽慕徳風蒙伝法許可密印者数百人也。就中吾受法之阿闍梨耶覺深尽求法之誠受地藏院流重秘印。可瀉瓶尽底余雖不敏宿縁多幸而親受其正嫡。今年丁卅三回忌辰恭画尊像開眼供養聊以報高恩永寄納慈光寺宝庫。伏願後來当山住持大徳体予微微永守護之。云爾。」于時文久改元龍集辛酉十月穀旦」前住和州野原金剛寺」現住南京招提弥勒院」相似比丘法住本常焚香拜識」

鏝慶の出身地が現在の東京都江戸川区葛西であること、郷里の昇覺寺に剃度したと思われること、豊山に修学したこと、その後慈光寺に移ること、が記されている。昇覺寺は新義真言宗豊山末なので、鏝慶が豊山で所化として修学したことはきわめて自然である。『慈雲尊者全集』の「正法律中四衆伝」に鏝慶の略伝が見える。

「二十七 鳳寛鏝慶律師。河州中河内郡髮切山慈光寺一代なり。律師は武州葛飾郡西領浮田村に生る。邨人也俗世は新屋氏。幼にして同村昇覺寺に入て剃染す。遙かに尊者の道声を聴て来りて正法律中に入り尊者に随て具戒を受け。尊者に随侍すること数年。律を学び密教を受く。寛政七年尊者高貴寺に於て両部曼荼羅を伝授せられたる時律師亦受者の列に在り。後河州髮切山慈光寺に於て寂す。寿八十二。弟子二人あり。一は岳音圓智と云ひ。

一は琢心亮有と云ふ」²⁰

この略伝により鑿慶が飲光に具足戒を受けていることがわかる。鑿慶がいつ進具したのか明確にはされていないが、寛政7年（1795）に曼荼羅伝授を受けていること、進具のうち数年は飲光に随侍したとの伝から、曼荼羅伝授の時期とそれほど離れていないと推測される。昇覚寺の記録では、天明5年（1785）に昇覚寺の住職となり、梵鐘鑄造と鐘楼建立に携わり、寛政6年（1794）に伝法灌頂を受け、文化6年（1809）に昇覚寺を辞したとしている²¹。もうすでに多くの受法を重ねているはずの年齢である寛政6年に態々伝法灌頂の受法を記すのは不自然であり、これが飲光に進具した年かもしれない。昇覚寺の伝承では鑿慶が正法律一派であること明確にしないため、不自然な伝承となったものであろう。《当寺中興鑿慶大和尚像》の贊²²にも鑿慶が82歳で入寂したことが記されているので、寛延元年（1748）の生まれである。

鑿慶が行った大般若経勧進の実態については、藤井直正²³、尾崎安啓²⁴などにより研究が進んでいる。憲海自身も長福寺において大般若経寄進に関わっていることから、両者にとって大きな意味を持っていたことが推測される。鑿慶の大般若経勧進について触れておきたい。

『大般若波羅蜜多経』というのは大乘仏教における基本的な教義を編纂した經典群で、7世紀に玄奘が中国にこれを持ち帰り漢訳したものである。600巻余りの大部なこの經典を寺の経庫に納めることは、堂塔伽藍や仏像の建立にも比べられる大事業であった。大般若経勧進とはこの經典を購うために資金の寄進を募ることである。

鑿慶と大般若経勧進との関わりは、文化4年（1807）に故郷の昇覚寺で行ったものに始まる。次いで行われたのが文化8年（1811）高井田長栄寺におけるもので、黄檗山萬福寺塔頭宝蔵院が所蔵する鉄眼版一切経いわゆる黄檗版の大般若経寄進のための勧進を行い、長栄寺周辺の茨田郡や讚良郡からの寄進者から勧進を受け安置した。そして文化13年（1816）には慈光寺でも行うのである。鑿慶は自身が住持となった寺に大般若経がなければ、必ずこれを勧進していることになる。鑿慶に独自の経営の才があったと考えられるが、また一方で、寄進者を募るため寄進の功德を地域の有力者に対し熱心に説くことは、広く多くの人々との結縁を實踐する民衆教化の活動でもあった。そして、大般若経を納めた後は大般若経転読会を行い、所願成就の祈願をする。このとき本尊とされるのが釈迦十六善神像である。

能満院に入った憲海は嘉永7年（1854）郷里会津赤津の高巖山長福寺に会津巽三郷から

の寄進により黄檗版大般若経を奉安し《釈迦十六善神像》寄進を行った²⁵。この寺は憲海の出自たる半沢家の旦那寺である。寺に大般若経を安置することで大般若経転読会を行うことができるため、憲海が生家の在所に対する安寧を祈願したものと言えよう。憲海の師鑊慶の場合も、大般若経勧進においては、檀家らに対して勧進の功德として先祖供養と家運隆盛を進めたというところから、憲海も師たる鑊慶の事業に倣うところがあったと考える。憲海の事跡において述べたとおり、憲海が剃度を受けた広伝寺は、会津藩領内の東光寺を兼帯していたと考えられる。この東光寺には大般若経が備えられていたため、大般若会が行われていたと考えるのが自然である。14歳で長谷寺に交衆した憲海が広伝寺において沙弥として過ごした時間は決して短いものではなく、兼帯されていた東光寺で大般若会が行われていたとするならば、それは、憲海にとって原体験に近いものであったと思われる。

能満院工房では釈迦十六善神像を制作することが多かつたらしく、憲海のみならず、大成、宗立、雲道の粉本がある。長谷川家の粉本を使用することが多かったようだが、会津の観音寺²⁶の絵像を憲海が写した粉本²⁷も遺されており、この粉本に捺された印が長谷寺修学時代のものであることから、比較的早くから収集の対象となっていたことがわかる。

このような鑊慶の略伝と憲海との共通点を見つけようとすれば、正法律、飲光、空海、長谷寺、両部曼荼羅などさまざま複数の言葉が浮かぶ。鑊慶が豊山出身であることが、まず鑊慶と憲海を結びつける最初の接点であったと考えるべきだろう。

この画像に関わる粉本が能満院粉本に遺されている。ひとつは文政10年(1827)5月に憲海が鑊慶に拝面して描いた寿像である。この《鑊慶像》[1928](図3-1)は胡粉による修正が加えられた画稿で、完成作品と同じ図様を見せる。この粉本には「鑊慶大和尚。文政十丁亥五月参上拜顔奉摸壽像。文政十二己丑年十一月廿六日入寂八十二歳。觀法^レ者易^レ^レ而難^レ修^レ、五十餘年不怠^レ觀、夜分^レ月輪常恒^レ現^レ、晝^レ入^レ三昧^レ閉^レ眼^レ顯^レ。

文化13年(1816)に19歳の憲海は長谷寺月輪院主から悉曇の伝授を受けており、新たな学問の方向を模索していたことが考えられる。この年鑊慶は慈光寺に於いて大般若経600巻の勧進を行い弘通に努め、その一方で前年から伝香寺、慈光寺、高貴寺と律寺にお

いて真言三部経や『法則集』の書写を行い、かなり積極的な研究活動を行っている。憲海もこの頃から長谷寺において主坊となり初登山の沙弥らを管理する側になり、時間の自由度が増したこともあって、諸山を訪れ図像聖教の書写に従事するようになる。鏝慶の資質が憲海に与えたものは大きかったと考えられる。

次に、憲海が進具した黙住との関わりを考えてみよう。憲海の進具はある意味で唐突なものである。憲海は豊山交衆として在山 22 年を数えていた。真言密教者としても様々な伝受を受け大阿闍梨として十分な学殖を備えている。その彼が進具を決意した契機のひとつは鏝慶の入寂であったと考えられる。文政 12 年 (1829) 慈光寺において鏝慶が遷化すると翌年には高井田長栄寺の明堂諦濡が遷化した。飲光が入寂して二十数年が経っており、飲光の直弟子も次第に遷化する者が重なり、高貴寺の初世、二世が入寂したところで、憲海はその法系に連なる道を選んだことになる。この時、慈雲直弟子で一派の中に留まっていたものは黙住信正、智幢法樹、宝静僧誘に限られる。信正は、この三者の中で最も早く進具しており、40 年近く正法律を護持していた。僧誘はむしろ唐招提寺の僧として南都律宗の学風が強かったため、自ずから信正がしかるべき存在として意識されたのであろう。

信正については「正法律中四衆伝」に収録される伝記がよく知られているため、これをまず掲げておく。

二十四 黙住信正律師

濃州山県郡加野村西光律寺の中興なり。尊者に従て具戒を受け。寛政七年四月尊者を濃州西光寺に請して結界法を行ふ。唱相の文別にあり。文政十三年九月明堂和上の示寂に依り長栄寺第五世となり。後高貴寺々務第三世となり。寺務三年にして天保四年癸巳十一月二日長栄寺に於て示寂。寿六十九。臘三十九夏。長栄寺に葬る²⁹

この略伝に見るとおり、信正はその本幹出自明らかではない。「正法律中四衆伝」の諦濡の項によれば「剃度の弟子。黙住信正律師（長栄寺第四世。高貴寺僧坊事第三世）（下略）」³⁰とあって、諦濡を師としているところから、安永 9 年 (1780) に諦濡が長栄寺第四世となって以後、飲光によって進具するまでの間に信正は剃度を受けていることになる。『密教大辞典』では「正法律中四衆伝」を典拠として記事を編集しているが、同書に資料として収録される「長栄寺世代届」の「黙住。明堂ノ弟子。」とある記事を、誤解して略伝を編集しているため、信正が「後に諦濡に師事せるものの如く」と記しているのは誤りとしなければならない。今遺されている記録から考察する限り、信正は諦濡により剃度し、飲光によって進具し、濃州西光寺を中興したということになる。信正と諦濡の年齢差は 15 歳で

あり、信正の出家が比較的遅いものであった可能性をうかがわせる。

したがって、信正は諦濡入寂の天保元年（1830）までは、美濃西光寺にいたはずであり、信正が長栄寺に入るまで、憲海との接点は見だしにくい。また、憲海旧蔵品の中に信正に関わるものがほとんどないため、憲海に対する学問的影響を確認することも困難である。憲海は高貴寺への訪問は多いが、高井田長栄寺訪問の痕跡は少ない。長栄寺は師鏝慶とも所縁の深い寺であるため、接触がないとは考えにくい。唯一年紀不明ながら長栄寺に移築された慈雲の遺構禅那台の詳細な記録によって、憲海と長栄寺のつながりをうかがうことができる程度である。この《高井田長栄寺慈雲和上禅那台図》[1325]は、憲海の署名印影はないが、実際にその場で採寸した様子を示し、写本ではなく憲海が直接記録したものと考えられる資料である。憲海の正法律への接近は、正法律一派への接近というより飲光の思考への帰依によると考えられることから、鏝慶に引き続き諦濡が遷化して、飲光と直接つながる道が断たれようとしていたことが、信正による進具に帰結したと考える。



図 3-3 長栄寺 山門

信正は、諦濡に剃度し飲光に進具し、西光寺を律院とした。正法律の王道を示す律僧である、しかもその性は黙住の名のとおり極めて寡黙である。鏝慶のような派手さはないが、正法律の興隆には極めて熱心であったことは、三年間長栄寺で住持を務める中で憲海を含む 6 名の進具者の戒師をつとめたことでもわかる。これは信正の先代にあたる諦濡が 50 年間で 36 名の戒師となり、また法樹が、二十一年間で 38 名の戒師となったことに比すれば、むしろ積極的であったというべきであろう。憲海は、信正と長く接することはなかったと思われるが、この寡黙な律僧の姿に、宗教者としてのあるべき姿を見だし、安心の内に進具したと考える。

第3節 高山寺と僧護

憲海と正法律の結びつきを考える場合、高山寺の僧護の存在は極めて大きい。僧護については『密教大辞典』の「僧護」の項の記述の典拠とされる「正法律中四衆伝」の記述がよくまとめられたものとして流布している。同書は略伝を記した後、関連する資料を収録して、僧護については、最も充実した資料となっている。まずその略伝部分を紹介する。

四十三 恵猷 僧護律師 捨戒

律師諱は僧護。名は慧猷。又は慧友と書く。伊賀国上野に生れ京都智積院謙順師の弟子となり。享和二年正月十五日（廿八歳）宝静師と共に京都阿弥陀寺に於て慈雲尊者に従て進具し。後故ありて捨戒して一派を離れ洛西梅尾高山寺に隱栖す。弘化五年戊申二月智積院大衆の請に應じて同院に於て伝法院流及び保寿院流を伝授す。嘉永六年癸丑七月十日寂。寿七十九。弟子密護。證成の二人あり。密護は同山吉祥雲院に任し證成は十無盡院に任す。高山寺蔵中に律師の肖像画あり。像の上に自ら題して云く。

八十年ノ飯帛子。蔭松區石幻夢ノ身。吁呼華嚴高山之月。眞言清瀧之水。古徳ノ所謂外ニハ風煙山水。内ニハ妙慧深禪。樂哉。沙門慧友金剛自題」と。以て其の人となりを知るべし³¹

この略伝からわかるとおり、僧護はもともと新義真言宗智山派の僧であった。28歳で京都阿弥陀寺において飲光により進具し、正法律一派に加わった。このとき僧護とともに具足戒を受けたのは宝静僧誘（1765-1843）である。後に唐招提寺第七十五世長老職となる僧で、法金剛院の住職をつとめ壬生寺の輪番もつとめるなど、京都においても重要な役割を果たした律僧である。一方僧護はその後、捨戒して正法律を離れ、高山寺に入り隱棲する。

僧護の伝記を紹介している『梵学津梁総目録』の「願海付記」についてはすでに紹介した³²。この中で願海は僧護の弟子から伝え聞いた僧護の伝記をまとめている。この記事は上記略伝を補う内容を記し、「正法律中四衆伝」中にも収録されている。管見のかぎり、僧護の最も古い略伝となる。

此の慧友名ハ僧護遮梨。よほどの人にて其年二十代前後には西東に奔走し諸名匠の門に遊び道を問はれしよし。慈雲和上の門にも從遊し。法護。諦濡。一雲諸師と周旋し其化を輔けられしこと也。爾るに一雲慧友兩師は所以ありて慈雲和上の門を去り。（中略）慧友師は当山に隱遁せらる。此の時二十八才と云。それより後遷化に至るまで中間四十余年不出山門。日夜孳々として仏法紹隆の計りごとにのみ思をかけられ。或は

行道し或は讀書し禪坐し焚膏油以繼晷云フ。常其徒に申されしには。本朝中葉以来
密教掃地眞実修の人稀なることにて。世に密教者と称する人を見るに。法華供又
は聖天の花水供養法何千坐何萬坐成就などゝいかめしく申しなすこと。誠に聞も苦し
きことなり。悪きことにはあらざれども仏祖の遺教零落の秋にあたり祖風を挙揚する
に志なく徒に仏飯を費す。豈為法為人の人ならんや。仏祖の罪人と云て可なり。盜人
の昼寝と同日の談なり。しかのみならず密教の本意は事相を事とするにては無之。
如実知自心にて自己の脚根下を掃除し看破するこそ肝要なれ。爾るに当今はその何千
坐何萬坐修する人すら稀なれば。いよいよますます法門の廢弛は知れたり。可悲々々。
それゆへ師は生平五相成身の觀門に心をかけられ。眞俗萬般の暇常に閑所にこもり坐
輝のみ致されしよし。其行実を聞くたびにになつかしくこそ。遷化は嘉永五壬子七
月十日也。享年七十九歳と云。遷化の前七日八日迄は其徒の為に菩提心論を講せられ
しよし。遷化の日をもほゞ覚知せられ。葬事萬般の事ども用意せられ。後事をも残る
所なく遺言せられ。眠れるが如くに終られきとかや云々³³

この記事により、僧護の人となりが朧けながら明らかになる。まず僧護は若くして諸山
を訪れて幅広い学問を求めていること、その過程で正法律に出会い進具したこと、やがて
正法律を去ること、高山寺に入って後は40年以上山を下りることなく、学問と座禪行道に
専心したこと、当時の密教者の在り方に非を唱えることなどが、その主要なものとなろう。
就中「密教の本意は事相を事とするにては無之。如実知自心にて自己の脚根下を掃除し
看破するこそ肝要なれ。」という言葉は、捨戒した僧護の思考の本質をあらわすものとして、
むしろ飲光の思想を継承する態度を見ることができる。僧護の捨戒の理由は、ここでも明
らかに伝えていないが、願海付記に法兄一雲の名があげられていることと何らかの関係が
あるかもしれない。

一雲は法諱を龍乗という、略伝は弟子玄乗の記したものが「正法律中四衆伝」に収録さ
れ³⁴、これは『密教大辞典』の「龍乗」の項の典拠となっている。備中連嶋（現岡山県倉
敷市）に生まれ、同国法輪寺で剃度し、宝島寺で真染より伝法灌頂を受ける。19歳で高野
山にのぼり三年を経て下山し、高貴寺にのぼって飲光より具足戒を受ける。師の命により
京都阿弥陀寺の輪住をつとめるが事件があつて正法律を離れることになり。流浪の後洛西
三宮寺を再興し同地で入寂したという。龍乗が阿弥陀寺輪番をつとめたのは享和元年(1801)
4月から翌年の8-9月頃とされている。このとき輪番を辞することになった理由として考
えられているのは、洛西長福寺の皓月尼を破門する論議に関わるものとしている。

皓月宗顛は、莊林維樹の娘で伏見宮貞行親王の侍女である。長福寺を尼僧の律寺とし、天保4年(1833)5月19日に78歳で入寂している³⁵。このとき皓月尼がいかなる理由で破門を論議されたかは記録がないが、龍乗が正法律一派から離れざるを得なくなったことについては不本意なものであったことがわかる。しかし、龍乗の飲光に対する敬慕に変わりはなく、正法律の護持は揺らがなかったという³⁶。願海付記中僧護を語る部分の中に龍乗に関わる記述がある。「一雲師は学内外を兼ね梵学はその所好にて尊勝<梵字3字:dhaaraNii>の行者なり。長日尊勝供を課し。その上に月々尊勝<梵字3字:dhaaraNii>一萬返の月課也。」³⁷とあって尊勝陀羅尼の行者であることがわかる。僧護はこの一雲にも親しんでいたことが記されているが、この事件の最中に僧護は進具しているのである。僧護が後に戒を捨てる原因をこの事件に求めることはさほど困難なことではない。



図 3-4 高山寺 開山堂

願海が記すとおり、僧護は高山寺において、聖經の整理に業績をなした僧である。憲海は文政10年(1827)に高山寺十無尽院を訪れている。9月に高辨所蔵本である『大悉曇章』(書-004)を書写していることから、山内の文化財に明るく三尊院に住持しながら十無尽院主を兼帯した僧護と憲海が出会ったことがわかる。馬淵和夫によればこの『大悉曇章』は『中天悉曇章』と呼ばれる写本にあたり、空海自筆もしくはそれに近い時期の写本の可能性を考えられている³⁸。京都府立総合資料館にある『中天相承悉曇章』³⁹は憲海書写の翌年に何者かが憲海自筆本から写した写本である。この書物の奥書「文政十年丁亥七月廿日前行開白乃至九月廿一日梅尾山高山寺十無盡院隨惠友僧護阿闍梨傳授書写轉章了 同廿八日以明惠上人御本奉書寫畢 求法弟子無言」を見れば、この年7月20日にはじまり9月21日までに僧護より悉曇十八章の伝授を終えたことがわかる。本書の書写は単なる借覧書写ではなく伝授を伴うものであった。

このとき憲海は30歳になっていたが、僧護との出会いは双方にとって意味があったようである。翌文政11年（1828）から僧護は方便智院旧蔵の両部敷曼荼羅の模写を開始する。この模写は翌12年6月に終了しているが、この事業に助筆したのが憲海であった。両部曼荼羅については、師鑿慶が寛政7年（1795）に飲光から講義を受けており、翌年には『両部曼荼羅随聞記』が成立して正法律一派における曼荼羅研究に成果が現れている⁴⁰。僧護が正法律に近づいた時期は、飲光の曼荼羅の思想が色濃く定着するところだった。僧護は憲海に出会い、正法律一派の曼荼羅を継承することを知ったのであろう。憲海の両部曼荼羅研究が深化していることがわかるが、憲海が僧護の補助をつとめることを可能とした理由を考えれば、鑿慶からの伝法灌頂にともなう学修がその基盤となったことは明かである。

『梶尾山伝授次第』（書-072）は憲海が梶尾で書写した文献である。内容は「文殊師利菩薩念誦次第」「善財善交法」「善友持念法入我々入観」「病中并夜所作 空達上人撰」の四つの書物を綴じたもので、二回に分けて書写した書を後に綴じ併せた書冊と考えられる。「文殊師利菩薩念誦次第」は建仁2年（1202）に高辨が書写した原本を文政9年（1826）僧護が校定し弟子密護に授与したもので、憲海は文政12年（1829）5月に長谷寺において書写している。密護所持本を借覧のうえ長谷寺で書写したことになる。他の三本は文政11年（1828）7月に高山寺十無尽院で、僧護のもとで書写している。「善財善交法」は建仁2年9月に紀州糸野において高辨が収集した「華嚴入法界頓證毘盧遮那字輪瑜伽念誦次第」と「華嚴四十二字門修行念誦次第」に同月頭印が「華嚴経心陀羅尼」を加えたもので、寛文9年（1669）に永辨が石水院にあった頭印所持本より写したものである。「善友持念法入我々入観」は天和元年（1681）11月に、石水院経蔵にあった空達定真自筆の「病中并夜所作」を延宝3年（1675）7月に永辨が写したものである。つまり、これら3種の書籍は高辨の弟子の写本を江戸期に高山寺復興にあたった永辨が書写した写本ということになる。全部で4種の写本は皆高辨に繋がるものであり、憲海もまた高辨の思想に触れていたことを確認できる。憲海は僧護よりこれら華嚴宗に関わる作法を学んでいたことがわかることから、両者のより緊密な関係がうかがえる。

文化9年（1812）9月16日僧護の師であった智積院謙順は梶尾山報恩院で入寂した。謙順は高山寺復興のため多くの資金を寄付し、最晩年に智積院を出て高山寺に隠棲した理由は弟子の僧護がいたためだといわれる⁴¹。高山寺と智積院の関係が僧護を介して強いものとなっていることがわかる。『智積院誌』に書かれているとおり、運徹や信盛をはじめとする智積院代々の学匠は他山に学び、特に南都俱舎唯識の研究を行った。やがて南都の学問

が衰退すると、これらを学ぶため逆に南都や三井叡山の学僧が智積院を訪れるようになり、浄土日蓮禅真宗といった鎌倉新仏教の流れを汲む学徒が智積院で学ぶことが常態化した。そのため「古義及び南都、天台宗の人師の中にはいつしか智山に親み、両三代の後には他宗他山の寺に、智山の僧侶が移住するに至れり。」⁴²という事態が生まれたという。

高山寺は、中興である高辨が建永元年（1206）に後鳥羽上皇から華嚴宗発展のために下賜された寺である。高辨自身東大寺戒壇院で進具しており、華嚴教学の研究をも行ったが、高山寺に入ってから後は、ただ華嚴の教学を研鑽するにとどまらず、戒密禅兼修の道場と位置づけている。この高辨の精神は高山寺に生き続け、僧護の精神も基本的には高辨に共鳴するものであったと考えるべきである。それは、飲光もまた戒密禅兼修していたことと重なるのである。高辨入寂後の高山寺は中世の戦乱の中に翻弄される。応仁の戦乱の中に交通の要所にあつた高山寺は軍事拠点として占拠されることが重なり、そのうえ戦乱に巻き込まれた仁和寺心蓮院信嚴が高山寺に避難して以後、仁和寺の勢力が高山寺に浸透し抗争の原因となった。やがて天文16年（1547）の細川晴元の高雄攻めにより高山寺の伽藍の大半は焼失するのである。この衰退により、高山寺の学風も被災を免れた経蔵の存在を頼りにただ命脈を保つばかりとなった。江戸時代に入り、寛永年間、仁和寺覚深の発願により、仁和寺子院真光院の本堂が高山寺に移築され、復興の兆しが見えるが、このとき覚深は『高山寺置文』を定め、その中で広沢流を本流とすることを定めており、古義真言宗の寺となっている。

僧護と憲海のかかわりの中で興味深いのは、袈裟に関わる資料である。袈裟をはじめとする僧衣については、飲光が律蔵の文献のみならず、仏像や仏画に描かれている袈裟も研究して宝暦元年（1751）『方服図儀』を著し⁴³、釈迦在世の僧衣の在り方に基づいた服制について研究している。憲海においてもこの服制に対する信奉は大きな主題となっている⁴⁴。飲光の考えによれば、正法すなわち釈迦の教えそのままを実践するために僧侶は思考のみならず、その着衣や振る舞いも改めなければならないとする。現在の僧侶が着用する袈裟は、律蔵で定められた形状や材質また着衣法と異なっており、これを正しい姿に改め、僧侶のあるべき姿を求めるというものである。その成果を普及するため、千衣裁製を発願し「如法の袈裟」と呼ばれる袈裟の寄進を受けこれを配布したのである。憲海と同じく正法律に進具した海如が、この「如法の袈裟」に従って自らもまた千衣の施与を行ったことは、知られるところである。

嘉永3年（1850）5月に憲海が書写した袈裟図がある。包紙を除くと《鑑真請来九条袈

袈図》[1520]《鑑真請来五条袈袈図》[1521]《聖武帝五条袈袈図》[1528]《鑑真九条袈袈図》[1519]《行基僧祇支図》[1525]《解脱上人五条袈袈図》[1518]の6枚が残る。《解脱上人五条袈袈図》には「以上法衣図七枚。前法金剛院兼招提長老寶静律師所集也。梅尾山方便智院慧友阿闍梨耶親授。拜写之了。」于時嘉永三庚戌五月朔日。皇都室町山王寺寓居。無言藏」とあり、宝静の袈袈図を僧護が所持しており、これを借用して憲海が山王寺で書写したものとわかる。この宝静という僧は、僧護とともに飲光より具足戒を受け、後に唐招提寺長老となった人物として先に述べた。その封紙[1524]には「方服袈袈圖。無言藏。包帋表ニ云。招提寺重鎮御袈袈図。先年雖摸之。今又改再摸之。天保三年。寶静」とあり、僧護が所持したのは天保3年（1832）に宝静が、自身の所持本より再写した粉本ということになる。ただ《聖武帝五条袈袈図》には「天保八酉年五月十三日。東大寺真言院智隆法印ヨリ借受寫之。招提寺長老。寶静」とあり天保8年（1837）に東大寺真言院智隆所持本を借覧して追加しているので、僧護が入手したのはこれ以後ということになる。正法律に進具した僧護と宝静が、一方が捨戒しながらも長く交遊を保っていることが理解されるとともに、正法律の流れの中に継承される如法袈袈への意識が、僧護においても課題として重視されていたことがうかがえる。憲海が縫製の術に優れていたとする伝は『智積院誌』記されるとおりで、法衣は自ら裁縫したことが伝えられている。憲海自身が早くから僧衣について興味をもっていたことは、文政9年（1826）2月は豊山小池坊に於いて亮恭の許可を得て《本朝法中衣服図》（書-141）を謄写していることからわかる。憲海の服制への興味を伝える初期の活動である。

肖像が多く遺される飲光の場合、その法衣が如法袈袈であることを理解しやすい。憲海の縫製する袈袈が如法袈袈であったことを確認できる資料はないが、粉本中に僧侶を写生した《僧形図》[2333]があり、この像が通肩であることは、この工房において如法袈袈が使用されていた状況証拠となろう。通肩は座禅を行う時や在家に対して話をするときに行う着用方法で、偏袒右肩のように、尊敬の対象となる僧や尊像を前にする際に行う着用方法は区別されており、飲光はその規定を厳密に守ることを主張していたためである。

智積院にいた僧護が高山寺を訪れたのは享和元年（1801）という。飲光に進具する以前に高山寺に接近しているところを見ると、僧護にはその根本的なところで、既存の仏教界に対する批判的な精神を秘めていたと考えられる。もとより高山寺は開山堂や御廟を中心に復興を始めており、高辨の精神を護持することを存在理由としているところから、華嚴教学の研鑽は欠くことのできないものであった。先の『智積院誌』が記すとおり、南都教学

研究の場として智積院は存在していたから、古義真言の寺としながらも僧護が入ることは意外な事件ではなかった。彼の中では当時の仏教界に対する諦めと、その中で仏教者たる自身の生き方を模索するうちに、ひとつの方法として正法律に加わることが選ばれたということであろう。僧護にしてみれば、古徳高辨への敬慕が、飲光の思想に重なったことが重要な意味を持っていたと考えられる。僧護が正法律を離れた時期については記録がないが、僧護の思想面から考えれば、飲光その人が遷化した後は一派に加わる理由はなかったとも考えられる。正法律一派における捨戒は、あくまで正法律一派からの視点に立つものといえる。

このように考えると龍乗破門の一件は、あるいは飲光の思想に起因する問題というより、彼らが形成した組織というものが本質的に持つ、不合理な部分が露呈した結果であったのかもしれない。僧護が高山寺に入ってのち最晩年まで下山することがなかったのは、単に高辨への思慕の強さばかりが理由ではなく、仏教宗団と僧侶である自身の関わり方についての本質的な葛藤がそこにあったと考える。だからこそ、晩年の弘化5年（1848）に山を下り、智積院で伝法院流・保壽院流の伝授を行ったことには意味がある。謙順が晩年僧護のもとに身をよせ、高山寺復興に協力したことは、僧護の学殖が智山の中でも高く評価されていたことの証しであろう。当然それまでも山内から僧護に対して下山の誘いがあったとして不思議はないが、僧護は四十年余り下山していない。その僧護が弘化5年に下山した理由のひとつとして考えられるのが、憲海の入洛である。

先の略伝でも述べたとおり憲海は大成を伴って弘化4年（1847）までに入洛している。6月に關伽井坊舎で憲海は《瑜祇三昧耶形》[1223]を写しており、入洛後初めてその足跡を高山寺に現した。このとき憲海50歳、僧護73歳、憲海の師僧でただ一人存命していた。高山寺に憲海が滞在した期間はさほど長いものではなかったらしく、6月29日には弟子現光が長谷川本を写しているので洛中に戻っている。僧護と憲海の師弟がどのような話をしたのかはわからないが、憲海が自身の大願を語ったことは疑問の余地がない。僧護は当然高山寺に留まる道も説いたはずだが、憲海の意志を僧護も感じ取ったものと思われる。憲海の意志はこの高山寺では果たし難いものであった。この時の憲海の大願については第4章に述べる。

憲海が智積院末の能満院に住持として入ることができたのは、僧護が智積院を訪れたことに端を発すると考えている。僧護が下山したのは憲海と出会った半年後の弘化5年（1848）2月である。このとき僧護が智積院を訪れた理由は伝法であったが、その真意は憲海の事

業に対する協力の依頼であったと考える。憲海にとってかつては学僧として訪れた智積院が、僧護のとりなしによって事業の協力者となる道が開けるのである。嘉永元年（1848）12月には智積院西光院俊光の依頼で描かれた《弥勒菩薩像》[522]が届けられている。描かれたのが本画であったのか校合済み粉本であったのかはわからないが、この時には憲海と智積院の間につながりが生まれていることがわかる。以後憲海は僧護の依頼によって再三智積院に足を運ぶことになるが、こうした活動によって、次第に智積院との結びつきが安定していったことが理解される。

そして憲海が高山寺を辞してすぐに向かったのは、長谷川家である。弘化4年（1847）6月23日に大成が「於長谷川写之」と記す《龍図》[1362]の存在からわかる。長谷川家に滞在した憲海、大成、現光は多くの長谷川本を模写している。やがて8月10日にはじめて山王寺の名が粉本に現れる。ただ、山王寺に於いても長谷川本を模写し続けているところから、この拠点の移動は、本質的な状況の変化ではなかったと考えるべきであろう。憲海らはこの山王寺を拠点にして精力的な粉本の収集を開始するのである。この山王寺ではもちろん長谷川家の粉本を模写したが、それと同時に、高山寺の所蔵品も数多く模写している。僧護が憲海に極めて協力的であることがよくわかるが、この間に智積院との間で能満院住持の件が交渉されたのではないかと考える。

粉本の年紀から考えると、嘉永3年（1850）の冬から翌4年の夏までに憲海は能満院に移っている⁴⁵。これは、以前山王寺に寄寓したのとは異なり、住職として入ることになるために、生活の環境は大きく変化するところとなったはずである。智積院は第三十七世信海能化である。どちらかといえば教学興隆に対して積極さを欠いていた第三十六世範恵能化に比べると、信海は南都の教学を修め、根来寺の学問を興して、著作も多数見られる学匠であり、憲海の大願についても理解を示して不思議のない人物である⁴⁶。信海が能化となったのは嘉永3年9月24日であり、時期的にも智積院山内の変化と憲海らの行動が呼応している。また、信海は龍肝に伝受を受けていることが伝えられており、憲海の法兄にあたることなど、憲海に対する智積院側の協力態勢が整ったことがうかがえる。憲海の事業が実現するためには、高山寺と智積院双方の協力が必要だったのである。

こうして僧護と憲海の関係を性状において見れば、共通する部分により絆を強め、相容れがたい部分により異なる道を選ぶといえる。それは両者の正法律との関係の持ち方とも結びついている。

第4節 豊山能満院海如

憲海が師事した三人の師はそれぞれが、独自の方法で正法律との関係を見つけた。鏝慶は進具したのち独自の方法で律寺を守った。僧護は進具した後これを捨てるが、飲光の精神は継承した。信正は正法律一派の中でこれを守り、戒師として弟子に伝えた。憲海はおそらくこの三人の師から、それぞれに学ぶところを得ていると考えられるが、憲海の進具には、もう一人重要な人物が関わっている。憲海の5歳年下の光雲海如の存在である。これまでも海如の名は一ならず登場している。憲海の弟子としての姿である。しかし、実際のところ海如は憲海と同じ正法律一派として、密教者と律僧の両面で重要な活動を行ったことで知られている。この師弟であり同朋であった両者の関係は憲海の思想を考えるうえで、きわめて示唆に富む。

光雲海如ははじめ興雲如海といった。享和3年(1803)上総国望陀郡矢那村に生まれ、七蔵村の徳蔵寺に出家した。文政2年(1819)17歳にして豊山に登り、徹英の密教灌頂を受け、天保5年(1834)河内長栄寺智幢法樹(1775-1854)に進具し、正法律を護持する。天保7年(1836)本来学寮であった能満院に入りこれを律院とした。高貴寺事務七世もつとめ、長楽寺の再建を行うなど正法律一派においても事跡を残している。元治元年(1864)に院を退き、地蔵の本願を説いて民衆教化につとめるようになり、明治6年(1873)に入寂した。簡単にその伝記を述べればこのようになる。海如については田中海応が編纂した『海如和上傳』が詳しいが、その伝記の基礎資料となるのが、徳蔵寺に建立された「光雲海如和上碑銘」である。『密教大辞典』の記事は本碑銘を典拠としており、これに従い海如についてももう少し詳しく紹介したい。

光雲海如和上碑銘

師諱ハ海如。字ハ光雲。上総国望陀郡矢那村ノ人。父ハ露崎磯二。師ハ其ノ二男也。始メ母身ム事有テ得男ヲ得ハ僧ト為ント誓フ。既ニシテ師ヲ生ム。幼ニシテ葷肉ヲ喜マズ。嬉戯群兒ニ異リ。年甫メテ七歳村之徳蔵寺尊慶ニ投ジテ得度ス。文政二年己卯師年十七豊山ニ登リ。徹英闍梨ニ就テ灌頂入壇ス。爾後力学精修ル事十数年。頗ル顕密ノ蘊ヲ究ム。且ツ内州長栄寺智幢和上ニ就テ律蔵ヲ學ビ。尤モ精研シ焉。油鉢違フ事無シ。天保七年丙申豊山能満院ニ住持タリ。院ハ旧学寮ナリ。故即同僧正殊ニ改テ律寺ト為ント欲ス。功ヲ終ヘ不シテ寂ス。師之席ヲ董スニ當テ。是ニ於テ三世。律規初テ備ル。蓋シ師毘尼ニ精キヲ以。山衆師ヲ居エテ以衆之儀表ト為ス也。師道ヲ求ル

事精励。笈ヲ負ヒ錫ヲ杖テ耆宿ヲ訪尋シテ。野澤ノ諸流伝授幾ト盡セリ。平素人ヲ誨ルニ諄々トシテ倦マズ。為ニ灌頂壇ヲ開ク事亦数回。其ノ授法ヲ得ル者千有余員。元治元年乙丑十二月師年六十二院務ヲ辞セント請フ。山主其功績ヲ嘉シテ之ヲ聽ス。然トモ度他之行老テ而益々勤ム。錫ヲ都鄙ニ曳テ所ニ随テ遊化シ。常ニ地藏薩埵ノ本願ヲ説テ衆ニ勸ム。道俗化ヲ蒙ルモノ其幾百千ナルオ知ラズ。又嘗テ塔ヲ作テ施ス。或ハ石或ハ塑其数則阿育王ニ倣フト云。宗租一千年忌之時。師手紺紙金書ノ兩界法曼荼羅一千帖ヲ作り。又函数十ヲ刻シテ。之ヲ有信ニ施シ以テ供養ニ充ツ。又或袈裟千余ヲ製シテ僧衆ニ供施ス。其ノ袈裟皆右角ニ舍利ヲ納メ梵文ヲ朱書ス。其ノ他ノ梵行縷ク述ルニ違アラズ。一日微恙無ク。遽ニ諸徒ヲ召シテ報縁盡ル事ヲ告ケ。自ラ起テ澡浴シ跏趺坐シテ印ヲ結テ奄然トシテ化ス。寿七十一。夏四十。實ニ明治六年癸酉十二月二十八日也。山之瑩域ニ葬ル。四衆聞ク者哀慟嘆惜所親ヲ喪カ若シ。師世ニ在テ人ヲ度スル。常ニ其言ヲ簡ニシテ其ノ行ヲ精ニス。動静語默一ニ毘尼ニ規ル。故ニ其ノ縁ニ應スルヤ人ニ入ル事最深シ。浪華ノ富豪率師ニ就テ菩薩戒ヲ受ケ不ル者無シ。内州高貴寺者高祖開創之靈区ニシテ慈雲和尚中興之僧坊也。師之ニ居リ縁ヲ十方ニ募リ堂宇ヲ修造シ。尤モ檀興之功ヲ建ツ。皆德化之致ス所ナリト云。今茲五月遺弟德藏寺主慶雲等相謀リ碑ヲ其ノ寺域ニ建テ。余ヲシテ銘ヲ作テ之ヲ記セ令ム。余其德業ヲ欽スルヤ辞スルニ不文ヲ以セズ。併テ行狀ヲ誌シテ之ヲ銘ス⁴⁷。

本碑は徳藏寺境内に明治9年（1876）に建立されたもので、淳善の記す銘は、海如の行実を極めて簡潔にまとめている。海如の初交衆は憲海が22歳の時である。すでに在山8年になり、沙門として初交衆の主坊ともなる立場にあった憲海は、海如にとって先達であったに違いないが、憲海と海如の当時の親交を伝えるものはない。海如は在山4年にして師である徳藏寺尊慶の死によって帰国するが、やがて26歳の時再び登山する。この頃から海如には明確に正法律への関心が表れており、27歳で高貴寺智幢から在家信者のための戒である八斎戒を受けているところから、再登山後、正法律への接近を始めたものと思われる。

このころから、すでに高貴寺を訪れていた憲海との交わりが生まれたものと考えられ、27歳の海如は憲海から悉曇を学び、その2年後には憲海から報恩院流の伝受を受けるのである。海如は文政12年（1829）12月に先師尊慶の供養のために『大随求陀羅尼略句義』（書-054）を書写し憲海に奉じている。これは海如の師尊慶の七回忌のために海如が行ったものと思われる⁴⁸が、海如が憲海より報恩院流の伝授を受けた直後でもあり、両者の関係をうかがわせるものといえる。

田中海応は「遠くは高祖弘法大師の遺誠に遵じ近くは慈雲尊者の芳躅を思慕し」⁴⁹と海如の研鑽を伝えるが、それはまさに憲海の研究態度そのままであった。ただ、両者の学問の極めて高い相似性は、その後の行動面での相違点を際立たせている。海如は飲光の直接の継承者である智憧に師事し、正法律一派の主流派の中で進具して、後にその正式な継承者となる。それに比べ、憲海はむしろ智憧らから距離を置き、飲光の直弟子ではあったが、傍系でありその支脈も少ない黙住に進具した。また、進具した後も、豊山を離れた憲海と、豊山に律院を興した海如ではその向かうところが異なっている。これは先にも述べたとおり、僧護との交わりが憲海に何らかの影響を与えた結果ではなかったかと考えている。ただ、両者に共通していることは、空海と飲光への敬慕の念であり、海如は飲光の千衣裁製に準え如法衣千領を縫製して施し、憲海は印施千種の施与を立願した。

同じ正法律を堅持した学僧として見れば、海如と憲海は陽と陰のようにもうつる。幕末の学僧として海如の名を知る人は、憲海に比べて数倍であろう。それは光雲という字と無言蔵という字の対比にも通じている。海如自身が憲海について書き残したものはないが、憲海が亡くなった元治元年（1864）9月から三カ月経った12月に海如は能満院を退き、市井での民衆教化の行動に重きを置くようになったことは、海如の内面の問題として関係があるものと考えている。

この伝記を見ても分かるとおおり、海如は幕末維新期の学僧としてかなり精力的活動を展開しており、豊山においても、正法律一派においても重要な存在となっている。先に述べたとおり海如は憲海から悉曇の伝受を受け、報恩院流の伝受も受けているので憲海の資であるが、年齢も近く、共に豊山にあって正法律への研鑽を重ねる同朋というべき立場であった。海如が進具するのは、憲海から遅れること2年半の天保5年（1834）8月のことである。

海如は文政12年（1829）に法樹から八齋戒を受けている。以後法樹に従って戒律への理解を深め、その結果として法樹により進具したといえる。法樹は飲光の最晩年の弟子であり、憲海の師信正の後に、長栄寺第六世となり、高貴寺事務第四世となった。かなり長期にわたって正法律を主導する立場にあったため、弟子の数が多く、正法律一派の中でも法樹の法脈にあるものが主流を占めるようになる。そのため同じ飲光の孫弟子といいながら憲海と海如では、実は異なる環境におかれていたことになる。

海如は進具した後、長谷寺山内の学寮能満院を託されることになる。豊山能満院は正徳3年（1713）に林諦房宥仲と全雅房寛海により創建された求聞持堂を前身とし、文化7年

(1810) に第三十八世能化である即同により能満院として再興された。その名が示すとおり虚空蔵菩薩を本尊としている。即同がこの学寮を律院にしようとしたが、果たされないまま遷化したため、山内で懸案の事項となっており、海如の進具を契機として能満院中興が成立したものと思われる。ここで指摘しなければならないのは、憲海は、豊山内にあってすでに正法律に加わっており年長でもあった。海如が能満院に入る以前に律院再興の契機はあったにもかかわらず、憲海が豊山能満院に入る道はなかったのかということである。この間の経緯を物語る資料はないが、可能性としては二つの状況を考えることができる。ひとつは、憲海が海如の学殖を信じ海如に豊山における戒律の興隆の基盤を託したと考えること。いまひとつは、憲海にとっての本願を成就するためには組織にたよらない道を模索すべきと考えたとすること。あるいはその両方が相乗したものかもしれないが、同じ正法律護持の律僧が豊山という環境の中で選択した道は対照的なものであった。憲海の側にも海如の側にも両者の関係を直接物語る資料は管見に入らないが、憲海の思想を考えるうえで、この時の両者の精神の動きには重要な宗教的機微があったと考える。

そして、海如の思考を物語るのは、多くの施与事業である。海如は衆生を済度する方法として様々な施与を行った。まず挙げられるのは天保5年(1834)の弘法大師千年忌にあたり両界種字曼荼羅を開版したことである。これは金胎両部の種字曼荼羅を上下一図にして版刻したもので千部を印行した。金剛界曼荼羅は成身会一会で表して簡略化しており、通番が記されている。この年は海如が進具した年であり、山内では長谷寺版両部曼荼羅が開版したから、海如も大きな刺激を受けたものといえる。海如は嘉永5年(1852)に「七陀羅尼課本」を施印している。これは有光が飲光の書した「尊勝陀羅尼」「宝篋印陀羅尼」「光明真言」に「阿弥陀陀羅尼」を加え施印したものに海如がさらに「消災吉祥陀羅尼」「金剛寿命陀羅尼」「千手千眼觀世音菩薩陀羅尼」を加え上梓したものであり、海如と飲光のつながりと悉曇に対する研究態度を伝えるものである。

海如の版刻にはややたどたどしきが見られるが、その数は決して少なくない。能満院には、海如が建立した地藏堂にちなむ地藏菩薩の影像や「土砂」「舍利」「念珠」「雨宝曼荼羅」「宝珠曼荼羅」「宝篋印塔」「加行本尊」などが印行されたと伝えられる⁵⁰。

また、海如は施印のみならず、自ら制作したものを施与することもある。「尊勝陀羅尼」は千禎、「大随求陀羅尼」は百禎を書写し施与したという。また、僧侶の衣服である袈裟をも製作し道俗に頒布した。その数は千に及ぶという。この海如による袈裟の施与は当然飲光の行った千衣縫製にちなむもので、飲光の『方服図儀』に従ってその袈裟の縫製を尼衆

に依頼したという。そして、宝塔造立がある。これは印度阿育王の八万四千宝塔造立の故事に倣い宝篋印塔の建立を勧進し、自らも木造五輪塔を刻み施与したという⁵¹。

飲光の思想が海如に伝えられていることが理解されるが、また憲海の思想とも重なる部分のあることがわかるだろう。海如の施与は、飲光が阿弥陀寺において行った講義にみるような民衆教化の一環であり、その姿勢は憲海の印施千種の大願とも結びついている。また憲海から伝授された悉曇を陀羅尼として施与することは、むしろ憲海の施印事業に重なるものであり、民衆の教化に対する両者の基本的な態度の共通性を理解させる。

第5節 冷泉為恭と高山寺

田中海応はまた海如の知己に冷泉為恭のいたことを指摘する⁵²。逸木成照の『冷泉為恭』⁵³には、未だこうした方面にふれられていないが、憲海と海如の両者に関わる事項であり、少し詳しく説明が必要である。

冷泉為恭（1823-1864）は幕末京都の絵師である。すでにその名は広く知られるところだが、簡単に略伝を述べる。為恭は、狩野永泰の三男として京都に生まれた。幼名を晋三といい、初名を永恭といった。父の没後、自ら冷泉姓を名乗るが、嘉永3（1850）年蔵人所衆岡田家の株を買って養子となり、以後岡田氏を称し、姓を菅原と改める。絵ははじめ父に学び、やがてやまと絵に興味を示して、古社寺の所蔵する古画の模写から一家を成す。嘉永6年（1853）天台僧願海の知己となり仏画への目を開く。有職故実にも通じ、上代様の書もよくした。安政5年（1858）従五位下に叙され、文久2年（1862）近江守となるが、倒幕派から内通者の嫌疑をかけられ、官位を辞して紀州粉河寺に難を避けたが、ついに大和丹波（天理市）で長州藩士の手にかかり落命した。

田中が指摘する為恭と海如の接点を示すとする資料は《明恵上人座禅図》（図3-5）として紹介されたものである。絹本墨画の小軸であるが、その背面に海如による由緒が記されている。原本の所在は現在不明であるが、かつて田中が調査した記録が提示されており、表具裏の墨書は以下のようなものであるという。

元仁二乙酉年正月十二日暁、梅尾山華宮殿の西谷に一の盤石あり、定心石と名く。一株の松あり、繩床樹と名く。其松の本二重にして坐するに便あり、此樹下に坐禅す。

風烈しく雪霰夥しく降りて、袖に霰のたまりければ、出定の時、

松が下巖の上に墨染の袖の霰やかけし白玉

此歌如何にしてか天聴に達しけん、御感あつて、乃ち続後撰集に入れられけりとなん。
此歌を斯くものせし人は菅原の為恭公なり。此人就_レ余袈裟一衣を乞ひ、則ち附与し
ければ、文殊大士の尊影と此一張を贈られけるを、今槐亭翁に附属するに、表装して
見せ、筆を染めて誌ぬ。



図 3-5 明恵上人座禅図⁵⁴

すなわち、この絵は高辨の詠じた和歌による歌絵兼肖像ということになる。文頭から「入られけりとなん」に至るまでの部分は『明恵上人伝』からの抄出であるから、重要なのは文末部分である。文中に登場する「余」というのが海如である。袈裟一衣を乞われたので付与したというから、縫裁した袈裟を贈り、その礼としてこの図と文殊像が届けられたという意である。そしてこの絵を槐翁に贈るため表具をしたというのである。槐翁は田中によれば塩崎甚作という伊勢松坂の実業家の号といい、この軸の巻止めに「明恵上人御影冷泉為恭画、明治二年巳三月為宗純子道心堅固冥加開眼祈祷了 海如」とある宗純子と同一人物という。この記事は為恭が亡くなって5年後にあたるが、文面は確かに海如と為恭に交遊のあったことをうかがわせるものである。

海如が高山寺の学問を意識していたことは、『大随求陀羅尼』の付記⁵⁵によってうかがえる。「承久三年正月十一日於石水院依御詔指声切句了高辨。長禄三年丙戌正月廿四日於梅尾住房以明恵上人御房御自筆奉書了、□□沙門喜海。天保壬寅年九月十三夜梅尾山第三転写之本。」とあって、海如が天保13年(1842)高山寺の高辨所蔵本を書写しているからである。海如が高山寺を訪れるのがいつごろから始まるのか定かではないが、僧護と出会っていることは確実だろう。田中は、海如と為恭両者の接点を海如の法弟である空相月心

(1800-1870)の存在に求めているが、月心はもとより大阪の出であり、京都神光院に移るのは安政元年(1854)とかなり遅いのである。月心は落飾前は和田呉山という絵師であったが、後に海如と同じく法樹により進具した同門であるため、海如の知己と考えることに異論はない。ただ、月心と為恭の接点もまた月心の入洛後であったと考えると、海如が高山寺に巡錫するよりかなり遅れることになり矛盾を感じさせる。月心については「正法律中四衆伝」にその略伝がある。

師諱は月心。字は空相。大阪曾根崎村の人。寛政十二庚申生る。父は和田利兵衛。母は八重といふ。大阪今橋奈良屋春日市左衛門の女なり。師在俗の時画を以て業とし呉山と称す。性佛法を信じ。高井田長栄寺に詣り。智幢和上に謁して阿字観を受け日夜之を修習す。因て自ら阿字坊と号す。天保十一年庚子弟二男をして智幢和上に投じて出家せしむ。覚樹和上是なり。翌十二年辛丑十二月八日遂に自ら智幢和上に投じて出家し。名を空相月心と改む。此の日第三男をして亦俱に出家せしむ。智満和上是なり。某年沙彌戒を受け。四度加行を修し人壇灌頂し。常に長栄寺に住す。嘉永七年甲寅父子三人共に洛北神光院に移り住す。明治三年庚午八月廿一日同院に於て寂す。寿七十一。小谷墓地に葬る。智満和上作る所の略伝一篇并に人の間に答へて師の逸事を記せるもの三通あり。今左に之を出す⁵⁶

月心の在家時代の事跡については、上記の略伝に引き続き収録される月心の子神光院智満空心(1835-1909)の著述による「月心律師之略伝」他逸事三編に詳細に収録される⁵⁷。呉山は森徹山の弟子であり、この呉山時代に彼が為恭と接点を持ったとは考えにくい。時系列を追うならば、海如と為恭の接点として、人としては僧護、場所としては高山寺を想定すべきであろう。海如と僧護の交わりの中に為恭が関わることで、幕末期の正法律のありかたや、高山寺における復古的潮流の影響が整理できることは重要である。

このように海如にも高山寺高辨への思慕があることは重要で、これは飲光への敬慕から単純に派生するものとは言い難い。飲光は確かに高辨の精神を支持している⁵⁸が、決してその思考の中心に置いてはいないのである。高山寺を京都における戒律復興の隠れた拠点と言うならば、それは高辨の精神の継承なしには考えられない。明忍が高山寺で自誓受戒を行うことには必然があったと考える。だからこそ、正法律の学匠はこの寺に誘引される。僧護しかり、憲海しかり、海如しかりである。

為恭の高山寺修学については、その画歴においても早い時期にあたるために、不明な点が多い。為恭が高山寺を訪れたことが確認できる最も早い記録が天保12年(1841)19歳

の時に八幡宮の《僧形八幡神像》を模写したという記録である。僧護が記した「今茲天保十二年九月五日、以件御本新奉写之畢之、筆写京師御子左朝臣為恭十有九歳去三日參籠精進而奉書写之事」⁵⁹という記録から当時の制作の様子がわかる。翌13年には《文覚上人像》《真濟上人像》も模写しており、この時期梅尾から高雄にかけて足繁く通ったことがわかる。為恭に関する初期評論のひとつに『梵学津梁総目』の「願海付記」に願海が綴ったものがある。その中に「日夜滋トシテ分陰猶惜、覃思刻苦十数年、巨勢氏及び信実朝臣、鳥羽僧正ハソノ所為師ナリ。」とある記事が、この為恭の梅尾高雄での模写研究を含むものであることは間違いない。

ただ西田直養『笈舎漫筆』に為恭が17歳までに閲覧した絵巻類の目録⁶⁰を挙げているものを見ると「仏鬼軍画詞真本 高山寺」という記述があり、17歳ころに高山寺を訪れているかに見えるが、《仏鬼軍絵巻》は現在十念寺に所蔵されており、幕末期梅尾に伝えられた伝承がないため、錯誤、誤記の可能性が高い。この高山寺の記述が梅尾を意味しているかは確認できない。ただ、同書には「梅尾絵手本 高山寺 同(狩野家)」という記事があり、高山寺という語そのものは梅尾をさしていることは間違いない。この梅尾絵手本が《鳥獣人物戯画》を指すものとすれば、近世の伝承としては定着していたと思われる鳥羽僧正所縁の模本として捉えていた可能性はあるだろう。17歳までの書写では仏画に関するものが極めて少ないことが確認される。

いずれにせよ、為恭は19歳の天保12年(1841)から原在明、浮田一蕙らと《春日権現験記》の模写を開始し、これが弘化2年(1845)まで続き、弘化元年(1844)元年22歳から同3年まで《法然上人絵伝》の模写を行っているところから、かなり繁忙な状況となっている。さらにこの間天保14年(1843)に父狩野永泰が没しているところから、生活環境の変化もあり、為恭の高山寺詣ではひとまず17歳から19歳で一区切りつけられたと考えるべきであろう。海如が天保13年(1842)に高山寺本を書写していることから、この時期に登山していたことがわかるため、僧護を通して接触のあった可能性が高いと考えている。

為恭と願海の出会いについては嘉永6年(1853)に願海が回峯行を終えた頃からと考えられており、以後急速に親密さを増している。為恭が仏画の世界に目をむけるようになったのも願海の影響と見られるため、青年為恭が高山寺で模写の対象としたものの中に尊像は含まれていなかったと考えるのが正しい。この願海が高山寺において静養したのは安政3年(1856)夏から翌4年まで凡そ一カ年の期間である。その理由については定かではないが、願海の手記に「願海作夏上洛事故アリテ梅尾峯石雲庵ニ寓ス、病少シクシリゾク時

ハ、アレコレニ訪問シテ、古写本等ヲ搜索ナドシテ、養生ガテラブラブラト致スヲリカラ」とあって病氣療養であったことが推測され、また経蔵に収められた蔵書の存在がこの地を選んだ理由であったと考える。この時期為恭は願海を見舞うことがあり、その結果《石雲清事》⁶¹という高山寺において静養中の願海の様子を描いた作品を制作している。願海はこの時密護らと物語して憲海について記し、為恭について記すのである。高山寺では嘉永6年（1853）に僧護が遷化しており、吉祥雲院を密護が、十無尽院を證成が継いでいた。願海がこの石雲庵静養において憲海の話聞いたことをなぜ記したかといえ、実は書物の収集に熱心であった願海自信が考えていることを、憲海が実践していたためなのである。



図 3-6 地藏菩薩像（版-108）

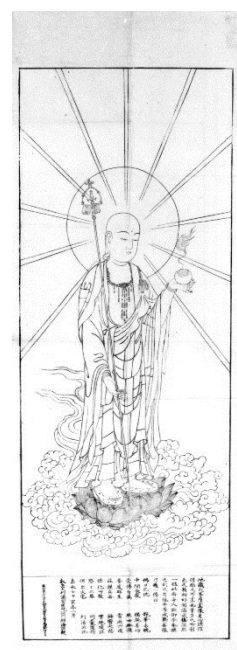


図 3-7 地藏菩薩像（版-110）

「願海付記」に「今此ノ太平文運盛ナル時ニオイテ、神儒仏若シクハ有職、記録、ソノ他諸史百家ノ道ニ益アル書籍、又タハ宮殿舎宅、及ビ日要調度ノ器ニ至ルマデ図之模之、ソノ他将来ノ則トナルベキモノハ、大小ニヨラズ之レオ図シ之レオ写シ、一集ニ名山石窟ニ納之将来ニヲクラバ、又太平ノ一大美事ニシテ盡未来際人天ノ大幸ナラント」と記しており、その内容は憲海について密護が語ることをほぼそのまま踏襲するものである。願海がこれを著述したのは安政4年（1857）である。願海は密護の語る詞を転用して自身の大願を述べていることになる。願海が為恭にこの憲海について語らないはずはない。しかし、為恭が17歳から19歳にかけて高山寺を訪れたときは、憲海はすでに京都をはなれ会津にいた。このときの為恭の興味は恐らく仏教尊像には至っていないため⁶²、憲海について深く知る機会はなかったと考えられる。為恭と憲海の接触は、石雲庵仮寓の願海を經由

してまず情報として発生したと考えるべきであろう。

僧護亡き後の高山寺と為恭の接点を物語る資料として高山寺に残る木版の地藏菩薩像がある。海如が地藏菩薩を信仰したことはその伝記にも語られることだが、高山寺で恵心僧都の画像による《地藏菩薩像》(図 3-6) (版-108) が開版されている。識語として「至心歸依大士身壽命轉増除罪障。叡山大行満沙門願海遍照金剛謹集寫傳教大師書。杜多文雄謹縮寫。恵心僧都筆。」と記されている。原画が何れのものか明らかにしないが、長谷寺能満院には小野篁筆とするほぼ同じ図像の地藏菩薩像が遺されている⁶³。千日回峰を終えた願海が最澄の書から集字したものとしており、願海の関与も大きい。高山寺の伝承ではここに見える杜多文雄は冷泉為恭であるとする⁶⁴。確かに地藏菩薩像の繊細優美な線描は為恭のものとして矛盾しない。この地藏菩薩と同じ図像は『冷泉為恭』に図版として収録される版本にもみられる。この版本《地藏菩薩像》(図 3-7) (版-110) は能満院粉本の中にも収集されており、「地藏大菩薩畫像恵心僧都源信僧都之所畫也。筆力之妙彩色之精相好圓滿威徳儼然。一披此圖每人欽御今奉摸之刻之自他平等成熟善縁。仍題一偈曰。佛日己沈 龍華未暁、中間長夜 獨施善巧、受佛付嘱 照世紛擾、普度群生 常遊六道、茲摸眞圖 歸嚮大悲、徳化所被 實絶邊涯、悠々三界 同蒙護持、俱出火宅 到清凉池。嘉永七甲寅春二月、叡岳大行満常楽院沙門願海謹題。藏人所衆正六位下式部大録菅原朝臣為恭欽模并書。」の識語があって、嘉永7年(1854)2月に大行満願海が賛を書き、為恭が絵と文字を記した制作経緯がわかる。高山寺の地藏菩薩像がこの版本から派生したものであることは間違いない。為恭がその名を付せなければならぬ必然を考えるならば、文久2年(1862)に浪士の襲撃を受ける以後の開版となるのであろう。ただ、幕末の高山寺には由緒のある地藏菩薩像や祀堂がある訳ではなく⁶⁵、願海が関わるとされる開版にどのような必然性があったのかは不明である。海如の豊山能満院に類似する画像が伝えられていることは、偶然とは考えにくく、高山寺と海如の関わりを伝えるものと思われる。

第6節 憲海と冷泉為恭

憲海が為恭を知るのは何時ごろなのであろうか。まず粉本墨書から判断するかぎり、憲海は為恭の存在を嘉永6年(1853)には認識していたと思われる。憲海は嘉永6年11月に、同年正月24日に円融无相が写した《智恵輪三蔵像》[1974] (図 3-8) を模写している。この粉本に記される「智恵輪三蔵者江州園城寺唐院之所鎮也。右本者式部省大録菅為恭朝臣

之所写也。嘉永六癸丑正月廿四日写得畢。圓融房无相」の墨書から、書写本の由来がわかる。この粉本の原本は園城寺の唐院本であったとしているので請来本であった可能性がある。また、同じ円融无相が嘉永6年2月に洛東客舎において写した《天神像》[980]（図3-9）があり、これにも「贈大政大臣菅原道真公之真影也。以式部省大祿菅為恭朝臣本写得。嘉永癸丑二月十四日。於洛東客舎記之。円融房无相廿八」と記すところから、「式部省大祿菅為恭朝臣」本を嘉永7年（1854）7月に写したことがわかる。これらの粉本には為恭の職として式部省大祿と記しているのので、嘉永3年（1850）に28歳の為恭が当職を受けて以後、无相が書写する嘉永6年（1853）までの間に書写されたことになる。



図 3-8 智恵輪三蔵像 [1974]



図 3-9 天神像 [980]

円融无相が天台宗の唐院本を模写していることに注目すると、その写本は他にも2点ある。《般若多羅三蔵像》[1855]には「般若多羅三蔵影者。園城寺唐院所鎮也。従敬彦律師借得写者也。嘉永六癸丑正月廿六日。圓融房无相廿八」の墨書があり、嘉永6年（1853）11月に憲海が写した園城寺唐院本の複模本で、手本としたのは同年正月26日に无相が敬彦より借り受け写した模本である。《五部心観》[1782]には「壬子初冬。於洛東金毛院草庵。敬彦和上護持本抄釣了。寒風扣窓。白月臨床。嘉永第五壬子十一月十八日。願以此功薰為極樂往生成無上菩提。以秃筆寫畢。帋數卅七葉。非人无相廿七。」と墨書があり、嘉永6年10月に憲海が模写したもので、手本としたのは嘉永5年11月に洛東金毛院において敬彦護持本を无相が写したものとしている。これら円融无相本は、嘉永5年（1852）から6年にかけて、主に園城寺の唐本図像を模写したものであり、これを憲海が嘉永6年から翌年

にかけて書写している。无相が2点の粉本を借り受けた敬彦は実幢敬彦（1807-60）と思われる。敬彦は大津の人で、恭堂と号した。園城寺法明院の第七世であり、聖護院雄仁親王（1821-68）の帰依を受けた天台僧である。无相は敬彦から貴重な粉本を借り受けているところから知己と考えられるが逸伝である。そのため、なぜ為恭の粉本がこの天台関係の粉本の中に紛れているのかは不明であるが、為恭がこの時期にすでに天台寺院と関わりを持っていることが興味深い。

願海が尊勝陀羅尼の弘通を専らとしたことは逸木盛照による伝記⁶⁶に詳しく、千日回峰行においても開版した尊勝陀羅尼を施与したことが知られているが、これは正法律の長栄寺にいた智満空心（1835-1909）が、嘉永元年（1848）13歳の時に大師様に倣い模写した図をもとに園城寺法明院の敬彦が版刻したものを、原図としたと伝えている⁶⁷。法明院は義瑞性慶（1656?-1737）により天台宗における律院として中興されており、山門の安楽律院に並称される天台律の寺である。長栄寺の空心は先に紹介した月心の三男で、天保12年（1841）に法樹に剃度をうけたため、父とともに長栄寺に修学していた。空心は父とともに安政元年（1854）に京都に移り、神光院に入ると為恭とも知己となる人物である⁶⁸。神光院は開創諸説あって詳らかではないが空海ゆかりの寺として三輪上人慶円禅観（1140-1223）を請じて中興し、密教の道場として隆盛を見たが、天保年間堂舎を焼失し、月心、空心らは鳩居堂の熊谷蓮心（1783-1859）の頼みによってこの神光院の復興のため寺に入ったことになる。神光院は古儀真言宗の寺で醍醐寺末だったが、律僧月心が入ることに特に問題は生じなかったらしい。長栄寺と法明院という二つの律院のつながりには、背景に空海と尊勝陀羅尼に対する帰依が存在している。月心と海如はともに法樹に進具しているから、師を同じくする法弟法兄となる。

願海が敬彦と知己であったかを確認することはできないが、為恭模本と敬彦所持本の无相による書写日が極めて接近していることを見れば、為恭模本は敬彦のもとにあった可能性が高い。為恭が願海との接触を見せる以前に天台関係の粉本を書写していることを推測させる。もとより、為恭がこれらを写すことが許されたのは、対象が神像や肖像であったためであり、尊像の書写には制限があったと見るのが合理的である。ただ、この法明院粉本と為恭の接触は、回峰行を続ける願海と為恭を結びつける契機を生んだと考えられる。願海は回峰行を終えた嘉永6年（1853）に北野天満宮「尊勝陀羅尼碑」を建てた。このとき為恭は模様を描き、碑底に笏を奉納したといわれているが、先の粉本を見る限り願海と為恭が交わる環境は今少し早く生まれてきていたと考えるべきであろう。為恭が尊勝陀羅

尼を信奉したことはその伝記に説かれるところで、恐らく願海との接点もそこあったものと考えられる。一般に知られる「尊勝陀羅尼碑」の建立を契機とする以前にその交流はあったものと考えべきであろう。

そして尊勝陀羅尼の信仰を生涯通じて実践したのが海如である。その実践の様子は海如が建立した多くの尊称陀羅尼碑によってもうかがうことができる⁶⁹。為恭は願海と海如という二人の僧と尊勝陀羅尼の縁によっても結ばれていることになる。

憲海は入洛後の弘化4年（1847）以後僧護と度々接しているので、その場に為恭の話題が何かしらの形であがっていたと考えるのが自然である。嘉永元年（1848）8月に高山寺で模写している《僧形八幡神像》は、天保12年（1841）9月に為恭が山内方便智院の八幡神像を描いた際に用いたものと同じ粉本から模写している。この粉本は弘安5年（1282）に経辨が描いた本画を縮写した粉本であったが、現在は失われている。



図 3-10 護法神祠

弘化3年（1846）に嵯峨の遍照寺において八幡神像板絵の制作が発願された⁷⁰。翌4年には憲海らは入洛しており、嘉永3年（1850）に落成している。能満院粉本の中にある大成筆《僧形八幡神像》[1087]の墨書によれば、この板絵の制作は、憲海の嘉永元年（1848）模本によって大成が描いたものである。この本尊の点眼供養をしたのが梅尾の僧護であるところから、僧護が肝煎りとなった事業と考えてよいだろう。従って、僧護が憲海にこの方便智院の画像を見せた可能性は高い。為恭が高山寺を訪れていたのは、ちょうど憲海が会津にいる時期にあたり、もし憲海が当時在京していたならば憲海が方便智院八幡神像を制作していた可能性もあるだろう。憲海が、嘉永6年（1853）に為恭模本の転写本を写す際には、為恭の何者たるかは理解されていたと考えられる。ただ、願海との交わりが深くなる以前の為恭はまだ仏画の世界に本格的には進出していなかったと考えられるため、この時点で憲海と為恭の接触は考えにくい。

そして、僧護が遷化した後の高山寺で静養することになった願海は、憲海の事跡を聞き、彼の大願が願海自身の思考と重なり合う点に興味を示し、為恭ともどもその略伝を記録したのである。当然願海への見舞いに訪れる為恭も願海から憲海のことを知るところとなったと思われる。

その手になる夥しい模本の数からもわかるとおり、身軽に動くことに抵抗のない為恭ならば、話題にのぼった憲海がいる能満院を訪れたとしても不思議はない。この憲海と為恭の接触を物語る資料が、近藤喜博により紹介された《護法神祠板絵》⁷¹である。

この護法神祠というのは、京都市右京区梅ヶ畑殿町の周山街道の傍ら、京都からいけば白雲橋の少し手前にある小祠である。三扉を有す厨子様の宮殿の左右の扉内に板絵二点が納められていた。一点は左の扉内に納められ、『梅ヶ畑村誌』⁷²に弁財天とされるものにあたり、実際には《訶梨帝母像》(図 3-11) が著彩で描かれている。この板絵の裏に「安政四年丁巳孟春吉祥日 於六角堂能満院奉図写之」と墨書があるという。もう一点は右の扉内に納められ、衣冠束帯姿の《菅原道真像》(図 3-16) である。この板絵の裏面には「是者此天満大自在天神尊影也。安政四丁巳年二月日、蔵人所衆関白直廬預正六位下上式部少丞菅原朝臣為恭識」と墨書があるという。近藤は両板絵がともに為恭の手になるものと考えている。



図 3-11 鬼子母神板絵

(護法神祠)⁷³



図 3-12 訶梨帝母像

[848]



図 3-13 訶梨帝母像

[851]

しかし、近藤が二枚の板絵をともに為恭の手とする解釈には理解しがたい部分があり、

検証が必要である。能満院粉本中にこの板絵と同一の図像を持つ二枚の《訶利帝母像》があるためである。一枚の粉本[848] (図 3-12) は「安政三丙辰三月廿三日六角堂能満院大願校」とあって板絵が奉納される前年に大願によって完成している。もうひとつの粉本[851] (図 3-13) は年紀等墨書を欠くものの、別の訶利帝母像の模本を元にして、胡粉で多数の修正を加えたものである。後屏の図様は本画と同じものが書き入れられており、修正後の図像は[848]と同じ図像となる。従って、こちらが草稿本であり、先の年紀の入ったものが清書本であったことを理解させ、この《訶利帝母像》の図像は六角堂能満院で新たに作成したものと断じられる。板絵が描かれた安政4年(1857)は為恭が大樹寺の襖絵を描いている時期にあたり、加えて願海が石雲庵に静養している時期にあたる。石雲庵は東山一心寺を本寺とする浄土宗の寺で、高山寺の門前にあたる白雲橋南の一之瀬村にあった⁷⁴。為恭がここで、願海の話に耳にした憲海との接触を考えることは決して不自然な状況ではない。



図 3-14 護法善神板絵
(護法神祠)⁷⁵



図 3-15 葛川護法神像
[1122]

では、この《護法神祠板絵》の制作過程をどのように考えるべきであろうか。この時すでに僧護は遷化しており、憲海が高山寺を訪れることは減少したと考えられる。願海自身一年強の石雲庵静養中憲海に出会った形跡がない。高山寺では願海の見舞で高山寺を訪れる為恭に《護法神祠板絵》の制作を依頼したが、参考にすべき手本が手近にないため、為恭は憲海に協力を得たことが考えられる。協力の内容としては下絵の提供あるいは分担制

作が考えられ、為恭の制作に憲海が協力したことは間違いない。

この護法神祠について考察するには、主神たる護法善神についても触れなければならない。当初の護法神祠には護法善神像があり、それは神祠から移され高山寺に《護法善神像》(図 3-14) 板絵として所蔵されていた⁷⁶。これは裏面に「奉勸請葛川護法善神 高山寺護法鎮守大吉祥」「嘉永二年(歳次己酉) 四月九日乙未(尾宿火曜) 甘露日、阿闍梨沙門慧友護敬記」と梵字墨書を挟んで記されていたとされ、文面からもわかるとおり、先の護法神祠の中央扉の内にかつて納められていた本尊と考えられる。近藤が推測するとおり、明治の神仏分離令によってこの尊像のみ高山寺に引き上げられたものであろう。背面の梵書が神殿から排除された理由かと考える。



図 3-16 菅原道真像

(護法神祠) ⁷⁷

この板絵は嘉永2年(1849)に制作されているが、作者は明らかにされていない。能満院粉本にある《葛川護法尊像》[1122] (図 3-15) は「嘉永二己酉四月朔日夕写之。梅尾山アサリ云ク。紛失物或ハ盗難ニテ不知時。此尊へ供物等備テ祈レハ。即疾ニ出現スト。云云」とある。この墨書にある「梅尾アサリ」とは僧護以外考えられないうえに、書写した日が近接しており、この《護法善神像》に関わるものであることは明白である。僧護の伝としてこの護法神の興味深い伝承を伝えている点も両者の親しさを垣間見せている。この《葛川護法尊像》は作者を明らかにしていないが、粉本墨書の文面及び表現からからすれば憲海と考えると問題ない。板絵墨

書の8日前に粉本を書写していることから、この板絵の制作そのものが憲海もしくは能満院工房によるものと考えられる。嘉永2年に僧護によって落成した護法尊があり、僧護遷化を挟んだ8年後に二尊を追加制作して合祀したことになる⁷⁸。

このように、高山寺を舞台にして憲海と為恭という復古的世界を意識する二人が接点を持つことになった。先に憲海が為恭と同じ僧形八幡神像粉本を書写したことを述べた、両者の感性には共通するものがあるのか《普賢延命像》についても、憲海が嘉永元年(1848)に模写[470]し、同じものを為恭が嘉永3年(1850)以後に模写している⁷⁹。そして、為恭

が天保14年(1843)に描いた《五髻文殊像》⁸⁰には梵字で文殊菩薩の真言が書かれているが、これは僧護から学んだものと考えられ、為恭の梵字手習いは憲海と同じ師を仰いでいる。華やかだが堅い印象のあるこの仏画は、為恭の他の仏画と異なり願海との接触以前の数少ない仏画として特異なものであり、手探りで学ぶ様子がかがえる。

以上でこの章の考察を終える。江戸後期に復古的思潮が興隆する中で、慈雲飲光の提唱した戒律復興の流れも明確さを増して行く。憲海は慈光寺の鳳寛鏤慶との出会いにより正法律について考えるようになりやがて、長栄寺の黙住信正よって進具した。信正との交わりは決して長いものではなかったが、憲海は実際には会うことのできなかつた飲光の讐咳に接することのできた両師僧から飲光の思考の要所について聞くことができたと思われる。しかし、正法律に進具しこれを捨てた高山寺の慧友僧護とも憲海は深く交わり、僧護が重んじた高辨の思考に対してもこれを受け入れた。憲海からすれば、飲光も高辨もともに正法を理想とした思考を持っており、等しく価値のあるものと考えたと思われる。僧護は少なくとも正法を理想とすることと正法律一派に属することは異なる次元のものと考えたと見られ、「宗旨がたまり祖師びいき」を否定した飲光の思考⁸¹をむしろ忠実に継承した僧侶である。憲海はこの僧護の思考に強い影響を受けたと考えられ、進具してのちの憲海の事跡の中で正法律一派への接近は極めて限定的なものとなる。

憲海の資である光雲海如は、同じ正法律に進具するとやがて一派の中核となってその護持に努めた。憲海と海如は悉曇や開版への興味など、資質にも共通するものがあつたが、実践においてかなり異なる態度を見せている。六角堂能満院期の憲海は海如とも交わりがあつたことが推測され、海如が能満院を隠居し市井に出て弘通に専心するのが、憲海が連光院で遷化してまもなくであることは、海如の思考を考える上でも重要な事実であろう。

その海如も憲海同様、高山寺の高辨に対する思慕を見せ、僧護のいた高山寺は、高辨の思考を継承する膨大な聖教を背景に学芸上の重要な役割を果たす場となった。海如は高山寺を接点として復古大和絵の絵師冷泉為恭との接触があり、為恭はまた僧護を介して憲海とも接触があつたのである。為恭の知己である大行満願海は、僧護なきあとの高山寺において憲海の本願を知り、自身蔵書家であつた彼の考える古物継承の思考に共通することを記録している。僧護は憲海にも似て寡黙であるが、憲海の志を最もよく理解した人物であつた。智積院出身の僧護が、智積院末の能満院の住持として憲海を斡旋したことがその行動の軌跡から推測されることは極めて重要である。このように憲海の思考の形成に果たし

た師僧の影響には大きなものがあり、またその背後にある復古的潮流の大きさも見落とすことはできない。

【注】

- ¹ 村岡典嗣・前田勉『増補本居宣長』(『東洋文庫』748、平凡社、2006年3月)、pp. 87-124。
- ² 大久保正『江戸時代の国学』(至文堂、1963年7月)、pp. 62-69。
- ³ 安藤更正『鑑真』(吉川弘文館、1989年2月)、pp. 183-191。
- ⁴ 境野黄洋「戒律研究 上」(『国訳大蔵経』附録、国民文庫刊行会、1928年8月)、pp. 1-49。
- ⁵ 末木文美士『日本仏教史 思想史としてのアプローチ』(新潮社、1996年9月)、pp. 103-110。
- ⁶ 末木文美士『近世の仏教—華ひらく思想と文化』(吉川弘文館、2010年7月)、pp. 111-118。
松尾剛次「<戒>と日本仏教—破戒と持戒のはざまで」(松尾剛次編『思想の身体—戒の巻』春秋社、2006年8月)、pp. 6-57。
- ⁷ 岡村圭真「慈雲尊者研究序説」(『密教大系』第7巻、法蔵館、1995年3月)、pp. 313-329。
- ⁸ 長谷寶秀『慈雲尊者全集』第17(思文閣、1974年7月)、pp. 24-33。
- ⁹ 長谷寶秀『慈雲尊者全集』首巻(思文閣、1974年7月)、pp. 35-47。
- ¹⁰ 木南卓一『慈雲尊者 生涯とその言葉』(三密堂書店、1961年1月)、pp. 1-64。岡村圭真「慈雲尊者の生涯」(『真実の人 慈雲尊者』、大法輪閣、2004年3月)、pp. 10-83。長谷寶秀「慈雲尊者年譜」「慈雲尊者伝私見」(『慈雲尊者全集』首巻、思文閣、1974年7月)、pp. 188-328。
- ¹¹ 神下山高貴寺は、役行者を開基とし、はじめ「香花寺」と称したが、弘法大師空海が留錫した後、伽藍が整い、高貴寺と呼ぶようになった。元弘元年(1331)の兵火により衰退したが、安永期に慈雲飲光が来住して、僧坊を整備し、天明6年(1786)高貴寺は正法律の総本山となった。明治以後は金剛峯寺末となっている。
- ¹² 憲海を飲光の系譜の中に評価する論文に小池満秀「仏教の「近代」—慈雲の系譜学」(『密教学研究』第36号、2004年3月、pp. 120-123)がある。
- ¹³ 第2章第2節、p. 61。
- ¹⁴ 憲海との関わりが見られる真言律の寺としては、粉本[1439-1451]を書写した河内国久修園院、寮舎の素描[1326]のある和泉国神鳳寺のほか、空海に関わる開版が行われた大和国聖林寺(『聖林寺の版木』、元興寺文化財研究所、2008年3月、pp. 13、16)がある。
- ¹⁵ 『伝法灌頂諸作法 幸心』(書-014)、『伝法許可灌頂印信』(書-116)。
- ¹⁶ 享和元年(1801)刊、秋里籬島『河内名所図会』巻五(臨川書店、1995年5月)、pp. 382-388
- ¹⁷ 『大阪府の地名』(平凡社、1986年2月)、pp. 959f。
- ¹⁸ 95.5×45.0 cm。紙本著彩。掛幅装。慈光寺蔵。
- ¹⁹ 藤井直正「鏤慶上人の足跡—長栄寺所蔵の大般若経をめぐる」(市史編纂室『市史紀要(第5号)』、寝屋川市教育委員会、1993年3月)、pp. 30f。
- ²⁰ 長谷寶秀『慈雲尊者全集』首巻(思文閣、1974年7月)、pp. 361f。
- ²¹ 『法燈 江戸川区指定有形文化財 昇覚寺鐘楼修理保存・発掘調査報告』(昇覚寺鐘楼保存修理委員会、1985年11月)、pp. 42-44。
- ²² 「河州閬岨髮切山慈光律寺鳳寛御房鏤慶和尚。受法之大阿闍梨耶也。文政十年丁亥五月伺尊容奉寫。御寿像是也兼而仰之趣記之曰。觀法者易而難修、五十餘年不怠觀、夜分月輪常恒現、晝入三昧閉眼頭。文政十二年己丑十一月廿六日入寂御年八十二。皆萬延二年辛酉二月應于本常阿闍梨之需。王城中心紫雲山頂法寺沙門大願拜書。」
- ²³ 藤井直正「鏤慶上人の足跡—長栄寺所蔵の大般若経をめぐる」(市史編纂室『市史紀要(第5号)』、寝屋川市教育委員会、1993年3月)、pp. 26-39。
- ²⁴ 尾崎安啓「近世後期の般若経勸進について—寝屋川市長栄寺経典書の分析」(『歴史研究』第33号、1996年2月)、pp. 179-198。

-
- 25 第2章第2節、pp. 55f。
- 26 会津若松市大町にある真言宗寺院。金剛寺、自在院、弥勒寺とともに会津真言四箇寺である。
- 27 《釈迦十六善神図》[148]「十六善神」原本有会津観音寺「無言蔵」5印（無言蔵／圖書記）を捺す。
- 28 宗立《鏝慶像》[1929]、皆了《鏝慶像》[1930]。
- 29 長谷寶秀『慈雲尊者全集』首卷（思文閣、1974年7月）、pp. 360f。
- 30 長谷寶秀『慈雲尊者全集』首卷（思文閣、1974年7月）、p. 354。
- 31 長谷寶秀『慈雲尊者全集』首卷（思文閣、1974年7月）、pp. 372-378。
- 32 序章第2節、p. 2。
- 33 長谷寶秀『慈雲尊者全集』首卷（思文閣、1974年7月）、pp. 376f。
- 34 長谷寶秀『慈雲尊者全集』首卷（思文閣、1974年7月）、pp. 365-367。
- 35 「正法律中四衆伝卷下」「三十一 皓月宗顛尼律師」（長谷寶秀『慈雲尊者全集』首卷、思文閣、1974年7月、pp. 504-506）に「此年（注：享和2年（1802）のこと）事ありて高貴寺一派を離れ。京都三宮寺一雲和上に依止す。」とある事件によるものと思われるが、その内容は不明である。
- 36 落合守和「尾州専養寺所蔵悉曇学書目録附解説」（『人文学報』、東京都立大学人文学部、1982年3月）、pp. 49-54。
- 37 長谷寶秀『慈雲尊者全集』首卷（思文閣、1974年7月）、p. 376。
- 38 馬淵和夫『日本韻学史の研究』（日本學術振興会、1962年3月）、pp. 81f。
- 39 表紙題簽「中天相承悉曇章」。169×176mm。紺表紙。斐紙61丁。線装本。蔵印無。書写者記名無。朱注より文政11年（1828）に憲海自筆本から書写したと思われる。
- 40 「兩部曼荼羅隨聞記畧本」（長谷寶秀『慈雲尊者全集』第8、思文閣、1974年7月、pp. 368-476）。
- 41 林田光禪『智積院誌』（総本山智積院、1915年11月）、p. 144。
- 42 林田光禪『智積院誌』（総本山智積院、1915年11月）、p. 228。
- 43 長谷寶秀『慈雲尊者全集』第1（思文閣、1974年7月）。
- 44 第4章第1節、p. 137。
- 45 第2章第5節、P. 79。
- 46 「第三十七世 信海大和上年譜」（『智積院誌』（総本山智積院、1915年11月、pp. 150f）
- 47 長谷寶秀『慈雲尊者全集』首卷（思文閣、1974年7月）、pp. 405f。
- 48 奥書に「時文政十二己丑歲臘月六日為先師尊慶和上仏果書写以奉無言阿闍梨了如海和南」とあり、海如の書写本を憲海が所持していたことがわかる。
- 49 田中海應『海如和上傳』（徳蔵寺、1924年12月）、p. 11。
- 50 田中海應『海如和上傳』（徳蔵寺、1924年12月）、pp. 46-55。
- 51 同上
- 52 田中海應「海如和上と藝術家との交渉」（『畫説』第70号、1942年10月）、pp. 704-709。
- 53 逸木成照『冷泉為恭』（中外出版、1925年5月）。
- 54 田中海應「海如和上と藝術家との交渉」（『畫説』第70号、1942年10月）、p. 705。
- 55 「大随求陀羅尼」田中海應『海如和上傳』（徳蔵寺、1924年12月、口絵p. 17）。
- 56 長谷寶秀『慈雲尊者全集』首卷（思文閣、1974年7月）、pp. 455f。
- 57 長谷寶秀『慈雲尊者全集』首卷（思文閣、1974年7月）、pp. 456-467。
- 58 飲光の『十善法語』に高辨の『梅尾明恵上人遺訓』が引用される。
- 59 近藤喜博「高山寺新八幡宮と僧形八幡御影」（『明恵上人と高山寺』、同朋舎出版、1981年5月）、p. 242。
- 60 『日本隨筆大成』第2期第3卷（吉川弘文館、1974年1月）pp. 187-191。
- 61 『復古大和絵師 為恭一幕末王朝恋慕』展図録（大和文華館、2005年11月）、図版42。
- 62 『笈舎漫筆』に収録される粉本に図像仏画類は見えない。このとき高山寺、神護寺で模

写しているものは肖像に類するものであり、為恭が描いたことが明かな仏画としては天保14年(1843)の《五髻文殊像》が早いものである。

⁶³ 田中海應『海如和上傳』(徳蔵寺、1924年12月)、口絵 p. 1。

⁶⁴ 近藤喜博「高山寺に於ける冷泉為恭」(『國華』第781号、1957年4月)、p. 117。

⁶⁵ 小川義章「高山寺雑攷(遺稿)」(『高山寺典籍文書の研究』、1980年12月)、pp. 3-14。

⁶⁶ 逸木成照『冷泉為恭』(中外出版、1925年5月)、p. 100-155。

⁶⁷ 逸木成照『冷泉為恭』(中外出版、1925年5月)、p. 109。

⁶⁸ 長谷寶秀『慈雲尊者全集』首卷(思文閣、1974年7月)「正法律中四衆傳卷上」pp. 469-476。

⁶⁹ 鈴木武「仏頂尊勝陀羅尼について(算)―光雲律師海如上人の梵文陀羅尼を中心として」(『歴史考古学』第49号、2001年12月)、pp. 62-75。

⁷⁰ 近藤喜博「高山寺新八幡宮と僧形八幡御影」(『明恵上人と高山寺』、同朋舎出版、1981年5月)、pp. 243f。

⁷¹ 近藤喜博「高山寺に於ける冷泉為恭」(『國華』第781号、1957年4月)、pp. 113-120。

⁷² 高岡義海『梅ヶ畑村誌』(高雄尋常／高等小学校、1932年4月)、p. 8。

⁷³ 近藤喜博「高山寺に於ける冷泉為恭」(『國華』第781号、1957年4月)、p. 115。

⁷⁴ 高岡義海『梅ヶ畑村誌』(高雄尋常／高等小学校、1932年4月)、pp. 21-23。石雲庵は現在廃寺である。

⁷⁵ 近藤喜博「高山寺に於ける冷泉為恭」(『國華』第781号、1957年4月)、pp. 118。

⁷⁶ 近藤喜博「高山寺に於ける冷泉為恭」(『國華』第781号、1957年4月)、pp. 118。

⁷⁷ 近藤喜博「高山寺に於ける冷泉為恭」(『國華』第781号、1957年4月)、pp. 116。

⁷⁸ 護法神祠は現在集落の管理にあり、近くの平岡八幡宮が奉祠にあたる。同社の神職に聞き取りをしたところ、過去に盗難などもあって神殿内には神像らしきものはないとのことである。また、護法尊像について高山寺に尋ねたところ、高山寺において進められている経蔵内の調査が未だ近世にまで至っていないため、現況はよく分からないとのことであった。

⁷⁹ 落款に「菩薩戒弟子蔵人所衆正六位下式部省大録 菅原朝臣為恭謹図之」とあって嘉永3年から安政2年の間に書かれたことになる。

⁸⁰ 『「復古大和絵師 為恭―幕末王朝恋慕展」図録』(大和文華館、2005年11月)、図版65。

⁸¹ 「千師傳」(長谷寶秀『慈雲尊者全集』第17、思文閣、1974年7月)、p. 31。

第4章 憲海の発願

本章では、憲海が真言僧としての研鑽とは別に研究の対象とした主題を明らかにするため、彼の研究活動の萌芽と展開について考察する。第1節では、憲海がその著作『梵学秘要篇』に記した「発願し奉る誓の文」及び「謝徳發願」により、彼が信仰の基盤に置いた主題を検証する。第2節では、憲海が発願に至る背景を、長谷寺修学時代の諸山巡歴における学修の中に考察する。第3節では、憲海の立願の根本に置いた空海研究の実際について考察する。第4節では、正法律において重視された悉曇について憲海の研究方針を考察し、第5章では、悉曇と一体として捉えられた声明に対する憲海の研究方針を考察する。第6節では、憲海が行う研究活動の中に共通する憲海の価値観と思考について考察する。これらの一連の検証作業によって、憲海の立願の中で特別な役割を果たす空海への敬慕を確認し、正法を理解するための研究対象として重視される悉曇及び声明に対する憲海の思考を考察する。

第1節 発願し奉る誓の文

憲海の思想の形成に、三人の師僧からの影響があることはすでに述べた。三師に共通するのは、正法への憧憬であり、仏教を説いた釈迦への絶対的帰依であった。憲海がこれらの師から学びとったもの、そしてそこから後世に伝えようとしたものを確認してみたい。

真言僧であった憲海にとって、宗祖空海は特別な存在であった。憲海のふるさと会津には、法相宗の徳一の足跡が強く残されるが、徳一は最澄と論争した歴史が強調されるためか、写経を依頼したことのある空海との交わりが印象付けられている。実際には徳一の『真言集未決文』に対する真言宗側との確執がありながらも、中世以後の会津寺院の真言宗化の中で空海と徳一の親和性は高く、実際に空海の会津巡錫の事実がないにもかかわらず、空海伝説が少なからず遺されている¹。

憲海の生まれた湖南地方もその例外とはならず、生家のある赤津から広伝寺のある安佐野に向かう途中の福良には伏龍寺という寺があり、古くは徳一の開創とされ恵日寺の末であったとされるが、後に空海の会津巡錫の折、大蛇を調伏して建立した寺として縁起を改められている²。大蛇の調伏は湖岸地域における治水に関わる過去の事実由来のものであろう。全国に広がる空海伝説において水を制御する奇譚はかなり多いものであり³、請雨

経により雨を操る空海像が伝説の原形となってこの地に定着したものと考えられる。憲海の生家は浄土宗の信者だが、伝説の人物として空海は日常の尊崇の対象であった。憲海の育った空間にはこうした説話的環境があったと思われる。6歳にして真言の寺で剃度したとされる憲海と空海の関わりは想像よりも早いものであった可能性がある。

その憲海と空海の結びつきを明確に伝える資料がある。憲海の代表的著作物とされる『梵学秘要篇』と『梵学宗要章』である。『梵学宗要章』は憲海が嘉永6年（1853）3月に六角堂能満院において開版した書物として知られ、刊本そのものが流布⁴している。そして『梵学秘要篇』は智山書庫、叡山文庫、乙宝寺に写本が伝わる。叡山文庫本は山門密厳蔵所蔵本で『悉曇諸師伝』の奥に付された形式となっている。『悉曇諸師伝』は奥書に「安政三年丙辰五月十五日書写之／王城中真六角堂能満院大願／五十九」とあり憲海の写本である⁵。新潟県胎内市にある乙宝寺は8世紀の開創とされる真言宗智山派の寺で、近年発見されたこの写本は開版のための草稿本である⁶。表紙裏識語に「右梵学秘要篇 草本一冊／依清書別本有之讓祐嚴阿闍梨訖／安政六年己未／王城中心六角堂能満院大願（6印：無言藏）」とあるので、安政6年（1859）に憲海が祐嚴に譲ったものとしている。この時清書本も出来ていることが分かるので開版のための版下は完成したのであろう。『梵学秘要篇』開版の事実は確認できないが、どちらも能満院時代の開版事業に関わる資料であることは間違いのない。両書は寡黙な憲海の数少ない著作として貴重である。

『梵学秘要篇』には空海千年忌を間近にした天保3年（1832）の年紀を持つ「発願し奉る誓の文」が付されており、この誓文によって憲海の空海に対する思考を知ることができる。それは以下のようなものである。

発願し奉る誓の文 高祖大師正當一千年天保五甲午年

願くは遍照金剛 入唐御請来 秘密の法門 経軌眞言等
竝に御作の聖教 御製の撰書類 悉く皆な傳受を得 書寫校合を遂げ

御所持の寶具 及び繪木の形像 梵文和漢の字摸寫をして久住せしめ
諸尊の漫荼羅 佛・菩薩・明王 及び天等の眞像を畫作し造立し奉り

常に坐禪経行して 三昧耶を修習し 経文・陀羅尼を書寫讀誦することを専にし

佛製の法衣を敬い 禁戒の威儀を護り 慈悲忍辱に住して 眞言の行を勤修し

悉曇の妙義を觀じ 五音の自證を察し 聲明讚歎を励まして 三寶前を禮拜し
所修の功德を以て 普く法界に廻向し 見佛聞法を得 大師の淨刹に至らんことを

天保三壬辰年六月二十日於和州龍門山菅生寺草稿之了

無言藏大願（卅五）

憲海が天保5年（1834）の空海千年遠忌に先行して記した誓文とされ、大和の龍門山菅生寺に於いて記している。後に密護から願海が聞き及ぶ事業の萌芽がこの時点で表れていることが興味深い。本誓文は160字からなり、前半は、事業として行うべき活動を記す。はじめに空海の請来品から所持品揮毫に至るまでを収集し、これを校合写録することをあげる。すなわち弘法大師全集の編纂を考え、これを長く後世に伝えることを第一の本願とし、次いで曼荼羅をはじめとする佛菩薩の画仏造立を本願とする。後半では憲海が理想とする僧侶の日常が描かれる。特に注目されるのは「佛製の法衣を敬い 禁戒の威儀を護り」と「悉曇の妙義を觀じ 五音の自證を察し」の部分である。前者は『方服図儀』⁷に見るような飲光の説く服制への信奉があり、後者は悉曇学の中での声明の重要性を意識したものと見える。どちらも飲光の思想への理解を表すものである。

『梵学秘要篇』には、本編最終段にあたる十六段に「謝徳發願」という章句がある。七言偈を四句一頌とする十頌により、先の誓文の前半部分をより詳細に解説する内容になっている。

謝徳發願 十頌

或る師の教誡 實に仰ぐ可し 一生の請願 未だ足ることを知らず
五大願の外は皆な益無し 命は既に限り有り 事は未だ盡きせず

弘法大師三十九 傳教大師へ御告げ有り
期命盡く可し念佛の爲め 乙訓寺を出て高雄に入ると

千歳を過ぎ去る遺法の資　　我れ等空く三十年を過ぐ
一期の甲子　當に筭え知るべし　後生念佛願うに隙ま無し

諸職藝能数千萬　　数百年來残れる物少し
千有餘歳　傳うは書畫のみ　　餘事の不朽は世間希なり

大師の眞蹟　書法に在りと　　世上草書　言て聖と為
嵯峨の皇帝　御筆を仰ぎ　　大唐名を得て五筆と稱せり

古今の筆書　梵漢字　　或いは摸寫を得　法帖と稱す
大師の御流　何ぞ未だ達せず　今時の弊儀　餘風に移る

高粗大師の御撰書　　先賢の集録　今世の寶ら
興教大師・濟暹師　　心覺・實範師等の録

入唐求得　法文策　　觀賢僧正目錄を記せり
数百餘部の本經軌　　渡海の御記　何れの處にか在る

御筆の撰書　梵漢字　　今時摸せずんば後世絶えん
一千餘年　在世を去るに　　繪木形像　既に朽失す

願くは加被を蒙り摸寫を遂げ　　令法久住利益の為
五十六億萬歳の間だ　　後賢　志を續で正法を護らん

文意は、空海の伝える密教への帰依と、その証しである請來本の探求及び後世への継承に対する決意表明が述べられている。明確に密教者としての視点で記述されており、千年以上前に生まれた空海が伝えた仏教を正統に継承しようとする覚悟が読み取れる。

「諸職藝能数千萬／数百年來残れる物少し／千有餘歳　傳うは書畫のみ」の部分は、憲海の歴史観が表れており、歴史を伝えるためには書画すなわち文化財に依らざるを得ないことを述べ、そのために「今時摸せずんば後世絶えん」として、書画を模写して記録する

ことの必要を説くのである。この記述は興味深く、憲海の現実主義、実証主義的立場をうかがわせている。憲海は自身が過去の遺物からしか過去の思考を学ぶことが出来ない現実から判断して、後世が先人を知る方法もまた同じであろうと推論しているのである。

恐らくこの時点ではまだ、空海関連資料の編纂がその発願の主たるものと思われるが、「発願し奉る誓の文」では、ここからさらに曼荼羅、図像全般へと対象が拡大している。内容からすれば「謝徳發願」は「発願し奉る誓の文」に先行する思考と考えるとよい。五大願のうち「福智無邊誓願集」は、限りなく存在する福德と知恵を集める誓いである。福德が物質的な救済であり、知恵が精神的救済と考えるならば、これが憲海の活動の萌芽となる思想かもしれない。後の大願という号の源流がここにはじまる可能性もあるだろう。「発願し奉る誓の文」は、『梵学宗要章』の巻末にも付され、ここでは最終行を「于時嘉永六年癸丑三月 王城中真六角堂能満院 大願謹書刻」と改めているので、草稿本の形式においても『梵学宗要章』は『梵学秘要篇』の後に草稿が成立した可能性が高い。

智山書庫の憲海旧蔵書には「金剛界三昧耶曼陀羅図」（書-138）、「大曼陀羅惣図」（書-139）の図像粉本が含まれ、能満院粉本を補っている。能満院粉本中に高雄曼荼羅理趣会の模写⁸があるが、憲海は晩年、『金剛頂瑜伽他化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌』（書-096）を写し、大日経疏である『毘盧遮那成仏神変加持経義积』（書-107）を写すなどして、両部曼荼羅に関わる資料の収集を継続していた様子がうかがえる。略伝に説かれる憲海の両部曼荼羅開版計画に直接結びつくような資料はないが、その祈願をこの空海研究の延長線上に置くことは可能であろう。

「謝徳發願」から「発願し奉る誓の文」への展開において、憲海の空海敬慕の思考は具体化を見せ、現実的な目標を形成していくのである。それはより普遍化された成果を期待する意志の表れであり、憲海の中に正法と空海が明確に結びついている状況が確認できる。

第2節 交衆期の諸山巡歴

憲海が長谷寺交衆の最後に記した「発願し奉る誓の文」は、明らかに宗祖空海への敬慕とさらにその上流にある釈尊への帰依を表わしている。憲海がこうした発願に至るには当然のごとくその過程があったと考えなければならない。

長谷寺の所化として修学を続ける憲海は、慈光寺における鏝慶からの伝授を出発点として、精力的に研究活動を開始する。第2章に述べたとおり、書写はさまざまな場所で行わ

れ、その巡歴地は長谷寺を中心に京都から大阪にかけて点在する。これは憲海が長谷寺交衆中から、豊山における所化の務めと平行して、独自の研究態度を持っていた証左である。

巡歴地はいくつかの宗派にわたる。新義真言宗系の寺院としては、智積院（京都府京都市）、長谷寺（奈良県桜井市）、明照院（京都府京都市・廃絶）、仏隆寺（奈良県宇陀郡榛原町）、古義真言宗系の寺院としては、仁和寺（京都府京都市）、醍醐寺（京都市）、梅尾山高山寺（京都府京都市）、忍辱山知恩院（奈良県奈良市・廃絶）、高野山光勝院、高野山如意輪寺（和歌山県伊都郡高野町）、菅生寺（奈良県吉野郡吉野町・廃寺）、律宗系寺院としては、高貴寺（大阪府南河内郡河南町）、槇尾山平等心王院（現西明寺。京都府京都市）、久修園院（大阪府枚方市）、修験道系寺院その他として吉野山瑠璃光院（奈良県吉野郡吉野町・廃絶）、竹林寺（笠山荒神社別当。奈良県桜井市・廃絶）の名をあげることができる。

以下、鏝慶からの伝授の後、豊山を辞して郷里会津に戻るまでの間、憲海がそれぞれの古刹で、どのような活動をしているのか概観したい。

（1）長谷寺

憲海が所化として務めた長谷寺は、身近に資料があったため、比較的多くの書写がなされている。文政3年（1820）6月に写した《紅玻梨色阿弥陀如来像》[126]は、曝涼に出された画像を模写したもので、図像収集の始まりを伝える。文政4年（1821）6月に『一字塔及び高祖大師御真筆写』（書-134）を制作している。これは知脱が双鉤本として写した空海の一字塔を豊山能満院の宝鏡の依頼により謄写したものである。憲海の空海研究に関わる初期の資料と見なすことができる。同年11月に写した《快尊像》[1737]は小池坊講堂で実見した画像を模写したものである。図像の収集を開始した早い段階で高僧像の収集を手掛けている点が注目される。文政6年（1823）6月に書写した《光明真言字輪曼荼羅図》[226]は摂州勝尾寺の以空が書いた紺紙金泥光明真言字輪曼荼羅図で、憲海が小池坊の宝蔵から取り出して模写したものである。憲海の光明真言への信仰に関わるものとして、すでに積極的に図像の収集を行う様子が確認できる。文政9年（1826）『本朝法中衣服図』（書-128）は豊山小池坊に於いて亮恭の許可を得て謄写している。憲海の服制への興味を伝える初期の活動である。

文政11年（1828）4月《徳川歴代将軍像》[2270]は、長谷寺に所蔵される歴代将軍像の面貌部を抄出したものであり、憲海が描く肖像が俗人に及ぶことが理解される。同年11月に《毘沙門天像》[783]、文政12年（1829）5月には《毘沙門天曼荼羅図》3幅分[1170-1172]

を豊山の花洞端で写している。別尊曼荼羅研究にちなむものであるが、《毘沙門天曼荼羅図》は原本が後に深く親交を結ぶ長谷川家の手になるものとして、両者の接点を見せるため、重要な意味を持つ作例である。

(2) 智積院・醍醐寺

智積院は、京都市東山区にある真言宗智山派の総本山である。後に憲海が住持となる六角堂能満院の本寺であるが、この時点では特別な関係はない。同じ新義真言宗の寺院であり、なおかつ学問の中心であったことから、憲海が豊山の用務でしばしば京都を訪れた際、来訪する機会を得たものと考えられる。資料から判断されるだけでも、文政年間に智積院内で書写を行っている。文政6年(1823)9月に遍照院にて《孔雀明王像》[203]を模写し、同年12月には『守護国界経念誦次第・持宝金剛念誦次第』(書-044)を写している。同書には「於洛東智積院方丈請故僧正弘基御所持之本奉写之了」とあって、弘基所持本を写したことがわかる。文政9年(1826)9月に憲海は醍醐寺に行き、三宝院と遍智院において灌頂道具の内四摂旗の三昧耶形を写し、智積院において報恩院流の図[1509]を写している。文政12年(1829)6月には智積院方丈の『孔雀明王像』[204]を長谷川等鶴の模本から写している。智積院における模写が別尊法や伝授などにむすびつく傾向があるのは、やはり真言行者としての学修の一環と思われるが、「大孔雀明王経」は空海に重視された護国経である。

(3) 竹林寺

文政5年(1822)憲海は笠山竹林寺を訪れている。10月に《興正菩薩叡尊像》[1946]、《良弁像》[1857]と高僧像を書写している。奈良県桜井市にある竹林寺は笠の荒神とも呼ばれる笠山坐神社の別当である。その開創は奈良時代に遡り、役行者に帰されるが、実際の歴史として語られるのは良辨による中興以後のことである。ただ寺伝によれば、空海が高野山開創以前に祈願した地とされており、憲海の時代にもこうした伝承が意識された可能性がある。

(4) 久修園院

文政9年(1826)7月には大阪府枚方市にある久修園院に立ち寄る。憲海は長谷川等鶴の描いた両部曼荼羅の諸莊嚴図をこの寺で写している。久修園院は奈良時代の行基による

創建という伝承があり、憲海が歴訪する寺院の中にあって珍しい真言律宗である。大坂夏の陣で伽藍を失い、延宝年間に正直宗覚（1639-1720）により再興した。宗覚は、宗学はもとより絵画、天文学、医学など多芸多才の学匠で知られ憲海と類似するところがある⁹。憲海がこの寺を訪れたのはこの宗覚によって発願された紙本両部曼荼羅の存在によるものであろう。現在東寺の後七日御修法に用いられる両部曼荼羅は元禄6年（1693）に宗覚が中心となって制作したものであり、確実な粉本のない時代『諸説不同記』¹⁰を用いて永仁本両部曼荼羅に校訂を加えて制作されたという。この両部曼荼羅が完成した後、曼荼羅図像が秘蔵されることを惜しみ再制作したものが久修園院に遺されたというのである¹¹。憲海が文政7年（1824）に御七日御修法に参加したことは、金剛寺文書中の記録（書-137）によってわかる。憲海はこのとき元禄本を目にしたと思われ、宗覚や久修園院についての情報を得たのもこのときと考えられる。久修園院の両部曼荼羅は空海請来本の転写本の系統にあり、度重なる転写と破損によって、図像こそ不明確になっているものの、空海所縁の両部曼荼羅として憲海の研究対象になったと考えられる。

（5）高山寺・仁和寺・平等心院

高山寺は京都市右京区梅ヶ畑梅尾町にある。梅尾山と称し、創建は奈良時代と伝えるが、神護寺の別院として十無尽院と呼んだ。鎌倉時代の明恵高辨による中興により学問寺としての基盤が形成され、膨大な典籍図像を蓄蔵しその継承に大きな役割を果たしている。憲海がこの寺と接触したことがわかるのは、文政10年（1827）6月のことで、十無尽院経庫の高辨自筆本とされる《阿字観本尊図》[1795]を写している。これを写すのみならず、翌閏6月に清書を高山寺に納めている¹²ので、あるいは何か依頼があったのかもしれない。そして、同月空海所縁の《水天像》[806]を写している。これは「雨乞本尊水天影」高祖弘法大師御真筆在勸修寺云々／此影者玄證阿闍梨縮写之給也」右文政十年丁亥閏六月廿日以梅尾山経蔵請雨箱之本写之了」とあり空海真筆の伝承のある勸修寺本水天像で玄證が縮写したとの伝承を記している。経蔵の「請雨箱」の本とあるので、請雨経法に関わる粉本として伝えられていることがわかり、憲海において空海と請雨経法の接点を確認する粉本といえる。この時憲海は極めて振幅のある模写ぶりを見せており、《水天像》を写した翌日宝永5年写の《春日赤童子像》[1120]を写している。憲海が垂迹神を収集する初期の事例である。これらの模写を行った際、並行して御室仁和寺心蓮院において『大日経大讚・悉地出現品第六阿利沙・大師所撰書刊定目録』（書-100）を筆写しているが、その原本は高山寺

十無尽院のものだから、経庫からの借覧も許されている。

なお、憲海が高山寺に接近する契機となったのは、本山となっていた仁和寺を経由した可能性がある。文政 10 (1827) 年 6 月に仁和寺御所において《仁和寺幄屋部材図》[1266・1267]を写している。これは幄屋すなわちテントの骨組みの部材を計測した記録であり、幄屋を複製するのに必要な形状及び寸法の調査を実施している。このとき仁和寺に滞在することになった憲海は、この機会を利用して、十無尽院の粉本を写すことになったのであろう。恐らく師鑿慶より僧護のことは聞き及んでおり、拝面の機会を待っていたと考えられる。同年 9 月に憲海が写した《五髻文殊菩薩像》[408]は僧護の賛が付されているものであり、自在院が所蔵する『大悉曇章』(書-004)の奥書を見れば、このとき憲海は僧護のいる十無尽院において、空海自筆本からの転写本を承久元年(1219)に高辨が書写したものを写すのである。憲海の学修において、この年の梅尾登山は大きな転機となっている。翌文政 11 年(1828)8 月にも憲海は高山寺にのぼり『高野雑筆集』(書-125)を写し、そして文政 12 年 6 月に《毘盧遮那如来像》[67]を写すところから毎年登山していることがわかる。

文政 10 年(1827)7 月憲海は高山寺近くの槇尾山平等心院にも立ち寄り《阿弥陀如来像》[74]を写す、これは空海真筆の伝承のある五輪光阿弥陀として伝わるものである。憲海は同日のうちに《宇多法皇像》[1732]《後宇多法皇像》[1758]をも写す。槇尾山は空海の弟子智泉が神護寺の子院として創建したと伝えられるが、中世に荒廃し、慶長年間に明忍(1576-1610)により再興した。明忍は真言律の流れにあるが、高山寺において自誓受戒し、近世初期の戒律復興の中心となった僧で¹³、当時この寺は、京都における戒律復興の拠点であった。また、後宇多法王は、憲海が学ぶべき先達の一人とした人物である。

(6) 高貴寺

高貴寺は、大阪府南河内郡河南町にある真言宗寺院。開基は役行者で、文武帝の勅願寺といわれる。弘仁年間に空海が入り、その後一旦荒廃したが江戸中期に慈雲飲光が入って、梵学研究と正法律護持の寺となった。憲海が最初にこの寺で図像を写したのは文政 5 年(1822)8 月である。「詣于河州葛城山高貴律寺而／慈雲大和上御書神祇之次第等拜之刻御草案之一紙／令書写之畢」とあって飲光ゆかりの画像である《天神七代像》[1188]を写し、《弘法大師五輪塔婆拓影》[1249]の墨摺を制作している。弘法大師五輪塔婆は、空海自筆の梵書とされており、空海に対する敬慕、悉曇への興味といった、憲海の粉本収集の特徴を典型的に表す資料である。「憲海／書籍」の印がある《一字金輪仏頂曼荼羅図》[1128]

は原在中の原画とされ、文政5年頃の書写と考えるとよいものである。文政10年(1827)10月には本来道教神であり妙見信仰に習合された《鎮宅靈符神像》[940]を写し、図像収集の幅を広げている。

(7) 仏隆寺

仏隆寺は、奈良県宇陀市にある真言宗寺院で、室生寺末である。空海の高弟である堅慧を開基とする。文政5年(1822)6月の曝涼に際し訪れており空海自筆と伝えられる《善女龍王像》[925]と堅慧自筆とされる《堅慧像》[924]を写す。また空海が唐から請来したという伝承のある茶臼の実測図[1230-1235]を制作している。これは、憲海の古物調査による資料収集の中でも極めて克明に行われたものである。

(8) 文政12年諸山巡歴

文政12年(1829)は憲海が、これまであまり訪れたことのない寺院を巡り書写を試みている。3月には忍辱山知恩院を訪れており、これは現在の円成寺山内で、奈良県奈良市にある真言宗御室派寺院である。同山の中興として知られる《栄弘像》[2233]肖像と原本を紀州の僧某が持参したという《両頭愛染明王二童子像》[682]を写す。続いて、5月に長久寺において《阿弥陀二十五菩薩来迎図》[249]を模写している。原本を「皇都畫工長谷氏藏本」と記しているのは、京都の長谷川家所蔵の粉本であろう。憲海が浄土経系の阿弥陀来迎図を描いているものとしてはこれが最も早い。この書写地である長久寺については確定しがたい。

9月には洛南竹田の明照院を訪れている。《理源大師聖宝像》[1719]は千手院の什物として宝永元年に描かれたものを原本としている。《鳥羽法皇像》[2261]は版本を模写したものである。東寺の義宝による『摧勝述記』(書-101)を写している。空海に関する記述があるためだろう。明照院も千手院も、平安時代に鳥羽上皇が創建した安楽寿院の歴史を受ける寺院で、鳥羽上皇崩御後美福門院得子が建てた新御塔に附属する六つの子院のうちだが、明治維新に所領を没収され廃絶している。真言宗智山派の寺であったという。

12月には吉野瑠璃光院において桜本坊所蔵の《天神像》[973・974]を模写する。

(9) 菅生寺

菅生寺は、奈良県吉野郡吉野町にある高野山真言宗の寺院。奈良時代に龍門寺の子院と

して義淵が開いたとされる。中世に荒廃したが、桜本坊塊濟により文化年間に再興した。文政13年(1830)から天保3年(1832)まで憲海はこの菅生寺を訪れている。文政13年6月『大孔雀明王経』[書-042]の梵漢比較を行い、翌天保2年(1831)4月に『大元大藏勘同総録』(書-108)を高貴寺本と校合、同月『金剛界胎藏法念誦真言校合記』(書-022)も高貴寺本と校合している。天保3年4月に書写した『十八道念誦梵本』(書-018)『十八道念誦梵本行法真言集』(書-019)は弟子の淳如憲暢に授与したものである。授与したものが手元に遺る理由は不明だが、その後淳如の消息が知れないことと関係するのであろう。憲海が伝授を行ったことは知られているが、伝授の実際を記録する資料が遺っているのは貴重である。同月書写した『高祖大師御請来梵本』(書-011)は空海研究と悉曇研究の双方に意義が認められ、翌5月『常求利天女作法』(書-066)は事相研究のための資料である。そして、6月には、こうした書写と平行して進めていた悉曇研究書である『梵学秘要篇』(書-003)が脱稿する。この時期、憲海は菅生寺のみならず高貴寺にも足を運び、天保2年4月に『瑜祇経修行法』(書-075)を写し、翌3年3月には『梵文訳語部類集』(書-002)を写しており、図像の収集より学修の充実を重視した。特に悉曇について集中的に研究を深めている様子がうかがえ、正法律に進具した後の思考の変化を見ることができる。

(10) 高野山

高野山へは、文政7年(1824)3月に登った記録がある。西谷如意輪寺を訪れ『佳水耳目言(進流声明訣)』(書-012)を写しており、「進流声明末資無言蔵林岳憲海」との署名を見ても、南山進流の伝授を受けながら声明研究を進めていることがわかる。

そして豊山を発つ直前にも憲海は高野山を訪れている。天保3年(1832)8月憲海は高野山西院谷の光勝院に於いて真如筆という《弘法大師空海像》[1640]を写し、同日空海筆という光勝院所蔵の《不動明王二童子像》[635]を写している。空海と関わりの深い画像を選び写しているわけだが、会津若松の亀福院が高野山南谷の心南院であるところから、法流本寺に対する礼義があつて高野山に登ったことが考えられる。

第3節 空海資料

諸山巡歴の様子を見ると、憲海は訪れた古刹において、かなり貪欲に学修態度を示している。古画古書を巡覧する中で憲海の興味の対象は徐々に広がりを見せているが、最も特

徹的なのが空海研究に関わる資料であり、憲海の発願がその研究活動の中から形成されていることがうかがえる。

憲海が長谷寺修学期に収集した空海関係の文献類をまず紹介しておきたい。

『一字塔及び高祖大師御真筆写』 写本（1枚） 文政4年（1821/06_/28）原写
（端書）高祖大師御真筆寫昔知脱阿闍梨雙鉤之本／豊山能満院二代之律師寶鏡闍梨付
屬于今請／右御本予寫鉤之了」于時文政四辛巳年林鐘二十有八日 末資憲海」文政八
乙酉年彌生二十一日請御本於龜鶴山寫之了／佛子 榮弘／廿四」（書-135）

この資料は、鏡慶に伝法灌頂を受けたごく早い時期に書写したものである。豊山能満院の宝鏡に頼まれて写しているところから、自発的に興味を示したものか定かではないが、これが空海資料収集の契機となったものと考えられる。会津金剛寺に遺る資料は憲海自筆本ではなく、慈門榮弘が文政8年（1825）3月に憲海から借覧して亀福院において書写したものである。文政7年（1824）から翌年にかけて憲海は中下がりしているので、自在院での報恩講参加のため会津に入ったものと思われ、憲海がこの原本を携行していた時期がわかる。

『高祖大師御真蹟卒塔婆之写』 写本（1紙） 文政5年（1822）
（端書）高祖大師真筆卒塔婆両面双鉤写 従来河州葛城山高貴律寺不動堂在焉
（書-136）

文政5年（1822）8月、憲海は河内高貴寺に赴き、空海真筆の伝承のある卒塔婆の文字を収集している。この時憲海は大変な苦勞をしながら収集にあたったことが、能満院粉本によってわかる。憲海はまず実物を乾拓して全体図を制作したのち、これを双鉤本に書き起こす。そしてその清書本を書いて全部で6枚の粉本を制作し、「寶祚延長法界安立五輪制底」と題して包紙を付し、高貴寺縁起を書写して添付するのである。この体験は憲海をして初めて宗祖を実感させるものであったと思われ、遺物を通じた空海への接近という憲海の空海研究の方向性を確実にしたと考えられる。

『紫宸殿御修法之時拜見奉書写図』 写本（4枚） 文政7年（1824/01_/10）原写

(宝輪羯磨図端書) 高祖弘法大師御請来 文政七甲申年正月後七日御修法於秘密道場紫宸殿中奉拜写之了 釈沙門無言藏憲海二十七」文政八乙酉十二月廿八日請御本模写之 沙門榮弘廿四」(書-137)

(金剛盤図端書) 高祖弘法大師御請来金剛盤之図。文政七甲申年正月後七日御修法於宮中紫宸殿奉拜写之。釋無言藏憲海」文政八乙酉十二月廿八日於豊山長谷寺山内弥勒院隨身砌奉排写之了 末資慈問榮弘廿四」文政九戌年五月初三日請御本摸奉拜写之了 / 慈問榮弘 / 廿四」(書-138)

(香水加持荘嚴図端書) 香水加持荘嚴図。文政七甲申年正月後七日御修法於宮中紫宸殿奉拜写之。林岳無言藏。文政九戌年正月初三日請御本摸奉拜写之了 / 慈問榮弘 / 廿五」(書-139)

(舍利塔図端書) 高祖弘法大師御請本舍利塔圖。文政七甲申年正月十日御修法秘密道場於紫宸殿拜写之 釋無言藏憲海 / 廿七」金之寶塔五色線八葉結之安置大壇上 / 文政九戌年正月初三日於豊山奉拜写之了 金剛佛子 榮弘 / 廿五」(書-140)

文政7年(1824)正月に宮中紫宸殿において行われた後七日御修法に27歳の憲海は参加している。国家の安泰を祈願する後七日御修法は15世紀に中絶していたが、元和9年(1623)に再興され、かつての宮中真言院に代わって紫宸殿に壇を設けて、執行された¹⁴。このとき閲覧した東寺の法具や荘嚴を憲海は写生している。「金剛寺文書」に、憲海が写した図を翌8年から9年にかけて慈門榮弘が豊山において書写した模本が遺されている。四歳年下の榮弘は後に自在院の住持となる僧で、憲海の『論争談判』の書写も行った。榮弘が模写した粉本は全部で12枚あったことが附属する包紙の墨書¹⁵からわかる。これらは、文政3年(1820)に宮中御七日御修法に参加した豊山僧憲譽による写本と、文政7年に憲海によって制作された写本とを組み合わせ、榮弘が12枚に揃えたものと思われ、現在は10枚が遺る。このうち4枚の原本が憲海の手になるもので、書写の目的は道場荘嚴の記録と、空海請来の法具の記録であったと考える。憲海が書写した法具は宝輪と羯磨、金剛盤、舍利塔である¹⁶。

『太政官符』 写本（1冊） 文政11年（1828/07_/29）
（奥書）文政十一年戊子七月二十九日酉ノ刻於皇都烏丸通旅宿所書写之了本紙智積院
沢寮居住力猛法印相承之本請之者 無言藏」（書-124）

『高野雜筆集』 写本（1冊） 文政11年（1828/08_/03）
（奥書）承安元年六月八日於理趣院書写了範杲本也一交了ノ文政十一年戊子八月三於
梅尾山高山寺楞伽山羅婆那宮 無言藏」（書-125）

文政11年（1828）から空海に関わる文献資料を憲海は写し始める。このころから、空海に対する踏み込んだ研究態度が現れると見てよい。ここに写された書物は、太政官から発令された公文書である太政官符のうち、空海に関するものの集成と、空海の書簡集として知られる『高野雜筆集』¹⁷である。あるいは智積院から借用して市中の旅舎で写し、あるいは高山寺で写すと、場所と機会を選ばず行っていることがうかがわれ、本務の合間を縫って書写に努めたようすがうかがえる。憲海はこの時、高山寺で僧護が行っていた兩部曼荼羅敷曼荼羅の模写を助筆するため京都に滞在していた。その後憲海は豊山を下り、会津に戻るが、この間に先の「発願し奉る誓の文」を記している。次に憲海の空海研究が再始動するのは入洛後、能満院に入って以後のことである。

『沙門 空海学法目録』 写本（1冊） 嘉永6年（1853/02_/15）
（奥書）正安四年十一月二十日高野山愚老沙門慶賢八十二ノ嘉永六年癸丑二月十五日
以印本校合之了 王城中央六角堂能満院住 無言」（書-126）

『即身成仏義』 空海 刊本（1冊） 安政4年（1857/12_/01）
（刊記）承応二年二月中澣 高野山宝光院第二十四世末葉 応盛（謹書）ノ時安政四年丁巳十二月一日夜奉写校合訖偏為令法久住報恩謝徳也ノ王城中心紫雲山六角堂頂法寺能満院大願謹記」書肆 京都寺町五条上ル所 額田正三郎版」（書-103）

『文鏡秘府論』 空海 写本（6巻3冊） 安政5年（1858/12_/06）
（奥書-5・6巻）安政二年丙辰十二月六日書写了 王城中真六角堂能満院大願五十九
安政五戊午四月六日夜如印本点等委ク校合了 印本云万治三年十月吉日雲樹宣音房之

二百二十年成安政五年迄右ノ本智山淨客院淨眼法印ヨリ借受自四日夜至間六日夜校合
訖大願六十一印版本ハ九行也」(書-127)

『高祖大師年譜要略』 写本(1冊) 安政6年(1859/07_/12)
(奥書) 続弘法大師年譜第九卷ニ所載抜書之 安政六己未年七月十二日 京城六角堂
能満院大願六十二」(書-128)

入洛後の憲海も、機会を得ては空海の著作や資料を書写しており、研究を継続している
様子がうかがえる。年譜や目録などの書写によって、情報の整理にも手を染めていること
がわかる。この中で唯一の刊本である『即身成仏義』¹⁸は空海の著作の中でも重要書であ
る。憲海は高野山の応盛による承応2年(1653)版を底本として校合本を編集しているが、
寺町五条上ルの伊勢屋額田正三郎の開版となっている。早くから開版されている書物でも
あり、京都の書肆との出版に関わる権利関係の整理や資金の問題から、このような形式で
出版されたのだろう¹⁹。このほか、空海の著作物としては『守護国界経念誦次第・持宝金
剛念誦次第』(書-044)、『十八道念誦梵本』(書-018)、『十八道念誦梵本行法真言集』
(書-019)、『説羅婆俱舍念誦略次第』(書-048)を憲海は書写しており、十八道念誦は
伝授における用途があるため、重視されている。

この他、憲海の収集する空海関係資料としては、請来した経疏図像も対象となったと思
われる。代表的なものとしては、『覚禅鈔』に「大師在唐之日。祈雨止雨共伝給相続来者
也。」²⁰とあるように、請雨法のための経典である『大雲輪請雨経』(書-035)があり、
止雨法のための経典である『止風雨陀羅尼経(金剛光焰止風雨陀羅尼経)』(書-041)も、
空海所縁の経軌といえる。他に、『大孔雀明王経』(書-042)、『随求大明王』(書-055・
056・057)、『毘沙門天王経』(書-060)、『金剛壽命陀羅尼経』(書-083)などは、空海
の『御請来目録』に掲載されている経典であり、空海請来本との関係を見ることのできる
書目には、『施諸餓鬼飲食及水法』(書-074)、『金剛頂蓮華部大儀軌』(書-085)、『摩
訶吠室囉末那野提婆囉闍』(書-061)、『大使咒法経並含光記』(書-065)、『成就妙法
蓮華経王瑜伽觀智儀軌』(書-097)、『金剛頂瑜伽他化自在理趣会普賢修行念誦儀軌 他』
(書-096)、『聖觀自在菩薩心真言瑜伽觀行儀軌』(書-094)、『梵字胎藏曼陀羅諸尊名
号』(書-007)、『梵本普賢行願讚』(書-005)をあげることができる。これを意図的な
収集とする根拠をあげることが困難だが、憲海の関心事の底流に空海につながる要素を求

める傾向を見ることは可能であろう。

このように、智山書庫に遺る憲海蔵書には、直接空海との関わりを見せる書籍が少なくない。これは憲海が「謝徳発願」に「千有餘歳傳書畫 餘事不朽世間希」と考える文献主義を通して見る空海観である。その対象は、次第や口決のみならず、詩論、文書、書簡、年譜、目録など多岐にわたっており、空海その人に対する興味を考えなければ、書写の理由が説明できない内容と考える。書写時期の幅も広く、憲海が長期間にわたり空海という人物そのものを研究の対象としていることが理解される。

憲海は両部曼荼羅印行に対して特別の関心を抱いたという伝がある²¹。それは、空海が将来した現図曼荼羅への敬慕であり、具体的には正しい図像の継承と流布を意図するものと考えられる。長谷寺における鏝慶の曼荼羅講義において憲海も聴衆に加わっていたことはかなり確実な推測といえる。同様に、鏝慶が発願した長谷寺版両部曼荼羅開版に憲海が関わった可能性も高いだろう。また、高山寺では僧護のもとで両部敷曼荼羅の模写に携わる²²など、既に両部曼荼羅に対する研究は相当の進展を見せていたと思われる。憲海が次の段階の事業として、いまだ誰もなしえてなかった原寸大の現図曼荼羅の上梓を発願するのは、彼の思考からすれば、自然の流れであったといえる。憲海が発願した印施千種の大願の向こうに、両部曼荼羅開版を想定した可能性は極めて高い。

明治になり、尊峰の発願と憲海の弟子たちの努力によって開版された御室版両部曼荼羅についても、参考とされた図像集は高山寺僧護のもとにあったものだから、憲海の知見に触れていた可能性は高い²³。こうした諸種の資料は、憲海のもとに今少し蓄えられて不思議はないのだが、火災により失われたか、御室版制作のために持ち出されたまま散逸したか、宗立旧蔵粉本にも、智山書庫蔵書にも確認することができず、今ではその全容を知る手だてがない。智山書庫に遺る両部曼荼羅関係の資料は、絵図を除けば概ね曼荼羅伝授に関わるものと考えられる。

第4節 悉曇研究

憲海は正法律に出会い、その根幹への接近を試みた。憲海が沙弥の時代から悉曇に関心を持っていたことは、郷里に残された伝承からも理解される。長谷寺に交衆して数年を経た文化13年（1816）に、沙門となったばかりの憲海は月輪院の院主より悉曇の伝授を受けている。このときの師僧は明確ではないが、豊山に登った後も、彼の悉曇への研鑽は続い

たものと考えられる。『梵学津梁』の編纂を終えた高貴寺が、当時の悉曇研究の一拠点となしていた事実は動かし難く、憲海も高貴寺において学習した痕跡を遺している。また、高山寺も多数の悉曇研究書を所蔵していて師の僧護がその整理にあっていたため、憲海の行動と悉曇研究との関係は、おろそかならぬものがある。

先に飲光の悉曇研究について触れたが、日本の悉曇研究の歴史は、古く空海の時代に遡る。悉曇は、しばしば梵字悉曇と併称される。梵字というのは婆羅門の文字すなわちインドの文字を指すと考えられており、古代インド語であるサンスクリットを表記するための文字のひとつである北方系のブラーフミー文字から派生したグプタ文字の一種が、中国を経由して日本に伝えられたものとされる。悉曇もまた、サンスクリットのsiddhaMを漢字音写したもので、その意味ははじめ字母そのものを指した「完成したもの」という語意から敷衍して、梵字の文字体系の呼称となったものである²⁴。つまり梵字も悉曇も基本的に同じものを対象とする。また悉曇には、しばしば文字としての機能を越えた語義が期待されることがあり、陀羅尼や種子の形で神聖化された。悉曇の伝来は仏教と概ね同時期と考えられるが、当時の日本ではこの言語を理解することが難しかったため、言語を表記するための文字としての用途はまだ浸透しなかったのである。

天平時代になると、外国僧の渡来も増し、悉曇や梵語への理解もやや進んだが、これらがさらに広く浸透するには、最澄や空海ら入唐八家と呼ばれる留学僧によりあまたの悉曇文献の将来を待つ必要があった。入唐八家と呼ばれる最澄、空海、常暁、円行、円仁、円珍、恵雲、宗叡はまた悉曇八家とも呼ばれ、各が悉曇を学ぶとともに悉曇文献を将来して、日本における悉曇研究の基盤を形成するのに貢献した。空海による研究を嚆矢として、日本の悉曇研究は展開を始め、真言あるいは天台において研究は受け継がれた。天台宗の安然(841-c. 915)は入唐八家の将来文献により研究を進め、『悉曇蔵』²⁵を編纂して、日本における悉曇研究を確立した。空海の将来した『悉曇字記』²⁶は中国の智広により撰述された悉曇研究書であったが、安然がこれを研究の基礎とし悉曇研究に大きな影響を与えた²⁷。しかし、密教の普及は、悉曇への関心を言語としてよりも真言陀羅尼の信仰として浸透させ、言語として悉曇の研究を行うことは、一部の学僧に委ねられることが多く、江戸時代に至るまで、大きな展開はなかった。近世になり、浄厳や澄禅といった学匠が現れ、悉曇を言語として理解する道が開け、飲光に至るのである。近代になり土宜法龍は南方熊楠との往復書簡の中で日本における悉曇研究史について語っているが、その中で当代の研究者として憲海と海如の名をあげている²⁸。憲海は法龍の剃度の師にあたる。

憲海の悉曇研究の萌芽は早く、先に紹介した鈴木素友が伝える伝承から、会津時代にあったと思われる²⁹。長谷寺に交衆して数年を経た文化13年（1816）に、沙門となったばかりの憲海は、月輪院の院主より悉曇の伝授を受けている。このときの師僧は明確ではないが、彼の悉曇研究は、ここに本格的に始まったと考えられる。「智山書庫蔵書」「自在院資料」「金剛寺文書」に遺される、憲海の悉曇研究の過程を示す資料を紹介する。

『悉曇十不可大事』 写本（1紙） 文化13年（1816/閏08/03）
（端書）文化十三丙子年閏八月初三日／於于豊山月輪院自當院主／悉曇御傳授之砌書
写之／奥州會津釋沙門／世壽拾九歳／林岳憲海」天保五甲午年八月奉写得了／觀章」
嘉永五壬子年師走廿五日夜奉写得了／本浄」三紙之内」（書-001）

すでに沙門となった19歳の憲海が悉曇伝受を受けた記録である。「悉曇十不可大事」は悉曇初学者に対する禁忌を示したもので、『悉曇十二通切紙大事』の第十一通にあたる。馬淵和夫によれば、悉曇伝授の切紙を集めた『悉曇十二通切紙大事』は14世紀初期には成立しており、明了房信範（1223-1296頃）に仮託されて室町時代から伝授されるようになったという。その形式から加除が可能であるため、特定の学派の傾向を見せるものではないとされるため³⁰、このとき憲海が受けた伝受の実態は不明である。先に述べた会津の山伏本浄が觀章から伝授された内容³¹が、そのまま觀章が憲海から受けたものに近いと考えるならば、悉曇十八章建立に関わる書物の書写があった可能性がある。憲海は嘉永6年（1853）の自著『梵学宗要章』の序文においてこの十不可大事を収録している。

『大孔雀明王經』 写本（1冊） 文政13年（1830/06_/27）
（奥書）右孔雀明經三卷以古写本奉書写之了于時文政十三年庚寅六月廿七日於和州龍門郷龍門山龍花台院菅生寺写得梵漢比較再三了 声明業兼学沙門無言藏」（書-042）

『梵文訳語部類集』 写本（2冊） 天保3年（1832/03_/15）
（奥書）天保三年壬辰三月十五日於河州葛城山高貴律寺写得之了 無言藏」（書-002）

『高祖大師御請来梵本』 写本（2冊） 天保3年（1832/04_/22）
（奥書）天保三壬辰年四月二十二日於龍門山写得之了 小比丘無言藏」（書-011）

『梵学秘要篇』 憲海 写本（1卷1冊） 天保3年（1832/06_/20）
（奥書）天保三壬辰年六月二十日於和州龍門山菅生寺草之了」（書-003）

『大悉曇章』 写本（1冊） 天保4年（1833/04_/00）
（奥書）永貞元年九月於大唐長安醴泉寺／日本國學法弟子空海謹書」延喜五年五月五日神日奏記了」天養元年十二月四日於光明山以／神日律師本奉書寫了／大法師惠什／年八十五」承久元年七月廿日於西山石水院／以件本奉書寫了／禪念沙門高辨」文政十年九月廿一日於梅尾山十無盡院／以明惠上人御本奉傳受書寫了／求法弟子無言藏」歲次癸巳天保二二年卯月 於會陽／福聚山自在院授輿之則貞竟」〈梵字:8字〉（朱文長円印）無言藏」（書-004）

『梵本普賢行願讚』 写本（1冊） 天保6年（1835/09_/09）
（奥書）天保六乙未年九月九日於陸奥会津總鎮守八角宮社喜福精舍書了 小比丘無言藏」（書-005）

『梵学宗要章』 憲海 刊本（1卷1冊） 嘉永6年（1853/03_/00）
（刊記）于時嘉永六年癸丑三月 王城中真六角堂能滿院大願謹書刻」（書-006）

『梵字胎藏曼陀羅諸尊名号』 写本（1冊） 安政4年（1857/09_/00）
（奥書）享保十四年九月二十六日於高野山新別所円通寺以無量寿院藏本謄写之畢 沙門覺勝／安政四年九月於王城中真六角堂能滿院 写之了 大願」（書-007）

『梵本瑜伽課誦』 写本（3卷3冊） 安政6年（1859/09_/11）
（奥書）享保三戊戌年十一月十五日河南九華山藏版／安政六己未年九月十一日奉書写了 王城中真六角堂能滿院大願六十二」（書-008）

『録外儀軌中梵字真言』 写本（1冊） 安政7年（1860/03_/30）
（奥書）以印版折經書写之了 安政庚申三月晦日初雷西方日 六角堂能滿院大願六十三」（書-009）

『普通真言藏』 浄巖 写本 (5卷5冊) 明治17年 (1883/01_/11)

(奥書) 右普通真言藏従明治十六年未十月二十八日詣行村満福禅寺借寄松尾村仙城院藏中当本並大仏頂大随求写書始半月逗留十一月十一日帰村昼夜精進書写苦辛終翌十七年申一月十一日写得了/于時明治十七年申一月十一日 王城中真六角堂能満院大願和上弟子 沙門大成憲理五十六歳」 (書-010)

菅生寺への登山は智山書庫蔵書の年紀から見る限り、文政13年 (1830) からはじまり、天保3年 (1832) まで続いた。この間菅生寺の他に高貴寺にも訪れていたらしく、『梵文訳語部類集』 (書-002) は高貴寺で書写したものである。天保3年 (1832) 6月20日に、この地で彼の著作のひとつである『梵学秘要篇』 (書-003) の草稿がまとめられているところから考えて、菅生寺における研究は、自らの悉曇研究のまとめを試みたものと考えてよい。しかもこれは、憲海が信正に進具した直後のことであり、彼が正法律護持と悉曇研究を関連するものとして認識していたことをうかがわせる。

自在院に遺る『大悉曇章』 (書-004) 写本を見れば、文政10年 (1827) に高山寺の高辨旧所持本を書写したものとわかる。これは『中天悉曇章』の名で伝えられる書物³²で、後に自在院において授与しているところから、空海自筆本から三度の転写を経たとされるこの写本を、憲海は重視していたらしい。憲海が記す悉曇の筆法については、慈雲流の影響は見られず、大師流を継承しているところから、憲海が悉曇においても遠く空海の伝えたものを意識し、自身の座標を求めていたことは興味深い。京都府立総合資料館本『中天相承悉曇章』の奥書³⁴を見ると、この文政10年に僧護より悉曇伝授を終えたことがわかり、憲海の実質的な悉曇の師は僧護であった可能性がある。

また、『高祖大師御真蹟卒塔婆之写』 (書-136) は、能満院粉本の中にも拓本と双鉤本が遺される資料で³⁵、文政5年 (1822) に空海自筆の伝承のある高貴寺の木製五輪塔婆から採った双鉤本である。憲海の空海に対する敬慕の念をうかがわせるとともに、空海を悉曇研究との関わりの中に意識していることの証左となっている。

早くから鑊慶や僧護ら正法律に連なる僧との交渉を持ち、高貴寺にも再三訪れた憲海だから、慈雲流の悉曇研究に与する機会があったはずだが、憲海はそれを選ばなかったようである。『大元大藏勘同総録』 (書-108) の奥書の示すとおり、高貴寺の蔵書を借用して、菅生寺で研究することがあるのは、長谷寺、高貴寺双方において研究に没頭しがたい事情

があったのであろう。そのころ慈雲流悉曇の後継者だったのは明堂諦濡（1750-1830）であったが、憲海との交渉を示す資料は今のところ見いだせない。

菅生寺は義淵開創の伝説を持つ古刹ではあるが、幾度もの荒廃を経ていたため、この寺にどのような文書典籍が遺されていたか知る方法はない。ただ、もともと三輪寺慶円（1140-1223）により復興された古刹でもあり、憲海が訪れた当時の菅生寺は、吉野桜本坊の快済による中興を受けて、寺勢を増している所であった。貴重な資料が移転されていた可能性は否定できない。『大正新修大蔵経』に収録される『秘鈔』の第17巻注記に「天保二年辛卯十一月二十二日於龍門山修行寺寫得了無言藏」³⁶とあり、菅生寺で行われた書写ながら、特に他所から借覧している様子は見えない。憲海は菅生寺を訪れる少し前から吉野に出向いているので、菅生寺に研究の場を得ることになった経緯については、何者か仲介する人物の存在が推察されよう。

ここに並ぶ書物の中に悉曇の語学に関わるものは余り多くない、むしろ事相に関わる写本が多いといえるが、悉曇研究そのものがこうした梵本の集積の上に学修が可能となることを考えれば、これらは言語としての悉曇を研究するための教材という役割も持つ。飲光の悉曇学がそうであるように、江戸後期の梵学は、経典を読むための外国語として習得することが期待されている。憲海の悉曇研究は、空海との接点を意識しながらも言語の習得へと傾いていた。そして、明治17年（1884）に大成は覚彦浄厳（1639-1702）の『普通真言蔵』（書-010）を写している。大成がこの書物を写した背景には、師憲海の浄厳の学問に対する支持の存在を考えるべきであろう。憲海の悉曇においては慈雲のみならず浄厳に学ぶところも大きかったのである。飲光は『両部曼荼羅隨聞記』³⁷において浄厳の両部曼荼羅觀を批判しているが、憲海は学問上の見解の違いが存在することは当然のことと捉えていたのであろう、それは乗り越えるべき課題なのであって、問題とはしないのである。浄厳は河内の人で、高野山に学ぶ真言僧である。戒律復興を唱え、その流れを新安祥寺流という。徳川吉宗の帰依を受けて江戸湯島に靈雲寺を開創した。悉曇に詳しく『悉曇三密鈔』『普通真言蔵』の著作がある。憲海は浄厳あるいは靈雲寺所縁の粉本を収集しており、宗祖空海への崇敬を示す偉大な先達として、浄厳に学ぶところは多かったと考えられる。

悉曇が語学である以上、その音読の意義は大きなものがある。憲海が早くに高野山において声明の研究を行ったのは、彼の悉曇研究が、本質的な問題を把握していたことを教えてくれる。しかし、若き日に『梵学秘要篇』編集し、こうした研究の成果をもとに晩年の嘉永6年（1853）能満院から『梵学宗要章』を刊行したことを見れば、憲海の悉曇研究は、

開版により簡易な普及書として頒布するところに本分があったと考えられる。憲海にとっての悉曇は学ぶこと自体に目的があったのではなく、その成果をどのようにして弘通に結びつけるかを問うところに課題があった。それこそが憲海にとっての悉曇のありかたであった。

『梵学秘要篇』は、本編16段と先に紹介した憲海の誓文に一行の「悉曇字母表」と覺鑊の「摩多體文略頌」及び憲海の「遍口声句読」を付す。版下は完成したが開版には至らなかった書物で、稀覯書であったが、高橋尚夫、佐久間秀紘らの公刊により、ようやくその内容を知ることができる³⁸。

本篇は、「一 勸誡教語」「二 初學禁條」「三 摩多體文」「四 十八章段」「五 五十字辯」「六 聲韻反切」「七 自他連聲」「八 読誦要法」「九 増加規則」「十 字母所説」「十一 助字諸例」「十二 種子大意」「十三 譯經綱領」「十四 梵篋旁行」「十五 八轉聲略」「十六 謝徳發願」の16段である。各段を内容に従って分類すると、一が序文にあたり、なぜ梵学を学ぶかを語り、二で学習にあたっての注意事項を述べる。三以下十五までが実質の内容にあたり、三が概論、四・九が悉曇文字に関するもの、五・六・七・八が梵語の発音に関するもの、十・十一・十五が文法に関するもの、十二が字義に関するもの、十三・十四が書誌学となっており、先にも述べたとおり終章にあたる「十六 謝徳發願」において、梵学を通した空海の思考の継承を願うのである。

悉曇学の基本を韻文によって暗誦しやすい形式に著したものであり、直接書かれる悉曇は極めて少なく、全体の比率から見れば発音に関わる部分が多い。佐久間の「広く様々な知識・伝聞・故実を集め、公平な立場で梵学全体の要点をコンパクトに編纂しようと努めたように見受けられる」³⁹という評が適切であろう。

このうち第一段は、憲海の悉曇研究の基本的な態度を見ることができると貴重である。全体が30頌840字に及ぶためここに全てを再掲しがたいが、憲海が考える日本の悉曇学の要人について触れた部分を抄出する。個々の人物の内容としては複数頌にわたるものがあるのだが、ここでは最初の頌のみ抄出して以下を省略する。

高祖大師の御遺訓 悉曇梵書の上表章に

窟觀の余暇には梵書を披き 時時習学す印度の文

(第3頌)

後宇多帝の遺誡文に 童子の成立習學の始め

悉曇の字母先ず暗誦せば 而して後に要文をして教えしむ可しと (第13頌)

成賢僧正修学の文には 諸佛の本源は是れ梵文
悉曇を知らざる人師は 半真言師と先徳の言たまう (第14頌)

明恵上人法語の中に 真言は殊に以て梵字を宗とす
然らずんば殆ど所詮無し 既に道場観の座位等も (第16頌)

唐招提寺開壇の祖 鑑真律師法語の中に
人 諸佛を祈り菩薩を念じ 未だ悉地を得ざる事は當に知るべし (第20頌)

又妙極堂の教誡の中にも 必学悉曇の一箇条
諸経の根源は是れ梵文 密蔵の骨體は即ち悉曇 (第22頌)

高貴律寺の飲光師 梵学津梁一千卷
暗誦暗書の十八章 修学已れば袈裟を許す (第26頌)

空海、明恵すなわち高辨、飲光についてはこれまでも憲海と接点のあることを述べた。後宇多帝(1267-1324)は事相教相とともに声明を学ぶことを提唱し、小野広沢の別を取り払おうとした。細分化する諸流派を整理すべきと考えた人物である⁴⁰。成賢(1162-1231)は醍醐寺の僧で祈雨法に優れたという。憲海がしばしば図像研究に利用する諸尊法集『薄双紙』などの著者であり、悉曇と極めて密接に関わる事相家の代表としてあげられているのだろう。鑑真(688-763)は、日本に正式な四分律を伝えた戒律の恩人であり、伝承の上では『天竺・朱和等雜体書五十帖』を日本に齎したとされる。空海以前に日本に悉曇をもたらした僧の代表とする認識がある⁴¹。妙極堂は靈雲寺の浄嚴である、先に述べたとおり近世における悉曇研究の復興を拓いた学匠の一人である。

このように梵学の意義を説く憲海が取り上げる古徳学匠についていえば、師系や法流から理解しやすい空海、後宇多帝、成賢、飲光以外にも鑑真、高辨、浄嚴についてその思想に触れており、寡黙な憲海の思考をうかがうのに貴重である。憲海の諸山巡歴における巡歴地の選定や書写資料の選択また、書写した粉本に対して経軌図像書を用いて検討を加え

の内容を見れば、ここに上げられた僧たちは皆、憲海の図像聖經の収集の過程で何らかの影響を与えてきたことがわかる。その実際については第5章に述べる。

また佐久間の研究で興味深いのは、最後に付された「遍口声四字二句対可読證左之通」についての見解である。これは版下の目次にはあるが、本文には版下にされておらず、別紙書付とされる内容で、憲海自身の師承の上にある飲光の説に対し根拠を列举して理論的な反駁を行っている一文である。遍口声は体文の一種で10字あり、うち1字を欠字とすれば三三相随声すなわち三字三句に分けられるが、本来は二字を欠字として文法的にも正しい四字二句とすべきと述べているのである。三三相随声は飲光が取る立場であり師説を批判することになるため、「慈雲大和上の説に違うことは相当な勇気が必要であったと思われる」⁴²と考えるのである。この憲海の立場はすでに本編第3段に次のように記述される。

涅槃點文遍口聲 la・waは弾舌 餘は上聲
九字は三三相隨聲 梵文の句讀四字を以てす (第19頌)

憲海の自説はここに主張されている。この悉曇入門書にあえて詳細な論考を付すことに憲海は違和感を禁じ得なかったのであろう。最終的な刊本における処置については不明である。憲海が正法律の流れにありながら、「宗旨がたまり祖師びいき」⁴³に陥ることのない態度が理解される。

では、実際に刊本が確認される『梵学宗要抄』とはどのような書物なのだろうか。これは能満院において開版されたもので、本編11丁の小冊子である。はじめに22字20行の序文があり「以上師伝ノ掟件ノ如シ」とあるとおり、「十不可大事」ほか悉曇学習の初歩的な心構えが述べられる。目次はなく、そのまま本編に入り各項目は必ずしも表題を伴わない。本編の冒頭は「弘法大師字母釋義に云く」として空海の『梵字悉曇字母并釈義』⁴⁴を引用する。次いで「悉曇囉素觀」以下摩多16字に体文35字の形・音・義を順次掲げ、梵書は大師流によることが記される。表題もないまま十八章段が列举され、十二転が説明される。五十字文図、和語音韻序、男声、女声。反切、三内、四聲、五韻と発音に関する、合字重成法、連声、八轉声、達画合字法、助字を解説し、最後に梵書光明真言を掲げる。巻末に『梵学秘要篇』に同じく天保3年(1832)の「奉発願誓文」を掲げ刊記を付す。内容は『梵学秘要篇』に準じており、両者が関係付けられていることがわかる。『梵学秘要篇』がこれから梵学を志す者への案内書とすれば、『梵学宗要章』は便覧にあたるものといえる。

従って本書単独での利用は難しく、実際に梵学を学ぶ学徒の備忘録様に利用するものであろう。

ちなみに『梵学秘要篇』で憲海が検討していた遍口声について、本書では三三相随声の説を採って9字として扱い、あえて他の見解を付していない。憲海が最終的に採った立場といえる。この二つの著作を見る限り、憲海の立場は梵学を語学として扱い、特殊な解釈を廃して共通の認識を把握することを考えている。そのため、流布する梵学の諸説を吸収して共通する要素を集約し、公正な規則を提示しようとするのである。それは語学が共通認識の上に成立するものである以上、必然でもあった。憲海が『梵学宗要章』に示した一見単純で素朴な梵学は、当時行われていた梵学の共通要素の抽出という点に意義を認めた著作なのである。そして、語学としての悉曇を重視する一方で、悉曇の持つ神秘性は空海以来伝えられた意義として重視することを忘れていない。悉曇の普及の重要性もそこにあることを理解しているのである。

第5節 声明業

声明業は、梵唄に代表される仏教音楽のみならず悉曇による語学をも含む学問である。文政13年（1830）に憲海が菅生寺において書写した『大孔雀明王経』（書-042）には「声明業兼学沙門無言蔵」とあり、声明業の研究は若き日の憲海の課題となっていたと考えられる。この『大孔雀明王経』は梵文と漢文の比較校正を行った書物で、憲海が声明業のうちに悉曇を一体として認識していることがうかがえる資料である。

声明業はインドでは五つの主要な学問分野をさす五明の一つであり文字文法を意味した。空海が奏請した三業度人の制度を認める官符には「仏法の説かんとするところは所は広しと雖も五明に過ぎず。五明といふは一には声明、二には内明、三には因明、四には医方明、五には工巧明なり。声明と言ふのは四明の本体、三蔵の根源なり」⁴⁵とされ、教学である内明、論理学である因明、医学薬学である医方明、工芸技芸曆数などの学芸である工巧明に比して最も重要な学問とされている。この時、金剛頂業と胎蔵業とともに声明業の度人を得ているところから、空海がこの声明業を宗派の根幹と考えていたことがわかる。憲海の声明関係の資料について考察する。

（奥書-7巻）文政七甲申年三月登于南山而入進流声明之門密隨如意輪寺弘栄老師請指南之余□於于南室院道場昼夜書写伝受了／御本紙一々各別分部類今恐紛亡私合七巻□□進流声明末資無言蔵林岳憲海」（書-012）

『東寺声明決疑抄』

写本（3巻1冊） 元治元年（1864/02_/22）

（奥書-下巻）本云 於和泉国家原寺西御堂書写之卒爾之間老毛難見分可書直之如意輪寺宥信／文政七甲申年三月二十三日於南山西院谷南室院以如意輪寺弘栄老師御本書写了重而 甲子二月二十二日諸南山ノ古本於六角堂能満院再写之了 大願／六十七」（書-013）

文政7年（1824）に書写した『佳水耳目言（進流声明訣）』（書-012）の墨書によれば、憲海は高野山西谷如意輪寺弘栄（1744-1830）に就いて進流声明の伝授を受けたことがわかる。阿波の人弘栄は字を定俊房といい、如意輪寺弘道を師とする。普門院廉峯の資として南山進流の声明の正統を継ぐ者である。進流というのは南山進流の略称で、大師以後小野広沢に分かれた声明を共に継承した宗観に連なる系譜として、空海が伝えた声明の正統を受け継ぐ流派である。鎌倉時代中期にその拠点を高野山に置くこととなり、以後御室（相応院流）と醍醐（醍醐流）とともに高野山が密教声明の中心となった。

しかし疑問となるのは、長谷寺にはすでに豊山声明が伝えられていたにもかかわらず、憲海はなぜわざわざ高野山で進流の伝受を受けたのかという点である。豊山声明は智山声明とともに新義声明と呼ばれ、高野山の大伝法院を移した根来寺に生まれた。従ってその源流は進流にあるが、籙瑜以後醍醐での修学が新義一派の慣行となり、醍醐流との融合の中に新しい一派をなしたものである。憲海が進流の伝受を考えた理由を求めるなら、空海の伝えた形式により近い声明を求めたと考えざるを得ない。声明においても、若き日の憲海は空海への接近を求めたものと考えられる。先の『大孔雀明王経』は、空海の奏請により生まれた三業度人の制度の中に定められた声明業の内に研究されるべき経典として定められており、憲海の復古的学習態度をよく表すものといえる。

新井弘順の研究によれば、『佳水耳目言（進流声明訣）』は南山進流声明の口訣集であり、内容は7冊に23点の声明口訣資料を編集したものという⁴⁶。23点の口訣の中には、南山進流のもののみならず醍醐流の『音律青華集』や東大寺凝然『声明源流記』『音曲秘要鈔』を含むとし、憲海が元治元年（1864）に書写した『東寺声明決疑抄』が、実はこの『佳水

耳目言』で零本のみ収録されていた書目を、後に完本として収集したものであることを指摘する⁴⁷。憲海の声明に対する研究態度が生涯継続していることを確認させる。また新井は本書に収録された『聲明集私案記』奥書を掲げて、その収録の様子を補う。「⁷年来雖_レ聞_レ此鈔文_{記題名}。於世間_レ所持之人稀而未_レ能_レ披見_レ。今日幸登_レ于南山_レ入進流門_レ拜_レ見_レ聲明傳記_レ。數本之中隨喜餘縮于筆為_レ小冊_レ欲_レ流後裔_レ耳。于時文政第七^甲_甲之三月十有三日於高野山西院谷南室院而書寫了 沙門無言藏憲海廿七」⁴⁸とあって、憲海が声明に対する研究を、その大願である後世への継承と結びつけて書写にあたっていることが注目される。

また新井は、憲海が編纂した『灌頂聲明集』についても考察を加え、金剛寺本と天保刊『兩部讚草帋』との中間に位置する西大寺本の存在を紹介するとともに、憲海の編集意図を明らかにしている。

『灌頂聲明集 初夜』 写本（1冊） 文政8年（1825/07/00）

（奥書）文政八年己酉孟秋上旬傳法汀之日／為奉讚歎沒馱達磨草案之了／進流聲明末資無言藏憲海」（書-020）

『報恩院流／灌頂聲明集』 写本（2冊）

（奥書）右讚歎之法則隨阿闍梨所／伝受點進流譜節偏為隨／喜會場之懷寶而已／進流聲明末資無言藏憲海」（西大寺所蔵本）

『兩部讚草帋／初夜金剛界／後夜胎藏界』 刊本（1冊） 天保13年（1842）

（刊記）右兩部讚草帋者灌頂會讚頭之／順次曼荼羅供等取捨通用法則／隨阿闍梨之所傳天保五年甲午／高祖大師一千年為報恩集記畢／于時新義開山興教大師七百年／正當天保十三年壬寅夏安居中／書寫彫刻記 聲明業進流末葉無言藏」（書-021）

『灌頂聲明集』は新義声明による報恩院流伝法灌頂の声明集として、『佳水耳目言』を書写した翌年に編集された。古義と新義では同じ進流に連なっているが、唱法には少し異なる点がある。『兩部讚草帋』の刊記を見れば、天保5年（1836）に空海千年遠忌のため灌頂と曼荼羅供の通用法則を取捨し、阿闍梨の所伝に随って集記し、それを天保13年（1842）の覺鑊700年遠忌に開版したと伝えている。西大寺本は帙裏に「灌頂曼供／兩部讚草帋」と

記され、新義の声明に対し南山進流の譜が点じられていると伝える特徴から判断しても、新井が論じるとおりこの天保5年の集記本に相当するものと見られる⁴⁹。『両部讚草帋』は『灌頂声明集』の名を改めたものである。このような刊本の編集上の変化が跡付けられる『両部讚草帋』において、憲海が行った細々とした修正点を新井は指摘しているが、これは憲海の声明業の理解を示すとともに、その思考方法を具体的に示す資料として示唆に富んでいる。憲海の『両部讚草帋』刊本は、詞章が漢字音写から悉曇に改められる大きな変化があるとともに、「法会としては灌頂と曼荼羅供、法流としては小野方と広沢方、そして声明は新義と古義のそれぞれに使用できる通用法則として編纂刊行された」⁵⁰と評価しているのである。憲海の編集意図は明確であり、極めて実用的な目的のために、公正な取捨選択を経た汎用性のある書物として刊行したのである。

憲海がこの『灌頂聲明集』から『両部讚草帋』刊行への編集過程で示した態度は、先の『梵学秘要篇』『梵学宗要章』の編集態度に共通するものであり、憲海は流派によって異なる口訣をより公正で汎用性のあるものに整理集約しようとする。これは、自説にこだわるあまり細部に至る微差を生み出していく態度と真逆の方向性を持っているといえる。覺鑿が諸流遍学によって細分化される法流の中に共通する普遍性を見いだそうとした態度⁵¹を、この幕末に実践しようとしていたものと考えられる。

その憲海の思考を顕著に示すのが憲海の『仏遺教経』の刊行である。この経典についてはすでに亀福院時代の憲海の活動の中で触れた。涅槃に入る釈迦が説く戒律護持の経典として高山寺の高辨が修したことで知られるもので、法会における声明として天台宗の大報恩寺から智山に伝えられる⁵²。憲海はここでも記譜の整理を意識して、汎用性のある書物としての編集を心がけている。後に能満院時代の憲海が本書の再版を行うに際し、さらに博士などの改訂を加えたことが指摘されている。声明譜として整備された本書は智山において利用されるのみならず、豊山においても文久2年(1862)に遺教会復興のために用いられ、この安政5年(1858)版の「改正博士科註新版／佛遺教経」が購入された記録がある⁵³。

『改正博士科註新版／佛遺教経』 刊本(1冊) 安政5年(1858/01/25)

(刊記) 王城中眞紫雲山六角堂／頂法寺能満院大願謹書 于時安政五戊午年正月二十五日 皇都弘所／伏見街道五條南エ入ル町／藤井文敬堂／寺町通五條北エ入ル町 山城屋文政堂

第6節 憲海の視座

憲海が豊山修学中に諸山を巡り図像聖經の収集に努めた事例を先に検証した。この巡歴の足跡は、彼の思考の基盤を明確にし、その独自性が形成される過程を提示するものとなっている。憲海の行動に於いて注目されるのは、畿内において真言律の寺に立ち寄った記録が少ないことである。中世から近世にかけて戒律の復興の拠点となった西大寺、野中寺にしても、泉涌寺にしても、憲海の行動範囲にあるが、記録に残されていない。単純に資料が失われた可能性も皆無ではないが、それはいかにも不自然であり、憲海が早い時点から、戒律に対する自身の立場を明確に位置づけていたと考えるのが合理的である。

憲海は、長谷寺時代、亀福院時代に畿内と会津を往来している。この時、正確な経路はわからないが、旅程の途中で、古刹などに立ち寄る様子はなく、江戸での滞在を除いて、書写を行った例はない。この事実は、畿内での研究意欲からすると少し意外な気もするが、彼の生活が信仰に基盤を置くものであることから考えるならば、理解は可能である。憲海の中では、図像経疏の収集を貪ることよりも、僧としてのあり方が、まず重視されるのである。僧が戒律を重んじて行動するということは、決して自由なものではなかったし、それが旅となっては一層多くの制約の中に過ごさなければならなかった。もとより、憲海は画家ではなく宗教者の規範の中で自身の行動を律する存在である。憲海の図像収集に対する基本的な姿勢を確認させる事実といえる。

自ら亀福院を辞した憲海は、以後豊山派を離れたと考えられる。畿内に入ってから、弟子の派遣や書簡のやりとりなどはあったが、長谷寺と積極的に接触した様子はない。そしてまた、正法律を護る寺と接触する形跡もなく、制度としての宗派からは、距離を置いたとしか思えない。これも憲海の正法に対する理解の表れと見られる。飲光の伝の中に「宗旨がたまり祖師びいき」を否定する見解が示される⁵⁴。釈迦そのもの、空海そのものの精神に重きを置く憲海は自身の思考の必然的帰結として、宗派間に生まれる独自の解釈には否定的であった。こうした態度は、長谷寺交衆期に芽生えてから、憲海の中に一貫して存在していたと考えられる。

入洛後の憲海は、ひとまず高山寺に身を寄せるが、まもなく天台宗の山王寺に寄寓することになる。師僧である信正も鏝慶もすでに遷化しており、僧護ひとりが高山寺にいまだ存命した。僧護は正法律に進具したが、後にこれを離れた僧である。戒律を重んじながら、密教僧のあるべき姿を模索する憲海は、孤立した存在となりがちであることは容易に理解

される。ただ、第3章に述べたとおり僧護自身が、宗派に対し距離を置く態度を見せていたことから考えて、僧護はこの上ない導師であったと考えられる。憲海と僧護の関係は極めて興味深く、悉曇や請雨経法など憲海における重要な研究課題が僧護と深く関わっていることは象徴的である。

憲海が諸山巡歴の過程で示した興味は、空海の事跡を軸として展開していた。空海を通して釈迦の仏教を捉えているためである。その意味では釈迦に従うあまり密教すら批判の対象となる飲光に比べれば、憲海のとる立場は近代的批判精神に不十分なところがある⁵⁵。ただ、それは憲海が持っていた実証主義的歴史認識の立場から導かれたものでもある。地理的にも空間的にも隔たった釈迦の世界との接点は、憲海が「謝徳発願」に「千有餘歳伝書畫」と語るとおり書画のみなのである。釈迦が説く仏教すなわち正法への敬慕が、憲海の中で具体的な学修に結びついたものが悉曇であり声明である。空海を通してもたらされた釈迦の世界への窓口は遺物という形でしか認識できないのである。釈迦が涅槃の際に遺した護戒の言葉とされる『仏遺教経』の開版は、憲海にとって単なる開版以上の意義があったと考えられる。

憲海が悉曇と声明を一体のものとして理解するとともに、多くの人にその理解を広げることに尽力していることは憲海の思考を象徴する行動といつてよい。『梵学宗要章』においては、悉曇初学者のための平易な便覧として作られた小冊子が、実際には悉曇学修において諸流に共通する項目を校合し、極力特殊な見解を廃して中立公正な内容として整理された書物であることを理解しなければならない。諸流共通して使用が可能な編集を行ったのである。これと同じ方針は『両部讀草紙』の刊行にも見られ、諸流共通で用いることのできる譜本へと校合し、汎用性のある校本を作成した。しかも元版では漢字によって音写されたものを梵書による表現に改め、より祖型への接近を見せるのである。祖型に近づくということは、それだけ諸流で用いる可能性が拡大することになると考えたためである。

憲海の学修の中でしばしば現れる祖型の探究は、空海や正法への接近の基盤となる方法である。憲海の空海に対する畏敬の念は、その向こうに釈迦の仏教を遠望する。従って、空海の末流において細分化していく解釈の相違や作法の変化は、憲海にとっては比較対象に過ぎず、諸流における解釈を重視する立場は採らないのである。憲海が宗派門流から距離を置く理由は、憲海の学修態度から自ずから導かれる結論といえる。宇多法王は真言宗内の小野広沢悉曇の流れの統合を試み、覺鑿においても諸流遍学してその違いの中からより本質的な理解を求める立場をとる。憲海が日本の仏教史の中に崇敬する先達は、こうし

た細分化する宗義の流れに対し何らかの批判的立場を持ち、行動をおこした人物である。そして憲海は飲光の思考に触れ、正法律を堅持しつつも、さらにその上にある浄厳や高辨といった先達の学問や精神を吸収するのである。憲海が課題としたのは、これら先達が理想としたものに等しく、いかにして日本にもたらされた空海の仏教をその祖型のままに理解し継承するかということであり、いかにして僧侶が釈迦の説く仏教の精神を理解し僧侶らしく生きるかということである。憲海の発願はこの二つの課題を自ら確認するためのものといえる。憲海が行う弘通の活動は僧侶のあるべき姿を問うのである。

憲海は空海資料集成の編纂を考えていたし、また悉曇や声明の研究においても、開版により、いかにして内容の共通化を図るかに苦心している。憲海にとっては微差を無限に生む個別の口訣をいかにして整理して祖型に近づけるかが重要なのであり、そこには編集者の眼が存在している。正法に帰るということは、後世に加えられた恣意的な変化をそぎ落とすことである。憲海は開版にあたり、書物としての有用性を保ちながら祖型を探究し、差異を整理した。その発願には、一律僧としての範囲を超えた事業が含まれていたが、板刻の技術に恵まれた憲海は青年期から開版に手を染めている。摺本による普及を前提とした活動方針の萌芽はかなり早いものと考えられる。

以上でこの章の考察を終える。無言蔵という号に表わされるとおり憲海は極めて寡黙である。それだけに『梵学秘要篇』に記した「発願し奉る誓の文」は、彼の信仰の基盤に置かれた問題を伝えて貴重である。「勸誡教語」に先達の教えを語る憲海の思考は、空海や釈迦の精神に対する敬慕に溢れており、その学問はいかにして仏教本来の教えを正しく理解し、継承するかという課題にあてられた。釈迦を正しく理解するための語学として悉曇声明を学ぶ中で憲海が考察したのは、いかにして祖型に近い姿に諸本を校合し、その校本を流布するかという問題なのである。憲海の信仰の基盤となっていたのは、日本に密教を伝えた空海への敬慕である。それは憲海が真言僧であり、空海がその宗祖であることが理由なのではなく、遙か昔に仏教を説いた遠い釈迦の国に対してこの国から開かれた窓であった事実によって導かれている。

もちろん、憲海はこれらの研究そのものを生涯の目的としたわけではなく、最終的に帰結するものは僧侶としての生き方であったと考えなければならない。諸国を巡歴するうちに憲海は自身の内面に湧き起こる様々な問いを発見し探究した。空海資料の収集、正法への帰依、幅広い階層への弘通などの主題はやがて具体的な行動へと展開して行くのである。

憲海の発願は自身への問いかけの答えであった。

【注】

- ¹ 吉岡棟一『ふくしまの寺院』(FTC企業、1976年11月)、pp. 39-46。坂本六良「恵日寺という寺」(『徳一論議』(国書刊行会、1986年12月、pp. 341-343)
- ² 『湖南の史蹟と文化財』(郡山市湖南町史談会、1978年8月)、pp. 194f。
- ³ 宮田登「大師信仰と日本人」(『弘法大師信仰』雄山閣出版、2007年5月)、pp. 27-34。
- ⁴ 国会図書館、智積院、大谷大学、大正大学ほか所蔵は多い。
- ⁵ 馬淵和夫『日本韻学史の研究 III』(日本学術振興会、1965年3月)、pp. 57f, 194。
- ⁶ 高橋尚夫・佐久間秀紘『越後乙宝寺藏 無言蔵大願著 梵学秘要篇』(ノンブル社、2012年8月)。
- ⁷ 飲光が宝暦2年(1752)に開版した『方服図儀』2巻の他10巻からなる広本がある。袈裟の記録規範を集め、図を交えて編集したもの。長谷寶秀『慈雲尊者全集』第1(思文閣、1974年7月)に翻刻あり。
- ⁸ 憲海《理趣経曼荼羅図》[1790]、《理趣経曼荼羅図》[1792]
- ⁹ 木南卓一「宗覚律師伝」(『帝塚山大学紀要』第19輯、1982年1月、pp. 1-33)に『久修園中興始祖正直和尚行業記』が公刊される。
- ¹⁰ 『大日本仏教全書』第44冊(名著普及会、1987年5月)、pp. 1-194。
- ¹¹ 中村涼應、中村幸真『正系現図曼荼羅の研究』(日本放送出版協会、2010年20日)pp. 62-66。中村涼應・中村幸真の両氏は久修園院本両部曼荼羅について、胎蔵曼荼羅を元禄本のお伺い下絵と見、金剛界曼荼羅を資僧による後補と見る。
- ¹² 《阿字観本尊図》[1796]「文政十年丁亥閏六月二日、梅尾山へ清書上ル。无言蔵。〈梵字1字:a>字ハ明恵上人ノ御筆ノ写。〉」
- ¹³ 伊藤宏見「対馬海岸寺明忍資料考及び墓塔訪問」(『密教文化』第113号、1976年2月)、pp. 27-53。
- ¹⁴ 川嶋將生「第九章 江戸時代前期における朝儀の復活—後七日御修法の再興をめぐる」(『室町文化論考—文化史のなかの公武』、法政大学出版局、2008年10月、pp. 149-164)。
- ¹⁵ 「金剛寺文書—「330 紫宸殿御修法之時拝見奉書写図包紙」(『歴史資料館収蔵資料目録』第21集(福島県文化センター、1992年3月、p. 75)。
- ¹⁶ 憲海が書写したものは東寺が所蔵する国宝《金銅密教法具》のうち金銅盤。重要文化財《金銅舍利塔》。重要文化財《金銅羯磨》の3点。金銅輪宝の来歴は不明。
- ¹⁷ 『弘法大師空海全集』第7巻(筑摩書房、1984年8月)、pp. 5-126。
- ¹⁸ 『弘法大師空海全集』第2巻(筑摩書房、1983年12月)、pp. 221-262。
- ¹⁹ 第8章第2節、pp. 290-292。
- ²⁰ 『大正新修大蔵経』図像部第4巻。p. 623。
- ²¹ 小田慈舟「御室版両部曼荼羅の開版と其功労者」(『密宗学報』第178号、1928年6月)、p. 283。小原洪秀「印行曼荼羅について」(『密宗学報』第178号、1928年6月)、p. 312。
- ²² 小原洪秀「印行曼荼羅について」(『密宗学報』第178号、1928年6月)、pp. 313f。
- ²³ 小原洪秀「印行曼荼羅について」(『密宗学報』第178号、1928年6月)、pp. 314-316。
- ²⁴ 田久保周誉『梵字 悉曇』(平河出版社、1981年10月)、pp. 45-58。
- ²⁵ 『大正新修大蔵経』No. 2702。第84巻 pp. 365上 ff。
- ²⁶ 『大正新修大蔵経』No. 2132。第54巻 pp. 1186上 ff。
- ²⁷ 田久保周誉『梵字 悉曇』(平河出版社、1981年10月)、pp. 120-140。
- ²⁸ 『南方熊楠土宜法竜往復書簡』(八坂書房、1990年11月) p. 93。
- ²⁹ 第2章第2節、p. 61。
- ³⁰ 馬淵和夫『日本韻学史の研究 I』(日本学術振興会、1962年3月)、pp. 563f, 693-699。

-
- 馬淵和夫『日本韻学史の研究 III』（日本学術振興会、1965年3月）、pp. 453-461。
- ³¹ 第2章第4節、p. 74。
- ³² 馬淵和夫『日本韻学史の研究 I』（日本学術振興会、1962年3月）、pp. 81f。
- ³⁴ 表紙題簽「中天相承悉曇章」。169×176 mm。紺表紙。斐紙61丁。線装本。蔵印無。書写者記名無。朱注より文政11年（1828）に憲海自筆本から書写したと思われる。
- ³⁵ 《弘法大師五輪塔婆拓影》[1249・1250]《弘法大師五輪塔婆謄写》[1254-1256]により文政5年8月14日に高貴寺不動堂で写されたことがわかる。
- ³⁶ 『大正新修大蔵経』No. 2489。卷78卷p. 578上。菅生寺で行われているため、『秘抄』の書写も梵書である諸尊の種子真言を研究する目的で行われた可能性がある。
- ³⁷ 「両部曼荼羅随聞記畧本」（長谷寶秀『慈雲尊者全集』第8、思文閣、1974年7月、pp. 368-476）。
- ³⁸ 高橋尚夫・佐久間秀紘『越後乙宝寺藏 無言蔵大願著 梵学秘要篇』（ノンブル社、2012年8月）。
- ³⁹ 高橋尚夫・佐久間秀紘『越後乙宝寺藏 無言蔵大願著 梵学秘要篇』（ノンブル社、2012年8月）、p. 27。
- ⁴⁰ 藤井雅子『中世醍醐寺と真言密教』（勉誠出版、2008年9月）、pp. 143-154。
- ⁴¹ 安藤更正『鑑真』（吉川弘文館、1989年2月）、pp. 162f, 182-187。
- ⁴² 同、p. 26。
- ⁴³ 「千師伝」（長谷寶秀『慈雲尊者全集』第17、思文閣、1974年7月）、p. 31。
- ⁴⁴ 『大正新修大蔵経』No. 2701。第84卷pp. 361上, 361下, 362上。
- ⁴⁵ 「真言宗三業度人ノ官符」（『弘法大師全集』第五輯卷15（吉川弘文館、1911年）、pp. 398-403）。
- ⁴⁶ 新井弘順「新義方進流声明末葉無言蔵大願一進流口訣の書写と『両部讚草昏』等の刊行一」（『豊山学報』第54号、2011年3月）、pp. 16-18。
- ⁴⁷ 同、pp. 19f。
- ⁴⁸ 同、p. 19。
- ⁴⁹ 同、pp. 26f。
- ⁵⁰ 同、p. 29。
- ⁵¹ 櫛田良洪『覚鑿の研究』（吉川弘文館、1975年2月）、pp. 295f。松崎恵水『平安密教の研究—興教大師覚鑿を中心として』（吉川弘文館、2002年3月）、pp. 701f。
- ⁵² 新井弘順「遺教会と『佛遺教経』譜本の刊行」（『豊山学報』第55号、2012年3月）、pp. 2-9。
- ⁵³ 同、pp. 9-12。
- ⁵⁴ 「千師伝」（長谷寶秀『慈雲尊者全集』第17、思文閣、1974年7月）、p. 31。
- ⁵⁵ 中村元『日本宗教の近代性』（『中村元選集』第8巻、春秋社、1964年4月）、pp. 113f。

第5章 粉本と儀軌

この章では、近世的な粉本の性格を見せる能満院粉本について、経軌及び図像集と関係する事例を検証することにより古代・中世の白描図像との差異について考察する。第1節では、能満院粉本と別尊法との関係について概観する。第2節では、能満院粉本のうち、図像集の経法部に分類される粉本において、抄物や図像集との関わりを考察する。第3節では、図像集などでは経法に分類されないが、能満院粉本の分類において経法部に分類された粉本を検証し、能満院独自の視点を考察する。第4節では、諸種の別尊法に関わる図像について、抄物や図像集と能満院粉本との関わりを検証する。第5節では、別尊法と無関係な図像における書物との校合の例をあげて、憲海が粉本に求めた価値を考察する。古代・中世の白描図像と近世の能満院粉本との差異を確認するとともに、その差異を生む憲海の思考と能満院工房の活動との関係について検証するのが目的である。

第1節 粉本と別尊法

真言僧である憲海が事相と教相を共に研究したことはいうまでもない。密教において、両者は表裏一体のものとして理解される。憲海自身が請雨経法に優れた験を現したことが伝えられており¹、また阿闍梨として少なからぬ伝法灌頂を行ったと推測されることから、その事相面の習熟は深いものであったと考えられる。古代・中世の図像集編纂の目的が複雑多様化する別尊法の研究にあったことはすでに述べたとおりである。事相研究のひとつとして成立したものが別尊法を集成した初期の図像集である。もちろん、別尊法の基本となるのは経軌であるが、より明らかな功験を修法に期待するには口訣が重要な要素となった。こうした傾向は、仁海による『敦造紙』や元海による『厚造紙』²といった初期の図像集が口訣を集めたものであることから理解される。そして秘蔵されていた図像が転写されるようになると、絵像を含む別尊法の研究が進み、『図像抄』が編纂されるのである。以後より多くの図像が集められ、内容も広範なものとなるが、図像に秘密性が失われる中で次第に事相研究も停滞を見ることになる。

しかし、近世末期に仏画粉本を収集する憲海たちにとって、事相研究は第一義となるものではない。彼らの時代には多種多様な信仰が社会に存在し、密教のあり方も中世とは異なっていた。結果として別尊法に対する研究態度も中世とは異なるものとなっている。事

相は教相と一体であり、密教図像の存在理由のひとつが事相面にあることは動かせない事実である。教学の復興の中で事相に対しても当然のように復興が求められる展開が生まれた。しかしながら、憲海が収集する粉本は密教図像に限定されない。浄土教、華嚴教に代表される顕教図像や垂迹画、さらには肖像画に至るまで、多様化を見せる近世の仏画粉本において密教図像はその一部でしかないのである。能満院粉本がいわゆる白描図像と異なるものであることは、早くから指摘されるどころである³が、その差異の意味するものがどのような思考のもとに生まれているのかを確認することは、憲海が粉本を収集する目的を理解するために必要な作業である。

豊山に学んだ憲海は東密の法流にある。彼が粉本収集を行う際、密教に関する白描図像に対しては、事相との関係を意識したと考えるのが自然であろう。粉本に描かれた図像に対し、その典拠となる経軌を確認することは、図像の正統性、新奇性を理解するために必要な手順である。憲海が粉本に対し、どのように事相面の関心を寄せたのか、その実際を知るために、憲海及びその弟子たちの手になる粉本の墨書から、彼らの思考における粉本と儀軌の関係を考察したい⁴。

はじめに、能満院の粉本筆筭の中で「経法」に分類された粉本に目を向けたい。この函の貼紙には、「宝樓閣、孔雀明王、五大力菩薩、請雨經部、光明字輪、最勝王經、六字明王」の名が書き込まれている。『図像抄』では卷三「経」に、仁王經法、寿命經法、六字經法、法華經法、孔雀經法、請雨經法、宝樓閣經法、菩提場陀羅尼經法が収録される。また『別尊雜記』では「諸經部」に法華經、六字經、童子經、宝樓閣法、無垢淨光陀羅尼經法、寿命經法、理趣經、法經引經、無邊門陀羅尼經法、心經、守護國界經法、菩提場陀羅尼經法、請雨經、孔雀經、仁王經があげられており、能満院の経法に分類されるものが、両書の経法部に分類されたものを基本としていることがわかる。その一方で最勝王經と光明字輪という何れの図像集でも経法部にはないものを含めていることが注目される。最勝王經は顕経經典であり事相との関係がない。護国經である仁王經に関わる五大力菩薩が経法部にあるため、あえて経法に区分したものと考えられるが、密教図像の分類を離れている。また光明真言法は、『図像抄』では第三「仏頂等」に『別尊雜記』には「如来部」卷六に、『覚禅鈔』では「仏部」に入れられるものだが、光明真言字輪はその本尊ではない。光明真言に対する信仰を背景として特別の位置づけを行っているということであろう。

このように、別尊法に示された儀軌に従って図像を制作あるいは校合する例は、能満院粉本の密教関係の尊像において広範囲にみられる。その姿勢は憲海のみならず、工房の沙

弥沙門たちにも浸透しており、図像の制作にあたって、画像の由来や図像集との整合性を問いかけることは少なくなかったようである。憲海たちが、参考にした図像集として使用例が多いのは『図像抄』『別尊雜記』『覚禪鈔』といった図入りのものであり、その他『諸尊要抄』⁵『玄秘鈔』⁶『秘藏金宝抄』⁷『秘鈔』⁸などの抄物が利用される。『諸尊要抄』『玄秘鈔』『秘藏金宝抄』は醍醐寺の實運(1105-60)が著したもので、勸修寺と醍醐寺の諸尊法を収集しており、三宝院流では「後三部鈔」と呼び重用する。『秘鈔』は守覚(1150-1202)の手になるもので、広沢流ながら小野流も受けており、小野広沢の別尊法をまとめている。『大正新修大藏經』には憲海が天保2年(1831)に龍門山菅生寺で書写した写本が底本として用いられており、この書物を憲海が所持していたことが確認される⁹。『薄双紙』¹⁰は成賢(1162-1231)が著しており、小野方三宝院流の諸尊法をまとめている。このように憲海が参照することが多い抄物は基本的に小野流のものが多いが、これは儀軌を重んじた小野流に抄物が多いことから来る必然であったと考えなければならない。憲海の略伝に晩年『図像抄』『覚禪鈔』を書写したことが伝えられている¹¹が、粉本の墨書を見る限り憲海がこれらを引用する例は少なく、その書写を晩年の事業とする説には説得力がある。ただし、粉本筆筭の分類を見れば、他山での閲覧などの機会を利用して両書を利用することはあったと思われる。

『別尊雜記』の巻四「秘法等」には、五大虚空蔵、金剛薩埵、五秘密法、普賢延命菩薩、八字文殊、愛染王、金剛王、大勝金剛、大随求菩薩、転法輪が収録され、別尊法に関わる図像が集められている。能満院の粉本筆筭では、菩薩部の一部となっている「薩埵」函がこの「秘法等」を受けた分類とされており、先の経法関係に分類された別尊法を補う役割を与えられている。ただし「薩埵」函では、粉本の形式として独尊像の分類を意識している。憲海も参照することのある『諸尊要抄』第一には目的別の別尊法が列挙されており、息災・増益・敬愛・調伏の四種法をさらに九つの目的(所望・除災・滅罪・延命・産生・悪夢・呪詛・怨家・天変)分けて40種の修法を列挙する¹²。醍醐寺の僧實運(1105-1160)の説くところだが、これらが当時具体的に功験を期待された別尊法と考えられていた状況がうかがえ、無数に存在するかの別尊法の選択に、指針を与えてくれる。修法の需要はまた画像の需要でもある。

能満院粉本の中にも、これらのうちいくつかの別尊法に関わる図像が含まれている。ただし、図のみしか描かれていない粉本においては、図像集や経軌との関係を考察する手掛かりがないため、例え図像上の対応があったとしても考察の対象とすることができない。

単なる原本の複製である可能性があるためである。考察は、経軌、抄物などによる図像への有効な書付のあるものを対象に行う。これらの墨書は決して多くの情報を伝えるものではないが、作者が粉本を収集する目的を反映させていると考えられ、別尊法との関わりのみならず、絵画資料としての粉本の存在理由をうかがわせる場合がある。

第2節 経法部の粉本

『図像抄』『別尊雑記』において経法部に分類された粉本のうち、抄物や図像集に関わる墨書を有する粉本を検証する。

(1) 孔雀経法



図 5-1 孔雀明王像 [204]

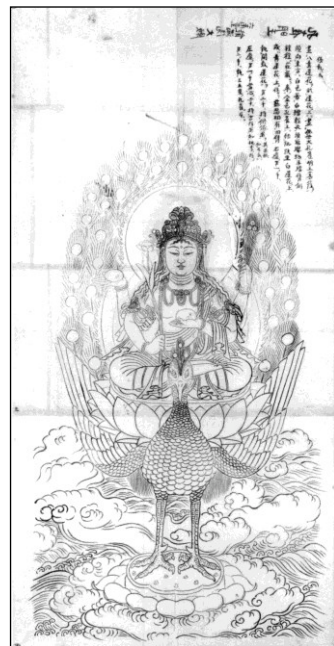


図 5-2 孔雀明王像 [207]

孔雀経法に関するものとして《孔雀明王像》[204] (図5-1) がある。この粉本は現在も智積院が所蔵する絵像の模本で、長谷川等鶴が模写した粉本を原本として複製したものである。その転写の経緯については長谷川家粉本について後述する第7章に譲るが、文政12年(1829)に憲海が模写する際は「孔雀明王 張思恭筆 本寺智積院方丈有之」という原本に関する情報と以下のような長谷川本に転写されていた原本裏書の文章を再録している。

「裏書云。孔雀明王。文禄四年乙卯。於清凉殿御修法大覚寺空性未親王御勤仕之時^平此本尊也。靈験无双而已智積院玄宥僧正。」「于時寛永廿年三月日。令修復於此。重加開眼供養訖。權僧正元壽。」「延寶甲寅正月日。改換袿装。重修開眼加持了。権僧正運敞。」「運敞僧正修飾以来凡過一百六年。破損莫大也。是以用袿装加修補。所攘災招福者也。安永八年乙亥十二月廿八日。僧正動朝」

この記録から、原本について、文禄4年（1595）に清凉殿で行われた御修法において大覚寺空性が用いた靈験新たかな絵像として、代々修理を重ねながら伝世してきたものであることがわかる。しかし、このとき憲海の興味の中心はといえば、「誓願寺裏寺町光明寺涅槃像顔輝ノ筆。孔雀彩色此ノ圖ニ似テ五色也。」「于時嘉永元戊申五月四日。依柁尾方便智院阿砂利耶命捧一本ノ写。於智山中寮端ニ校ニ合原本彩色ニ訖。重而山王寺中翌五日彩ニ校此一本ニ訖。私案云。先達而大師御筆金輪曼荼羅高野山所蔵之縮写拜ニ見之。与ニ此尊影ニ筆彩全同也。定而大師ノ御筆跡不可疑歟。」とあるとおり、原本との彩色校合をする際の、絵像に対する絵画的視点からの見解であり、少なくとも、文政12年（1829）から、嘉永元年（1848）の彩色校合に至るまで、この粉本に対する儀軌への言及はない。

しかし、嘉永元年以降にこの憲海粉本を原画として大版の墨摺版画が作成される。下図は大成が憲海模本を写して作成するが、その際に興味深い展開が表れる。この《孔雀明王像》（版-029）は、この文政12年模写本を原寸で開版したもので、縦183cm、横125cmという大きさになる¹³。この木版には、先に記した憲海の墨書を一部省略しつつ全項目を転載するとともに、「覺禪鈔^平云。右像大師御筆様也。仁和寺代々皆以ニ件本尊ニ被ニ勤修ニ靈験第一佛也。或云不空御本尊^平云」¹⁴「西山柁尾慧友阿闍梨耶大願^平告テ云ク。瑜祇經、金剛吉祥大成就品第九^平云ク。大金剛吉祥母復説クニ畫像曼拏羅ノ法ヲ。取ニ白淨ノ素氈ヲ。等クニ自身ノ量ニ而圖ニ畫セヨ之ヲ。凡ソ一切ノ瑜伽ノ中ノ像ハ皆ナ身自坐セルト等量ニ畫レ之。」¹⁵と新たな記述を追補するのである。

前段は『覺禪鈔』卷八十七、八十八「孔雀經」を参考にした摘録、後段は僧護が憲海に告げた言葉として『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』金剛吉祥大成就品第九からの抜き書きである。大成が下絵を書いているが、憲海在世中の事業であり、文面から考えてもこの追加部分は憲海による記述と考えてよい。開版による普及にあたり、図像の由来を伝える態度は、彼の目的に図像の継承があることを伝えて興味深い。

このほか、憲海による書写年不明の孔雀明王像の粉本 [207] (図5-2) がある。「儀軌^平云。畫ニ八葉蓮花ヲ。於ニ蓮花ノ上ニ畫ニ佛母大孔雀明王菩薩ヲ。頭向ニ東方ニ白色。著ニ

白繪輕衣。頭冠瓔珞耳璫臂釧種種莊嚴^{セリ}。乗^ズ金色孔雀王^ニ。結^ニ跏趺坐白蓮花^{ノ上}。或ハ青蓮花^{ノ上}住^{セリ}。慈悲相^ニ有^ニ四臂^ニ。右邊^ノ第一^ノ手^ニ執^ニ開敷蓮花^ヲ。第二手^ニ持^ニ俱緣果^ヲ。其果狀似^ニ木瓜^ニ。左邊^ノ第一^ノ手^ニ當^レ心^ニ掌^ニ持^ニ吉祥果^ニ如^ニ桃李^ノ形^ノ。第二手^ニ執^ニ三五莖^ノ孔雀^ノ尾^ヲ。」¹⁶と付記され、『佛說大孔雀明王畫像壇場儀軌』から尊容についての部分を抜書きして補足している。孔雀明王法は、東密の中でも大法として重要な位置づけがなされていたため、図像を検証する態度が表れており、文政12年（1829）憲海模本は結果として、種々の検討を経て粉本としての固定が行われたことを伝える。

（2）請雨經部

次に、請雨經法関係の粉本に目を向けたい。憲海が嘉永6年（1849）に書写した《請雨經曼荼羅図》[196]（図5-3）は、表具の法量から記録しているため、本画からの模写とわかる。そこに「秘鈔第五請雨經道場觀。又^ノ說。宮中^ニ有^ニ三^ツノ^ノ梵字1字^ノ：a^ノ字^ニ。成^ニ三^ノ月輪^ト。各月輪^ノ上^ニ有^ニ梵字1字^ノ：hriiH^ノ字^ニ。成^ニ八葉^ノ蓮花^ト。中央^ノ蓮花^ノ上^ニ有^ニ梵字^ノ：1字^ノ：bhaH^ノ字^ニ。變^ズ成^ニ宝鉢^ト。口決。鉢變^ズ成^ニ釈迦^ノ如來^ト。身青色^ニ光明赫奕^{タリ}。具^シ卅^ニ二相^ヲ住^ニ說法^ノ相^ニ。說^テ請雨經^ヲ增^シ諸龍^ノ威光^ヲ。令^テ降^ニ注^ズ甘雨^ニ五穀成就^ト。本尊並^ニ二菩薩^ノ三大龍王^ノ等種子尊形皆可^レ觀^ニ青色^ニ云^云」¹⁷とあって、『秘鈔』卷五「請雨經法」「道場觀」の部分から「又說」以下を抜写する。「又說」には「專可用之」と割注があるので、この説が道場觀の最初に書かれる標準的な方法よりも優先して用いられるべきものとする見解に従っている。そして「解空第一須菩提^ハ昔^ノ竜王。可^レ見^ニ大論^ニ。」とあるのは、道場觀に示されていない図中の僧形像に須菩提を充てて『大智度論』を参考にせよとある。これは『覺禪鈔』卷二十一「請雨法下」の裏書に「口傳傳。曼荼羅前僧形須菩提也。釈尊尤衆教化遣彼^云」¹⁸とある内容であり、憲海が他書または口伝により得た知識であろう。『図像抄』『覺禪鈔』ともに諸雨經曼荼羅に大曼荼羅と敷曼荼羅の二種あると説き、二種とも能満院粉本の中に見ることができる。このうち大曼荼羅は本図と共通する図様であるがこの僧形像についての言及は見られない。この粉本で憲海は図像への解釈を記し、検討の過程を示している。

粉本の中には《請雨法道場莊嚴并壇図》[1262]があり、請雨經法の道場設置に関する図が書写されている。憲海が参考とした直接の典拠は明らかではないが、「此圖^ハ秘本^ノ請雨法始^{ニアリ}」とあって、憲海が験に優れたという請雨法については、彼自身が特に諸經疏を研究したものと考えられる。智山書庫にはその實際をうかがわせる書物が遺されており、

憲海の請雨法が高山寺の僧護から伝えられたものであることを推測させる。

年紀を欠くが『大雲輪請雨經』（書-035）は、憲海の請雨經関連經疏の中では比較的早い時期に書写されたものと考えられる。その根拠は、この写本の奥書に「御室心蓮院書写之畢 梵文以慧口護阿闍梨自筆本梵漢並書之委悉校合了 求法弟子無言藏」とあり、御室心蓮院で書写され、高山寺十無尽院で僧護自筆本との校合が行われたとあることによる。憲海は文政10年（1827）8月に御室心蓮院を訪れて《歡喜天曼荼羅図》[1173]を写したことが確認され、同年9月に高山寺にのぼり僧護が住持をつとめていた十無尽院を訪れて《五髻文殊菩薩像》[408]を写しているため、この時の書写と考えるのが合理的と判断するためである。また、文政12年（1829）6月に書写した『清瀧肝腦神泉苑密』（書-036）は、奥書に「文政十二年丑六月二十五日於梅尾山關伽井坊十無尽院一昼夜写得之了 本紙定真上人筆甚虫入難見後日帰山而欲令清書耳 無言藏大願」とあり、同じ十無尽院において、高辨の弟子

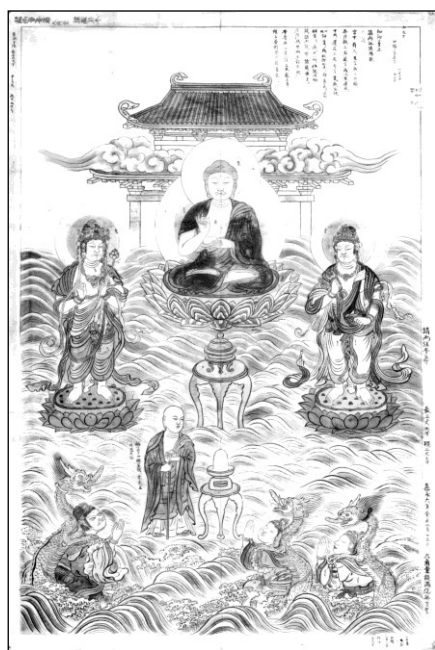


図 5-3 請雨經曼荼羅図 [196]

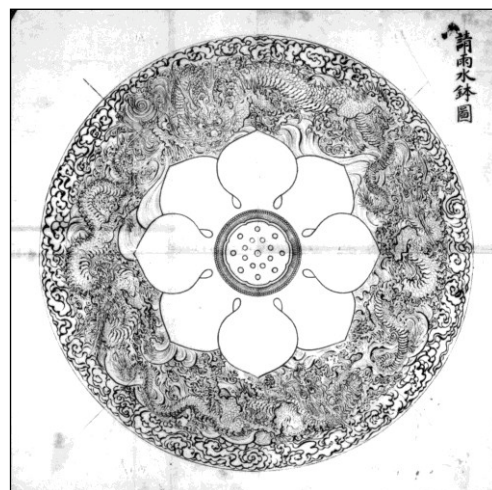


図 5-4 請雨水鉢図 [1263]

定真の手になる善女竜王に関する書を写したものである。この書写に先行して僧護手沢本請雨經との書写校合を終えていると考えるならば、憲海の請雨經研究過程の理解においても矛盾がない。僧護と請雨經法との結びつきは明確であり、憲海の請雨經研究の基盤をここに求めるのが合理的である。

その他、請雨經法に関わる經疏としては、安政2年（1855）の2月から3月にかけて書写された『請雨秘決』（書-037）、『請雨經龍王名字』（書-038）があり、前者の奥書に「文政十

二己丑年六月二十五日於梅尾山關伽井坊伝受書写畢。無言藏大願。安政二乙卯二月二十八日以僉紙稿写了追而可清書之也。」とあり、後者に「建久九年之比以榮然公令清書 一老比丘興然七十九。文政十三年三月日写得之了 無言藏大願。安政二年乙卯三月八日重写之了。」とある。書写日の接近から両書とも高山寺での書写と考えられる。後者は白描図像研究で知られる興然（1121-1204）の書写本である。また、書写の状況は不明ながら安政6年（1859）7月5日に書写された『天台 善女龍王招請法・請雨法』（書-039）もある。憲海が書写した二種類の請雨經曼荼羅が嘉永6年のものであることからすると、嘉永年間末から安政年間初期にかけて請雨經法研究を進めたものと思われる。

憲海は《請雨水鉢図》[1263]（図5-4）を能満院において開版しており、これは請雨經法に用いる法具と見られる。憲海がこの修法の需要に応じていたことをうかがわせ、能満院の粉本の中では事相面の関わりが見られる一群である。大曼荼羅と敷曼荼羅の二つの粉本には「六角堂能満院本」と端書きが見られ、いち早く図像の固定が終わった公式粉本とされており、祈祷の需要に応える必然があったことが考えられる。

能満院の粉本筆筭の「經法」図には「請雨經部」と記されている。『覚禪鈔』卷二十二「止雨法」に「大師在唐之日。祈雨止雨共伝給相續来者也。」¹⁹という口伝があるように、止雨法は、空海所縁の修法として請雨經と一体として捉えられており、能満院ではこの祈雨止雨一体で「經法」の中に組み入れていたものと思われる。『図像抄』『別尊雜記』では止風雨法への項目が立てられていないが、ここで検討するのが適切であろう。会津の自在院が所蔵する『金剛光焰止風雨密咒』（書-040）は、天保3年（1832）10月に会津に向かう途次の憲海が高野山において書写したもので、『金剛光焰止風雨陀羅尼經』²⁰の真言のみをカタカナで抜き書きした備忘録様の写本である。また、智山書庫には憲海の書写になる『止風雨陀羅尼經』（書-041）が遺されている。奥書に「辛丑歳高麗国大蔵都監奉勅雕造。万延元庚申五月十日以南山城上狛延命院儀軌中一校了 六角堂大願。」とあり、高麗版大蔵經の『金剛光焰止風雨陀羅尼經』を書写し、万延元年（1860）5月に上狛の延命院において儀軌と校合したとしており、憲海においても長く研究の対象となっていた修法といえる。というのも、止風雨法は『金剛光焰止風雨陀羅尼經』ほかに説かれる別尊法だが、本尊が諸説定まらない修法である。『覚禪鈔』においてもさまざまな口伝を示して、明確さを欠くため、多くの図像集でも個別に採り上げにくいものであった。

能満院に遺される《止風雨曼荼羅》[201]（図5-5）は、安政4年（1857）3月に書写されたもので、注記に「薄二重口（十一／左）。開心鈔ニ云。本尊釈迦金剛手觀音火天摩那斯

龍王以五尊ヲ為本尊ト。云」とあって『薄双紙』二重卷三の「止風雨法」²¹の名を記すが、これには中央に置かれる釈迦金剛手観音の名が見えず、本図との関係が不明である。また、『開心抄』²²からの引用についても触れているが、大正蔵に収録された写本には当該部分の記載はなく、典拠を明らかにすることができない。高雄曼荼羅の図像を転用した新図と思われ、裏面に記された「薄畫 粗筆 三本」の書き込みは参考にした祖本の存在をうかがわせる。止雨の真言は『金剛光焰止風雨陀羅尼經』に説かれ、憲海自身はその修法に関心を寄せていたことは明らかであり、能満院の《止風雨曼荼羅》が止雨法の本尊として作成されたことは疑問の余地がない。従って『覚禅鈔』卷二十二「止風雨法」の「又伝」に見る「口授云。五尊者。釈迦。金剛手。觀自在。火天。摩那斯龍王也。以杖擊者。降伏惡龍等。打止惡風雨也。」²³従うものということになる。しかし、五尊の像容は『覚禅鈔』に示されるものと異なり、この粉本にも『覚禅鈔』の名を挙げていないところから、何か他に参考となる書き付けを閲覧した可能性がある。止雨法には他に不動明王や迦楼羅の単独本尊によって行われるものや、孔雀経法を初めとする諸種の別尊法によって行うことが『覚禅鈔』に収録されているが、能満院の粉本にこうした用途をうかがわせるものはない。



図 5-5 止風雨曼荼羅図 [201]

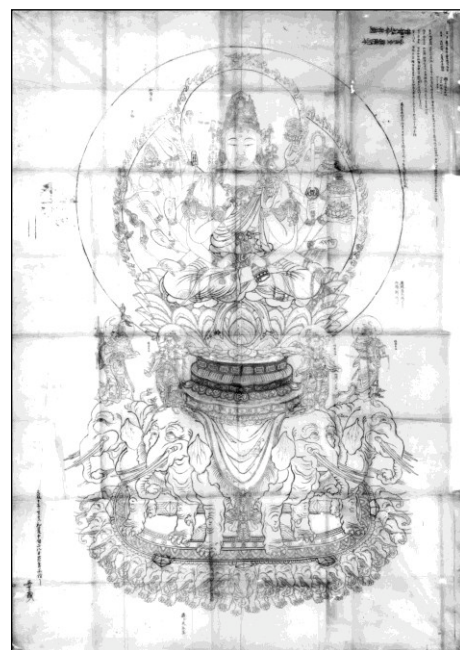


図 5-6 普賢延命菩薩像 [467]

(3) 普賢延命法

普賢延命法については、憲海が文政10年(1813)初夏に書写した《普賢延命菩薩像》²⁴[467]

(図5-6)がある。儀軌に関する注記が多数見られるが、その典拠を示していない。他の粉本に引用される書目から考えると『諸尊要抄』第一「普賢延命法」²⁵から書き出した部分「右方。薩王愛喜 宝光幢咲鉤索。左方。法利因語 業護牙拳鑱鈴。」「額已上過去千仏。心已上現在、。心已下未来、。」「象鼻卷獨古杵各具六牙其象四足踏一大金輪々下有五千ノ群象各負フ其輪ヲ」で、『秘蔵金宝鈔』五「普賢延命」²⁶から抜き出したものが「右方。薩王愛喜 宝光幢咲鉤索。左方。法利因語 業護牙拳鑱鈴。」「東方持国天王。其形忿怒露齒。首髮聳上猶如シ夜叉ノ。髮際有金環身色緑青。着金剛甲冑。左手五指端微曲恰如持物。右手執刀横胸臆前刃下首。左如切物勢。」南方増長天王。形如前。但身色赤火不露現齒。二手外縛二大指並立當心前。」西方広目天王。其形如此。但身色白。二手腕相交右押左持刀索或不持之。」北方多聞天王。身色黄金。頭冠上有赤鳥形。如金翅鳥。天身着甲冑帶刀。左手持宝塔。右手執三古戟。」と考えられ、他でも参照例の見られる二書からの抜き書きの可能性を掲げておく。これらの記事は『覺禪鈔』第七十「普賢延命法」²⁷にも裏書などで記されるが、先の両書ともに記述のある「右方。薩王愛喜 宝光幢咲鉤索。左方。法利因語 業護牙拳鑱鈴。」の部分は『覺禪鈔』では右方と左方が逆に記されているので、この粉本においては『覺禪鈔』を参考にしたのではない。

金剛薩埵形の二十臂像であるが、その像容持物についての引用はなく、四天王を戴く六牙の像の台座に関わる図像部分を抄出する。本尊像容そのものには触れておらず、他に参照する粉本あるいは書付の存在が推測される。この尊像が三世常住であることを象徴する「額已上過去千仏。心已上現在(千仏)、。心已下未来(千仏)、。」の部分を書出した意図は不明である。普賢延命像は二臂像も含めて粉本の数が多く、需要もまた多かったことが推測されるが、この粉本は紙背に「六角堂能満院本」と記しており、《請雨経曼荼羅》同様、能満院の公式粉本として基本的な図像の固定が完了したものと考えられる。

ただし、絵画的な視点からの注記として「座蓮左右ハ弘クスベシ」「御膝ノ皺ヲ改ムベシ」があり、下絵粉本としての修正改善を求めている。

(4) 仁王経法

東密における大法である仁王経法については、特に儀軌に書付を見せる粉本はない。《五大力菩薩像》[215] (図5-7)に「不空訳仁王経下 東方ノ金剛手菩薩マカサ手ヲ持シニ金剛杵ヲ放ニ青色ノ光ヲ」とあって、不空訳の『仁王護国般若波羅蜜多経』²⁸を典拠とする抜き書きを行う程度である。五大力菩薩は本来鳩摩羅什による旧訳の仁王経である『佛説仁王般若

波羅蜜經』²⁹により仁王会の本尊とされた尊像なので、あえて旧訳による図像に空海がもたらした新訳の儀軌を書写する理由は、比較確認のためであろう。粉本箆笥において五大菩薩は経法の函に分類されているので、仁王経法の本尊として意識しているのは間違いない。仁王経曼荼羅として一般的な、不動明王を中尊とする三重院からなる曼荼羅については、粉本の中にも小野仁海の創案と伝えられる増益法用の《仁王経曼荼羅》[211]（図5-8）がふくまれているが、特に儀軌には触れていない。



図 5-7 五大菩薩像 [215]

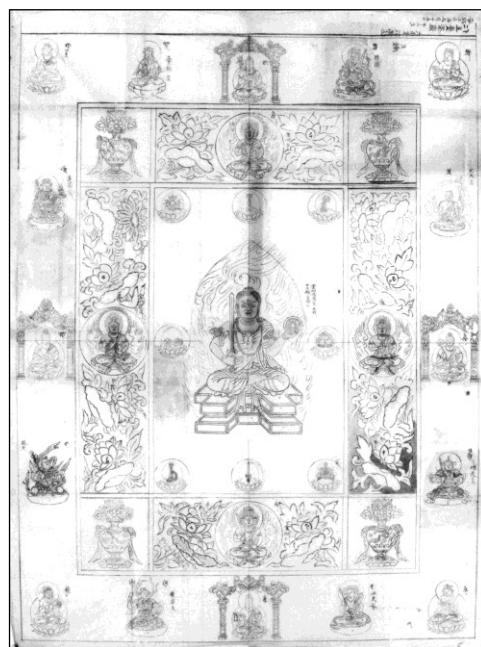


図 5-8 仁王経曼荼羅図 [211]

(5) 六字法

六字法に関するものとして《六字経曼荼羅図》[221]（図5-9）がある。安政4年（1857）5月に憲海が書写したもので、儀軌に関して種々の抄物からの抜き書きが散見する。まず、「心覚ノ別尊雑記所載図。諸尊要鈔七初出」とあるところから、図は心覚の『別尊雑記』巻十一「六字経」³⁰からの写しもしくは同図による粉本からの写しとしている。そして、儀軌として『諸尊要抄』第七「六観音」³¹の項を典拠として、抜き書きしている。抜き書きはまとまったものではなく「大光普照観音。十一面救_レ阿修羅道_ヲ。身肉色_ニ。右_ノ手_ニ取_レ紅蓮花_ヲ。花_ノ上_ニ有_レ花瓶。瓶口_ニ立_レ半獨古_ヲ也。左施無畏。」「天人丈夫観音。准_レ胝救_レ人道_ヲ。左施無畏。身色紺青_ニ。右取_レ青蓮_ヲ。」「如来形_ニ。黄色。金。」「獅子無畏観音。馬頭救_レ畜生道_ヲ。身赤肉_ニ。右手取_レ蓮花_ヲ。花_ノ上_ニ有_レ梵篋。左施無畏。」

「大梵深遠觀音。如意輪救_二天道_一」身白色^ニ。左^ニ持_レ蓮。蓮^ノ上^ニ立_二三古杵^ヲ。右施無畏。」「大悲觀音。千手救_二餓鬼道^ヲ。身色黄金色。六面慈悲^ノ相なり。左手^ニ取_二紅蓮花^ヲ。右施無畏。」「大慈觀音。正觀音救_二地獄道^ヲ。身色青白色。左手取_二青蓮花^ヲ。右手施無畏」「六觀音皆慈悲相也。大略出_二摩訶止觀_一。」とあるとおり、該当する尊像の像容に関する部分のみを抄出するものである。



図 5-9 六字經曼荼羅圖 [221]



図 5-10 六字經曼荼羅圖 [224]

また図の左右には『別尊雜記』からの抜き書きが見られる。「西西方所用。中尊一字金輪。周匝安_二六觀音_一。其觀音ノ形像持物未^ダ本說^ヲ知^ラズ。」「六觀音ノ座位。貞觀寺經藏ニ六字万タラ^{アリ}。中央^ノ梵字1字: bhruuM)。從_レ前右ニ廻り^ノ梵字6字: sa, hriiH, haM, ka, bu, hriiH ^ノ六字ナリ。是聖千馬十准如^ノ六觀音ノ種子ナリ。」との注記で、貞觀寺經藏にあった種字曼荼羅についての補足事項を紹介している。ただ典拠では種字曼荼羅と書いているところを、六字曼荼羅と改めているなど抄出は逐語的ではない。貞觀寺は9世紀に清和天皇の御願寺として建立された³²。開基は空海の弟子真雅であり、空海の法脈を直接伝える伝承があるため、ここで提示したのであろう。貞觀寺の六字經曼荼羅については『覺禪鈔』卷三十一「六字經」においても「或云。貞觀寺寶藏大師御筆種子六字曼荼羅有_レ之。但中尊金輪六觀音之種子計^云。余二明王等無_レ之。^{兼意等說}」³³として「觀宿僧都曼荼羅」の図を掲載するが、抄出部分からも分かるとおり、中央前より右周りに馬頭、聖、千手、如意輪、十一面、准胝の順に六觀音が配置されており、粉本の配置とは異なっているのである。

粉本の下方に六天が描かれるが、その注の中に「キフネ。玄秘抄三。ジブセン。スヒカツラ。」との注記があり『玄秘抄』巻三の「六字経」³⁶に収録された「観宿僧都図」すなわち「観宿僧都曼荼羅」とその押紙に記された「キブネトスカヒカヅラチキブウセント山尾ト何尾ト奥深ト合テ六天也。」を見ていることは明らかである。憲海は醍醐の観宿が示した曼荼羅と『別尊雑記』に見える六観音の配置の矛盾を検討したのであろう。

『諸尊要抄』の記述は小野仁海の説によるものとされるので、『別尊雑記』に醍醐方所要とあるとおりだが、「其観音ノ形像持物未ダ本説ヲ知ラズ。」とあるとおり、『諸尊要抄』の記述の根拠が不明確であることを指摘している。はじめに「諸尊要鈔七初出」と意図的に”初出”の語を使用したのは、この粉本の図像上の問題点を指摘する意図があったと考えられる。

別に、憲海の書写した《六字経曼荼羅図》[224]がある。3図を縦に継いで、卷子にした粉本である。第1図が安政4年（1857）粉本と大略同じであるが、『別尊雑記』巻十一に記される「法成寺被_レ造_二六観音_一之剋。仁海律師進_二勘文_一云。依_二先師所傳_一注_二進之_一其_二文可_レ尋_レ之。」³⁷の一文が加えられており、この図中の六観音の図像と法成寺で建立された六観音像の関係に注目している。このときの仁海による勘文に、先師すなわち空海所伝に依拠すると述べている点が興味の原因なのであろう。憲海は、この六字経曼荼羅図において一貫して図像の根拠を探究する態度を堅持している。同粉本の第3図（図5-10）では、六字尊が描かれ、同じく『別尊雑記』から「山前唐院有_二曼荼羅_一題云_二六字天王_一。其中尊六臂立像。左右第一手作_レ印。今四手持物如_二本図_一。是尊未_レ見_二本説_一。山人云。是尊像雖_レ有_二唐院_一全無_二調度文書_一鳥羽殿丈六像是也。」³⁸と抜き書きが添えられる。請来本と関係の深い比叡山の前唐院にあった《六字天王像》とされるが、これも「本説未見」とあるとおりその典拠が確認できない図像であり、憲海の唐本への興味と、典拠来歴に対する関心をうかがわせる資料といえる。これら六字経曼荼羅関連の粉本は、校合過程にある図像と見なすことができる。

（6）童子経

童子経曼荼羅については、二系統の図像が遺されている。一つの系統は、智積院本などの彩色本として流布することの多い、乾闥婆の周囲に十五鬼神像を描くものだが、能満院粉本に特徴的なのは、もう一つの系統にあたる唐本とされる図像である。これは文政11年（1828）9月に憲海が描いた《童子経曼荼羅図》[1148]（図5-11）で、「童子経本尊。乾闥

婆明王。唐繪縮_レ写_レ之_レ。本云元和四戊午閏三月日写_レ之_レト有_レ之_レ。三井寺南院。主法泉院豪祐。主真祐。」とあり、三井寺南院の図像を法泉院の豪祐らが元和4年（1618）閏3月に写したものとする。『別尊雑記』巻十三「童子経」³⁹の朱注にある「三井寺法輪院本 唐本追加之」とあるものがこの図をさすかとも思われるのだが、『覚禅鈔』巻三十二「童子経」⁴⁰に見る唐本は基本的な要素としては流布像に不動を追加する図像であって本図とは異なり、同書裏書⁴¹に「園城寺図相叶」とする図もやはり不動を本尊とするもので異なっている。憲海が写したこの図が天台系の図像として東密に継承されなかった様子が見えてくる。実際に図像書に説かれる童子経法の図像は先の流布する図像であるにもかかわらず、憲海はこの唐本図像に注目しており、会津亀福院時代には、郷土の画家萩原盤山にこの図像を提示して新図を起こしており、それを盤山弟子の島貫盤月に写させた粉本[1151]が遺されている。現存する絵画作例においても、三井寺と歴史的なつながりが深い三室戸寺に本図像に従う作例が遺る程度で、その流布は限られている。憲海は、この天台系唐本図像の典拠を探索したと思われるが、文献による確認ができないことから保留状態となったことが推測される。憲海の唐本への興味の強さを伝える粉本である。



図 5-11 童子経曼荼羅図 [1148]

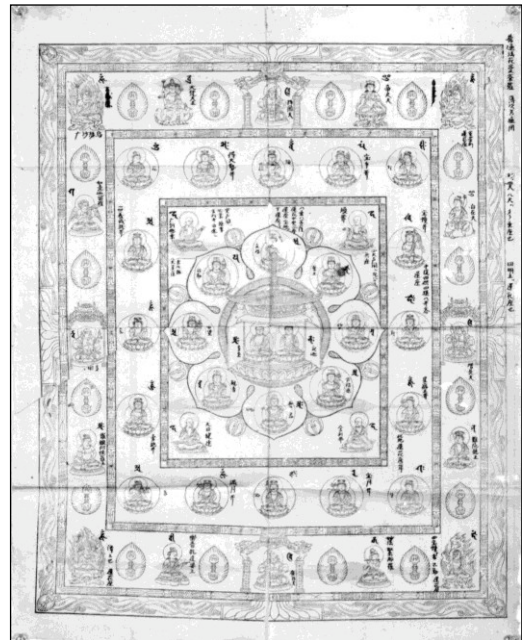


図 5-12 法華経曼荼羅図 (版-055)

(7) 宝楼阁経法など

『図像抄』『別尊雑記』において経法部に分類される、法華経法、宝楼阁経法、菩提場

陀羅尼經法については、能満院粉本の中に対応する粉本が見られない。宝樓閣經法は函にその名を記しているうえに、智山書庫には嘉永3年（1850）4月に書写された「宝樓閣念誦次第 略法」（智山2-307）も遺されているため、かつて収集されていたと考えられるが、紛失したのであろう。

また七箇大法のひとつであり、手本となるものが皆無であったと考えにくい法華曼荼羅について、何も遺されていないことは意外である。長谷寺能満院海如が覚鑿七百年忌に際し施印した墨摺の《法華曼荼羅図》（版-055）（図5-12）がわずかに遺された関係資料だが、憲海は「薄次第'通図。」「四天八天^タラ葉座也。四明王^蓮花座也。」をはじめとして、各尊の種子尊名を書き込むとともに、八天四明王の台座についての図像の誤りを正している。版本では明王は岩座に座し、四天八天は獸座あるいは毛氈座に座している。参考になっているのは『薄双紙』初会第3「法花経」⁴²の道場観なのであろう。この道場観には四天八天四明王の台座の記述はない。憲海が訂正の根拠としたのは『図像抄』第二「経」の「法花経法」に付された図像⁴³あるいは、『曼荼羅集』上の「法華経八」敷曼荼羅に付された図⁴⁴と思われるが、『図像抄』に「法花曼荼羅諸尊形色持物未_レ見_レ説處_一」⁴⁵とあるとおり、法華曼荼羅については、もともと儀軌⁴⁶と流布する図像の関係が定かではないことが述べられている。憲海の指摘も修正の一例にすぎず、法華経曼荼羅に関しては研究が進んでいない様子が見えてくる。

第3節 能満院粉本経法函への増補

能満院粉本筆筭「経法」函に分類された粉本のうち、『図像抄』『覚禅鈔』の経法に含まれない粉本を検証する。また、本来仏頂部に入るべき尊勝法については、粉本筆筭の分類の中に記されておらず、憲海の陀羅尼信仰との関わりもあり、ここにあげておく。

（1）光明字輪

「光明字輪」は通常「光明曼荼羅」あるいは「光明真言曼荼羅」と呼ばれるものを指しているが、本来は別尊法に関わるものではない。不空訳の『不空絹索毘盧遮那佛大灌頂光真言』⁴⁷に説かれる光明真言を絵画の形式で表現したものである。『覚禅鈔』卷十「光明真言」により、不空絹索観音、阿弥陀、胎藏大日、金剛界大日などの本尊をあげ、諸種の作法を収録するものの、「光明曼荼羅」と呼ぶ図像と修法上の関係を持つものではない⁴⁸。

能満院粉本にはいくつかの形式の「光明曼荼羅」が含まれており、この修法が当時普及していた様子がうかがわれ、流布する代表的な図像を収集している。

まずあげられるのが円相の中央に胎藏大日を配し、その周囲を囲むように23文字の梵字陀羅尼を円周に沿って配置するもの[227] (図5-13) で、円相は蓮台座に乗る。脇侍として不動、降三世が円相中の種字によって表され、これも蓮台座に乗る。一般にこの三尊形式の図像となるが、脇侍を省く場合もある。次に円相中央の大日を五大の種字に改めたもの[226] (図5-14) で、やはり円相は蓮台座に乗る。この場合も不動、降三世の種字が配される。いまひとつは「五色光明曼荼羅」と呼ばれる形式の図[238] (図5-15) で、金剛界大日を中尊として周囲を光明真言によって囲み、その下方に胎藏大日を配して、両者を五色の光で結ぶ。これには脇侍はない。この「五色光明曼荼羅」は江戸靈雲寺の浄厳(1639-1702)が校合したものと伝えている。浄厳は『光明真言観誦要門』⁴⁹を表し、光明真言の普及に貢献した人物である。安政5年(1858)9月に憲海が下絵を描いた《光明真言字輪曼荼羅図》版本(版-004)の封紙(版-005)には「光明字輪御筆寫。五字自他通濟。廿三字化他門。観誦要門ニ云ク。字門ニ分ツニ三種ヲ。若シ為ナラハニ自行ノ。可レ外ニスニ字ノ頭ヲ。若シ為ナラハニ利他ノ。可シレ内ニスニ字ノ首ヲ。若シ自他兼濟ニハ。可シニ字ノ下モヲ行者ノ前ヘニ。問フ。如クレ是ノ分ツニ三種ノ圖ヲ。意ニ如何シ。答自行ノ向レ内ニ。化他ノ向レ外ニ。其ノ意ニ易シレ知リ。」謂ク。理趣經ノ前ノ十段ノ皆ナ自證ノ徳ナルカ故ニ。八大菩薩等皆ナ向レ内ニ。降三世教令輪品ノ。教ニ勅スル世天等ニ。曼荼羅ナル故ニ諸尊皆ナ向レ外ニ。是其ノ例證也。猶廣ク可シレ考フニ先哲ノ字輪觀ノ圖ヲ。敬白」とあり、『光明真言観誦要門』による浄厳の説に従った光明真言字輪を開版している。

光明真言は土砂加持の法会をはじめ今日でも用いられることの多い真言である。その普及には中世に『光明真言土沙勸信記』を著した高山寺高辨の存在が大きく、恐らく高山寺にのぼった憲海においても、光明真言に関わる資料に接する機会は少なくなかったはずである⁵⁰。作者年代不明の《梅尾山土砂壺図》(1302)は、高山寺の土砂加持に使用されたものと見られ、憲海の書写と考えるとよい。憲海と光明真言の接点が最初に確認できるのは、文政6年(1823)6月に長谷寺小池坊宝蔵内にあった「金泥光明曼荼羅」の模写である。「箱曰。寄附金泥光明曼荼羅一軸長谷寺。摂州勝尾寺大木食沙門法印上人以空眺下。」と箱書きが記録され、摂州勝尾寺の以空自筆のものであったとされる。

憲海の図像収集が開始されたごく初期から、光明真言に関する粉本を収集の対象としたことが、経法函への配置に結びついたのであろう。大きな需要に応える目的から、憲海

は早い時点で図像を固定し、開版につなげている。

(2) 最勝王経

《金光明最勝王経曼荼羅図》[244] (図5-16) は『法華経』『仁王般若経』とともに護国三部経のひとつとして知られる『金光明最勝王経』⁵¹を典拠とする諸尊集会図である。曼荼羅と呼ぶが密教経典ではないため、いわゆる別尊曼荼羅ではない。釈迦を本尊とする諸尊によって構成され、粉本に二種類がある。釈迦、阿閼、寶相、天鼓雷音、無量寿の五仏を中尊とする16尊で構成する図[243]が一般的な図像と思われ、能満院ではしばしば本画の制作を行っている。いまひとつの図像が本粉本で、釈迦、梵天、帝釈天に四天王を加えた7尊に八大龍王による供養者を加えた図であり、「文政八年乙酉六月以東都護国寺観音堂什軸令模写之。龍肝。六角堂能満院大願」と記す。文政8年(1825)6月に江戸護国寺観音堂で龍肝が書写した粉本を嘉永6年(1853)に憲海が書写したというから、憲海の師僧龍肝の所持本を原本とする。最勝王経は南都の東大寺、興福寺や天台の延暦寺、園城寺などが法会に使用するものだが、東密における事相研究の対象とはなっていないため、これが経法に入れられていることは憲海の判断である。智山書庫にある『金光明最勝王経 六』には「文政十三年卯月十四日於南都東大寺真言院書写之。時嘉永三年庚戌七月二十五日。於



図 5-13 光明真言字輪曼荼羅

図 [227]



図 5-14 光明真言字輪曼荼羅

図 [226]

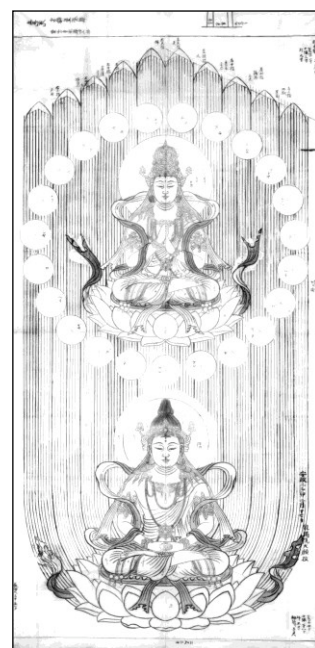


図 5-15 五色光明曼荼羅

図 [238]

皇都室町山王寺重而書写了。無言藏」と奥書があり、文政13年（1830）4月に東大寺真言院で書写したものを嘉永3年（1850）7月に再度書写した写本である。『金光明最勝王經』卷六は「四天王護國品第十二」にあたり、四天王による護國思想を明確に表すことでよく知られている⁵²。龍肝所持本はこの「四天王護國品第十二」を典拠とする。龍肝が南都真言院の住持であったことが、能満院粉本の記述からわかるため、粉本写本ともに龍肝との関わりをうかがうことができる。

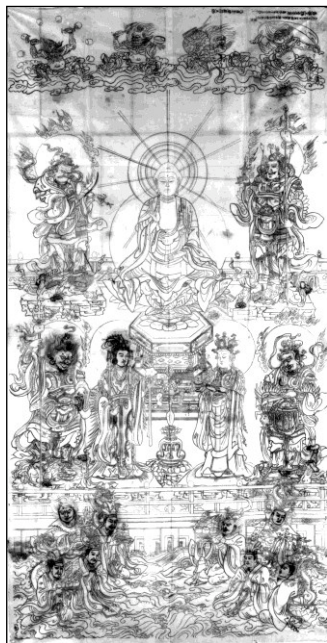


図 5-16 金光明最勝王經曼荼羅図 [244]

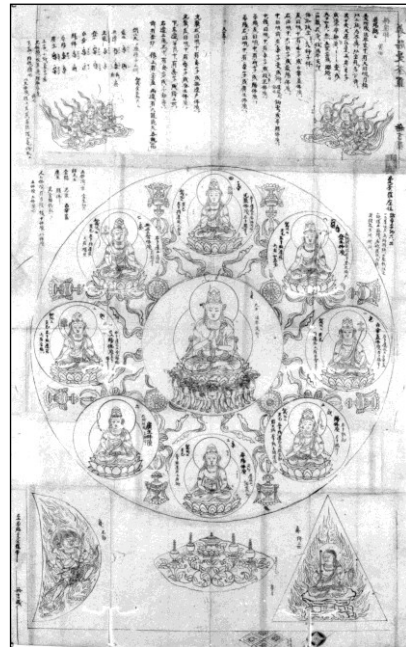


図 5-17 尊勝仏頂曼荼羅図 [1129]

（3）尊勝法

尊勝法に関わるものとして憲海が書写した《尊勝仏頂曼荼羅図》[1129]（図5-17）がある。幾つかの儀軌からの抜き書きが見られ、興味の強さがうかがえる。図像は善無畏訳『尊勝佛頂修瑜伽法軌儀』に則る、いわゆる二巻軌系にあたる。上部に道場観がかなりの長文で抜き書きされる。「道場観云。五大所成法界宮中。有大圓明月輪。以三鈷為界道。以宝瓶為分齋。其中央大蓮花臺上。有梵字1字：vaM字。成法界率塔婆。率塔婆變成大日如来。戴五智宝冠。瓔珞以莊嚴。其身住法界定印。結跏趺坐。玉へり八獅子牀。左圓明中有梵字1字：raM字。成白傘蓋佛頂。右圓明中有梵字1字：si>字。成最勝佛頂。中圓明前。有梵字1字：hruuM字。變成鉤（蓮花ノ上ノ鉤也）鉤變成尊勝佛頂。中後圓明中有梵字1字：truuM字。成光聚放光佛頂。尊勝左ノ

圓明ノ中ニ有ク梵字1字：zaM>字。成勝佛頂ト。尊勝ノ右ノ圓明ノ中ニ有ク梵字1字：truuM>字。成廣生佛頂ト。光聚ノ右ノ圓明ノ中ニ有ク梵字1字：huuM>字。成無邊声佛頂ト。光聚ノ左ノ圓明ノ中ニ有ク梵字1字：zruuM>字。成發生佛頂ト。下ノ左邊ノ半月ノ中ニ有ク梵字1字：huuM>字。成降三世ト。右邊三角ノ光中ニ有ク梵字1字：haaM>字。成不動尊ト。前ニ有ク香炉。像ノ上ニ有ク宝蓋。兩邊ニ有ク六箇ノ飛天各執花。」⁵³とあり、紙背に「仏頂部第四尊勝曼荼羅」と記しているので、『図像抄』卷二「尊勝仏頂」⁵⁴からの謄写のように見えるが、細かい文字の異同⁵⁵を考慮すれば、憲海がよく参照している『秘鈔』卷二「尊勝法」「道場観」からの謄写と見るべきである。曼荼羅図の基本構成を記述する部分である。

続いて『秘蔵金寶鈔』六「八大佛頂」⁵⁶からの抜き書きが記される。

「秘蔵金寶鈔ニ云。問八大佛頂種字云何。最勝。〈梵字1字：bhruuM〉〈梵字1字：si〉。無邊。〈梵字1字：zruuM〉〈梵字1字：hruuM〉、軌ノ奥、〈梵字1字：huuM〉。光聚。〈梵字1字：truuM〉〈梵字1字：truuM〉。發生。〈梵字1字：TruuM〉〈梵字1字：zruuM〉。白傘。〈梵字1字：dhruuM〉〈梵字1字：raM〉。勝佛。〈梵字1字：truuM〉〈梵字1字：zaM〉。尊勝。〈梵字1字：hruuM〉〈梵字1字：hruuM〉。廣生。〈梵字1字：zruuM〉〈梵字1字：truuM〉。上字ハ小野ノ真言集、大佛頂ノ次第並ニ理趣房等ノ傳也。下ノ字ハ内供ノ傳也。八大佛頂ノ種字ニ更ニ有リニ異説。謂クニ二卷ノ儀軌上。』⁵⁷」

と各尊の種字を確認しているが、よみは憲海が付している。このように積極的に種字の校合をしている粉本は少なく、この修法に対する関心の高さがうかがわれる。需要の大きさを表すのだろう。

さらに「曼荼羅座位」について『諸尊要抄』第六「尊勝」⁵⁸から「諸尊要鈔六ニ出。一ニ等ノ次第並ニ所持依テ二卷ノ軌ニ注之。小野ノ僧正最勝ヲ為始ノ廣生ヲ為後ト。是從右ノ方順ニ廻ル敷。」と尊像の配置を記し、これに附属する「曼荼羅図」中の八大仏頂の像容注記を種子とともに下記のとおり謄写する。

八ノ梵字1字：zruuM>發生佛頂。左執開敷花右手置右ノ膝ノ上ニ。秘蔵記ニ云。黄色左手取蓮花上ニ有ク如意宝」一ノ梵字1字：raM>白傘蓋佛頂。左手蓮花上白傘蓋右手揚掌。秘蔵記ニ云。黄色持蓮花上ニ有ク白傘蓋」五ノ梵字1字：zaM>勝佛頂。左手執劔右手揚掌。秘蔵記云。黄色左手持蓮花上ニ有ク宝劔圍火焰右手執未開蓮花」四ノ梵字1字：truuM>光聚佛頂。左手蓮花上安佛頂印右手揚掌。秘蔵記云。黄色左手持蓮花上ニ有ク宝」ノ梵字1字：vaM>大日法界定印」三ノ梵字1字：hruuM>尊勝佛頂。定印蓮花上安金剛鉤ヲ。秘蔵記ニ云。黄色左手取蓮花上有鉤」七ノ梵字1字：huuM>無量聲佛頂。右手蓮上商佉左揚掌。

祕藏記云。黄色左手持蓮花上^ニ有螺貝」二<梵字1字：si>最勝佛頂。右手蓮花上安八輻輪。左手揚掌。祕藏記云。黄色左手持蓮花上^ニ有金輪」六<梵字1字：truuM>廣生佛頂。右縛折羅左揚掌。」

「曼荼羅図」の円相内の八大仏頂（最勝佛頂。無量聲佛頂。光聚佛頂。發生佛頂。白傘蓋佛頂。勝佛頂。除障佛頂。廣生佛頂）について像容注記を謄写するのみならず、各々に『諸尊要抄』に足りない部分を『秘藏記』から補足している。

注記には補足事項として『秘藏金寶鈔』六から「金寶鈔六。五佛頂^{トハ}。師主^ノ云。金輪、光聚、白傘蓋、廣生、勝佛。見金輪儀軌^{ニ云}」又云佛頂^ニ有^ニ多種^ニ。謂ク十佛頂八佛頂五佛頂三佛頂也。」⁵⁹と抜き書きを行い、仏頂尊の組み合わせが八大仏頂の他にも複数存在することを付記する。

このように、尊勝曼荼羅については尊勝陀羅尼への信仰の強さも背景にあり、極めて丁寧に図像への検討がなされている。特に、仏頂尊の配置については異同があつて何れに従うべきか検討した様子が見ええる。また、こうした尊勝法への興味が、大法に准じる如意宝珠立の尊勝法である如法尊勝法についても勸修寺流の作法を書写することにつながるであろう。嘉永4年（1851）正月に醍醐寺報恩院本の『如法尊勝法 勸流』を書写している。

第4節 別尊法粉本の諸相

『諸尊容抄』に掲げられる諸種の別尊法に関わる粉本のうち、抄物や図像集に関わる墨書を有する粉本を検証する。

（1）大勝金剛法

大勝金剛法については憲海が弘化2年8月に江戸根生院で模写した《大勝金剛像》[26]（図5-18）がある。原本は享保6年（1721）に憲海が新調した本画で、現在遺されているのは、これを安政4年（1857）7月に校合して再制作した粉本である。校合に用いたのは『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』大三昧耶品第八であり「金剛手等皆各^ノ默然^{アリ}。復現^ズ身手^ヲ。具^シ玉^{ヘリ}十二臂^ヲ。持^シ智拳印^ヲ。復持^{セリ}五峯金剛^ト蓮華^ト广尼^ト羯磨^ト鉤^ト索^ト鑊鈴^ト智劍^ト法輪^ト十二大印^ヲ。身住^シ玉^フ千葉^ノ白蓮花^ニ。身色如^シ日^ノ。五髻^ノ光明。其^ノ光^リ無^ズ主遍^{セリ}十方^ニ。面門微笑^ズ。即說^テ大勝金剛頂最勝真實大三昧耶^ノ真言^ヲ曰。」⁶⁰と像容を

示す部分を抜書きする。

これとは別に『秘鈔』卷十一「大勝金剛法」⁶¹から教舜記として「秘鈔十一教舜記」云。「三井寺ニ有唐本繪像。彼寺ニ為究竟秘事ト云」又云一二臂大日説彼經十二品云「鳥羽ノ僧正云大勝金剛ノ十二臂ノ愛染王ト習仁和尚ノ秘事云」宝樓閣經説一身四面十二臂ノ金剛薩埵云「當流ノ習撰一切仏頂輪王ト」教舜記云。或口云智拳印ノ大日撰四ノラハヲ。蓮花手ノ阿弥陀撰西方ノ四親近。羊石ノ不空撰北方ノ四親近。索手ノ撰鬘花ノ二菩薩。鈴ノ手ノ撰舞塗ノ二菩薩。法輪手ノ弥勒也。弥勒ノ即定表ノ台藏大日。五古ノ手ノ阿闍撰東方ノ四親近。尸尼ノ手ノ宝生撰南方四親近。鉤ノ手ノ撰喜香ノ二菩薩。鑊ノ手ノ撰歌灯ノ二菩薩。智釵ノ文殊也。文殊ノ即智ナルカ改表ノ金剛界ノ指ノ金界ノ五智也。」とかなり長文の抄出を行うが、『大正蔵』に収録される『秘鈔』にこの教舜の注記はなく、憲海が参照した写本を確定することができない。教舜記とする部分は大勝金剛の本体を表す説であり大日、愛染明王、金剛薩埵、撰一切仏頂輪王などがあげられている。裏書も含めてこれらの説は『覺禪鈔』卷十六「大勝金剛」⁶²に断片的に収録されるが、直接図像との関わりはなく、教相面の問題を粉本墨書にとりあげる珍しい例である。



図 5-18 大勝金剛像 [26]

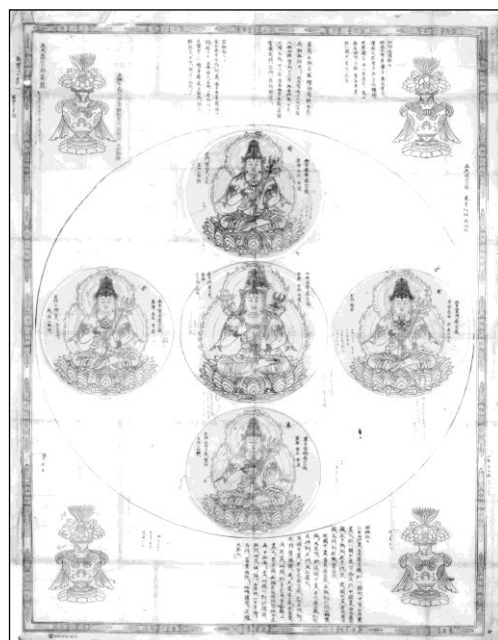


図 5-19 五大虚空蔵像 [548]

(2) 五大虚空蔵法

五大虚空蔵法に関しては大成が嘉永5年（1852）に書写した《五大虚空蔵菩薩像》[548]（図5-19）がある。憲海は嘉永元年（1848）に長谷川家の粉本から同図を写しており、大

成はこれらの図から本図を起こしたと考えられる。抄物や経軌からの抜き書きが多く見られる粉本である。

『秘鈔』卷九「五大虚空蔵」「道場觀」から「妙高山ノ頂ニ有ク梵字：1字」字。成ニ大蓮花ト。蓮花ノ上ニ有ク梵字：1字」字。成ニ宮殿樓閣ト。中ニ有ク梵字：1字」字。成ニ八葉ノ蓮花ノ。其ノ上ニ有ク大圓明ノ月輪。等ニ自身ノ量ニ。於ニ一圓ノ中ニ更ニ分テ為レ五ト。」菩薩ノ衣服首冠瓔珞。皆ナ依テニ本色ニ。各々結跏趺坐セリ四波羅蜜十六大菩薩八供四摂賢却ノ十六尊。外金剛部ノ廿天七曜九執廿八宿。乃至無量無數ノ菩薩聖衆。各ノ持グニ宝珠ヲ前後ニ圍繞セリ。」⁶³と本図の世界観を提示する。

『玄秘鈔』卷一「五大虚空蔵」から「或云。五尊皆持ツル鉤ヲ意ハ。南方宝菩薩ノ種子鉤ノ種子也。五佛皆入ルニ宝部ノ三昧地ニ故ト云。又護摩品ニ幢菩薩ノ處ニ云。皆雨スニ諸宝ヲ。結ニ彼ノ業ノ本印ヲ能ク召一切宝ヲ云。」及び、『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』卷下⁶⁴から「行者應レ畫クニ五大虚空蔵ヲ。於ニ一ノ圓明ノ中ニ。等グニ自身ノ量ニ畫ケレ之ヲ。於テ一ノ圓ノ中ニ。更ニ分テ為スレ五ト。於ニ中ノ圓ニ畫ケニ白色ノ虚空蔵ヲ。左ノ手ニ執リル鉤ヲ右ノ手ニ持シメヨレ寶ヲ。前ノ圓ノ中ニ畫ケニ黄色ノ虚空蔵ヲ。左ニ持シル鉤ヲ右ニ執ルニ寶金剛ヲ。」右ノ圓ノ中ニ畫ケニ青色ノ虚空蔵ヲ。左ニ執ル鉤ヲ右ニ持スニ三辨寶ノ放ツニ大光明ヲ。於テ後ノ圓ノ中ニ畫ケニ赤色ノ虚空蔵ヲ。如ク前ノ左ニ持シル鉤ヲ右ニ持スニ大紅蓮花ヲ。」左ノ圓ノ中ニ畫ケニ黒紫色ノ虚空蔵ヲ。如ク前ノ左ニ持シル鉤ヲ右ニ持スニ寶羯磨ヲ。是ヲ名クニ五大虚空蔵ノ求富貴ノ法ト。若シ畫カハニ此像ヲ。於ニ青色或ハ金色ノ絹ノ上ニ畫ケ之ヲ。其ノ菩薩ノ衣服首冠瓔珞。皆ナ依レニ本色ニ。各々半跏坐ニセヨ。畫キニ此ノ像ヲ已テ。對テ於ニ壇ノ前ニ。無シレ問事時方ヲ。但シ誦スル事ニ五字明ヲ一千万遍セヨ。」即得ヘシニ富貴成就スル事ヲ。時時ニ護摩セハ。速ニ獲ムニ大悉地ヲ。」⁶⁵と尊像の像容及び標識について典拠を示している。

「東寺印版ノ通持物」の記事は、東寺が所蔵する《五大虚空蔵菩薩図》の図を原画として東寺が開版した《五大虚空蔵菩薩》版本⁶⁶と像容の比較を行ったことを伝えている。

(3) 随求法

随求法に関わる粉本として嘉永2年(1849)に書写された《大随求菩薩像》[535] (図5-20)がある。『薄双紙』初重第六から「道場觀。壇上ニ有ク梵字：1字」字。轉グ成ニ赤蓮花座ト。座ノ上ニ有ク梵字：1字」字。變グ成ニ梵篋ト。轉グ成ニ隨求明王菩薩ト。色ハ深黄グ具ニ八臂ヲ。」左第一手持ニ蓮花ヲ上有ニ金剛輪光炎アリ。次手持ニ梵篋。次手持ニ宝幢。次手持ニ索。」右第一手持ニ五鈷金剛杵ヲ。次手持ニ戟鉞ヲ。次手持スニ宝剑ヲ。次手持ニ鉞斧鉤ヲ

一。」衣服瓔珞相好圓滿セリ。」⁶⁷と像容部分を抄出する。本図の筆者が憲海であるか大成であるか明確にしがたいが、円相中の尊像として描かれる。嘉永5年（1852）には大成が長谷川等鶴本により校合した図が雲上の像として描かれ、安政3年（1856）には同じく雲上の図像として憲海が描いたものを遺す。この図像には類似する粉本が複数存在し、図像固定を模索する過程がわかりやすい。

憲海は、文政12年（1829）12月に海如から「大随求陀羅尼略句義」（書-054）を贈られており、翌13年（1830）閏3月には「随求大明王」（書-057）を梅尾十元盡院で書写しているため、比較的早い時期からこの修法に対する研究を始めていたのであろう。「随求大明王」には天保6年（1835）、安政6年（1859）の写本があり、安政7年（1860）にはこれを開版⁶⁸していることから、憲海の図像校合から開版に展開する思考がよくうかがえる粉本である。



図 5-20 大随求菩薩像 [535]



図 5-21 烏枢波摩明王 [709]

また年紀不明ながら、宗立が大随求菩薩像を描く際の法量比率について、木像との比較をしながら校正している粉本《大随求菩薩像》[542]がある。

「肩先ヨリ頸迄七分。」耳長サハ二圀也。私云鼻ノ上ヨリ文廻ヲ立テ筋ノ上ニ白毫ヲ付ル宜シ。亦目尻ノ終リモ寸法定リアリ。目口鼻耳ハ木像ノ寸法同。」白毫ハ耳ト等ク付ル。木像モ同。」目尻ハ上下均等。横ニ終ルベシ。目尻下ルハ非也。上ルモ非也。」光極ヨリ口迄二圀。目迄一圀」○下オトガイ迄木像今時ハ四分也。画像ハ三分也五リン。」臍ハ下ヨリ二圀ノ中一尺ノ仏ノ寸法ニテ木像ハ臍ヨリ上光極迄四寸臍下足迄六寸也。」蓮臺ノ縁内外二節共如是画ク事非也。外ノ節ハ直ク

内ノ方斗曲^{リアルベシ}。如是宜。」膝両方^十圍也。木像ト同用。」足三圍也。木像ト同。腹ハ四圍木像ヨリ少ナシ内ノ方ニ校^{ヲナス}蓮花左右両方へ出ル事圍十六也」乳^下ヨリ六ツ目ノ節ノ上ニナス」木像^{座像}ナレハ光極ヨリ下迄十圍ニナス。画像ハ光極ヨリ下迄十一圍ニス。膝ノ上腰ニ一圍用之。御面^二圍半也。但シ横^耳迄三圍也。少シ内^{ニスヘシ}。」

図像に対する絵画的検討の記録として、彫像との比較は現実の課題を含んでおり興味深い。絵画と彫刻の関係を考える場合、彫刻を描く絵画があるほか、引懸と呼ばれる彫刻の下図となる絵画があるが⁶⁹、彫像と絵像の比較は言い換えるならば像容各部分の比例関係の比較であることがわかる。近世における仏画粉本の機能において、こうした図像と絵画的表現の関係もまた、重要な要素になっていたと考えられる。

(4) 烏枢洪摩明王

《烏枢洪摩明王像》[709] (図5-21) については憲海による「唐本 穢跡金剛像」という外題の粉本の端書に「十卷抄明王部文」とあるので『図像抄』巻八「忿怒」の「烏瑟澁摩明王」を参照せよとの指示である。本像は八臂像だが、『図像抄』には八臂の唐本を二例紹介する。初めに示される唐本は、本図像と異なった像容であるが、粉本に記される注記は「左右同印。右手印。以^二大指^ヲ押^二中無名^ヲ小^ト頭^ト立。」右手向^レ上取^二獨古^ヲ。」青天衣。赤袈裟。赤肉色也。」左手印。寄^二腹側^ニ面向^レ外。」と断片的ながら、この唐本の記述から抄出されている。図像と墨書は一致せず、むしろ憲海が「唐本穢跡金剛像」と記すとおり、本図は『図像抄』に記されるもう一本の唐本図像⁷⁰から採られている。その像容は「又唐本穢迹金剛像。身赤肉色面有三目。頭髮聳豎。著天冠。冠緒飄舉。其色白如常。身面向左方。身盤石上。有八臂。左右一手結印。如初第一手像印。左手上舉頭上持劍。中手持三古鈴。下手伸下臂把索。右上手持如鞞物。若是棒敷。次手屈肘向上持獨鈷金剛杵。杵腰纏赤綵帛。下手垂把弓箭。著青天衣赤袈裟立石上。從石四邊出生火焰。尊上空中有化佛坐像。是釈迦佛也。」⁷¹とあり、概ね一致するが、詳細に比較をすれば、正面向きである点、鈴が三鈷に代わっている点、頭髮が逆立つ点、冠に緒を欠く点、金剛杵に赤帛を巻かない点など多くの点で異なることがわかる。「十卷抄明王部文」との注記はこの図像の特殊な点を、典拠に従って確認すべきことを指示したものと考えられ、校正中の図像といえる。

(5) 馬頭法

馬頭法の本尊としては慶應元年（1865）6月に宗立が制作した《馬頭観音像》[335]（図5-22）の草稿がある。憲海が写したものではないが図像上の検討には師憲海の意向が反映されていたものと考えられる。『薄双紙』初重巻四「馬頭」から「道場観」と「印」をそのまま抜写する。

「道場観。壇ノ中ニ有_レ梵字1字:a>字_一。反_レ成_二蓮花座_一。々上ニ有_レ梵字1字:ham>字_一。反_レ成_二馬口形_一。々々々反_レ成_二馬頭明王_一。赤肉色ニテ三面二臂ナリ。忿怒形ニ_レ頭上_ニ有_二白馬形_一。如_シ輪王ノ馬宝_ノ。碎_レ破シ衆生ノ諸ノ恐怖_ヲ。噉_レ食_レ無明諸障_ヲ。盡_レ無_ラシム_レ余_ヲ。両手_ニ結_テ根本ノ印_ヲ。立_テ右足_ヲ左ノ_レ踏_カナウ_ラ翻_テ向_カフ_レ外_ニ。蓮花部ノ無量ノ聖衆前後圍繞_{セリ}。」印。二手合掌。二頭二無名屈入_レ掌_ニ合_レ甲_ヲ。二大並立微屈勿_レ著_ル事頭指_ニ。」⁷²

四方に花瓶を配しており、独尊像ながら修法本尊として新たに制作したため、像容に関する部分を正確に表現することを意識している。



図 5-22 馬頭観音像 [335]



図 5-23 准胝観音像 [363]

(6) 准胝法

准胝法の本尊である《准胝観音像》[363]（図5-23）としては嘉永元年（1848）に大成が長谷川家本を写したものがある。これは長谷川等鶴が梅尾で写したものとしている。『秘鈔』巻八「准胝法」「道場観」から像容に関わる部分をほぼ原文そのままに抜き書きして

いる。

「道場観ニ云ク。觀セヨ大海ノ中ニ有リニ<梵字:1字>字ニ。成ルニ大蓮華トニ。難陀拔難陀ノ二龍王。共ニ扶クニ蓮華莖ヲ。蓮華ノ上ニ有リニ<梵字:1字>字ニ。變成ニ賢瓶トニ。變成ニ七俱胝佛母尊トニ。身黄白色ニ。種種ニ莊嚴セリ其ノ身ヲ。其ノ像ノ周圓ニ光明光焰アリ。白螺為レ釧。具スニ十八臂ヲ。面上ニ有ニ三目ニ。上ニノ二手作ルニ說法ノ相ニ。右ノ第二ノ手ハ施無畏。第三ノ手ニハ把ルニ劍ヲ。第四ノ手把ルニ數珠ヲ。第五ニ把ルニ微惹布羅迦菓ヲ柘榴ノ事。第六ニ把ルニ鉞斧ニ。第七ニ把レ鉤。第八ニ跋折羅。第九ニ把ニ寶鬘ヲ。左ノ第二ニハ把ニ如意寶幢ヲ。第三ニ把ルニ蓮華ヲ。第四ニ把ニ澡罐ヲ水瓶ナリ。第五ニ索。第六ニ把輪。第七ニ螺。第八ニ賢瓶。第九ニ般若筈。坐ニ赤蓮華ニ。八供四摂ノ諸大菩薩。二ツノ淨居天前後ニ圍繞セリ。」⁷³

続いて「道場観」の次項である「形像事」を抄出する。私云。金剛智ノ軌ニ云。兩臂經ノ第ニ。四臂十五卷。三面六臂八卷。三面八臂十三卷。十臂。十八臂廿卷。十一面卅臂十二卷。三十二臂。八十四臂。各可レ隨ニ所求ニ云此尊打任テハ。可用十八臂ノ像歟」とあり、原文に忠実に写し取っている。本図が十八臂像を使用すべしという記述に従っていることがわかる。『秘鈔』の裏書⁷⁴に「此尊尺迦ノ化身也。故散念誦ニ釈迦咒ヲ加ハ部主ノ故歟。師説頗不分明。此条強ニ不用事歟。」とあるのを抜写することから、実際に准胝法を行う側の視点から注記が選ばれていることがわかる。粉本の中では珍しく事相面の検討が加わるものである。

(7) 北斗法

北斗法に関するものとしては憲海が書写した《九曜北斗星図》[871] (図5-24) がある。『諸尊要抄』第十⁷⁵より北斗法の九曜の部分の抄出する。内容は九曜についての基本的属性で、典拠では名と方位、本地、降下日と衣色という三つの属性に分けて各九曜を示すが、この粉本では、九曜ごとにこれら三属性を連ねて記し、容易に理解できるように記す。

「計都。本地不空羂索。亦名ニ豹尾トニ坤方。降下日十八日。」火曜。南方亦ハ名ニ焚惑星トニ。本地宝生佛或阿魯迦觀音。降下日十九日。赤色。」月曜。亦名ニ太陰ニ。戌亥方。本地勢至或ハ千手。降下日廿八日。白衣。」紫氣星。本地觀音或ハ虚空藏。日曜亦ハ名ニ太陽ニ。丑寅方。降下日廿七日。白衣。」羅睺。本地毘波尸佛。亦名ニ黄幡ニ。艮方。降下日八日。青色衣。」土曜。亦名ニ鎮星トニ。季方。本地毘盧遮那佛或十一面觀音。降下日十九日。黄色衣。」木曜亦名ニ歳星トニ。東方。本地藥師佛或馬頭觀音。降下日廿五日。青色衣。」金曜。亦名ニ太白星トニ。赤方。本地阿弥陀佛或不空羂索。降下日十五日。白色衣。」水曜亦

名_辰星_。北方。本地微妙莊嚴身佛或水面觀音。降下日廿一日。黒色衣。」

すなわち「羅睺」でいえば、「本地は毘波尸佛、亦の名は黄幡、方位は良方、降下日は八日、衣色は青色」と儀軌の内容を編集した形式を採っており、こちらの整理の方が図像に利便性がある。



図 5-24 九曜北斗星図 [871]



図 5-25 虚空蔵菩薩像 [558]

(8) 求聞持法

虚空蔵菩薩に関わる別尊法として空海も行ったことで知られる求聞持法がある。これに関連する粉本は多い。能満院は虚空蔵菩薩を本尊とし、求聞持本尊を安置していたことが知られている⁷⁶。求聞持法の本尊である円相中に坐像の虚空蔵菩薩を描く《虚空蔵菩薩像》[558] (図5-25) には、『虚空蔵菩薩能満諸願最勝心陀羅尼求聞持法』から画像の制作に関わる部分が抜き書きされる。

「當_ニ於_下絹素白氈或_ハ淨板_ノ上_ニ。先_ツ畫_キ滿月_ヲ。於_テ中_ニ畫_ク虚空蔵菩薩_ノ像_ヲ。其量下_モ至_ル事不_レ減_セバ_一肘_{ヨリ}ハ_一。或_ハ復_ク過_テモ此_ヲ任_ニ其_ノ力_ニ辦_セヨ。菩薩_ト滿月_トノ増減相_ヒ稱_カフ_シメ_ヨ。身_ハ作_ナセ_ニ金色_ニ。寶蓮華_ノ上_ニ半跏而坐_セシメ。以_テ右_ヲ壓_ス左_ヲ。容顔殊妙_ニ作_シ熙怡喜悅之相_ニ。於_テ寶冠_ノ上_ニ有_リ五佛_ノ像_ニ。結加趺坐_セリ。菩薩左_ノ手_ニ執_レ白蓮華_ヲ。微_ニ作_セ紅色_ニ。於_テ花臺_ノ上_ニ有_リ如意寶珠_ニ。吠琉璃_ノ色_ニ黄光發_ス焰_ヲ。右_ノ手_ハ復_ク作_レ與諸願印_ニ。五指_ヲ垂_レ下_ニ現_ハ掌_ヲ向_ヘヨ

外ニ。是レ與願ノ印ノ相也。」⁷⁷

天保4年（1833）に憲海が模写した粉本には、入唐した三論宗の僧道慈以下善議、勤操、空海へと伝えられたとする空海への求聞持法の伝授の系譜を記すが、これが図像の転写にまで及ぶものかは不明である。嘉永5年（1852）に描かれた別図[564]は高雄曼荼羅の図像から起こされているが、先の儀軌と同じ部分を書きとめる。文政元年（1818）に遠藤家で書写された求聞持尊像[557]⁷⁸にも儀軌からの抄出が見られ、憲海の書写以前の絵仏師粉本においても、儀軌からの情報を書きとめる習慣のあることが確認できる。ちなみに、この遠藤家粉本には「靈雲寺様とて別圖は無之候」とあり、浄厳ゆかりの図像ではあるが特別な図はなく、通常通りの図像であることを指摘している。これは新安祥寺流の両界曼荼羅における図像の変更などの事例の存在が背景にあるのだろう⁷⁹。憲海は文久元年（1861）11月に伊勢から到来した『伊勢朝熊求聞持作法』（書-053）『求聞持伊勢朝熊岳口説』（書-052）という二冊の書を能満院において書写している。

第5節 図像の校合

別尊法に関わる粉本に書かれた注記類を検討すると、憲海が図像収集とその校合に対して見せる思考が理解される。基本的にこれらの図像に事相面の用途は希薄であり、それでもなお図像書を引用する目的は、その像容や種子の正確さを確認して尊像としての本義を確保し、絵画的な完成度を求める用途と考えるのが適切である。そして、いくつか図像がある場合、これらを比較校合して、能満院の公式図像として一本の図像への選択または修正を行おうとしたものと思われる。わずかにのこる「能満院本」の墨書が主張するものが、こうした図像の固定に対する憲海の思考を表す痕跡と考える。憲海は、図像の固定において、唐本とある粉本を重視する傾向が見られる。拡大してみれば、憲海が空海研究の中で請来本である現図曼荼羅の研究を行うのと同じ考え方が成立しているのである。

従って、能満院工房はただ粉本を収集するのではなく、目的はその中から信頼すべき粉本を選択し、時には修正を加えて後世に伝えることであった。憲海がなぜ印施千種の大願を立てたのか、なぜ絵仏所ではなく出版を主要事業とする工房としたのかという疑問に対する回答のひとつが、第4章に述べた悉曇や声明に対する研究態度に表れている。悉曇や声明において憲海は、既存の諸本をできるかぎり共通化し、独自の見解によって細分化された部分を整理しようとした。それは校合した成果を開版し、普及させるためである。こ

れが憲海の基本的な考え方であり、その目指すものは、特殊性の回避であり、幅広く弘通をめざすための汎用性、一般性であったと考える。

憲海の考える粉本の選択には合理性が必要であり、別尊法とかかわりのない画像においても基本的研究態度として諸種の抄物図像書を参考にする。ただ、そこではむしろ図像の由緒が意識され、図像の背景にある物語性が意識されることになる。恐らくそれが図像を存在させるための理由を含むと考えているからだろう。そうした諸尊像と経疏の関わり方を示す粉本の例をあげ、憲海の粉本における経軌の役割を検証したい。

(1) 毘沙門天



図 5-26 勝敵毘沙門天像 [796]



図 5-27 吉祥天像 [826]

《勝敵毘沙門天像》[796] (図5-26) の原本は請来された唐本⁸⁰であるが、これに『毘沙門儀軌』の一部を抜き書きする。「北方大毘沙門天王唐天宝元載壬午歳。大石康五國圍[△]安西城[△]。其ノ年二月二十一日有[△]表請[△]兵救援[△]。聖人告[△]一行禪師[△]曰。和尚安西被大石康(六字ホドスミ也)國」⁸¹と抜写は、意味が通らない部分で切れており、該当する部分を指示するために冒頭箇所を示す意図で書き込まれたのである。

この図は能満院で開版されるが、版本においてはやや異なる趣旨の識語が入られる。仁王護国経陀羅尼を梵文で表す傍らに「唐ノ天寶十二癸巳。西蕃。大石。康居ノ三国。帥[△]兵ヲ圍[△]西涼府[△]。玄宗帝^{ミコトノリ}詔[△]不空三藏^ニ令[△]誦[△]仁王ノ密語^{ヲシテ}ニ七偏[△]。帝見

ル下神兵ノ可^{バカリ}五百員_一在^ル事_中于^ル殿庭_ニ上。驚^テ問^フ不_二空_一。空ノ曰^ク毘沙門天王ノ第二子。獨健領^グ兵^ヲ救^フ安西^ヲ請^フ急^ケテ^レ食^ヲ發遣^シ玉^ヘ等^ト云。儀軌及^ヒ宋僧傳一並^ニ諸天傳等^ニ見^ヘタリ。」として、『毘沙門儀軌』及び『大宋僧史略』巻下「城闍天王」⁸²などから不空が仁王護国経陀羅尼を唱えて神変を表すことをあげ、仁王護国経陀羅尼の功德を表すものとなっている。そして白描本に記した儀軌には「一行」とあるところに「入滅後十六年目ナリ此儀軌誤ナルベシ」と疑義を提示し、版本においてはこれを割愛している。『毘沙門儀軌』を引用しつつ天宝元年を天宝12年に改め、「真言」としか記していない不空の密語を仁王密語に改めるのである。本来であればこの真言は儀軌に見える「毘沙門天王心真言」と考えるのが順当であろう。この変更の理由は、儀軌にない別系統の説話が流入したものと考えられ、例として『釋氏稽古略』「不空三蔵」の項に「天寶十二載。西番大石康居三國兵圍涼州。帝請空祈陰兵救之。空結壇誦仁王密語。帝親秉爐。有神介胄而至。帝視之問曰。此何神也。空曰北方毘沙門天王長子也。空誦密語遣之。」⁸³とある説話などが、版本の識語の原型となったと考えられる。『大正新修大藏經』に収録される『毘沙門儀軌』は、智山慈順本を豊山の快道が開版したものであるので新義における流通が考えられ、これに憲海の師である龍肝が文政3年（1820）から4年にかけて校合を加えた本である⁸⁴ことから、憲海が別に口伝を受けていた可能性もある。憲海の唐本に対する尊崇の傾向と、図像の物語性に注目しつつも整合性を求める方針を見ることができる。

（2）吉祥天

直接別尊法に関わる粉本ではないが、抄物に基づいて作図をしたと思われる《吉祥天像》[820]（図5-27）がある。大成が嘉永5年（1852）5月に会津からの依頼により絹本を制作した際の粉本である。「三福天」の名が記されているとおり、吉祥天を本尊として弁財天、宝蔵天女を脇侍とする三尊形式で描き、『薄双紙』によって尊容を確認していることがわかる。吉祥天については『薄双紙』初重第八「吉祥天」「道場観」から「吉祥天女大地瑠璃ノ地。有_一宝臺_一。周_一匝^グ此宝臺_一有_一流泉浴池_一。宝蓮花開敷^{セリ}」「戴_一宝冠_一。左ノ手^ニ持_一如意宝_一。右ノ手作_一施願ノ印^ニ。項背^ニ有_一円光坐_一。紅色妙蓮花座^ニ也。左右^ニ梵王帝釈及^ヒ四天王。并^ニ眷族天女周匝圍繞也。」⁸⁵とあり像容は図像集に従ったものとなっている。同様に弁財天は『薄双紙』二重第八「辯才天法」「道場観」から「首^ニ戴_一天冠^ヲ。莊嚴微妙ナリ。身相白肉色^ニ著_一青色野蠶ノ衣^ヲ。持^グ琵琶^ヲ作彈スル勢^ヲ」⁸⁶。右ノ膝立^レ之。」⁸⁷を、宝蔵天女は『薄双紙』二重第八「寶蔵天女法」から「天女ノ身。長^ク二尺五寸

也。」「右ノ手ニ把蓮花ヲ左ノ手ニ把如意宝珠ヲ。天女端正ニ光明アリ」感徳無比ナリ。」
 世間ノ畫師モ無シ能ク畫スル者。必ス須ク好手ニ不得レ論ル事ヲ價ヲ文ノ頭ヘニ作ス花冠ヲ。所ノ
 點スル花端正也。身ニ著ス紫袍金滯鳥靴。」⁸⁸と抜き書きしており、道場観の記述どおり
 に図像を制作していることがわかる。図像集に指示されるとおりに描くことで尊像の効験
 を担保する意識が働いているのであろう。

(3) 青面金剛



図 5-28 青面金剛像 [1011]



図 5-29 雨宝童子像 [1076]

青面金剛については、庚申会の本尊としての需要によって広く信仰された。庚申会は道
 教思想の影響下に信仰された法会として仏教化しているものの、別尊法とは異なるもので
 ある⁸⁹。天保2年（1831）3月に憲海が書写したものと嘉永元年（1848）7月に新図が起こさ
 れた《青面金剛像》[1011]（図5-28）に『陀羅尼集経』卷九「大青面金剛呪法」から「畫
 五藥叉像法」が引かれている。「一身四手。左邊ノ上ノ手把ルニ三股ノ叉ヲ。下ノ手把ルニ棒ヲ。
 右邊ノ上ノ手掌ヲ拓クニ一輪ヲ。下手把ルニ縋索ヲ。其ノ身青色ニシテ。而大ニ張リレロヲ狗牙上ニレ
 出ツ。頂キニ載レニ髑髏ヲ。頭髮聳ヒ豎テ如シニ火焰ノ色ノ。項ニ纏フニ大蛇ヲ。兩ノ膊ニ各々有リ倒
 マニ垂ルニ龍ヲ。龍頭相向フ。腰ニ纏フニ二ツノ大赤蛇ヲ。兩ノ脚腕ノ上ニ亦纏フニ大赤蛇ヲ。所
 ノ把ル棒ノ上ニ亦纏フニ大蛇ヲ。虎ノ皮ノ靴袴。髑髏ノ瓔珞。兩脚ノ下ニ各々安スニ一鬼ヲ。」⁹⁰
 とあって図像上は、大青面金剛呪法に示される図像によって描かれる。憲海は民間に流布す
 る六臂の像も書写しているが、経軌を引用するのは、この四臂に典拠のあることを確認す

るものであり、流布像より四臂像の正当を図るものである。

(4) 雨宝童子

憲海が嘉永3年(1850)に恵心院本を写した《雨宝童子像》[1076](図5-29)がある。後に憲海が『続鉱石集』と『大師年譜』『朝熊山儀軌』から必要箇所を抄出する。図像の像容に対する興味のみならず、この図像の由来についての興味が中心となっており、庶民への接近を意識する近世的な立場が表れている。『続鉱石集』は江戸中期の僧蓮体(1663-1726)が享保12年(1727)に出版した説話集である。蓮体は浄厳の甥で浄厳に師事し、出版も行うなどして庶民への布教に精力的であったことが知られている。憲海の活動に共通する性質をうかがうことができるため、彼がその著作に接していることは興味深い。粉本には、「續鑛石集上本初云。古来傳云。帶塔德菩薩也。弥勒菩薩異名也。」胎藏大日如来ナリ。頂上戴キ玉フハ兩部大日三昧耶形即海底大日印文トハ是ナリ。」密教擁護天尊ナリ」とあり、『大師年譜』から「大師年譜九(十九/左)。正月十六日、往詣勢州朝熊嶽修_二求聞持_一法_二。而有_二神臨_一。又創_二金剛證寺_一。」とし、さらに空海の撰ともいわれる『朝熊山儀軌』から「朝熊山儀軌其略云。天長二年乙巳正月十六日巳刻。入朝熊山見堂舎。勿_レ人住。柱根摧朽。無ク燈油ノ光。佛壇闇ク。稀_{ナリ}人通。」_云「大師白曰。嗚呼喜哉。今來_二此山_一依_二求聞持ノ力_一奉_レ值_二大神宮_一拜_二虚空藏大菩薩_一。落涙洗_二滴衣袖_一。誓言於_二末世_一。求聞持ノ行者汲_二〇〇字闕伽井ノ水_一沐_二浴明星水_一。」_云「朝熊嶽有_レ池。連珠池ト云_二橋連珠橋ト云_一」大神託_レ曰以_レ雨宝童子_二可_レ為_二此山ノ護法_一ト時_二御兒_一具_レ八十種好_二身_一著_二白衣_一。右ノ御手_二宝棒_一逆手_二シ左ノ手_一持_二赤色宝珠_一」_云「尔_レ時_二太神_一在_レシ。童子_二摩頂_一自_レ御口_一吐_二五輪_一居_二童子ノ頂上_一。虚空藏自_レ御口_一吐_二白色ノ宝珠_一。授_二童子ノ額_一。」_云とその尊像の由緒を図像について必要な部分のみ抜写している。

以上でこの章の考察を終える。能満院粉本において、事相研究との関わりを具体的に確認できる資料は極めて少ない。基本的に粉本は絵画制作の参考資料として認識されていたといえる。それは中世まで続いた白描図像としての機能が減衰するなかで、近世社会で活用するために獲得された存在理由である。しかし、ここに事相そのものを軽視する意図はない。むしろ別尊法に無関係な粉本が多い中で、密教図像の果たす役割が相対的に縮小したことを表すものと考えられる。実際には別尊法の需要はあり、経疏に従って新たに本尊

画像を制作する例がある一方で、別尊法と無関係の粉本に対しても図像集との校合を行うことは多く、図像に対する典拠の確認は依然として重要視された。

憲海は工房において校合の済んだ図像を固定する方針を持っていたと考えられ、「能満院本」と記す粉本は校合を終えた成果物と思われる。これは憲海が図像の共通化普遍化を事業の要所としていたことをうかがわせ、粉本の収集と開版事業との連携の中で行われた校合の方向性は理解しやすい。図像が粉本として独立しているということは、修法に従属していないというだけで、いつでも修法と組み合わせることは可能なのである。図像の固定の先には、そうした利用の方法が意識されたものと思われる。図像を固定する一方で、憲海が図像に纏わる縁起に注目する点は、布教活動への視線を垣間見せるものとして興味深く、憲海の民俗神への視線を理解する糸口と考えられる。

【注】

¹ 小田慈舟「御室版両部曼荼羅の開版と其功労者」(『密宗学報』第178号、1928年6月)、p. 294。

² 『大正新修大蔵経』No. 2483。第78巻。元海。1巻。小野方諸尊法口訣集。

³ 定金計次「菩薩・明王・天等に関する能満院仏画粉本について」(京都市立芸術大学芸術資料館編『仏教図像聚成一六角堂能満院仏画粉本』、法蔵館、2004年3月)。pp. 295-302。

⁴ 別尊曼荼羅に関する基本的文献としては以下を利用した。大村西崖『密教發達史』(仏書刊行会図像部、大正7年11月)、真保亨『別尊曼荼羅』(毎日新聞社、1985年12月)、佐和隆研編『仏教図典 増補版』(吉川弘文館、1990年12年)、頼富本宏『曼荼羅の鑑賞基礎知識』(至文堂、1991年10月)、有賀祥瑞『仏画の鑑賞基礎知識』(至文堂、1996年8月)、林温『別尊曼荼羅』(至文堂、2002年6月)、林温『妙見菩薩と星曼荼羅』(至文堂、1997年10月)。

⁵ 『大正新修大蔵経』No. 2484。第78巻。実運。15巻。小野方諸尊法口訣集。

⁶ 『大正新修大蔵経』No. 2486。第78巻。実運。4巻。小野方諸尊法口訣集。

⁷ 『大正新修大蔵経』No. 2485。第78巻。実運。10巻。小野方諸尊法口訣集。

⁸ 『大正新修大蔵経』No. 2489。第78巻。勝賢。18巻。醍醐方三寶院流の諸尊法。

⁹ 『大正新修大蔵経』No. 2489。第78巻。巻14に「安永三甲午秋七月念九日 豊山多聞院圓應知脱」天保二辛卯年十一月二十三日寫得之了龍門山修行寺無言藏」(p. 561上)とある。

¹⁰ 『大正新修大蔵経』No. 2495。第78巻。成賢。16巻。醍醐方三寶院流の諸尊法。

¹¹ 小田慈舟「御室版両部曼荼羅の開版と其功労者」(『密宗学報』第178号、1928年6月)、p. 291。竹田黙雷は「田村月樵翁」(『藝苑』帝国美術社、1919年7月)の中で、大正期に憲海本『覚禅鈔』を閲覧したことを伝えている。

¹² 収録される別尊法は次のとおり。

所望<五大虚空藏・多羅尊・愛染王・千手・大威徳・金剛薬叉・金剛童子・北斗・聖天>

除災<薬師・尊勝・聖観音・千手・準胝・北斗・炎魔天>

滅罪<阿彌陀・阿闍・尊勝・光明眞言・隨求 虚空藏・馬頭・法花・寶樓閣・滅惡趣>

延命<薬師・延命・準胝・北斗・炎魔天・孔雀經・法花經・壽命經>

産生<薬師・金輪・隨求・一字文殊・千手・多羅尊・烏芻沙塵・金剛童子・訶利帝・一髻文殊>

悪夢<大威徳・八字文殊・訶利帝>

呪咀<轉法輪・六字經・大威徳>

怨家<大威徳・金翅鳥王>

天變<孔雀經・仁王經・大佛頂・愛染王・一字金輪・尊星王・熾盛光・八字文殊・五大虚空藏・北斗>

¹³ 能満院での開版は実施されたと考えるが、版木摺物ともに伝世しない。現存するのは、明治に入ってから、尊峯によって発願された復刻版と考える。

¹⁴ 『大正新修大蔵経』 図像部第 5 卷。pp. 306 中-313 上。

¹⁵ 『大正新修大蔵経』 No. 867。第 18 卷 p. 263 上。

¹⁶ 『大正新修大蔵経』 No. 983。第 19 卷 p. 440 上。

¹⁷ 『大正新修大蔵経』 No. 2489。第 78 卷 p. 506 上。

¹⁸ 『大正新修大蔵経』 図像部第 4 卷。p. 623 上。

¹⁹ 『大正新修大蔵経』 図像部第 4 卷。p. 623 下。

²⁰ 『大正新修大蔵経』 No. 1027。第 19 卷。

²¹ 『大正新修大蔵経』 No. 2495。第 78 卷 p. 659 下。

²² 『大正新修大蔵経』 No. 2450。第 77 卷。

²³ 『大正新修大蔵経』 図像部第 4 卷。p. 623 下。

²⁴ この粉本制作の目的は上総の太賢から画料并絹代共金三百疋で制作を依頼されたものである。嘉永 6 年 (1853) 1 月 6 日に完成した。

²⁵ 『大正新修大蔵経』 No. 2484。第 78 卷 p. 291 上。

²⁶ 『大正新修大蔵経』 No. 2485。第 78 卷 p. 357 下。

²⁷ 『大正新修大蔵経』 図像部第 5 卷。p. 105 中, 下。

²⁸ 『大正新修大蔵経』 No. 246。第 8 卷 p. 843 中, 下。

²⁹ 『大正新修大蔵経』 No. 245。第 8 卷。

³⁰ 『大正新修大蔵経』 図像部第 5 卷。pp. 149-151。

³¹ 『大正新修大蔵経』 No. 2484。第 78 卷 pp. 306 下-307 上。

³² 現在の京都市伏見区深草にあった真言宗寺院。広大な伽藍を誇るが中世に衰退する。

³³ 『大正新修大蔵経』 図像部第 4 卷。p. 737 下。

³⁶ 『大正新修大蔵経』 No. 2486。第 78 卷 pp. 406 下-407 上。

³⁷ 『大正新修大蔵経』 図像部第 5 卷。p. 147 下。

³⁸ 『大正新修大蔵経』 図像部第 5 卷。p. 148 上。

³⁹ 『大正新修大蔵経』 図像部第 3 卷。p. 162 中。

⁴⁰ 『大正新修大蔵経』 図像部第 4 卷。p. 753 中。図像 No. 114。

⁴¹ 『大正新修大蔵経』 図像部第 4 卷。p. 759 中。図像 No. 117。

⁴² 『大正新修大蔵経』 No. 2495。第 78 卷 p. 625 上。

⁴³ 『大正新修大蔵経』 図像部第 3 卷。図像 No. 23。

⁴⁴ 『大正新修大蔵経』 図像部第 4 卷。p. 170 下。図像 No. 19。

⁴⁵ 『大正新修大蔵経』 図像部第 3 卷。p. 12 上。

⁴⁶ 『大正新修大蔵経』 No. 1000。第 19 卷。「成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌」

⁴⁷ 『大正新修大蔵経』 No. 1002。第 19 卷。

⁴⁸ 田中海應『光明真言集成』(東方出版、1978 年 8 月)、pp. 67-74。

⁴⁹ 『弁惑指南・光明真言觀誦要門』(植木諦仁、1894 年 6 月)、上卷 1 ウ-2 ウ。

⁵⁰ 田中海應『光明真言集成』(東方出版、1978 年 8 月)、pp. 76-78。

⁵¹ 『大正新修大蔵経』 No. 665。第 16 卷。

⁵² 辻善之助『日本仏教史』第 1 卷上世編 (岩波書店、1944 年 11 月)、p. 192ff。

⁵³ 『大正新修大蔵経』 No. 2489。第 78 卷 p. 496 中。

⁵⁴ 『大正新修大蔵経』 図像部第 3 卷。p. 5 中。

⁵⁵ 引用部分の末尾が粉本墨書及び『秘鈔』では「成不動尊。前有香爐。像上有寶蓋。兩邊

有六箇飛天各執花」となるところが「為不動明王。前香爐。像上有寶蓋。蓋兩邊有六箇飛天各執香花鬘。」となる。

- 56 『大正新修大藏經』No. 2485。第78卷p. 362下。
- 57 文末の「醍醐本可_レ見_レ之」が割愛される。
- 58 『大正新修大藏經』No. 2484。第78卷p. 306中。
- 59 『大正新修大藏經』No. 2485。第78卷p. 363上。
- 60 『大正新修大藏經』No. 867。第18卷p. 258中。
- 61 『大正新修大藏經』No. 2489。第78卷p. 542中, 下。
- 62 『大正新修大藏經』図像部第4巻。pp. 561中-562中。
- 63 『大正新修大藏經』No. 2489。第78巻p. 534中。
- 64 『大正新修大藏經』No. 867。第18巻p. 263中。
- 65 『大正新修大藏經』No. 2486。第78巻p. 388上。
- 66 『東寺の仏教版画』（東寺宝物館、1991年3月）、p. 10。
- 67 『大正新修大藏經』No. 2495。第78巻p. 638下。
- 68 『大随求陀羅尼』（書-091）。
- 69 瀬谷貴之「仏像を描いた仏画」（『論集・東洋日本美術史と現場—見つめる・守る・伝える—』、竹林舎、2012年5月）、pp. 272-282。
- 70 『大正新修大藏經』図像部第3巻。図像No. 91。
- 71 『大正新修大藏經』図像部第3巻。p. 40上、中。
- 72 『大正新修大藏經』No. 2495。第78巻p. 632下。
- 73 『大正新修大藏經』No. 2489。第78巻p. 523下。
- 74 『大正新修大藏經』No. 2489。第78巻p. 524上。「滿釋迦眞言事」。
- 75 『大正新修大藏經』No. 2484。第78巻p. 313上、中。
- 76 山口蘭舟子《虚空蔵菩薩像》[556]「天明第五乙未季冬。京雒画工 山口蘭舟子寫。求本六角堂能満院。」
- 77 『大正新修大藏經』No. 1145。第20巻pp. 601下-602上。
- 78 『虚空蔵菩薩像』[557]に「文政元年卯七月四日之写。求聞持虚空蔵尊。御身金色又白肉色ニモスル。月輪老尺式寸。虚空蔵菩薩。靈雲寺様とて別圖は無之候。普通尊像ならく。身金色ニテ五智寶冠アリ。左手は胸之前瑠璃宝珠ヲ持ス顯也。右手は劔ヲ持ス。若求聞持ノ本尊ならは左手微紅色蓮花ヲ持其上ニ瑠璃ノ宝珠也黄光アリ。右手ハ仰テ膝ノ上ニ垂シ下ス。施願相也。」
- 79 中村涼應・中村幸真「正系以外の曼荼羅作例—新安祥寺流曼荼羅—」（『正系現図曼荼羅の研究』、NHK出版、2010年10月）、pp. 317-355。
- 80 東京国立博物館所蔵。「毘沙門 前唐院様」「月上院」と墨書あり。
- 81 『大正新修大藏經』No. 1249。第21巻p. 228中。
- 82 『大正新修大藏經』No. 2126。第54巻p. 254上。
- 83 『大正新修大藏經』No. 2037。第49巻p. 826中。
- 84 『大正新修大藏經』No. 1249。第21巻p. 230上。「此軌以智積院慈順僧正御本。當山愛染院大宣等校合。予亦校訂而壽梓。亨和改元辛酉秋八月 豊山僧快道誌。一校加筆了慈順。」文政三年庚辰八月二十八日以秀陽閣梨本校合之了龍肝。」同 四年辛巳九月二十三日以板橋日曜寺本再校之了。朱注是也。龍肝。」
- 85 『大正新修大藏經』No. 2495。第78巻p. 651上。
- 86 引用部分の後段にある「迴轉作彈琵琶之勢」から一部を抜き挿入したものである。
- 87 『大正新修大藏經』No. 2495。第78巻p. 683中。
- 88 『大正新修大藏經』No. 2495。第78巻p. 688上。
- 89 窪徳忠『庚申信仰』（山川出版社、1956年12月）、pp. 142-152。
- 90 『大正新修大藏經』No. 901。第18巻p. 868下。

第6章 恵心院本

この章では、憲海の思考と能満院粉本との関わりを理解する資料として、恵心院本について考察する。宇治の恵心院が旧蔵したとする39点の粉本は、中世の南都絵所のひとつであった芝座の絵師による粉本を、憲海が一人で書写したものである。第1節では、考察の基盤として宇治恵心院の歴史と、中世の南都絵所である芝座について概括する。第2節では、恵心院本に記録される芝座絵師に関する記述より、16世紀から17世紀にかけて活動した芝座の絵師、観重、観深、観英について考察する。第3節では、仏画粉本としての恵心院本の来歴を検証し、憲海の思考との関わりを考察する。憲海が特別な態度で書写にあたった恵心院本の特質を検討することにより、粉本に対する憲海の価値観を考察するのが目的である。

第1節 能満院粉本と恵心院本

憲海の書写した粉本には、特徴ある一群をなすものがある。嘉永3年（1850）1月28日から2月18日にかけて、精力的に模写されている「恵心院（蔵）本」と留書のある粉本も、そのひとつである。22日間という短期間に行われた作業ではあるが、その数は39点に及ぶ。複数の墨書に宇治とあるのでこの恵心院が、宇治市宇治山田にある朝日山恵心院のことであるのは間違いない。一時に多数を模写したにもかかわらず、中間に存在する模本の存在を推測させる記事がなく、憲海の他の粉本類の書写状況を考慮しても、恵心院所蔵本そのものを眼にして、これを模写したと考えてよい。模写は憲海唯一人で行っており、大半に「無言蔵」の署名と日付の書き入れがある。

この恵心院本模本の興味深い点は、「本云」として原粉本の墨書を書き写しているものが多く、その大部分が南都絵所、それも芝座に関わる記事であることである。これらは中世の絵仏師に関する貴重な資料として注目してよい。「恵心院本年紀目録」（表6-1）のとおりにこの粉本群に書き入れられた南都絵所関連の年紀資料を原本の書写日順に並べてみると、原本は、永正14年（1517）から元和元年（1615）まで、約百年の間に描かれたものとわかる。そこには、芝法眼観重、侍従観深、中将琳賢観英という三人の芝座の絵師の名を見ることができ、これは斎藤彦麻呂の『図画考』¹に示された芝氏系図に一致して、16世紀の芝座の制作状況を概観させるものとなっている。

表6-1 恵心院本年紀目録

年 紀			目録番号*	名 称	筆 者	通番**
永正14	1517	5月19日	恵-03	阿弥陀如来像	芝喜多坊觀重法橋	84
大永4	1524	3月	恵-25	地藏菩薩像		492
享祿5	1532		★	奈良 東田薬師堂 《薬師如来像胎内墨書銘》	芝□□坊觀重法眼	
天文4	1535	5月	恵-29	辨才天像		887
天文5	1536	11月	恵-01	毘盧遮那如来像		68
天文5	1536	5月	★	奈良 東大寺 《東大寺大仏縁起》	芝法眼琳賢	
天文7	1538	2月20日	恵-20	地藏菩薩像	芝喜多坊	487
天文8	1539	2月19日	恵-35	蔵王権現像	觀重	1063
天文8	1539	5月	恵-02	阿弥陀如来像	芝法眼喜多坊	83
天文10	1541	6月20日	恵-17	渡海文殊菩薩像	喜多坊	438
天文14	1545	2月	★	愛知 妙伝寺 《涅槃図》	芝觀重法眼琳賢	
天文14	1545	3月	恵-31	辨才天十五童子像	喜多坊	908
天文15	1546	9月8日	★	奈良 能満院 《天川弁才天曼荼羅》	芝琳賢房	
天文18	1549	2月15日	★	奈良 唐招提寺 《涅槃図》	林賢	
天文18	1549	4月13日	恵-05	阿弥陀三尊像	觀重法眼	102
天文22	1553	3月3日	恵-28	毘沙門天吉祥天善膩師像	喜多坊本	797
天文22	1553	4月23日	恵-09	十三仏図	芝喜多坊觀重	265
天文22	1553	6月	★	奈良 春日大社 《絵馬》	琳賢	
天文23	1554	6月11日	恵-23	地藏菩薩像	喜多坊	490
永祿元	1558	4月5日	恵-06	阿弥陀三尊来迎図	喜多坊本	108
永祿8	1565	9月	恵-13	十三仏図	喜多坊觀深	269
(永祿8)	1565	9月	(恵-10)	(十三仏図)	喜多坊觀深	266
永祿13(長祿は誤力)	1570	1月	恵-37	雨宝童子像	芝絵所喜多坊侍従公觀深	1076
天正8	1580	10月18日	恵-34	子島荒神像	右方芝絵所喜多坊觀深筆	1008
天正9	1581	8月1日	★	能満院粉本 高山寺 《春日若宮神像》	芝喜多坊侍従觀深	1119
天正9	1581	10月18日	恵-26	六地藏像	芝絵所喜多坊觀深	519
天正10	1582	8月	恵-30	辨才天像	右方芝喜多坊觀深	888
天正16	1588	8月	恵-24	地藏菩薩像	中将	491
(天正17)	1589	7月27日	恵-04	阿弥陀如来像	芝喜多坊觀深	85
天正17	1589	7月27日	★	兵庫 大覚寺 《当麻曼荼羅》	喜多之坊 後琳賢觀深法眼及中将十五歳	
天正19	1591	1月	恵-11	十三仏図	喜多坊琳賢	267
天正19	1591	1月8日	恵-18	文殊菩薩善財童子像	中将	444
天正20	1592	2月	恵-15	十一面觀音像(長谷寺式)	喜多坊	317
(天正20)	1592	2月	(恵-36)	(高野四社明神図)	芝絵所喜多坊觀深	1068
文祿3	1594	1月	恵-08	十三仏図	右方喜多坊琳賢	264
慶長7	1602	6月	恵-36	高野四社明神図	南都芝絵所右方喜多坊中将觀英	1067
慶長14	1609	5月	恵-12	十三仏図	南都芝之絵所喜多坊中将琳賢觀英	268
慶長14	1609	5月	恵-10	十三仏図	南都芝之繪所喜多坊中将琳賢觀英	266
慶長14	1609	9月	恵-19	文殊菩薩普賢菩薩像	右方南都芝之絵所喜多坊中将公觀英	450
慶長20	1615	6月	恵-21	地藏菩薩像	南都芝繪所喜多坊中将觀英	488
元和元	1615	11月04日	恵-38	僧形八幡神像	芝絵所喜多坊中将	1086
元和5	1619		恵-33	愛宕権現像	南都左方絵所岡村大	948

注 * 目録番号は恵心院本模本仏画粉本目録の番号。()に入れたものは、恵心院本自身に記された原粉本の年紀。★は参考として加えた觀重・觀深・觀英作品に見る年紀。
**通番は「別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録」に使用する通番。

以下、この恵心院本の来歴を考察しその資料性を検討するとともに、これらの粉本と憲海の思考との関わりについて考察する。

京都府南部、朝日山の麓、宇治川の辺に位置する恵心院は、現在真言宗智山派の寺院である。寺伝では、嵯峨天皇の弘仁13年(822)に空海を開基とした龍泉寺をその創建とする。これは、空海がこの地を唐の青龍寺の地勢に似ると見て命名したという。その後荒廃したが、寛弘2年(1005)比叡山横川の僧源信が、浄土信仰の道場として再興し、その名を朝日山恵心院と称するようになったと伝える。

しかし、近年の「恵心院文書」の調査などから、恵心院の開院は16世紀末のことであることがわかってきた²。恵心院に遺る木造の賢弘法印座像の胎内墨書に「宇治郡乘琳坊賢弘法印。逆修御影于時慶長弍季丁酉八月上旬。七十七歳。造立之施主関東下野国茂木之住。権大僧都良泉恵心院住持当院開山仕。即爲末代令作之。弥勒院法印良泉敬白」とあって³、恵心院の開山が良泉という僧であることを記し、開院は慶長2年(1597)をやや遡る時期であることを示唆している。幕末期、慶応4年(1868)に恵心院が役所に届けた文書には⁴、良泉が真言僧であることと、恵心院が無本寺であることを記している。現在は智山末となっているが、近世にあって本末は確立していなかったのであろう。

また良泉が開山の記念として座像を造立した賢弘という僧は墨書にもあるとおり、宇治白川金色院諸坊のひとつ乗琳坊の住持であったと考えられる。墨書から判断すると賢弘は永正18(または大永元)年(1521)の生まれということになり、恵心院文書から慶長5年(1600)までは存命が確認できる⁵。ただ、どの宗派に属していたかは明確ではない。

金色院の創建には不明瞭なところがあり、その存在が確認できるのは14世紀になってからである。寛正4年(1483)8月『金色院御堂再興勸進状』⁶には園城寺の證朝を開基としており、その後も文書類には天台宗と記すものが多いので、天台宗であったと考えてさしつかえないが、近世には本寺を持っていない。嘉吉元年(1441)の『興福寺官務牒疏』⁷に「白河寺金色院」が収録されるところを見ると、中世には興福寺とも何らかの関係があったと考えられ、賢弘の出自については不明な点が多いのである。

中世以後宇治白川では茶の生産が盛んで、金色院の諸坊も製茶を副業としていた、中にはそのまま生業に転じてしまい、寺を廃して離れる者もあったというが、それだけに茶師との関わりを持つことが多く、乗琳坊賢弘もまた、有力な茶師で宇治郷の代官をつとめた上林家とのつながりが強かった。上林家は丹波上林郷を出自とし、早くから宇治での茶業に関わっていたが、天正期に久重・掃部丞の親子が宇治に移住して、茶師となったとされ

る。恵心院が開かれたのは、掃部丞すなわち上林久徳の時代であり、良泉と賢弘と上林家のつながりを示す文書も遺されている⁸。恵心院が上林家の祈祷寺という性格を持つことは極めて蓋然性が高い。

慶長以後、徳川家光の乳母であった春日局の祈願を受け幕府との繋がりを得たことや、上林家に関わる祈祷を行うなどして、寺勢は増した。このころ白川金色院の蔵坊の領地三十石が恵心院に充てられ、実質的に恵心院が蔵坊を兼帯するようになり、小倉村にあったわずかな寺領とともに寺の経済基盤としていた。しかし、祈祷寺であった恵心院の経営は寄進にたよるところが大きく、有力な寄進者の確保は重要事である。その過程で、17世紀の半ば頃、先の寺伝のような由緒が成立したと考えられている⁹。もちろん、こうした由緒が全くの創作であると断定することは難しく、その原型となる伝説や草庵などが存在したとして不思議はないが、現在の恵心院とこれらを直接結びつける痕跡はない。従って「恵心院本」と憲海が記した粉本群の成立も、恵心院成立以後つまり慶長期以後と考えてよい。

芝座については、かつて森末義彰によって詳細に考察され、吐田座、小南院座、吐田助座とともに南都絵所の中心的存在として、一乗院家に従属する絵仏所であることが明らかにされている¹⁰。大乘院家に属した吐田座に『大乘院寺社雑事記』¹¹のような膨大な記録が遺されているのに比べ、一乗院家に属した芝座、小南院座、吐田助座は記録に乏しく、その歴史は断片的にしか確認できない。ただ、南都絵所という存在は給田を介した従属関係を基盤に成り立っていたため、応仁文明の乱以後の社会構造の変化が、当然のように彼らに影響を与えたことは間違いない。吐田座の衰退も含め、南都絵所諸座が中世末期、解体の傾向を見せたとする見解は異論のないところである¹²。

現在認識されている芝座の概略としては、次のようなものである。その出自は不明であるが、鎌倉時代中期に観実、室町時代中期に観深、観盛、観覚、観尊がいたことが知られ、その本流は観の字を冠したことから観派とも呼ばれる。また、庶流には慶の字を冠する一派のあったことも知られており、15世紀の末頃から慶舜（慶順）といった絵師の活動が見られる。16世紀には観重、観深、観英らが広く他山に仕事を求めて活動を広げている。芝座の呼称はその住地が元興寺近くの芝の地であるところにちなむとされる。

斎藤彦麻呂の『図画考』には、『丹青若木集』の引用などにより、近世末期の時点の芝派に関する知識を整理した記述がある。森末はこれら近世の画史の記述を、吐田座琳賢の事跡の混入による誤認として批判したが、この問題については後述するとおり、すでに解決しており、むしろ芝派の系図を早くに提示した意義が大きい。芝座に関する認識の出発

点として、まずこの略伝を掲げる¹³。

芝氏系圖

芝法眼琳賢－侍從－琳賢

芝法眼琳賢

東大寺縁起三卷、詞寺務公順、繪芝法眼琳賢、東大寺縁起古來所記爲二十卷、而依事繁多見者閣之、聞者倦之、仍鈔至要縮爲上中下三卷焉、於上卷之詞者辱被染宸翰訖、披閱之輩發修造之志者足矣、于時天文五年月日勸進沙門祐全。

若木集云、琳玄者南都宅間氏之末葉也、傳家學精佛像、圖長谷觀音堂扉於四天像、并在東大寺古縁起五卷、然作三卷琳玄圖之云々、畫圖未監視之、後敍法眼、有二子、第二子者號玄海上人、初瀬本願云々、琳玄慶長年中死。

東大寺大佛縁起〔外題後奈良院、詞同帝尊公順〕 雲中天神〔詞政家公〕 諸佛畫

芝侍從

琳賢之嫡、傳父之風格畫佛像有功。〔若木集、便覽〕

多門院日記云、南都繪所侍從、天正十四年十月十五日條下に出、高野金堂の柱の繪を畫く事あり。

芝琳賢〔侍從子〕

多門院日記云、天正十六年十一月十六日、侍從子琳賢長谷寺にて本尊書候て見せに來る、抑見事無比類也、當年十三歳歟、凡奇特事也と高野衆各稱美して權者也と申すと。

按に、便覽慶長中死とあるは此人なるべし。

芝觀深

〔河内佐太神庫〕天神縁起 小島先徳都像。

かつては、天文5年（1536）制作の「東大寺大仏縁起」の作者芝法眼琳賢が吐田座の絵師と考えられたこともあり¹⁴、芝座について認識のあいまいな状況が続いたが、近年は資料調査や研究が進み、以前よりその実像は明確さを増している。

まず、この芝法眼琳賢に関わる作例を概観したい。彼の作品で最もよく知られているのは、先の《東大寺大仏縁起》¹⁵である。東大寺の勸進僧祐全によって発願されたこの絵巻は『東大寺縁起』20巻の抄録本として制作された。各巻の奥書に「絵 芝法眼琳賢」と書かれており、『東大寺絵所日記』¹⁶にも記事がある。かつては森末の見解に従ってこの琳賢を吐田座の絵師と見るのが一般であった。しかし、小松茂美はこれに疑義を持ち¹⁷、かつて森末説に従った河原由雄も、これを芝法眼観重という芝座の絵師であることを確認する¹⁸などの経緯を経て、この芝法眼琳賢を芝座の絵師とすることが定着したのである。この展開には、奈良県櫻井市の東田薬師堂の薬師如来座像の享禄5年(1532)の胎内銘に「絵所芝□□坊観重法眼」と記されている報告¹⁹から、芝座の観重という絵師の存在が明らかになったことも影響している。

奈良県春日大社には、天文21・22年(1552・53)の春日社社殿造営の際に、その彩色に与った絵所絵師が奉納した《絵馬板》4面が遺っている²⁰。板裏の墨書銘により、その一は吐田座の琳圓有清、その二は吐田助座の介、その三は芝座の琳賢、その四は松南院座の帥公尊眺の作とされている。琳賢の名はただ「筆者琳賢」と記すだけで、そのため一時は琳賢が吐田座の絵師である証としてこの銘が利用されたこともあった²¹。しかし、琳圓有清の銘には「自右方左方繪所五人 安居坊江一枚宛奉寄進由」また「左方繪所吐田琳圓」と記されており、左方が大乘院方の吐田座をさすとすれば、右方の絵師がそこに加わる必然があった。右方が一乗院方すなわち芝座、松南院座、吐田助座をさすと考えるならば、ここに芝座が加わって当然であり、琳賢を右方芝座の芝琳賢にあてることが、無理のない解釈と理解されるようになったのである。現在では、さきの《東大寺大仏縁起》同様に、芝法眼琳賢の作と鑑定されるに至っている。

こうした、既知の作品の再検討が進んだ背景には、近年の文化財調査の進展によって得られた新たな知見が、旧説の解消を求めたことがあった。

愛知県名古屋市日蓮宗清長山妙伝寺に所蔵される《涅槃図》²²には、表具裏に正徳6年(1716)の銘文があり、併せて旧表具の裏書きおよび旧軸木銘を書き写した墨書軸がある。そのうち軸木銘とされる墨書に「御本尊南都絵所芝観重／法眼琳賢書之喜多坊／薬者笠坊口入／天文十四乙巳年二月吉日／多気大御所より□き志ん」と記されている。北畠晴具の関与の中で天文14年(1545)2月に芝観重法眼琳賢により制作された涅槃図があり、それが元龜3年(1572)2月に大徳山正覚禅寺(所在不詳)に寄進された。それが天正5年(1577)2月13日に妙伝寺に寄進され、正徳3年(1713)に表具の新調を行い、同6年(1716)に供養

をしたものという。伝来がすべて明らかになっているわけではないが、軸木銘の記事の信頼性を裏付けるには十分であろう。「南都絵所芝観重法眼琳賢書之喜多坊」の墨書は、芝法眼琳賢が芝座の絵師観重であることを明確に示しており、年紀を伴うことで貴重である。

また、兵庫県大覚寺の《当麻曼荼羅》²³は、『多聞院日記』²⁴天正17年（1589）7月27日条及び同18年（1590）正月3日条にその経緯が記されている作と考えられており、表具裏に「筆者南都芝絵所喜多之坊 後琳賢観深法眼及び中将十五歳」と記されている。観深が『多聞院日記』に天正4年（1576）から登場する侍従であり、彼が琳賢の後継者であることと、その子中将の年齢がわかる墨書であり、本作が芝座の観深と観英の合作であることを示す。この墨書はまた、彼らに先行する芝法眼琳賢が芝座の絵師にほかならないことをも教えてくれる。ちなみに、ここに記された中将の年齢は『多聞院日記』天正14年（1586）3月13日条の記事「絵所侍従子十二才得度事申間」とも合致しており、中将観英が天正3年（1575）の生まれであることを、再確認することができる。

こうした琳賢に関する共通認識の形成によって、奈良県長谷寺能満院の《天川弁才天曼荼羅図》²⁵も、奈良県唐招提寺の《涅槃図》²⁶も、芝法眼琳賢観重の作として躊躇がなくなった。前者には、旧表具裏に「筆者芝琳賢房 天文□□丙午九月八日」の墨書があって、天文15年（1546）にこの図を芝琳賢が描いたことが知られ、後者は、表具墨書銘に天文18年（1549）に「林賢」が描いたことが知られていたが、芝座の琳賢の存在が確認されることで、その鑑定が容易となったのである。

第2節 恵心院本にみる芝座絵師

恵心院本墨書の貴重な点は、観重、観深、観英の活動時期がかなり正確に把握できるところにある。もとより、転写された記録ゆえ、その記事が無批判に受け入れられるべきとは考えないが、能満院の恵心院本粉本が、実際の芝喜多粉本の形式を踏襲していることをうかがわせる資料が存在しており、墨書の信頼性はある程度担保される。

その資料は、京都市立芸術大学芸術資料館が所蔵する《望月家絵画資料》の中にある《孔子敬器図》（図6-1）である。薄手の楮紙三紙を継いだ74.2×35.0cmの粉本で、その名称のとおり『荀子』の宥坐篇に見える、満つれば覆る器の故事を描く。裏端書に「慶長四年己亥九月吉日南都繪所芝喜多坊中将公観英〈花押〉」とある。紙質に時代があり、記述の通り慶長4年（1599）9月に観英が描いたものと考えて問題ない。この端書の形式はまさに、

憲海が恵心院本において「本云」として書き写す墨書と同様の書式を見せており、憲海は原本に忠実に書き写した可能性が高いのである。

ちなみにこの慶長の粉本が《望月家絵画資料》に混入した経過は不明である。《望月家絵画資料》は、江戸時代中期に蒔絵の家から転じて絵師となった望月玉蟾（1692-1755）を祖とする望月家において、現代に至るまで七代にわたり受け継がれてきた粉本群である。累代が絵画の参考となる資料を集める内に、望月派絵師の手によって写された粉本以外に、他の絵師の粉本を入手することが確認されているので、比較的早い時期に入手されたものと思われる。玉蟾の師は山口雪溪（???-1732）であったので、玉蟾が師から譲り受けたことも考えられよう。というのも雪溪は雪舟と牧谿に私淑して雅号としたとする説が伝えられるようにもともと中世絵画への興味が強く、享保17年（1732）に清水寺で涅槃図を制作しているところから仏画の制作も行っていたので、何かの機会に巷間に流出した粉本を入手した可能性が推測されるためである。

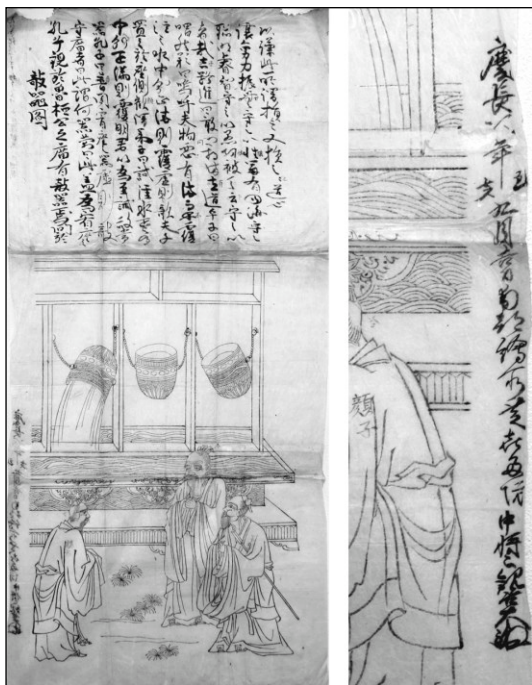


図 6-1 《孔子敬器図》及び端裏書

墨書に記された絵師のうち最も古いのは観重である。観重は永正14年（1517）5月法橋として粉本墨書（恵-03）に現れ、しかも東大寺新禅院の本尊阿弥陀如来像の筆者であったことが記されている。《東大寺大仏縁起》を制作する二十年前から東大寺の絵事に関わり、しかも、すでに法橋であったことから、これ以前に何らかの功績をあげていたと考えられる。そして、『東大寺絵所日記』によれば琳賢は天文23年（1554）に東大寺八幡宮の彩色を行っているので、活動期は38年以上の長きにわたることが確認される。また、弘治3年

(1557) 6月に完成した京都市東山区禅林寺の《当麻曼荼羅図（顕貞曼荼羅）》²⁷が琳賢によって描かれたとする寺伝を認めるなら、その活動期間はさらに3年伸ばすことが可能だろう。

次いで古いのが観深であり、永禄8年(1565)9月十三仏図を描き(恵-13)、天正20年(1592)《高野山四所明神図》を描いたこと(恵-36)がわかるので、28年間の活動が確認できる。これは、『多聞院日記』において侍従の作画を示す記述が天正19年(1591)3月20日条「侍従へ立寄、天女書ヲ見了」を以て終了していることと、符号している。侍従の名は『多聞院日記』文禄4年(1595)正月5日条まで見えるので、この頃に芝座の当主が琳賢観英へと譲られたことが推測されよう。

だが、ここで注意しておかなければならないことがある。『尋憲記』をみれば、元亀2年(1571)には芝座の当主は侍従観深に移っていると見なければならず²⁸、粉本においても永禄年間以後琳賢観重のものは見あたらない。にもかかわらず、『東大寺絵所日記』の元亀3年(1572)の記事に「琳賢方」あるいは「琳賢」という記述があることである。従来この『東大寺絵所日記』の記述から芝法眼琳賢は元亀3年まで活動していたかに考えられているが、琳賢観重が永正14年(1517)に法橋として画事に当たっていることからすれば、元亀3年は55年後であり、年齢は70才を越していたことになる。絵所の当主として職を全うするにはいささか高齢にすぎると思われ、加えて弘治3年(1557)を最後に、琳賢の作画を跡づける資料もないこと²⁹から、この『東大寺絵所日記』元亀3年の記事に見える「琳賢方」あるいは「琳賢」の語が、観重その人を指すと考えることには疑問を禁じ得ないのである。

実際ここでの琳賢の用法は、作者を表すのではなく、仕事の家別分担についての記述である。先の大覚寺本「当麻曼荼羅」においては観深という名に個人を超えた意味を与えていたことをうかがわせるし、粉本において観重は、琳賢の名をほとんど使用しておらず、観重の時代、この琳賢の名には公的な役割があったのではないかと考える。『東大寺絵所日記』は、芝座とはいいいながら、庶流である助座の藤勝が書いたものであり、琳賢は他家の名であったため、このような使用があつて不思議ではない。琳賢という語に琳賢派とでもいうべき意味が宛てられる場合のあることは注意すべきであろう。

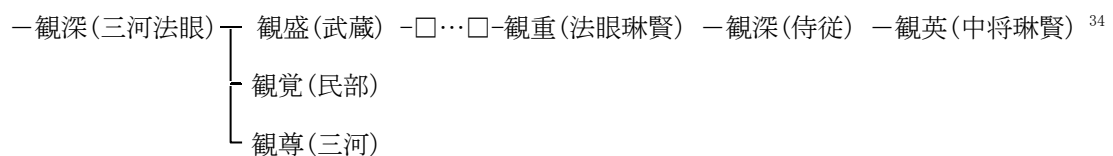
また、『多聞院日記』などによって天正3年(1575)の生年と天正14年(1586)からの作画活動が明らかな琳賢観英は、粉本に見る元和元年(1615)の墨書(恵-38)によって、従来慶長年間と考えられていた没年を、元和年間まで延ばす必要が生まれ、その活動期間はより明確となっている。

このように、恵心院本模本の墨書によって、観重、観深、観英という三代の絵師の活動期間が明確さを増したために、従来から知られていた芝座の絵師との関係も、今少し積極的な推論を立てられるようになってきた。

興福寺東金堂内維摩居士像後屏台座天板裏面墨書銘中の長禄4年（1460）7月18日付けの墨書には、惣座一乗院方としての七人の絵師の序列が示されていて、一臈と七臈は小南院、三臈と四臈は京終が占めるが、のこる三人を二臈武蔵観盛・五臈民部観覚・六臈三河観尊と芝座が占めており³⁰、15世紀中頃の一乗院方絵所にしめる芝座の位置がうかがえる。

彼らに先行する絵師法眼観深については、大阪府守口市の佐太天満宮にある《北野天神縁起》³¹の文安三年（1446）箱蓋裏朱漆書に「芝法眼観深之筆」とあるので、おおよその活動時期がわかる。三河法眼観深と記す『増訂古画備考』³²では、彼の作という「子島真興像」を宝徳頃と記しているが、推測される彼の活動時期から考えて妥当な伝承である。観深を当時の芝座の当主と見ることに矛盾はない。しかし、長禄4年興福寺金堂内の墨書では、芝座の当主は武蔵観盛になっており、年少と思われる観尊が三河を称しているので、観深はこれ以前に亡くなったか引退したと考えられる。従って、芝座の系譜として法眼観深から観盛の継承は認めてよいと思う。

また、観深の名の継承から、観重以後を、観盛の末裔とする可能性も高くなった。観盛については、東大寺の永和本四聖御影図が永和3年（1377）に美濃法橋観盛という絵師によって描かれたことが知られており³³、この一派においては、名の継承が少なからず行われた可能性がある。観尊については、観盛の子である可能性もあるが、活動期間に不明の点が多く、ここでは暫定的に観盛、観覚、観尊を兄弟としておく。法眼観深の活動期が15世紀前半であり、粉本の年紀から分かる観重の活動期が16世紀の前半であることから考えれば、観盛と観重の間には少なくとも二世代はいたと思われ、観深以後の系図は以下のように推測されよう。



観盛から観重に至る数十年は、応仁文明の乱後にあたり、吐田座の衰退や松南院座の大乗院方への進出があり、芝座においては慶派の台頭も見られる時期で、南都絵所に大きな

変化の生まれた時代である³⁵。この変化があればこそ、絵所の再構築に乗じて、芝座が大乗院方にまで活動を展開することができたのであろう。また、その熾烈な受注争いは、彼らの置かれた境遇が次第に厳しさを増していたことを物語るのである。

組織と構成員の整った中世の絵所座が崩壊を始める流れは、15世紀の大和国内の内紛と16世紀の外部勢力の大和侵入によっていかんとも抵抗し難く、中世末期には、興福寺両門跡が絵所を従属させる力はすでに失われていたと考えられる。他方、16世紀末には、中世絵所の系列と異なる竹坊のような絵屋の出現も見られ³⁶、絵所は従来の仕事の他に、独自に生計の道を模索する必要が生まれていた。

こうした、衰退期の南都絵所を物語る際に、留意しなければならないのが、右方と左方という語である。先にも述べた春日大社の天文21・22年（1552・53）「絵馬板」4面の墨書銘から、15世紀中頃には、南都絵所を左方と右方と分けて認識していることがわかるが、その後もこの呼称は長く使用されていたらしく、恵心院本に1点だけ含まれる左方絵所粉本（恵-33）は、元和5年（1619）の年紀を持っている。芝座においても、右方の語は天正8年（1580）（恵-34）以後少なくとも慶長14年（1609）（恵-19）まで使用されたことが確認でき、逆に古い粉本には見られない。そして、元和期に「南都左方絵所」と称するのは、岡村大蔵という絵師であり（恵-33）、中世以来の南都絵所座とは異なる系統と思われる絵師が登場している。南都絵所の名が存続する一方、従来の一乗院方、大乗院方という編成は解体し、右方左方の語を継承する何らかの基準に従って絵所の再編が行われた可能性を示している。南都絵所が衰退して実態を失っていたとしても、なお絵師にとってその名は重要な経営資源だったのであろう。

『多聞院日記』には侍従や、琳賢に関わる記事があるが、その中には画作についての記事も多い。例えば、天正13年（1585）3月25日条・12月15日条・同19日条には、道空の忌日あるいは大乗院尋憲の葬儀に資するため、観深に対し十三仏図制作が依頼されているし、天正5年（1577）10月22日条・同9年（1581）11月5日条・同13年10月18日条では観深が地藏尊像を誂えたことを記すほか、天正6年（1578）9月13日条・同15日条・11月29日条・同8年（1580）2月11日条・9月7日条・同9年（1581）9月10日条・10月9日条などに観深への阿弥陀像の制作依頼があったことを示す記事がある。加えて、天正18年（1590）8月5日条には、観深と弁才天像制作に関する記事もみえる。粉本の中にも、阿弥陀如来像（恵-02・03・04・05・06・07）、十三仏図（恵-08・09・10・11・12・13）、地藏菩薩像（恵-20・21・22・23・24・25・26）、弁才天像（恵-30・31・32・33）の図像があり、院家に奉仕する絵所が、祈祷本尊や追

善供養のためしばしば描いたこれらの画題³⁷から、16世紀の芝座絵所の仕事の有様をうかがうことができるだろう。中将琳賢は天正16年（1588）11月16日条に見るとおり長谷寺本尊を描いたことが知られているが、天正20年（1592）の《十一面観音像（長谷寺式）》「317」（恵-15）は、その粉本を継承するものと考えられる。芝座の仕事の具体的な痕跡といえよう。

このほか、粉本の墨書は様々な情報を教えてくれる。たとえば、「天文五年申十一月日ノユウセン上人」との墨書のある《毘盧遮那如来像》[68]（恵-01）は、署名はないが、その制作時期から琳賢観重のものと考えてよい。ちょうど《東大寺大仏縁起》を完成した直後の、祐全からの依頼であったことがわかる。時はちょうど祐全が西国勧進を企て、周防大内氏と連絡をとる時期であり³⁸、この図像は、東大寺再興勧進の為の制作に関わるものと考えてよいだろう。また、興味深い資料としては、天文18年（1549）4月に筒井家から観重に依頼された《阿弥陀三尊像》[102]（恵-05）がある。これは官符衆徒棟梁で一条院方であった筒井家の順昭からの依頼と思われ、その子順慶が3月3日に生まれた直後の制作である。翌年順昭は病没することを思えば、その制作の意図が推し量られるとともに、筒井氏からの依頼を受ける芝座の南都絵所における位置をうかがわせる。



図 6-2 春日若宮神像 (1119)

憲海の書写した粉本の中には、恵心院本以外にも、侍従観深に関わるものがある。高山寺方便智院において慧友僧護のもと閲覧した《春日若宮神像》[1119]（恵-40）（図6-2）画軸の模本である。この軸には裏書のようなものがあつたらしく「本云ノ天正九年八月一

日右方芝喜多坊侍従觀深／山之上發心院六月廿八日ニ御夢想／御覽シテ如此被書セ候／春日御供所ノ前ニテノ事ニテ候」と留書がある。興福寺發心院は現在の高畑山ノ上にあつた子院で、玉林院ともいい大乘院方に属していた。芝座が多聞院に限らず、他の大乘院方の仕事をも受けていたことを教えてくれる。

近世初頭の芝座の動向について、興味深いのは、慶長14年（1609）5月及び9月の年紀を持つ中将觀英の粉本である。大坂城の五泉坊の依頼により制作した《十三仏図》[266・268]（恵-10・12）2点と、大坂城茶会のために誂えられた《文殊菩薩普賢菩薩像》[450]（恵-19）1点は、豊臣方の依頼によって制作されたものと思われ、具体的に芝座の活動がうかがえる資料としては、最も時代の下るものである。

この頃、興福寺及び両門跡の寺領は、文禄検地によって大きく没収され、かつて興福寺の力を背景に大和を治めていた筒井氏も、徳川家康方に与することにより所領を保持する有様で、経済的にも政治的にも、興福寺の勢力は衰退していた。

一乗院方のみならず大乘院方の絵事にも関わり、中世絵所座としては最大の勢力となつたと考えられる芝座にとっても、状況は深刻化する一方であつたと思われる。觀深の時代にはまだ、興福寺の他に、東大寺や四天王寺や高野山など他山の絵事に関わることで、経営の余地はあつたようだが、觀英の時代になると、広く仲介者を求め、顧客を拡大するほかない状況であつたのだろう。絵所の看板のみは依然許されていたが、一般の絵仏師と何ら変わらぬ存在であり、そうした活動状況そのものが、絵所の衰退ぶりをうかがわせる。それは絵所という機構であつた芝座が、画作の機能集団である芝派への変身を余儀なくされる歴史であつたと思われる。

第3節 恵心院本と憲海

恵心院本模本に遺された墨書は、原粉本の墨書記事の写しと書写日付と署名と捺印によって構成される単純な構造のものが多い。これだけの点数がありながら、中間に位置する模本や所蔵者を記したものがないため、恵心院が所蔵していた原粉本からの模写と考えるとよいと思う。ただこれらは、実際には恵心院で模写されたものではなかった。嘉永3年（1850）2月5日に模写した《阿弥陀三尊像》（恵-05）に「於皇都室町通高辻上ル山王寺」と記されているので、洛中の山王寺で模写したことがわかるためである。従って、この時、寺外に持ち出されていたことは間違いない。その後、無事恵心院にこれらの粉本が戻つたのか確



图 6-3 昆盧遮那如来像
(惠-01)



图 6-4 阿弥陀如来像
(惠-02)



图 6-5 阿弥陀如来像
(惠-03)



图 6-6 阿弥陀如来像
(惠-04)



图 6-7 阿弥陀三尊像
(惠-05)



图 6-8 阿弥陀三尊来迎图
(惠-06)



图 6-9 阿弥陀三尊来迎图
(惠-07)

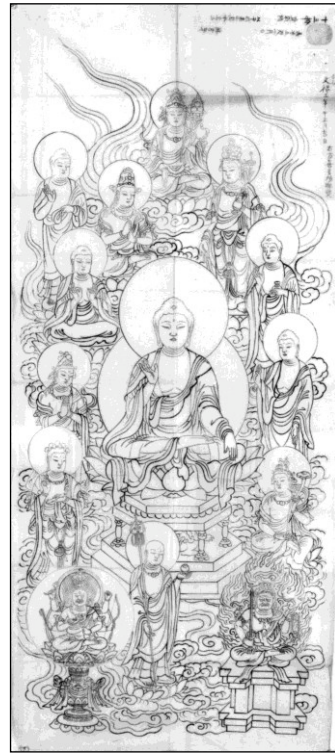


图 6-10 十三仏图
(惠-08)

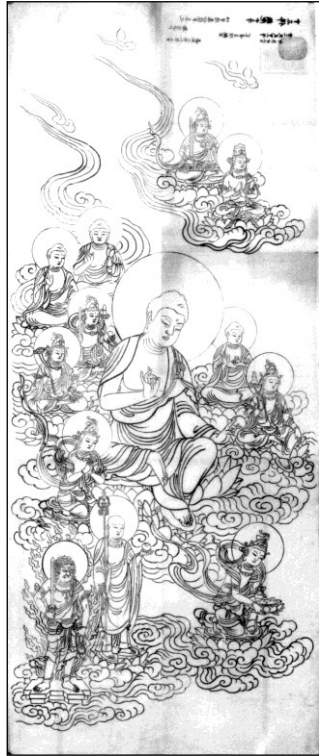


图 6-11 十三仏図
(惠-09)



图 6-12 十三仏図
(惠-10)

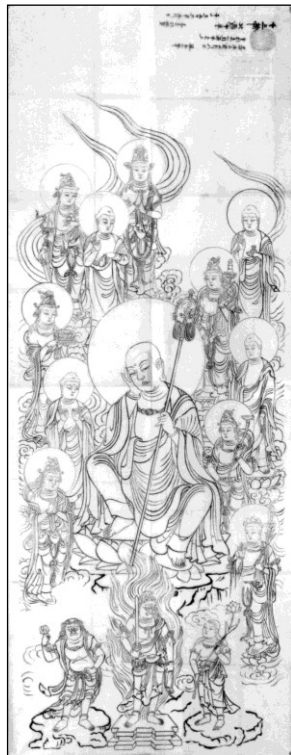


图 6-13 十三仏図
(惠-11)



图 6-14 十三仏図
(惠-12)

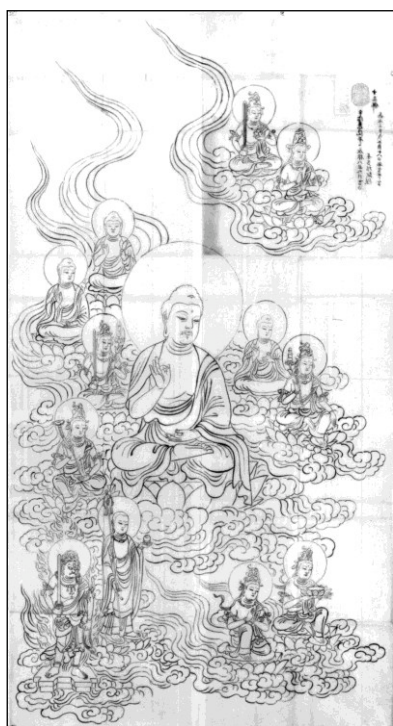


图 6-15 十三仏図
(惠-13)



图 6-16 聖観音像
(惠-14)

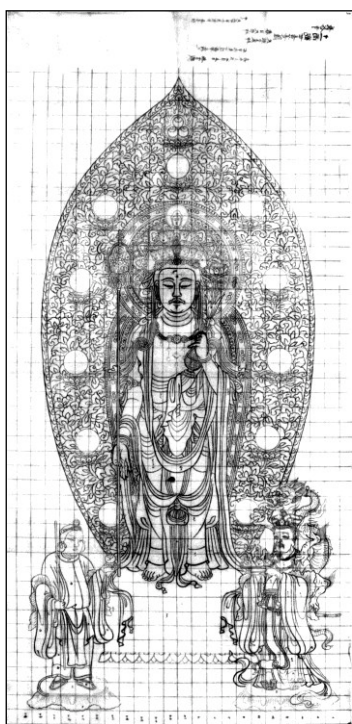


图 6-17 十一面観音像 (長谷寺式)
(惠-15)



图 6-18 五髻文殊菩薩像
(惠-16)



图 6-19 渡海文殊菩薩像
(惠-17)



图 6-20 文殊菩薩善財童子像
(惠-18)



图 6-21 文殊菩薩普賢菩薩像
(惠-19)



图 6-22 地藏菩薩像
(惠-20)

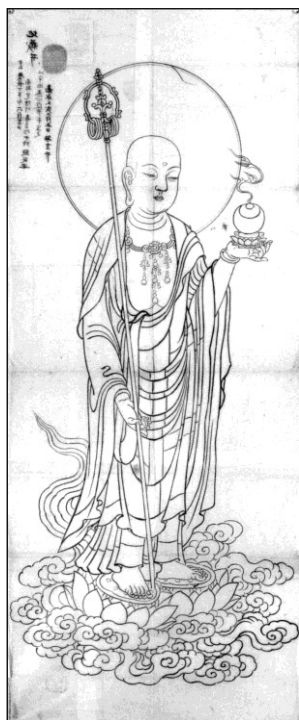


图 6-23 地藏菩薩像
(惠-22)

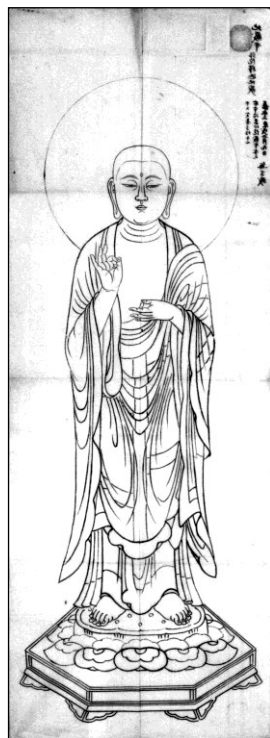


图 6-24 地藏菩薩像
(惠-23)



图 6-25 地藏菩薩像
(惠 23)



图 6-26 地藏菩薩像
(惠-24)



图 6-27 地藏菩薩像
(惠-24)

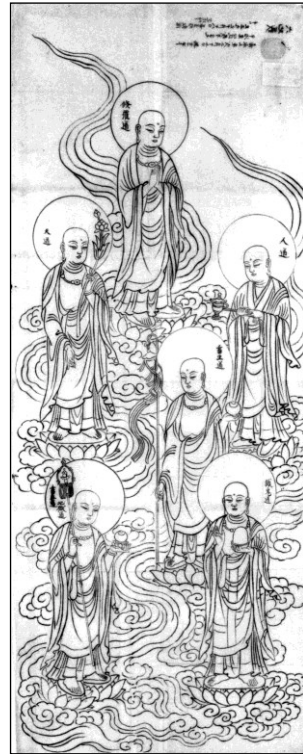


图 6-28 六地藏像
(惠-26)



图 6-29 不動明王像
(惠-27)



图 6-30 毘沙門天吉祥天善膩師像
(惠-28)

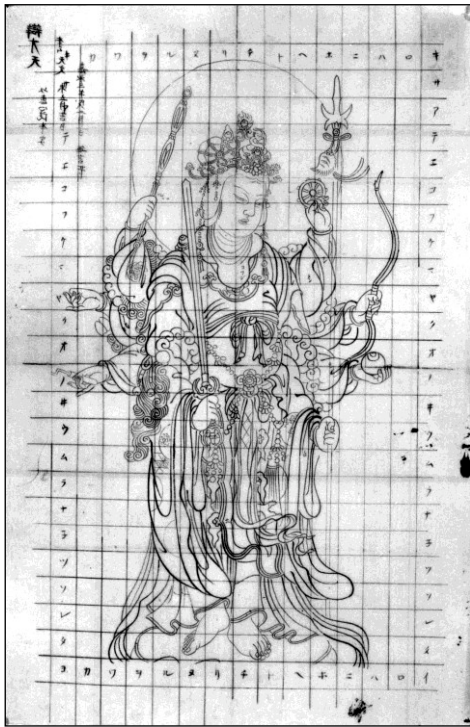


図 6-31 辨財天像
(恵-29)

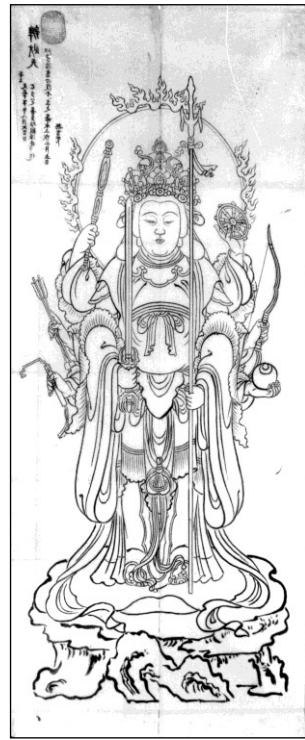


図 6-32 辨財天像
(恵-30)



図 6-33 辨財天十五童子像
(恵-31)



図 6-34 辨財天十五童子像
(恵-32)



图 6-35 愛宕権現像
(恵-33)



图 6-36 子島荒神像
(恵-34)

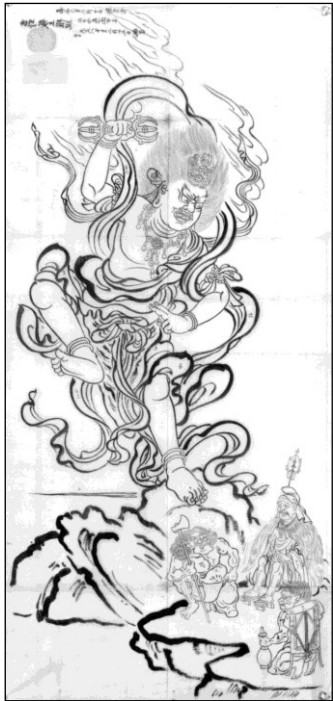


图 6-37 蔵王権現像
(恵-35)



图 6-38 高野四社明神
(恵-36)

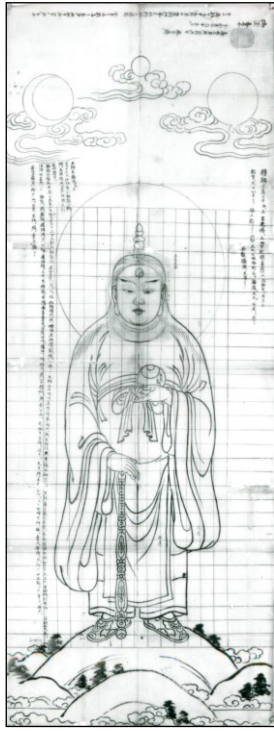


图 6-39 雨宝童子像
(惠-37)



图 6-40 僧形八幡神像
(惠-38)



图 6-41 嘉祥大師吉藏像
(惠-39)

表 6-2 恵心院本粉本目録

注													
*本目録は、《田村宗立旧蔵仏画粉本》2673点のうち恵心院本とこれに関わる粉本40点を、旧函番号に従って一覧としたものである。各項目の凡例は下記のとおり。													
(目録番号) 本論第6章において使用する番号 () 書で示される。													
(制作年) 月/日に小文字の' u ' が付される場合は閏月を示す。													
(印影) 本論第1章「図1-1能満院粉本主要印影一覧」における印影番号。													
(通番) 「別表1《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録」における目録番号。本論において半角[] 書で示される。													
目録番号	名称	作者	材質技法	形態	員数	法量縦cm	法量横cm	制作年 (月/日)			印影	墨書	通番
恵-01	毘盧遮那如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	111.7	83.2	嘉永3年	1850	02_/12	6印	(上墨書)南都大佛殿 (右墨書)如意輪觀自在菩薩 (左墨書)虚空藏菩薩 (下墨書)佛法ト者は是金剛薩埵 疏ニ金剛手即积迦ト故ニ金剛手ヲ為仏宝 法寶ト者觀自在菩薩ノ僧寶ト者はレ虚空藏菩薩ナリ此ノ三寶ハ者皆ナ従リ毘盧遮那心ノ菩提心中流出亦ハ名ク三法兄弟ト以事ヲ顛理ヲ也 三兄弟ト者はレ梵王那羅延摩醯首羅之異名也 此三天ハ表ス仏法中ノ三宝三身ヲ 胎抄云觀音ハ法寶虚空藏僧寶积迦ハ佛寶也 虚空藏僧寶ノ事南方ハ西曼荼羅東方曼荼羅コノ中両部不二也 僧ハ和合ヲ為義ト故ニ南方虚空藏ヲ為僧寶ト也又南方ハ万行ノ方也僧ハ以行徳ヲ為義也 (右上裏墨書)大佛殿 三寶本尊/本云天文五年申十一月日/ユウセン上人/右宇治恵心院蔵本写之 嘉永三戊二月十二日無言蔵	68
恵-02	阿弥陀如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	100.1	38.1	嘉永3年	1850	02_/05	6印	(右上裏墨書)阿弥陀 本云琢磨法眼筆写天文八年五月吉日/宇治恵心院蔵本写之/芝法眼喜多坊 嘉永三戊二月五日/無言蔵	83
恵-03	阿弥陀如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	77.9	38.4	嘉永3年	1850	02_/07	6印	(右上裏墨書)阿弥陀立像 本云/東大寺念佛堂新禪院本尊ニ書之 永正十四年丑五月十九日芝喜多坊觀重法橋/宇治恵心院所蔵本写之 嘉永三戊二月七日初午無言蔵	84
恵-04	阿弥陀如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	118.7	88.1	嘉永3年	1850	02_/14	6印	(左下裏墨書)宇治恵心院蔵本云芝喜多坊觀深 當麻曼荼羅中尊 嘉永三戊二月十四日/無言蔵	85
恵-05	阿弥陀三尊像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	113.7	63.8	嘉永3年	1850	02_/05	6印	(右上裏墨書)阿弥陀/觀音/勢至 本云/筒井殿へ書之觀重法眼天文十八年戊卯月十三日出來 右以宇治恵心院本写之 嘉永三年戊二月五日於皇都室町通高辻上ル山王寺 無言蔵	102
恵-06	阿弥陀三尊来迎図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	149.0	78.7	嘉永3年	1850	02_/10	6印	(右上裏墨書)弥陀三尊 本云/下河内大念佛本尊 永祿元年卯月五日/喜多坊本/宇治恵心院蔵本写之 嘉永三戊二月十日/無言蔵	108

恵-07	阿弥陀三尊来迎図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	82.9	37.9	嘉永3年	1850	02_/12	6印	(右上裏墨書)弥陀三尊」本云／芝絵所喜多坊／宇治恵心院蔵本写之」嘉永三戊二月十二日無言蔵」	109
恵-08	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	112.4	48.8	嘉永3年	1850	01_/00	6印	(右上墨書)本云／文禄三年午正月吉日／右方喜多坊琳賢」 (右上裏墨書)十三佛／愛染附」以宇治恵心院本写之／嘉永三戊二月日／無言蔵」	264
恵-09	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	98.2	41.3	嘉永3年	1850	02_/03	6印	(右上裏墨書)十三佛／彌陀中尊」以宇治恵心院本写之／無言蔵」嘉永三戊二月三日」本云／天文廿二年卯月廿三日／芝喜多坊観重」	265
恵-10	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	152.7	86.9	嘉永3年	1850	02_/04	6印	(右上裏墨書)大」十三佛／以宇治恵心院本ヲ写也／嘉永三戊二月四日／無言蔵」永禄八丑九月／喜多坊観深／慶長十四酉年五月大吉日／南都芝之繪所喜多坊中将琳賢／観英」	266
恵-11	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	112.6	43.2	嘉永3年	1850	02_/08	6印	(右上裏墨書)十三佛／地藏中尊」本云天正十九年正月日／喜多坊琳賢」宇治恵心院蔵本写之」嘉永三年戊二月八日／無言蔵」	267
恵-12	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	148.0	64.6	嘉永3年	1850	02_/11	6印	(右上裏墨書)十三佛」本云／慶長十四酉年五月大吉日大坂御城五泉坊御詔／南都芝之絵所喜多坊中将琳賢観英」右宇治恵心院蔵本写之了／嘉永三庚戌二月十一日無言蔵」	268
恵-13	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	123.2	68.2	嘉永3年	1850	02_/18	6印	(右上裏墨書)十三佛」宇治恵心院本云永禄八丑九月吉日喜多坊観深」嘉永三年戊二月十八日無言蔵写」	269
恵-14	聖観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	42.8	27.4	嘉永3年	1850	02_/09	6印	(左上裏墨書)正観世音菩薩」宇治恵心院本写之／嘉永三戊二月九日無言蔵」	298
恵-15	十一面観音像(長谷寺式)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	148.5	72.0	嘉永3年	1850	02_/05		(右上裏墨書)長谷寺／十一面観世音菩薩／春日大明神／天照皇太神」本云／天正廿年二月吉日喜多坊／右宇治恵心院蔵本写得之」嘉永三戊二月五日／無言蔵」	317
恵-16	五髻文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	71.8	38.8	嘉永3年	1850	01_/28		(右上裏墨書)文殊菩薩」獅子乗」嘉永三庚戌正月廿八日／以宇治恵心院本芝喜多坊琳賢筆写」無言蔵」	416
恵-17	渡海文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	112.5	46.4	嘉永3年	1850	02_/06	6印	(右上裏墨書)文殊菩薩使者附」本云／天文十年丑六月廿日モンクワンノ筆也／喜多坊」右宇治恵心院蔵本写得之」嘉永三戊二月六日／無言蔵」但シ校合スベシ手本紛本ノ故ニ」 (右墨書)八幡」 (左墨書)春日」 (左下墨書)善財童子」	438
恵-18	文殊菩薩善財童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	82.0	27.6	嘉永3年	1850	01_/08	6印	(右上裏墨書)文殊菩薩」本云／天正十九年後正月八日中将／宇治恵心院本写之」嘉永三戊二月五日無言蔵」	444

表6-2 恵心院本粉本目録

恵-19	文殊菩薩普賢菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.0	49.1	嘉永3年	1850	02_/09	6印	(右上裏墨書)文殊普賢 (上裏墨書)本云/慶長十四年酉九月吉日大坂御城ノ 茶ノ湯被成候節御詠ニテ」右方南都芝之絵所喜多坊 中将公觀英」嘉永三戊二月九日無言藏写之」宇治惠 心院所藏本ニ有之」	450
恵-20	地藏菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	69.7	27.5	嘉永3年	1850	01_/30		(左上墨書)弥陀釈迦地藏 (右上裏墨書)弥陀釈迦地藏秘尊」嘉永三戊正月晦日 /無言藏」本云/天文七年戊二月廿日芝喜多坊」以 宇治惠心院本写之」	487
恵-21	地藏菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	95.0	38.4	嘉永3年	1850	02_/05	6印	(左上裏墨書)地藏菩薩」本云/南都芝繪所喜多坊中 将觀英/花押」以宇治惠心院藏本写之」嘉永三戊 二月五日無言藏」	488
恵-22	地藏菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	104.5	37.8	嘉永3年	1850	02_/09	6印	(右上裏墨書)地藏菩薩」弥陀釈迦地藏」本云芝喜多 坊本也/右宇治惠心院藏本写之」嘉永三戊二月九 日/無言藏」	489
恵-23	地藏菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	131.2	48.0	嘉永3年	1850	02_/10	6印	(左上裏墨書)地藏菩薩」本云天文廿三寅六月十一日 喜多坊/宇治惠心院藏本写得之」嘉永三年戊二月十 日無言藏」	490
恵-24	地藏菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	79.6	27.5	嘉永3年	1850	02_/10	6印	(右上裏墨書)地藏菩薩」弥陀釈迦地藏」本云天正十 六年八月吉日中将/宇治惠心院藏本写之」嘉永三戊 二月十日無言藏」	491
恵-25	地藏菩薩像	憲海	紙本白描 淡彩	まくり	1枚	92.8	37.8	嘉永3年	1850	02_/10	6印	(右上裏墨書)地藏菩薩」本云/大永四年三月日/宇 治惠心院本写之嘉永三戊二月十日/無言藏」	492
恵-26	六地藏像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	112.0	45.7	嘉永3年	1850	10_/18	6印	(上墨書)修羅道」 (右墨書)人道」畜生道」餓鬼道」 (左墨書)天道」地獄道」 (右上裏墨書)六地藏」本云/天正九巳十月十八日/ 芝繪所/喜多坊觀深」宇治惠心院藏本写之」嘉永三 戊戌二月十三日無言藏」	519
恵-27	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	44.7	27.5	嘉永3年	1850	02_/09	6印	(左上裏墨書)不動尊」宇治惠心院本写之/嘉永三戊 二月九日/無言藏」	611
恵-28	毘沙門天吉祥天善賦師 像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	113.0	60.0	嘉永3年	1850	02_/03	6印	(右上裏墨書)毘沙門天」吉祥天/禪尼子」本云/天 文廿二丑三月三日喜多坊本」嘉永三戊二月三日以宇 治惠心院本写之/無言藏」	797
恵-29	辨才天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.5	38.7	嘉永3年	1850	02_/01		(左上裏墨書)辨才天」以惠心院本写」本云/天文未 五月吉日」嘉永三年戊二月一日無言藏」	887
恵-30	辨才天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	85.4	38.3	嘉永3年	1850	02_/05	6印	(左上裏墨書)辨財天」本云/天正十年午八月大吉日 /右方芝喜多坊觀深是ヲ作ル」以宇治惠心院本写之 嘉永三戊二月五日/無言藏」	888

恵-31	辨才天十五童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	87.1	38.1	嘉永3年	1850	02_/10	6印	(右上裏墨書)此本宇治恵心院藏/嘉永三庚戌二月十日写得之/無言藏」辨才天」十五童子各持如意珠/龍狐含宝珠」本云/天文十四年三月吉日喜多坊」(左上裏書)海中龍宮ノ宝珠ト/精進峯ノ宝珠ト冥會不二」	908
恵-32	辨才天十五童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	97.2	46.1	嘉永3年	1850	02_/15	6印	(左上裏書)左第一宝珠弓輪ホコ」右劔箭カキ棒」(左上裏書)辨財天」宇治恵心院本云/芝喜多坊」嘉永三年戊二月十五日無言藏」	909
恵-33	愛宕権現像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	74.8	38.6	嘉永3年	1850	01_/29		(左上裏書)本云元和五年吉日南都左方絵所岡村大藏」愛宕山/嘉永三戊正月廿九日/以宇治恵心院藏本写之/無言藏」	948
恵-34	子島荒神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	53.0	38.4	嘉永3年	1850	01_/28		(右上裏書)小嶋荒神」本云天正八辰十月十八日右方芝絵所喜多坊観深筆/以宇治恵心院本写之」嘉永三戊正月廿八日/無言藏」	1008
恵-35	蔵王権現像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	88.7	43.7	嘉永3年	1850	02_/10	6印	(左上裏書)吉野蔵王権現」本云/天文八年亥二月十九日観重/右宇治恵心院本写」嘉永三年二月十日/無言藏」	1063
恵-36	高野四社明神図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	107.0	38.0	嘉永3年	1850	02_/08	6印	(上裏書)高野四所明神」本云天正廿一年壬辰二月吉日/芝絵所喜多坊観深/慶長七年寅六月吉日南都芝絵所右方喜多坊中将観英」宇治恵心院藏本写之/嘉永三庚戌二月八日無言藏」	1067
恵-37	雨宝童子像	憲海・宗立	紙本白描	まくり	1枚	112.5	44.0	嘉永3年	1850	02_/09	6印	(右墨書)續鑛石集上本初二云古来ノ傳ニ云帶塔徳菩薩也弥勒菩薩ノ異名也」胎藏ノ大日如来ナリ頂上ニ戴キ玉フハ両部大日ノ三昧耶形即海底ノ大日ノ印文トハ是ナリ」密教擁護ノ天尊ナリ」(左墨書)大師年譜九/十九左」正月十六日往詣勢州朝熊ノ嶽ニ/修ス求聞持ノ法ヲ而有神臨又創/金剛證寺ヲ」朝熊山儀軌其ノ略ニ云天長二年乙巳正月十六日已刻入朝熊山ニ見堂舎ヲ勿レハ人ノ住柱根摧朽無ク燈油ノ光佛壇闇ク稀ナリ人通云々大師白曰嗚呼喜哉今來此ノ山ニ依テ求聞持ノ力奉値大神宮ニ□□拜虚空藏大菩薩ヲ落涙洗滴衣袖ニ誓言於末世ニ求聞持ノ行者汲○○字關伽井ノ水ヲ/沐浴明星水云々/朝熊ノ嶽ニ有池連珠池ト云□橋連珠橋ト云々大神託ノ曰以テ雨宝童子ヲ可為此山ノ護法ト時ニ御兒ニ八十種好ヲ身ニ著白衣ヲ右ノ御手ニ宝棒ヲ逆手ニシ左ノ手ニ持ス赤色宝珠ヲ云々爾ノ時太神在シ童子ヲ摩頂シ自リ口吐五輪ヲ居童子ノ頂上ニ/虚空藏自リ御口吐キ白色ノ宝珠ヲ授ク童子ノ額ニ云々」(面貌部貼紙墨書)文久酉十月十七日十六才宗立藏」(上裏書)雨宝童子」本云/長祿十三年正月吉日芝絵所喜多坊侍従公観深/御くしの深さと易者ノ詠被申間此本ヲ作り申也」宇治恵心院本写之/嘉永三庚戌二月九日/無言藏」	1076

恵-38	僧形八幡神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	112.6	59.8	嘉永3年	1850	02_/23	6印	(右上裏墨書)八幡大菩薩」本云／元和元年卯十一月四日芝絵所喜／多坊中将」宇治恵心院藏本写之了／嘉永三庚戌二月十三日／無言藏」	1086
恵-39	嘉祥大師吉蔵像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	63.9	46.3	嘉永3年	1850	02_/03	1印・6印	(右上裏墨書)嘉祥大師」以恵心院写本写之／嘉永三戌二月三日／無言藏」	1857
恵-40	春日若宮神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	96.4	41.6	江戸時代後期	19世紀		6印	(左下墨書)本云／天正九年八月一日右方芝喜多坊侍從觀深／山之上發發心院六月廿八日ニ御夢想／御覽シテ如此被書セ候／春日御供所ノ前ニテノ事ニテ候／無言藏／於梅尾山方便智院拜此ノ本軸」 (左上裏墨書)春日若宮ナリト梅尾ノ阿闍梨友護師ノ仰也」	1119

認するすべはないが、現在の恵心院にこれらの原粉本が存在しないことから、幕末以後、散逸の道をたどったのだろう。恵心院の伽藍は明治大正期に縮小しており³⁹、什物の運命も推し量ることができる。

恵心院については先にその歴史を概観したが、18世紀も後半になると徳川家との関係は希薄となり、上林家の衰退によりその後ろ盾も力強さを失っていた。江戸時代後期には相当に困窮していたと思われ、天保14年（1843）、弘化2年（1845）に什物開帳をして寄付を募っている⁴⁰。憲海の書写にやや先行しているので、この開帳を期に、伝えられた恵心院本の寺外流出の契機が生まれたのではないかと思われる。

それでは、何故芝座の粉本が恵心院に遺されたのかという問題がある。もとより、恵心院は開山の良泉以来真言宗の寺であり、南都や興福寺と直接関わることはなかった。近世初期、恵心院に絵仏所が置かれた形跡もなく、周辺においてわざわざ南都の絵師が関わるような造仏が行われることもなかった。恵心院と芝座の直接の接点は見いだせない。しかし、恵心院が白川金色院の乗琳坊と創建当初から関わりを持ち、17世紀には蔵坊をその管理下に置いたことからすれば、金色院との関わりの中で、南都絵所の図像を入手する機会がなしとはいえなかった。先にも述べたとおり、金色院諸坊が中世には興福寺と何らかの関わりを持っていたことがうかがえるうえに、『多聞院日記』天正15年（1587）6月17日条には多聞院主英俊より宇治白川蔵坊の般若妙光に茶用の壺を送っている記事もある。芝座と関わりの深い多聞院と後に恵心院が兼帯する白川金色院の蔵坊が関わっていたことは、南都絵所から恵心院へと伝えられる粉本に細々とした道がつながっていることを教えてくれる。

恵心院の整備は、延宝4年（1676）の本堂造営を以て盛期を迎える。恵心院良攸が寛文13年（1673）に記した勸進状⁴¹を見れば、この頃までに、その由緒も確立したと思われ、一連の活動の中で、什物の収集も行われたと考えられる。たとえば、現在も恵心院に遺る《阿弥陀如来画像》には、18世紀初頭に良純によって記された由来記⁴²があるが、由緒と什物との結びつきを意図的に作り出した様子が見える。こうした什物の収集は、新興の祈願寺であるがゆえに、寄進者の関心を得るため、避けられないところがあったのだろう。その過程で、粉本図像が南都から持ち込まれた可能性を考えている。粉本の中には阿弥陀如来像が6点含まれているが、金色院と関わりの深い文殊像や辨財天像も比較的多く含まれている。粉本の移動に蔵坊がどのような役割を果たしたかについては、不明な点が多いものの、恵心院と南都絵所の接点として、金色院以外は想定できない。

芝座は元禄期まではその命脈をたもっていたとされるが⁴³、これらの粉本は貴重な財産であったはずで、17世紀の初頭で途絶えた粉本の移動は、中将観英の死と関わりがあると見なければならない。どこかに、粉本の移動を促す個性が存在した可能性がある。この時期、興福寺と南都絵所との関わりは希薄になっていたものの、恵心院は伽藍と由緒を確立する精力的な活動期を迎えていた。結果として、解体した南都絵所の粉本を伝えた恵心院の果たした役割は大きい。

先にも述べたとおり、恵心院本模本は、洛中の山王寺で模写された。この時期は能満院の工房を開くための準備期間にあたり、憲海・大成・現光の三人で300枚を超す粉本を作り出している。後に工房の財産となる粉本はこの時著しい充実をみせ、恵心院本模本はその一角をなしたのである。

先に長谷寺能満院所蔵の《天川弁才天曼荼羅図》に触れた。中世において長谷寺は興福寺の末であり、大寺ゆえ独自の絵所も持っていたが、再建などの大事業にあつては、南都絵所が大絵師職を受けることがあった。文明4年（1472）吐田座の琳賢正有がその絵師職を要求したこと⁴⁴は、背景にこうした慣習があったからである。天正16年（1588）11月16日にまだ年若の中将琳賢が長谷寺本尊を描いている。これが何者からの依頼なのかはわからないが、粉本の存在なくしてできないことであり、能満院の天川弁才天曼荼羅図の存在とともに、中世において、南都絵所と長谷寺の間には、浅からぬ関わりを持ち続けていたと考えられる。

こうした歴史を持つ長谷寺で、憲海は青年期、研鑽を積んでいたのだから、すでに歴史のかなたの存在ではあったが南都絵所について、耳にすることも、目にすることもあったはずである。山王寺で積極的な図像収集を行ううち、南都絵所の粉本の存在を知った憲海が、かつての縁に思いを馳せるとともに、研究の対象として強い関心を持ったことは、きわめて自然ななりゆきであった。恵心院本については、憲海が三週間集中して一人で全てを模写しており、これを特別なものと認識していたのは間違いない。そこには粉本図像の質の高さに対する評価があったのはもちろんだが、何よりその図像が南都仏画の伝統を受け継ぐものである点が重要であったと考える。それは、空海以前から伝わる古層の仏画世界に連なるものとして、憲海の目には、古文化財としての存在価値が映ったものと思われる。これは真言僧の目とも律僧の目とも異なるものである。

恵心院本39点の画題を見ると、阿弥陀来迎図、十三仏図、地藏菩薩像、弁財天十五童子図など、中世以降に拡大する浄土教や六道思想などの影響を受けており、庶民の信仰を背

景とするものが高い比率で存在することがわかる。これらに事相との関わりは見られず、また空海の伝える密教の姿を伝えるものとも考えにくい。「誓文」から理解されるとおり、憲海が空海を継承し、正法の興隆を意識していたのは間違いないが、その一方で彼が継承しようとする図像の概念は「宗旨がたまり」⁴⁵を否定して、拡大していることが理解される。

憲海はその後、嘉永4年（1851）頃六角堂能満院に移り、仏画工房を主宰する。図像の収集に努める一方で、収集した図像をもとに開版による施与をはかり、校合を終えた正統な図像の普及に努めるようになるのである。恵心院本模本には、憲海らによって新たな図を起こした痕跡を留めるものがあり（恵-15・29・28・37）、能満院粉本の中には、憲海の弟子大成が恵心院の図を参考に書き起こしたという《十一面観音像》[309]⁴⁶も遺されている。この恵心院本模本が、まさに粉本として”古人画藁”となり、憲海たちの創作の源として大いに有益であったことが考えられる。

以上でこの章の考察を終える。宇治恵心院に伝えられた仏画粉本である恵心院本は、憲海の書写によって継承された。そこに記された南都絵所芝座に関わる墨書は、観重、観深、観英と続いた中世末期の芝座の活動状況とその衰退を物語る資料として興味深いものである。憲海がこれらの粉本を短期間に一人で写し取ったのも、中世の絵仏師に対する敬意とそこに表現される図像の質を評価するものであったと考えられる。粉本群にはいわゆる密教図像としての役割はなく、顕教の図像を含む中世以降に展開する画題が中心となっており、すでに憲海の思考の中で事相研究の成果たる白描図像ではなく粉本としての図像という価値観が成立していることがうかがえる。

【注】

¹ 文化5年（1808）序、斎藤彦麻呂『図畫考』坂崎坦「日本絵画論大系3」（名著普及会、1980年1月）、pp. 183-222。

² 『「白川金色院」と恵心院』（宇治市歴史資料館、1998年3月）。

³ 『「白川金色院」と恵心院』（宇治市歴史資料館、1998年3月）、p. 10。

⁴ 『「白川金色院」と恵心院』（宇治市歴史資料館、1998年3月）、p. 39。慶応4年（1868）閏4月、恵心院文書114。

⁵ 『「白川金色院」と恵心院』（宇治市歴史資料館、1998年3月）、p. 15。慶長5年（1600）2月、恵心院文書85。

⁶ 『「白川金色院」と恵心院』（宇治市歴史資料館、1998年3月）、p. 5。原本宇治市地藏院蔵。

⁷ 『「白川金色院」と恵心院』（宇治市歴史資料館、1998年3月）、p. 4。『大日本仏教全書』

第 119 冊。

⁸ 『「白川金色院」と恵心院』(宇治市歴史資料館、1998 年 3 月)、p. 15。慶長 2 年 (1597) 3 月、恵心院文書 84。

⁹ 『「白川金色院」と恵心院』(宇治市歴史資料館、1998 年 3 月)、p. 12。

¹⁰ 森末義彰「第二部第一篇 南都絵所」(『中世の社寺と芸術』、吉川弘文館、1941 年 11 月、pp. 305-425。初出は「中世における南都絵所の研究(一)(二)(三)」(『美術研究』第 39・40・41 号、1935 年 3・4・5 月)。吐田座の祖有尊は京都から南都に下った巨勢派の絵師であり、その名に有の字を持つことが多い。助座はその庶流であり、一乗院方に属した。また小南院座の祖は尊智とされ、同じく京都から南都に下った絵師で、名に尊の字を持つことが多い。中世、特に鎌倉期の南都絵所座については平田寛「第 3 章第 1 節南都繪師」(『絵師の時代—研究編』、中央公論美術出版、1994 年 2 月、pp. 125-136) にも、整理されている。

¹¹ 興福寺大乘院門跡尋尊の日記。宝徳 2 年 (1450) から永正 5 年 (1508) までの記録がある。『続史料大成』26-37、臨川書店、1978 年 4 月。

¹² 大河内知之「南都絵所座の後裔—中世末期から近世初期にかけての南都の絵画の動向」(『仏教史研究』34 号、龍谷大学仏教史研究会、1998 年 4 月)、pp. 47-71。

¹³ 坂崎坦「日本絵画論大系 3」(名著普及会、1980 年 1 月)、pp. 205f。

¹⁴ 森末義彰『中世の社寺と芸術』(吉川弘文館、1941 年 11 月)、pp. 352-356。森末が琳賢を吐田座の絵師と考えた理由としては以下のようなものが挙げられている。吐田座に琳賢房正有という絵師がいたが、彼が文明 5 年に亡くなり、その子供春松丸が、その名を継承したと思われることから、琳賢の名が世襲の対象となったと考えたこと。また、大乘院方に属する多聞院英俊によって記された『多聞院日記』に天文期活動する琳賢や侍従に関わる記事が表れるにもかかわらず、彼らを一乗院方の芝座の絵師であることをうかがわせるような記述をしていないこと。

¹⁵ 続々日本絵巻大成 伝記・縁起篇 6『東大寺大仏縁起・二月堂縁起』(中央公論社、1994 年 8 月)。

¹⁶ 芝助座の藤勝丸の記した南都東大寺絵所職の記録。天文 4 年 (1535) から元亀 3 年 (1572) まで断片的に記録される。(『続々群書類従 第 5 記録部』、続群書類従完成会、1969 年 9 月、pp. 422-426)。

¹⁷ 小松茂美「天文年中における東大寺の絵巻づくり」(『東大寺大仏縁起・二月堂縁起』、中央公論社、1994 年 8 月)、pp. 164f。

¹⁸ 河原由雄は、「祐全と琳賢」(『南都仏教』第 43・44 号、1980 年 9 月、pp. 149-171) においては、琳賢を吐田座の絵師として論を進めているが、「南都絵画の絵かきたち(一・二章)」(『奈良市の絵画』、奈良市教育委員会、1995 年 3 月、pp. 92-98) においては、琳賢を芝座の観重とする見解をとっている。

¹⁹ 土井実『奈良県史 17 金石文(下)』(1987 年 10 月)、pp. 53-55。

²⁰ 『奈良市の絵画』(奈良市教育委員会、1995 年 3 月) p. 124。河原由雄「祐全と琳賢」(『南都仏教』第 43・44 号、1980 年 9 月)。pp. 156-158。

²¹ 森末義彰『中世の社寺と芸術』(吉川弘文館、1941 年 11 月)、pp. 355f。

²² 渡辺里志「芝琳賢の涅槃図と図像の源流—愛知・妙伝寺本と奈良・唐招提寺本」(名古屋大学大学院文学研究科美学美術史研究室『美学美術史研究論集』20 号、2003 年 3 月)、pp. 29-51。

²³ 『特別展 ひょうご 仏教絵画巡礼—指定文化財と優品をたずねて』展図録』(兵庫県立歴史博物館、1996 年 7 月)、pp. 91f。

²⁴ 興福寺大乘院方の子院多聞院主英俊らの日記、文明 10 年 (1478) から元和 4 年 (1618) の記録がある。(辻善之助編『多聞院日記』、角川書店、1967 年 11 月)。

²⁵ 河原由雄「祐全と琳賢」(『南都仏教』第 43・44 号、1980 年 9 月)、p. 167。

- ²⁶ 河原由雄「祐全と琳賢」(『南都仏教』第43・44号、1980年9月)、pp. 169f。渡辺里志「芝琳賢の涅槃図と図像の源流—愛知・妙伝寺本と奈良・唐招提寺本」(『美学美術史研究論集』20号、2003年3月)、pp. 35-38。
- ²⁷ 『「京都・永観堂禅林寺の名宝」展図録』(同展図録作成委員会、1996年4月)、pp. 167f。
- ²⁸ 森末義彰『中世の社寺と芸術』(吉川弘文館、1941年11月)、pp. 356f。大河内知之「南都絵所座の後裔—中世末期から近世初期にかけての南都の絵画の動向」(『仏教史研究』第34号、龍谷大学仏教史研究会、1998年4月)、pp. 54f。「尋憲記」は興福寺大乘院門跡尋憲の日記。永禄5年(1562)から天正5年(1577)の記録がある。国立公文書館に写本あり。
- ²⁹ 恵心院本の中に永禄元年(1558)4月5日の年紀を持つ「阿弥陀三尊来迎図」(恵-06)がある。「喜多坊本」とあるだけで、作者を確定しえないが、観深の活動期としてはやや早いことと、署名をしない傾向が観重に多いことを考えると、観重の作である可能性がある。だとすれば観重の活動期は今少し延びると思われるが、それでもなお元龜3年(1572)は14年後である。
- ³⁰ 森末義彰『中世の社寺と芸術』(吉川弘文館、1941年11月)、pp. 322f。『奈良六大寺大観 第八卷 興福寺 二』(岩波書店、1970年12月)、解説 pp. 44-46。
- ³¹ 東京国立博物館ほか『「天神さまの美術」展図録』(NHKほか、2001年7月)、p. 282。
- ³² 朝岡興禎／太田謹『増訂古画備考』(思文閣出版、1970年8月)、pp. 1450-1452。「芝」の部に芝法眼尊海、芝法眼、芝三河法眼観深、芝法眼慶舜、芝法眼、芝法眼琳賢、芝侍従、芝琳賢(侍従子)の項がある。
- ³³ 蔵田蔵『秘宝 第四卷 東大寺 上』(講談社、1969年11月)、pp. 351f。『奈良六大寺大観 第十一卷 東大寺 三』(岩波書店、1972年2月)、解説 pp. 65f。
- ³⁴ 森末は賢舜を観英琳賢の子としているが(森末義彰『中世の社寺と芸術』、吉川弘文館、1941年11月、pp. 358f)、この年20歳の観英の年齢を考えるとこれは観英の弟と見るべきであろう。『多聞院日記』には「琳賢子息十七才」とあるが、本論にも述べたとおり、琳賢は家の名として用いられた可能性もあるので、矛盾を生じない判断をとりたい。また、この法諱からすれば賢舜は絵所には属さなかった可能性もある。従って、観英の後継は不明である。
- ³⁵ 森末義彰『中世の社寺と芸術』(吉川弘文館、1941年11月)、pp. 347f、362-365、367-369。
- ³⁶ 河原由雄「南都絵画の絵かきたち(一・二章)」(『奈良市の絵画』、奈良市教育委員会、1995年3月)、pp. 95-98。
- ³⁷ 森末義彰『中世の社寺と芸術』(吉川弘文館、1941年11月)、pp. 387-390。
- ³⁸ 河原由雄「祐全と琳賢」(『南都仏教』第43・44号、1980年9月)、p. 152。
- ³⁹ 『「白川金色院」と恵心院』(宇治市歴史資料館、1998年3月)、pp. 40-43。
- ⁴⁰ 『宇治市史 3』(宇治市役所、1976年)、p. 467。史料は宇治市役所文書『宇治郷留日記』。
- ⁴¹ 『「白川金色院」と恵心院』(宇治市歴史資料館、1998年3月)、p. 22。恵心院文書176。
- ⁴² 『「白川金色院」と恵心院』(宇治市歴史資料館、1998年3月)、pp. 22f。恵心院文書177。
- ⁴³ 森末義彰『中世の社寺と芸術』(吉川弘文館、1941年11月)、p. 370。
- ⁴⁴ 『大乘院寺社雑事記』(『続史料大成』26-37、臨川書店、1978年4月)、文明4年(1472)4月10日条。
- ⁴⁵ 「千師傳」(長谷寶秀『慈雲尊者全集』第17、思文閣、1974年7月)、p. 31。
- ⁴⁶ 嘉永3年2月13日写。墨書に「嘉永三庚戌二月九日下繪作り初同十三日二絹地エ下繪付了。大成蔵」依宇治恵心院蔵本ノ十一面觀音様ニ縮写之但シ非基ノ目割故ニ不宜。清書不至直ニ下繪至也。故ニ一本也。」智山智恵法印様御詔也。」画料金壺歩也。」御面手足御身連續至者敷不至者敷不未也」とある。

第7章 長谷川本

この章では、会津を離れた憲海が入洛後精力的に書写した絵仏師長谷川家の粉本と憲海の事業との関係を考察する。長谷川家は桃山期の画家長谷川等伯の息子宗也の末裔で、江戸時代中期以降絵仏師の家となり明治初期に至るまで活動した。第1節では、能満院粉本に含まれる長谷川本の概要と、長谷川家について考察する際の基礎資料となる系譜類について考察する。第2節では、左近と宗伯という二人の絵師について長谷川家系譜を検証し、長谷川家における宗也の役割を考察する。第3節では、長谷川等伯の子宗也以後の京都の長谷川家の累代の事跡を考察する。第4節では、絵仏師長谷川家と憲海の関わりを考察し、粉本から理解される彼らの活動状況を考察する。第5節では、憲海が収集した他の絵仏師粉本との比較により、憲海の事業と絵仏師の活動との関係について考察する。これまで語られることの少なかった絵仏師長谷川家についての理解を深めると共に、彼らの活動が能満院における憲海の事業に与えた影響を検証するのが目的である。

第1節 長谷川家と能満院粉本

幕末期の律僧憲海が弟子大成とともに会津を離れ入洛した際、六角堂能満院に入るまでの当座の拠点としたのが、室町通仏光寺にあった山王寺¹である。この山王寺寄寓期に憲海らは、長谷川家所蔵の粉本を精力的に収集した。憲海は弘化4年(1847)から嘉永3年(1850)までの約3年間山王寺に滞在したと考えられ、弟子大成と現光を含めた三人が、烏丸通仏光寺近くに住んでいた長谷川家の所蔵する粉本を模写したのである。

この期間の年紀を記す長谷川家関係粉本だけで129点あるが、他に山王寺寄寓期の制作と推定できるが年紀を欠くものや、能満院への移転後に長谷川家粉本を模写したもの、また憲海の長谷寺修学時代に模写したものなど、長谷川家に関係する粉本は白描180点、版画2点を数える(表7-2)。彼らは長谷川家の模本をしばしば長谷川本と呼んだ。憲海らが仏教図像を収集する過程で、これほど大量の粉本を一箇所では収集する例はなく、特別な理由があったと思われるが、その経緯を物語る資料はない。

この長谷川家は、桃山時代の画家として知られる長谷川等伯(1539-1610)の息子宗也の末裔である。長谷川等伯については、近年急速に研究が進展をみせているが、その画系について論じられるのは未だその弟子や子の世代にとどまっているのが現状であり、江戸

時代後期の世代に至っては断片的な情報が知られているにすぎない。嘉永年間に編集された『古画備考』において、等伯の孫以降の長谷川家画家についての記述は極めて限られている²。そして状況はその後大きく変化することなく、画史からは長く忘れられた存在となっていた。それが昭和戦後期になると、土居次義及び山根有三の論考³により等伯の末裔について言及されることも増し、江戸時代の長谷川派についての研究基盤はようやく整い始めたといえる。近年では宮島新一の著作⁴により一般にも紹介されるようになり、徐々に江戸期の長谷川家の事跡が歴史の視界に入りつつある。

憲海らが収集した長谷川家に関する粉本には、原粉本の墨書を書写して長谷川家の活動を記録するものがあり、そこには原本の所在や、注文者の情報や、書写年および書写者などが書き込まれている。これらは、江戸後期における絵仏師長谷川家の事跡を記録する興味深い資料として注目される。

憲海は青年時代の長谷寺修学中に長谷川家の手になる粉本を再三模写しており、その存在を早くから意識していたと見られる。晩年の憲海が図像収集の大願を期して京都に入った時、長谷川家は数少ない洛中の知己であった。18世紀から19世紀にかけて京都における絵仏師として長谷川家が存在感を示していたことは、これから新たな事業を立ち上げようとする憲海に、少なからぬ影響を与えたものと考えられる。

江戸時代における長谷川家の活動を伝える記録として流布するものは少ない。近世末期の認識を示す『古画備考』の不十分な記述さえ重要な情報となるほど、きわめて限られたものといわざるをえない。長谷川家の系譜に関する資料として最も古いのは、本法寺日通（1551-1608）が等伯の語るところを記述した『画説』に記されたものである⁵。同書には二件の系図状の図が示されているが、これには雪舟と等伯の関係を記述する以外の意図は見られない。ただ、晩年に等伯が「自雪舟五代」を名乗るようになる根拠の一端を記すものとして重要である⁶。

従って、ここで論じる主題において基本資料となるのは、長谷川家の系譜としてすでに公刊されている三種の系譜と京都の仲家が所有する『長谷川家過去帳』である。これら近世の長谷川家の動向をうかがわせる数少ない資料を考察するところから、長谷川家系譜の検証をはじめたい。

最初に『七尾町旧記』に収録された長谷川家系譜をあげる。大正初期に発見されたと考えられている資料⁷で、能登七尾に住んだ等林が文化6年（1809）に記したとされる。等伯よりはじまり、彼の三男宗也以後に連なる京都の長谷川家について、当代にあたる長谷

川等鶴までを略述する。「自雪舟五代」を意識した等伯以後の累代の継承については記述がない。等伯については、狩野祐雪(?-1543)の弟子となり、その没後山口の雲谷等益(1547-1618)の弟子となったという伝を伝える。等林は七尾の本延寺の檀家とされるが、仲家が所有する『長谷川家過去帳』にもその名があり、そこに京都の本法寺⁸(図7-1)に葬られたことが記されているので、京都とつながりの深い人物であったことが推測される。本法寺を本寺とする本延寺は日蓮宗の寺院で、等伯の生家たる七尾の奥村家の檀那寺である。本系譜の記述は簡略であり、もともと備忘録あるいは略本として記述されたものと思われる。等林自身が記した原本は残っておらず、これを収録した『七尾町旧記』そのものが原本を失い、写しを残すのみである。以下この系譜を旧記本系譜と呼ぶことにする。

ちなみに、ここに提示した『長谷川家過去帳』は長谷川等伯の画系を継承する京都の仲家が所有するもので、雲母引きの紙を用いた折帖の体裁を採っている。宗也以後宗清に至るまでの長谷川家の檀那寺であった信行寺⁹(図7-1)で発見されたもので、等伯の長男久蔵(1568-1593)が亡くなった文禄2年(1593)以後明治26年(1893)までの京都の長谷川家の縁者について、忌日を書き留めている(表7-1)。

その序¹⁰によれば、天明8年(1788)の大火で焼失したものを、他の過去帳から謄写したものらしく、後に述べる仲家本《長谷川家系譜》と同様の成立状況がみられる。何から謄写したか記述した部分は欠失しているため判然としないが、長谷川家の旧檀那寺である本法寺教行院の過去帳とは記述の一致が見られ、各檀那寺の過去帳から謄写したものと推測される。したがって、転載の過程で記載漏れ、誤記が発生する可能性は避けられない資料であるが、墓碑の多くが失われた現在、極めて貴重な記録である。

次にあげられるのが、京都の仲家が所蔵する《長谷川家系譜》¹¹である。これは、卷子に仕立てられており、巻首に記される序により伝来の経緯がわかる。すなわち、はじめ等伯の孫にあたる宗雪が作成したが、この最初の系譜は天明8年の大火で焼失した。ところが、宗雪の孫精俊尼のところに宗雪の子宗清による写しが残されていたため、これを宗清孫の等鶴が清書した。これが現在残された系譜であるとしている¹²。等鶴の父等潤について本系譜の記述は詳細であり、この系譜が等潤の亡くなった寛政10年(1798)以後に清書されたことが理解されるとともに、精俊尼が存命中であることがわかるため、その没年である文化元年までに着手されたことがわかる。精俊尼は仲家本過去帳によれば、長谷川宗清の娘で等潤の姉にあたるおりんであり、西七条の酒屋甚七の妻となっている(表7-1-66)。天明8年の大火の類焼地をみれば、西七条には至っておらず、焼失を免れたものと考

えられる。

従ってこの系譜の成立は旧記本系譜に先行しているものと考えなければならない。宗雪は等伯の三男と思われる宗也の子であるから、旧記本系譜同様京都の長谷川家の系譜であることがわかる。等鶴によって清書された系譜は、以後累代に書き継がれ明治期の等宗に至っている。

この系譜では、「自雪舟五代等伯」の伝承が明記され、累代を定めて家伝としたことがわかるが、さきの旧記本系譜同様、等伯が狩野祐雪の弟子となり、その没後山口の雲谷等益の弟子となったとする今日では受容しがたい伝記に従っている。本系譜では、等伯を雪舟五代とするために、〈雪舟—雪溪—雲谷等顔—雲谷等益—等伯〉と画系をつないでいる。等益を雪舟より四代とするため、その弟子である等伯が五代となる理屈であるが、現在もなお晩年の等伯が雪舟五代を名乗る理由は不明のままである。それはとりもなおさず、末裔達が画系を整備する必然性の欠如につながっている。宮島新一が等伯の評伝を示す中で、等伯自身の雪舟に対する関心の低さを指摘するように¹³、長谷川家における雪舟の位置づけには恣意的な要素があり、不明な点が多い。

この系譜を所有する仲家は、長谷川等舟の弟子仲又七に始まる画系である。等舟の次男等宗亡き後、又七の子仲市太郎が等宗の長女を娶り、長谷川家の画系を継承した。その子仲春洋がこれを受け継ぎ現在に至っている。京都の長谷川家の血脈を今に伝える家である証しとして、仲家は近世の長谷川家が所有した粉本を継承しており、桃山期に生まれた画系が今に続く貴重な存在となっている。仲家に伝わる系譜を以下仲家本系譜と呼ぶことにする。

最後にあげるのは、中村溪男により紹介された江戸の長谷川家の系譜である¹⁴。序が付されており、原本が大正12年(1923)9月の関東大震災で焼失したため、長谷川幸吉が庶流の山崎喜作の所持する写しから昭和2年(1927)9月に作成したものと記している¹⁵。原本の成立時期が不明である点と、列挙される人名の関係が不明瞭である点が、転写本の限界として惜しまれるが、旧記本、仲家本と大きく異なり、江戸に移った等伯孫の末裔による系譜である点が貴重である。

ただ残念なことに本系譜は血脈だけではなく、弟子筋までも記しているため、極めて混乱している。雪舟に始まる点は仲家本系譜と同じだが、長谷川家本系譜では『画説』に見る系図と類似性を見せる〈雪舟—等春—法淳—道浄—等伯〉の継承を記している。旧記本系譜、仲家本系譜では、等伯が雲谷等益に師事する点を伝えているが、同じ長谷川家であ

りながら、師系の伝承が異なる点が興味深い。等春を長谷川家の画系の直接の祖としている点は『画説』における等春重視の傾向と結びついている。等伯以後は先妻妙浄の子である久蔵と宗宅（等後）が記され、宗也には触れていない。主要な部分は等伯の娘を娶った弟子等秀及びその子等憶を養子とした等岳以下の系譜であり、幕末明治期の等英雪堤（1829－1884）の代まで続いている。

第2節 左近と宗伯

仲家本過去帳には、京都の長谷川家が、本法寺からはじまり信行寺から天性寺¹⁶（図7-1）へと檀那寺を移す様子が記される。これは本法寺教行院の過去帳のみでは知ることのできない情報である。系譜や過去帳の持つ資料性は非常に興味深い、これまでこれらの資料は桃山期の長谷川等伯研究に偏向して使用されることが多かったため、多様な内容の一部が利用されるに過ぎなかった。本来は江戸時代の記録を桃山時代の研究に利用するため、時間の隔たりから生じる錯誤などが単純に批判の対象とされることもあり、史料としてさほど重視されてこなかったのである。しかし、資料の成立状況から見れば、近世長谷川家の動向を理解するためには、極めて示唆に富む内容を持つ。あまり意識されていないが、これらが有する近世資料としての価値を、左近と宗伯という二人の人物の考察を通して確認し、絵仏師長谷川家を考察するための基本資料として位置づけたい。近世長谷川家の系譜資料が持つ重要な内容が、憲海とも関わりのある絵仏師長谷川家に関する記録である。

現在の通説では、等伯には五人の子がいたと考えられている。26歳で亡くなった長男久蔵と弟宗宅が先妻妙浄の子と思われ、後妻の妙清の子と考えられているのが宗也と長女妙円である。この四名は三種の長谷川家系譜の記述から考えても等伯の実子と見て問題ない。ただ等重とも称したとされる左近については疑問が残る。

すでに左近に関する諸論考で指摘されるとおり、現存する三種の長谷川家系譜は、左近の存在を記していない。さらに仲家本過去帳においても、等伯の直接の子孫について久蔵、宗宅（等後）、宗也、妙円、等岳、等秀、等憶について記録があり、夭折した久蔵にはじまり等憶に至るまでの本法寺を檀那寺とする縁者については、基本的に記載する方針を見せていながら、左近に充当可能な人物が見いだせないのである。とすれば、はたして本当に左近が等伯と縁戚関係があったのかという疑問が生まれるのは当然だろう。左近が等伯の子であることを客観的に示す資料は見当たらない。

もちろん、左近は比較的作品が残されており、その表現について一定の共通認識が成立しているから、長谷川派の實在の人物とするに疑問はない。『皇朝名画拾彙』に考察するようにこれを宗達派に関係づけることは困難であろう。ただ翻って彼が等伯の子であるとする説について見れば、二つの状況分析から推測されているばかりで、説得力に限界がある。

まず一つは、画伝類の記事から判断していることで、『丹青若木集』『辨玉集』といった左近の活動期間からさほど隔たらない時代の画伝に等伯とのつながりを示す記事があるが、これはその直前に雲谷等顔と等伯を結んでいることからわかるように、師承関係を表すにすぎず、必ずしも血縁関係を意味するものではない。『本朝画史』には宗也の名は見えても、左近の名はない。『扶桑名公画譜』によりやく長谷川等重を左近とし等伯の子と記すが、左近在世から控えめに考えても半世紀以上後の記事であり、その信頼性は低くならざるを得ない。このように、画伝類の左近の記事は、過去帳や系譜が示す事実を補うには説得力を欠いている。むしろ、左近を等伯の子とする説は、もうひとつの理由である「自雪舟六代藤原長谷川左近」の落款¹⁷の存在に大きく影響されたものと考えべきであろう。

もともと「自雪舟五代」という等伯の款記については、その根拠が不明であり、先に述べたとおり長谷川家においても系譜の中で根拠を模索している状況である。そして彼らに共通する認識は、累代を数えるのに血縁や家督の移譲を根拠とせず、学画における師承関係に依拠していることである。左近が等伯の例にならって「自雪舟六代」を称するためには、等伯への師事のみで要件は満たされていると考えてよい。その意味では、「自雪舟五代」が等伯に限らず幾人もいて矛盾はなく、同様に「自雪舟六代」もまた複数いて不思議はない。等伯がひとつの宣伝効果を期待して「自雪舟五代」を称したとするならば、左近もまた等伯のひそみにならい、これを使用したとして不思議はない。ただ、年長の宗也在世中でもあり、左近と宗也の間に確執が生まれた可能性はある。とはいえ、もし宗也と左近が兄弟であると仮定したとしても、それが檀那寺から排除されるほどの理由といえるのか疑問である。

従って左近がその落款において藤原の氏を記す点を血脈の根拠としてあげる説¹⁸についても、長谷川家が藤原の氏を使用している以上、長谷川を称する左近が形式的にこれを使用する可能性があるため、大きな意味を与えることは難しいと考える。左近については、従來說を改め等伯の弟子である可能性も視野に入れるべきであろう。よしんば、従來說に従いこれを等伯の子とするならば、過去帳及び系譜に記されない理由が説明されなければならない。等伯没後の長谷川家が、むしろ弟子たちの活動によって活況を呈していたこと

を考慮すれば、弟子左近の活動が長谷川派の中で注目を受けることに違和感はない。

仲家本過去帳を見たとき疑問となるのは左近の不在にとどまらない。宗伯（表 7-1-4）という人物の存在も不明なのである。宗伯については山根有三が考察を加えており、長谷川家本系譜の記述「宗伯 女子 等憶妻」を解釈して、宗伯を等伯の娘とし、等憶（表 7-1-24）は等学の誤記と考えて等学の妻となったと考えた。つまり新たに等伯の一子を想定したのである。しかし、この長谷川家本系譜の記述は宗伯の娘が等憶の妻となったという意味と解釈すべきであろう。もしこれが等伯娘を表す意図があるならば「女子 宗伯 等憶妻」と記すのがこの系譜の記述形式に合致しているし、宗伯という名がこの系譜の中で繰り返し使用される名であるとともに男子にしか用いられていない事実に対する矛盾が解決されるからである。

もちろん、宗伯の娘が等憶の妻となったという記述に対しては、誤記の可能性を考えるべきであろう。はじめにこれが誤記ではなく、記述のとおり等憶の妻となったと考えてみよう。すると等秀と妙円の子すなわち等伯の孫である等憶の妻となった妙善（表 7-1-12）の前か後に妻となったことになる。この妙善は等伯の弟子等岳の娘だからである。しかし、宗伯娘が後妻となった場合慶長 16 年（1611）に宗伯が本法寺教行院に葬られる理由が説明できない。本来長谷川家の人間ではない宗伯は義父として記されなければならないからである。従って可能性があるのは妙善が後妻となる場合のみとなる。この場合宗伯の没年以前に宗伯の娘は等憶に入嫁していなければならないことになり、等憶が 90 歳程の長命であり、極めて早婚であったという仮定が必要となる。

仲家本過去帳に宗伯の名が記されているということは、長谷川家に嫁いだ娘の名が記されていると考える必要がある。検討の対象となるのは、妙入（表 7-1-8）と書かれた人物である。寛永 9 年（1632）8 月 16 日に亡くなっており、これも従来の長谷川家系図では触れられることのない人物であるが、宗伯との関係者を探す時、この妙入をその娘と考えるのが合理的な解釈である。もしこれが等憶の先妻にあたるのであれば、妙善との婚姻はこれ以後に設定されなければならないのだが、妙善の父等岳は、それより早く元和 9 年（1623）に亡くなっており、長谷川家との縁戚関係がないまま本法寺に葬られている矛盾が生じている。宗伯娘が等憶の妻となったと考えるかぎり、極めて特殊な状況や矛盾を説明する必要が生じるのである。

では次に、宗伯娘の嫁ぎ先が等憶ではなく、等後の誤記であったと考えてみよう。長谷川家本系譜では等憶は等憶と記されており、字形から億と後の誤読誤記は想定しやすい。

表 7-1 仲家本長谷川家過去帳忌日一覧

	年号	月	日	宿坊	法名など	注記	続柄	
1	文禄2	1593	06	15	本	道淳	長谷川久藏信春」行年廿六」	長谷川等伯男
2	慶長9	1604	11	11	本	妙清	長谷川等伯妻」	長谷川等伯妻
3	慶長15	1610	02	24	本	嚴浄院等伯日妙大居士	能州本七尾畠山之家臣文之丞宗道男」自雪舟五代長谷川法眼」	奥村宗道男(長谷川等伯)
4	慶長16	1611	09	02	本	宗伯	長谷川」	(不明)
5	慶長17	1611	10	13	本	等後	長谷川法橋」	長谷川等伯男
6	慶長18	1613	08	04	本	等秀	長谷川等憶父」	長谷川等伯女の夫
7	元和9	1623	06	21	本	等岳日善	長谷川」	長谷川等憶の義父
8	寛永9	1632	08	16	本	妙入	長谷川絹加兵衛母上牧」	(不明)
9	慶安元	1648	06	27	本	妙圓	長谷川等秀妻」等憶母」	長谷川等伯女
10	承応2	1653	07	04	信	涼屋清心女	繪屋庄兵衛」	繪屋庄兵衛妻?
11	承応2	1653	08	21	信	融月宗圓信士	長谷川与左エ門父」	長谷川与左エ門父
12	明暦2	1656	06	19	本	高岳院妙善日修	長谷川等憶妻」	長谷川等憶妻
13	万治2	1659	06	11	本	妙敬	長谷川等憶息女」	長谷川等憶女
14	寛文元	1661	10	04	信	花月宗榮士	繪屋清兵衛息」	繪屋清兵衛息
15	寛文7	1667	08	06	信	西譽生順信士	六代法橋 長谷川宗也」	長谷川等伯男 (長谷川宗也)
16	寛文8	1668	01	24	信	涼春信士	繪屋吉兵衛息」	繪屋吉兵衛男
17	寛文9	1669	07	06	信	夢幻童子	繪屋清兵衛孫」	繪屋清兵衛孫
18	寛文10	1670	05	23	信	永春信女	繪屋清兵衛娘」	繪屋清兵衛女
19	寛文10	1670	07	25	信	秋光童子	繪屋吉右エ門息」	繪屋吉右エ門男
20	寛文12	1672	05	05	信	玄齋信士	繪屋清兵衛」	繪屋清兵衛
21	寛文13	1673	?	06	[信]	□□□□[信女]	[繪屋]宇右画門妹」	長谷川宗也女
22	寛文?	?	?	03	信	霜葉暁月	繪屋宇右画門娘」	長谷川宗雪女
23	延宝4	1676	11	08	信	先雪童女	繪屋権左画門娘」	繪屋権左エ門女
24	天和2	1682	08	14	本	等憶日等	長谷川 江戸圓行院」	長谷川等伯女の男 (等秀男)
25	天和3	1683	08	11	信	涼月妙榮童子	繪屋権左エ門娘」	繪屋権左エ門娘の男?
26	貞享3 *1	1686	02	10	信	春去童子	繪屋市良右エ門」	繪屋市良右エ門男
27	貞享4	1687	07	27	信	順譽商雲尼	宗也妻」	長谷川宗也妻
28	元禄3	1690	05	29	信	厭暑飲涼信女		(不明)
29	元禄5	1692	05	18	信	浄安宗淳信士	七代 宇右エ門法橋等作」信清」	長谷川宗也二男 (長谷川宗雪)

表 7 - 1 仲家本長谷川家過去帳忌日一覧

30	元禄8	1695	08	28	信	直譽到有宗斬	繪屋権左エ門父」	繪屋権左エ門父
31	元禄12	1699	03	27	信	妙春信女	繪屋吉兵衛母」	繪屋吉兵衛母
32	元禄13 *2	1700	05	08	信	幻夏懷子	右同人(繪屋権左画門)孫」	繪屋権左エ門孫
33	元禄15	1702	10	08	信	董山周芳信女	宇右エ門母」	長谷川宗雪妻?
34	宝永7	1710	03	21	信	圓生孤覺童子	宇右エ門子」	長谷川宗清男
35	宝永7	1710	04	16	信	知依利厭童子	繪屋宇右エ門子」	長谷川宗清男
36	享保3	1718	09	16	信	桂譽智芳信女	長谷川宇右エ門妻」	長谷川宗雪妻?
37	享保6	1721	11	26	天	智専童女	糺屋八兵衛子」	糺屋八兵衛女
38	享保20	1735	10	21	信	浄岸恵照信女	繪屋宇右エ門娘」	長谷川宗清男娘
39	元文2 *3	1737	11	06	[信]	[畫誉宗寂信士]	[全部欠 恐らく宗清等霖の記事]	長谷川宗雪男(長谷川宗清)
40	元文4	1739	09	02	信	釋妙知	井筒屋傳兵衛妻」	(不明)
41	元文6	1741	11	28	天	觸光浄照信士	糺屋八兵衛」	糺屋八兵衛
42	寛保2 *4	1742	?	06		青地香霖	九代 等霖宗清門人」等潤後見」	長谷川宗清弟子(青地香霖)
43	延享元	1744	07	13	天	普光恵照信女	糺屋八兵衛妻」	糺屋八兵衛妻
44	延享3	1746	05	13	信	釋妙照		(不明)
45	宝暦4	1754	09	15	信	松譽貞心信女	宗清宇右エ門妻」長谷川(前)賀一良母」	長谷川宗清妻
46	宝暦6	1758	08	18		釋妙春信女	智觀母」若州/新道村」	長谷川等潤妻(先)母
47	宝暦11	1761	09	16	光	如寂大空禪定門	中川周保」宿坊誓願寺中/光明寺江納」	中川周保
48	宝暦12	1762	02	02	信	順霞童子	長谷川(前)賀一郎子」等潤前名也」	長谷川等潤男
49	宝暦12	1762	04	20	信	釋道智	西七条於りん」長谷川ヨリ出ル酒屋順一妻」	(不明)
50	宝暦12	1762	11	22	信	理芳智觀信女	長谷川賀一良妻俗名おりく」等鸛賀一實母」	長谷川等潤妻(先)
51	宝暦13	1763	02	03	天	露滴童子		(不明)
52	明和元	1764	11	20		釋祐顯	若州/新道村長右画門」智觀父」	長谷川等潤妻(先)父
53	明和5	1768	10	14	天	惺夢童子	賀一弟」	長谷川等潤男
54	明和5	1768	10	17	天	了惺童子	賀一弟」	長谷川等潤男
55	明和8	1771	06	23		榮久妙壽信尼	淀屋妙壽/松譽貞心之妹也」北野御前道墓所西一番南ヨリ二軒目」	長谷川宗清妻の妹
56	明和8	1771	09	24	天	涼艶童女	賀一妹」	長谷川等潤女
57	天明元	1781	12	03	天	松室貞了信女	等潤妻俗名おなつ」(後)賀一後母」	長谷川等潤妻(後)
58	寛政4	1792	02	03		哲翁良賢禪定門	西七条酒屋甚七」等潤姉おりん賀」	長谷川宗清女の夫
59	寛政10	1798	08	18	天	浄心秋月禪定門	十代 賀一父」号前賀一也」俗名長谷川等潤」	長谷川宗清男(長谷川等潤)
60	寛政11	1799	05	09		婦一鐵外仙牛信士	丹州園部畑宅之丞/後賀一妻父」	長谷川等鶴妻の実父
61	寛政12	1800	07	15		西應浄念信士	西陳卒」廟處有北山今宮之鳥居前ヨリ八町北長善寺境内長谷川後賀一第」	長谷川等潤男

表7-1 仲家本長谷川家過去帳忌日一覽

62	寛政12	1800	10	18		觀月智本信女	丹州園部「長谷川後賀一妻之母」	長谷川等鶴妻の母
63	享和3	1803	07	22		釋尼妙光	貞了母「行年九十一死ス」	長谷川等潤妻（後）母
64	享和3	1803	09	12		阿者梨密應	廟所有洛西狐塚」	（不明）
65	文化元	1804	06	02	天	心寂璽因信士	行年廿□」等羈賀一第」	長谷川等潤男
66	文化元	1804	10	05		逸空精俊法尼	西七条酒屋甚七妻」等潤ノ姉」八十一才死去」 信行寺ニ分骨ヲ納メル（朱筆）」	長谷川宗清女
67	文化7	1810	12	12	天	寶岳淨林禪定門	号 前賀一」十一世」俗名長谷川等羈」	長谷川等潤男（長谷川等鶴）
68	文化10	1813	12	22		釋妙淨	等羈娘」加州公能師春藤万右衛門妻」	長谷川等鶴女
69	文政13	1830	07	12		涼照童女	十二代等叔實子等舟妹」	長谷川等叔女
70	天保6	1835	07	22		淨妙貞月信尼	等羈妻」	長谷川等鶴妻
71	天保8	1837	09	03		釋專教	等叔父」俗名 江畑宗次郎」越中東岩瀬」	長谷川等叔実父
72	天保12	1841	10	10		等叔齋惠覺信士	十二世」	江畑宗次郎男（長谷川等叔）
73	天保14	1843	08	12		蓮室清容信女	大坂」等羈二娘」	長谷川等鶴女
74	天保元or13 *5	?	12	08		徳性童女	等舟姉娘」	長谷川等叔女の女
75	天保	?	?	02		釋聲空	京師住」加州 春藤万右衛門」	長谷川等鶴女の夫
76	嘉永6	1853	07	22		忍光童女	式才」等舟娘」	長谷川等舟女
77	安政2	1855	02	04		妙刹信女	名□□／等舟□□」	長谷川等舟女
78	安政2	1855	04	17		泰巖院殿蓼泉寂室尊靈	武者小路正二位前権大納言藤原朝臣公隆卿」	（不明）
79	安政2	1855	07	08		幻泡童子	式才」等舟二子俗名増二郎」	長谷川等舟男
80	安政2	1855	11	05		露消孩兒	女」等舟子」	長谷川等舟女
81	安政3	1856	04	22		大阿闍梨榮順大和尚	泉州中深井野々宮香林寺」	（不明）
82	安政4	1857	12	07		永昌院天然泰道居士	二男 古山静齋」医師 古山齋宮男子」大阪今 橋式丁目真嶋隆舟へ入家弟」	（不明）
83	安政6	1859	07	06		蓮生院殿静心妙照大姉	武公隆卿乃姫母妙鈴院」	（不明）
84	安政7	1860	02	04		了幻童子	式才」等舟三男子加三郎」	長谷川等舟男
85	文久4	1864	06	03		涼玉童女	二才」等舟末之娘」	長谷川等舟女
86	明治4	1871	07	28	天	秋覺長栄信士	母 十三代目／行年五十四歳」長谷川賀一郎等 舟 /高野山／病死」	長谷川等叔男（長谷川等舟）
	明治4 *6	1871	07	29	天	秋覺長栄信士	長谷川賀一郎五十四才而以病死旦画工高野山僧 侶仍請住山數載中小田原ニ而亡死體同山奥院ニ 埋等白出世十三代目」	長谷川等叔男（長谷川等舟）
87	明治4	1871	08	28	天	宝山明栄信士	長谷川賀一郎伴／高野山ニ而以病死」長谷川十 四世／号等栄」	長谷川等舟男

表7-1 仲家本長谷川家過去帳忌日一覧

88	明治5	1872	08	05		釋了誓	等舟妻比佐父」西本願寺派」建仁寺上條上妙住寺」	長谷川等舟妻の実父
89	明治5	1872	08	05		釋良清		(不明)
90	明治6	1873		26	天	智幽孩兒	生長谷川■■■/天性寺■■■/女子■■■」	(不明)
91	明治8	1875	06	27		長谷川閑子	長谷川等舟姉六十才死」陸前国宮城縣下仙臺川内亀ヶ岡堀省治宅ニ於命終」伊達家墓所經姫君同所/祥麟山ト云也」	長谷川等叔女
92	明治9	1876	03	10		釋貞敏	村上碩水娘」実父長谷川賀一郎等舟ノ娘」東大谷葬」	長谷川等舟女 (村上硯水養女)
93	明治16	1883	11	13		法覺唱空善女	長谷川賀一郎等舟妻」俗名 ヒサ」五十七年」	長谷川等舟妻
94	明治18	1885	11	13		瑞巖碩水信士	長谷川等舟姉こう夫/俗名 碩水」八十一年」	長谷川等叔女の夫 (村上硯水)
95	明治26	1893	07	25		良譽春月禪定尼	村上賀市良」母事」	長谷川等叔女?
96	?	?	07	15	本	等林	長谷川能州七尾本延寺檀那」	(不明)
97	?	?	?	14	本	長悦	長谷川」	(不明)
98	?	?	?	25	信	一翁淨圓	繪屋庄兵衛父」	繪屋庄兵衛父
99	?	?	?	20	天	信月恵明禪尼	賀一郎實母也」八十二而死ス」	長谷川等叔妻
100	?	?	02	06		順霞童子		(不明)
101	?	?	08	06		俗名おつね		(不明)
102	?	?	08	06		俗名常吉	一宗」	(不明)
103	?	?	11	02	(信)	□□蓮	長谷川□□□□子」	(不明)

- *1 寅を丑としているのであるいは貞享2年か
- *2 寅を卯としているのであるいは元禄12年か
- *3 この部分全て欠失。忌日より長谷川宗清の記事があるべき部分なので仲家本系譜により補う。
- *4 没年欠失。仲家本系譜により補う。
- *5 「天保 寅」と記される。天保元年の可能性があるが、併記しておく。
- *6 仲家本系譜では28日を忌日とするが、過去帳では28日と29日の両日に記事がある。

長谷川家本系譜における等後（宗宅）の直後である記述位置についても合理性が理解されるし、このように解釈することで妙入を宗宅の妻であると解釈することが可能となる。宗宅の年齢から考えてその妻の存在は当然考慮されるべきであるから、長谷川家の親族の欠けた部分がこれで自然な形で補われることになる。従って妙入が仲家本過去帳において「長谷川絹加兵衛」の母として記されることにも違和感がない。本過去帳では当主の妻を嫡男の母として記述する例が複数見られ、逸伝の絹加兵衛も宗宅の嫡男となるためである。しかし、絹加兵衛が過去帳に見えないところから、長谷川家を離れざるを得ない理由が生じたことは考慮しなければならない。あるいは、長谷川家本系譜の長吉（14歳で夭折）、仲家本過去帳に見る長悦（表7-1-976）がこの人物に当たる可能性があるが推測の域を出ない。宗宅の末裔については系譜、過去帳ともに確たる記録がないため、こうした推定から生じる矛盾は見当たらない。

基本的に弟子の名は過去帳に記述されない。等秀の名が見えるのは等伯娘である妙円との婚姻によるものであり、等岳が記されるのは等伯孫の義父となることで、縁戚関係が生じたためである。宗伯の名も娘の婚姻により宗宅の義父となったことから記述されたと見るのが合理的である。宗宅在世中に宗伯が亡くなっているため、宗宅が配慮したと考えることができる。

ただ、この宗伯が等伯の弟子であったかは不明である。仲家本過去帳において宗伯は、「宗伯 長谷川」とのみ記載される。本過去帳において、名のあとに記載されるのは基本的に直接関係する人物との続柄であり、宗伯同様「長谷川」の苗字のみ記載される例は限られている。それは、本法寺を墓所とする等後（宗宅）（表7-1-5）、等憶（表7-1-24）、等岳（表7-1-7）、等林（表7-1-96）、長悦の五名であり、長悦については逸伝であるが、宗也系以外の長谷川家関係者に対し使用している点が共通する。旧過去帳の焼失後、謄写の際に本法寺教行院過去帳の形式になったものと考えられ、ここに用いられる長谷川の名はその人物が長谷川家の縁者であることを示す注記にすぎない可能性がある。宗伯が長谷川を称したかは定かではない。

宗伯の名で知られている長谷川派の画家としては、等憶の養子となった長谷川宗伯信近（1637-1687）がいる¹⁹。等憶が養子縁組をしたのか、等憶の娘妙敬（表7-1-13）の婿養子を取ったのかは不明である。長谷川家本系譜によれば、宗伯信近の父も宗伯と称したという。宗伯信近の生年から考えると本法寺に葬られた宗伯はすでに亡くなっており。宗伯信近の父である宗伯は、二人の宗伯の間にはさまれて長谷川家本系譜に記された「宗伯

等游 雪齋」と考えられる。本法寺の宗伯と宗伯等游が親子であることを示す資料はないが、この名がその後も世襲されているところから、親子間で継承されたと考えるのが合理的である。その雅号から宗伯等游を長谷川家の弟子と考えることに問題はないが、その父である先の宗伯についてはやはり、長谷川派の絵師とする根拠を確認し難い。

妙入は、宗宅、等秀、等岳が亡くなった後も存命し、宗宅の没後長い期間長谷川家を取り仕切った可能性がある。宗伯信近の後にも、二人ほど宗伯という名の人物がおり²⁰、等憶以後の系譜において、この名を意識的に襲名していることが確認されるためである。妙入の父宗伯の名は江戸の長谷川家において特別な意味を持っていた可能性があり、妙入の長谷川家における影響力の存在を考えざるをえない。等伯の娘妙円（表 7-1-9）のほうが妙入より没年は遅れるが、あくまで弟子等秀の妻として家を出ているので、長谷川家に対する影響力は限定的であったと見るべきだろう。

このように、近世の長谷川家を考察する場合、これら系譜は同時代資料として十分な資料性を備えていることがわかる。確かに歴史の流れの中で予期せぬ災害に遭遇することはあったし、そのため転写を重ねざるをえなかったことは、やむをえず資料の価値を減じることになった。しかし、それらの評価を差し引いても、系譜類の内容を通覧してみれば、相互に補完させることによって、かなり客観的な情報を得られることが理解されるのである。近世京都の長谷川家累代の活動を概観するにあたり、これら系譜や過去帳に基づいて考察を行うことは極めて有効と考える。

かつての等伯研究においてこの系譜類に対する資料評価が限定的であるのは、ある意味で当然のことといえる。等伯以前の記事については、思い入れや伝聞が錯綜し、信憑性において疑わしき部分が確かに存在しているためである。しかし、近世の視点からこれらの記事を見れば、自家を画系として存続させるために末裔たちが模索した苦心の様子をうかがわせる資料として別の価値が生まれるのである。これら系譜の資料性は、今少し高く評価されてよい。

第3節 宗也以後京都長谷川家譜

(1) 略系図

京都の長谷川家である宗也以後の長谷川家累代について、上記系譜と仲家本過去帳の記載に基づいて個々の事跡を確認したい。等伯の子宗也以後幕末に至るまでの絵師の系譜は

はほとんどが絵屋を称する人物に関わるものとなっている。絵屋は家業を現す屋号と見られるが、これがそのまま長谷川家の屋号となっているのかは不明である。この間、過去帳において長谷川と記されているのは、先に述べた本法寺を檀那寺とする者以外では、宗也と宇右衛門の妻（表 7-1-36）のみである。この宇右衛門は宗雪（等作）の名であるが、過去帳の中では絵屋宇右衛門と記す例（表 7-1-22・35・38）が見られるので、実際に長谷川家の者が絵屋と称したことは確認できる。

絵屋として庄兵衛、清兵衛、吉兵衛、一郎右衛門、吉右衛門、権左右衛門の名が見えるが、この中で本人の忌日が記されているのは寛文12年（1672）に亡くなった清兵衛のみである（表 7-1-20）。従って絵屋の人々については情報の欠落が多く、過去帳への記載には何等かの事情を想定せざるを得ないが、それを物語る資料は確認できない。ただ、過去帳には原則的に弟子は記載されないため、絵屋と長谷川家の間には何らかの縁戚関係があったと考えなければならない。あるいは宗也の妻がこの絵屋出身の娘であったかもしれない。もともと絵屋としての活動を行っていた長谷川家にとっても、同業者との結びつきは益するところがあったと思われる。檀那寺を本法寺から信行寺に改めた背景に、この絵屋との関わりが深く影響したことは想像に難くない。

寛文7年（1667）8月6日死去。行年78歳。寺町丸太町にあった浄土宗信行寺に葬られた。『本朝画史』には等悦と長谷川宗也の記事がある²²。貞享4年（1687）7月27日に亡くなった妻があり、同じく信行寺に葬られた（表 7-1-27）。子が三人いたことが確認され、長男は等誉といい26才で出家し、堺にある浄土宗の安養寺（廃寺）に入ったという。等誉の名は『本朝画史』に見え、絵を描いたことが分かるが、長谷川派として認識されていない²³。等伯の弟子に等誉という者がいたため記事に混乱があるかもしれない。長男の出家により、二男宗雪が家督を継いだ。また、仲家本過去帳に「宇右画門妹」とあるのは、宗雪の妹の意味と考えられるので、宗也の娘であろう（表 7-1-21）。

宗也は絵屋として比較的活発に活動していたことが知られ、作例として祇園八坂神社《大黒布袋角力図絵馬》、相国寺《竜虎図屏風》、清水寺《虎図絵馬》、《柳橋水車図屏風》、《葛に昆虫図屏風》などがあげられており²⁴比較的作例の遺る絵師である。その作風は穏健にして装飾的であり、全体として世俗画を対象とする絵屋としての性格を強く表している。

（3）宗雪 元和8年（1622）—元禄5年（1692） （表 7-1-29）

宗也の次男。等作ともいう。仲家本系譜では七代とする。字は信清。旧記本系譜に宇右

衛門と称したとある。京極錦小路上ルに居住した（図 7-1）。仲家本過去帳には法橋と書かれているが、これを裏付ける資料はない。元禄 5 年（1692）5 月 18 日死去。行年 71 歳。法名は浄安宗淳居士。信行寺に葬られた。妻は元禄 15 年（1702）10 月 8 日に亡くなった「宇右エ門母」（表 7-1-33）、あるいは享保 3 年（1718）9 月 16 日に亡くなった「長谷川宇右エ門妻」（表 7-1-36）であろう。どちらかに誤記脱字があるようである。嫡男宗清の他、幼くして亡くなった娘（表 7-1-22）がいたらしい。ちなみに長谷川家出身のおりんという女性が酒屋順一の妻となったことが仲家本過去帳に記されており（表 7-1-49）、宗清の娘と同名なので、あるいは宗雪の娘であるかもしれない。

宗也以後の長谷川家の展開を考えれば、仲家本過去帳を見てもわかるとおり、等伯の子宗也はその周辺に絵屋を称する人物をあまた擁しており、違例にみるとおり、世俗画の世界で業績をあげていた。こうした業態はこの宗雪の時代まで続いたと思われ、宗也の没後も絵屋との関係は続いていたと考えられる。しかし、仲家本系譜の原本がこの宗雪によって作成され、権威化が図られたことをみても、彼が家業の安定に危機感を持ちはじめたことが推測される。系譜における雪舟からの画系を後裔が意識するのはこの時代からではないかと考える。

（4）宗清 寛文 9 年（1669）－元文 2 年（1737）（表 7-1-39）

宗雪の長男。仲家本では八代とする。また等霖といい、宅昌齋と号したという。旧記本系譜に父と同じく宇右衛門と称したとある。享保 13 年（1728）祇園社に鍾馗図額を奉納している²⁵。元文 2 年（1737）11 月 6 日に死去。行年 69 歳。法名は畫誉宗寂信士。信行寺に葬られた。妻は宝暦 4 年（1754）9 月 15 日に没するまで、家内を取り仕切ったものと考えられる（表 7-1-45）。仲家本過去帳から息子三人、娘二人の存在が確認されるが、息子二人と娘一人は宗清在世中に亡くなった。残る息子は幼い時に川端家に養子に出され後に長谷川家に戻った等潤、女子は京都西七条の酒屋甚七に嫁いでいる（表 7-1-58・66）。

宗清の代になると次第に絵屋との関係も薄れてきたらしく、宗雪没後にあたる元禄 13 年（1700）の絵屋権左衛門孫（表 7-1-32）の忌日を最後に過去帳から長谷川家以外の絵屋を称する人名は見られなくなる。宗清が一人残る息子を養子に出し、娘の養子縁組を計っていないことは、家業の継続を諦観していた可能性があるだろう。この宗清の動きは、絵屋としての長谷川家が時代の変化に対応しきれなくなっていた可能性をうかがわせるものである。ただ、結果として宗清の没後、その弟子や遺族は家業の継続を希望し、等潤の

項で述べるとおり、息子の養家である川端家の事情も幸いして、長谷川家は存続したのである。このとき画業に生まれた断層が、長谷川家に絵仏師へ転身する契機を与えたと考えられる。

宗清の門人に青地香霖（貞享4年（1687）－寛保2年（1742））がいる（表7-1-42）。仲家本系譜では九代とする。旧記本系譜では姓を青池としており、風儀齋と号したという。仲家本系譜には、宗清が亡くなった時、等潤はまだ幼いため、香霖が九代を継いだとしている。仲家本過去帳にも香霖を九代としながらも等潤後見人と記している。宗清が没した元文2年（1737）から没年まで、香霖が九代を称したと考えて問題ない。寛保2年（1742）死去。行年56歳。墓所は不明である。

（5）等潤 享保10年（1725）－寛政10年（1798） （表7-1-59）

宗清の子。等淑ともいい、仲家本系譜では十代とする。幼名三十郎。自足庵または雪篁齋と号したという。仲家本系譜によれば等潤は幼い時に川端氏の養子となったが、等潤9歳のとき養父が亡くなり、養母とともに長谷川家に戻ったとされている。仲家本過去帳の序によりこの川端氏は川端八兵衛と名乗ったことがわかるので、同過去帳に見える糶屋八兵衛（表7-1-41）がその人であるとわかる。しかし過去帳の序によれば9歳から養父母への孝養を尽くしながら画を学びはじめ、その後養父母とともに長谷川家に戻ったとしている。どこかで記録の読み違いがあったと思われるので、これを検証しておきたい。まず実際に養父がなくなったのは、過去帳より元文6年（1741）等潤17歳のことである。元文2年（1737）等潤13歳の年に実父宗清が亡くなるよりかなり後の事のことであり、養父の死後長谷川家に戻ったと考えるより、過去帳に見るとおり養父母ともに長谷川家に戻ったとする伝に従うほうが合理的で、矛盾がない。その時期はやはり宗清が没した年と見るのが理解しやすい。養父は長谷川家で亡くなったことになる。

門人青地香霖が宗清の跡目を継ぐことになった理由は、記述のとおり画を学びはじめて五年にしかならない等潤では、たとえ跡目を継いだところで家業が立ちゆかない現実があったのだろう。仲家本過去帳には香霖を九代としながらも等潤後見人と記している。こうした大胆な差配を行ったのは、宗清の妻の役割を考えるべきであろう。それだけ、事態は切迫していたのである。養家の屋号である糶屋は、もちろん酒や味噌の製造に用いる糶を扱う商家と考えられる。宗清の姉が酒屋甚七のもとに嫁いでいることと関係があるかもしれない。

等潤は川端家にいながら9歳から絵を学び始めた。宗清在世中は宗清に学んだ可能性はあるが、やはり教授の中心となったのは香霖であったろう。養父に特別の理解があったことが、等潤の長谷川家復籍に結びついたものと思われる。寛保2年(1742)に師の香霖が亡くなり、家督を継ぐことになったものの、画業10年では、学び足りない点があった。香霖の死は恐らく突然なものであったと考えられる。ただ、たまたま宗清に画法を学んでいた中川周保という画家がいたため、これに学んで家業を継承することができたと伝える。

中川周保は逸伝の画家だが宝暦11年(1761)9月16日まで生きていたので、等潤は20年近く周保の教えを受けることができた。周保が門人ながら長谷川家の過去帳に記されたことを見ても、その貢献は大きなものがあったのであろう(表7-1-47)。誓願寺辻子の浄土宗光明寺に葬られたというので、宗旨つながりがあったらしい。この周保は狩野派と長谷川派双方に学んだとされるが、能満院粉本中にみる《毘沙門天曼荼羅図》(長-13・14・15)(図7-2)の原本は周保在世中の寛延3年(1750)に長谷川家の絵師によって描かれていることを考えれば、長谷川家が絵仏師として展開する際、周保が重要な役割をなした可能性がある。

この《毘沙門天曼荼羅図》原本を描いた長谷川喜右衛門の名は、系譜、過去帳には見いだせないが、宗清、香霖が既に亡くなっている寛延3年の時期に長谷川家で該当するのは等潤しかいない。養子縁組や復籍など複雑な境遇にあったため等潤の名が全て伝えられているか不明であることに加え、等鶴がこの図を模写する動機を考えて見れば、喜右衛門をその父長谷川等潤の名と見るのが合理的である。《毘沙門天曼荼羅図》が落成する寛延3年に、等潤は26歳になっており、長谷川家を継いで8年が経つ。この考えに立てば同粉本の墨書から喜右衛門すなわち等潤は当時京極通五条上ルに住んでいたことになる(図7-1)。等潤は晩年の天明8年(1788)に火災で焼け出され、旧記本系譜の等鶴の記事から考えて綾小路東洞院西入ルに移ったと見られる。寛政10年(1798)8月18日死去。行年74歳。法名を浄心秋月禪定門といた。

妻は二人おり、等鶴の母となるのはりくという若狭国新道村の長右衛門の娘である。宝暦12年(1762)11月22日に亡くなった(表7-1-50)。そして息子等鶴がまだ小さかったのが理由であろう、等潤はおなつという後妻を娶っている。こちらは天明元年(1781)12月3日に亡くなった(表7-1-57)。過去帳には縁者として享和3年(1803)になくなったおなつの母妙光の名が見える(表7-1-63)。等潤には少なくとも息子が六人と娘が一人いたことが過去帳からわかるが、息子三人(表7-1-49・53・54)と娘一人(表7-1-56)は

幼くしてなくなっており、等鶴の弟にしても一人は二十代でなくなっている（表 7-1-61・65）。

仲家本過去帳によれば、長谷川家の檀那寺は浄土宗の信行寺であったが、このころ宗論があつて、等潤は明和年間に養父母川端氏の檀那寺であった浄土宗天性寺に改めたという。これは、仲家本過去帳の記録から、糺屋の人物以外の名に天性寺墓所の注記を記録するのがこの頃にはじまるため、信憑性がある。そのため等潤は父宗清の墓所と異なる天性寺榮源院に葬られることになった。ただ、仲家本過去帳の序によると榮源院は天明大火後廃寺となっているので以後は天性寺を檀那寺としたのであろう。また川端家には娘がいたが、等潤が生まれる前に亡くなっていることが仲家本過去帳に記されている（表 7-1-37）。

（6）等鶴 宝暦 7 年（1757）－文化 7 年（1810）（表 7-1-67）

等潤の子。等廓また等郭とも書いたらしい。仲家本系譜では十一代とする。字は信房。俗名を賀一といった。能満院に所蔵される長谷川本の中にある《長谷川等観像》（表 7-2-180）は、自画自賛として道歌が詠まれており、款記に「等伯七代孫」と記されている。これは等伯から七代目の子孫の意に解され、その下に等郭の印が写されているので、等郭すなわち等鶴の自画像と考えられる。したがって等鶴は等観とも称したことになる。父等潤は信仰に篤かったとされるが、道歌を詠む等鶴の姿は、仏画を得意とし高野山の画事に与つたという仲家本系譜の記事を首肯させるものといえる。

天明 8 年（1788）の火災で焼け出され、父等潤とともに綾小路東洞院西入ルに移つた（図 7-1）。能満院の長谷川本の中には等鶴本の模本が相当数残されており、大火以後、画作の中心が等鶴に移つたことが推測される。文化 7 年（1810）12 月 12 日死去。行年 54 歳。天性寺に葬られた。妻は丹波国園部の畑宅之丞の娘で、天保 6 年（1835）7 月 22 日に亡くなつた（表 7-1-60・62・70）。娘が二人あつて、長女は京都で加賀藩公に仕えた能の脇師春藤万右衛門の妻となり（表 7-1-68・75）、次女は大坂に移つた（表 7-1-73）とされる。仲家本過去帳には大坂の真嶋隆舟の養子となつた古山静齋の名が見え、大坂に関わる人物なので、あるいはこれがその父である医師古山齋宮と等鶴娘との間に生まれた子であつたかもしれない（表 7-1-82）。

（7）等叔 天明 4 年（1784）－天保 12 年（1841）（表 7-1-72）

等鶴の養子。仲家本系譜では十二代とする。字は信春。賀一郎と称す。父は江畑宗次郎

といい、越中国東岩瀬（現富山県富山市）に生まれた。若年から絵を好み、京都に出て石田友汀（1756－1815）に学ぶという。28歳のとき長谷川家の養子に入る。天保12年（1841）10月10日死去。行年58歳。天性寺に葬られた。妻は82歳まで生きたが没年は不明である（表7-1-99）。等叔妻が等鶴の娘であるか否か記録がなく判断できないため、等叔が婿養子であったか養子縁組であったかは確認できない。子は息子一人と娘三人が確認される。息子は嫡男等舟であり、末娘は幼少期に亡くなっている（表7-1-69）。残る二人の娘は等舟の姉にあたり、一人はこうといい村上硯水という人物のもとに嫁いでいる。等叔の名賀一郎を継いだ村上姓の人物の母として記されるのがこの女性と考えられるので、その没年は明治26年（1893）7月25日である（表7-1-94・95）。今一人は長谷川閑子といい、奥州仙台の伊達家において近衛氏徳子（1850-1871）の老女をつとめた（表7-1-91）。徳子は伊達慶邦（1825-1874）の養女で、伊達宗敦（1852-1911）の正室として仙台市の大年寺伊達家墓所²⁶に墓があり、明治8年（1875）年6月27日に仙台で亡くなった閑子の墓も同所にある。墓石の銘によれば、享年53歳となっており、過去帳の60歳と異なるが、53歳では等舟の妹となってしまうので、仙台では年齢を誤って伝えていたことがわかる²⁷。

等叔は父祖父同様仏画を描き、長谷川等叔筆とされる《太元帥明王像》が高野山宝寿院に遺る²⁸ところを見れば、高野山の画事は等叔の代も継続していたと思われる。長谷寺版両部曼荼羅の下絵はこの等叔が描いている。また、等叔の作としては滋賀県栗東市新善光寺の《善光寺如来縁起》6幅の存在も知られている²⁹。長谷寺版両部曼荼羅の版木の箱に当時の住所が書かれており、このころ長谷川家が烏丸仏光寺に移っていることがわかる（図7-1）。また、郷里に近い富山県八尾町下新町の八幡社には等叔が文政5年（1822）に描いた《絵馬》³⁰がある。等叔は石田友汀（1756－1815）に師事したと伝えられており、世俗画を描く画力もあったと考えられる。ちなみに石田幽汀（1721－1786）の次男である友汀は名を叔明といった。等叔の叔は友汀の名をとった可能性がある。

等叔の在世期に長谷川家の制作に関わる数馬という人物（表7-2-40）については、長谷寺版両部曼荼羅の下絵にも助力しているが³¹、過去帳にはこれに該当する人物が見当たらないため、弟子と考えるべきであろう。

（8）等舟　　文政元年（1818）－明治4年（1871）　（表7-1-86）

等叔の子。仲家本系譜では十三代とする。通称賀一郎。ただし、天保4年（1833）長谷川理吉郎書写とされる《普賢菩薩像》（長-105）の存在は、等舟の初名が理吉郎である可能

性を示している。このとき父等叔すなわち賀一郎が存命であるところから、親子が共に賀一郎を名乗っていたとは考えにくく、等舟は等叔没後に賀一郎と称したと考えるほうが理解しやすい。息子等栄が力吉郎と称したことも考え合わせると、この逸伝の名理吉郎は等舟の初名と考えておきたい。

仲家本系譜には、等舟が高野山金堂脇壇に掛ける弘法大師像と四社明神像を描いたと伝える。この作品は昭和元年（1926）の金堂火災により焼失しているが、両幅は現在も新たに描かれたものが掛けられているとおり、金堂を荘厳する代表的な画幅として描き継がれるものであり、その制作に与っていたことは長谷川家に対する高野山内の信頼が確立していたことをうかがわせる。万延元年（1860）に落成した金堂の堂内彩色は長谷川家が担当したことが記され、このときの粉本は現在も仲家に遺されている。また仲家本系譜には龍光院の瑜祇塔の彩色についても、長谷川家はその彩色下図を所持する旨記しており、能満院の粉本のなかに高野山龍光院瑜祇塔の装飾図が混じるのは長谷川家経由と見るべきであろう。病を得て、明治4年（1871）7月28日高野山小田原報恩院で死去。仲家本系譜には高野山奥院の報恩院墓地に葬られたとあるが、過去帳には天性寺の文字が記されているので、後に移された可能性がある³²。行年54歳。法名は秋岳長栄信士。妻はひさといひ明治16年（1883）11月13日に57歳で亡くなっている（表7-1-93）。

仲家本過去帳から息子五人と娘六人が確認できる。二男三男（表7-1-79・84）は早世しており、長男等栄と四男等宗が画名を継いだが、五男与三郎は村上家を継いだという。この村上家は等叔の娘が嫁した家であろう。娘六人のうち三人（表7-1-76・80・85）は早世し、長女も短命であった（表7-1-77）。娘一人は村上硯水の養女となったが、明治9年（1876）に亡くなっている（表7-1-92）。等栄の妹で等宗の姉にあたる禮は明治を生きている。

ちなみに、等舟は金堂落成後も高野山での制作を続けており、金剛峯寺には、文久3年（1863）の《愛染明王十七尊曼荼羅図》及び明治2年（1869）の《仁王經大曼荼羅図》が残されている³³。

（9）等栄 嘉永2年（1849）－明治4年（1871）（表7-1-87）

等舟の長男。仲家本系譜では十四代とする。通称力吉郎。父等舟とともに高野山に登り、報恩院に寄寓して父の仕事を助けた。父同様、病を得て明治4年（1871）8月28日高野山小田原報恩院で死去。仲家本系譜には高野山奥院の報恩院墓地に葬られたとあるが、過去

帳には天性寺の文字が記されているので、後に移された可能性がある。行年 23 歳。妻子については不明である。法名は宝山明栄信士。

(10) 等宗 文久 2 年 (1862) - 明治 42 年 (1909)

等舟の四男すなわち等栄の弟。等栄が夭折し跡継ぎがなかったため弟が画業を継いだ。仲家本系譜では十四代とする。過去帳は明治 26 年 (1893) の記述が最後となるため、等宗の名は見えない。本名富次郎。明治初期に京都で田村宗立に洋画を学び、やがて東京に移るも技師として鋳山業に関わり、栃木県の足尾銅山、福島県の軽井沢銀山と居を転じた。晩年は名古屋に移り、輸出陶磁器の絵付けを行うため森村組に勤めたという。これは、森村組がアメリカへの日用食器を拡大するため、明治 29 年 (1896) 頃から名古屋に全国の画工場を集約するようになった動きの中で、富次郎もその一角に加わったということであろう。ただし、当時いくつかの画工場があったなかで、どの工場に属していたかは不明である³⁴。明治 42 年 (1909) 2 月 17 日京都の村上家で亡くなる。行年 48 歳。法名は喜法歆順禪定門。後に等宗の長女ナツは等舟弟子仲又七の長男市太郎と結婚し、長谷川家の画系が仲家に継承される³⁵。

第 4 節 憲海と長谷川家

憲海と長谷川家との出会いは長谷寺修学時代にはじまる。現存する最古の長谷川家関係資料は、文政 9 年 (1826) に撰津楠葉の久修恩院で写した長谷川等鶴による金剛界曼荼羅の荘嚴関係粉本 (長-001-012) である。これは長谷川家が両部曼荼羅の制作に手を染めていたことを示す資料として貴重である。

文政 12 年 (1829) に長谷寺で開版した《両部曼荼羅》の制作において、長谷川等叔が絵師として抜擢された要因として、憲海と長谷川家の手になる粉本との出会いがあったと考えるのは合理的である。憲海は長谷寺版の開版に協力しており、その上京都との往復が多く、情報を持っていたと考えられるためである。等叔との面識はこのときまでには生まれていなかったと見るべきであろう。

同年 5 月に憲海は長谷寺において《毘沙門天曼荼羅図》(長-13・14・15) (図 7-2) を写しているが、その原本は撰津国本山寺において寛延 3 年 (1750) 12 月に落成したものである。これは、松平資訓 (1700-1752) の寄付により長谷川喜右衛門が描いたものであったこ

表 7-2 長谷川家粉本目録

目録番号						注							
						*本目録は、《田村宗立旧蔵仏画粉本》2673点のうち長谷川家に関わる粉本183点を、制作年に従って一覧としたものである。各項目の凡例は下記のとおり。							
						(目録番号) 本論第7章において使用される番号 () 書で示される。							
						(制作年) 月/日に小文字の'u'が付される場合は閏月を示す。							
						(印影) 本論第1章「図1-1能満院粉本主要印影一覧」における印影番号。							
						(通番) 「別表1《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録」における目録番号。本論において半角[]書で示される。"版"とあるのは「別表2《田村宗立旧蔵仏画粉本》版本目録」における番号。							
目録番号	名称	制作者	材質技法	形態	員数	法量縦cm	法量横cm	制作年 (月/日)			印影	備考	通番
長-001	金剛界曼荼羅月輪花瓶文様帯等図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	28.2	79.2	文政9年	1826	07_/15		長谷川等鶴写本	1443
長-002	金剛界曼荼羅四方蓮華文図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	17.3	36.2	文政9年	1826	07_/15		長谷川等鶴写本	1446
長-003	金剛界曼荼羅縮図界線図	憲海	紙本白描	綴	1帖(4紙)	40.6	27.8	文政9年	1826	07_/15	5印	長谷川等鶴写本	1447
長-004	金剛界曼荼羅賢劫十六尊地文様図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	106.3	28.0	文政9年	1826	07_/15	5印	長谷川等鶴写本	1444
長-005	金剛界曼荼羅界線文様帯等図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	28.1	82.0	文政9年	1826	07_/15		長谷川等鶴写本	1440
長-006	金剛界曼荼羅四供養菩薩雲図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	28.0	40.6	文政9年	1826	07_/15	5印	長谷川等鶴写本	1445
長-007	金剛界曼荼羅外縁文様帯図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	27.9	69.3	文政9年	1826	07_/15	5印	長谷川等鶴写本	1442
長-008	金剛界曼荼羅外縁隅文様帯図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	40.5	38.2	文政9年	1826	07_/15	5印	長谷川等鶴写本	1441
長-009	金剛界曼荼羅界線文様図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	80.6	13.9	文政9年	1826	07_/15	5印	長谷川等鶴写本	1439
長-010	胎蔵界曼荼羅光背地文図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	14.0	24.3	文政9年	1826	07_/15	5印	長谷川等鶴写本	1451
長-011	牡丹唐草文図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	33.6	48.7	文政9年	1826	07_/15		長谷川等鶴写本	1488
長-012	金剛界曼荼羅蓮華草図等袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	30.2	20.1	文政9年	1826	07_/15		長谷川等鶴写本	1450
長-013	毘沙門天曼荼羅図(中)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	149.4	60.4	文政12年	1829	05_/21	6印	長谷川等鶴(賀一)・伊之助写本(寛政10:1798)於花山元慶寺)長谷川喜右衛門図(寛延3:1750)撰州北山本山寺へ松平資訓寄附	1170

長-014	毘沙門天曼荼羅図(右)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	158.3	60.1	文政12年	1829	05_/21	6印	長谷川等鶴(賀一)・伊之助写本(寛政10:1798)於花山元慶寺)長谷川喜右衛門図(寛延3:1750)撰州北山本山寺へ松平資訓寄附	1171
長-015	毘沙門天曼荼羅図(左)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	158.1	60.9	文政12年	1829	05_/21	6印	長谷川等鶴(賀一)・伊之助写本(寛政10:1798)於花山元慶寺)長谷川喜右衛門図(寛延3:1750)撰州北山本山寺へ松平資訓寄附	1172
長-016	阿弥陀二十五菩薩来迎図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	153.2	90.2	文政12年	1829	05_/28	6印	長谷川氏本	249
長-017	孔雀明王像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	164.2	125.0	文政12年	1829	06_/18		長谷川等鶴賀一写本(享和元:1801), 原本智積院方丈,	204
長-018	天蓋・宝冠・龍・飛龍図巻	憲海	紙本白描	まくり	1巻	27.9	864.5	天保2年	1831	10_/02		長谷川等鶴写本	1459
長-019	龍図	憲里	紙本墨画	まくり	1枚	39.0	83.5	弘化4年	1847	06_/23		長谷川等叔図(紀州南隆院御霊屋天井雛形)	1362
長-020	大威徳明王像	現光	紙本白描一部朱描	まくり	1枚	165.2	94.7	弘化4年	1847	06_/29		長谷川等叔(賀一郎)写本	699
長-021	蓮池図	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	38.9	106.3	弘化4年	1847	06_/30		長谷川等叔図?	1434
長-022	十二天図(右)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	148.5	60.3	弘化4年	1847	07_/02	7印	長谷川氏本	725
長-023	十二天図(左)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	133.0	59.5	弘化4年	1847	07_/02		長谷川氏本	726
長-024	訶利帝母像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	151.8	82.2	弘化4年	1847	07_/02		長谷川等鶴(等廓)写本(文化2:1819)	847
長-025	俱利伽羅剣図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	68.8	38.4	弘化4年	1847	07_/03		長谷川氏本	672
長-026	愛染明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	96.4	62.2	弘化4年	1847	07_/03	1印	長谷川氏本(天保7:1836)、備前連嶋宝嶋寺注文, 原本今里妙法寺什宝	675
長-027	五大明王像	現光	紙本白描朱彩	まくり	1枚	192.0	85.5	弘化4年	1847	07_/03		長谷川等叔(賀一郎)図, 加賀藩注文, 金沢宝集律寺取次	683
長-028	辨才天十五童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	112.0	44.5	弘化4年	1847	07_/04		長谷川等叔写本(天保10:1839), 原本比叡山菓樹院蔵本(裏書兆殿司筆南都興福寺什宝)	907
長-029	不動明王二童子像	憲里	紙本白描部分淡彩	まくり	1枚	134.0	88.8	弘化4年	1847	07_/05		長谷川氏本	636
長-030	五大明王像	現光	紙本白描	まくり	1枚	116.2	43.7	弘化4年	1847	07_/05		長谷川氏本	684
長-031	金剛童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	92.3	51.2	弘化4年	1847	07_/05		長谷川氏本	714
長-032	摩多利神像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	77.5	60.1	弘化4年	1847	07_/05		長谷川氏本	875
長-033	愛宕権現像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	90.8	38.6	弘化4年	1847	07_/30		長谷川氏本	947
長-034	九頭龍権現像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	137.5	53.5	弘化4年	1847	07_/30		長谷川氏本	1123
長-035	高野四社明神図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	112.0	78.2	弘化4年	1847	08_/01		長谷川氏本	1065
長-036	山王曼荼羅図	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	105.0	39.1	弘化4年	1847	08_/02		長谷川氏本	957
長-037	龍王像	憲里	紙本着彩	まくり	1枚	44.1	27.5	弘化4年	1847	08_/03		長谷川氏本	927
長-038	祇園神像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	85.6	45.0	弘化4年	1847	08_/03		長谷川氏本	1051
長-039	高野四社明神図	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	102.8	46.8	弘化4年	1847	08_/03	1印	長谷川等叔図	1066

長-040	内裏雛図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	46.5	62.2	弘化4年	1847	08_/03		長谷川氏本	2266
長-041	胎蔵界大日如来像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	72.6	63.1	弘化4年	1847	08_/09		長谷川等舟図(天保14:1843), 大和小泉庚申堂注文	6
長-042	光明真言字輪曼荼羅図	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	76.5	60.5	弘化4年	1847	08_/09		長谷川数馬(等鶴?)図(文化15:1818), 岡山県備陽玉泉寺注文	229
長-043	灑水観音像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	140.8	58.5	弘化4年	1847	08_/10		長谷川等叔図	394
長-044	役行者像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	93.7	60.0	弘化4年	1847	08_/10		長谷川氏本(長谷川等叔写本?)(天保8:1837), 原本泉州花林寺什物	1860
長-045	五髻文殊菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	65.2	43.6	弘化4年	1847	08_/11		長谷川氏本, 宝嶋寺注文	412
長-046	虚空蔵菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	152.5	132.7	弘化4年	1847	08_/11		長谷川等叔図, 叡山西塔金光院注文	559
長-047	五髻文殊菩薩像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	114.0	74.3	弘化4年	1847	08_/12		長谷川氏本(長谷川等叔図?)	413
長-048	普賢延命菩薩像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	60.8	26.8	弘化4年	1847	08_/12		長谷川氏本	468
長-049	虚空蔵菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	130.0	97.5	弘化4年	1847	08_/12		長谷川等鶴図	560
長-050	山越阿弥陀如来像	現光	紙本白描	まくり	1枚	114.0	99.8	弘化4年	1847	08_/15		長谷川氏本	121
長-051	阿弥陀三尊来迎図	現光	紙本白描	まくり	1枚	114.2	80.7	弘化4年	1847	08_/16		長谷川氏本	105
長-052	阿弥陀如来像	現光	紙本白描	まくり	1枚	186.0	84.2	弘化4年	1847	08_/20		長谷川氏本	80
長-053	阿弥陀如来像	現光	紙本白描	まくり	1枚	115.0	59.4	弘化4年	1847	08_/21		長谷川氏本	81
長-054	阿弥陀三尊来迎図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	110.7	75.2	弘化4年	1847	08_/21		長谷川氏本	106
長-055	釈迦如来文殊弥勒像(授戒本尊)	現光	紙本白描	まくり	1枚	70.8	38.7	弘化4年	1847	08_/22		長谷川氏本(文政11:1828)、大通寺内慈眼院海印用	44
長-056	勢至菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	113.0	38.7	弘化4年	1847	08_/23		長谷川氏本(宝暦4:1754), 原本二尊院	531
長-057	阿弥陀三尊来迎図	現光	紙本白描	まくり	1枚	87.2	43.1	弘化4年	1847	08_/24		長谷川氏本(享保11:1726), 原本延暦寺什物	107
長-058	釈迦如来文殊弥勒像(授戒本尊)	現光	紙本白描	まくり	1枚	73.1	38.9	弘化4年	1847	08_/26		長谷川氏本	45
長-059	地藏菩薩矜羯羅制吒迦像	現光	紙本白描	まくり	1枚	93.4	38.8	弘化4年	1847	08_/27		長谷川氏本(天保7:1836), 原本山門横川什物	517
長-060	地藏菩薩像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	106.0	37.8	弘化4年	1847	08_/28		長谷川氏本	479
長-061	地藏菩薩像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	37.7	27.6	弘化4年	1847	08_/28		長谷川氏本	480
長-062	地藏菩薩像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	89.4	38.9	弘化4年	1847	08_/29		長谷川等鶴(等廓)図, 海量院注文	481
長-063	釈迦十六善神図	現光	紙本白描	まくり	1枚	146.6	89.9	弘化4年	1847	09_/01		長谷川等叔図(天保8:1837), 大坂今里妙法寺注文, 依天下茶屋木像	131
長-064	地藏菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	148.1	98.8	弘化4年	1847	09_/02		長谷川氏本(天保7:1836), 河内願正院注文, 原本東寺什宝	482
長-065	地藏菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	112.8	54.7	弘化4年	1847	09_/04		長谷川氏本、原本伝張思恭筆	483
長-066	孔子十哲像	現光	紙本白描	まくり	1枚	127.0	72.5	弘化4年	1847	10_/02		長谷川氏本	1538
長-067	釈迦十六善神図	現光	紙本白描	まくり	1枚	147.0	93.0	弘化4年	1847	10_/16		長谷川氏本	132
長-068	釈迦十六善神図	現光	紙本白描	まくり	1枚	136.5	76.5	弘化4年	1847	10_/18		長谷川氏本	133

長-069	釈迦十六善神図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	135.0	90.5	弘化4年	1847	11_/03		長谷川氏本	134
長-070	鳥枢洩摩明王像	現光	紙本白描	まくり	1枚	112.0	53.2	弘化5年	1848	02_/00		長谷川等鶴図	707
長-071	善導像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	115.0	27.5	弘化5年	1848	02_/00	1印	長谷川氏本	2172
長-072	某僧像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.6	38.5	弘化5年	1848	02_/04	1印	長谷川等鶴図	1888
長-073	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	55.2	38.4	弘化5年	1848	02_/09	1印	長谷川氏本	2186
長-074	法然(円光大師源空)像	現光	紙本白描	まくり	1枚	140.0	79.3	弘化5年	1848	02_/09	1印	長谷川氏本(原本粟生光明寺什物)	2187
長-075	親鸞(見真大師)像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	60.5	48.5	弘化5年	1848	02_/09		長谷川氏本	2243
長-076	一遍上人智真像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.0	16.5	弘化5年	1848	02_/10	1印	長谷川氏本	2014
長-077	法然(円光大師源空)像	現光	紙本白描	まくり	1枚	112.2	92.3	弘化5年	1848	02_/10	1印	長谷川氏本	2188
長-078	善導法然対面図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.4	160.3	弘化5年	1848	02_/15	1印	長谷川氏本	2209
長-079	法然(円光大師源空)像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	56.2	46.1	弘化5年	1848	02_/15	1印	長谷川氏本	2189
長-080	法然(円光大師源空)像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	112.5	61.8	弘化5年	1848	02_/15	1印	長谷川氏本	2190
長-081	浄土真宗七高僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	106.2	37.9	弘化5年	1848	02_/15		長谷川氏本	2251
長-082	聖徳太子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	84.5	38.0	嘉永元年	1848	03_/16		長谷川氏本	1102
長-083	五大虚空蔵菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	109.4	90.3	嘉永元年	1848	04_/23		長谷川氏本	547
長-084	某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.1	56.5	嘉永元年	1848	05_/03	1印	長谷川氏本	1839
長-085	孔雀明王像	憲里	紙本木版	まくり	1枚	183.0	125.3	嘉永元年	1848	05_/04		長谷川等鶴(賀一)写本(享和元:1801), 原本智積院方丈	版-029
長-086	智積院僧正像	現光	紙本白描淡彩	まくり	1枚	68.0	44.1	嘉永元年	1848	05_/04	1印	長谷川等叔図、智積院智城取次	1816
長-087	某僧像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	77.5	61.8	嘉永元年	1848	05_/15	1印	長谷川氏本	1840
長-088	某僧像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	54.4	46.2	嘉永元年	1848	05_/15	1印	長谷川氏本	1841
長-089	遠磨像	現光	紙本白描	まくり	1枚	63.5	34.7	嘉永元年	1848	05_/17	1印	長谷川氏本	2049
長-090	梵天像	憲海・憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	96.7	37.8	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	730
長-091	日天像	憲海・憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	96.8	38.2	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	731
長-092	伊舎那天像	憲海・憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	96.2	37.8	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	732
長-093	帝釈天像	憲海・憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	97.2	37.8	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	733
長-094	火天像	憲海・憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	97.2	38.2	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	734
長-095	焰摩天像	憲海・憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	96.5	37.8	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 大和聖林寺注文, 原本大和箸尾大福寺宝具	735

長-096	地天像	憲海・憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	97.0	38.2	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本、大和聖林寺注文、原本大和箸尾大福寺宝具	736
長-097	月天像	憲海・憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	96.7	37.8	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本、大和聖林寺注文、原本大和箸尾大福寺宝具	737
長-098	毘沙門天像	憲海・憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	97.3	37.8	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本、大和聖林寺注文、原本大和箸尾大福寺宝具	738
長-099	風天像	憲海・憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	97.2	38.1	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本、大和聖林寺注文、原本大和箸尾大福寺宝具	739
長-100	水天像	憲海・憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	97.0	38.2	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本、大和聖林寺注文、原本大和箸尾大福寺宝具	740
長-101	羅刹天像	憲海・憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	96.5	38.0	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本、大和聖林寺注文、原本大和箸尾大福寺宝具	741
長-102	愛染曼荼羅図	憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	79.5	63.5	嘉永元年	1848	06_/29		長谷川氏本	1153
長-103	准胝観音像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	38.0	27.7	嘉永元年	1848	07_/23		長谷川氏本	362
長-104	准胝観音像	憲里	紙本白描一部著彩	まくり	1枚	92.8	56.5	嘉永元年	1848	09_/13		長谷川等鶴図(梅尾山所蔵)	363
長-105	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	78.3	41.3	嘉永2年	1849	01_/08	1印	長谷川等鶴図	1906
長-106	普賢菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	89.5	36.2	嘉永2年	1849	01_/10		長谷川理吉郎写本(天保4:1833)、天満宝珠院注文	455
長-107	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	55.7	34.2	嘉永2年	1849	01_/19	1印	長谷川等鶴図	2126
長-108	南山大師道宣像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	92.2	34.6	嘉永2年	1849	01_/21	1印	長谷川等鶴図	1935
長-109	嶺山像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	76.0	42.6	嘉永2年	1849	01_/26	1印	長谷川氏本	2097
長-110	不願像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.1	46.1	嘉永2年	1849	01_/29	1印	長谷川氏本、京都府京都市妙心寺智勝院(頼)	2090
長-111	月江院某僧像	現光	紙本白描	まくり	1枚	66.0	34.6	嘉永2年	1849	01_/30	1印	長谷川氏本	2079
長-112	某僧像(持弘子)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	85.8	56.8	嘉永2年	1849	02_/01	1印	長谷川氏本	2128
長-113	某僧像(持弘子)	現光	紙本白描	まくり	1枚	67.9	44.7	嘉永2年	1849	02_/02	1印	長谷川氏本	2129
長-114	某僧像(持竹篋)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.4	42.6	嘉永2年	1849	02_/02	1印	長谷川氏本	2107
長-115	某僧像(持弘子)	現光	紙本白描	まくり	1枚	66.3	44.1	嘉永2年	1849	02_/02	1印	長谷川氏本	2130
長-116	某僧像(持弘子)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	64.0	38.3	嘉永2年	1849	02_/02	1印	長谷川氏本	2131
長-117	是照院某僧像	現光	紙本白描	まくり	1枚	50.0	34.0	嘉永2年	1849	02_/04	1印	長谷川氏本	2087
長-118	日潮像	現光	紙本白描	まくり	1枚	57.4	34.5	嘉永2年	1849	02_/05	1印	長谷川氏本(元文3:1738)、身延山方丈	1885
長-119	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	64.0	34.5	嘉永2年	1849	02_/05	1印	長谷川等鶴図	1907
長-120	達源像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	101.7	52.8	嘉永2年	1849	02_/05	1印	長谷川氏本	2088
長-121	某僧像(持弘子)	現光	紙本白描	まくり	1枚	68.2	34.3	嘉永2年	1849	02_/05	1印	長谷川氏本	2132
長-122	光禅像	現光	紙本白描	まくり	1枚	80.5	52.8	嘉永2年	1849	02_/05	1印	長谷川氏本	2094
長-123	雪山像	現光	紙本白描	まくり	1枚	56.2	34.0	嘉永2年	1849	02_/06	1印	長谷川氏本(宝暦6:1756)、丹波園部徳雲寺黙笑(頼)	2080

長-124	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	65.5	34.2	嘉永2年	1849	02_/06	1印	長谷川氏本	2133
長-125	某僧像(持竹篋)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	51.4	34.4	嘉永2年	1849	02_/06	1印	長谷川氏本	2112
長-126	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描一部淡彩	まくり	1枚	68.2	42.2	嘉永2年	1849	02_/06	1印	長谷川氏本	2134
長-127	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	67.9	44.1	嘉永2年	1849	02_/07	1印	長谷川等鶴図	2135
長-128	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	57.5	34.2	嘉永2年	1849	02_/08	1印	長谷川氏本	2136
長-129	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	65.1	34.7	嘉永2年	1849	02_/08	1印	長谷川等鶴図	2137
長-130	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	67.7	53.4	嘉永2年	1849	02_/09	1印	長谷川氏本	1908
長-131	大並山某僧像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	68.0	45.3	嘉永2年	1849	02_/09	1印	長谷川氏本	2037
長-132	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	66.0	40.6	嘉永2年	1849	02_/09	1印	長谷川氏本	2138
長-133	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	53.1	34.6	嘉永2年	1849	02_/09	1印	長谷川等鶴図	2139
長-134	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	68.4	43.5	嘉永2年	1849	02_/09	1印	長谷川氏本	2140
長-135	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	48.6	34.3	嘉永2年	1849	02_/12	1印	長谷川等鶴図	1909
長-136	恵雲像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	44.8	34.4	嘉永2年	1849	02_/12	1印	長谷川氏本(延享元:1744), 肥前玉毫寺恵雲	2084
長-137	宝福寺某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	51.5	34.2	嘉永2年	1849	02_/12	1印	長谷川氏本(宝暦6:1756)	2082
長-138	隠之像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.5	44.0	嘉永2年	1849	02_/12	1印	長谷川氏本(元文4:1739), 下総東昌寺	2077
長-139	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	68.0	43.9	嘉永2年	1849	02_/12	1印	長谷川氏本	2141
長-140	某僧像(持竹篋)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	66.0	49.0	嘉永2年	1849	05_/29	1印	長谷川氏本	2108
長-141	如意輪観音像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	55.3	38.3	嘉永2年	1849	12_/02		長谷川より校合依頼	342
長-142	十三仏図	長谷川等鶴	紙本木版	まくり	1枚	102.7	41.6	嘉永2年	1849	12_/07		版下長谷川等鶴画, 版元中村善哉より天王寺屋へ	版-109
長-143	虚空蔵菩薩不動毘沙門像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	53.9	30.6	嘉永3年	1850	02_/08		依長谷川等鶴図, 智積院智忠注文, 鍵屋又平取次, 安房清澄寺	589
長-144	釈迦三尊像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	76.5	45.7	嘉永3年	1850	02_/20		長谷川等鶴図, 最上良典注文	29
長-145	薬師如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	93.0	62.7	嘉永3年	1850	04_/25		長谷川等鶴写本	57
長-146	薬師如来像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	93.0	60.0	嘉永3年	1850	05_/05		長谷川等鶴写本	58
長-147	大威徳明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	118.0	78.4	嘉永3年	1850	10_/27		長谷川氏本	700
長-148	十三仏図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	99.3	42.5	嘉永4年	1851	03_/20		依長谷川等鶴図校合	270
長-149	釈迦十六善神図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	107.5	128.5	嘉永4年	1851	07_/21		長谷川氏本	135
長-150	釈迦十六善神図	憲里	紙本墨画	まくり	1枚	144.0	77.8	嘉永4年	1851	07_/21		長谷川等鶴図	136
長-151	善名称吉祥王如来像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	28.0	20.6	嘉永4年	1851	07_/29		依長谷川等鶴図	62
長-152	釈迦十六善神図	憲里	紙本墨画	まくり	1枚	138.5	65.0	嘉永4年	1851	08_/21		長谷川等鶴図	137
長-153	須弥壇図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	28.2	48.7	嘉永4年	1851	08_/22		長谷川氏本	2368
長-154	釈迦十六善神図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	99.8	104.5	嘉永4年	1851	08_/27		長谷川氏本	138
長-155	十三仏図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	75.1	44.3	嘉永4年	1851	09_/10		依長谷川等鶴図校合, 越後浄麟法院注文	271
長-156	釈迦十六善神図	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	128.5	63.5	嘉永4年	1851	09_/21		長谷川氏本	139

長-157	十三仏図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	71.5	38.0	嘉永4年	1851	10_/23		依長谷川等鶴図校合, 那珂湊華藏院南 部屋宗大夫倅注文, 徳田村遍照院觀海 取次	272
長-158	聖觀音像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	67.6	36.2	嘉永4年	1851	10_/24		依長谷川等鶴図校合, 那珂湊華藏院南 部屋宗大夫倅注文, 徳田村遍照院觀海 取次	299
長-159	五髻文殊菩薩像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	133.8	74.7	嘉永4年	1851	11_/04		依長谷川等鶴図, 土佐普門寺妙行注文	418
長-160	大随求菩薩像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	104.2	52.5	嘉永5年	1852	02u/09		依長谷川等鶴図校写, 長浜神照寺常嘉 院注文	536
長-161	仏眼仏母像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	147.4	102.7	嘉永6年	1853	12_/00		長谷川等叔写本	24
長-162	熾盛光仏頂曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	77.7	56.0	嘉永7年	1854	08_/11		長谷川氏本	1133
長-163	千手觀音曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	92.3	79.6	嘉永7年	1854	08_/15		長谷川等鶴写本	1159
長-164	吉祥天曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	149.2	65.9	嘉永7年	1854	08_/15		長谷川氏本(古写校本)	1175
長-165	不動曼荼羅図	憲海	紙本白描	冊子	1帖(4紙)	27.5	38.3	安政5年	1858	10_/20	1印	長谷川氏本	1145
長-166	虚空蔵菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	151.5	132.5	江戸時代後期	19th century			長谷川等鶴図	571
長-167	不動明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	48.8	26.6	江戸時代後期	19th century			長谷川等鶴図	624
長-168	和合神図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	82.8	27.2	江戸時代後期	19th century			長谷川氏本	879
長-169	辨才天像	憲里	紙本白描彩色	まくり	1枚	90.1	38.3	江戸時代後期	19th century			長谷川等叔図(天保8:1837)、原本洛西 東寺什物	893
長-170	羅漢図	現光	紙本墨画	まくり	1枚	102.2	57.4	江戸時代後期	19th century			長谷川等舟写本	1563
長-171	弘法大師空海像	現光	紙本白描	まくり	1枚	38.0	27.5	江戸時代後期	19th century			長谷川より注文, 依長谷川等鶴図(面 貌部)	1635
長-172	道雄像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	56.0	43.7	江戸時代後期	19th century		1印	長谷川氏本, 原本摂州生玉地藏院什物	1687
長-173	某僧像(合掌)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	49.1	34.1	江戸時代後期	19th century		1印	長谷川氏本	1894
長-174	某僧像(定印)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.1	38.0	江戸時代後期	19th century		1印	長谷川氏本	1917
長-175	七高僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	46.5	27.7	江戸時代後期	19th century		1印	長谷川氏本	2220
長-176	浄土宗三祖像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	56.5	51.2	江戸時代後期	19th century		1印	長谷川氏本	2215
長-177	證空像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	54.1	38.5	江戸時代後期	19th century		1印	長谷川元東写本(原粉本宇津宮綱之写 本、原本京都市三鈿寺所什物)	2229
長-178	親鸞(見真大師)像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.6	51.6	江戸時代後期	19th century			長谷川氏本	2247
長-179	蓮如(慧燈大師)像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	41.5	37.0	江戸時代後期	19th century			長谷川氏本	2250
長-180	千利休像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	70.2	39.0	江戸時代後期	19th century		5印	長谷川等鶴画自賛	2275
長-181	長谷川等觀像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	76.8	103.8	江戸時代後期	19th century			長谷川等鶴(等觀等廓)画自賛	2276
長-182	龍図	憲里	紙本着彩	まくり	1枚	57.5	27.5	江戸時代後期	19th century			長谷川氏本(推定)	1367
長-183	獅子図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	27.8	45.5	江戸時代後期	19th century			長谷川氏本(推定)	1393

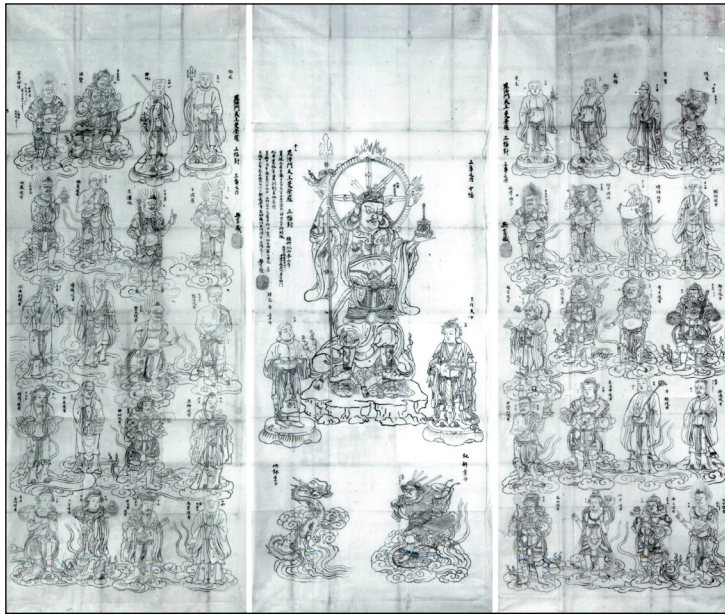


図 7-2 毘沙門天曼荼羅図

とが記され、憲海が長谷寺で写したのは、この原本を寛政10年（1798）6月に京都山科花山の元慶寺において長谷川賀一と伊之助が写した粉本であったという。在世から考えてこの賀一が等鶴であることは明らかである。では、伊之助は何者かといえば、仲家本過去帳に見える寛政12年（1800）に亡くなった等鶴の弟であろう（表7-1-61）。先に述べたとおりこの《毘沙門天曼荼羅図》原本を描いた長谷川喜右衛門は、等潤と考えられ、長谷川家累代の図像の継承を見ることができる。

文政12年6月に憲海は智積院の《孔雀明王像》（長-17）（図7-3）を写している。ただし智積院方丈が所有する原本から直接写すのではなく、享和元年（1801）8月に等鶴が写した模本からであった。書写場所は明らかにしていないが、特に記していないところから移動を伴わないものと考え、智積院内であったと考えてよいだろう。この等鶴本には彩色の記録がなかったと思われ、憲海が会津を離れ京都に入ってから後の嘉永元年（1848）に高山寺の僧護からその模本の提供を求められた際、憲海は、智積院中寮において原本と彩色を校合している。また、場所は不明ながら天保2年（1831）10月にも等鶴による《天蓋・宝冠・龍・飛龍図巻》（長-18）を写しているところから、長谷寺時代の憲海は、各所で長谷川家の粉本に接していたことがわかる。

長谷寺版開版以後、憲海は絵仏師である長谷川家を意識せざるを得なかったはずである。等鶴はすでに亡かったが、長谷川家当主の等叔とは知己となり、等鶴の粉本もすでにいく



図 7-3 孔雀明王像

つか写し取っていた。仲家本系譜にあるとおり、天明8年の大火は、長谷川家に系図すら焼失させる被害をもたらし、家蔵の粉本類もその火中に多くが失われたと考えられる。しかし、等鶴が行ったように機会があれば先代の図像を写すという行為は少なからず繰り返されたと考えられ、長谷川家の粉本も徐々に補われたはずである。長谷寺版開版の事業にあたって長谷川等叔を推した者が誰であったかは分からないが、憲海の見識が関与する部分があった可能性は高い。

憲海らが山王寺に入った頃の長谷川家といえば、等叔はすでに亡く、等宗は生まれたばかりで、等舟一人が弟子たちと仕事をする状態であった。高野山の画事に与った長谷川家にとっては、天保14年(1843)に焼失した金堂再建事業への参加が大きな課題となっていた時期である。等舟が高野山に赴くことも多かったはずで、いまだ行く先の落ち着かない憲海らが長谷川家に助力することがあったとしても不思議ではない。実際大成の写した《如意輪観音像》(長-141)には「依長谷川頼ニヨリ校合之」という墨書があり、長谷川家に協力した記録が残っている。また憲海らが長谷川家から注文を受けることもあった(長-171)。長谷川家に関わる粉本を「表7-2 長谷川家粉本目録」にまとめた。

能満院粉本中の長谷川家関係資料には元粉本の作者の名が記録されているものがあり、等鶴に関係するもの46点、等叔に関係するもの26点、等舟に関係するもの2点が数えられる。等潤の名が見られないのは大火の影響であろう。墨書の内容を見れば、憲海たちは長谷川本の収集を行う際、先代等叔以前の粉本をより重視していたと考えられる。多くは

長谷川家で写したもののだが、山王寺に借用した場合もあった。

一般に絵仏師たち職業画家は、効率的に制作を行うために、利用の便を考えて粉本を整理する。長谷川家においてもこれは行われていたと考えてよいだろう。図像を収集することにはさしたる苦勞のなかった憲海たちも、その普及のため組織的に工房を運営するとなれば、粉本の整理や分業体制などさまざまな課題を解決する必要があった。憲海がそれまで具体的に知ることができた画家の工房といえば会津の萩原盤山³⁶の工房くらいであったから、図像の普及を大願とした憲海たちにとって、組織力を備えた仏画工房から学ぶところは少なくなかったはずである。実際に能満院に入った憲海は受注を受けた仏画制作において長谷川等鶴の図像と校合している例（長-143・148・151・155・157・158・159・160）があり、長谷川家の経験と知識に対し信頼を置いていたことがわかる。憲海らが長谷川家において学びとったのは絵仏師工房に関する多くの情報である。その柱の一つは粉本の図像に関するものであり、いまひとつが仏画工房の運営に関するものであったと考える。

憲海と長谷川家の交わりは能満院移転後も継続したと思われるが、嘉永5年（1852）以後は、ほとんど交流のあとが見られない。この頃になると等舟らは高野山での仕事に集中するために烏丸の工房を不在にせざるを得なかったものと思われる。元治元年（1864）の兵火が長谷川家を巻き込んだにもかかわらず、仲家に現在も長谷川家の粉本が遺されているところを見ると、当時長谷川家の粉本も等舟により高野山に移されていたか、妻子らとともに他所に写されていた可能性がある。等舟が万延元年（1860）年の金堂落成後も高野山に留まり仏画制作に関わったことは、仲家本系譜の記述と、等舟による金剛峯寺所蔵仏画の存在により確認できる。

このように、憲海と長谷川家の関係を概観すると、憲海が図像の収集を行った文政年間には、長谷川家の粉本が畿内各所の寺院に収蔵される状況が生まれていたことが分かる。本山寺は天台系寺院であり、久修恩院は真言律系寺院、長谷寺は新義真言宗と、特定の宗派への偏りは見られない。長谷川家は宗也の代に浄土宗に改宗しており、特に宗旨つながりのない工房であったと考えてよい。

能満院粉本中の長谷川家本を見ると、いくつかの特徴をあげることができる。まず仏画の対象として、別尊曼荼羅のように儀軌に従った図像上の見識を必要とするものが含まれており、古画を参考にしてよく端整な制作を行っていること、如来から天部に至る仏教の諸尊のみならず垂迹神に至るまでを描いていること、諸宗幅広く高僧像の対象としていることがあげられる。高僧像が全体の四割ほどを占めているのは、絵画の需要がこの分野に

厚かったことを示すのであろう。長谷川等伯の初期の活動が、仏画と肖像画に特徴付けられることを見れば、奇しくも先祖帰りを見せている。等鶴が描いた《千利休像》(長-180)は先祖等伯と千利休の関係を確認する作例だが、等伯の描いた図を使って面貌を描いており、等伯以来の伝統に対する意識の表れをうかがわせる。肖像画については《日潮像》(長-118)のように元文3年(1738)の制作と思われる資料があり、宗清の時代から注文を受けていた可能性がある。あるいは仏画に先行して高僧像の制作が発生していたことが考えられる。

天明8年(1788)の火災が長谷川家にもたらした被害が相当大きなものであったことは、想像に難くない。憲海らが山王寺に寄寓した弘化4年(1847)以降に長谷川家粉本から写した粉本の墨書を見ると、天明8年を遡るものは少なく、また等潤以前の作者による粉本は確認できない。

憲海の修学当時、長谷寺で「豊山御絵所」を称したのは京都の森田家であった³⁷。《両部曼荼羅》開版に際し長谷川家が進出することになったのは、等潤、等鶴の世代に、絵仏師として長谷川家がかなり広範囲に事業を展開していた背景を考えるべきだろう。まず、粉本の墨書から、長谷川家への発注者または納品先を概観してみたい。

智積院(京都市東山区東瓦町)	《智積院僧正像》(長-086)
大通寺慈眼院(廃絶)(京都府京都市南区八条町)	《釈迦如来文殊弥勒像》(長-55)
宝福寺(京都市伏見区帯屋町)	《宝福寺某僧像》(長-137)
徳雲寺(京都府南丹市園部町)	《雪山像》(長-123)
比叡山西塔金光院(廃絶)(滋賀県大津市坂本)	《虚空蔵菩薩像》(長-46)
金輪院庚申堂(奈良県大和郡山市小泉)	《胎蔵界大日如来像》(長-41)
聖林寺(奈良県桜井市)	《毘沙門天像》(長-98)
本山寺(大阪府高槻市大字原)	《毘沙門天曼荼羅図》(長-13-15)
天満寺宝珠院(大阪市北区与力町)	《地藏菩薩矜羯羅制吒迦像》 (長-59)
	《普賢菩薩像》(長-106)
妙法寺(大阪市東成区大今里)	《釈迦十六善神図》(長-63)
月江院(廃絶)(大阪市浪速区元町)	《月江院某僧像》(長-111)
願正院(廃絶)(大阪府堺市北区金岡町)	《地藏菩薩像》(長-64)
地藏院(廃絶)(大阪市天王寺区生玉)	《道雄像》(長-172)

久遠寺（山梨県南巨摩郡身延町）	《日潮像》（長-118）
宝集寺（石川県金沢市寺町）	《五大明王像》（長-27）
宝嶋寺（岡山県倉敷市連島町）	《愛染明王》（長-26）
	《五髻文殊菩薩像-45）
玉泉寺（岡山県真庭市鉄山）	《光明真言字輪曼荼羅図》（長-42）
玉毫寺（佐賀県小城市三日月町）	《恵雲像》（長-136）

こうした記録が残されているものは、全体からすれば一部に過ぎないが、ある種の傾向を見ることはできる。当然のことながら地元である京都からの注文が多い。古義真言、新義真言、天台、曹洞禅と諸宗派からの依頼を受けていることがわかる。さらに近江、大和、摂津、河内、和泉、丹波と京都の周辺のかなり広い範囲からの注文を受けており、絵仏師としての評価が確立していたことがうかがえる。加えて加賀、備陽、肥前方面からの注文があるのは、取次ぎを介した制作を受けていたことを示しており、受注体制が整備されていたものと思われる。また、日潮像の制作のようにかつての長谷川家の宗旨であった日蓮宗寺院との関わりが存続していることも注目される³⁸。

次に、長谷川家が粉本の作成にあたり原本からの模写を行ったと思われる記録は、原本の所在地で写した可能性があるため、彼らの行動範囲をうかがう参考になる。

智積院（京都府京都市東山区東瓦町）	《孔雀明王像》（長-17・85）
東寺（京都府京都市南区九条町）	《地藏菩薩像》（長-64）
	《辨才天像》（長-169）
二尊院（京都府京都市右京区嵯峨）	《勢至菩薩像》（長-56）
元慶寺（京都市山科区北花山）	《毘沙門天曼荼羅図》（長-13-15）
光明寺（京都府長岡京市粟生）	《法然（円光大師源空）像》（長-74）
延暦寺横川（滋賀県大津市坂本）	《阿弥陀三尊来迎図》（長-57）
	《地藏菩薩矜羯羅制吒迦像》（長-59）
葉樹院（滋賀県大津市坂本）	《辨才天十五童子像》（長-28）
大福寺（奈良県北葛城郡広陵町）	《毘沙門天像》（長-98）
妙法寺（大阪市東成区大今里）	《愛染明王》（長-28）
華林寺（蜂田寺：大阪府堺市中央区八田寺町）	《役行者像》（長-44）

この記録からは、京都に拠点を置く長谷川家の活動範囲が、近江、大和、摂津、河内に及びかなり広域である様子が窺える。これは先の注文者の分布に対応したものといえるだ

ろう。受注制作を基本とする絵仏師の活動が、行動的な性格を持つことが理解される。長谷川家が特殊な尊像や図様に対しても対応できる見識と技術を持っていた背景には、こうした広範囲な活動の中で得られた、情報と経験の集積があったことを評価すべきであろう。

先に述べたとおり高野山には金剛峰寺と宝寿院に等叔、等舟の作が確認されているが、等叔は太元帥明王を描くのに高野山西南院所蔵の古図に図像を求め³⁹、また等舟も愛染明王十七尊曼荼羅を描くのに、家蔵の粉本とは異なる特殊な図像によって描くなど、図像に対する研究姿勢が表れており⁴⁰。古画に学ぶ制作態度が長谷川家の制作を支える柱のひとつであることがわかる。高野山には近世の仏画が多数残されており、各絵師の技法の特徴が解明されることによって、長谷川家の作例は、もう少し増加する余地があると考えられる。

第5節 幕末期の絵仏師

天明8年(1788)の大火は、市中を広範囲に焼き尽くした。このとき長谷川家も被災したが、被災地は革堂、因幡堂、六角堂といった庶民信仰の中心地をも飲み込んでいる。『京羽二重』には木村了琢ら四人の仏絵師の名をあげているが⁴¹、彼らのうち三人がこの近隣に集住していたことを考え併せると、需要があり交通の便のよいこの地域に、早くから絵仏師たちの工房が集中していたことが推測される。そのため天明大火では、彼ら絵仏師たちもまた被災を免れなかったのである。

京都は古刹が多く、絵仏師たちはそれぞれ背景とする歴史の中で顧客を獲得していたが、大火の被害を受けて事業を縮小する者がいたとしても不思議はない。それまでの絵仏師の勢力は一部解体を余儀なくされたことが推測される。そこに後発で絵仏師の世界に軸足を定めた長谷川家が事業を拡大する余地が生まれたものと考えられる。

能満院粉本の中には、長谷川家以外にもそうした京都の絵仏師の活動を示す資料がある。長谷川家関係粉本ほど多くはないが、能満院外で制作された粉本をそのまま入手して加えたものである。代表的なのは、遠藤満智、遠藤弁蔵という名が残る遠藤家の絵師が制作したもので、「皇都画師遠藤満智所持」と書いたもの(遠-10)があるところから、京都の絵仏師であることがわかる。その数は54点だが、年紀を見れば天明9年(1789)から文政10年(1827)までの約40年にわたる年号が見られる。これらを手に入れるに至った経緯は不明である。相当数の粉本がありながら六角堂能満院の蔵印が捺されたものしかなく、憲海個人の所蔵印が見られないので、入手時期は山王寺に寄寓して以後と考えられる。遠藤

表 7-3 遠藤家山口家粉本目録

目録番号	名称	制作者	材質技法	形態	員数	法量縦cm	法量横cm	制作年(月/日)			印影	備考	通番
						注 *本目録は、《田村宗立旧蔵仏画粉本》2673点のうち絵仏師遠藤家と山口家に関わる粉本62点を、制作年に従って一覧としたものである。各項目の凡例は下記のとおり。 (目録番号) 本論第7章において使用される番号() 書で示される。 (制作年) 月/日に小文字の'u'が付される場合は閏月を示す。 (印影) 本論第1章「図1-1能満院粉本主要印影一覧」における印影番号。 (通番) 「別表1《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録」における目録番号。本論において半角[]書で示される。“版”とあるのは「別表2《田村宗立旧蔵仏画粉本》版本目録」における番号。							
遠-01	某僧像(合掌)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	56.8	33.5	天明9年	1789	01_/00	1印	遠藤絵本	2105
遠-02	法然(円光大師源空)像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	51.0	24.7	寛政3年	1791	02_/00	1印	仏絵師遠藤絵本	2183
遠-03	善導像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	50.7	24.5	寛政3年	1791	02_/24	1印	仏絵師遠藤絵本	2168
遠-04	善導像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	38.2	26.5	寛政4年	1792	01_/27	1印	遠藤氏絵本	2169
遠-05	法然(円光大師源空)像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	38.6	27.5	寛政4年	1792	01_/27	1印	遠藤氏絵本	2184
遠-06	天台智者大師智顛像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	109.6	14.1	寛政4年	1792	08_/01	1印	仏絵師遠藤氏所持	1963
遠-07	慈眼大師天海像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	51.5	46.5	寛政6年	1794	03_/24	1印	遠藤氏	2008
遠-08	楊柳観音像	遠藤弁蔵	紙本白描	まくり	1枚	69.3	41.7	寛政10年	1798	04_/27		仏画工遠藤弁蔵所持	390
遠-09	某僧像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	37.3	26.3	寛政12年	1800	03_/30	1印	遠藤氏	2103
遠-10	某僧像(持払子)	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	67.8	40.8	寛政12年	1800	04u/11	1印	皇都画師遠藤満智所持	2118
遠-11	某僧像(持払子)	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	68.5	40.0	寛政12年	1800	04u/20	1印	仏画師遠藤満智所持本	2119
遠-12	センリツ像	遠藤弁蔵	紙本白描	まくり	1枚	69.3	32.8	享和元年	1801	05_/03	1印	仏絵師遠藤弁蔵	2093
遠-13	承陽大師希玄道元像	遠藤満智	紙本白描?	まくり	1枚	27.5	13.7	享和2年	1802		1印	仏画工遠藤満智之写」洛陽宗仙禪寺	2075
遠-14	曹洞宗某僧像(持払子)	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	54.5	40.0	享和2年	1802	02_/15	1印	仏画工遠藤満智本	2098
遠-15	善導法然像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	42.5	28.0	享和2年	1802	08_/12		仏画工遠藤氏本	2203
遠-16	某僧像(持払子)	遠藤弁蔵	紙本白描	まくり	1枚	46.5	27.5	享和2年	1802	08_/17	1印	仏画工遠藤弁蔵	2120
遠-17	某僧像(持払子)	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	73.0	34.3	享和2年	1802	09_/20	1印	仏画工遠藤満智本	2121
遠-18	洞山良价像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	52.2	40.9	享和3年	1803	01_/06	1印	加州金沢天徳院之写」仏画工遠藤所持	2073
遠-19	高僧像	遠藤弁蔵	紙本白描	まくり	1枚	28.0	14.0	享和3年	1803	06_/20	1印	遠藤弁蔵本	2039
遠-20	出山釈迦像	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	71.4	34.5	文化元年	1804	07_/01		古法眼写」仏画工遠藤満智所持	49
遠-21	曹洞宗某僧像(持払子)	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	39.2	24.0	文化6年	1809	03_/18	1印	遠藤満智本	2099

遠-22	光明真言字輪曼荼羅図	遠藤	紙本白描一部着	まくり	1枚	107.5	39.0	文化11年	1814	09_/15		仏画工遠藤氏所持」	225
遠-23	阿弥陀二十五菩薩来迎図	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	156.2	77.4	文化13年	1816	09_/01	1印	遠藤所持」	247
遠-24	虚空蔵菩薩像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	55.5	40.6	文政元年	1818	07_/04		遠藤氏本」 霊雲寺様」	557
遠-25	聖応大師良忍像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	47.0	47.2	文政4年	1821	09_/27	1印	遠藤」 大原融通寺ノ写」	2016
遠-26	不動明王像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	37.1	23.4	文政4年	1821	09_/28		遠藤本」	603
遠-27	黄蘗宗某僧像(持弘子・杖)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	47.2	28.0	文政5年	1822	05_/00	1印	黄蘗宗語恵院」 仏画工遠藤所持」	2101
遠-28	善導像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	55.5	23.2	文政6年	1823	02_/28		遠藤氏」	2170
遠-29	法然(円光大師源空)像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	47.2	23.7	文政6年	1823	02_/28		遠藤氏」	2185
遠-30	某僧像(持弘子)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	45.0	19.5	文政7年	1824	11_/30	1印	遠藤氏」	2123
遠-31	某僧像(持弘子)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	55.5	39.2	文政8年	1825	03_/20	1印	越中高岡二塚村松月庵御詠」 仏画工遠藤氏所持」	2124
遠-32	釈迦五百羅漢図	遠藤弁蔵	紙本白描	裏打	1枚	101.2	39.0	文政8年	1825	09_/00		仏画工遠藤弁蔵本」	187
遠-33	善導法然対面図	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	18.5	30.3	文政8年	1825	09u/13		仏画工遠藤氏所持」	2208
遠-34	善導像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	27.7	12.9	文政9年	1826	06_/20		享保十四己酉曆林鐘中旬日」 遠藤」	2171
遠-35	阿弥陀二十五菩薩来迎図	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	102.8	47.0	文政10年	1827	04_/00		仏画工遠藤所持」	248
遠-36	某僧像(持弘子)	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	46.2	27.3	文政10年	1827	07_/20	1印	仏画工遠藤満智本」	2125
遠-37	出山釈迦像	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	81.3	39.1	江戸時代後期	19世紀			古法眼写遠藤満智本」	52
遠-38	水天像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	75.2	40.0	江戸時代後期	19世紀			遠藤本」 霊雲寺様」	811
遠-39	某僧像(持弘子)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	64.5	40.0	江戸時代後期	19世紀		1印	遠藤弁蔵本」	2143
遠-40	天台智者大師智顛像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	39.8	28.3	江戸時代後期	19世紀		1印	仏画工遠藤氏」	1968
遠-41	慈覚大師円仁像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	54.2	40.8	江戸時代後期	19世紀		1印	仏画工遠藤氏」	1987
遠-42	曹洞宗某僧像(持弘子)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	54.9	40.0	江戸時代後期	19世紀		1印	仏画工遠藤氏本」	2100
遠-43	某僧像(持弘子)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	38.7	27.5	江戸時代後期	19世紀		1印	仏画工遠藤氏」	2150
遠-44	法然(円光大師源空)像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	27.7	13.1	江戸時代後期	19世紀			遠藤」	2192
遠-45	善導像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	68.5	36.0	江戸時代後期	19世紀		1印	遠藤氏」	2174
遠-46	法然(円光大師源空)像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	69.5	36.4	江戸時代後期	19世紀		1印	遠藤氏」	2193
遠-47	辨長像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	45.5	28.7	江戸時代後期	19世紀		1印	遠藤氏」	2226
遠-48	祥空像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	83.5	28.0	江戸時代後期	19世紀		1印	洛陽五条万年寺」 遠藤本」	2236
遠-49	辨長・良忠像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	28.1	27.7	江戸時代後期	19世紀		1印	遠藤氏」	2225
遠-50	證空像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	48.4	34.5	江戸時代後期	19世紀			遠藤氏」	2228
遠-51	善導法然対面図	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	96.0	39.8	江戸時代後期(卯)	19世紀	07_/28	1印	仏絵師遠藤満智本」	2214
遠-52	承陽大師希玄道元像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	36.5	28.0	江戸時代後期(卯)	19世紀	08_/07	1印	遠藤氏」	2076

表7-3 遠藤家山口家粉本目録

遠-53	某僧像(持払子)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	74.7	39.3	江戸時代後期(午)	19世紀	08_/29	1印	遠藤所持本	2155
遠-54	某僧像(定印)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	28.0	19.0	江戸時代後期(卯)	19世紀	09_/??	1印	遠藤氏	2161
目録通番	名称	制作者	材質技法	形態	員数	法量縦cm	法量横cm	制作年(月/日)		印影	備考	通番	
山-01	多賀明神像	山口春水堂	紙本白描一部朱	まくり	1枚	56.6	39.3	明和2年	1765	??*/19		春水堂山口氏<花押>」京兆画工春水堂写之	1024
山-02	虚空蔵菩薩像	山口蘭舟子	紙本白描一部朱	まくり	1枚	75.2	50.2	天明5年	1785	12_/00	備考参照	京雑画工山口蘭舟子写」求本六角堂能満院」「山口氏」印・「瑤翁」印	556
山-03	軍荼利明王像	山口明雅	紙本白描	まくり	1枚	72.0	41.3	寛政4年	1792	04_/00		紫燕亭写寸	695
山-04	善女龍王像	山口明雅	紙本白描	まくり	1枚	119.3	44.2	文化2年	1805	08_/12		山口明雅	912
山-05	某僧像(持払子)	山口明雅	紙本白描	まくり	1枚	72.2	34.5	文化6年	1809	09_/02	1印	京兆室仏舎山口明雅」妙心寺	2122
山-06	七尊図	山口明雅	紙本白描	まくり	1枚	92.0	37.5	文化10年	1813	06_/12		山口氏紫燕写	296
山-07	釈迦十六羅漢図	山口城照	紙本木版	まくり	1枚	32.0	19.7	江戸時代後期	19世紀			皇都画工□□城照拝図	版-107
山-08	地藏菩薩像	山口城照	紙本白描	まくり	1枚	81.6	30.3	江戸時代後期	19世紀			山口城照写	509

家に関わる粉本を「表 7-3 遠藤家山口家粉本目録」にまとめた。

その内容を見れば八割が高僧像であり、天台宗、浄土宗、禅宗の祖師、高僧を対象としている。そして、残る 10 点の粉本の主題については、光明真言字輪曼荼羅図、出山釈迦像、釈迦五百羅漢図、阿弥陀二十五菩薩来迎図（図 7-4）、楊柳観音像、虚空蔵菩薩像、不動明王像、水天像が並び、諸宗に関わる画像を制作していたことがわかる。粉本の墨書に自ら「仏画工」と書くことから遠藤家が仏画を専門とする職業画家であることは明白である。京都にあって層の厚い需要が期待できる天台、浄土、禅の三宗に顧客を持ち、祖師をはじめとする肖像画を中心に制作を受け、尊像も比較的利用の場が多いものを得意としたようである。肖像画については町絵師として一定の水準にはあると思われるが、粉本群として見れば、遠藤家は典型的絵仏師の家と見るほかない。憲海らが写したものは 1 点もなく、憲海の認識の中では、明らかに長谷川家に対する評価と異なるものがある。縁あって入手した粉本を参考資料として架蔵したのであろう。

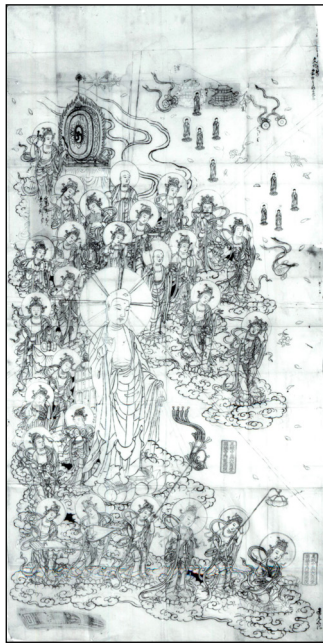


図 7-4 阿弥陀二十五菩薩来迎図（遠-23）



図 7-5 虚空蔵菩薩像（山-02）

また、ほぼ同じ頃の京都に山口家という絵仏師の家があったことも分かっている。山口家関係の粉本は 8 点と少ないが、明和 2 年（1765）から文化 10 年（1813）のものまでが残されており、古いものから山口春水堂、山口蘭舟子、山口明雅、山口城照という順に自筆粉本が残されている。「京兆室佛舎山口明雅」という記述から室町仏光寺周辺すなわち長谷川家からさほど離れていないところに工房のあった可能性がある。山口家に関わる粉本は「表 7-3 遠藤家山口家粉本目録」にまとめている。興味深いのは天明 5 年（1785）に山口

蘭舟子が写した《虚空蔵菩薩像》(山-02) (図7-5)で、これは原本が六角堂能満院のものとしてされており、憲海らが入る以前のことではあるが、山口家が能満院と関係のある工房であったことを教えてくれる。遺された図像は多賀明神像、虚空蔵菩薩像、軍荼利明王像、善女龍王像、七尊図、釈迦十六羅漢図、地藏菩薩像となり、独尊絵像が中心ながら、特殊な図像を含む点が注目される。また絵仏師として、高僧像の需要にも応えたことがわかる。また山口家に関わる資料として、仏師高井琮玄所蔵の《鞍馬毘沙門天正像》は蘭舟子が天明5年(1785)に鞍馬寺毘沙門天像を写生した粉本としてその活動状況を補う⁴²。山口家粉本については作者にばらつきがあり、しかも所蔵印が少ないため、入手時期は判断しがたい。

一般の町絵師工房に対する美術史上の評価の低さに加えて、江戸時代後期の仏画に対する無理解が、江戸時代の長谷川家に対する興味を失わせているのは事実である。しかし政治的に安定しており、仏画に対する需要も供給能力も高かった江戸時代は、その制作量と普及の程度から見れば決して仏画の暗黒期ではない。儀軌に対する無知や粗漏な作画に陥る例が総体に多かったことは確かに否定できない現実であるが、その一方で、多くの学匠が生まれた江戸期の教学は、仏画にもまたあるべき姿を求めることは自然の展開であった。

無記名で制作されることが多い仏画では必ずしも作者がわかるとは限らないが、それでも木村了琢の名で知られる木村家や神田宗庭の名で知られる神田家のように、作者の記録が残りやすい例もある。この長谷川家などはまだ作者の名が伝えられている絵仏師といえる。近世において教学復興の潮流は決しておろそかなものではなかったが、それに比して経軌に則り仏画が描ける絵師は得難かったのである。興味深いのは、当時京都の絵仏師として著名であった木村家の図像については能満院粉本の中に《十二天像》[715-724]《徳川家康(東照神君)像》[2269]の2件しか粉本がないことである⁴³。確かに木村家は天台系寺院の注文を受けることが多いが、憲海が天台系の図像も集めていることからすれば、それが大きな問題であったとは考えにくい。縁がなかったといえども重要な理由であろうが、木村家の画像に対して憲海があまり興味を示さなかったところに、憲海の思考の機微があるように思える⁴⁴。

憲海が図像の収集を志す契機として、世に流布するところの仏画の質を憂えたことが伝えられているが⁴⁵、こうして長谷川家との関わりを見れば、彼が必ずしも当時の絵仏師に対して否定的立場を採っているわけではないことが理解される。憲海が求めていたものは、その描き手の質を問う以上に、描かれた図像の質であったと思われる。それを言い換える

ならば優れた仏画よりも優れた図像を求めたといつてよいだろう。憲海らが版によって図像を普及しようとしたのは、彼が重ねた多くの出会いの中で自ずと帰結した結論であった。

幕末期に高野山の画事を務めた長谷川家は、憲海の旧知の家であり、また絵仏師として組織的な活動を行っていた。憲海は正法を伝える目的のために優れた図像の継承という大願をどのような方法で実現すべきか大いに悩んだものとするが、能満院工房の開設は、この長谷川家という絵仏師の工房なくしては、実現できなかったかもしれない。僧護による智積院への後援が、能満院という施設の確保に成果をもたらし、その一方で、長谷川家の絵仏師工房が、図像普及のための組織的活動の知識と情報を与えたものと考えられ、この二つの条件が整ったからこそ能満院工房は開かれたのである。

幕末期に図像の収集と普及を祈願した憲海は、長谷川家との出会いによって、自分自身の行うべき方向を確認したに違いない。巧みではあったが、絵仏師としては素人である憲海が、得意の板刻によって図像を普及させようとするのは、決して気まぐれや思いつきではなかったと思われる。高野山金堂の彩色にも対応できる長谷川家は、絵仏師の工房としては組織的な活動を可能とする体制を持っていた。憲海個人の活動だった図像収集を、大義を以て工房を起し事業化するには、当然幾つもの障害を乗り越える必要があった。長谷川家の存在は、この課題の克服にあたって身近な指標として機能したと考える。

以上で本章の考察を終える。長谷川等伯没後、京都に留まり絵屋として活動したのは息子の宗也である。その末裔は絵仏師へと家業を展開し、幕末期には活発な活動を見せていた。豊山に修学する憲海も長谷川家とは早くから知己となっていたらしく、入洛後の憲海を支援し、その中で憲海は多くの粉本を長谷川家所蔵本から収集するのである。絵仏師としての長谷川家の活動は、憲海に多くの知識や情報を与えたことが考えられ、図像経疏の継承流布という大願を果たすために開設する能満院工房の構想は、この絵仏師長谷川家との交わりの中で具体的な設立の過程を模索したものと考えられる。

【注】

¹ 京都市下京区室町通仏光寺下ルにあつた山王神社の別当天台宗山王寺総持院は、明治維新後廢寺となり日吉神社のみが同地に残る。かつては天台座主によって山王祭が行われたことが『拾遺都名所図会』『京都坊目誌』に書かれている。

² 『古画備考』の記事に宗也系の末裔として名が見えるのは、長谷川家と認識されている宗也（新之丞）と宗清のみ。等作と等譽は長谷川家の者とするべきだが、雪舟弟子とい

う記事のみで長谷川家という認識がない。等潤以下は見えない。朝岡興禎／太田謹『増訂古画備考』（思文閣出版、1970年8月）、pp.729、929、934、936。

³ 土居次義「長谷川等伯画攷」「長谷川左近に関する一考察」「アメリカで見た長谷川左近」「長谷川左近と長谷川等重」「長谷川宗宅について」「長谷川宗也に就いて」「長谷川宗也考」以上は土居次義『長谷川等伯研究』（講談社、1977年6月）に収録。山根有三「長谷川宗宅等後研究」「長谷川左近・宗也・等憶・信近などの画業について」「長谷川等秀・等学研究」以上は山根有三『桃山絵画研究 山根有三著作集六』（中央公論美術出版、1998年6月）に収録。

⁴ 宮島新一『長谷川等伯』（ミネルヴァ書房、2003年11月）、pp.197-201。

⁵ 土居次義『長谷川等伯研究』（講談社、1977年6月）、pp.193f。

⁶ 慶長5年（1600）に落成した本法寺《涅槃図》に記された款記。

⁷ 『七尾町日記』（金沢市立玉川図書館近世史料館（加越能文庫）所蔵）は土居次義『長谷川等伯研究』（講談社、1977年6月、p.216）に影印翻刻がある。本資料の長谷川家系譜は大正時代に中川忠順により紹介された（土居次義同書 p.20）。

⁸ 本法寺は小川通寺之内上ルにある日蓮宗寺院。永享8年（1436）日新が東洞院綾小路に創建、破却や焼失を経て、天正15年（1587）に現在地へ移転した。長谷川等伯が当寺十世日通と親交があり、塔頭教行院に寄宿したため、同院が長谷川家の菩提寺となった。

⁹ 信行寺は左京区仁王門通東大路西入ルにある浄土宗寺院。知恩院末で、当初は寺町丸太町にあったが宝永5年（1708）の大火後、現在地に移転された。「長谷川宗也考」（土居次義『長谷川等伯研究』、講談社、1977年6月）。

¹⁰ 本資料は公刊されたものがないので、以下の通り序を翻刻する。

予家過去帳天明八戊申歳依火災焼亡^{ヘウ}ス。故今茲^{ウツシ}三[欠]拋古過帳而騰之。

聊懷追悼^{イサトカイタクツイタクノココロサシブ}之志^{オスオンシキ}以テ先祖代々為恩謝^{オコタラカウヤウ}ト者也。

長谷川家代々宿坊次第之事。

等伯 日蓮宗也則小川頭本法寺塔内教行院。

宗也一等伯実子一慶安年中改宗為浄土宗、乃頂妙寺通東信行寺為宿坊。但シ明和年中迄。

等潤^{ヨウチ}幼稚之時川端八兵衛為養子。從九才時学画、養父母仕而不^{オコタラカウヤウ}怠孝養。其後養父母^{モロトモキユウセイ}諸共旧姓^{コロ}帰長谷川。其比宗旨有故及論、依之明和年中又寺町天性寺定宿坊者也。天明戊申火災前^{マデ}彼寺境内榮源院為宿坊、今ハ絶彼院也。

本 本法寺

信 信行寺

天 天性寺

戒名上以朱字本信天加三字、而知宿坊之為符文^ト者也。

¹¹ 土居次義『長谷川等伯研究』（講談社、1977年6月）、pp.212f に影印翻刻がある。

¹² 序は以下の通り。翻刻は新たに起こした。「此予カ家之系譜わ、先乃宗雪筆ニて、左に記せることく書代々傳へぬれとも、天明戊申大火の時焼失しけり。父等潤もあらまはは覺

れとも、文を委しくハわかちかたし。然に父の姉精俊尼之方ニ、祖父宗清の筆にて、反古ごとき紙ニかき記し傳え置れし書あり。是お見て亦予カ写取て己カ家の系となし傳ふる者也。」

¹³ 宮島新一『長谷川等伯』（ミネルヴァ書房、2003年11月）、pp. 94-96。

¹⁴ 中村溪男「発見された等伯系譜」（『MUSEUM』第64号、東京国立博物館、1956年7月）、pp. 11-13。

¹⁵ 序文は以下のとおり。「原巻は長谷川信次所有の処、大正拾貳年九月一日関東大震災のトキ焼失したるが、等英妾腹の一子山崎喜作原巻の複写を所持せるを以て、信次後継者幸吉之を写し、此巻を作成す。昭和貳年九月壱日」

¹⁶ 天性寺は寺町通三条上ルにある浄土宗寺院。智恩院末で天正5年(1577)に創建された。

¹⁷ 海津天神社の《三十六歌仙図》の落款。寛永7年(1630)6月の年紀と共に款記がある。

¹⁸ 土居次義『長谷川等伯研究』（講談社、1977年6月）、p. 140。

¹⁹ 等伯の養子宗伯(1637-1687)は名を信近といった。『古画備考』二十三に「長谷川宗伯信近」の項がある。朝岡興禎／太田謹『増訂古画備考』（思文閣出版、1970年8月）、p. 932

²⁰ 長谷川宗伯雪艘(1666-1724)、長谷川宗伯雪嶺(1755-1830)がいる。両者とも養子である。

²¹ 絵屋は中世末から近世初期にかけて主に世俗画制作を行った業者。仲家本系譜の等伯の項でもその工房を「にぎやかなる絵屋也」と称している。山根有三「絵屋について」（『美術史』第48号、美術史学会、1963年3月）

²² 『本朝画史』卷三中世名品「等悦 畫大黒□雜図、筆意學雪舟。」雪舟流として中世に分類されているが、この等悦は長谷川宗也と見るべきであろう。卷四専門家族「長谷川宗也 等伯之庶子也、世其家業、然筆力不逮父、或其後裔至于今乎。」坂崎坦『日本絵画論大系』第2卷（名著普及会、1980年1月）、pp. 405, 411。

²³ 『本朝画史』卷三中世名品「僧等譽 専念宗之僧而居泉州堺津安養寺、學雪舟、畫鍾馗□雜図、得其名。」雪舟流として中世に分類されているが、この等譽は長谷川家の一人と見るべきである。坂崎坦『日本絵画論大系』第2卷（名著普及会、1980年1月）、p. 405。

²⁴ 前掲注3の宗也関係論文及び山根有三「葛に昆虫図屏風について」（『古美術』第4号、三彩社、1964年3月）による。『扁額軌範』初編に祇園社の《大黒布袋角力図》あり、「明曆三丁酉仲春下流／長谷川新之丞筆」とあり。『新修京都叢書』第8卷（臨川書店、1968年4月）p. 339。

²⁵ 『扁額軌範』二編二冊に祇園絵馬所の《鍾馗図》あり、「享保十三戊申年五月吉祥日／願主自雪舟八代長谷川宇右衛門宗清六十歳筆」とあり。『新修京都叢書』第8卷（臨川書店、1968年4月）、pp. 458, 464。

²⁶ 2014年に仙台市宮城野区二の森にある祥麟山伊達家墓所から移転した。祥麟山伊達家墓所は伊達慶邦後室をはじめとする伊達慶邦縁者子女の墓地で2011年の地震で被災した。閑子が埋葬されたところは現在地よりやや南方の旧小田原村にあった。

²⁷ 墓碑銘に「以明治八年乙亥六月二十七日病終卒寓居享年五十三年九閏月葬 陸前國宮城郡小田原邑祥麟山廣幡氏墓側従前其議也」とある。

²⁸ 《太元帥明王図》『高野山の明王像』（高野山霊宝館、1993年7月）、p. 62に図版が掲載される。

²⁹ 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第二輯 版木』（総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、1999年5月）、p. 34。軸裏貼紙墨書に「自雪舟五代等伯七世孫／長谷川等叔藤原宗朝書(印)」とあるという。

³⁰ 八幡社所有の絵馬。「自雪舟十二代／長谷川等叔(印「越中岩瀬）」の落款と、「奉納／文政五年壬午三月／右／榎屋庄治郎／敬白」の裏墨書あり。

³¹ 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第二輯 版木』（総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、1999年5月）、p. 185。

³² 高野山小田原にあった報恩院は中島坊報恩院といい行人方上通であった。高野山を訪れた松尾芭蕉との縁が伝えられる。明治維新に学侶方の普賢院と合併し中島坊普賢院となり現在に至る。普賢院に問い合わせたところ、旧報恩院墓地については不明であるとの回答であった。

³³ 作者を掲載していないが、《愛染明王十七尊曼荼羅図》は『高野山の明王像』（高野山霊宝館、1993年7月）p. 62に、《仁王経大曼荼羅図》は『Sacred Treasures of Mount Koya 高野山密教秘宝展』（Honolulu Academy of Arts、2002）p. 66に図版が掲載されている。注 28 とともに高野山における長谷川家の仏画作品については高野山霊宝館の中安真理にご教示をいただいた。

³⁴ 井谷善恵『近代陶磁の至宝 オールドノリタケの歴史と背景』（里文出版、2009年1月）、pp. 103-111。

³⁵ 2013年11月22日に仲春洋に面談し、聞き取りを行った。

³⁶ 萩原盤山（1774-1846）は狩野派を学んだとされる町絵師で藩の絵事御用を受けることもあった（坂井正喜『会津人物事典 画人編』歴史春秋出版、1989年12月、pp. 144f）。憲海が住職を務めた喜福院の近くに住み、知己であった。

³⁷ 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第二輯 版木』（総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、1999年5月）、p. 38。長谷寺に所蔵される絵画版本中に森田易信、森田易知の名が見える。

³⁸ 日潮（1674-1748）は京都出身の日蓮宗の僧。長谷川等叔は文化12年（1815）に本法寺にある長谷川等伯の《涅槃図》を模写（仲家所蔵）しており、檀那寺ではなくなったものの、本法寺と長谷川家のつながりが断たれたわけではなかった。

³⁹ 《太元帥明王図》については前掲注 28 書 p. 107 による。

⁴⁰ 《愛染明王十七尊曼荼羅図》は、能満院旧蔵長谷川家関係粉本に同じ主題のもの（表 7-2 長-102）がある、金剛峯寺本は理趣経曼荼羅に準じて描かれた珍しい図像として別図をなしており、より深い図像への理解が必要となっている。前掲注 33 書、p. 103 による。

⁴¹ 『京羽二重』巻六「絵仏師」の項（『新修京都叢書』第2巻、臨川書店、1969年10月、pp. 204f）。

⁴² 高井琮玄『佛画一 円山派下絵集 1』（光村推古書院株式会社、1997年5月）p. 106。

⁴³ 両粉本とも会津から京都に入る途次、弘化2年（1845）に江戸の護国寺で模写したものである。《徳川家康（東照神君）像》[2269]は貞享3年（1686）に七代了琢が制作した原画からの模写。《十二天像》[715-724]は了琢による御筆本縮写からの模本で12枚のうち9枚が遺る。

⁴⁴ 憲海入洛時の木村家当主は13代了琢徳綱であったが、その作に対しては、形式化が進むとする意見がある。大西芳雄「絵仏師木村了琢—東照宮深秘の壁画について」（『東京国立博物館紀要』第10号、1975年3月。）

⁴⁵ 小田慈舟「御室版両部曼荼羅の開版と其功労者」（『密宗学報』第178号、1928年6月）、pp. 290f。

第8章 憲海と開版

この章では憲海及びその弟子たちによる開版事業の実態について考察する。憲海が関わった開版事業の展開と能満院における印施千種の大願について、彼の思考や学問との関わりを検証することが目的である。第1節では、憲海が印施千種の大願を立てるまでに経験した長谷寺や亀福院における開版事業とその背景を考察する。第2節では、憲海の印施千種の大願によって開版された版本や聖教の出版物を通して能満院工房の開版事業の実際を検証する。第3節では、憲海没後に行われた尊峰による御室版両部曼荼羅などの開版事業に対する、憲海の弟子たちの関与について検証し、憲海の遺志と弟子達の活動との関わりについて考察する。第4節では、憲海あるいは能満院において収集された版画を紹介し、海如版、龍肝版など憲海周辺で行われた開版事業について考察する。憲海が行った開版事業の意味と弟子達に受け継がれたその思考について考察する。

第1節 印施千種の大願

元治元年（1864）7月、蛤御門の変による兵火により能満院は焼失した。焼け出された僧たちは、神泉苑南の蓮光院に寄寓し、このとき粉本筆筒二棹など一部の資料はかるうじて持ち出されたものの、工房に蓄えられてきた多数の版木をはじめとする図像粉本、聖經は焼失した。第1章に述べたとおり、《田村宗立旧蔵仏画粉本》は白描粉本と墨摺版本に大きく分けられ総数約2673点のうち1割に相当する277点が墨摺りの版本である。識語や影印を見れば、これら版本版画が全て憲海らの手になるとは考えにくく、種々の由来を経て収集されたものが含まれていることが確認される。これらは「別表2《田村宗立旧蔵仏画粉本》版本目録」に一覧とした。能満院粉本中に遺された版本を手掛かりとして憲海の思考と開版事業の関係について考察する。

憲海が印施千種の願を建てたことは、小原洪秀が「仏畫に巧にして、且木版刀刻の技にも通じ、幾多の佛典を彫刻殺青し、印施千種の宿願ありて、大随求大佛頂兩陀羅尼、仏遺教經等無慮七八百種を印行せり。」¹と語るとおり、伝承として遺されている。千種類の開版を祈願し、実際に七八百種に及んだとある説は、粉本中の《勝敵毘沙門天像》（版-006）に「王城中心六角堂能満院大願施印一千種内」と墨書が遺されていることや、後述するとおり版本にも「印施千種」の語を刻出するものがあって、実際に遂行された事業と考えて

よい。

表8-1 能満院粉本筆筒函別粉本数(版本粉本のみ)

函名	能満院粉本	大成宗立粉本	小計
1 佛頂	2	5	7
2 諸佛	1		1
3 佛部	6		6
4 經法	3	1	4
5 諸像	8		8
6 觀音	14	18	32
7 文殊			
8 菩薩	12	1	13
9 薩?	5	3	8
10 不動	4	4	8
11 忿怒	1	1	2
12 天等	3	4	7
13 諸天	4	1	5
14 天部	5	1	6
15 天龍	4		4
16 權現	4	1	5
17 神祇	17	4	21
18 諸神	12		12
19 曼荼	5		5
20 諸圖	5		5
21 書函	4		4
22 繪紋			
23 莊嚴			
24 賢聖	3		3
25 八祖	1	4	5
26 大師	8	11	19
27 古徳	2	9	11
28 荼羅	14	1	15
29 近世密宗			
30 諸宗高僧	1		1
31 律衣			
32 天台	1		1
33 禪家	8		8
34 浄土	43		43
35 一向俗人	2		2
36 雜画	5	1	6
合計	207	70	277

晩年の憲海が使用した大願という号は、能満院での活動の開始時期以後専ら使用されるものである。《勝敵毘沙門天像》における語の用法を見れば、憲海の大願とは開版に深く関係付けられており、実質的には印施千種を指すものと考えられる。開版は図像を流通させるには比較的簡便な方法であり、憲海が「誓文」に掲げる祈願の実現にあたって適切な方法と考えたことは、極めて自然な判断といえる。憲海の時代、沈滞の気分こそ否めなかったが、了琢の名で知られる木村家や長谷川家のような絵仏師は活躍していたし、冷泉為恭や原在中のように仏画を描く世俗画の絵師もいた。粉本に残された墨書類を見ても、憲海は様々な絵師に対して素直に学んでいる様子が窺え²、憲海に当時の仏画全般に対する蔑視

があるとは考えられない。

また、憲海の手になる着彩本画を見れば、その画技は、真摯な態度の溢れたものではあるが、熟練した絵仏師の仕事を着しく凌駕するとは言い難く、彼が当時の仏画界そのものに奮起を促す立場にあったとは考えられない。略伝に記されているとおり、憲海が否定した「世間に流通する図像」とは、当時各所で印施された絵像や、これに類する町絵師の量産品を対象としたのであって、伝記には誇張も含まれているのであろう。彼が粗製仏画の流通を嘆いたのは、絵画的な未熟さではなく、理解が不足している図像への不満だった。

正法律との出会いは、憲海の思考に大きな影響を与えており、印施千種という祈願は、飲光の千衣縫製の事業に倣うところと考えると大過ない。憲海の信仰が、民衆教化を重視した飲光の意志を継承するものとすれば、彼にとって図像の流通はその収集と表裏一体の関係を持つ大事である。憲海の事蹟における開版事業の占める役割は大きく、空海敬慕とともにその思考の要所と言わねばならない。

先の略伝にも記されているように、憲海は木版刀刻の技術に優れていたとされる。長谷寺に所蔵される「法界安立塔」版木³に、「文政五年壬午南呂詣玉テ河州葛城山高貴律寺ニ而奉拝写シ尊木也爲報恩謝徳ノ謹シテ而摸刻シ之ヲ因ミニ本縁起之文略シテ令ム記セ于茲ニ東陸会陽沙門無言蔵」とあれば、文政5年（1822）25歳の頃にはすでに独自の開版に手を染める能力があったことになる。この高貴寺の法界安立塔というのは、弘法大師の自筆として伝えられた五輪塔婆で、宗立旧蔵粉本の中には、同年採られた拓本が含まれている。憲海が強い関心を持っていたことが明かな資料⁴として、興味の対象を開版という行為に結びつける憲海の行動様式をすでに顕していることが注目される。

この版木の裏には「三社之託宣」が彫られている。その中に「文政十年丁亥孟春 僧無言蔵印施」との刊記が見られるので、憲海の開版活動は、その後も継続的に行われていたと考えられる。例えば、同じく長谷寺に所蔵される版木のうち「光明曼荼羅」⁵「大黒天像」⁶には、版木の隅にそれぞれ「文政九年丙戌四月十一日無言蔵摸刻」「文政九年丙戌三月無言蔵摸刻」と銘があり、長谷寺山内で行われた出版に、憲海が関わる事実をうかがうことができる。

こうした開版に対する願望が、憲海の中にいつごろ生まれたのか定かではない。会津亀福院に住持した時期の刊本として、天保4年（1833）の『方服歌讚儀』（書-130）、天保7年（1836）の『金剛壽命陀羅尼經』（書-082・083）が金剛寺文書⁷に含まれており、また、幕末期亀福院を兼住した自在院にも天保12年（1841）の『仏遺教経』（書-084）や天保13

年（1842）『両部讚草帑／初夜金剛界／後夜胎藏界』（書-021）が伝えられている。能満院時代に先んじて憲海が出版事業に関わっている事実をみれば、憲海が開版そのものを事業として意識する源流はかなり早いものであったと考えられる⁸。

文政12年（1829）、長谷寺版両界曼荼羅の開版事業が行われた。この長谷寺版というのは、河内髪切山慈光寺鑿慶（1748-1829）の発願により、豊山勸学院所蔵の両界曼荼羅⁹に基づいて、京都東寺所蔵の現図曼荼羅と校訂のうえ開版した印行両部曼荼羅である。この曼荼羅図開版の契機となったのは、刊記にあたる「刻両部大曼荼羅附言」に記されているとおり、鑿慶によって長谷寺で行われた曼荼羅の講義であった¹⁰。そして、表紙の装飾に使用された東大寺戒壇院扉絵の図像は、その版の裏面に記された墨書¹¹から、憲海所蔵の粉本によるものであったことがわかっている。この大事業に憲海も関わったことを示す証しである。

この開版作業で重要なのは、下絵の制作と版の校訂である。空海の請来したいわゆる現図の再現を目標として校訂を繰り返し、少しでも正確なものに近づけること、その指示を的確に職人に指示して版にすること、この二つが求められる作業である。長谷寺には、現在もこの両界曼荼羅の校訂作業を物語る資料が残されており¹²、製作の過程を垣間見ることができる。

事業には、勸学院の僧をはじめ多くの僧が関わったから、憲海はそのひとりにすぎない。しかし、その役割は決しておろそかではなかったと考える。というのも、文政3年（1820）に憲海は、鑿慶から伝法許可灌頂を受けており、すでに師弟という関係であった。校訂作業はきわめて集中力を要求するものであり、82歳という鑿慶の高齢を考えれば、一度始まった曼荼羅開版の事業にあたっては、彼を補佐をする人物が必要とされたと考えるためである。

能満院粉本中の《鑿慶像》[1928]から、文政10年（1827）に、憲海が鑿慶の寿像を描いていることが分かるので、鑿慶は画技においても憲海に信頼を寄せていたと考えられる。また一方で、憲海は、文政11年（1828）から翌年にかけて、高山寺で慧友僧護（1775-1853）の両部曼荼羅書写を助けており¹³、彼自身が曼荼羅製作に関わる能力を持っていたのは確実である。鑿慶が憲海の能力に期待するところがあって不思議はない。この難事における憲海の存在価値は注目されるべきである。憲海の事績において、両界曼荼羅の研究と経疏図像開版への興味は、行動の動機となったと思われる。その両者を具える長谷寺版開版事業への関与は、憲海の印施千種を理解する上で重要な意味を持つ。

憲海は若くして長谷寺に登っており、彼の学問は長谷寺の教学を基盤に発展していたと考えられるが、高貴寺や慈光寺など正法律を護持する僧院への修学も盛んで、慈雲飲光（1718-1804）の提唱した正法律に強く影響を受けている。憲海が空海に対して持つ溢れるばかりの思慕の念もまた、現図曼荼羅を重視する飲光との接点を考えれば理解しやすい。法界安立塔の印行でもわかるとおり、憲海はこうした信仰の契機を開版に結びつけることに躊躇はなく、空海を具現する現図曼荼羅に対する開版の祈願には、自然な心の動きが推測される。彼が印施千種を発願するに際し、長谷寺版開版に関わった経験は大きな意味を持つと考える。

もちろん、長谷寺版に見るような両部曼荼羅の印行は、この時期、突然に発生したものではなく、先行する曼荼羅印行の歴史を受けたものである。近世の安定した社会は、教学の復興をもたらし、両界曼荼羅に対する研究を促した。澄禅による種子両部曼荼羅の開版もその一例であり、能満院粉本に含まれる龍肝（1747-?）版「種子曼荼羅」（版-60・61）も澄禅版により校訂しているのを見れば、憲海の両部曼荼羅研究の視野には印行曼荼羅が当然のように存在していたと考えられる。また、憲海と同じく正法律を堅持した海如（1803-1873）も、弘法大師千年忌に「種子両界曼荼羅」（版-052・053）を供養施印している¹⁴。両部曼荼羅を重視した飲光の思想を受け継ぐ憲海にとって、両界曼荼羅印行は自身自身の問題として真摯に受け止められていたと考えられる。

ただ、これらの種子曼荼羅に比べると、尊像によって描かれる大曼荼羅にはより深い知識が要求される。開版には十分な研究と善本の図像が必要だった。曼荼羅の講義を行った鏝慶がそうした志を持っていたことが、開版の直接の契機になったとはいえ、実際には、「刻両部大曼荼羅附言」にあるとおり、先行する亀龍院曼荼羅の存在が、開版の機運を作り出していたのである。

亀龍院曼荼羅というのは、高野山引接院の常塔により京都の亀龍院において安永 2 年（1773）に開版された印行両部曼荼羅である¹⁵。明和 8 年（1771）に入手した粉本をもとに、東寺の現図曼荼羅元禄本と校合し、絵師清水宣雅により四分の一に縮図させて印行したというもので、縦三尺五寸、横三尺五分という大きさは、当時類を見ない大事業であった。不幸にして、天明 8 年（1788）の大火で版は焼失してしまったが、長谷寺開版がこの亀龍院版の復刻の企画から、発展的に実現したことを考えれば、洛中に先達の偉業の痕跡を求め、これを利用したとして不思議はない。注目されるのは、長谷寺版の版木の調製、画工、彫師とも皆京都の職人を選んでいることである。

長谷寺が所蔵する長谷寺版の版木には制作者に関わる墨書を持った木箱が付属している¹⁶。その墨書から画工は長谷川等叔、彫刻は田原重兵衛、木地師は上田吉兵衛とされる。長谷川等叔は烏丸仏光寺下ル、田原重兵衛は二条堺町西入ル、上田吉兵衛は御幸町御池下ル東側と三者は下京の比較的近接する場所に住む職人で、製版作業は京都で行われたと考えるのが自然である。亀龍院は錦小路新町にあり、彼らの住地からほど近くに位置している。この周辺も、天明の大火に被災した地域ではあったが、人材が全く失われてしまうはずもなく、この地に亀龍院本によって培われた、大型印行曼荼羅製作の記憶が期待されたのではなかったかと考える。

当時、豊山絵所を名乗っていたのは新町通松原上ルにある森田家¹⁷だが、この長谷寺版両界曼荼羅制作では、下絵を同じ京都の長谷川家に依頼している。長谷川家は当時、京都の仏画工として活躍しており、憲海は文政9年(1826)に河州楠葉村久修恩院を訪れた際、長谷川等鶴の描く曼荼羅図粉本¹⁸を写しているのも、彼らの曼荼羅書写の技術を知っていたはずである。この時期、憲海は仁和寺や高山寺といった古刹を訪れており、京都と長谷寺をしばしば往来していた。彼が仏画制作のための情報収集に貢献する条件は整っており、画工の選定にその意見が反映した可能性は高い。

第2節 能満院の開版事業

会津を去って入洛した憲海は、はじめ天台宗山王寺に寄寓した。後に住持することになる六角堂能満院もまた近隣に位置することを見れば、憲海はすでにこの地を自身の祈願にとって得難い環境と考えていたのかもしれない。それは、施印を行うために必要な資材と粉本があり、交通の利便がよく、人が集散して図像の流布に適していることはもちろん、将来の両部曼荼羅開版のための大型版木開版の歴史に期待することができた場所である。高山寺僧護のもとに留まることをせず、喧噪の巷を選ぶ憲海の仏教は、戒律を護持する自らの生活のみにあるのではなく、その生活を民衆教化に結びつけることの可能な、市井の直中にこそあると考えた可能性がある。

歴史的にみた摺仏は、日課供養に始まり、勧進・護符・粉本という用途へと展開して、近世に至っている¹⁹。能満院粉本に含まれる版画もこうした流れの中にあった。もとより、頂法寺六角堂は観音霊場として西国札所のひとつに数えられ、町堂としても機能したため参詣者のみならず、多くの人々が参集した。その境内の一画にあった能満院にとって、施

印に対する喜捨は貴重な財源であったに違いない。それは能満院が持つ宗教的な使命であるとともに、工房経営の基盤として重要な意味があった。

頂法寺にゆかりの尊像としては、本尊である如意輪観音像、創建縁起に関わる聖徳太子像、百日参籠の伝記に見る親鸞上人像があげられる。聖徳太子像については、大成による版下²⁰があり、その需要に応える活動のあったことがわかる。とはいえ、現在能満院粉本の中に遺される版画については、何れが収集された版画で、何れが制作したものか、また憲海あるいは能満院がこれらとどのように関わったのか、明確にできるものはわずかである。というのも、版木をはじめとする、開版に係る資料のほぼ全てが、元治元年の被災時に焼失したと考えられ、能満院の中心的な活動であったと思われる施印事業に関しては、残された記録が極めて少ないのである。

粉本群中の墨摺は別表2に示すとおりである。主に開版の主体となった人物社寺によって、およその区分をしている。寺院で開版される版本といえば、経典類をはじめとして、絵像・縁起・境内図・祈祷札・勸化・開帳・巡礼詠歌・籤などがあげられるのだが、《田村宗立旧蔵仏画粉本》においては、遺族から寄付される時点で典籍類が意識的に除かれているので、当然のごとく絵像が大部分を占める。その図様としては、如来・菩薩・明王・天部・諸神・高僧と各種のものが揃っており、肉筆写本と同様に彼らの関心が幅広く尊像肖像に対し存在したことがうかがえる。ただその中に能満院で施印された絵像版画と思われるものは少なく、憲海が直接施印に関わるものはさらに少ないため、能満院工房開版の実態を把握するのは容易ではない。

先にも述べたとおり、能満院の版木は全て失われてしまい、遺された墨摺すら稀少な状況の中で、幸い河内金剛寺が所蔵する版本の中に、能満院施印本が遺されているので、これらを加え能満院施印本について考察したい。

まず憲海が大願とした印施千種に関わる記述があるものは以下のとおりである。

《三社託宣》 紙本木版 1枚 万延2年(1861)

(左右刊記) 寛平元己酉歳春王人日菅道真敬書「菅氏道真」(印) 天満宮御筆自昏金泥書和州長谷寺所蔵文政六癸未年八月朔旦奉模寫之 岬萬延二年辛酉春鏤櫻木 王城中心六角堂能満院印施千品之内」(河内金剛寺本)

《勝敵毘沙門天像》 紙本木版著彩 1枚 文久2年(1862)

《勝敵毘沙門天像封紙》 紙本木版 1 枚 文久 2 年 (1862)

(左刊記) 勝敵毘沙門天王御影」原本承和十四年丁卯慈覺大師圓仁大德入唐御請来一軸安置前唐院云々／元朝之名画顔輝筆」大力使者」勝方使者」(版-006・007)

《弘法大師直筆若州岩屋山妙樂寺金堂御建立棟札》

紙本木版 1 枚 文久 3 年 (1863)

(左右刊記) 御眞筆大般若經全部六首卷現在／延暦十六丁丑奏 桓武帝弘法大師御年廿四若州岩屋山妙樂寺金堂御建立之棟札直筆六字名号也」彼金堂及一千餘年無火難怖是偏棟札徳用也此故開版而授與世間為火伏守後生為令得善果己 是古版記／火伏名号皆文久三年癸亥二月二十一日 王城中心六角堂能満院大願印施加一千種之内也」(河内金剛寺本)

《梵字六字名号》 紙本木版 1 枚 文久 3 年 (1863)

(下刊記) 梵文六字／名号並上／頌十六字／弘法大師／御眞筆寫／ 正面石摺／勢州松坂／来迎寺出／一帋得之／御眞跡之／在所未知／之云云／六字名号／光明眞言／中出／文久三 年／癸亥三月／廿一日刻／王城中心／六角堂能／満院印施／千品之内」(河内金剛寺本)

《高山寺所藏弘法大師金蹟稱蓮華六字名号》 紙本木版 1 枚

(左右刊記) 弘法大師金蹟稱蓮華名號洛西梅尾山高山寺所藏寫／六字名号ハ光明眞言梵文半分十二字略語也 王城中心六角堂能満院大願施印一千種之内矣」(河内金剛寺本)

《熊野妙法山鐘銘写弘法大師御眞蹟如意寶珠名号》 紙本木版 1 枚

(左右刊記) 弘法大師御眞蹟如意寶珠名号 熊野妙法山鐘銘寫 六字名号光明眞言梵文半分略語也／ゆたかなるかねのひびき国中にたからをふらす玉のなりふり 京六角堂能満院大願印施千品之内」(河内金剛寺本)

「勝敵毘沙門天像」は版画(版-006) そのものには「能満院印施千品之」とあるだけで憲海の名は見えないが、その下絵に「大願施印一千種内」として、憲海の号大願の文字が

見えるので、憲海施印とみて問題ない。憲海が大願という号を専ら使用するようになるのは、能満院の工房が成立して以後の嘉永6年（1853）ころからであり、大願という号そのものが能満院の活動と結びついていたと考えられる。憲海の印施千種という祈願は、そのまま能満院工房の祈願となっていたのである。

この中には河内金剛寺所蔵版本が5点含まれている。金剛寺になぜこのように能満院施印本が遺されているか不明だが、遺されているものが空海関係の内容を持つことから、何者かの収集品が遺された状況を考えている。「印施千種」の対象の中に、憲海が「誓文」に記す空海資料の普及を目的とする一群があったことがうかがえ、憲海が青年期の祈願を晩年まで維持し続け、それが能満院工房を開設する理由の一つとなったことを推測することができる。



図 8-1 勝敵毘沙門天像（版-006）



図 8-2 釈迦親手華判梵書唵字（版-002）

ただ、金剛寺所蔵版本を見れば、先の「施印千種」本と同様の性質を持つ開版にあっても「施印千種」と板刻していないものがあり、千種に充てる際何らかの線引きの存在もしくは、開版時期の違いによる刊記の記述形式の変更があった可能性がある。

《三社託宣》 紙本木版 1枚 文久3年（1863）

（左墨摺） 皆天平神護二年丙午七月十一日南都東南院庭前池水金色光放三社託宣文字炳然浮頭寫留其後弘法大師第三代聖寶理源大師教弘云云」

（右刊記） 右三社託宣文寛平元年己酉春王人日天満宮御眞筆奉拜寫皆文久三年癸亥二

月二十日 王城中心紫雲山六角堂頂法寺内能滿院大願六十六歳敬書竝彫刻施印」
(河内金剛寺本)

《弘法大師御筆梵字塔類模写》 紙本木版 1 枚 安政 3 年 (1856)

(上墨摺) 我覺本不生／出過語言道／諸過得解脱／遠離於因縁／知空等虛空」

(左右刊記) 弘法大師御筆梵字塔類之内奉模寫／安政三年丙辰七月二十三日隨縁刻」

王城中眞六角堂能滿院大願恭施」(河内金剛寺本)

《梵書唵字讚》 紙本木版 1 枚 安政 3 年 (1856)

(上墨摺) 守護國界經云觀念唵字三世諸佛成正覺等云」梵書唵字讚」鶴立龜形勢未
休／五天文字鬼神愁／孔門弟子無人識／碧眼胡僧笑點頭」右唐眞宗皇帝製／當^ル日本
人王六十六代云」

(下刊記) 舊傳云唐ノ義浄三藏於^テ天竺^ニ得^レ此ノ釋迦如來ノ親手ノ華判^ヲ云有^ル此
ノ華判形^ニ之處人民安穩ナリノ諸天善神日夜^ニ擁護シ若^ク能^ク頂戴シ供養シ禮拜セハ安^シレ
國ヲ鎮メ宅ヲ去リ^レ惡ヲ除キ邪ヲ福德延壽利益無邊ナランノ因^テ入^レ梓^ニ永^ク為^レ流通^ス貞和三
丁亥建長竺仙始^テ摸刻シ傳^フ之^ヲ四方^ニ復^タ重^テ應永七庚辰ノ春彫ノ結縁將來スル者也ノ建
長竺僊梵僊書^レ之ノ以上古版」此ノ版一百季來所^ニ印行ス^ル而磨滅シ至^レ不^レ分^タニ
點畫^ヲ依^テ重^テ改若シ有^ラハ慕^フ舊板^ヲ者^上宜^ク任^ス所欲^ニ明和七庚寅夏豊後白
杵(多)福禪寺(藏版文)」右為^レ令法久住ノ隨^レ有^ル縁俄^ニ摸^レ刻^ス之^ヲ安政三年ノ丙
辰七月日印施敬白王城中眞沙門大願」(河内金剛寺本)(版-002)

《光明真言字輪曼荼羅圖》 紙本木版 1 枚 安政 5 年 (1858)

明治 10 年 (1877)

(下刊記) 弘法ノ大師ノ真蹟ノ洛東ノ智山ノ方丈ノ所藏ノ享保ノ十年ノ乙巳ノ四月ノ
朔日ノ專春ノ快雲ノ寄附ノ之矣ノ梵文ノ金泥ノ三圓ノ形朱ノ縁細ノ金竝ノ蓮花ノ朱隅
ノ細金ノ且無ノ小節ノ安政ノ五年ノ戊午ノ九月ノ七日ノ拜寫ノ之能ノ滿院ノ大願」

(版-004)

《六字名号》 紙本木版 1 枚 安政 6 年 (1859)

(左右刊記) 弘法大師御金筆ノ百萬遍知恩寺重寶ノ安政六年己未六月廿五日奉拜寫ノ

王城中心六角堂能満院大願 門門不同^ニ八萬四^{ナルハ}／為^{メナリ}滅^{セシカ}無明^ト果^ト業^ト因^ト
ヲ^レ／利劍^ハ即^チ是^レ彌陀^ノ號^ノ一聲稱念^{スレハ}罪皆^ナ除^ノ念佛降魔讚出^ニ般舟贊^ニ私添^ノ
(版-003)

この「三社託宣」は万延2年刊「三社託宣」から二年後に構成を改めて新たに開版したもののだが「印施千種」の語はなく、同様に「印施千種」の記述のない「弘法大師御筆梵字塔類模写」「梵書唵字讚」は先の「印施千種」本群より刊行年がやや先行している。この「梵書唵字讚」は、憲海が収集した版本を復刻したもので、豊後臼杵多福禅寺蔵版本(版-073)そのものが能満院粉本の中に遺されており、憲海が復刻版の制作も事業の対象にしていたことがうかがえる。この資料も「守護國界經云」として識語を刻出するとおり空海が護国經典のひとつとした『守護國界主陀羅尼經』所縁の図像という位置づけがなされていることが興味深い。《光明真言字輪曼荼羅図》(版-004)は安政5年(1858)に能満院で開版されたもので、能満院粉本の中には明治10年(1877)に志摩の木下佐助が再版したものが封紙とともに遺されており、開版当初の形態をうかがうことができる。

今日遺る「印施千種」本において尊像は1点しか見られず、他は文字、図形の性格が強いものだが、《光明真言字輪曼荼羅図》には原画となる肉筆の粉本が遺されており。粉本を開版に結びつけている事例として、封紙を付す刊行形式とともに貴重な作例である。憲海の図像収集にあたって、工房の公式図像を作り出すことを当面の目的としていたと考えるのも、当該図像の開版による普及が最終的な目的であったとするならば、活動方針として理解しやすい。

また、能満院時代に出版された聖經のうち確認されるものは、先にも触れた『梵学宗要章』(嘉永6年)、『即身成仏義』(安政4年)、『仏遺教経』(安政5年)である。しかし、『梵学宗要章』のみが能満院における出版であり、『即身成仏義』は京都寺町五条の書肆額田正三郎の出版であり、『仏遺教経』は伏見街道五條の藤井文敬堂と寺町五條の山城屋文政堂が出版している。憲海らの書刻ではあるが、発行を外部に委ねていることになる。また、安政7年(1860)には『大随求陀羅尼』『大仏頂陀羅尼』が能満院において開版されているが、これは発願者の大半が出羽国の僧であるため京都で施与されたものかは不明である。少なくとも、小原が憲海略伝において語る『仏遺教経』と両陀羅尼の刊行については、現在も確認することができるため、これらが衆目に映る能満院の出版物の代表的なものであったことは理解される。

春日版や高野版の名をあげるまでもなく社寺における開版の歴史は古い。社寺の多い京都でも五山版をはじめとして出版活動は早くから行われ、そのため民間の出版の歴史もまた古く、早くから本屋仲間が組織されている。京都で出版事業に官許の制度が始まるのは元禄 11 年（1698）頃とされており、以後原則的には社寺版においても届け出が必要となった²¹。

京都の本屋仲間は、営業権にあたる本屋株を以て組織されていたが、出版権にあたる板株と販売権にあたる支配株がなければ実質的に事業は行えなかった²²。本屋仲間に属さない公卿版や寺院版は、独自に開版することはできたが、出版するには届け出が必要であるため、やはり民間の書肆との競合関係の中で事業を展開することになった。²³

そのため、京都の社寺には「御用書林」が生まれ、書肆に業務を委託するようになり、多くは老舗の書肆が用いられた。能満院の本山である智積院の場合、幕末期には藤井孫兵衛がその用を受けた²⁴。藤井孫兵衛は菱屋孫兵衛といい五車楼と号した。御幸町御池下ルにあり、明和年間に創業して明治末まで代々孫兵衛を名乗り十二代を数えた書肆である²⁵。ただし能満院の出版物には知る限り五車楼を通じた発行は見られない。『即身成仏義』を出版した額田正三郎は伊勢屋正三郎といい九臯堂あるいは擁萬堂と号した。寛文年間の創業と伝えられる老舗で、幕末期には寺町五条上ルにあったという。儒書、仏書も扱い、明治初年まで続いた²⁶。義浄の『梵語千字文』を寛政 3 年（1791）に刊行しており、専門性の高い仏書刊行の実績があるため、すでに早くから刊行が重ねられる『即身成仏義』についても何らかの支配株が存在したと思われる。これは高野山の応盛による承応 2 年（1653）版を底本として憲海が校合本を編集したものだが、版木の資金などを考えるとあるいは九臯堂の依頼による開版かもしれない。

『仏遺教経』を出版した山城屋文政堂は藤井佐兵衛という。蛸薬師高倉西入ルにおいて文政年間に創業し、現在も市中に開業する老舗である。ただし、幕末期では特に仏書を専門とする書肆ではなかったという²⁷。伏見街道五條にあったという藤井文敬堂については不明である。藤井姓のつながりから菱屋孫兵衛に連なる書肆の可能性を考えるならば、仏書を取り扱う主体はこちらの書肆であったかもしれない。

能満院の開版の場合、書肆の支配株に関わるような出版物については事例が少ない。基本的には、こうした出版は奉行所への届け出が必要となり、簡単にことが進まない理由もあったと考えられる。加えて、多くの版木が必要となる書物の場合、出版にかかる経費も大きいため、『大随求陀羅尼』『大仏頂陀羅尼』のように出資者が確保できないと、独自に

開版することは困難であった可能性もある。能満院の出版は一枚摺りが中心になっていたことは、遺例からも推測される。

護符、御影の開版について言えば、中世以来社寺の布教活動の中心的な事業であり、勧進による結縁や施与に対する喜捨の対象として開版施印が行われた²⁸。社寺における摺り物は、その機能において民間が競合することのできないものであり、この構造は幕末期においても変わることはない。その意味では出版が統制される時代ではあったが、寺社摺り物が持つ一定の既得権は存在していたと考えるべきだろう。能満院が一枚摺りを主体とするのは社寺の持つ既得権を生かしながら事業を展開したことを反映している。

能満院では他に、実需に応じた摺り物も開版された。能満院粉本に、多くの民俗神が含まれていることから、憲海が民間信仰に興味を示していたことが知られているが、厳密に密教図像の校合を行う一方で、儀軌の定かでない民俗神の図像を収集し、また板刻するところに、憲海の開版事業における民衆教化の思考をうかがうことができる。

《宝相七神図》 紙本木版 1枚 江戸時代後期（19世紀）

（左下墨摺）痲瘡守護神王城中眞六角堂能満院施印」

（上墨摺）虚空蔵菩薩ハ南方寶相如来福智圓滿の正法輪身なり／往昔大悲の誓願力によりて和光同塵の三昧に住して／阿和志摩大明神と現じ給ふ／是則と本朝本朝神仙醫藥の祖神／少彦名尊同體の神靈なり或ハ／湯泉權現とあらハレ諸國に温泉を涌出して／諸人の病苦を除き給ひ／又世間流行の宝相七神眷属として／諸人の痲瘡安全を守護し給ふ」（図 8-3）

《宝相恵喜神・宝相寛童神像》 紙本木版 1枚 文久元年（1861）

（下墨摺）京都六角堂能満院」十六才宗立画」

（上墨摺）寶相恵喜神」抑、虚空蔵大菩薩ハ／源ト南方寶相如来／福智圓滿ノ正法輪／身ニマシマシテ往昔ノ大悲ノ誓願力ニヨツテ／和光同塵ノ三昧ニ住シテ／阿和志摩大明神ト／現ジ玉フ是レ則チ本朝ノ神仙醫藥之祖神ノ少彦名ノ尊同體ノ神靈ナリ或ハ湯泉ノ權現トアラハレ諸國ニ／温泉ヲ涌出シテ諸人ノ病苦ヲ除キ玉ヒ又タ世間ノ流行ノ寶相七神ヲ眷属トシテ／諸人ノ痲瘡安全ヲ守護シ玉ヘリ」寶相寛童神」

（版-014・015）

《船玉明神像》

紙本木版

1 枚

江戸時代後期（19 世紀）

（右上墨摺）普問品云入於大海假使黒風／吹其船舫漂墮羅刹鬼國其中／若有乃至一人稱觀世音菩薩／名者是諸人等皆得解脫羅刹／之難或漂流巨海龍魚諸鬼難／念彼觀音力波浪不能没」觀世音菩薩」

（上墨摺）善名稱吉祥如來」第八願云願我來世／得菩提時若有衆生／入於江海遭大惡風／吹其船舫無有洲渚／而作皈依極生憂怖／若能至心稱我名者／由是力故皆得隨心／至安隱處受諸快樂」

（左上墨摺）婆珊婆演底主夜神」花嚴經云為海難者示作船師／魚王馬王龜王象王阿修羅王／及以海神為彼衆生止惡風雨／息大波浪引其道路示其洲岸／令免怖畏悉得安隱／〈梵字:6 字〉守夜神〈梵字:2 字〉」

（左中墨摺）船玉明神ノ縁起ニ云」唐福建郡興化府林氏劉驥云舩商買家／有十一面觀音ニ一子ヲ祈リ授一女ヲ十二月晦日／八ツ時誕生其ノ家ニ楊氏玄凱ノ婦ニ愛染明王／李氏徽遼婦ニ不動明王／十七／三月／廿一日舩中ニ現シ入海三女同日同時ノ誕生也／大明統一志又弇州四部藁等ノ諸書ニ詳ニ記スト」(図 8-4)



図 8-3 宝相七神図 (版-016)



図 8-4 船玉明神像 (版-017)

《宝相七神図》(版-016) (図 8-3) は、そうした能満院施印における民俗神への接近を物語る資料として最も興味深いものである。この宝相七神という護符は他に例を見ないので、賛を見れば、能満院の本尊でもある虚空蔵菩薩が栗島明神として垂迹し、その眷属

である宝相神が子を疱瘡から守るという信仰を背景とするらしい。粟島神が医薬祖神また温泉権現として信仰される少彦名尊と同体とされるのがその理由である。宗立らによる版下が複数残されており²⁹、人気の護符であったらしく、『宝相恵喜神・宝相寛童神像』（版-014・015）はその一部を別摺とした普及版である。こうした施印はまた、能満院の経営を支える開版であった可能性もうかがわせる。図像としては星神信仰の性質も持つ虚空蔵菩薩³⁰が主尊であるところから、これに七星が従う構造となり、星宿図の図像に擬えたものといえる。

大成が描いた《船玉明神像》[969]は、本来本画制作のために起こした新図であるが、図像そのものは、中国の媽祖像に由来すると思われる。媽祖は天妃あるいは天后とも呼ばれ、福建省や広東省の沿岸部に展開した媽祖信仰の対象として、日本にも沖縄九州を中心に展開している³¹。西川如見『華夷通商考』でも紹介され、その図像は寛政8年（1796）の『増補仏像図彙』³²に収録されており、元禄3年（1690）頃出版された『仏像図彙』にはまだ収録されていないところを見れば18世紀にこの国に普及定着した図像であろう。天妃の伝説を背景とする図像は、中国の道教神の図像を借用して、長崎を経由して請来したものと考えられる。

この図像の制作目的は、もちろん海上守護にある。それぞれに船霊神として信仰を受けている観音と善名稱吉祥如来と婆珊婆演底主夜神を組み合わせ、これに中国の媽祖信仰を組み合わせる複雑な構造を持つ。仏典からは『妙法蓮華經觀世音菩薩普門品』³³と『大方廣佛華嚴經』³⁴と『藥師琉璃光七佛本願功德經』³⁵を引用する。こうした新図であっても版（版-017・018）を起こすのは、そこに記される縁起に、民衆救済の利益が求められるためであろう。《宝相七神図》同様、こうした新図に対し憲海は寛容であり、その制作は大成や宗立ら弟子達が創意を見せたものと思われるが、憲海が求める正しい図像の流布という目的は、決して排他的な原理主義を指向するものではなく、最終的に庶民の救済に結びつくべきものとして理解されていることに留意したい。

憲海が神像に対して持つ親和性が、その開版活動に早くから影響していたことは、長谷寺時代の版木に大黒天や三社託宣が含まれていることから理解できる。また、粉本に含まれる明治2年（1869）に復刻された「稻荷明神像」（版-010・011）は、使用する林岳や無言の号からおそらく長谷寺修学時代に開版された版面によったものと思われ、神像の施印活動は、豊山修学時代から始められていたようである。従って、憲海の意志を実現するための工房である能満院にとって、神像は単に収集されるだけの資料ではなく、その施印事業

の一部を形成する重要な要素として認識されていたと考えるべきであろう。

火事によって多くの版木を失った現在、能満院の経疏典籍陀羅尼類の開版状況の全貌は不明であるが、金剛寺に遺される版本によって、その一部が遺されていることは貴重である。もとより、多数施印されながら使用消耗されることが目的である陀羅尼や祈祷札の類は残りにくいものであり、その形態も脆弱である。比較的遺りやすい書籍についていえば、工房の資力や人員構成から考えても、開版に限界があったと思われ、嘉永6年(1853)『梵学宗要章』が能満院で開版されてはいるが、能満院における書籍の出版は大部なものを行うには至らなかったと考えられる³⁶。

結局、能満院施印の実態としては、小典籍から、陀羅尼を初めとする護符・祈祷札、古画より起稿された尊像・絵図の写しと、その応用たる新図まで、かなりの振幅があったと想像するほかない。それは、多様な版本を扱う個性的な出版活動であったと考えてよい。能満院の活動期間はおよそ13年にわたると思われ、決して短いとはいえないが、多様な機能をもった寺院の境内に位置したためか、その特殊性はほとんど認識されておらず、紀行随筆に触れられたものを見ないのは残念である。

しかし、『宝相七神図』の例に見られるような護符の頒布があるならば、加持祈祷の需要もあったと考えるべきであろう。実際、小田慈舟が伝える、憲海が請雨経法を得意としたという伝承³⁷に関わる粉本も幾つか遺されており、版画としては《請雨水鉢図》(版-008・009)が興味深い作例である。墨刷りと彩色本があり、実際の祈祷に際しては消耗品として失われる水鉢図の実際を伝える資料である。これは施印とは異なるが、別の側面から能満院の活動を垣間見させるものである。

密教では修法、灌頂など行うため良日を選ぶ。《種字星曼荼羅図》(版-001)は、種子星曼荼羅に七曜、九曜、十二宮、二十八宿の一覧を加えた実用性を備えた摺り物である。空海たち入唐僧がもたらした『宿曜経』³⁸によって密教僧たちはインド占星術の知識を断片的に得ていたが、それは暦算が可能なものではない³⁹。本命思想が表れているこの摺り物には陰陽道の思想が流入していることになる。憲海が暦の知識をどのように得ていたのかは不明である。写本の中には『立世阿毘曇論日月行品』(書-104)があり、これは仏教天文学である梵暦を体系化した普門円通(1754-1834)が参考とした書物である⁴⁰。また憲海が両部曼荼羅研究のため巡錫した久修恩院では、天文学に通じた宗覚(1639-1720)がかつて住持をつとめており、彼の作成した地球儀や天球儀が遺されていた。憲海が普賢延命象の象座図[464]を依頼した鈴木百年(1828-1891)が土御門家に天文学を以て仕えていた

ことを考えると、憲海の知識の対象には天文も含まれていた可能性がある。

第3節 尊峰による開版

版画の中には、大願入寂後の明治期に、大成や宗立によって制作されたものが含まれている。これらは憲海あるいは能満院の開版とはいいがたいが、憲海の収集した粉本を元に版を製作しており、憲海施印の祈願を継承する活動といえる。その多くは、明治3年(1870)に開版された御室版両部曼荼羅の開版と同じく、志摩庫蔵寺の法雲尊峰(1834-1889)が関与した版画と思われる。

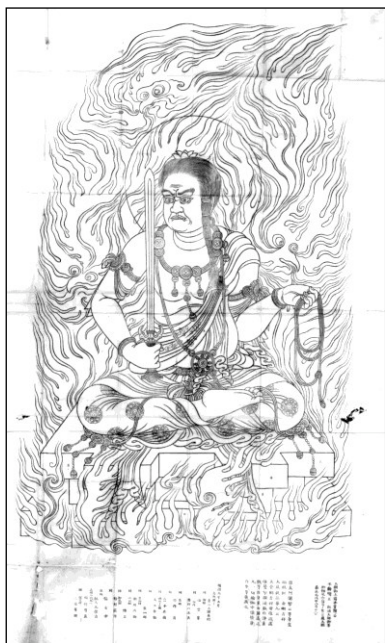


図 8-5 不動明王像 (版-030)



図 8-6 龍猛像 (版-024)

御室版両部曼荼羅というのは、尊峰の発願によって仁和寺尊寿院において開版された高雄曼荼羅粉本による両部曼荼羅の図像集である⁴¹。この開版は、現図と呼ばれる空海請来の両部曼荼羅の図像を原寸で板刻し、後世に伝えようとする偉業として知られている。尊峰については有馬鞭の著した「法雲阿闍梨行実」⁴²に詳しい。尊峰は志摩に生まれ、19歳で庫蔵寺の尊裏に従って剃度した。その後豊山能満院海如に曼荼羅を学び、現図曼荼羅の正図の完成を祈願する。やがて庫蔵寺に戻ると、現図曼荼羅の研究に没入するあまり寺を追われたが、仁和寺塔頭皆明寺照導の助力を得られ、仁和寺において曼荼羅研究を行い、ついに高山寺において兼意模本による粉本を発見し、その上梓を祈願したという。幸い資金の援助もあり、また憲海のもとで曼荼羅の図像に通じた大成らの助力をも得ることがで

き、ようやくこの難事をなしとげたのである。

もとより尊峰の曼荼羅に関する知識は長谷寺において海如より学んだのだから、饒慶の講義に通じており、憲海の学問とも通じるものと考えてよい。また、尊峰が参考にした兼意本模本は、その奥書に高山寺慧友僧護による天保12年(1841)の修理銘があり、憲海が師事した慧友のもとにあったことが分かるので、憲海も目にした可能性のある粉本であった⁴³。尊峰の祈願はまさに憲海の歩んだ道を辿るものであったといえる。従って、大成ら憲海の弟子たちがその事業に関わることになるのは、奇遇ではあったが、むしろ当然の帰結だった。

御室版開版においては、大成、宗立、雲道の三人が、粉本から下絵を起こす役割を担った。大成は金剛界曼荼羅四印会と胎蔵界曼荼羅の不動明王を描いたのみなので、量的には少ないが、尊峰よりも年長であり、監督的な立場をとって、雑事もその身に引き受けていたのであろう。若い宗立と雲道が大部分の下絵を描いた。宗立は胎蔵界曼荼羅の大部分を、雲道は金剛界曼荼羅の大部分と胎蔵界曼荼羅の一部を分担している。金剛界一印会についてはその端書に「原本欠以大願和上転写之図様補」とあって、原画が得られなかったため、憲海の制作した下絵が使用されたことが記されている。これを見れば、高雄曼荼羅の図像については、憲海においても、下図の描き起こしが進められていたと思われる。板刻されたこの端書きは、恐らく完全なものとはなっていなかったと思われるが、憲海の現図曼荼羅研究が存在したことの貴重な記録となっている。

このように幕末維新时期には、両部曼荼羅の権威となっていた尊峰であったが、「法雲阿闍梨行実」に、「また、能く八祖大師十二天を梓行す。(智全曰。八祖十二天之版木は、法雲阿闍梨在世の時、名古屋大須宝生院に送托す。將に謀る所有らんとす。しかるに阿闍梨明治二十二年示寂す。また同寺同二十五年祝融の災に罹る。共に終に烏有となる。嗚呼惜しいかな。)孔雀不動二明王等画像、及び孔雀請雨(以上版木は伊勢国に在り。)仏頂随求等諸経(以上及び大願律師自筆四度次第版は、尾張国宝生院萬徳寺地藏寺に納む。)其の費また資ならず。しかるに其の臨終の言。なお高野山五大明王及び因幡堂愛染明王等画像を刻する能はざるを以て遺憾となす。」とあり、御室版以外の開版についての記事がある。粉本の中には、この記事との関わりを見ることができる版画(版-021~030)があり、これらの開版の資金としては、主に志摩方面の寺や信者からの喜捨が募られている。版画には明治2年(1869)から同10年(1877)の刊記があり、御室版以後に行われた事業であることがわかるので、大成らの能満院以後の活動を伝える貴重な資料となっている。

この時期、病を得ていた尊峰は症状が重く、明治3年（1870）の御室版開版以後、明治22年（1889）に曼荼羅の講義のため上洛するまで志摩に退いているので、これら大型版画の開版を実際に推進したのは大成あるいは宗立らであったと考えてよい。尊峰を軸とする人脈によって資金が集められ、大成らが下絵を作成して彫刻の手配をするという方法であったと考えられる。先に述べたとおり地域周辺に開版に関わる職人は揃っている。従って、製版は京都で行われた可能性が高い。

また、版画の中には、御室版の尊像を復刻して頒布したもの（版-031～043）が含まれている。施主となっているのは、ほとんど志摩国の信者であり、これも尊峰ゆかりの版画と考えてよい。こうした御室版の復刻には勧進の役割もあったと思われ、また正しい図像の流布という憲海以来の能満院の祈願も担っていたことだろう。御室版の開版は、廃仏毀釈の荒波を受けた明治初期の仏教界に、絵像版画の普及を促進したのである。

真言八祖像（版-021～024）は、《龍猛像》（版-024）の刊記に「龍猛大士」裏書云／時承応三甲午霜月吉日當時／撥遣開眼者高野山宝性院主／翁賢宥取次施主之内法主信龍」龍猛菩薩／御筆八祖之内／和州三輪山衆徒中靈宝」于時嘉永四癸亥九月十日於大和國／三輪山平等寺中多樂院寫得訖／王城中眞六角堂頂法寺中能満院大願／五十四歳」明治二年五月刻／志州沙門尊峰／洛陽僧大成拜寫／隨喜者／志州沙門無為道／勢州松阪沙門木如」伊勢国飯高郡丹生山神宮寺／五十五世無盡施賛募刻此一尊畢」とあり、嘉永4年（1851）に憲海が大和国三輪山平等寺中多樂院において承応3年（1654）落成本より模写した粉本により大成が下図を起こして明治2年（1927）に尊峰が開版したものであることがわかる。

十二天像（版-025-028）は安政7年（1860）に大師将来本と備中靈山寺の十二天像を校合して大願が模写した粉本[743-755]をもとに宗立が下図を起こして明治10年（1935）に尊峰が開版したものという。《水天像》（版-028）の刊記に「志州菅島信男木下佐助損貨七圓奉刻／此水天一尊伏願諸事成辦者／明治十年九月下浣／沙門尊峰募刻」とあり、地天像（版-025）の刊記に「地天上木糧寄附姓名勢州飯高郡大石村／不動院實忍／中尾慶次郎／中尾實之助／渡邊玄調／村崎勘兵衛／村崎甚之助／平井徳兵衛／堀井幸右エ門／青木半右エ門／桑山莊兵衛／小林新右エ門／中川源七／伊藤仁右エ門／柴山新之助／隨喜者志州沙門尊峰志州沙門無為道／勢州松阪沙門等如摸寫主洛陽僧宗立」とあつて尊峰、無為道、等如が肝いりとなって、志摩の木下佐助を初めとする伊勢志摩地方からの喜捨によって実施されている。

ちなみに、同じ下絵によって明治4年（1871）にも大成らにより開版された十二天像が

表 8-2 能満院開版摺物及び関係刷物目録

名称	原画作者	材質技法	員数	法量縦 cm	法量横 cm	発行年			備考	目録番号*
弘法大師御筆梵字塔類模写	憲海	紙本木版墨摺	1枚	61.8	27.6	安政3年	1856	07_/23	王城中真六角堂能満院大願恭施]	河金版-110
釈迦親手華判梵書唵字讚	憲海	紙本木版墨摺	1枚	58.9	33.1	安政3年	1856	07_/??	王城中真沙門大願]	版-002
梵書唵字讚	憲海	紙本木版墨摺	1枚	60.1	22.0	安政3年	1856	07_/??	王城中真沙門大願]	河金版-112
光明曼荼羅	憲海	紙本木版墨摺	1枚	100.6	37.7	安政5年	1858	09_/07	能満院大願]	河金版-104
光明真言字輪曼荼羅図	憲海	紙本木版墨摺	1枚	81.6	40.0	安政5年	1858	09_/07	能満院大願] 志州菅島村木下佐助奉刻明治十年八月下浣日]	版-004
光明真言字輪曼荼羅図封紙	作者不詳	紙本木版墨摺	1枚	20.2	13.2	安政5年	1858			版-005
六字名号	憲海	紙本木版墨摺	1枚	109.2	40.1	安政6年	1859	06_/25	王城中心六角堂能満院大願]	版-003
三社託宣	作者不詳	紙本木版墨摺	1枚	49.6	37.1	万延2年	1861		王城中心六角堂能満院印施千品之内]	河金版-099
宝相惠喜神・宝相寛童神像	宗立	紙本木版墨摺	1枚	27.5	19.7	文久元年	1861		京都六角堂能満院] 十六才宗立画]	版-015
宝相惠喜神・宝相寛童神像	宗立	紙本木版墨摺	1枚	27.3	19.7	江戸時代後期	19世紀		京都六角堂能満院] 十六才宗立画]	版-014
宝相七神図	作者不詳	紙本木版墨摺	1枚	69.9	33.8	江戸時代後期	19世紀		王城中真六角堂能満院施印]	版-016
勝敵毘沙門天像	作者不詳	紙本木版著彩	1枚	113.5	59.5	文久2年	1862	06_/01	王城中真六角堂能満院印施千品之内]	版-006
勝敵毘沙門天像封紙	作者不詳	紙本木版墨摺	1枚	27.5	33.0	文久2年	1862			版-007
弘法大師直筆若州岩屋山妙楽寺金堂御建立棟札	憲海	紙本木版墨摺	1枚	83.7	20.6	文久3年	1863	02_/21	王城中心六角堂能満院大願印施加一千種之内也]	河金版-097
三社託宣	憲海	紙本木版墨摺	1枚	66.4	29.8	文久3年	1863	02_/20	王城中心紫雲山六角堂頂法寺内能満院大願六十六歳敬書並彫]	河金版-100
梵字六字名号	作者不詳	紙本木版墨摺	1枚	103.2	30.1	文久3年	1863	03_/21	王城中心六角堂能満院印施千品之内]	河金版-111
種字星曼荼羅図	憲海	紙本木版墨摺	1枚	59.4	32.9	江戸時代後期	19世紀		王城中真六角堂能満院大願慎施]	版-001
高山寺所藏弘法大師金蹟称蓮華六字名号	憲海	紙本木版墨摺	1枚	84.5	20.6	江戸時代後期	19世紀		王城中心六角堂能満院大願施印一千種之内矣]	河金版-095
熊野妙法山鐘銘写弘法大師御真蹟如意宝珠名号	憲海	紙本木版墨摺	1枚	66.6	20.1	江戸時代後期	19世紀		京六角堂能満院大願印施千品之内]	河金版-096
空海寺所藏空海筆大力金剛種子	作者不詳	紙本木版墨摺	1枚	50.0	17.9	江戸時代後期	19世紀		王城中真六角堂能満院施印]	河金版-109
善根功德七種広施扇面(諸徳福田経抄)	憲海	紙本木版墨摺	1枚	23.9	34.2	江戸時代後期	19世紀		王城中心六角堂能満院大願施書]	自在院蔵本
教食大富大慈智恵扇面(法句譬喻経抄)	憲海	紙本木版墨摺	1枚	23.9	34.2	江戸時代後期	19世紀		王城中心六角堂能満院大願印施]	自在院蔵本
聖徳太子像	大成	紙本木版墨摺	1枚	35.2	24.6	嘉永6年	1853		(粉本あり[1105])	版-019
請雨水鉢図	作者不詳	紙本木版墨摺	1枚	54.5	51.5	江戸時代後期	19世紀		(粉本あり[1262])	版-008
請雨水鉢図	作者不詳	紙本木版著彩	1枚	44.6	44.6	江戸時代後期	19世紀		(粉本あり[1262])	版-009
船玉明神像	作者不詳	紙本木版墨摺	1枚	123.9	58.2	江戸時代後期	19世紀		(粉本あり[696])	版-017
船玉明神像	作者不詳	紙本木版墨摺	1枚	122.6	58.3	江戸時代後期	19世紀		(粉本あり[696])	版-018
稲荷明神像	憲海	紙本木版墨摺	1枚	67.7	30.7	明治2年	1869	08_/00	沙門林岳] 無言憲海] 再刻羽州荘内沙門宗賢印施]	版-010
稲荷明神像	憲海	紙本木版墨摺	1枚	67.6	30.7	明治2年	1869	08_/00	沙門林岳] 無言憲海] 再刻羽州荘内沙門宗賢印施]	版-011
稲荷明神像	憲海	紙本木版墨摺	1枚	66.2	30.1	明治時代	19世紀		(異版)	版-012
稲荷明神像	憲海	紙本木版墨摺	1枚	66.7	30.0	明治時代	19世紀		(異版)	版-013
帝釈天像	宗立	紙本木版墨摺	1枚	138.2	64.8	明治4年	1871	01_/00	安政七年庚申三月廿二日王城中心六角堂/頂法寺能満院大願] 京六角堂能満院大成敬識] 随喜者志州沙門尊峰] 模寫主洛陽沙門宗立]	版-020

注 “版”は別表2《田村宗立旧蔵仏画粉本》版本目録の目録番号。“河金版”は『金剛寺の版木(摺物篇)』の図版番号。他は記述に従う。

あったと思われ、《帝釈天像》(版-020)の刊記には「香山院闡彰院瑞應院施貨助刻此帝釈天王而印行ス翼ハ天下泰平也。高祖御請来十二天摸本竝得備中浅口郡三部山靈山寺什寶大師御爪刻木版ヲ對校了。安政七年庚申三月廿二日王城中心六角堂頂法寺能満院大願六十三。其ノ為木版尤モ磨滅不少カラ故ニ一校募刻。明治四年辛未春正月京六角堂能満院大成敬識」随喜者志州沙門尊峰」模寫主洛陽沙門宗立」とあって、浄土真宗大谷派の香山院龍温・闡彰院空覺・瑞應院黙慧らの出資により上梓した版画であることがわかる。大成の識語により憲海写本に従う旧能満院工房の事業といえるが、御室版開版直後の彼らと尊峰の関わりが伺える資料であり、後の尊峰による十二天像開版の先行事業として、憲海から尊峰への事業の継承を見ることができる。

また《不動明王像》(版-030)は嘉永元年(1848)に高山寺で憲海が写した粉本により志摩青峯山正福寺の大円が彫刻したものである。尊峰が協力したとあるのは、資金の大半が志摩の信者から集められているので勧進であろう。《孔雀明王像》(版-029)は、文政12年(1829)に長谷川等鶴の粉本を大願が模写したものを、嘉永元年に智積院の原本と校合した時使用した粉本に基づいて開版したものである。粉本中の留書を詳細に刻し、密度のある図像をそのまま大判の版木に写し取っていて、一連の大型版画の中でも特筆に値する密度を見せる。おそらく刊記は別刷りにされたと思われ、開版の詳細が明確にされていないのが残念だが、出版にあたり憲海に対する配慮が遺されている点が興味深い。この後者二点も「法雲阿闍梨行実」にある「孔雀不動二明王」の記事によく合致するので尊峰版と考えるとよいだろう。恐らく《孔雀明王像》については、能満院において一旦開版されたと思われるが、版木が失われたため尊峰が復刻したものと考えられる。二つの墨摺を見ると、版下に「無言蔵大願」の名が記されていたことがわかる。この形式の記名は珍しく、憲海自身が開版のための校合を終えたことを表明する意図があったと考えてよい。実際これほどの大型版画となると、版木の調達ですら勧進が必要であったと考えられるため、開版を計画しただけでは実現するとは限らなかった。

「法雲阿闍梨行実」の宮崎智全の注には、この八祖像と十二天像の版木は、明治25年(1892)に宝生院の火災により焼失したとあるが、東寺には、覆刻と思われる八祖像及び十二天の大型版木が遺されている⁴⁴。《龍猛像》(版-024)の刊記を比較すれば、東寺本は、泉涌寺龍暁(1838-1914)が願主となり、京都の寺院と志摩の信者が助力して開版したものである。龍暁を大僧正としているので明治28年(1895)に大僧正に補されてのちのものと考えられ、彼はその後東寺の住持を兼務したこともあるため、版木はそのまま東寺に残ったものと推

測する。尊峰入寂の地である泉涌寺の龍暁が、その開版の業績を惜しみ、覆刻に至ったと考えるのが妥当であろう。この時、すでに大成も雲道もこの世になく、宗立も洋画と文人画の世界に転身していた。東寺本の大型版画は憲海の下図ではあるが、もはや能満院工房の関わるものではなかった。

第4節 収集版画

収集された粉本の中には、能満院の関与が不明な版画も多い。仏教版画も図像の範疇にあるから、粉本同様収集の対象となる可能性はあるが、寺や在家信者による諸国の施印本を見る限り、必ずしも図像的に興味深いものばかりとは思えず。粉本筆筭に収められた意味はいまひとつ明確ではない。資料としての役割があったことが推測できるものとしては、次のようなものがあげられる。

- 一 海如開版と思われる版画（版-052～059）
- 二 龍肝開版と思われる版画（版-060～062）
- 三 長谷寺開版と思われる版画（版-063～067）
- 四 憲海の所蔵印（「無言蔵」「憲海書籍」「無言蔵図書記」）のある版画（版-068～079）
- 五 六角堂能満院の所蔵印（「王城中真六角堂能満院」）のある版画（版-080～089）
- 六 裏書きなどの墨書により収集の意志または経緯が読み取れる版画（版-090～105）

海如は憲海の弟子であり、龍肝は憲海の師である。これら憲海の周辺にいた学僧もまた開版に熱心であったことは、憲海にとってよい刺激になったものとする。海如については先に述べたとおり、開版に積極的であり、同じ正法律を護持する者として、憲海とは異なる立場で開版を行った。田中海應は両界法曼荼羅、雨宝曼荼羅、宝珠曼荼羅、宝篋印塔、加行本尊などの印行があった⁴⁵とするが、能満院に遺されているのはこのうち両界法曼荼羅（版-054）のみである。そして、能満院に遺る海如施印本の大半は、現在の豊山能満院に版木が遺されていない⁴⁶。

龍肝は真言僧の中では、憲海によく似た志向を持ち、相当数の粉本を収集保存し、また聖経の収集にも積極的であった。憲海が龍肝の開版した大型版画《釈迦涅槃図》を広伝寺に納めたことは、憲海にとっても後の開版活動を予感させるものがあったと考えている。

また、龍肝が開版した両界種子曼荼羅（版-60・61）も小型ながら金剛界を九会で表わしており、その封紙（版-62）に「此圖者別途一箇也異説多端而不一定諸為／學密諸君子各依所傳校訂之者弘通一助乎」と記している。まさに現図曼荼羅の異説探究のために作られた雛形本として興味深い開版である。憲海はこれに澄禅の版本を以て校合を加えている。澄禅（1613-1680）は智山の僧で肥後の人である。悉曇研究で知られ、憲海が校合に用いたのは寛文期頃の開版と考えられているほぼ同大の種子曼荼羅である⁴⁷。

絵師系原画の版画は、絵画的資料価値により収集対象となった可能性があるが、冷泉為恭や原在中、長谷川等鶴の下図とされる版画についていえば、さらに付加する意味もあったと考えられる。すでに述べたとおり為恭は高山寺を場として憲海との接触が考えられており⁴⁸、地藏菩薩を描く版画が高山寺に伝えられる事実は、その来歴に特別の事情があったことが考えられる。原在中（1750-1837）は飲光の周辺においてかなり専門的な絵事にあたっており、憲海は高貴寺で在中筆の《一字金輪仏頂曼荼羅図》[1129]の模写を行っている。高貴寺には在中の描いたものが複数遺されており⁴⁹、活動期間こそ重ならないが憲海と在中には正法律という共通の空間があった。長谷川等鶴（1757-1810）については、すでに亡くなってはいたものの久修恩院での金剛界曼荼羅図粉本[1439-1450]書写により長谷川家の絵師として既に知るところとなっていた。入洛後の憲海と長谷川家の協力関係には、相応の歴史があることがわかっている。このように憲海と接点を持つ絵師の版本については、その絵画的 content とは別に興味の対象となっていたことが考えられる。

収集された版画の一部には刊記があり、施主の分布がわかる。京都における施印（版画目録 130-149）が最も多く、他も大半が畿内のものである。志州・勢州で施印されているのは、御室版以後に尊峰との関わりの中で入手されたものと思われる。晩年の大成が社寺施印に協力している例があるので、あるいは依頼を受けて、復刻をすることもあったかもしれない。

また、まったく刊記を欠くものの中にも《十二天像》（版-239・240）や《黄不動像》（版-235・236）、《宝珠曼荼羅図》（版-224）など、掛幅への使用も可能な比較的大型の墨摺が含まれている。こうした例は長谷寺の版木の中にも見られ⁵⁰、開版そのものが作善であったと思われるが、この大きさの版画は、そのまま彩色して表装すれば尊像として使用することが可能で、量産仏画制作との関わりを見ることができる⁵¹。単なる墨摺図像にとどまらず、着彩画の下絵として利用する可能性を意識したものと考えられる。

版画を使用した量産仏画は、中世以後少なからず流通し、需要の多い近世においてはそ

の数も増したと思われるが、推測されるその利用状況を考慮すれば、伝世することの難しい版画ということがいえる。美術史的には、顧みられることのない分野だが、文化史的な資料性は高い。能満院がこうした開版を行っていたかどうかは不明だが、遺された墨摺は紙質などから判断する限り、明治にはいつてからの摺りと思われる。

以上でこの章の検証を終わる。憲海が豊山修学中から開版に興味を示し、会津亀福院では次第に出版を事業化するに至っている。憲海が能満院において工房を主宰するには、いくつかの条件が整う必要があったが、その一つが開版事業の実務的経験であったと考えられる。能満院に入る際、憲海は絵仏所ではなく出版工房の開設を当初より選択していたと考えられ、着実に開版事業への経験を重ねている。憲海は粉本聖教を収集すると、その内容をできる限り標準化、共通化する道を求めて校合を重ねたと思われ、開版は弘通を期待して行われるのである。

空海所縁の図像や校合済み図像である能満院本のほか、庶民の願望に応える民俗神像の開版も憲海の大願の実践として理解され、声高な主張はなく、無言蔵という号のままに、黙々と図像、聖經の普及を使命としたのである。それは画僧でもなく、事業者でもなく一人の律僧としての生き方を物語っている。

また、憲海没後に尊峰が行った開版事業としては御室版両部曼荼羅の刊行のみが突出して知られているが、他にも多くの勧進を行い、大成らとともに大型版画の開版事業を行ったことが確認されており、憲海から尊峰に至る開版への意志とそれを支える憲海の弟子たちの努力という構造が理解される。

【注】

- ¹ 小原洪秀「印行曼荼羅について」(『密宗学報』第178号、1928年6月)、p.312。
- ² 《田村宗立旧蔵仏画粉本》において、大願は会津の絵師萩原盤山を先生と記しており[1097]、また大成も長谷川等鶴(版-109)、鈴木百年[464]を先生と記していて、絵画制作の専門家としての絵師に敬意を以て接している。
- ³ 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第二輯 版木』(総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、1999年5月)、目録番号155。
- ⁴ 法界安立塔については能満院粉本の中に関連資料が複数存在する。「爰に高祖大師寶祚延長法界安立之御為にとて手つから一基之卒塔婆をきさミ山上に安置し給へり数百餘年墨汁新に潤ひて梵漢両字炳然たり寔に當寺の靈宝これにまされりとて今は經庫におさめて函底に秘しけり」[1258]と縁起を写したものに加えて、乾拓による弘法大師五輪塔婆拓影2枚[1249・1250]とその封紙[1251・1252]がある。拓影の1枚には「高祖大師御真筆卒塔婆文政

五壬午八月十四日河内州葛城山高貴律寺於不動堂墨写之了無言道憲海」とある。また、書写年不明ながら、これを籠字によって透写したもの4枚[1253-1256]が遺っている。

⁵ 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第二輯 版木』(総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、1999年5月)、目録番号18。

⁶ 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第二輯 版木』(総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、1999年5月)、目録番号103。

⁷ 第2章第1節。

⁸ 天保4年(1833)1月に大和聖林寺が開版した『弘法大師行状』『伝教大師行状記』の刊記には「願主 和州龍門山無言誌」とある。当時真言律の寺であった聖林寺の開版に憲海が関わった可能性があり。これも憲海と開版事業との結びつきの早さを物語る資料である。『聖林寺の版木』(元興寺文化財研究所、2008年3月)、pp.13,16。

⁹ 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第一輯 絵画』(総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、1994年5月)、目録番号91・92。

¹⁰ 小原洪秀「印行曼荼羅について」(『密宗学報』第178号、1928年6月)、p.305に「刻両部大曼荼羅附言」が翻刻される。

¹¹ 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第二輯 版木』(総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、1999年5月)、p.185。

¹² 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第二輯 版木』(総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、1999年5月)、目録番号113・114・132。校訂の内容については同書「長谷寺所蔵版木の概要 二 所蔵絵画と版木について」pp.34-38に詳しい。

¹³ 小原洪秀「印行曼荼羅について」(『密宗学報』第178号、1928年6月)、p.314。

¹⁴ 田中海応「海如和上傳」(徳蔵寺、1924年12月)、pp.48f。

¹⁵ 小原洪秀「印行曼荼羅について」(『密宗学報』第178号、1928年6月)、pp.300-305。長谷寺版の「刻両部大曼荼羅附言」に亀龍院版の焼失を惜しみ、山内にその復刻を考えていたことが記される。亀龍院については大正5年(1916)の『京都坊目誌下巻第三学区之部』「亀龍院」(『新修京都叢書』第20巻、臨川書店、1995年5月、pp.96f)に記事がある。

¹⁶ 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第二輯 版木』(総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、1999年5月)、p.185。

¹⁷ 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第二輯 版木』(総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、1999年5月)、p.38。

¹⁸ 《金剛界曼荼羅界線文様帯等図》[1439]から《金剛界曼荼羅縮図界線図》[1447]。

¹⁹ 菊竹淳一『仏教版画』(至文堂、1984年7月)。

²⁰ 《聖徳太子像》[1105]。同図を下絵とした版本は《聖徳太子像》(版-019)。

²¹ 蒔田稲城『京阪書籍商史』(高尾彦四郎書店、1968年10月)、pp.64-68。

²² 蒔田稲城『京阪書籍商史』(高尾彦四郎書店、1968年10月)、pp.85-95。

²³ 蒔田稲城『京阪書籍商史』(高尾彦四郎書店、1968年10月)、pp.108-125。

²⁴ 蒔田稲城『京阪書籍商史』(高尾彦四郎書店、1968年10月)、pp.114f。

²⁵ 『出版文化の源流 京都書肆変遷史 江戸時代(1600年)～昭和20(1945年)』(京都府書店商業組合、1994年11月)、pp.311f。

²⁶ 『出版文化の源流 京都書肆変遷史 江戸時代(1600年)～昭和20(1945年)』(京都府書店商業組合、1994年11月)、p.40。

²⁷ 『出版文化の源流 京都書肆変遷史 江戸時代(1600年)～昭和20(1945年)』(京都府書店商業組合、1994年11月)、p.409。

²⁸ 内田啓一『日本仏教版画史論考』(法蔵館、2011年2月)、pp.271-340。

²⁹ 《宝相七神図》[1029-1034]。

³⁰ 佐野賢治『虚空蔵菩薩信仰の研究—日本の仏教受容と仏教民俗学—』(吉川弘文館、1996年2月)、pp.235-299。

³¹ 藤田明良「日本近世における古媽祖像と船玉神の信仰」(『近現代日本社會的蛻變國際研

- 討會論文集』、中央研究院人社中心亜太區域研究專題中心、2006年12月)、pp. 1-36。
- ³² 『増補諸宗仏像図彙』卷四。14丁才「船玉宮」。
- ³³ 『大正新修大藏經』No. 262。第9巻 p. 56 下。
- ³⁴ 『大正新修大藏經』No. 279。第10巻 p. 369 下。
- ³⁵ 『大正新修大藏經』No. 451。第14巻 p. 409 下。
- ³⁶ 『智山書庫所蔵目録』(真言宗智山派宗務庁、第1巻:1994年3月・第2巻:1995年5月)に収録される刊本で憲海の関与が確認できるのは『梵学宗要章』『佛遺教経』のみである。
- ³⁷ 小田慈舟「御室版両部曼荼羅の開版と其功労者」(『密宗学報』第178号、1928年6月)、p. 294。
- ³⁸ 『文殊師利菩薩及諸仙所説吉凶時日善惡宿曜經』(『大正新修大藏經』No. 1299。第21巻 pp. 387ff)。
- ³⁹ 山下克明『平安時代の宗教文化と陰陽道』(岩田書院、1996年11月)、pp. 283-317。
- ⁴⁰ 岡田正彦『忘れられた仏教天文学 十九世紀の日本における仏教世界像』(ブイツーンリビューション、2010年11月)、pp. 64-71。
- ⁴¹ 御室版両部曼荼羅は、明治3年(1870)3月に開版して200部を摺り、大正2年(1913)5月に大村西崖が『三本両部曼荼羅集』(仏書刊行会)を刊行した際に300部が摺られ、昭和47年(1972)5月佐和隆研による『御室版曼荼羅尊像集』(法蔵館)刊行にあわせて、さらに150部が摺られた。同曼荼羅については小田慈舟「御室版両部曼荼羅の開版と其功労者」(『密宗学報』178号、1928年6月)のほか、ここに挙げた大村、佐和の著書により解説される。
- ⁴² 大村西崖『三本両部曼荼羅集』(仏書刊行会、1913年5月、pp. 5-7)に宮崎智全付注の全文が翻刻される。小原洪秀「印行曼荼羅について」(『密宗学報』178号、1928年6月、pp. 308-311)にも同文が再掲される。
- ⁴³ 平安時代の僧兼意が描いた高雄曼荼羅の図像模本を後に転写した冊子。ほぼ完本をなし、高山寺に伝えられた後、個人蔵となった。醍醐寺所蔵本とともに、高雄曼荼羅の図様を伝える。柳沢孝「高雄曼荼羅の白描本」(東京国立文化財研究所美術部編『美術研究所報告高雄曼荼羅』、吉川弘文館、1967年) pp. 95-108。
- ⁴⁴ 『「東寺の仏教版画」展図録』(東寺宝物館、1991年3月)、pp. 1-5。
- ⁴⁵ 第3章第4節、p. 118。
- ⁴⁶ 『桜井の版木ー談山神社・能満院』(元興寺文化財研究所、2004年3月)、pp. 18-30。
- ⁴⁷ 三井淳生『日本の佛教版画』(岩崎美術社、1986年9月)、pp. 157f。
- ⁴⁸ 第3章第6節。
- ⁴⁹ 天明3年(1783)《慈雲尊者巖上座禅像》《楊貴妃骨相図》、寛政3年(1791)《両界種子曼荼羅》などがある。『「高貴寺所蔵 慈雲の書」展図録』(東京国立博物館、2004年11月)。
- ⁵⁰ 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第二輯 版木』(総本山長谷寺文化財等保存調査委員会、1999年5月)、目録番号1。
- ⁵¹ 平塚運一「一枚摺の版画」(『日本版画美術全集』第1巻「古代版画」、講談社、1961年9月)、pp. 175-182。

終章

第1節 本論の概要

本論は幕末期の京都六角堂能満院に置かれた仏画と出版の工房に関わる研究である。この工房の主宰者大願憲海（1798—1864）の事跡は、明治3年に開版された御室版両部曼荼羅の制作に関わる文脈の中で語られることが多かった。しかし、近年《田村宗立旧蔵仏画粉本》及び智山書庫所蔵憲海関係書籍文書の整理公開が進み、憲海が行った事業の実態とその意義について考察を加えることが可能となり、新たな転機を迎えた。会津地方を中心とする新資料の発見と新たな視点からの研究も生まれ、会津と畿内という二つの地域に活動した憲海の人物像はより明確な輪郭を見せるようになっていく。

復古的思潮が台頭する中で憲海は、宗祖空海への敬慕と釈迦在世の仏教を理想とする信仰生活を実践した。慈雲飲光の提唱した正法律に加わり、弘通と遺風の継承を自らの大願としたのである。しかし、憲海は極めて寡黙であり、その活動は当時の宗団の中でも特殊なものであったため、彼の思考やその活動に対する正確な評価はなされていない。彼が主宰した六角堂能満院工房の遺品や各所に所蔵される書籍文書類を手がかりに、貴重な文化遺産の継承に貢献した憲海の思考を考察することが本論の目的である。

憲海の出発点は、豊山派の真言僧として、正統を行くものである。彼は本山での修学を二十年以上続けており、これは宗団に於いて幹部への道を歩んでいたことになる。ところが、長谷寺交衆中、憲海は次第に独自の見識を以て行動しはじめる。正法律を堅持する黙住信正に具足戒を受けると、以後は宗団との関わりを希薄にしていくのである。正法律は、慈雲飲光が戒律復興のため提唱した僧尼のありかたであったが、黙住の師である飲光が、宗派の偏向から距離を置いたように、憲海もまた同じ道を選んだと思われる。「宗旨がたまり祖師びいき」を難じる飲光以上に憲海はこれを実践し、豊山とも正法律一派とも距離を置くのである。この一種の潔さは、憲海という独特の行動力を持つ人物像をよく伝える性質である。

憲海が悉曇の先達の一人としてあげた後宇多法王は、野沢の事相を学び、悉曇も学んだ上で、これらの統合を試みた人物であり、憲海がその七百年遠忌を前に『両部讚草帋』を刊行して顕彰した興教大師覚鑿もまた諸流遍学によって分化する法流の根本にあるものを学ぶことを説いている。憲海は、こうした先達とすべき古徳らの思考に学びつつ自らの事

業の意義を確信したのであろう。憲海が求める正法への道は、後世に付加された些末な差異を超えて、祖型に帰るものであったが、その方法は実証的であった。

生涯を通して、憲海の行動には明確な目的意識が見られる。その事跡は、信仰の道程を如実に示して澱みがない。ただ、このように行為によって表現される思考というものは、言語によって人の営みを理解しようとする者の接近を、しばしば困難にする。彼の行動は、戒律を重んじて僧のあるべき姿を模索するものであり、それ自体は我々在俗の者が容易く近づけるものではない。しかし憲海はそれを、図像聖教の収集と開版という、極めて現実的、具体的な成果によって跡付けられる実践の中に行った。無言蔵という彼の字は、まさに彼の信仰のあり方を物語るものといえる。憲海は極めて寡黙であり、その著述も限られている。その意味で『梵学秘要篇』に著された「発願し奉る誓の文」は貴重である。そこには、空海に対する敬慕と、正法を理想とする沙門の生き方に対する決意が見えて憲海の思考の根源が記されているためである。

こうした思考が形成される背景には、憲海が交わった師僧からの影響が大きかった。会津地方における伝説的な憲海像を見ても、早くから悉曇を学んでいたことが伝えられ、学問的興味の早熟さがわかる。豊山出身ながら正法律に進具した鳳寛鏤慶との出会いがどのように始まったものかは不明だが、憲海が自ら求めるものをこの正法律の思想の中に見たのは確かである。しかし、憲海は学修を進めるうちに高山寺の慧友僧護と出会うのである。この僧護との出会いは憲海に決定的な影響を与えた。僧護は正法律に進具しながらこれを離れた僧だが、高辨の思想に学びつつ、独自の見識において戒密を修めるのである。その姿にはまた憲海と違った潔さがあり、今後研究の待たれる人物である。憲海は正法律を堅持してこれを離れることはしなかった。離れたのは宗団からなのである。

正法律を唱え、理想の実現を志して揺るぎない行動力を示した飲光と、密教の正統をこの国にもたらし、その定着に尽くした空海への敬慕を、憲海の行動の中にかがうことは容易い。それは、平たくいえば原点回帰を求める思考の傾斜であったが、一方で、僧侶というものの存在を本質から問いかける内省的な側面も持っていた。自分自身の存在理由を真摯に求めるところから、源流への眼差しが開かれたといえる。正法律に従う僧に共通する性質として、学問的な考究は、行動に裏付けられなければ意味をなさなかった。思想家としての憲海の特質は、まさにこの実践に集約されているのである。憲海の学問は祖型への接近であったから、些末を廃して時に単純に見える。しかしその背後で費やす学修の苦勞は決して単純ではない。

以下、簡単に本論の内容をまとめておく。

第1章「六角堂能満院粉本」では《田村宗立旧蔵仏画粉本》2673点の概要を検証した。その大半は憲海が主宰した六角堂能満院工房旧蔵粉本であり、一割の摺本と九割の写本で構成される。憲海やその資僧大成憲里らの手による書写が確認され、粉本筆筭に分類して保管されていたが、中世の白描図像とは異なる視点から収集されており、総体に粉本と呼ばれる絵画制作の参考資料として整理されていることが確認された。

第2章「憲海と憲里」では、憲海の生涯を五期に区分して検証した。会津で生まれた憲海は豊山長谷寺に交衆した後、会津八角神社別当亀福院の住持となる。越後から来た憲里が資となると、憲海は亀福院を辞して入洛。山王寺に寄寓して積極的に粉本経疏の収集を行い、やがて六角堂能満院に入る。そこで印施千種の願を立て開版事業を行うが、元治元年の兵火により能満院は多くの版木と共に焼失し、まもなく憲海は遷化した。青年期から独自の思考と価値観を以て諸山に学んだ憲海が、その思考の実現に専心する契機を与えたのは資僧憲里の存在であった。

第3章「憲海の師と人脈」では、憲海の師僧である慈光寺鳳寛鏤慶、長栄寺黙住信正、高山寺慧友僧護の事跡を整理した。全て慈雲飲光の提唱した正法律に連なる僧であるが、中でも後に正法律を離れた僧護との関係は重要であり、入洛後の憲海を支援したことが推測される。また憲海の資であり正法律に進具した光雲海如は、憲海と好対照の生き方を見せたが、その交わりは継続した。当時高辨の精神を継承し、多くの書物を蔵した高山寺は、僧護を要として学芸交流の場を生み出しており、願海、海如、冷泉為恭、憲海という異才たちの交差点となっていた。

第4章「憲海の発願」では、寡黙な憲海がその著作『梵学秘要篇』に表わした「発願し奉る誓の文」を検証して、彼が信仰の基盤に置いたと考えられる空海への敬慕と正法に対する帰依の態度を確認した。釈迦を信奉しその言説を正しく理解するための語学として悉曇声明を学ぶ憲海が、その研究成果を仏法の興隆と弘通のための開版に結びつけていることも分かった。憲海は諸山を巡り資料を収集する過程でこうした研究の目的を自得したと考えられる。

第5章「粉本と儀軌」では、近世的な粉本群である能満院粉本と儀軌との関わりを検証し、中世の白描図像との差異について確認した。近世では、教学興隆により事相面からの需要はあったが、顕教図像や垂迹画像も含めた多様な粉本が存在する中、密教図像の役割は縮小している。憲海が図像を収集するのは、より正統な画像を選び、諸本を校合して汎

用性のある図像として固定するためである。憲海の工房はこうした粉本編集の成果をもとに、庶民信仰への視点も留意しながら開版による流布を実践していたと考えられる。

第6章「恵心院本」では、宇治恵心院に伝えられた仏画粉本である恵心院本についてその概要を検証した。恵心院本は南都絵所芝座に関わる粉本であったことが墨書からうかがわれ、憲海の書写によって継承されたものである。観重、観深、観英と続いた中世末期の芝座の活動状況とその衰退を物語る資料として貴重だが、粉本群は顕教の図像を含む中世以降に展開する画題が中心である。憲海の思考の中で粉本としての図像という価値観が確立していることが理解される。

第7章「長谷川本」では、絵仏師長谷川家と憲海の関係を検証し、能満院工房開設への影響が確認された。豊山交衆期の憲海は長谷川家と知己となっていたと思われ、憲海入洛後長谷川家は憲海を支援している。能満院工房の開設準備にあたる憲海らは、長谷川家の粉本を多数書写し、絵仏師の工房について多くの情報を得た様子がうかがえる。絵仏師長谷川家は桃山期の絵師長谷川等伯の末裔であり、江戸中期に世俗画を描く絵屋から絵仏師へと家業を転じた。これまでほとんど紹介されることのない近世京都の長谷川家累代について系譜と過去帳により検証を行った。憲海の絵仏師に対する峻別は極めて現実的なものであり、図像に対する意識の持ち方を重視したと考えられる。

第8章「憲海と開版」では、憲海と開版事業との関わりを検証し、憲海の思考が能満院工房の事業の根幹にあることを確認した。憲海は青年期から開版に関わっており、その思考の中に施印による弘通という回路を持っていた。能満院工房は基本的には開版を事業としており、そのために図像や聖教の収集を行い、内容の校合作業を行っていたと考えられる。また、憲海遷化ののち、彼の弟子たちが尊峯法雲の開版事業に関わることになる理由についても、彼らの中に憲海の思考が定着していたことが、尊峰の信仰の受け皿となり、大型摺本の制作に結びついたことを確認した。

第2節 今後の課題

本論によって得られた新たな知見は、次のとおりである。

《田村宗立旧蔵仏画粉本》については、粉本筆筭の分類から、能満院工房が中世の図像集に見られる分類を援用するが、工房開設当初から近世的な粉本群として整理方針を立てていることが確認された。粉本の収集は、憲海入洛後に急激に拡大したものであり、白描

粉本の検証から、校合によって汎用性のある図像を求める作業の存在したことを確認した。工房は注文により肉筆画も制作したが、開版事業が本務と考えられる。

憲海が能満院で立てた大願については、空海への敬慕に基づくところが大きく、空海関係の資料の収集と現図曼荼羅の開版を計画したという伝承の基盤となる思考の萌芽が確認された。印施千種の大願に関わる開版施印事業の一端を提示することができたが、空海資料がその中で一群をなすことがわかり、彼の思考と工房事業との関係を明確にすることができた。憲海の正法に対する視野の中には、飲光を越えて高山寺の高辨があり、覚鑿がいて、空海がいることが理解され、複雑な分化を見せる以前の仏教の姿に接近を試みる思考が確認された。

大成憲里については、単に憲海の資僧というのみならず、憲海入洛の契機を作り出し、能満院工房の開設においては、憲海を補佐して経営の雑事をこなしたことが考えられ、能満院工房から御室版両部曼荼羅開版に至る諸事業において、従来考えられているよりもより重要な役割を果たした人物であることが確認された。

絵画史上の知見としては、従来から認識はされながらも、その累代の事跡については明らかにされる機会のなかった長谷川家について、長谷川家家譜と過去帳によってその行実を検証した。能満院工房開設にあたっては長谷川家の影響の存在を想定するに至った。加えて、憲海が模写した恵心院本と呼ぶ南都絵所芝座に関わる粉本の検証によって、16世紀の芝座絵師観重、観深、観英に関わる事跡について知見を加えた。

幕末期の復古的潮流における学芸上の知見としては、高山寺の僧護の周辺に集まる人物交流の存在が確認され、願海、海如、冷泉為恭、憲海らの交差する舞台となったことが確認された。

本論は、能満院工房の事業の意義と、その背景にある憲海の思考の要所について、その輪郭を示すものである。しかし、ここに取り上げた主題の多くは、未だ開拓の進まない研究分野であり、今後さらなる資料の発見と検証が求められている。

智山書庫に収められた資料については、まだ検証されていないものが多数残されていると考えられ、憲海の思考の解明には、さらなる資料の発見が期待される。高山寺の所蔵する資料の研究とともに、その内容の具体的な検証に踏み込む必要がある。特に明治期の火災によって多くの関係資料が失われたとされる慧友僧護と、長谷寺能満院に関係資料が遺される光雲海如については、憲海研究の視点のみならず、高山寺における幕末期の学芸活

動の視点からも今後の研究が期待される。

また、正法律との関係からすると、憲海がこれを堅持しつつも、一派との距離を置いている点が注目される。悉曇においても、両部曼荼羅への見解においても、憲海が飲光に盲目的に追従していないことが興味深く、正法律一派側から見た憲海像の考察は必要だろう。それは、憲海の雲伝神道の理解や、彼が民衆教化の活動の中で見せる民俗神への包容力といった未だ手つかずの領域に関わる問題とも関わるものである。さらに、憲海が見せる古文化財への興味は、憲海を近世末期の考古学者、博物学者の一群に位置づけることが可能であり、正法を求める活動の中に見せる実証的態度を通して、別の視点から憲海の思考に近づく余地を残すと言える。

初出一覧

序章 (新稿)

第1章 六角堂能満院粉本

「六角堂能満院仏画粉本」

(『民族芸術』Vol. 11、民族芸術学会、平成7年4月)を増補改訂

第2章 憲海と憲里

「六角堂能満院大願憲海の会津における事跡について」

(『京都市立芸術大学芸術資料館年報』16号、平成19年3月)を増補改訂

第3章 憲海の師と人脈 (新稿)

第4章 憲海の発願

「智積院の大願憲海旧蔵書について」

(『京都市立芸術大学芸術資料館年報』17号、平成20年3月)を増補改訂

第5章 粉本と儀軌 (新稿)

第6章 恵心院本

「恵心院本仏画粉本と南都絵所芝座」

(『京都市立芸術大学芸術資料館年報』15号、平成18年3月)を増補改訂

第7章 長谷川本

「大願憲海と長谷川家の粉本」

(『京都市立芸術大学芸術資料館年報』23号、平成26年3月)の改訂

第8章 憲海と開版

「田村宗立旧蔵仏画粉本における仏教版画について」

『京都市立芸術大学芸術資料館年報』14号、平成17年3月)を増補改訂

終章

(新稿)

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

							注 *本目録は、《田村宗立旧蔵仏画粉本》2673点のうち写本のみ2396点を、粉本筆筭の旧函分類によって一覧としたものである。各項目の凡例は下記のとおり。 (旧函名) 絵本筆筭の函名または貼紙墨書による復元分類。 (通番) 本目録における目録番号。本論において半角[]書で示される。 (制作年) 月/日に小文字の`u`が付される場合は閏月を示す。 (印影) 本論第1章「図1-1能満院粉本主要印影一覧」における印影番号。 (資料番号) 京都市立芸術大学芸術資料館における資料の収蔵番号。 (図像聚成) 『仏教図像聚成』(法蔵館、2004年)における資料番号。図版及び墨書を収録。								
旧函名	通番	名称	制作者	材質技法	形態	員数	法量縦 cm	法量横 cm	制作年(月/日)			印影	原本の情報	資料番号	図像聚成
01仏頂	1	金剛界大日如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	59.2	38.6	天保14年	1843	09 /03		高雄曼荼羅金剛界一印会	130020091000	聚成-1165
01仏頂	2	金剛界大日如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	90.0	66.5	安政3年	1856	06 /30			130020090700	聚成-1166
01仏頂	3	金剛界大日如来像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	38.0	27.3	文久3年	1863	08 /26			130020090800	聚成-1167
01仏頂	4	金剛界大日如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.8	19.3	江戸時代後期	19世紀				130020090500	
01仏頂	5	金剛界大日如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	36.7	24.5	江戸時代後期	19世紀				130020091600	
01仏頂	6	胎藏界大日如来像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	72.6	63.1	弘化4年	1847	08 /09		長谷川等舟図(天保14:1843)	130020090900	聚成-1022
01仏頂	7	胎藏界大日如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	76.1	55.6	安政4年	1857	02 /08			130020090100	聚成-1169
01仏頂	8	胎藏界大日如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	52.0	38.3	江戸時代後期	19世紀				130020090205	聚成-1170
01仏頂	9	宝幢如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.5	27.1	江戸時代後期	19世紀				130020090202	聚成-1174
01仏頂	10	開敷華王如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.6	27.5	江戸時代後期	19世紀				130020090204	聚成-1172
01仏頂	11	開敷華王如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	49.5	38.0	江戸時代後期	19世紀				130020090300	
01仏頂	12	開敷華王如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.1	39.5	江戸時代後期	19世紀				130020090400	聚成-1176
01仏頂	13	無量寿如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.4	27.5	江戸時代後期	19世紀				130020090203	聚成-1173
01仏頂	14	天鼓雷音如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	73.9	38.5	嘉永7年	1854	07 /23			130020091500	聚成-1175
01仏頂	15	天鼓雷音如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.7	江戸時代後期	19世紀				130020090201	聚成-1171
01仏頂	16	五智如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	66.2	40.5	江戸時代後期	19世紀				130020090600	聚成-1168
01仏頂	17	金剛薩埵像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	60.6	24.7	弘化4年	1847	07 /21			130020270100	
01仏頂	18	金剛薩埵像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.6	27.1	江戸時代後期	19世紀				130020270200	
01仏頂	19	金剛薩埵像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	123.6	58.2	江戸時代後期	19世紀				130020270300	聚成-2043
01仏頂	20	一字金輪像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	89.5	73.0	江戸時代後期	19世紀				130020100400	聚成-1177
01仏頂	21	一字金輪佛頂大随求菩薩像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	53.8	29.5	万延元年	1860	11 /11		勢州大室院本	130020280800	
01仏頂	22	熾盛光仏像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	59.0	27.4	安政3年	1856	12 /29			130020100800	聚成-1181
01仏頂	23	仏眼仏母像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	178.0	119.9	嘉永元年	1848	11 /10		梶尾山蔵本	130020100200	聚成-1178
01仏頂	24	仏眼仏母像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	147.4	102.7	嘉永6年	1853	12 /00		長谷川等叔写本	130020100100	
01仏頂	25	大勝金剛像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	70.0	39.0	弘化2年	1845	08 /25		江戸湯島根生院蔵本	130020100600	聚成-1179
01仏頂	26	大勝金剛像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.5	38.0	安政4年	1857	07 /14		江戸湯島根生院蔵本	130020100700	聚成-1180
01仏頂	27	大勝金剛像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	66.6	38.5	江戸時代後期	19世紀				130020100500	
01仏頂	28	釈迦三尊像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	49.0	86.0	文政10年	1827	06u/19	5印		130020055700	聚成-1087
01仏頂	29	釈迦三尊像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	76.5	45.7	嘉永3年	1850	02 /20		長谷川等鶴図	130020052900	聚成-1086
01仏頂	30	釈迦三尊像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	90.0	67.0	江戸時代後期	19世紀				130020053400	聚成-1085
01仏頂	31	釈迦三尊像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	81.4	48.2	江戸時代後期	19世紀		5印		130020055800	
01仏頂	32	釈迦如来観音地藏像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.0	27.5	江戸時代後期	19世紀		5印		130020053200	聚成-1088

01仏頂	33	釈迦如来像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	143.0	61.0	嘉永6年	1853	01 /28			130020052600	聚成-1101
01仏頂	34	釈迦如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	74.9	27.4	嘉永6年	1853	12 /30		(版写本-京都市清涼寺本)	130020052700	
01仏頂	35	釈迦如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	58.8	28.5	江戸時代後期	19世紀				130020052800	
01仏頂	36	釈迦如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	46.9	40.6	江戸時代後期	19世紀				130020053600	
01仏頂	37	釈迦如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.3	38.1	江戸時代後期	19世紀				130020053700	
01仏頂	38	釈迦如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	79.0	35.7	江戸時代後期	19世紀				130020054200	
01仏頂	39	釈迦如来像	鰐甫護	紙本白描淡彩	まくり	1枚	121.2	59.0	江戸時代後期	19世紀				130020055400	聚成-1104
01仏頂	40	釈迦如来像	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	40.0	69.7	江戸時代後期	19世紀				130020056100	
01仏頂	41	釈迦如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.9	24.3	江戸時代後期	19世紀				130020056200	
01仏頂	42	釈迦如来像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	74.4	58.9	江戸時代後期	19世紀				130020091100	聚成-1102
01仏頂	43	釈迦如来文殊弥勒像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	30.8	46.2	江戸時代後期	19世紀				130020054300	
01仏頂	44	釈迦如来文殊弥勒像(授戒本尊)	現光	紙本白描	まくり	1枚	70.8	38.7	弘化4年	1847	08 /22		長谷川氏本(文政11:1828)	130020053900	聚成-1089
01仏頂	45	釈迦如来文殊弥勒像(授戒本尊)	現光	紙本白描	まくり	1枚	73.1	38.9	弘化4年	1847	08 /26		長谷川氏本	130020053100	聚成-1091
01仏頂	46	釈迦如来文殊弥勒像(授戒本尊)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.0	27.6	江戸時代後期	19世紀		5印		130020053500	
01仏頂	47	釈迦如来文殊弥勒像(授戒本尊)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	144.2	94.5	江戸時代後期	19世紀				130020053000	聚成-1090
01仏頂	48	誕生釈迦像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	87.0	37.3	江戸時代後期	19世紀				130020056000	聚成-1103
01仏頂	49	出山釈迦像	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	71.4	34.5	文化元年	1804	07 /01			130020055600	聚成-1105
01仏頂	50	出山釈迦像	憲里	紙本墨画	まくり	1枚	72.3	33.8	嘉永2年	1849	02 /04			130020054000	
01仏頂	51	出山釈迦像	宗立	紙本墨画	まくり	1枚	109.7	45.0	明治3年	1870	08 /29			130020054100	
01仏頂	52	出山釈迦像	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	81.3	39.1	江戸時代後期	19世紀				130020055500	
01仏頂	53	苦行釈迦像	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	38.4	27.3	江戸時代後期	19世紀				130020053300	
01仏頂	54	阿難像	現光	紙本白描	まくり	1枚	74.2	27.6	弘化4年	1847	08 /25			130020054501	聚成-1107
01仏頂	55	迦葉像	現光	紙本白描	まくり	1枚	74.2	27.6	弘化4年	1847	08 /25			130020054502	聚成-1106
01仏頂	56	文殊菩薩普賢菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	115.0	46.8	江戸時代後期	19世紀				130020120200	聚成-2073
01仏頂	57	薬師如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	93.0	62.7	嘉永3年	1850	04 /25		長谷川等鶴写本	130020070600	
01仏頂	58	薬師如来像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	93.0	60.0	嘉永3年	1850	05 /05		長谷川等鶴写本	130020070500	聚成-1154
01仏頂	59	薬師如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	73.6	27.7	江戸時代後期	19世紀				130020070700	聚成-1155
01仏頂	60	薬師如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	16.8	12.2	江戸時代後期	19世紀				130020071200	
01仏頂	61	薬師如来文殊十一面観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.5	47.5	江戸時代後期	19世紀		5印		130020053000	聚成-1156
01仏頂	62	善名称吉祥王如来像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	28.0	20.6	嘉永4年	1851	07 /29		依長谷川等鶴図	130020071100	
01仏頂	63	善名称吉祥王如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	45.6	38.0	江戸時代後期	19世紀		5印		130020071000	聚成-1162
01仏頂	64	阿弥陀三尊像(善光寺式)	現光	紙本白描	まくり	1枚	38.5	17.0	弘化4年	1847	08 /22			130020062800	聚成-1130
01仏頂	65	阿弥陀三尊像(善光寺式)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.8	16.2	江戸時代後期	19世紀				130020062700	
01仏頂	66	阿弥陀三尊像(善光寺式)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	124.4	39.0	江戸時代後期	19世紀				130020062900	
01仏頂	67	毘盧遮那如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	115.4	61.1	文政12年	1829	06 /14		高山寺宝蔵	130020080200	聚成-1164
01仏頂	68	毘盧遮那如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	111.7	83.2	嘉永3年	1850	02 /12	6印	宇治惠心院本(天文5:1536)	130020080100	聚成-1163
01仏頂	69	三千仏図	憲海	紙本白描	綴	1帖(4紙)	39.4	28.1	江戸時代後期	19世紀		6印		130020530300	聚成-1028
01仏頂	70	三千仏図書	憲海	紙本白描	まくり	1枚	34.2	70.2	江戸時代後期	19世紀		6印	吉野郡龍門寺仏師院什物	130020530400	
01仏頂	71	釈迦如来像(三千仏)	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	57.0	38.5	江戸時代後期	19世紀				130020052400	聚成-1030
01仏頂	72	釈迦如来像(三千仏)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	99.5	32.5	江戸時代後期	19世紀			因陀羅筆	130020053800	聚成-1029
02諸仏	73	阿弥陀如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	80.9	47.2	文政9年	1826	06 /06	5印		130020060400	聚成-1120
02諸仏	74	阿弥陀如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	97.5	41.8	文政10年	1827	07 /21		平等心院本月真写本	130020061300	聚成-1122
02諸仏	75	阿弥陀如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	78.4	46.4	文政12年	1829	05 /08	6印	空海筆	130020061400	聚成-1121
02諸仏	76	阿弥陀如来像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	64.0	67.1	弘化4年	1847	08 /12			130020061700	聚成-1153
02諸仏	77	阿弥陀如来像	現光	紙本白描	まくり	1枚	114.0	60.0	弘化4年	1847	08 /14			130020061500	
02諸仏	78	阿弥陀如来像	現光	紙本白描	まくり	1枚	86.6	27.8	弘化4年	1847	08 /18			130020063600	聚成-1132
02諸仏	79	阿弥陀如来像	現光	紙本白描	まくり	1枚	76.0	38.9	弘化4年	1847	08 /20			130020061100	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

02諸仏	80	阿弥陀如来像	現光	紙本白描	まくり	1枚	186.0	84.2	弘化4年	1847	08 /20		長谷川氏本	130020061600	聚成-1131
02諸仏	81	阿弥陀如来像	現光	紙本白描	まくり	1枚	115.0	59.4	弘化4年	1847	08 /21		長谷川氏本	130020060500	
02諸仏	82	阿弥陀如来像	現光	紙本白描	まくり	1枚	86.4	38.9	弘化4年	1847	08 /23			130020063200	聚成-1134
02諸仏	83	阿弥陀如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	100.1	38.1	嘉永3年	1850	02 /05	6印	宇治恵心院本(天文8:1539:芝法眼)	130020063300	聚成-1133
02諸仏	84	阿弥陀如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	77.9	38.4	嘉永3年	1850	02 /07	6印	宇治恵心院本(永正14:1517:観重)	130020063500	聚成-1136
02諸仏	85	阿弥陀如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	118.7	88.1	嘉永3年	1850	02 /14	6印	宇治恵心院本(観深)	130020060200	聚成-1119
02諸仏	86	阿弥陀如来像	現光	紙本白描	まくり	1枚	26.6	13.4	嘉永6年	1853	05 /04			130020062100	
02諸仏	87	阿弥陀如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	99.6	38.1	嘉永6年	1853	11 /08			130020062300	
02諸仏	88	阿弥陀如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	99.5	38.3	嘉永6年	1853	11 /09			130020061800	
02諸仏	89	阿弥陀如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	99.5	49.5	嘉永6年	1853	11 /12			130020061700	
02諸仏	90	阿弥陀如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.6	12.2	慶応2年	1866	08 /26			130020061900	
02諸仏	91	阿弥陀如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.0	65.5	江戸時代後期	19世紀				130020060100	
02諸仏	92	阿弥陀如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.8	27.6	江戸時代後期	19世紀				130020060300	
02諸仏	93	阿弥陀如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	46.0	27.6	江戸時代後期	19世紀				130020060600	
02諸仏	94	阿弥陀如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	20.4	12.9	江戸時代後期	19世紀				130020060700	
02諸仏	95	阿弥陀如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	63.5	23.0	江戸時代後期	19世紀		5印		130020062000	聚成-1123
02諸仏	96	阿弥陀如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	78.0	27.6	江戸時代後期	19世紀		6印		130020062200	
02諸仏	97	阿弥陀如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	115.0	62.1	江戸時代後期	19世紀		5印		130020062400	
02諸仏	98	阿弥陀如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	132.3	73.3	江戸時代後期	19世紀		6印		130020062500	聚成-1135
02諸仏	99	阿弥陀如来像	作者不詳	紙本白描一部 朱筆	まくり	1帖(3紙)	48.6	19.6	江戸時代後期	19世紀				130020062600	
02諸仏	100	阿弥陀如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.9	15.0	江戸時代後期	19世紀				130020063400	
02諸仏	101	阿弥陀三尊像	木村庄三郎	紙本白描	まくり	1枚	97.1	65.9	寛文8年	1668	01 /13			130020063100	聚成-1129
02諸仏	102	阿弥陀三尊像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	113.7	63.8	嘉永3年	1850	02 /05	6印	宇治恵心院本(天文18:1549:観重)	130020063000	聚成-1128
02諸仏	103	阿弥陀三尊像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.5	16.0	江戸時代後期	19世紀				130021040400	
02諸仏	104	阿弥陀三尊来迎図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	83.1	39.5	天保15年	1844	07 /17		会津若松融通寺蔵本	130020065000	聚成-1138
02諸仏	105	阿弥陀三尊来迎図	現光	紙本白描	まくり	1枚	114.2	80.7	弘化4年	1847	08 /16		長谷川氏本	130020064400	聚成-1137
02諸仏	106	阿弥陀三尊来迎図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	110.7	75.2	弘化4年	1847	08 /21		長谷川氏本	130020064500	聚成-1140
02諸仏	107	阿弥陀三尊来迎図	現光	紙本白描	まくり	1枚	87.2	43.1	弘化4年	1847	08 /24		長谷川氏本(享保11:1726), 原本 延暦寺什物	130020064200	
02諸仏	108	阿弥陀三尊来迎図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	149.0	78.7	嘉永3年	1850	02 /10	6印	宇治恵心院本(永禄元:1558)	130020064300	
02諸仏	109	阿弥陀三尊来迎図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	82.9	37.9	嘉永3年	1850	02 /12	6印	宇治恵心院本	130020064100	
02諸仏	110	阿弥陀三尊来迎図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	82.9	43.0	嘉永4年	1851	12 /02			130020065400	聚成-1139
02諸仏	111	阿弥陀三尊来迎図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	87.0	42.0	嘉永4年	1851	12 /25			130020065200	
02諸仏	112	阿弥陀三尊来迎図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	116.0	60.5	嘉永6年	1853	11 /14			130020065100	
02諸仏	113	阿弥陀三尊来迎図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	79.8	50.7	江戸時代後期	19世紀				130020064600	
02諸仏	114	阿弥陀三尊来迎図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	101.5	52.5	江戸時代後期	19世紀				130020064700	
02諸仏	115	阿弥陀三尊来迎図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	62.6	37.0	江戸時代後期	19世紀				130020064900	
02諸仏	116	阿弥陀三尊来迎図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	90.0	38.9	江戸時代後期	19世紀		5印		130020065300	聚成-1141
02諸仏	117	阿弥陀如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.5	20.5	江戸時代後期	19世紀				130020064801	
02諸仏	118	聖観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	18.3	15.8	江戸時代後期	19世紀				130020064802	
02諸仏	119	阿弥陀三尊不動地藏来迎図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	107.2	59.3	江戸時代後期	19世紀				130020065500	
02諸仏	120	山越阿弥陀三尊像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	93.3	64.2	文久3年	1863	08 /15		智積院蔵本	130020063900	聚成-1143
02諸仏	121	山越阿弥陀如来像	現光	紙本白描	まくり	1枚	114.0	99.8	弘化4年	1847	08 /15		長谷川氏本	130020063700	聚成-1142
02諸仏	122	山越阿弥陀如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	79.8	53.6	江戸時代後期	19世紀				130020063800	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

02諸仏	123	二河白道図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	138.0	80.0	江戸時代後期	19世紀					130020067000	聚成-1152
02諸仏	124	宝冠阿弥陀如来像	現光	紙本白描	まくり	1枚	87.8	41.6	嘉永元年	1848	03/27				130020068000	聚成-1124
02諸仏	125	宝冠阿弥陀如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	76.9	48.0	江戸時代後期	19世紀					130020069000	
02諸仏	126	紅玻梨色阿弥陀如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	81.0	40.0	文政3年	1820	06/16	3印	長谷寺小池坊奥春院蔵本		130020061200	
02諸仏	127	紅玻梨色阿弥陀如来像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	121.0	38.9	弘化5年	1848	02/28				130020061000	聚成-1125
02諸仏	128	紅玻梨色阿弥陀如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	161.0	64.0	嘉永2年	1849	09/15		智積院より来る		130020101000	聚成-1127
02諸仏	129	紅玻梨色阿弥陀如来像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	114.5	59.4	江戸時代後期	19世紀		7印			130020066800	聚成-1126
03仏部	130	釈迦十六善神図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	130.5	63.0	明和7年	1770					130020050800	
03仏部	131	釈迦十六善神図	現光	紙本白描	まくり	1枚	146.6	89.9	弘化4年	1847	09/01		長谷川等叔図(天保8:1837), 依天下茶屋木像		130020051500	聚成-1097
03仏部	132	釈迦十六善神図	現光	紙本白描	まくり	1枚	147.0	93.0	弘化4年	1847	10/16		長谷川氏本		130020051700	聚成-1096
03仏部	133	釈迦十六善神図	現光	紙本白描	まくり	1枚	136.5	76.5	弘化4年	1847	10/18		長谷川氏本		130020051600	
03仏部	134	釈迦十六善神図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	135.0	90.5	弘化4年	1847	11/03		長谷川氏本		130020050500	聚成-1095
03仏部	135	釈迦十六善神図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	107.5	128.5	嘉永4年	1851	07/21		長谷川氏本		130020051300	
03仏部	136	釈迦十六善神図	憲里	紙本墨画	まくり	1枚	144.0	77.8	嘉永4年	1851	07/21		長谷川等鶴図		130020051400	
03仏部	137	釈迦十六善神図	憲里	紙本墨画	まくり	1枚	138.5	65.0	嘉永4年	1851	08/21		長谷川等鶴図		130020051200	
03仏部	138	釈迦十六善神図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	99.8	104.5	嘉永4年	1851	08/27		長谷川氏本		130020050600	
03仏部	139	釈迦十六善神図	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	128.5	63.5	嘉永4年	1851	09/21		長谷川氏本		130020050400	聚成-1093
03仏部	140	釈迦十六善神図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	74.5	33.0	安政4年	1857	11/21		(版写本)		130020051800	
03仏部	141	釈迦十六善神図	雲道	紙本白描	まくり	1枚	136.0	61.8	文久2年	1862	08/00	「宗立」印			130020050200	
03仏部	142	釈迦十六善神図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	74.9	63.8	文久2年	1862	08u/14				130020070300	
03仏部	143	釈迦十六善神図	雲道	紙本白描	まくり	1枚	136.0	76.0	文久2年	1862	10/03	「雲道」印			130020050100	
03仏部	144	釈迦十六善神図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	85.0	28.5	元治元年	1864	10/09				130020052000	聚成-1094
03仏部	145	釈迦十六善神図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	128.5	60.5	江戸時代後期	19世紀					130020050300	
03仏部	146	釈迦十六善神図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	130.5	70.0	江戸時代後期	19世紀					130020050700	
03仏部	147	釈迦十六善神図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	70.7	33.5	江戸時代後期	19世紀					130020050900	
03仏部	148	釈迦十六善神図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	132.0	62.5	江戸時代後期	19世紀		5印	会津観音寺什物		130020051000	
03仏部	149	釈迦十六善神図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	75.5	54.5	江戸時代後期	19世紀					130020051100	
03仏部	150	釈迦十六善神図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	94.5	127.5	江戸時代後期	19世紀		5印			130020051900	聚成-1092
03仏部	151	釈迦十六善神図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	56.3	27.5	江戸時代後期	19世紀			兆典司筆		130020052100	
03仏部	152	釈迦十六善神図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	111.0	28.0	江戸時代後期	19世紀			兆典司筆		130020052200	
03仏部	153	釈迦十六羅漢図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	28.5	27.5	江戸時代後期	19世紀			「林笙」印		130020056400	
03仏部	154	釈迦十六羅漢図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	111.0	41.7	江戸時代後期	19世紀					130020056600	聚成-1098
03仏部	155	十六善神雲図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	68.0	83.8	江戸時代後期	19世紀					130020985800	
03仏部	156	十六善神雲図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	27.1	114.2	江戸時代後期	19世紀		5印			130020985900	
03仏部	157	十六善神雲図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.7	63.8	江戸時代後期	19世紀					130020986000	
03仏部	158	普賢菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.8	27.5	江戸時代後期	19世紀					130020054401	
03仏部	159	文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.8	27.5	江戸時代後期	19世紀					130020054402	
03仏部	160	提頭羅宅善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀	08/08				130020052301	
03仏部	161	毘盧勒叉善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020052302	
03仏部	162	摧伏毒善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020052303	
03仏部	163	増益善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020052304	
03仏部	164	欲喜善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020052305	
03仏部	165	除一切障難善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020052306	
03仏部	166	拔除罪垢善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020052307	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

03仏部	167	能忍善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020052308	
03仏部	168	吠室羅摩拏善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020052309	
03仏部	169	毘盧博叉善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020052310	
03仏部	170	離一切怖畏善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020052311	
03仏部	171	救護一切善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020052312	
03仏部	172	撰伏諸魔善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020052313	
03仏部	173	能求諸有善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020052314	
03仏部	174	獅子威猛善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020052315	
03仏部	175	勇猛心地善神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020052316	
03仏部	176	釈迦涅槃図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	139.5	119.8	江戸時代後期	19世紀					130020054600	聚成-1108
03仏部	177	釈迦涅槃図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	104.5	120.5	江戸時代後期	19世紀					130020054700	聚成-1109
03仏部	178	釈迦涅槃図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	99.5	101.5	江戸時代後期	19世紀					130020054800	聚成-1110
03仏部	179	釈迦涅槃図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	42.2	51.2	江戸時代後期	19世紀					130020054900	聚成-1111
03仏部	180	釈迦涅槃図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	61.2	85.6	江戸時代後期	19世紀					130020055000	聚成-1112
03仏部	181	釈迦涅槃図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	41.0	97.6	江戸時代後期	19世紀					130020055100	聚成-1113
03仏部	182	鳥獣図	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	39.0	85.5	江戸時代後期	19世紀					130020055200	
03仏部	183	釈迦涅槃図周縁図(上辺)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	27.6	187.5	江戸時代後期	19世紀		6印			130020056801	聚成-1114
03仏部	184	釈迦涅槃図周縁図(右辺)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	261.4	60.4	江戸時代後期	19世紀		6印			130020056802	聚成-1115
03仏部	185	釈迦涅槃図周縁図(左辺)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	261.4	60.2	江戸時代後期	19世紀		6印			130020056803	聚成-1116
03仏部	186	釈迦涅槃図周縁図(下辺)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	27.6	185.5	江戸時代後期	19世紀		6印			130020056804	聚成-1117
03仏部	187	釈迦五百羅漢図	遠藤弁藏	紙本白描	裏打	1枚	101.2	39.0	文政8年	1825	09/00				130020056900	聚成-1100
03仏部	188	釈迦十六羅漢図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	27.0	40.0	江戸時代後期	19世紀		6印			130020086000	聚成-1099
03仏部	189	薬師三尊十二神将像	雲道	紙本白描	まくり	1枚	59.8	150.7	文久3年	1863	02/12				130020070100	聚成-1157
03仏部	190	薬師三尊十二神将像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.7	10.0	江戸時代後期	19世紀					130020070900	
03仏部	191	薬師三尊十二神将像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.0	18.3	江戸時代後期	19世紀					130020071300	
03仏部	192	日光月光十二神将像(右)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	115.2	38.7	江戸時代後期	19世紀		5印			130020070401	聚成-1158
03仏部	193	日光月光十二神将像(左)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	117.3	38.9	江戸時代後期	19世紀		5印			130020070402	聚成-1159
03仏部	194	十二神将像(右)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	92.5	34.6	江戸時代後期	19世紀					130020070201	聚成-1160
03仏部	195	十二神将像(左)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	92.5	34.6	江戸時代後期	19世紀					130020070202	聚成-1161
04経法	196	請雨経曼荼羅図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	115.4	74.9	嘉永6年	1853	02/13				130020020300	聚成-1045
04経法	197	請雨経曼荼羅図	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	54.5	39.5	江戸時代後期	19世紀					130020020100	
04経法	198	請雨経曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	78.0	54.6	江戸時代後期	19世紀					130020024200	
04経法	199	請雨経曼荼羅図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	112.2	100.6	嘉永6年	1853	02/13				130020020200	聚成-1046
04経法	200	請雨経曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	58.4	55.3	江戸時代後期	19世紀					130020020400	
04経法	201	止風雨曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	111.0	78.7	安政4年	1857	03/00				130020022200	聚成-1047
04経法	202	止風雨曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	123.5	59.9	文久元年	1861	07/23				130020022100	
04経法	203	孔雀明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	85.8	38.8	文政6年	1823	09/01		智積院遍照院蔵本		130020320400	聚成-2181
04経法	204	孔雀明王像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	164.2	125.0	文政12年	1829	06/18		長谷川等鶴賀一写本(享和元:1801), 原本智積院方丈		130020320100	聚成-2179
04経法	205	孔雀明王像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	88.0	42.2	文久2年	1862	11/09				130020320500	
04経法	206	孔雀明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	112.0	65.0	文久3年	1863	10/04				130020320600	聚成-2180
04経法	207	孔雀明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	98.0	50.5	江戸時代後期	19世紀					130020320300	聚成-2182
04経法	208	孔雀明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	46.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020320700	
04経法	209	孔雀明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020320800	
04経法	210	孔雀経曼荼羅図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	127.6	134.5	安政3年	1856	02/25				130020023300	聚成-1048
04経法	211	仁王経曼荼羅図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	86.7	64.1	安政3年	1856	01/15				130020023800	聚成-1042
04経法	212	仁王経曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	121.3	81.3	文久元年	1861	03/19				130020024000	聚成-1043

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

04経法	213	仁王経曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.2	46.8	江戸時代後期	19世紀					130020023900	
04経法	214	五大力菩薩像	憲里	紙本墨画	まくり	1枚	112.6	53.5	嘉永5年	1852	07 /11				130020023600	
04経法	215	五大力菩薩像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	100.5	46.5	嘉永6年	1853	12 /00		龍肝所持本		130020023400	
04経法	216	五大力菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	133.5	69.0	江戸時代後期	19世紀					130020023500	聚成-2126
04経法	217	五大力菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	72.2	34.4	江戸時代後期	19世紀					130020023700	聚成-2128
04経法	218	五大力菩薩像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	57.4	38.8	江戸時代後期	19世紀		5印			130020341200	聚成-2127
04経法	219	六字明王像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	148.5	69.3	嘉永2年	1849	06 /11		生駒山宝山寺蔵本		130020024400	聚成-2185
04経法	220	六字明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	113.0	49.6	江戸時代後期	19世紀			薩州大乘院所持本(森田重三郎筆)		130020024300	聚成-2184
04経法	221	六字経曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	97.0	49.7	安政4年	1857	05 /10				130020024100	聚成-1051
04経法	222	六字経曼荼羅図	宗立	紙本墨画	まくり	1枚	133.5	59.8	文久元年	1861	07 /16		道ヶン筆		130020021400	
04経法	223	六字経曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	149.5	83.0	江戸時代後期	19世紀			森田重三郎筆		130020021300	
04経法	224	六字経曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	171.0	28.2	江戸時代後期	19世紀		6印			130020021500	聚成-1050
04経法	225	光明真言字輪曼荼羅図	遠藤	紙本白描一部着彩	まくり	1枚	107.5	39.0	文化11年	1814	09 /15				130020031700	
04経法	226	光明真言字輪曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	109.0	39.3	文政6年	1823	06 /04	6印	長谷寺小池坊宝蔵本(勝尾寺以空寄付)		130020030201	聚成-1023
04経法	227	光明真言字輪曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	80.2	38.3	文政12年	1829	05 /15	6印			130020030100	聚成-1019
04経法	228	光明真言字輪曼荼羅図	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	97.2	37.8	弘化4年	1847	01 /26				130020031600	
04経法	229	光明真言字輪曼荼羅図	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	76.5	60.5	弘化4年	1847	08 /09		長谷川数馬(等鶴?)図(文化15:1818)		130020031400	聚成-1020
04経法	230	光明真言字輪曼荼羅図	現光	紙本白描	まくり	1枚	52.8	45.0	弘化4年	1847	08 /09				130020031500	聚成-1021
04経法	231	光明真言字輪曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	195.0	90.5	元治2年	1865	02 /13				130020031800	
04経法	232	光明真言字輪曼荼羅図稿	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	135.8	61.8	江戸時代後期	19世紀					130020030300	
04経法	233	光明真言字輪曼荼羅図稿	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	68.8	40.5	江戸時代後期	19世紀					130020030400	
04経法	234	光明真言字輪曼荼羅図稿	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	47.0	44.5	江戸時代後期	19世紀					130020030500	
04経法	235	光明真言字輪曼荼羅図稿	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	26.5	12.2	江戸時代後期	19世紀					130020030600	
04経法	236	光明真言字輪曼荼羅図封紙	憲海	紙本墨書	封紙	1枚	34.7	47.5	文政8年	1825	01 /00				130020030202	聚成-1023A
04経法	237	五色光明曼荼羅図	現光	紙本白描	まくり	1枚	102.7	48.5	弘化4年	1847	08 /09		靈雲寺様(浄厳)		130020030900	
04経法	238	五色光明曼荼羅図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	141.5	67.5	安政2年	1855	02 /17				130020031100	聚成-1024
04経法	239	五色光明曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	100.5	52.0	万延元年	1860	03u/24		靈雲寺様(浄厳)		130020031000	
04経法	240	五色光明曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	98.0	48.2	江戸時代後期	19世紀					130020031200	
04経法	241	五色光明曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	54.5	56.8	江戸時代後期	19世紀		5印			130020031301	聚成-1025
04経法	242	五色光明曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	54.6	58.0	江戸時代後期	19世紀		5印			130020031302	聚成-1026
04経法	243	金光明最勝王経曼荼羅図	現光	紙本白描	まくり	1枚	111.8	51.5	嘉永3年	1850	08 /27	1印			130020021000	聚成-1040
04経法	244	金光明最勝王経曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	186.0	95.8	嘉永6年	1853	12 /09		江戸護国寺観音堂常什、龍肝写本		130020020900	聚成-1039
04経法	245	金光明最勝王経曼荼羅図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	67.2	95.3	嘉永7年	1854	06 /00				130020021100	聚成-1041
04経法	246	金光明最勝王経曼荼羅図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	81.7	33.5	元治元年	1864	09 /28				130020021200	
05諸像	247	阿弥陀二十五菩薩来迎図	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	156.2	77.4	文化13年	1816	09 /01	1印			130020065800	
05諸像	248	阿弥陀二十五菩薩来迎図	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	102.8	47.0	文政10年	1827	04 /00				130020066200	
05諸像	249	阿弥陀二十五菩薩来迎図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	153.2	90.2	文政12年	1829	05 /28	6印	長谷川氏本		130020065700	聚成-1149
05諸像	250	阿弥陀二十五菩薩来迎図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	94.2	38.4	文久2年	1862	11 /00		比叡山蔵本(源信真筆)		130020066000	聚成-1150
05諸像	251	阿弥陀二十五菩薩来迎図	憲広	紙本白描	まくり	1枚	105.6	38.5	元治元年	1864	02 /10		智積院蔵本(源信真筆)		130020066900	
05諸像	252	阿弥陀二十五菩薩来迎図	現光	紙本白描	まくり	1枚	27.6	37.5	江戸時代後期	19世紀					130020065600	聚成-1151
05諸像	253	阿弥陀二十五菩薩来迎図	作者不詳	紙本白描淡彩	裏打	1枚	110.4	58.5	江戸時代後期	19世紀		1印			130020065900	聚成-1148
05諸像	254	阿弥陀二十五菩薩来迎図屏風(一)	作者不詳	紙本白描	裏打	1枚	108.5	38.2	安政6年	1859	06 /27				130020066301	聚成-1144

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

05諸像	255	阿弥陀二十五菩薩来迎図屏風(二)	作者不詳	紙本白描	裏打	1枚	129.0	38.3	安政6年	1859	06_/27			130020066302	聚成-1145
05諸像	256	阿弥陀二十五菩薩来迎図屏風(三)	作者不詳	紙本白描	裏打	1枚	129.0	38.3	安政6年	1859	06_/27			130020066303	聚成-1146
05諸像	257	阿弥陀二十五菩薩来迎図屏風(四)	作者不詳	紙本白描	裏打	1枚	128.5	38.2	安政6年	1859	06_/27			130020066304	聚成-1147
05諸像	258	当麻曼荼羅縁起拔書	憲海	紙本墨書	まくり	1枚	14.2	47.7	文政11年	1828	01_/12			130021000700	
05諸像	259	十三仏図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	83.8	39.7	寛政10年	1798				130020291600	
05諸像	260	十三仏図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	69.8	31.8	文化3年	1806	02_/26			130020293700	
05諸像	261	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	111.0	40.2	文政12年	1829	05_/17	6印		130020291700	聚成-1193
05諸像	262	十三仏図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	67.9	49.3	天保11年	1840	07_/29		江州坂本来迎寺什物	130020291100	
05諸像	263	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	81.0	38.9	天保13年	1842	02_/00			130020292300	聚成-1188
05諸像	264	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	112.4	48.8	嘉永3年	1850	01_/00	6印	宇治惠心院本(文禄3:1594:琳賢)	130020290500	聚成-1185
05諸像	265	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	98.2	41.3	嘉永3年	1850	02_/03	6印	宇治惠心院本(天文22:1553:観重)	130020293100	聚成-1183
05諸像	266	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	152.7	86.9	嘉永3年	1850	02_/04	6印	宇治惠心院本(永禄8:1565:観深)(慶長14:1609:中将・観英)	130020290300	聚成-1187
05諸像	267	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	112.6	43.2	嘉永3年	1850	02_/08	6印	宇治惠心院本(天正19:1591:琳賢)	130020291300	聚成-1186
05諸像	268	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	148.0	64.6	嘉永3年	1850	02_/11	6印	宇治惠心院本(慶長14:1609:観英)	130020291900	聚成-1189
05諸像	269	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	123.2	68.2	嘉永3年	1850	02_/18	6印	宇治惠心院本(永禄8:1565:観深)	130020293300	聚成-1184
05諸像	270	十三仏図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	99.3	42.5	嘉永4年	1851	03_/20		依長谷川等鶴図校合	130020291400	
05諸像	271	十三仏図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	75.1	44.3	嘉永4年	1851	09_/10		依長谷川等鶴図校合	130020291500	
05諸像	272	十三仏図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	71.5	38.0	嘉永4年	1851	10_/23		依長谷川等鶴図校合	130020290600	聚成-1190
05諸像	273	十三仏図	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	50.5	60.0	嘉永4年	1851	11_/14			130020290700	聚成-1195
05諸像	274	十三仏図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	55.2	19.7	嘉永6年	1853	02_/12			130020290400	
05諸像	275	十三仏図	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	45.2	19.6	嘉永7年	1854	02_/12			130020292800	聚成-1191
05諸像	276	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	111.8	5.8	安政2年	1855	07_/04			130020291000	
05諸像	277	十三仏図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	124.3	60.4	安政4年	1857	11_/24			130020292400	
05諸像	278	十三仏図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	100.1	40.0	万延2年	1861	03_/04			130020290800	
05諸像	279	十三仏図	宗立	紙本白描一部淡彩	まくり	1枚	57.5	60.9	元治元年	1864	08_/00	9印		130020290900	聚成-1194
05諸像	280	十三仏図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	45.1	21.4	明治19年	1886	04_/29			130020293600	
05諸像	281	十三仏図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	114.2	52.1	江戸時代後期	19世紀				130020290100	
05諸像	282	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	50.4	63.1	江戸時代後期	19世紀				130020290200	
05諸像	283	十三仏図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	67.5	63.0	江戸時代後期	19世紀				130020291200	
05諸像	284	十三仏図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	101.5	38.0	江戸時代後期	19世紀				130020291800	
05諸像	285	十三仏図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	57.1	27.4	江戸時代後期	19世紀				130020292000	
05諸像	286	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	100.5	39.4	江戸時代後期	19世紀				130020292200	
05諸像	287	十三仏図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	90.9	43.3	江戸時代後期	19世紀				130020292500	
05諸像	288	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	53.2	39.2	江戸時代後期	19世紀		5印		130020292600	聚成-1192
05諸像	289	十三仏図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	58.6	27.0	江戸時代後期	19世紀			(版写本)	130020292700	
05諸像	290	十三仏図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.3	50.6	江戸時代後期	19世紀				130020293000	
05諸像	291	十三仏図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.6	99.6	江戸時代後期	19世紀				130020293200	聚成-1197
05諸像	292	十三仏図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	56.1	64.8	江戸時代後期	19世紀				130020293400	聚成-1196

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

05諸像	293	十三仏図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	66.8	38.3	江戸時代後期	19世紀					130020293500	
05諸像	294	十三仏図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	101.7	39.0	江戸時代後期	19世紀					130020294000	
05諸像	295	十三仏図冊子	作者不詳	紙本白描一部 淡彩	帖	1帖(8紙)	24.6	17.4	江戸時代後期	19世紀			東寺御影堂蔵本(覺饒真筆, 後宇 多法王宸翰)		130020292900	
05諸像	296	七尊図	山口明雅	紙本白描	まくり	1枚	92.0	37.5	文化10年	1813	06 /12				130020067300	聚成-1182
05諸像	297	七尊図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	21.0	13.6	江戸時代後期	19世紀					130020042700	
06観音	298	聖観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	42.8	27.4	嘉永3年	1850	02 /09	6印	宇治恵心院本		130020140600	
06観音	299	聖観音像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	67.6	36.2	嘉永4年	1851	10 /24		依長谷川等鶴図校合		130020140800	
06観音	300	聖観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	93.3	38.0	江戸時代後期	19世紀					130020140100	聚成-2001
06観音	301	聖観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.0	27.6	江戸時代後期	19世紀		5印			130020140200	聚成-2002
06観音	302	聖観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	29.1	26.9	江戸時代後期	19世紀					130020140300	
06観音	303	聖観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	36.4	27.3	江戸時代後期	19世紀					130020140400	
06観音	304	聖観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	57.2	23.2	江戸時代後期	19世紀					130020140500	
06観音	305	聖観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	68.5	38.1	江戸時代後期	19世紀					130020140700	
06観音	306	聖観音梵天帝釈天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	63.0	39.0	文政10年	1827	05 /22				130020141001	聚成-2003
06観音	307	聖観音梵天帝釈天像袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	23.3	16.5	文政10年	1827	05 /23				130020141002	聚成-2003A
06観音	308	十一面観音・不動明王・地藏菩薩三尊図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	74.0	39.0	文久3年	1863	07 /25				130020151100	
06観音	309	十一面観音像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	71.2	29.6	嘉永3年	1850	02 /13		依宇治恵心院本		130020150900	
06観音	310	十一面観音像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	96.4	31.4	文久2年	1862	01 /24				130020150500	
06観音	311	十一面観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	71.8	29.7	江戸時代後期	19世紀					130020150800	
06観音	312	十一面観音像	大忍	紙本白描	まくり	1枚	85.7	43.3	明治時代	19世紀					130020151000	聚成-2004
06観音	313	十一面観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	100.5	37.8	江戸時代後期	19世紀					130020151200	聚成-2005
06観音	314	十一面観音像	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	40.7	28.3	江戸時代後期	19世紀					130020151300	
06観音	315	十一面観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020151400	
06観音	316	十一面観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	17.8	7.2	江戸時代後期	19世紀					130020151500	
06観音	317	十一面観音像(長谷寺式)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	148.5	72.0	嘉永3年	1850	02 /05		宇治恵心院本(天正20:1592)		130020150100	
06観音	318	十一面観音像(長谷寺式)	宗立	紙本白描	まくり	1枚	157.3	51.3	文久元年	1861	12 /09				130020150600	
06観音	319	十一面観音像(長谷寺式)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	102.0	50.7	江戸時代後期	19世紀					130020150700	聚成-2006
06観音	320	長谷寺十一面観音雨宝童子像	皆了	紙本白描	まくり	1枚	405.0	186.0	安政2年	1855	09 /11		長谷寺本願院蔵本		130020151702	聚成-2009
06観音	321	長谷寺十一面観音善女龍王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	490.3	229.0	安政2年	1855	09 /11		長谷寺本願院蔵本		130020151703	聚成-2008
06観音	322	長谷寺十一面観音像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	1107.0	227.0	安政2年	1855	09 /11				130020151701	聚成-2007
06観音	323	長谷寺十一面観音像光背	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	771.0	161.5	安政2年	1855	09 /11				130020151704	
06観音	324	長谷寺十一面観音像光背	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	660.3	79.5	安政2年	1855	09 /11				130020151705	
06観音	325	長谷寺十一面観音像光背	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	217.5	270.0	安政2年	1855	09 /11				130020151706	
06観音	326	不空罽索観音像	作者不詳	紙本白描	裏打	1枚	66.3	40.0	江戸時代後期	19世紀					130020170100	聚成-2010
06観音	327	千手観音勝軍地藏毘沙門像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	73.0	38.9	江戸時代後期	19世紀		7印			130020160300	聚成-2016
06観音	328	千手観音像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	73.4	24.2	嘉永7年	1854	04 /15				130020160500	聚成-2014
06観音	329	千手観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	73.5	42.1	安政2年	1855	06 /21		守澄所持本		130020160200	聚成-2012
06観音	330	千手観音像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	27.0	21.3	文久元年	1861					130020160700	
06観音	331	千手観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	119.5	101.5	江戸時代後期	19世紀		7印	加州宝集寺蔵本		130020160100	聚成-2011
06観音	332	千手観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	40.5	27.9	江戸時代後期	19世紀		7印			130020160400	聚成-2013
06観音	333	千手観音大辨功德天婆菽仙人像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	24.2	13.3	万延元年	1860					130020160900	
06観音	334	千手観音二十八部衆像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	115.6	64.1	江戸時代後期	19世紀					130020161000	聚成-2015
06観音	335	馬頭観音像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	150.0	90.2	慶応元年	1865	06 /24				130020190500	聚成-2018
06観音	336	馬頭観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	36.1	27.5	江戸時代後期	19世紀					130020190100	聚成-2017
06観音	337	馬頭観音不動毘沙門像	作者不詳	紙本白描	裏打	1枚	78.0	38.7	江戸時代後期	19世紀					130020190200	聚成-2019

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

06観音	338	岩座図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	29.9	37.8	江戸時代後期	19世紀					130020182300	
06観音	339	如意輪観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	92.5	62.0	文政9年	1826	06 /04	5印			130020180100	聚成-2020
06観音	340	如意輪観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	66.6	39.1	文政11年	1828	12 /02	6印			130020181700	
06観音	341	如意輪観音像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	65.1	39.2	嘉永2年	1849	06 /00		宝山寺蔵本		130020180200	聚成-2021
06観音	342	如意輪観音像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	55.3	38.3	嘉永2年	1849	12 /02		長谷川より校合依頼		130020180600	
06観音	343	如意輪観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	74.7	48.7	嘉永3年	1850	11 /06		醍醐宝幢院什物		130020181000	聚成-2024
06観音	344	如意輪観音像	現光	紙本白描淡彩	まくり	1枚	58.7	37.9	嘉永5年	1852	03 /20+				130020182200	聚成-2025
06観音	345	如意輪観音像	皆了	紙本白描淡彩	まくり	1枚	56.2	38.0	嘉永7年	1854	01 /30				130020181800	
06観音	346	如意輪観音像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	37.8	27.3	安政5年	1858	09 /21				130020180700	聚成-2022
06観音	347	如意輪観音像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	90.2	63.2	安政5年	1858	09 /24				130020181500	
06観音	348	如意輪観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	52.1	27.0	万延2年	1861	01 /07				130020180500	
06観音	349	如意輪観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.2	39.1	江戸時代後期	19世紀		5印			130020180300	
06観音	350	如意輪観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	115.0	51.0	江戸時代後期	19世紀					130020180400	
06観音	351	如意輪観音像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	39.2	28.0	江戸時代後期	19世紀					130020180800	聚成-2023
06観音	352	如意輪観音像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	85.5	39.3	江戸時代後期	19世紀					130020180900	
06観音	353	如意輪観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.8	27.6	江戸時代後期	19世紀					130020181200	
06観音	354	如意輪観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	68.5	40.0	江戸時代後期	19世紀					130020181300	
06観音	355	如意輪観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	120.7	42.3	江戸時代後期	19世紀					130020181400	
06観音	356	如意輪観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	82.7	38.6	江戸時代後期	19世紀					130020181600	
06観音	357	如意輪観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	67.2	32.6	江戸時代後期	19世紀					130020181900	
06観音	358	如意輪観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.5	32.3	江戸時代後期	19世紀					130020182000	
06観音	359	如意輪観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	32.1	27.0	江戸時代後期	19世紀					130020182100	
06観音	360	如意輪観音像封袋	作者不詳	紙本墨書	袋	1枚	21.2	16.0	江戸時代後期	19世紀					130021050500	
06観音	361	准胝観音像	現光	紙本白描	まくり	1枚	91.8	57.0	弘化4年	1847	08 /10				130020201001	聚成-2030
06観音	362	准胝観音像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	38.0	27.7	嘉永元年	1848	07 /23		長谷川氏本		130020200300	
06観音	363	准胝観音像	憲里	紙本白描一部 著彩	まくり	1枚	92.8	56.5	嘉永元年	1848	09 /13		長谷川等鶴図(梅尾山所蔵)		130020200400	聚成-2028
06観音	364	准胝観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	95.0	48.0	嘉永5年	1852	06 /26	5印			130020200100	聚成-2029
06観音	365	准胝観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	148.5	88.3	嘉永6年	1853	12 /00		龍肝所持本, 伊勢山田常明寺本		130020201700	聚成-2031
06観音	366	准胝観音像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	60.0	38.3	嘉永7年	1854	02 /05				130020200600	
06観音	367	准胝観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	50.5	39.6	江戸時代後期	19世紀		5印			130020200200	
06観音	368	准胝観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	44.0	38.0	江戸時代後期	19世紀			智泉筆		130020200500	聚成-2026
06観音	369	准胝観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	27.8	163.6	江戸時代後期	19世紀		5印			130020200700	
06観音	370	准胝観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	66.4	39.0	江戸時代後期	19世紀		7印			130020200800	
06観音	371	准胝観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.0	43.0	江戸時代後期	19世紀		5印			130020200900	聚成-2027
06観音	372	准胝観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.3	27.5	江戸時代後期	19世紀			高雄曼荼羅		130020201100	
06観音	373	准胝観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	76.9	36.3	江戸時代後期	19世紀					130020201200	
06観音	374	准胝観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.0	27.4	江戸時代後期	19世紀			高雄曼荼羅		130020201300	
06観音	375	准胝観音像袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	31.2	14.5	江戸時代後期	19世紀		5印			130020201002	聚成-2030A
06観音	376	難陀跋難陀童王像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	38.0	52.0	嘉永5年	1852	07 /17				130020201600	
06観音	377	難陀跋難陀童王像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	15.5	24.6	慶応元年	1865	04u/28		西源院本		130020201500	
06観音	378	白衣観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	55.5	41.2	正徳5年	1715	10 /00		牧翁筆		130020201000	
06観音	379	白衣観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	69.4	28.1	延享4年	1747	08 /16		等楊印		130020210900	
06観音	380	白衣観音像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	38.3	33.0	安政5年	1858	02 /22				130020240600	聚成-2035
06観音	381	白衣観音像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	54.8	27.0	安政5年	1858	02 /22				130020240700	
06観音	382	白衣観音像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	50.8	38.6	安政6年	1859	12 /19		無言蔵本		130020210200	聚成-2034
06観音	383	白衣観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	57.4	23.8	元治元年	1864	05 /13				130020210700	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

06観音	384	白衣観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	44.3	38.6	江戸時代後期	19世紀		5印	牧翁筆	130020210400	
06観音	385	白衣観音像	橋本右京	紙本白描淡彩	まくり	1枚	61.6	27.3	江戸時代後期	19世紀		不明印		130020210500	
06観音	386	白衣観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	18.5	24.0	江戸時代後期	19世紀		不明印		130020211000	
06観音	387	白衣観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	41.0	28.9	江戸時代後期	19世紀				130020240800	
06観音	388	白衣観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	49.3	38.0	江戸時代後期	19世紀				130020240900	
06観音	389	白衣観音不動毘沙門像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	64.8	38.2	江戸時代後期	19世紀		5印		130020210800	聚成-2036
06観音	390	楊柳観音像	遠藤弁蔵	紙本白描	まくり	1枚	69.3	41.7	寛政10年	1798	04 /27			130020220300	聚成-2038
06観音	391	楊柳観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	150.0	81.6	文久3年	1863	08 /15		智積院蔵本	130020210600	聚成-2037
06観音	392	楊柳観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	45.2	30.8	江戸時代後期	19世紀				130020210300	
06観音	393	楊柳観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	40.8	29.7	江戸時代後期	19世紀				130020220200	
06観音	394	灑水観音像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	140.8	58.5	弘化4年	1847	08 /10		長谷川等叔図	130020240300	聚成-2040
06観音	395	灑水観音像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	161.3	80.0	江戸時代後期	19世紀		不明印	高貴寺蔵本	130020220100	
06観音	396	灑水観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	73.7	38.7	江戸時代後期	19世紀		7印		130020240400	聚成-2041
06観音	397	灑水観音像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	76.7	37.5	明治時代	19世紀				130020240500	
06観音	398	水月観音像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	121.5	47.5	江戸時代後期	19世紀				130020230100	
06観音	399	水月観音像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	42.7	27.9	江戸時代後期	19世紀		5印		130020230200	聚成-2039
06観音	400	水月観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.2	30.8	江戸時代後期	19世紀				130020230300	
06観音	401	魚籃観音像	作者不詳	紙本白描鉛筆描	まくり	1枚	126.5	54.2	明治時代	19世紀				130020241100	
06観音	402	蓑衣観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	107.5	40.2	江戸時代後期	19世紀				130020240200	聚成-2033
06観音	403	伝船中湧現観音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	86.2	38.8	弘化2年	1845	08 /07			130020240100	聚成-2032
06観音	404	西国三十三観音図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	126.5	54.2	文久2年	1862	07 /08			130020241200	聚成-2042
07文殊	405	五髻文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.0	28.2	文政5年	1822	06 /20	3印		130020123100	
07文殊	406	五髻文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.2	28.1	文政5年	1822	07 /02	3印		130020123000	聚成-2062
07文殊	407	五髻文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	52.7	39.2	文政10年	1827	04 /30			130020123200	聚成-2056
07文殊	408	五髻文殊菩薩像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	93.1	45.4	文政10年	1827	09 /18		高山寺十无盡院蔵本(明恵筆)	130020121700	聚成-2060
07文殊	409	五髻文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	68.5	28.0	文政11年	1828	03 /20			130020120400	聚成-2055
07文殊	410	五髻文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	53.0	28.1	文政13年	1830	11 /28			130020121800	
07文殊	411	五髻文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	49.0	33.3	天保3年	1832	12 /03			130020122300	
07文殊	412	五髻文殊菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	65.2	43.6	弘化4年	1847	08 /11		長谷川氏本	130020124000	聚成-2053
07文殊	413	五髻文殊菩薩像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	114.0	74.3	弘化4年	1847	08 /12		長谷川氏本(長谷川等叔図?)	130020121900	聚成-2052
07文殊	414	五髻文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	101.2	42.7	嘉永元年	1848	04 /25		明兆筆	130020122500	
07文殊	415	五髻文殊菩薩像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	157.7	82.3	嘉永元年	1848	06 /14		梅尾蔵本	130020124600	聚成-2059
07文殊	416	五髻文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	71.8	38.8	嘉永3年	1850	01 /28		宇治恵心院本(琳賢)	130020124400	聚成-2057
07文殊	417	五髻文殊菩薩像	現光	紙本白描淡彩	まくり	1枚	105.2	47.9	嘉永3年	1850	10 /21		梅尾山蔵本	130020122200	聚成-2061
07文殊	418	五髻文殊菩薩像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	133.8	74.7	嘉永4年	1851	11 /04		依長谷川等鶴図	130020122000	
07文殊	419	五髻文殊菩薩像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	80.3	38.2	安政4年	1857	07 /12		高雄曼荼羅校合本	130020120700	聚成-2058
07文殊	420	五髻文殊菩薩像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	79.2	38.7	文久元年	1861	05 /21	8印		130020123600	
07文殊	421	五髻文殊菩薩像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	158.5	86.5	文久3年	1863	03 /13			130020121400	
07文殊	422	五髻文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	72.7	53.0	文久3年	1863	10 /06			130020123700	
07文殊	423	五髻文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.2	19.0	江戸時代後期	19世紀				130020120301	
07文殊	424	五髻文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	61.5	39.0	江戸時代後期	19世紀				130020120500	
07文殊	425	五髻文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	82.8	38.0	江戸時代後期	19世紀		5印		130020120800	
07文殊	426	五髻文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.3	38.6	江戸時代後期	19世紀		5印		130020121300	聚成-2054
07文殊	427	五髻文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.1	38.9	江戸時代後期	19世紀		5印		130020121600	聚成-2063
07文殊	428	五髻文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.0	27.7	江戸時代後期	19世紀		5印		130020122700	
07文殊	429	五髻文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.2	6.9	江戸時代後期	19世紀				130020123401	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

07文殊	430	五髻文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.3	38.3	江戸時代後期	19世紀						130020123800	
07文殊	431	五髻文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	64.6	39.2	江戸時代後期	19世紀						130020123900	
07文殊	432	五髻文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	79.8	38.1	江戸時代後期	19世紀						130020124300	
07文殊	433	五髻文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.7	44.1	江戸時代後期	19世紀						130020124500	
07文殊	434	五髻文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	68.3	62.0	江戸時代後期	19世紀						130020124700	
07文殊	435	五髻文殊菩薩像頭部	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.0	19.8	江戸時代後期	19世紀						130020121200	
07文殊	436	五髻文殊菩薩像封紙	憲海	紙本墨書	封紙	1枚	24.2	34.1	江戸時代後期	19世紀				下野国薬師寺蔵本		130020123402	
07文殊	437	五髻文殊菩薩両大師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	17.5	27.4	江戸時代後期	19世紀						130020124800	
07文殊	438	渡海文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	112.5	46.4	嘉永3年	1850	02 /06	6印	宇治恵心院本(天文10:1541)			130020122400	聚成-2069
07文殊	439	渡海文殊菩薩像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	115.6	57.3	慶応2年	1866	04 /17					130020122100	聚成-2068
07文殊	440	文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	60.7	38.2	江戸時代後期	19世紀						130020123300	聚成-2064
07文殊	441	文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	72.8	34.2	文政5年	1822	06 /21	3印				130020124100	聚成-2065
07文殊	442	文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	54.2	27.8	江戸時代後期	19世紀			7印			130020122800	
07文殊	443	文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	68.7	40.2	江戸時代後期	19世紀						130020123500	聚成-2066
07文殊	444	文殊菩薩善財童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	82.0	27.6	嘉永3年	1850	01 /08	6印	宇治恵心院本(天正19:1591:中将)			130020120600	聚成-2067
07文殊	445	文殊菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	92.2	38.4	江戸時代後期	19世紀						130020124200	
07文殊	446	僧形文殊菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	54.8	38.9	弘化4年	1847	08 /25					130020122600	聚成-2071
07文殊	447	僧形文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.1	51.8	江戸時代後期	19世紀			1印・5印			130020120900	聚成-2070
07文殊	448	僧形文殊菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	40.6	27.8	江戸時代後期	19世紀			7印			130020122900	
07文殊	449	僧形文殊菩薩像(東寺)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.2	66.0	江戸時代後期	19世紀			1印・5印			130020125000	
07文殊	450	文殊菩薩普賢菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.0	49.1	嘉永3年	1850	02 /09	6印	宇治恵心院本(慶長14:1609:観英)			130020120100	聚成-2072
07文殊	451	仏国禪師文殊指南図讀	憲海	紙本白描	帖	1帖(20紙)	27.2	39.0	嘉永2年	1849	02 /03		梅尾山蔵本(唐・印本)			130020121100	
07文殊	452	文殊菩薩像五字真言図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	32.7	29.7	江戸時代後期	19世紀						130020121000	
08菩薩	453	象図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	26.5	50.5	江戸時代後期	19世紀			5印			130020110900	
08菩薩	454	普賢菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	72.0	34.1	文政5年	1822	06 /22	3印				130020110300	聚成-2075
08菩薩	455	普賢菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	89.5	36.2	嘉永2年	1849	01 /10		長谷川理吉郎写本(天保4:1833)			130020110200	聚成-2074
08菩薩	456	普賢菩薩像	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	50.8	37.0	嘉永6年	1853	12 /01		安国寺什物写, 龍肝所持本			130020110800	
08菩薩	457	普賢菩薩像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	134.5	54.0	安政6年	1859	09 /00		竹田前松院本			130020110100	
08菩薩	458	普賢菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	51.5	27.7	江戸時代後期	19世紀			5印			130020110400	聚成-2077
08菩薩	459	普賢菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	53.2	33.5	江戸時代後期	19世紀						130020110500	聚成-2076
08菩薩	460	普賢菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.5	38.0	江戸時代後期	19世紀						130020110600	
08菩薩	461	普賢菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.5	27.2	江戸時代後期	19世紀						130020110700	
08菩薩	462	普賢菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	52.0	26.4	江戸時代後期	19世紀			5印			130020112200	
08菩薩	463	普賢菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.2	19.0	江戸時代後期	19世紀						130020120302	
08菩薩	464	象図	鈴木百年	紙本白描	まくり	1枚	74.5	90.6	安政2年	1855	06 /22					130020111800	
08菩薩	465	象図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	55.7	55.2	江戸時代後期	19世紀						130020111900	
08菩薩	466	象図(普賢延命菩薩図)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.6	56.2	江戸時代後期	19世紀						130020930300	
08菩薩	467	普賢延命菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	153.1	106.2	文政10年	1827	04 /16					130020112300	聚成-2081
08菩薩	468	普賢延命菩薩像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	60.8	26.8	弘化4年	1847	08 /12		長谷川氏本			130020111300	
08菩薩	469	普賢延命菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	94.2	52.3	弘化4年	1847	08 /12					130020111600	聚成-2080
08菩薩	470	普賢延命菩薩像	憲海・現光	紙本白描淡彩	まくり	1枚	151.2	71.4	嘉永元年	1848	08 /26		高山寺蔵本(最澄請来)			130020111700	聚成-2083
08菩薩	471	普賢延命菩薩像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	71.0	43.7	嘉永6年	1853	02 /30					130020111000	聚成-2078
08菩薩	472	普賢延命菩薩像	憲海	紙本白描	裏打	1枚	43.4	27.5	嘉永7年	1854	02 /23		智泉筆			130020111200	聚成-2082
08菩薩	473	普賢延命菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	110.5	60.2	江戸時代後期	19世紀						130020111100	

08菩薩	474	普賢延命菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	119.3	38.8	江戸時代後期	19世紀		3印		130020111400	聚成-2079
08菩薩	475	普賢延命菩薩像	作者不詳	紙本墨画淡彩	まくり	1枚	103.5	46.3	江戸時代後期	19世紀				130020111500	
08菩薩	476	普賢延命菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	44.5	38.3	江戸時代後期	19世紀				130020112400	
08菩薩	477	制吒迦童子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.0	37.7	江戸時代後期	19世紀				130021040800	
08菩薩	478	地藏菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.0	48.0	文政12年	1829	07/29	6印		130020252900	聚成-2099
08菩薩	479	地藏菩薩像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	106.0	37.8	弘化4年	1847	08/28		長谷川氏本	130020252500	
08菩薩	480	地藏菩薩像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	37.7	27.6	弘化4年	1847	08/28		長谷川氏本	130020253500	聚成-2101
08菩薩	481	地藏菩薩像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	89.4	38.9	弘化4年	1847	08/29		長谷川等鶴(等廓)図	130020252100	
08菩薩	482	地藏菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	148.1	98.8	弘化4年	1847	09/02		長谷川氏本(天保7:1836), 原本東寺什宝	130020255100	聚成-2100
08菩薩	483	地藏菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	112.8	54.7	弘化4年	1847	09/04		長谷川氏本、原本伝張思恭筆	130020253300	聚成-2112
08菩薩	484	地藏菩薩像	憲里	紙本白描	裏打	1枚	82.0	32.0	嘉永元年	1848	11/07		(版写本-河内現光密寺蔵版(高野山円通寺所蔵本))	130020252000	聚成-2106
08菩薩	485	地藏菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	73.7	38.5	嘉永2年	1849	04/11			130020253600	聚成-2110
08菩薩	486	地藏菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	52.8	27.1	嘉永2年	1849	04u/14		海如より長谷川へ依頼	130020252800	
08菩薩	487	地藏菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	69.7	27.5	嘉永3年	1850	01/30		宇治恵心院本(天文7:1538)	130020252600	聚成-2108
08菩薩	488	地藏菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	95.0	38.4	嘉永3年	1850	02/05	6印	宇治恵心院本(観英)	130020252300	聚成-2104
08菩薩	489	地藏菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	104.5	37.8	嘉永3年	1850	02/09	6印	宇治恵心院本	130020254200	
08菩薩	490	地藏菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	131.2	48.0	嘉永3年	1850	02/10	6印	宇治恵心院本(天文23:1554)	130020254000	
08菩薩	491	地藏菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	79.6	27.5	嘉永3年	1850	02/10	6印	宇治恵心院本(天正16:1588:中将)	130020254100	
08菩薩	492	地藏菩薩像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	92.8	37.8	嘉永3年	1850	02/10	6印	宇治恵心院本(大永4:1524)	130020254400	聚成-2102
08菩薩	493	地藏菩薩像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	119.5	64.2	嘉永3年	1850	04/12		御室真乘院殿蔵本	130020251600	聚成-2103
08菩薩	494	地藏菩薩像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	104.7	38.6	嘉永4年	1851	08/20			130020251900	聚成-2109
08菩薩	495	地藏菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	94.2	44.9	嘉永5年	1852	03/11			130020254600	
08菩薩	496	地藏菩薩像	皆了	紙本白描	まくり	1枚	87.3	38.0	安政2年	1855	04/22		勢州普門寺蔵本	130020251500	
08菩薩	497	地藏菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	80.5	38.5	安政2年	1855	05/03			130020253800	
08菩薩	498	地藏菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.5	38.5	安政3年	1856	10/08			130020253100	
08菩薩	499	地藏菩薩像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	98.8	34.4	安政5年	1858	05/27			130020254300	聚成-2107
08菩薩	500	地藏菩薩像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	85.1	37.6	安政7年	1860	02/03			130020252200	
08菩薩	501	地藏菩薩像	雲道	紙本白描	まくり	1枚	64.4	42.4	文久2年	1862	11/00			130020254900	聚成-2111
08菩薩	502	地藏菩薩像	宗立	紙本着彩	まくり	1枚	150.7	150.2	文久3年	1863	04/02			130020255000	聚成-2098
08菩薩	503	地藏菩薩像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	151.0	136.0	文久3年	1863	04/06			130020255200	
08菩薩	504	地藏菩薩像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	100.0	37.5	明治16年	1883	08/31		智積院蔵本	130020251700	聚成-2105
08菩薩	505	地藏菩薩像	憲里	紙本白描	裏打	1枚	25.4	11.8	明治19年	1886	07/31			130020250500	
08菩薩	506	地藏菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	20.3	27.4	江戸時代後期	19世紀				130020251400	
08菩薩	507	地藏菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.7	27.6	江戸時代後期	19世紀		7印		130020251800	
08菩薩	508	地藏菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.0	39.4	江戸時代後期	19世紀			小野篁筆(東叡山楞伽院)	130020252400	
08菩薩	509	地藏菩薩像	山口城照	紙本白描	まくり	1枚	81.6	30.3	江戸時代後期	19世紀				130020252700	
08菩薩	510	地藏菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	79.0	37.4	江戸時代後期	19世紀				130020253200	
08菩薩	511	地藏菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	71.6	38.8	江戸時代後期	19世紀			六角堂能満院製	130020253400	
08菩薩	512	地藏菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	66.4	30.3	江戸時代後期	19世紀				130020253700	
08菩薩	513	地藏菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.6	18.3	江戸時代後期	19世紀				130020253900	
08菩薩	514	地藏菩薩像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	94.0	39.0	江戸時代後期	19世紀				130020254800	
08菩薩	515	地藏菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	26.1	11.4	江戸時代後期	19世紀				130020255400	
08菩薩	516	地藏菩薩矜羯羅制吒迦像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	97.5	37.0	天保15年	1844	11/27			130020253000	聚成-2113
08菩薩	517	地藏菩薩矜羯羅制吒迦像	現光	紙本白描	まくり	1枚	93.4	38.8	弘化4年	1847	08/27		長谷川氏本(天保7:1836), 原本山門横川什物	130020254500	聚成-2114

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

08菩薩	518	地藏菩薩矜羯羅制吒迦像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	129.5	59.2	江戸時代後期	19世紀					130020251300	
08菩薩	519	六地藏像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	112.0	45.7	嘉永3年	1850	10 /18	6印	宇治恵心院本(天正9:1581:観深)		130020251000	聚成-2115
08菩薩	520	六地藏像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	56.7	27.4	江戸時代後期	19世紀		2印			130020251200	
08菩薩	521	矜羯羅童子図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.5	38.5	江戸時代後期	19世紀					130021040700	
08菩薩	522	弥勒菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.9	45.4	嘉永元年	1848	12 /05				130020130200	聚成-2045
08菩薩	523	弥勒菩薩像	憲海	紙本白描	裏打	1枚	152.1	99.7	嘉永2年	1849	06 /12		生駒山宝山寺蔵本		130020130900	聚成-2050
08菩薩	524	弥勒菩薩像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	53.3	30.0	文久元年	1861	03 /09	8印			130020130100	
08菩薩	525	弥勒菩薩像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	54.2	27.5	文久元年	1861	03 /10	8印			130020130500	聚成-2049
08菩薩	526	弥勒菩薩像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	38.0	27.5	文久3年	1863	08 /28				130020130800	聚成-2048
08菩薩	527	弥勒菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.1	37.9	江戸時代後期	19世紀		5印			130020130300	聚成-2046
08菩薩	528	弥勒菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	92.4	89.6	江戸時代後期	19世紀			梅尾蔵本(成忍粉本)		130020130400	聚成-2047
08菩薩	529	弥勒菩薩像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	81.2	39.4	江戸時代後期	19世紀		6印	梅尾山僧護所持本		130020130600	聚成-2051
08菩薩	530	弥勒菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	59.7	38.7	江戸時代後期	19世紀			梅尾蔵本		130020130700	
08菩薩	531	勢至菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	113.0	38.7	弘化4年	1847	08 /23		長谷川氏本(宝暦4:1754), 原本二尊院		130020281900	聚成-2116
08菩薩	532	勢至菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	57.0	23.2	江戸時代後期	19世紀					130020282000	
08菩薩	533	勢至菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.7	34.6	江戸時代後期	19世紀					130020282100	
08菩薩	534	如来憐乞底菩薩像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	16.0	12.3	明治時代	19世紀					130020282300	
09薩埵	535	大随求菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.8	59.3	嘉永2年	1849	09 /20				130020280400	
09薩埵	536	大随求菩薩像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	104.2	52.5	嘉永5年	1852	02u/09		依長谷川等鶴図校写		130020280700	聚成-2119
09薩埵	537	大随求菩薩像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	72.4	45.9	安政3年	1856	01 /02				130020280600	聚成-2118
09薩埵	538	大随求菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	61.4	37.7	安政7年	1860	03 /20				130020280900	
09薩埵	539	大随求菩薩像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	52.8	37.9	安政7年	1860	03 /23				130020280100	
09薩埵	540	大随求菩薩像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	73.0	38.9	江戸時代後期	19世紀		5印			130020280200	聚成-2117
09薩埵	541	大随求菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.5	27.1	江戸時代後期	19世紀					130020280300	
09薩埵	542	大随求菩薩像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	58.8	37.9	江戸時代後期	19世紀					130020280500	
09薩埵	543	大随求菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.2	38.3	江戸時代後期	19世紀					130020281000	
09薩埵	544	大随求菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	56.7	51.5	江戸時代後期	19世紀		5印			130020281100	
09薩埵	545	大随求菩薩像	作者不詳	紙本白描一部淡彩	裏打	1枚	26.6	18.3	江戸時代後期	19世紀					130020281300	
09薩埵	546	大随求菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	145.0	133.0	江戸時代後期	19世紀					130020282200	
09薩埵	547	五大虚空蔵菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	109.4	90.3	嘉永元年	1848	04 /23		長谷川氏本		130020260900	
09薩埵	548	五大虚空蔵菩薩像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	131.0	97.0	嘉永5年	1852	12 /21		(版写本-東寺)		130020261400	聚成-2097
09薩埵	549	五大虚空蔵菩薩像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	75.5	46.6	安政5年	1858	09 /20				130020261000	聚成-2096
09薩埵	550	五大虚空蔵菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	99.7	81.0	万延元年	1860	03u/22				130020261600	
09薩埵	551	五大虚空蔵菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	97.2	58.0	江戸時代後期	19世紀					130020260800	聚成-2095
09薩埵	552	五大虚空蔵菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	119.7	101.2	江戸時代後期	19世紀					130020261200	
09薩埵	553	業用虚空蔵菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	85.7	38.1	江戸時代後期	19世紀		5印			130020261100	聚成-2094
09薩埵	554	法界虚空蔵菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	27.8	99.1	江戸時代後期	19世紀		5印			130020261700	
09薩埵	555	蓮華虚空蔵菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.1	24.4	江戸時代後期	19世紀					130020262200	
09薩埵	556	虚空蔵菩薩像	山口蘭舟子	紙本白描一部朱描	まくり	1枚	75.2	50.2	天明5年	1785	12 /00		「山口」印・「瑞翁」印		130020262800	聚成-2092
09薩埵	557	虚空蔵菩薩像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	55.5	40.6	文政元年	1818	07 /04				130020263300	
09薩埵	558	虚空蔵菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.0	54.0	天保4年	1833	09 /18				130020263000	
09薩埵	559	虚空蔵菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	152.5	132.7	弘化4年	1847	08 /11		長谷川等叔図		130020261900	
09薩埵	560	虚空蔵菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	130.0	97.5	弘化4年	1847	08 /12		長谷川等鶴図		130020261800	聚成-2085
09薩埵	561	虚空蔵菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	51.2	38.5	嘉永元年	1848	09 /06		高山寺蔵本(空海筆)		130020262400	聚成-2090

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

09薩埵	562	虚空蔵菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	61.0	54.5	嘉永3年	1850	02 /21			130020260700	聚成-2091
09薩埵	563	虚空蔵菩薩像	憲里	紙本着彩	まくり	1枚	74.8	63.0	嘉永5年	1852	04 /21	1印	空海筆	130020262300	
09薩埵	564	虚空蔵菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.0	63.6	嘉永5年	1852	11 /08			130020263600	聚成-2089
09薩埵	565	虚空蔵菩薩像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	54.5	37.5	嘉永6年	1853	12 /00			130020263500	
09薩埵	566	虚空蔵菩薩像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	101.2	38.7	安政5年	1858	12 /05			130020260100	聚成-2086
09薩埵	567	虚空蔵菩薩像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	75.9	60.4	文久3年	1863	07 /10			130020263400	聚成-2087
09薩埵	568	虚空蔵菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	12.7	15.6	江戸時代後期	19世紀				130020260200	
09薩埵	569	虚空蔵菩薩像	現光	紙本白描	まくり	1枚	84.6	39.8	江戸時代後期	19世紀				130020260400	聚成-2084
09薩埵	570	虚空蔵菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	41.6	38.3	江戸時代後期	19世紀		5印		130020260600	聚成-2088
09薩埵	571	虚空蔵菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	151.5	132.5	江戸時代後期	19世紀			長谷川等鶴図	130020262000	
09薩埵	572	虚空蔵菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.3	28.4	江戸時代後期	19世紀				130020262100	
09薩埵	573	虚空蔵菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	62.8	38.8	江戸時代後期	19世紀				130020262900	聚成-2093
09薩埵	574	虚空蔵菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	43.6	38.6	江戸時代後期	19世紀		5印		130020263100	
09薩埵	575	虚空蔵菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.2	63.0	江戸時代後期	19世紀			空海筆	130020263200	
09薩埵	576	虚空蔵菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	45.1	38.5	江戸時代後期	19世紀		7印		130020263700	
09薩埵	577	虚空蔵菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	88.3	63.4	江戸時代後期	19世紀				130020263800	
09薩埵	578	虚空蔵菩薩像(求聞持秘尊)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	53.5	40.2	嘉永6年	1853	09 /04			130020262600	
09薩埵	579	虚空蔵菩薩像(求聞持秘尊)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	47.5	38.5	江戸時代後期	19世紀				130020262500	
09薩埵	580	虚空蔵菩薩像(求聞持秘尊)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.2	38.8	江戸時代後期	19世紀				130020262700	
09薩埵	581	十波羅蜜菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.9	41.1	元治元年	1864	08 /26			130020282500	聚成-2125
09薩埵	582	智波羅蜜菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	39.1	江戸時代後期	19世紀				130020282400	聚成-2124
09薩埵	583	虚空蔵菩薩十波羅蜜像(虚空蔵菩薩)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	48.7	38.3	江戸時代後期	19世紀				130020260501	
09薩埵	584	虚空蔵菩薩十波羅蜜像(戒・忍)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.2	37.9	江戸時代後期	19世紀				130020260502	
09薩埵	585	虚空蔵菩薩十波羅蜜像(恵・檀)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.2	37.8	江戸時代後期	19世紀				130020260503	
09薩埵	586	虚空蔵菩薩十波羅蜜像(進・禪)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.2	37.9	江戸時代後期	19世紀				130020260504	
09薩埵	587	虚空蔵菩薩十波羅蜜像(智・力)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.3	38.0	江戸時代後期	19世紀				130020260505	
09薩埵	588	虚空蔵菩薩十波羅蜜像(願・方)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.3	38.0	江戸時代後期	19世紀				130020260506	
09薩埵	589	虚空蔵菩薩不動毘沙門像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	53.9	30.6	嘉永3年	1850	02 /08		依長谷川等鶴図	130020260300	
09薩埵	590	宝珠曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	57.5	86.8	嘉永6年	1853	12 /00		仏隆寺蔵本写、龍肝所持本	130020033200	
09薩埵	591	宝珠曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	145.0	65.9	安政2年	1855	09 /16		室生寺蔵本(空海真筆)	130020033400	
09薩埵	592	宝珠曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	160.0	111.0	文久3年	1863	09 /13		仏隆寺什宝	130020033300	聚成-1049
09薩埵	593	宝珠曼荼羅図	雲道	紙本白描淡彩	まくり	1枚	162.0	115.0	文久3年	1863	09 /28		宗立校写本	130020033600	
09薩埵	594	宝珠曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	86.9	57.7	江戸時代後期	19世紀		1印	仏隆寺蔵本写力	130020033500	
09薩埵	595	宝珠曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	36.0	31.1	江戸時代後期	19世紀				130020033700	
09薩埵	596	般若菩薩十六善神図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	109.1	51.6	明治2年	1869	11 /25			130020024600	聚成-1062
09薩埵	597	馬鳴菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	76.5	江戸時代後期	19世紀				130020500100	聚成-2120
09薩埵	598	馬鳴菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	56.0	38.0	江戸時代後期	19世紀				130020500300	聚成-2121
09薩埵	599	馬鳴菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	84.9	38.6	江戸時代後期	19世紀				130020500500	
09薩埵	600	馬鳴菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	86.6	38.7	江戸時代後期	19世紀				130020500600	聚成-2122
09薩埵	601	五秘密菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	52.4	38.0	江戸時代後期	19世紀				130020270400	聚成-2044
09薩埵	602	金剛波羅蜜菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	50.5	38.0	江戸時代後期	19世紀		5印		130020281800	聚成-2123
10不動	603	不動明王像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	37.1	23.4	文政4年	1821	09 /28			130020303300	
10不動	604	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.1	33.3	天保2年	1831	03 /18			130020301300	聚成-2135
10不動	605	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	167.5	98.0	嘉永元年	1848	08 /28		梶尾山蔵本(空海真筆)	130020305900	
10不動	606	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	70.7	52.1	嘉永元年	1848	09 /08		梶尾山蔵本	130020302700	聚成-2134
10不動	607	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.5	61.3	嘉永2年	1849	10 /08		梶尾山蔵本(空海筆)	130020306000	聚成-2130

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

10不動	608	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	81.8	42.5	嘉永2年	1849	10 /09		空海筆	130020302500	
10不動	609	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	56.0	39.2	嘉永2年	1849	10 /10		空海筆	130020301500	
10不動	610	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	48.9	29.7	嘉永2年	1849	10 /20		空海筆	130020302400	
10不動	611	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	44.7	27.5	嘉永3年	1850	02 /09	6印	宇治恵心院本	130020301800	聚成-2131
10不動	612	不動明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	74.0	34.3	嘉永4年	1851	12 /05			130020304900	
10不動	613	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	72.0	45.0	安政元年	1854	12 /25		高山寺(空海筆)	130020300200	
10不動	614	不動明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.1	27.4	安政2年	1855	06 /18			130020301900	
10不動	615	不動明王像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	48.1	37.8	安政3年	1856	02 /19			130020303900	聚成-2133
10不動	616	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	188.6	100.5	安政4年	1857	06 /07		梶尾山蔵本	130020305100	
10不動	617	不動明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.1	38.7	万延元年	1860	12 /15			130020301700	
10不動	618	不動明王像	皆了	紙本白描	まくり	1枚	38.5	27.3	文久3年	1863	01 /16			130020302200	
10不動	619	不動明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.0	59.8	江戸時代後期	19世紀				130020124900	
10不動	620	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	178.0	94.7	江戸時代後期	19世紀				130020300400	聚成-2129
10不動	621	不動明王像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	67.9	47.9	江戸時代後期	19世紀				130020300700	
10不動	622	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.4	36.8	江戸時代後期	19世紀			空海筆	130020302000	
10不動	623	不動明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	84.0	32.4	江戸時代後期	19世紀				130020302100	
10不動	624	不動明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	48.8	26.6	江戸時代後期	19世紀			長谷川等鶴図	130020302300	聚成-2132
10不動	625	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	41.5	20.7	江戸時代後期	19世紀				130020302900	
10不動	626	不動明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.5	36.4	江戸時代後期	19世紀				130020303400	
10不動	627	不動明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	42.1	23.9	江戸時代後期	19世紀				130020303500	
10不動	628	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	100.6	49.9	江戸時代後期	19世紀			梶尾山蔵本	130020305000	
10不動	629	不動明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	77.7	39.6	江戸時代後期	19世紀		5印		130020305500	
10不動	630	不動明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	17.9	12.5	江戸時代後期	19世紀				130020306200	
10不動	631	不動明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	19.4	12.2	江戸時代後期	19世紀	11 /26			130020306300	
10不動	632	不動明王像反古	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	9.5	江戸時代後期	19世紀				130021052100	
10不動	633	不動明王二童子像	憲海	紙本白描	裏打	1枚	117.9	62.8	文政10年	1827	07 /29	5印	真乘院殿所本	130020305300	聚成-2144
10不動	634	不動明王二童子像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	194.7	133.4	文政12年	1829	05 /12	6印	葛川息障明王院蔵本	130020300600	聚成-2138
10不動	635	不動明王二童子像	憲海	紙本白描	裏打	1枚	132.3	67.0	天保3年	1832	08 /24		高野山光勝院蔵本(空海真筆)	130020301200	聚成-2136
10不動	636	不動明王二童子像	憲里	紙本白描部分淡彩	まくり	1枚	134.0	88.8	弘化4年	1847	07 /05		長谷川氏本	130020301000	
10不動	637	不動明王二童子像	作者不詳	紙本白描	裏打	1枚	100.3	54.7	弘化5年	1848	01 /02		高野山光勝院什宝(空海真筆)	130020300900	
10不動	638	不動明王二童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	98.6	38.1	嘉永元年	1848	09 /08		梶尾山蔵本	130020302600	
10不動	639	不動明王二童子像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	119.0	62.9	嘉永2年	1849	02 /28		智積院月輪院龍曉所持本	130020301100	聚成-2137
10不動	640	不動明王二童子像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	103.2	44.7	嘉永4年	1851	04 /26		清澄寺什物(浄海頼本)	130020300100	聚成-2140
10不動	641	不動明王二童子像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	129.9	72.1	嘉永5年	1852	04 /07		高野山光勝院什宝(空海真筆)	130020306100	
10不動	642	不動明王二童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	146.7	81.9	万延元年	1860	03u/22		土井柳溪	130020300300	聚成-2142
10不動	643	不動明王二童子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	112.5	60.4	文久3年	1863	10 /17			130020305700	
10不動	644	不動明王二童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	96.5	44.6	江戸時代後期	19世紀		7印		130020300800	聚成-2141
10不動	645	不動明王二童子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	130.8	60.3	江戸時代後期	19世紀				130020301400	
10不動	646	不動明王二童子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	65.5	38.9	江戸時代後期	19世紀				130020302800	
10不動	647	不動明王二童子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	42.8	24.7	江戸時代後期	19世紀				130020303000	
10不動	648	不動明王二童子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	57.4	27.9	江戸時代後期	19世紀				130020303100	
10不動	649	不動明王二童子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	54.8	32.8	江戸時代後期	19世紀				130020303200	
10不動	650	不動明王二童子像	憲海	紙本白描	裏打	1枚	100.7	48.2	江戸時代後期	19世紀		5印		130020305200	聚成-2143
10不動	651	不動明王二童子像	憲海	紙本白描	裏打	1枚	94.2	46.2	江戸時代後期	19世紀		5印		130020305600	
10不動	652	不動明王二童子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	119.4	59.5	江戸時代後期	19世紀			空海筆	130020305800	聚成-2145
10不動	653	不動明王二童子像(魔追不動)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.6	43.3	江戸時代後期	19世紀				130020304400	聚成-2149

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

10不動	654	不動明王二童子像俱利迦羅劍図	現光	紙本白描朱彩	まくり	1枚	130.3	92.6	嘉永元年	1848	09 /04		梅尾山高山寺故本	130020300500	聚成-2139
10不動	655	不動明王像(中)	憲海	紙本白描	裏打	1枚	109.0	40.7	江戸時代後期	19世紀				130020305401	聚成-2146
10不動	656	矜羯羅像(右)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.9	41.0	江戸時代後期	19世紀				130020305402	聚成-2147
10不動	657	制吒迦像童子像(左)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.0	41.5	江戸時代後期	19世紀				130020305403	聚成-2148
10不動	658	矜迦羅・制吒迦像	作者不詳	紙本白描部分 淡彩	まくり	1枚	46.9	37.5	江戸時代後期	19世紀				130020303600	
10不動	659	矜迦羅・制吒迦像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	23.4	13.7	江戸時代後期	19世紀				130020306500	
10不動	660	矜羯羅制吒迦像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	28.1	39.4	江戸時代後期	19世紀		5印		130020304600	
10不動	661	制吒迦童子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	16.1	14.3	江戸時代後期	19世紀				130020306400	
10不動	662	不動明王八大童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.6	54.2	江戸時代後期	19世紀				130020304800	聚成-2150
10不動	663	八大童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.4	37.5	弘化4年	1847	07 /05			130020303700	聚成-2151
10不動	664	八大童子像(不動明王)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	43.5	14.8	江戸時代後期	19世紀				130020304201	
10不動	665	八大童子像(不動明王)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	43.6	14.8	江戸時代後期	19世紀				130020304202	
10不動	666	八大童子像(右)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	62.9	39.0	江戸時代後期	19世紀				130020304001	聚成-2152
10不動	667	八大童子像(左)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	64.8	39.6	江戸時代後期	19世紀				130020304002	聚成-2153
10不動	668	八大童子像(右)	憲海	紙本白描	裏打	1枚	74.8	27.9	江戸時代後期	19世紀				130020304701	聚成-2154
10不動	669	八大童子像(左)	作者不詳	紙本白描	裏打	1枚	74.7	27.7	江戸時代後期	19世紀				130020304702	聚成-2155
10不動	670	不動明王観音勢至像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	35.8	20.9	文久2年	1862	03 /16			130020301600	
10不動	671	不動明王四十八使者図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	115.4	70.4	江戸時代後期	19世紀			寛永寺本坊蔵本(円珍真筆)	130020303800	聚成-2156
10不動	672	俱利迦羅劍図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	68.8	38.4	弘化4年	1847	07 /03		長谷川氏本	130020307100	聚成-2157
10不動	673	火炎光背図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	86.1	56.2	万延元年	1860	08 /05		江戸麻布不動院本尊	130020307000	
11忿怒	674	愛染明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	81.6	39.2	文政12年	1829	08 /24		空海筆	130020310200	聚成-2174
11忿怒	675	愛染明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	96.4	62.2	弘化4年	1847	07 /03	1印	長谷川氏本(天保7:1836)、原本 今里妙法寺什宝	130020310400	聚成-2175
11忿怒	676	愛染明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	152.5	87.5	嘉永2年	1849	06 /09		宝山寺蔵本	130020310500	聚成-2176
11忿怒	677	愛染明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	145.2	89.6	嘉永6年	1853	12 /00		薬王寺書蔵本, 龍肝所持本	130020310600	聚成-2177
11忿怒	678	愛染明王像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	101.3	27.8	慶応元年	1865	05 /13			130020310300	
11忿怒	679	愛染明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	72.6	39.4	江戸時代後期	19世紀		5印		130020310100	
11忿怒	680	愛染明王像	作者不詳	絹本着彩	裏打	1枚	25.1	13.6	江戸時代後期	19世紀				130020310800	
11忿怒	681	愛染明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	115.5	60.5	江戸時代後期	19世紀				130021050700	
11忿怒	682	両頭愛染明王二童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	115.0	56.3	文政12年	1829	03 /12		忍辱山知恩院	130020310700	聚成-2178
11忿怒	683	五大明王像	現光	紙本白描朱彩	まくり	1枚	192.0	85.5	弘化4年	1847	07 /03		長谷川等叔(賀一郎)図	130020304200	聚成-2172
11忿怒	684	五大明王像	現光	紙本白描	まくり	1枚	116.2	43.7	弘化4年	1847	07 /05		長谷川氏本	130020304000	聚成-2170
11忿怒	685	五大明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	94.0	45.4	安政2年	1855	07 /02			130020304300	
11忿怒	686	五大明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	95.6	45.9	安政3年	1856	03 /11			1300203040500	
11忿怒	687	五大明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	60.0	30.3	安政4年	1857	07 /23			1300203040700	
11忿怒	688	五大明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	185.3	67.2	安政5年	1858	09 /00		竹田前松院本	130020341100	
11忿怒	689	五大明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	68.4	39.1	文久元年	1861	09 /00			130020341000	
11忿怒	690	五大明王像	憲海	紙本白描	裏打	1枚	132.8	96.2	文久2年	1862	04 /30		空海筆	1300203040600	聚成-2173
11忿怒	691	五大明王像	雲道	紙本白描	まくり	1枚	95.4	46.2	文久3年	1863	11 /18		宗立校写本	130020340100	聚成-2171
11忿怒	692	五大明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	30.4	29.6	江戸時代後期	19世紀				1300203040800	
11忿怒	693	五大明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	115.0	54.0	江戸時代後期	19世紀		7印		1300203040900	聚成-2169
11忿怒	694	降三世明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	35.3	23.9	江戸時代後期	19世紀				130020341700	
11忿怒	695	軍荼利明王像	山口明雅	紙本白描	まくり	1枚	72.0	41.3	寛政4年	1792	04 /00			130020341400	
11忿怒	696	軍荼利明王像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	34.8	24.6	文久元年	1861	12 /21			130020341600	
11忿怒	697	軍荼利明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	108.0	79.0	江戸時代後期	19世紀				130020341300	聚成-2158
11忿怒	698	軍荼利明王像	作者不詳	紙本白描淡彩	裏打	1枚	68.0	45.4	江戸時代後期	19世紀				130020341500	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

11忿怒	699	大威德明王像	現光	紙本白描一部朱描	まくり	1枚	165.2	94.7	弘化4年	1847	06_/29		長谷川等叔(賀一郎)写本	130020330800	聚成-2162
11忿怒	700	大威德明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	118.0	78.4	嘉永3年	1850	10_/27		長谷川氏本	130020330600	聚成-2164
11忿怒	701	大威德明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	150.2	79.6	嘉永7年	1854	06_/25			130020330400	聚成-2160
11忿怒	702	大威德明王像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	151.6	77.8	嘉永7年	1854	07u/15		河州星田愛染院仏戒和上護持本	130020330100	
11忿怒	703	大威德明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	100.0	46.8	安政2年	1855	09_/17		室生寺藏本(空海真筆)	130020330300	聚成-2163
11忿怒	704	大威德明王像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	90.8	45.2	安政3年	1856	03_/03		守純所持本	130020330200	聚成-2159
11忿怒	705	大威德明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.4	18.2	文久2年	1862	03_/29			130020330500	
11忿怒	706	大威德明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	91.4	54.4	江戸時代後期	19世紀		5印		130020330700	聚成-2161
11忿怒	707	烏枢洪摩明王像	現光	紙本白描	まくり	1枚	112.0	53.2	弘化5年	1848	02_/00		長谷川等鶴図	130020350100	聚成-2165
11忿怒	708	烏枢洪摩明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	89.0	39.1	江戸時代後期	19世紀		5印		130020350200	聚成-2166
11忿怒	709	烏枢洪摩明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	71.5	39.1	江戸時代後期	19世紀		5印		130020350300	聚成-2167
11忿怒	710	太元帥明王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	101.8	54.5	嘉永元年	1848	06_/17			130020350400	聚成-2168
11忿怒	711	太元帥明王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.7	11.9	明治2年	1869	06_/24			130020350500	
11忿怒	712	乾闥婆像	現光	紙本白描	まくり	1枚	41.0	28.1	弘化2年	1845	04_/07		江戸金剛院藏本	130020490200	聚成-2192
11忿怒	713	乾闥婆像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	52.5	39.0	江戸時代後期	19世紀		5印		130020490100	聚成-2191
11忿怒	714	金剛童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	92.3	51.2	弘化4年	1847	07_/05		長谷川氏本	130020341800	聚成-2183
12天等	715	帝釈天像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	114.8	49.1	弘化2年	1845	07_/16	1印	江戸護国寺藏本(御筆本)(木村了琢筆)	130020422001	
12天等	716	火天像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	114.8	49.4	弘化2年	1845	07_/16	1印	江戸護国寺藏本(御筆本)(木村了琢筆)	130020422002	
12天等	717	焰摩天像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	114.6	49.6	弘化2年	1845	07_/16	1印	江戸護国寺藏本(御筆本)(木村了琢筆)	130020422003	
12天等	718	月天像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	115.0	49.1	弘化2年	1845	07_/16	1印	江戸護国寺藏本(御筆本)(木村了琢筆)	130020422004	
12天等	719	地天像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	113.7	49.6	弘化2年	1845	07_/16	1印	江戸護国寺藏本(御筆本)(木村了琢筆)	130020422005	
12天等	720	毘沙門天像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	114.6	49.8	弘化2年	1845	07_/16	1印	江戸護国寺藏本(御筆本)(木村了琢筆)	130020422006	
12天等	721	風天像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	114.9	49.6	弘化2年	1845	07_/16	1印	江戸護国寺藏本(御筆本)(木村了琢筆)	130020422007	
12天等	722	水天像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	114.8	49.5	弘化2年	1845	07_/16	1印	江戸護国寺藏本(御筆本)(木村了琢筆)	130020422008	
12天等	723	羅刹天像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	114.2	50.0	弘化2年	1845	07_/16	1印	江戸護国寺藏本(御筆本)(木村了琢筆)	130020422009	
12天等	724	十二天像袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	27.5	16.6	弘化2年	1845	07_/16		江戸護国寺藏本(御筆本)(木村了琢筆)	130020422010	
12天等	725	十二天図(右)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	148.5	60.3	弘化4年	1847	07_/02	7印	長谷川氏本	130020420302	聚成-2251
12天等	726	十二天図(左)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	133.0	59.5	弘化4年	1847	07_/02		長谷川氏本	130020420301	聚成-2252
12天等	727	十二天図袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	26.6	20.5	弘化4年	1847	07_/01			130020420303	聚成-2252A
12天等	728	十二天図(右)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	102.1	38.2	弘化4年	1847	07_/04			130020420502	聚成-2253
12天等	729	十二天図(左)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	101.7	38.0	弘化4年	1847	07_/04			130020420501	聚成-2254
12天等	730	梵天像	憲海・憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	96.7	37.8	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 原本大和箸尾大福寺宝具	130020420101	聚成-2239
12天等	731	日天像	憲海・憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	96.8	38.2	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 原本大和箸尾大福寺宝具	130020420102	聚成-2240
12天等	732	伊舍那天像	憲海・憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	96.2	37.8	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 原本大和箸尾大福寺宝具	130020420103	聚成-2241

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

12天等	733	帝釈天像	憲海・憲里・ 現光	紙本白描	まくり	1枚	97.2	37.8	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 原本大和箸尾 大福寺宝具	130020420104	聚成-2242
12天等	734	火天像	憲海・憲里・ 現光	紙本白描	まくり	1枚	97.2	38.2	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 原本大和箸尾 大福寺宝具	130020420105	聚成-2243
12天等	735	焰摩天像	憲海・憲里・ 現光	紙本白描	まくり	1枚	96.5	37.8	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 原本大和箸尾 大福寺宝具	130020420106	聚成-2244
12天等	736	地天像	憲海・憲里・ 現光	紙本白描	まくり	1枚	97.0	38.2	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 原本大和箸尾 大福寺宝具	130020420107	聚成-2245
12天等	737	月天像	憲海・憲里・ 現光	紙本白描	まくり	1枚	96.7	37.8	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 原本大和箸尾 大福寺宝具	130020420108	聚成-2246
12天等	738	毘沙門天像	憲海・憲里・ 現光	紙本白描	まくり	1枚	97.3	37.8	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 原本大和箸尾 大福寺宝具	130020420109	聚成-2247
12天等	739	風天像	憲海・憲里・ 現光	紙本白描	まくり	1枚	97.2	38.1	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 原本大和箸尾 大福寺宝具	130020420110	聚成-2248
12天等	740	水天像	憲海・憲里・ 現光	紙本白描	まくり	1枚	97.0	38.2	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 原本大和箸尾 大福寺宝具	130020420111	聚成-2249
12天等	741	羅刹天像	憲海・憲里・ 現光	紙本白描	まくり	1枚	96.5	38.0	嘉永元年	1848	06_/10	1印	長谷川等叔写本, 原本大和箸尾 大福寺宝具	130020420112	聚成-2250
12天等	742	十二天像袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	32.3	20.7	嘉永元年	1848	06_/10		長谷川等叔写本, 原本大和箸尾 大福寺宝具	130020420113	聚成-2250A
12天等	743	帝釈天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.6	40.6	嘉永2年	1849	02_/13	3印	(版写本-備中靈山寺蔵本(空海 作))	130020422601	聚成-2261
12天等	744	火天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.7	40.6	嘉永2年	1849	02_/13	3印	(版写本-備中靈山寺蔵本(空海 作))	130020422700	聚成-2262
12天等	745	焰摩天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.8	40.4	嘉永2年	1849	02_/13	3印	(版写本-備中靈山寺蔵本(空海 作))	130020422800	聚成-2263
12天等	746	羅刹天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.5	40.7	嘉永2年	1849	02_/13	3印	(版写本-備中靈山寺蔵本(空海 作))	130020422900	聚成-2264
12天等	747	水天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.5	41.0	嘉永2年	1849	02_/13	3印	(版写本-備中靈山寺蔵本(空海 作))	130020423000	聚成-2265
12天等	748	風天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	109.0	40.4	嘉永2年	1849	02_/13	3印	(版写本-備中靈山寺蔵本(空海 作))	130020423100	聚成-2266
12天等	749	毘沙門天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.6	40.4	嘉永2年	1849	02_/13	3印	(版写本-備中靈山寺蔵本(空海 作))	130020423200	聚成-2267
12天等	750	伊舍那天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.7	40.4	嘉永2年	1849	02_/13	3印	(版写本-備中靈山寺蔵本(空海 作))	130020423300	聚成-2268
12天等	751	梵天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	109.0	40.7	嘉永2年	1849	02_/13	3印	(版写本-備中靈山寺蔵本(空海 作))	130020423400	聚成-2269
12天等	752	日天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.8	40.7	嘉永2年	1849	02_/13	3印	(版写本-備中靈山寺蔵本(空海 作))	130020423500	聚成-2270
12天等	753	地天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.5	40.6	嘉永2年	1849	02_/13	3印	(版写本-備中靈山寺蔵本(空海 作))	130020423600	聚成-2271
12天等	754	月天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	109.6	40.6	嘉永2年	1849	02_/13	3印	(版写本-備中靈山寺蔵本(空海 作))	130020423700	聚成-2272
12天等	755	十二天像袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	30.0	22.5	嘉永2年	1849	02_/13		(版写本-備中靈山寺蔵本(空海 作))	130020422602	聚成-2272A
12天等	756	十二天像	憲海	紙本白描	綴	1綴(12紙)	49.8	27.3	嘉永2年	1849	04_/18		土井氏粉本	130020420201	
12天等	757	十二天像袋	作者不詳	紙本墨書	袋	1枚	30.0	17.9	嘉永2年	1849	04_/18			130020420202	
12天等	758	帝釈天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	150.2	49.4	文久3年	1863	10_/15			130020420801	聚成-2255
12天等	759	伊舍那天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	150.5	49.6	文久3年	1863	10_/15			130020420802	聚成-2256

12天等	760	焰摩天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	151.0	49.5	文久3年	1863	10 /15			130020420803	聚成-2257
12天等	761	火天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	148.8	49.5	文久3年	1863	10 /15		高山寺藏本	130020420804	聚成-2258
12天等	762	羅刹天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	151.0	49.5	文久3年	1863	10 /15			130020420805	聚成-2259
12天等	763	水天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	149.5	49.4	文久3年	1863	10 /15			130020420806	聚成-2260
12天等	764	種字地天像	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	33.0	24.3	江戸時代後期	19世紀				130020420601	
12天等	765	種字梵天像	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	33.0	24.3	江戸時代後期	19世紀				130020420602	
12天等	766	種字火天日天像	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	33.0	24.3	江戸時代後期	19世紀				130020420603	
12天等	767	種字伊舎那天像	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	33.0	24.3	江戸時代後期	19世紀				130020420604	
12天等	768	種字焰魔天像	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	33.0	24.3	江戸時代後期	19世紀				130020420605	
12天等	769	種字帝釈天像	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	33.0	24.3	江戸時代後期	19世紀				130020420606	
12天等	770	種字月天像	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	33.0	24.3	江戸時代後期	19世紀				130020420607	
12天等	771	種字毘沙門天像	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	33.0	24.3	江戸時代後期	19世紀				130020420608	
12天等	772	種字水天像	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	33.0	24.3	江戸時代後期	19世紀				130020420609	
12天等	773	種字風天像	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	33.0	24.3	江戸時代後期	19世紀				130020420610	
12天等	774	種字羅刹天像	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	33.0	24.3	江戸時代後期	19世紀				130020420611	
12天等	775	日天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.6	27.7	江戸時代後期	19世紀				130020421101	
12天等	776	月天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	82.0	38.8	江戸時代後期	19世紀				130020421102	
12天等	777	帝釈天・風天像	作者不詳	紙本着彩	まくり	1枚	27.5	37.0	江戸時代後期	19世紀				130020421201	
12天等	778	毘沙門天像	作者不詳	紙本着彩	まくり	1枚	28.0	36.9	江戸時代後期	19世紀				130020421202	
12天等	779	十二天像	憲海	紙本白描	綴	1綴(11紙)	39.0	27.7	江戸時代後期	19世紀		7印		130020420400	
12天等	780	十二天図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.1	27.7	江戸時代後期	19世紀		7印		130020420900	
12天等	781	十二天屏風種字	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	36.3	39.3	文政10年	1827	07 /28			130020423800	
12天等	782	種字十二天図	皆了	紙本白描	まくり	1枚	98.8	61.1	安政元年	1854	12 /20			130020421900	
13諸天	783	毘沙門天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	81.0	39.2	文政11年	1828	11 /22	6印	長谷寺藏本	130020360200	聚成-2198
13諸天	784	毘沙門天像	現光	紙本白描	まくり	1枚	47.0	27.0	弘化4年	1847	07 /02			130020361300	聚成-2196
13諸天	785	毘沙門天像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	95.8	37.9	万延元年	1860	06 /01			130020360900	
13諸天	786	毘沙門天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	63.0	28.8	江戸時代後期	19世紀				130020360100	聚成-2195
13諸天	787	毘沙門天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.0	27.8	江戸時代後期	19世紀				130020360400	
13諸天	788	毘沙門天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.5	28.0	江戸時代後期	19世紀				130020360500	
13諸天	789	毘沙門天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.3	12.5	江戸時代後期	19世紀				130020360600	
13諸天	790	毘沙門天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	62.3	39.0	江戸時代後期	19世紀				130020361000	聚成-2197
13諸天	791	毘沙門天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	41.8	14.0	江戸時代後期	19世紀				130020361200	
13諸天	792	毘沙門天像	現光	紙本白描	まくり	1枚	53.5	27.1	江戸時代後期	19世紀				130020361600	
13諸天	793	毘沙門天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	64.5	39.0	江戸時代後期	19世紀		7印		130020361800	聚成-2202
13諸天	794	兜跋毘沙門天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	83.2	38.4	嘉永7年	1854	02 /23		御室真乘院藏本	130020362400	聚成-2194
13諸天	795	勝敵毘沙門天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	113.5	52.5	嘉永元年	1848	09 /09		梶尾山藏本(唐筆顔輝筆?)	130020360800	聚成-2201
13諸天	796	毘沙門天吉祥天善膩師像	現光	紙本白描	まくり	1枚	71.3	39.2	弘化4年	1847	07 /02			130020361500	聚成-2200
13諸天	797	毘沙門天吉祥天善膩師像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	113.0	60.0	嘉永3年	1850	02 /03	6印	宇治恵心院本(天文22:1553)	130020361700	聚成-2199
13諸天	798	毘沙門天吉祥天善膩師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	118.5	57.0	江戸時代後期	19世紀				130020361100	
13諸天	799	刀八毘沙門天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	54.6	39.1	天保9年	1838	04u/14			130020361900	聚成-2203
13諸天	800	刀八毘沙門天像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	133.0	85.0	文久元年	1861	09 /10	8印・2印		130020362100	
13諸天	801	刀八毘沙門天像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	59.6	26.1	文久3年	1863	09 /09			130020362300	
13諸天	802	刀八毘沙門天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.0	31.0	江戸時代後期	19世紀		5印		130020362000	
13諸天	803	刀八毘沙門天像	作者不詳	紙本着彩	裏打	1枚	55.2	39.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020362200	
13諸天	804	四天王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	109.5	65.2	江戸時代後期	19世紀				130020431500	
13諸天	805	帝釈天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	112.5	41.8	江戸時代後期	19世紀				130020421700	

13諸天	806	水天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.9	39.6	文政10年	1827	06u/20	5印	梅尾山経蔵請雨箱本(空海真筆)	130020422100	聚成-2227
13諸天	807	水天像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	191.5	62.5	嘉永2年	1849	06 /12		生駒山宝山寺蔵本	130020422400	
13諸天	808	水天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	164.3	75.5	元治元年	1864	04 /17			130020422500	
13諸天	809	水天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	49.2	27.5	江戸時代後期	19世紀				130020421800	
13諸天	810	水天像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	75.2	40.0	江戸時代後期	19世紀				130020422200	聚成-2228
13諸天	811	水天像	作者不詳	紙本白描一部 淡彩	まくり	1枚	80.3	37.8	江戸時代後期	19世紀				130020422300	
13諸天	812	地天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	82.0	38.8	江戸時代後期	19世紀				130020421500	
13諸天	813	大自在天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.5	37.1	江戸時代後期	19世紀				130020431200	聚成-2229
13諸天	814	大自在天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.8	27.5	江戸時代後期	19世紀				130020431400	
13諸天	815	伎藝天像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	113.5	55.2	万延元年	1860	09_/01	1印・「 沙門宗 立」印		130020430100	
13諸天	816	日天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	64.5	27.8	江戸時代後期	19世紀		6印		130020421400	
14天部	817	吉祥天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	115.5	88.5	嘉永2年	1849	06 /10		宝山寺蔵本	130020370100	聚成-2205
14天部	818	吉祥天像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	77.2	43.5	嘉永5年	1852	05 /12			130020370500	
14天部	819	吉祥天像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	75.0	47.4	嘉永5年	1852	05 /13			130020370400	聚成-2206
14天部	820	吉祥天像	宗立	紙本墨画	まくり	1枚	145.0	61.0	元治元年	1864	04 /14			130020370800	
14天部	821	吉祥天像	宗立	紙本墨画	まくり	1枚	94.5	33.5	元治2年	1865	02 /16			130020960300	
14天部	822	吉祥天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	71.8	34.0	江戸時代後期	19世紀				130020370200	
14天部	823	吉祥天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	54.0	28.0	江戸時代後期	19世紀				130020370300	聚成-2207
14天部	824	吉祥天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.5	21.0	江戸時代後期	19世紀				130020370600	
14天部	825	吉祥天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	57.0	28.5	江戸時代後期	19世紀				130020370700	
14天部	826	妙見菩薩像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	55.0	37.9	嘉永6年	1853	11 /13		龍肝所持本	130020510400	聚成-2273
14天部	827	妙見菩薩像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	35.6	20.7	文久元年	1861	03_/17			130020510700	聚成-2275
14天部	828	妙見菩薩像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.0	27.7	江戸時代後期	19世紀		5印		130020510500	聚成-2274
14天部	829	妙見菩薩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	36.6	27.4	江戸時代後期	19世紀				130020510600	
14天部	830	恵比須・大黒天像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	38.2	54.2	江戸時代後期	19世紀				130020640200	
14天部	831	大黒天像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	24.4	34.2	元治元年	1864			狩野永岳筆	130020641100	
14天部	832	大黒天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.9	40.5	江戸時代後期	19世紀				130020410200	
14天部	833	大黒天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.6	38.2	江戸時代後期	19世紀				130020410300	
14天部	834	大黒天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.8	13.4	江戸時代後期	19世紀				130020410400	
14天部	835	大黒天像	嶋貴盤月	紙本白描	まくり	1枚	65.7	37.3	江戸時代後期	19世紀				130020410500	聚成-2234
14天部	836	大黒天像	嶋貴盤月	紙本白描	まくり	1枚	51.2	38.5	江戸時代後期	19世紀			(版写本-會津磐梯山恵日寺)	130020410600	
14天部	837	大黒天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.5	46.0	江戸時代後期	19世紀				130020410700	
14天部	838	大黒天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.5	27.3	江戸時代後期	19世紀				130020410900	
14天部	839	大黒天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	26.7	17.2	江戸時代後期	19世紀				130020411200	
14天部	840	大黒天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	48.0	29.2	江戸時代後期	19世紀				130020411300	
14天部	841	大黒天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.5	江戸時代後期	19世紀				130020411400	
14天部	842	大黒天像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	62.3	38.3	江戸時代後期	19世紀				130020411500	聚成-2235
14天部	843	大黒天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.3	27.2	江戸時代後期	19世紀			宝山寺蔵本(空海筆)	130020411600	聚成-2236
14天部	844	大黒天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	36.8	27.5	江戸時代後期	19世紀				130020411700	
14天部	845	大黒天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	31.2	25.0	江戸時代後期	19世紀				130020613100	聚成-2237
14天部	846	大黒天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	16.8	12.5	江戸時代後期	19世紀				130021041000	
14天部	847	訶利帝母像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	151.8	82.2	弘化4年	1847	07_/02		長谷川等鶴(等廓)写本(文化 2:1819)	130020400300	聚成-2221
14天部	848	訶利帝母像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	81.5	38.0	安政3年	1856	03 /23			130020400200	聚成-2220
14天部	849	訶利帝母像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	78.2	46.6	江戸時代後期	19世紀				130020400100	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

14天部	850	訶利帝母像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	63.8	37.8	江戸時代後期	19世紀					130020400500	聚成-2222
14天部	851	訶利帝母像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	80.5	38.0	江戸時代後期	19世紀					130020400600	
14天部	852	襄虞梨童女像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	111.7	55.3	嘉永6年	1853	11 /16		龍肝所持本		130020431000	聚成-2238
14天部	853	襄虞梨童女像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	56.3	38.5	慶応元年	1865	04 /22				130020431100	
14天部	854	襄虞梨童女像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	42.3	26.3	江戸時代後期	19世紀					130020430900	
14天部	855	茶吉尼天像	摩訶衍	紙本着彩	まくり	1枚	98.0	38.0	弘化4年	1847	10 /14				130020430500	聚成-2223
14天部	856	茶吉尼天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	83.5	38.8	江戸時代後期	19世紀		1印・5印			130020430300	聚成-2225
14天部	857	茶吉尼天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	46.5	27.5	江戸時代後期	19世紀		5印			130020430600	聚成-2224
14天部	858	茶吉尼天像	坂口五郎兵衛	紙本白描	まくり	1枚	107.3	41.4	江戸時代後期	19世紀					130020430800	聚成-2226
14天部	859	茶吉尼天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.6	14.6	江戸時代後期	19世紀					130020550200	
14天部	860	韋駄天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	26.8	107.5	弘化4年	1847	07 /05				130020430200	
14天部	861	摩利支天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	47.0	27.0	弘化4年	1847	07 /05				130020390200	聚成-2231
14天部	862	摩利支天像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	54.0	38.4	安政2年	1855	03 /10				130020390300	
14天部	863	摩利支天像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	45.2	27.8	江戸時代後期	19世紀		6印			130020390100	聚成-2230
14天部	864	摩利支天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	73.2	38.5	江戸時代後期	19世紀					130020390400	聚成-2232
14天部	865	摩利支天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	67.1	42.4	江戸時代後期	19世紀					130020390500	聚成-2233
14天部	866	摩利支天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	36.5	24.3	江戸時代後期	19世紀					130020390600	
14天部	867	九曜図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	43.0	30.6	江戸時代後期	19世紀					130020510300	
14天部	868	九曜図	作者不詳	紙本白描	まくり	1帖(9紙)	23.8	16.0	江戸時代後期	19世紀					130020510900	
14天部	869	九曜北斗星図	憲里	紙本着彩	裏打	1枚	131.0	49.4	安政7年	1860	01 /26		高野山什宝		130020510100	聚成-2276
14天部	870	九曜北斗星図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	79.6	38.9	江戸時代後期	19世紀		5印・6印			130020510200	聚成-2277
14天部	871	羅摩土曜水曜図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.8	27.2	江戸時代後期	19世紀					130020510800	
14天部	872	執金剛神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	97.2	65.1	嘉永6年	1853	12 /00		龍肝所持本(超思恭筆)		130020431300	聚成-2193
14天部	873	神将像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	51.2	23.4	弘化4年	1847	07 /05				130020431600	
14天部	874	神将像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	26.9	12.9	江戸時代後期	19世紀					130020431700	
14天部	875	摩多利神像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	77.5	60.1	弘化4年	1847	07 /05		長谷川氏本		130020611400	聚成-4062
14天部	876	摩多利神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	100.4	54.0	江戸時代後期	19世紀		5印			130020611500	聚成-4063
14天部	877	和合神図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	67.3	38.5	江戸時代後期	19世紀					130020610400	聚成-4103
14天部	878	和合神図	作者不詳	紙本着彩	まくり	1枚	64.2	38.3	江戸時代後期	19世紀					130020610500	
14天部	879	和合神図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	82.8	27.2	江戸時代後期	19世紀			長谷川氏本		130020610600	聚成-4104
14天部	880	和合神図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	73.0	37.6	江戸時代後期	19世紀					130020610700	
14天部	881	和合神図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	81.0	38.5	江戸時代後期	19世紀					130020610800	
15天龍	882	辨才天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	81.3	39.3	文政8年	1825	04 /17				130020381400	聚成-2213
15天龍	883	辨才天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	54.2	39.3	文政10年	1827	04 /30				130020382700	聚成-2208
15天龍	884	辨才天像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	39.0	27.6	天保14年	1843	08 /01				130020430400	
15天龍	885	辨才天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.0	38.5	弘化4年	1847	07 /03				130020382600	聚成-2209
15天龍	886	辨才天像	現光	紙本白描	まくり	1枚	45.2	28.0	嘉永元年	1848	05 /00		(版写本-竹生嶋弁才天)		130020382100	
15天龍	887	辨才天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.5	38.7	嘉永3年	1850	02 /01		宇治惠心院本(天文4:1535)		130020380900	聚成-2211
15天龍	888	辨才天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	85.4	38.3	嘉永3年	1850	02 /05	6印	宇治惠心院本(天正10:1582:観深)		130020380300	聚成-2210
15天龍	889	辨才天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	66.3	38.3	安政6年	1859	03 /22				130020380200	
15天龍	890	辨才天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	90.4	44.0	万延元年	1860	04 /16				130020380800	
15天龍	891	辨才天像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	112.7	44.6	明治3年	1870	03 /00				130020381300	
15天龍	892	辨才天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.5	45.5	江戸時代後期	19世紀		6印	琳賢筆		130020380100	聚成-2212

別表1 《田村宗立旧藏仏画粉本》写本目録

15天龍	893	辨才天像	憲里	紙本白描彩色	まくり	1枚	90.1	38.3	江戸時代後期	19世紀			長谷川等叔図(天保8:1837)、原本洛西東寺什物	130020380500	
15天龍	894	辨才天像	作者不詳	紙本白描彩色	まくり	1枚	62.6	38.1	江戸時代後期	19世紀				130020380700	
15天龍	895	辨才天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	56.0	46.0	江戸時代後期	19世紀				130020381000	
15天龍	896	辨才天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	54.1	36.2	江戸時代後期	19世紀				130020381100	
15天龍	897	辨才天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.7	25.4	江戸時代後期	19世紀				130020381200	
15天龍	898	辨才天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.4	17.6	江戸時代後期	19世紀				130020381500	
15天龍	899	辨才天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.5	35.2	江戸時代後期	19世紀				130020381600	
15天龍	900	辨才天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	54.6	39.0	江戸時代後期	19世紀		5印		130020381700	聚成-2219
15天龍	901	辨才天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	73.2	37.7	江戸時代後期	19世紀		6印		130020381900	
15天龍	902	辨才天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	45.2	28.0	江戸時代後期	19世紀			(版写本-竹生嶋弁才天)	130020382000	
15天龍	903	辨才天像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	114.9	44.1	江戸時代後期	19世紀				130020382200	
15天龍	904	辨才天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	122.2	69.2	江戸時代後期	19世紀				130020382400	
15天龍	905	辨才天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	96.4	31.8	江戸時代後期	19世紀				130020382500	
15天龍	906	辨才天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	103.7	63.6	江戸時代後期	19世紀				130020383000	
15天龍	907	辨才天十五童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	112.0	44.5	弘化4年	1847	07_/04		長谷川等叔写本(天保10:1839)、原本比叡山薬樹院藏本(真書兆殿司筆南都興福寺什宝)	130020381800	聚成-2214
15天龍	908	辨才天十五童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	87.1	38.1	嘉永3年	1850	02_/10	6印	宇治惠心院本(天文14:1543)	130020380600	聚成-2216
15天龍	909	辨才天十五童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	97.2	46.1	嘉永3年	1850	02_/15	6印	宇治惠心院本	130020380400	聚成-2215
15天龍	910	辨才天十五童子像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	113.8	42.6	嘉永7年	1854	01_/18		比丘海如藏	130020382300	聚成-2218
15天龍	911	辨才天十五童子像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	82.0	38.2	安政5年	1858	02_/12			130020430700	聚成-2217
15天龍	912	善女龍王像	山口明雅	紙本白描	まくり	1枚	119.3	44.2	文化2年	1805	08_/12			130020470200	聚成-2188
15天龍	913	善女龍王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	86.6	41.3	嘉永6年	1853	11_/11		長谷寺能満院海如藏本、龍肝所持本	130020470500	
15天龍	914	善女龍王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	80.4	43.5	安政2年	1855	12_/16		長谷寺安養院観如所持本	130020470100	聚成-2186
15天龍	915	善女龍王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	107.6	60.7	安政3年	1856	05_/04		仏隆寺什宝	130020471000	
15天龍	916	善女龍王像	憲応	紙本白描	まくり	1枚	101.6	55.2	元治元年	1864	06_/11		仏隆寺什宝	130020470900	
15天龍	917	善女龍王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.0	28.0	江戸時代後期	19世紀		7印		130020470300	聚成-2189
15天龍	918	善女龍王像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	148.6	63.0	江戸時代後期	19世紀				130020470400	
15天龍	919	善女龍王像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	106.6	44.2	江戸時代後期	19世紀			空海筆	130020470600	
15天龍	920	善女龍王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	65.0	39.0	江戸時代後期	19世紀		7印		130020470700	
15天龍	921	善女龍王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	82.2	39.3	江戸時代後期	19世紀		5印		130020470800	聚成-2190
15天龍	922	善女龍王像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	84.7	38.7	江戸時代後期	19世紀		6印	仏隆寺什宝(空海真筆)	130020471100	聚成-2187
15天龍	923	善女龍王像袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	27.0	20.5	江戸時代後期	19世紀				130020471300	
15天龍	924	堅慧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.4	39.1	文政5年	1822	06_/24	3印	堅慧自筆本	130020471202	聚成-3146
15天龍	925	善女龍王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	81.8	39.2	文政5年	1822	06_/24	3印	空海真筆	130020471201	
15天龍	926	善女龍王像堅慧像袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	55.4	39.1	文政5年	1822	06_/24	3印	仏隆寺藏本(空海真筆)(堅慧真筆)	130020471203	聚成-3146A
15天龍	927	龍王像	憲里	紙本着彩	まくり	1枚	44.1	27.5	弘化4年	1847	08_/03		長谷川氏本	130020661000	
15天龍	928	深沙大將像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.0	17.0	元治元年	1864	02_/23			130020520100	
15天龍	929	深沙大將像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	102.4	64.0	慶応2年	1866	07_/09			130020520300	
15天龍	930	深沙大將像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.4	14.8	江戸時代後期	19世紀				130020520200	
15天龍	931	深沙大將像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	78.5	31.2	江戸時代後期	19世紀				130020520400	聚成-2204
15天龍	932	婆珊婆演底主夜神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	73.2	38.4	安政4年	1857	02_/06			130020650500	
15天龍	933	婆珊婆演底主夜神像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	75.7	45.7	安政4年	1857	02_/07			130020650700	
15天龍	934	婆珊婆演底主夜神像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	76.0	45.3	安政4年	1857	02_/12			130020650400	聚成-4067
15天龍	935	婆珊婆演底主夜神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	66.0	30.0	安政5年	1858	11_/04			130020650600	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

15天龍	936	婆娑婆演底主夜神像	雲道	紙本白描淡彩	まくり	1枚	88.0	38.5	文久2年	1862	07 /06			130020650300	
15天龍	937	婆娑婆演底主夜神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.2	16.8	江戸時代後期	19世紀				130020650100	聚成-4068
15天龍	938	婆娑婆演底主夜神像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	73.3	28.0	江戸時代後期	19世紀		6印	高山寺蔵本	130020650200	聚成-4069
15天龍	939	婆須蜜多神像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	73.4	38.6	文久4年	1864	01_/10		「正法伝」「大願」憲海別印	130020613500	
15天龍	940	鎮宅靈符神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.3	33.3	文政10年	1827	10_/18		高貴寺蔵本	130020613800	聚成-4117
15天龍	941	鎮宅靈符神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.5	21.5	文政10年	1827	11_/27			130020614100	
15天龍	942	鎮宅靈符神像	鳴貫盤月	紙本白描	まくり	1枚	60.4	28.8	江戸時代後期	19世紀				130020613700	聚成-4116
15天龍	943	玉女神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	92.0	37.8	嘉永6年	1853	11 /28		龍肝所持本	130020610300	聚成-4114
15天龍	944	玉女神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	68.2	38.8	江戸時代後期	19世紀		5印		130020610200	
15天龍	945	鬼神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.6	94.7	江戸時代後期	19世紀				130020613600	
15天龍	946	僻邪神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	100.0	60.1	江戸時代後期	19世紀		5印		130020610100	聚成-4119
16権現	947	愛宕権現像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	90.8	38.6	弘化4年	1847	07 /30		長谷川氏本	130020550100	聚成-4083
16権現	948	愛宕権現像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	74.8	38.6	嘉永3年	1850	01_/29		宇治恵心院本(元和5・1619:岡村大蔵)	130020550500	聚成-4084
16権現	949	愛宕権現像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	108.8	40.2	江戸時代後期	19世紀				130020550300	
16権現	950	山王七猿図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	32.8	32.4	安政6年	1859	12 /19			130020560800	
16権現	951	山王七猿図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	17.9	18.8	安政6年	1859	12 /19			130020560900	
16権現	952	山王七猿図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	38.2	60.2	安政6年	1859	12 /21			130020560700	
16権現	953	山王社本地仏刻銘	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	38.3	27.1	弘化4年	1847	07 /26		山王寺総持院什物	130020560200	
16権現	954	山王社本地薬師如来像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.7	23.3	江戸時代後期	19世紀				130020560100	
16権現	955	山王二十一社名	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	12.4	34.0	江戸時代後期	19世紀				130020560600	
16権現	956	山王本地垂迹図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	23.8	73.8	江戸時代後期	19世紀				130020560500	聚成-4003
16権現	957	山王曼荼羅図	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	105.0	39.1	弘化4年	1847	08 /02		長谷川氏本	130020560400	聚成-4002
16権現	958	山王曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	153.0	61.5	弘化4年	1847	08 /08			130020560300	聚成-4001
16権現	959	秋葉権現像	現光	紙本白描	まくり	1枚	59.2	26.6	弘化4年	1847	02 /02			130020600200	聚成-4086
16権現	960	秋葉権現像	現光	紙本白描一部朱筆	まくり	1枚	52.3	27.0	江戸時代後期	19世紀				130020600100	
16権現	961	秋葉権現像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	82.8	38.8	江戸時代後期	19世紀		5印		130020600300	聚成-4085
16権現	962	秋葉権現像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.5	12.0	江戸時代後期	19世紀				130020600400	
16権現	963	熊野権現像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	80.8	53.1	江戸時代後期	19世紀		5印		130020600700	聚成-4008
16権現	964	清瀧権現像	憲里	紙本墨画	まくり	1枚	85.7	38.3	嘉永2年	1849	11 /24			130020601200	
16権現	965	清瀧権現像	現光	紙本墨画	まくり	1枚	88.7	38.9	江戸時代後期	19世紀				130020601000	
16権現	966	清瀧権現像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	84.7	39.0	江戸時代後期	19世紀		5印	御室真乘院殿蔵本	130020601100	聚成-4064
16権現	967	清瀧権現像封紙	作者不詳	紙本墨書	封紙	1枚	27.4	40.7	江戸時代後期	19世紀				130020601102	聚成-4064A
16権現	968	白山権現像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	54.8	38.5	江戸時代後期	19世紀		7印		130020600900	聚成-4081
16権現	969	船玉明神像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	110.2	47.1	嘉永4年	1851	08 /12			130020550700	聚成-4099
16権現	970	伊須流岐比古神像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	96.8	37.3	安政2年	1855	06 /18			130020150200	聚成-4082
17神祇	971	天神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	66.1	48.9	文政10年	1827	11 /23			130020630900	聚成-4046
17神祇	972	天神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	114.0	44.3	文政11年	1828	07_/05	5印	長谷寺月輪院蔵本	130020632400	聚成-4042
17神祇	973	天神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	63.7	38.6	文政12年	1829	10 /19		櫻本坊蔵本	130020630800	聚成-4041
17神祇	974	天神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	80.5	39.2	文政12年	1829	10_/19		奈良県吉野町櫻本坊蔵本	130020632100	聚成-4040
17神祇	975	天神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	94.1	43.0	天保2年	1831	10_/06			130020631200	聚成-4047
17神祇	976	天神像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	69.6	29.0	嘉永6年	1853	09 /28			130020630700	聚成-4048
17神祇	977	天神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	26.2	18.7	嘉永6年	1853	09 /29		勢州津国分弥陀三宝寺什物	130020631600	

17神祇	978	天神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	60.0	38.0	嘉永6年	1853	11/12		長谷寺能満院海如藏本, 龍肝所持本	130020631900	聚成-4045
17神祇	979	天神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	74.3	42.2	嘉永6年	1853	12/01		徳栄山妙法寺什宝, 龍肝所持本	130020631000	聚成-4044
17神祇	980	天神像	憲海	紙本白描朱彩	まくり	1枚	82.3	49.6	嘉永7年	1854	07/02		円融无相本(自洽泉為恭所持本)	130020631400	聚成-4039
17神祇	981	天神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.1	50.8	嘉永7年	1854	08/00			130020632200	
17神祇	982	天神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	73.7	46.0	安政3年	1856	06/20		円譚所持本	130020631700	聚成-4043
17神祇	983	天神像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	46.0	30.4	安政7年	1860	03/28			130020630100	
17神祇	984	天神像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	54.0	38.6	明治2年	1869	11/29		北野天満宮(北野会前本尊)	130020633200	
17神祇	985	天神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.2	33.3	江戸時代後期	19世紀		5印		130020630500	
17神祇	986	天神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.4	37.7	江戸時代後期	19世紀				130020630600	
17神祇	987	天神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	86.5	38.7	江戸時代後期	19世紀				130020631500	
17神祇	988	天神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.4	49.8	江戸時代後期	19世紀				130020631800	
17神祇	989	天神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.0	44.1	江戸時代後期	19世紀				130020632000	
17神祇	990	天神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	89.8	39.2	江戸時代後期	19世紀				130020632600	
17神祇	991	天神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.5	23.4	江戸時代後期	19世紀				130020633100	
17神祇	992	渡唐天神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	46.9	27.5	天保4年	1833	10/10	5印		130020633000	聚成-4049
17神祇	993	天神・魁神像	皆了	紙本白描	まくり	1枚	24.3	34.0	江戸時代後期	19世紀				130020631100	
17神祇	994	稻荷明神像	現光	紙本白描	まくり	1枚	40.1	27.1	弘化4年	1847	07/27			130020620200	聚成-4075
17神祇	995	稻荷明神像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	29.6	19.4	慶応2年	1866	05/13			130020620400	
17神祇	996	稻荷明神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.8	18.8	江戸時代後期	19世紀				130020620100	
17神祇	997	稻荷明神像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	27.7	17.2	江戸時代後期	19世紀				130020620300	聚成-4076
17神祇	998	三宝荒神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.0	27.4	元治元年	1864	07/03		(版写本-浅草神光寺大護院)	130020440900	
17神祇	999	三宝荒神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	81.0	28.8	江戸時代後期	19世紀		5印		130020440700	聚成-4089
17神祇	1000	三宝荒神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.0	27.8	江戸時代後期	19世紀		5印		130020440800	聚成-4090
17神祇	1001	三宝荒神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	96.8	39.2	江戸時代後期	19世紀				130020441000	聚成-4091
17神祇	1002	三宝荒神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	94.3	41.7	江戸時代後期	19世紀				130020441100	
17神祇	1003	如来荒神像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	113.7	45.0	嘉永4年	1851	03/13		森田重三郎本	130020440500	聚成-4087
17神祇	1004	如来荒神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	81.0	39.0	文久元年	1861	01/00			130020440100	
17神祇	1005	如来荒神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	88.5	38.5	文久2年	1862	04/00			130020440300	
17神祇	1006	如来荒神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	73.1	27.2	江戸時代後期	19世紀				130020440400	
17神祇	1007	如来荒神五帝龍王像	作者不詳	紙本着彩	まくり	1枚	98.5	41.0	江戸時代後期	19世紀				130020441300	聚成-4088
17神祇	1008	子島荒神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	53.0	38.4	嘉永3年	1850	01/28		宇治惠心院本(天正8:1580:観深)	130020440600	聚成-4092
17神祇	1009	青面金剛像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	77.2	28.0	天保2年	1831	03/05			130020480700	聚成-4094
17神祇	1010	青面金剛像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	100.5	53.8	嘉永元年	1848	07/05			130020480400	聚成-4096
17神祇	1011	青面金剛像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	60.1	27.6	文久元年	1861	03/28			130020480300	聚成-4093
17神祇	1012	青面金剛像	作者不詳	紙本白描	裏打	1枚	62.7	29.5	江戸時代後期	19世紀				130020480100	
17神祇	1013	青面金剛像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	59.6	27.5	江戸時代後期	19世紀		5印		130020480200	聚成-4095
17神祇	1014	青面金剛像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	93.0	38.4	江戸時代後期	19世紀				130020480500	
17神祇	1015	青面金剛像	作者不詳	紙本白描	裏打	1枚	116.2	38.0	江戸時代後期	19世紀				130020480600	
17神祇	1016	青面金剛像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.8	26.3	江戸時代後期	19世紀				130020480800	
17神祇	1017	三十番神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	112.7	51.3	嘉永5年	1852	04/16		森田氏本	130020540200	聚成-4071
17神祇	1018	三十番神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	83.1	43.0	嘉永5年	1852	04/17		森田所持古本	130020540100	聚成-4070
17神祇	1019	三輪明神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	80.0	50.6	江戸時代後期	19世紀				130020410800	聚成-4078
17神祇	1020	松尾明神像	萩原盤山	紙本白描	まくり	1枚	66.2	29.8	江戸時代後期	19世紀				130020611800	聚成-4077
17神祇	1021	松尾明神像	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	59.4	39.7	江戸時代後期	19世紀				130020611900	
17神祇	1022	松尾明神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.7	27.6	江戸時代後期	19世紀				130020612000	
17神祇	1023	赤山明神像	現光	紙本白描	まくり	1枚	59.8	38.2	弘化4年	1847	08/01			130020612100	聚成-4061

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

17神祇	1024	多賀明神像	山口春水堂	紙本白描一部 朱描	まくり	1枚	56.6	39.3	明和2年	1765	??/19			130020611700	聚成-4079
17神祇	1025	日向明神像	現光	紙本白描	まくり	1枚	77.2	49.2	弘化4年	1847	08 /02			130020611600	聚成-4080
17神祇	1026	猿田彦命像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	71.1	27.3	弘化4年	1847	08 /07			130020610900	聚成-4101
17神祇	1027	猿田彦命像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.7	28.1	江戸時代後期	19世紀				130020550800	聚成-4100
17神祇	1028	天孫降臨図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	117.0	38.5	弘化4年	1847	08 /08			130020611000	聚成-4102
17神祇	1029	宝相七神図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	65.7	46.6	江戸時代後期	19世紀				130020640500	聚成-4112
17神祇	1030	宝相七神図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	63.5	38.4	江戸時代後期	19世紀		2印		130020641900	
17神祇	1031	宝相七神図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	63.2	34.4	江戸時代後期	19世紀				130020642100	
17神祇	1032	宝相七神図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	37.4	27.0	江戸時代後期	19世紀				130020642200	聚成-4113
17神祇	1033	宝相七神図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	37.9	27.0	江戸時代後期	19世紀				130020642300	
17神祇	1034	宝相七神像	作者不詳	紙本白描	帖	1帖(4紙)	27.1	19.2	江戸時代後期	19世紀				130020642500	
17神祇	1035	形神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.5	34.1	江戸時代後期	19世紀				130020642600	
17神祇	1036	石神・寛神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.5	34.1	江戸時代後期	19世紀				130020641300	
17神祇	1037	七福神耕作図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	55.5	78.6	文政10年	1827	06u/01			130020641800	
17神祇	1038	七福神図	現光	紙本墨画	まくり	1枚	65.2	148.5	嘉永4年	1851	09 /02		寿香寺蔵本、藤原守一筆	130020640800	
17神祇	1039	七福神図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	77.9	30.9	江戸時代後期	19世紀		7印		130020640600	聚成-4111
17神祇	1040	七福神図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	55.0	41.1	江戸時代後期	19世紀				130020640700	聚成-4110
17神祇	1041	七福神図福祿寿像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.1	94.4	江戸時代後期	19世紀		5印		130020640900	聚成-4109
17神祇	1042	三福神図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.2	34.4	江戸時代後期	19世紀				130020641000	
17神祇	1043	恵比須・大黒像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	38.4	27.2	江戸時代後期	19世紀				130020640300	聚成-4108
17神祇	1044	恵比須像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	32.3	27.2	江戸時代後期	19世紀				130020640100	聚成-4106
17神祇	1045	恵比須像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	135.0	62.5	江戸時代後期	19世紀		5印		130020640400	聚成-4107
17神祇	1046	布袋像	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	24.7	33.9	江戸時代後期	19世紀				130020641500	
17神祇	1047	布袋像	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	24.6	34.0	江戸時代後期	19世紀				130020641600	
17神祇	1048	布袋像	宇樂斎	紙本墨画	まくり	1枚	33.9	24.6	江戸時代後期	19世紀				130020641700	
17神祇	1049	福祿寿像	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	33.8	24.6	江戸時代後期	19世紀				130020641200	
17神祇	1050	福祿寿像	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	40.9	27.5	江戸時代後期	19世紀				130020641400	
18諸神	1051	祇園神像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	85.6	45.0	弘化4年	1847	08 /03		長谷川氏本	130020460700	聚成-4074
18諸神	1052	牛頭天王歳徳八将神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	83.0	38.8	安政5年	1858	12 /21			130020460500	聚成-4073
18諸神	1053	牛頭天王像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	66.7	37.9	文久3年	1863	02 /02			130020460200	
18諸神	1054	牛頭天王像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	41.0	45.0	江戸時代後期	19世紀		5印		130020460600	聚成-4072
18諸神	1055	三社権現像	作者不詳	紙本着彩	まくり	1枚	57.4	38.0	嘉永6年	1853	11 /13		龍肝所持本	130020600800	聚成-4023
18諸神	1056	三社権現像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	81.5	38.0	文久3年	1863	09 /24		龍安寺西源院什物	130020451200	聚成-4022
18諸神	1057	三社権現像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	74.2	43.0	江戸時代後期	19世紀		5印		130020450200	
18諸神	1058	三社権現像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	29.7	38.0	江戸時代後期	19世紀				130020450300	聚成-4020
18諸神	1059	三社権現像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	71.2	28.7	江戸時代後期	19世紀				130020450700	聚成-4021
18諸神	1060	三社権現像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	30.7	36.2	江戸時代後期	19世紀				130020451300	
18諸神	1061	五社権現図	作者不詳	紙本白描一部 淡彩	まくり	1枚	69.3	48.5	江戸時代後期	19世紀				130020612600	
18諸神	1062	蔵王権現像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	77.8	39.3	文政12年	1829	10 /20		奈良県吉野町竹林院	130020600500	聚成-4051
18諸神	1063	蔵王権現像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	88.7	43.7	嘉永3年	1850	02 /10	6印	宇治恵心院本(天文8:1539:観重)	130020600600	聚成-4050
18諸神	1064	高野四社明神図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	56.3	38.5	弘化4年	1847	07 /30			130020570400	
18諸神	1065	高野四社明神図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	112.0	78.2	弘化4年	1847	08 /01		長谷川氏本	130020570600	聚成-4052
18諸神	1066	高野四社明神図	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	102.8	46.8	弘化4年	1847	08 /03	1印	長谷川等叔図	130020570700	
18諸神	1067	高野四社明神図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	107.0	38.0	嘉永3年	1850	02 /08	6印	宇治恵心院本(天正20:1592:観深)(慶長7:1602:観英)	130020571000	聚成-4053
18諸神	1068	高野四社明神図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	113.0	52.0	万延元年	1860	10 /19		勢州福楽寺蔵本	130020570500	聚成-4054

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

18諸神	1069	狩場明神像	作者不詳	紙本着彩	まくり	1枚	93.2	41.9	明治3年	1870	02 /25	1印		130020570800	聚成-4059
18諸神	1070	丹生明神像	作者不詳	紙本着彩	まくり	1枚	93.2	41.8	明治3年	1870	02 /25	1印		130020570900	聚成-4060
18諸神	1071	高野四社明神図(丹生明神)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.8	26.0	江戸時代後期	19世紀				130020570101	聚成-4056
18諸神	1072	高野四社明神図(高野明神)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.4	26.0	江戸時代後期	19世紀				130020570102	聚成-4055
18諸神	1073	高野四社明神図(気比明神)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.3	27.0	江戸時代後期	19世紀				130020570103	聚成-4058
18諸神	1074	高野四社明神図(厳島明神)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.3	25.8	江戸時代後期	19世紀				130020570104	聚成-4057
18諸神	1075	雨宝童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	77.5	39.5	文政12年	1829	04 /11			130020450100	聚成-4017
18諸神	1076	雨宝童子像	憲海・宗立	紙本白描	まくり	1枚	112.5	44.0	嘉永3年	1850	02_/09	6印	宇治恵心院本(長禄13:1570:観深)	130020451000	聚成-4019
18諸神	1077	雨宝童子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.3	28.0	江戸時代後期	19世紀				130020450400	
18諸神	1078	雨宝童子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	154.5	74.0	江戸時代後期	19世紀				130020450500	聚成-4018
18諸神	1079	雨宝童子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	101.5	44.6	江戸時代後期	19世紀				130020450600	
18諸神	1080	雨宝童子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	82.7	40.2	江戸時代後期	19世紀				130020450800	
18諸神	1081	雨宝童子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	16.8	13.0	江戸時代後期	19世紀				130020450900	
18諸神	1082	雨宝童子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.8	25.5	江戸時代後期	19世紀				130020451100	
18諸神	1083	天照大神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	153.6	74.2	江戸時代後期	19世紀			高貴寺神道中尊	130020612900	聚成-4024
18諸神	1084	僧形八幡神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	112.7	42.9	嘉永元年	1848	04 /19			130020580700	聚成-4013
18諸神	1085	僧形八幡神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	60.7	38.9	嘉永元年	1848	08 /28		経辨筆	130020580600	聚成-4009
18諸神	1086	僧形八幡神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	112.6	59.8	嘉永3年	1850	02_/23	6印	宇治恵心院本(元和元:1615:中将)	130020581000	聚成-4012
18諸神	1087	僧形八幡神像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	61.2	38.1	嘉永3年	1850	04_/27	1印	高山寺経辨筆, 憲海写本(嘉永元:1848)	130020581100	
18諸神	1088	僧形八幡神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	52.6	38.0	嘉永3年	1850	04 /28			130020580800	聚成-4010
18諸神	1089	僧形八幡神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.2	19.5	江戸時代後期	19世紀				130020581600	
18諸神	1090	僧形八幡神像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	47.5	27.0	元治2年	1865	02_/21	「十方明宗立」印		130020580200	
18諸神	1091	僧形八幡神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	20.5	26.1	明治3年	1870	05 /28			130020581500	
18諸神	1092	僧形八幡神像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	58.0	28.0	江戸時代後期	19世紀		5印		130020580100	聚成-4011
18諸神	1093	僧形八幡神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.3	27.4	江戸時代後期	19世紀				130020580500	
18諸神	1094	僧形八幡神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	86.8	38.8	江戸時代後期	19世紀				130020580900	
18諸神	1095	八幡神像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	59.2	32.5	文久3年	1863				130020581300	
18諸神	1096	八幡神像	嶋貴盤月	紙本白描	まくり	1枚	38.3	30.6	江戸時代後期	19世紀		6印		130020580300	聚成-4014
18諸神	1097	八幡神像	萩原盤山	紙本白描	まくり	1枚	38.6	27.6	江戸時代後期	19世紀		6印		130020580400	聚成-4015
18諸神	1098	八幡神像	一之斎邦紹	紙本白描朱彩	まくり	1枚	40.2	27.6	江戸時代後期	19世紀				130020581200	聚成-4016
18諸神	1099	八幡神像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	54.0	35.6	江戸時代後期	19世紀				130020581400	
18諸神	1100	聖徳太子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	77.4	43.1	文政10年	1827	08 /02	5印	御室真乘院殿蔵本	130020701700	聚成-3007
18諸神	1101	聖徳太子像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	113.4	79.2	弘化2年	1845	07 /26		江戸護国寺本堂蔵本	130020702100	
18諸神	1102	聖徳太子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	84.5	38.0	嘉永元年	1848	03 /16		長谷川氏本	130020700300	
18諸神	1103	聖徳太子像	現光	紙本白描	まくり	1枚	111.5	48.4	嘉永元年	1848	04 /26			130020701300	聚成-3003
18諸神	1104	聖徳太子像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	34.6	24.7	嘉永3年	1850	02 /22		(版写本-京都市下寺町太子堂本)	130020700100	聚成-3001
18諸神	1105	聖徳太子像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	38.1	27.3	嘉永6年	1853	03_/23			130020700500	聚成-3002
18諸神	1106	聖徳太子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	186.5	66.8	嘉永6年	1853	12_/08		比叡山来迎寺什物(伝太子自筆), 龍肝所持本	130020701500	聚成-3004
18諸神	1107	聖徳太子像	松田	紙本白描淡彩	まくり	1枚	118.5	59.2	安政4年	1857				130020701800	聚成-3008
18諸神	1108	聖徳太子像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	112.4	63.4	安政7年	1860	03 /03			130020701100	
18諸神	1109	聖徳太子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	43.0	38.3	文久3年	1863	08_/13		智積院蔵本	130020702200	聚成-3009
18諸神	1110	聖徳太子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.9	27.7	江戸時代後期	19世紀				130020700400	
18諸神	1111	聖徳太子像	北川林篁子	紙本白描	まくり	1枚	49.1	27.8	江戸時代後期	19世紀				130020700700	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

18諸神	1112	聖徳太子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.0	38.2	江戸時代後期	19世紀					130020700800	
18諸神	1113	聖徳太子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.7	28.0	江戸時代後期	19世紀					130020700900	
18諸神	1114	聖徳太子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	41.2	28.1	江戸時代後期	19世紀					130020701600	聚成-3005
18諸神	1115	聖徳太子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.9	39.5	江戸時代後期	19世紀			5印		130020702000	聚成-3006
18諸神	1116	聖徳太子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	25.6	34.6	江戸時代後期	19世紀					130020702400	
18諸神	1117	聖徳太子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	45.5	17.2	江戸時代後期	19世紀	01 /29				130020700600	
18諸神	1118	春日鹿曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	93.4	39.5	江戸時代後期	19世紀			5印		130020590100	聚成-4006
18諸神	1119	春日若宮神像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	96.4	41.6	江戸時代後期	19世紀			6印	高山寺方便智院本(観深筆)	130020590300	聚成-4005
18諸神	1120	春日赤童子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	84.7	28.0	文政10年	1827	06u/21			高山寺蔵本	130020590400	聚成-4007
18諸神	1121	春日本迹曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	130.0	60.0	嘉永2年	1849	06 /12				130020590200	聚成-4004
18諸神	1122	葛川護法尊像	作者不詳	紙本着彩	まくり	1枚	65.0	38.3	嘉永2年	1849	04 /01				130020612800	聚成-4066
18諸神	1123	九頭龍権現像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	137.5	53.5	弘化4年	1847	07 /30			長谷川氏本	130020601300	聚成-4065
18諸神	1124	鍛冶神像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	64.3	38.4	江戸時代後期	19世紀					130020650800	聚成-4097
18諸神	1125	鍛冶神像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	52.0	30.6	江戸時代後期	19世紀					130020650900	聚成-4098
18諸神	1126	鍛冶神像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	80.2	40.3	江戸時代後期	19世紀					130020651000	
19曼荼	1127	一字金輪仏頂曼荼羅図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	45.3	34.7	弘化5年	1848	01 /00				130020022400	
19曼荼	1128	一字金輪仏頂曼荼羅図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	148.0	104.2	江戸時代後期	19世紀			3印	原在中筆	130020022300	聚成-1031
19曼荼	1129	尊勝仏頂曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.5	66.9	江戸時代後期	19世紀			5印		130020022500	聚成-1032
19曼荼	1130	尊勝仏頂曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.7	40.2	江戸時代後期	19世紀					130020022600	
19曼荼	1131	尊勝仏頂曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	99.8	59.2	江戸時代後期	19世紀			1印		130020100300	聚成-1033
19曼荼	1132	最勝仏頂曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	51.2	38.1	嘉永6年	1853	11 /16		龍肝所持本		130020022700	
19曼荼	1133	熾盛光仏頂曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	77.7	56.0	嘉永7年	1854	08 /11		長谷川氏本		130020023100	聚成-1034
19曼荼	1134	熾盛光仏頂曼荼羅図	憲心	紙本白描	まくり	1枚	131.5	69.7	元治元年	1864	05 /00				130020023200	聚成-1036
19曼荼	1135	熾盛光仏頂曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	110.1	71.0	江戸時代後期	19世紀					130020023000	聚成-1035
19曼荼	1136	仏眼曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	84.0	43.5	安政2年	1855	04 /04		高倉孝在写本(宗淵蔵本)		130020022800	聚成-1018
19曼荼	1137	仏眼曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1帖(12紙)	28.0	39.4	江戸時代後期	19世紀			5印		130020022900	
19曼荼	1138	仏眼三昧耶曼荼羅図稿	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.4	18.2	江戸時代後期	19世紀					130020042600	
19曼荼	1139	阿弥陀観音曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	93.5	70.5	江戸時代後期	19世紀					130020040600	
19曼荼	1140	不動安鎮曼荼羅図	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	98.2	58.6	弘化2年	1845	08 /12				130020042200	聚成-1066
19曼荼	1141	不動安鎮曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	134.0	96.0	安政4年	1857	09 /27				130020040900	聚成-1065
19曼荼	1142	不動安鎮曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	147.2	107.1	江戸時代後期	19世紀					130020041000	
19曼荼	1143	不動安鎮曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	120.8	76.8	江戸時代後期	19世紀				森田氏蔵本	130020042100	
19曼荼	1144	不動安鎮曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	131.3	84.4	江戸時代後期	19世紀			1印		130020042400	聚成-1064
19曼荼	1145	不動曼荼羅図	憲海	紙本白描	冊子	1帖(4紙)	27.5	38.3	安政5年	1858	10 /20	1印	長谷川氏本		130020042300	
19曼荼	1146	童子経曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	71.6	28.2	文政3年	1820	04 /15	6印	慈光寺蔵本		130020490300	聚成-1054
19曼荼	1147	童子経曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	90.8	39.0	文政11年	1828	09 /06	6印	唐繪		130020490400	
19曼荼	1148	童子経曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	111.6	54.9	江戸時代後期	19世紀			5印		130020490500	聚成-1053
19曼荼	1149	童子経曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	91.0	49.6	江戸時代後期	19世紀					130020490600	
19曼荼	1150	童子経曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	132.8	65.9	江戸時代後期	19世紀			5印		130020490700	聚成-1052
19曼荼	1151	童子経曼荼羅図	嶋貞盤月	紙本白描	裏打	1枚	104.5	40.8	江戸時代後期	19世紀				依唐本會陽荻原盤山図同門人嶋貞盤月写	130020490800	
19曼荼	1152	童子経曼荼羅図	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	99.0	38.6	江戸時代後期	19世紀					130020490900	
19曼荼	1153	愛染曼荼羅図	憲里・現光	紙本白描	まくり	1枚	79.5	63.5	嘉永元年	1848	06 /29	1印	長谷川氏本		130020040700	聚成-1067
19曼荼	1154	随求曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	56.6	53.6	嘉永3年	1850	12 /13				130020040500	聚成-1060
19曼荼	1155	随求曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	裏打	1枚	52.2	54.6	江戸時代後期	19世紀					130020281400	
19曼荼	1156	随求曼荼羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	35.0	53.4	江戸時代後期	19世紀					130020281600	聚成-1061
19曼荼	1157	五大虚空蔵曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	93.4	93.0	嘉永6年	1853	10 /16		長谷寺方丈蔵本		130020040300	聚成-1059

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

19曼茶	1158	五大虚空藏曼茶羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	129.0	128.5	安政6年	1859	12 / 11		高野山西南院蔵本	130020261500	聚成-1058
19曼茶	1159	千手観音曼茶羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	92.3	79.6	嘉永7年	1854	08 / 15		長谷川等鶴写本	130020040100	聚成-1055
19曼茶	1160	如意輪観音三昧耶形曼茶羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	48.0	54.4	安政2年	1855	05 / 20			130020040200	聚成-1056
19曼茶	1161	八字文殊曼茶羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.0	93.0	江戸時代後期					130020121500	聚成-1057
19曼茶	1162	法起菩薩曼茶羅図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	60.3	44.1	文久3年	1863	10 / 10			130020040800	聚成-1063
19曼茶	1163	毘沙門天曼茶羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	47.0	28.3	寛政10年	1798	06 / 04	5印	元慶寺蔵本	130020041400	
19曼茶	1164	毘沙門天曼茶羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	141.7	85.5	安政6年	1859	03 / 28			130020041300	聚成-1072
19曼茶	1165	毘沙門天曼茶羅図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	70.4	62.6	文久元年	1861	11 / 16	2印・8印		130020041100	聚成-1073
19曼茶	1166	毘沙門天曼茶羅図袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	28.1	20.4	文政12年	1829	05 / 21	6印		130020041204	聚成-1071A
19曼茶	1167	焰摩天曼茶羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	88.7	55.4	嘉永6年	1853	12 / 00		龍肝所持本	130020041600	
19曼茶	1168	焰摩天曼茶羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	100.2	69.5	安政5年	1858	02 / 06			130020041700	聚成-1075
19曼茶	1169	焰摩天曼茶羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	99.4	38.4	江戸時代後期	19世紀				130020041800	
19曼茶	1170	毘沙門天曼茶羅図(中)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	149.4	60.4	文政12年	1829	05 / 21	6印	長谷川等鶴(賀一)・伊之助写本(寛政10:1798)於花山元慶寺)長谷川喜右衛門図(寛延3:1750)撰州北山本山寺へ松平資訓寄附	130020041201	聚成-1069
19曼茶	1171	毘沙門天曼茶羅図(右)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	158.3	60.1	文政12年	1829	05 / 21	6印	長谷川等鶴(賀一)・伊之助写本(寛政10:1798)於花山元慶寺)長谷川喜右衛門図(寛延3:1750)撰州北山本山寺へ松平資訓寄附	130020041202	聚成-1070
19曼茶	1172	毘沙門天曼茶羅図(左)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	158.1	60.9	文政12年	1829	05 / 21	6印	長谷川等鶴(賀一)・伊之助写本(寛政10:1798)於花山元慶寺)長谷川喜右衛門図(寛延3:1750)撰州北山本山寺へ松平資訓寄附	130020041203	聚成-1071
19曼茶	1173	歡喜天曼茶羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	103.0	57.5	文政10年	1827	08 / 01	5印	御室真乘院殿蔵本	130020042501	聚成-1078
19曼茶	1174	歡喜天曼茶羅図封紙	憲海	紙本墨書	封紙	1枚	28.1	40.2	江戸時代後期	19世紀	08 / 01	5印		130020042502	聚成-1078A
19曼茶	1175	吉祥天曼茶羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	149.2	65.9	嘉永7年	1854	08 / 15		長谷川氏本(古写校本)	130020041500	聚成-1074
19曼茶	1176	大黒天曼茶羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	94.1	38.4	江戸時代後期	19世紀				130020611100	聚成-1076
19曼茶	1177	茶吉尼天曼茶羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	99.5	46.8	嘉永6年	1853	11 / 15		龍肝所持本	130020042000	聚成-1077
19曼茶	1178	金剛童子曼茶羅	宗立	紙本白描	まくり	1枚	79.8	37.8	慶応元年	1865	07 / 24			130020041900	聚成-1068
19曼茶	1179	星曼茶羅図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	94.5	54.3	嘉永4年	1851	03 / 24		僧護校本	130020021700	聚成-1080
19曼茶	1180	星曼茶羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	81.6	68.5	嘉永5年	1852	10 / 26			130020021900	
19曼茶	1181	星曼茶羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	98.3	62.5	安政3年	1856	05 / 13			130020021800	
19曼茶	1182	星曼茶羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	79.8	54.5	江戸時代後期	19世紀				130020021600	聚成-1079
19曼茶	1183	星曼茶羅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	78.0	47.2	江戸時代後期	19世紀				130021051600	
20諸図	1184	南天铁塔図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	152.5	52.8	文政10年	1827	12 / 19	6印	長谷寺小池坊伝法院蔵本	130020011600	聚成-1037
20諸図	1185	瑜祇塔図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	108.7	59.3	文政3年	1820	06 / 08		饗蔵本	130020011700	聚成-1038
20諸図	1186	義淵五輪塔図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	35.0	25.2	江戸時代後期	19世紀			菅生寺遺跡	130021030800	
20諸図	1187	宝篋印塔図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	26.7	32.0	江戸時代後期	19世紀				130021032100	
20諸図	1188	天神七代像	憲海	紙本白描	帖	1帖(9紙)	28.0	41.1	文政5年	1822	08 / 13	5印	慈雲草案本	130020671000	聚成-4032
20諸図	1189	国常立尊像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	82.7	39.2	江戸時代後期	19世紀		5印		130020670101	聚成-4025
20諸図	1190	国狭槌尊像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	81.9	39.1	江戸時代後期	19世紀		5印		130020670102	聚成-4026
20諸図	1191	豊斟淳尊像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	82.0	39.0	江戸時代後期	19世紀		5印		130020670103	聚成-4027
20諸図	1192	面足尊檀根尊像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	82.0	39.1	江戸時代後期	19世紀		5印		130020670104	聚成-4029
20諸図	1193	濕土煮尊沙土煮尊像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	81.8	38.7	江戸時代後期	19世紀		5印		130020670105	聚成-4028
20諸図	1194	大戸道尊大菩薩尊像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	81.8	39.1	江戸時代後期	19世紀		5印		130020670106	聚成-4030
20諸図	1195	伊弉諾尊像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	82.0	39.1	江戸時代後期	19世紀		5印		130020670107	聚成-4031

20諸図	1196	天神七代像袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	28.0	20.5	江戸時代後期	19世紀				130020670108	聚成-4031A
20諸図	1197	七神図	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	89.4	27.7	慶応元年	1865	11 /16			130020670800	
20諸図	1198	天神像(一)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.5	39.2	江戸時代後期	19世紀		2印		130020670901	
20諸図	1199	天神像(二)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.5	39.2	江戸時代後期	19世紀		2印		130020670902	
20諸図	1200	天神像(三)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.5	39.2	江戸時代後期	19世紀		2印		130020670903	
20諸図	1201	三種神器図	憲海	紙本白描	まくり	1巻	28.2	341.9	文政10年	1827	07 /13	1印	竹田前松院本(法原)	130021010100	聚成-4034
20諸図	1202	十種神宝記	作者不詳	紙本墨書	帖	1帖(5紙)	25.0	17.4	江戸時代後期	19世紀				130021010200	
20諸図	1203	十種神宝図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1巻	28.1	227.4	文政5年	1822	09_/10	5印・4印	伊賀国某寺本(空海真筆)	130021010601	
20諸図	1204	十種神宝図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1巻	28.4	234.2	文政8年	1825	12_/24	5印・7印	武州大悲願寺本(空海真筆)	130021010501	聚成-4035
20諸図	1205	十種神宝図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.4	8.8	江戸時代後期	19世紀				130021010400	
20諸図	1206	十種神宝図袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	37.0	5.7	文政8年	1825	12 /24		武州大悲願寺本(空海真筆)	130021010502	聚成-4035A
20諸図	1207	十種神宝図封紙	憲海	紙本墨書	封紙	1枚	50.0	28.0	江戸時代後期	19世紀		4印		130021010602	
20諸図	1208	十種神宝図(一)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	40.0	江戸時代後期	19世紀				130021010301	
20諸図	1209	十種神宝図(二)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	40.0	江戸時代後期	19世紀				130021010302	
20諸図	1210	十種神宝図(三)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	40.0	江戸時代後期	19世紀				130021010303	
20諸図	1211	仏足石図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	59.6	27.7	江戸時代後期	19世紀		5印	飲光筆	130020530100	聚成-1118
20諸図	1212	仏足石図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.1	55.9	江戸時代後期	19世紀				130020530200	
20諸図	1213	仏足石図註	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	15.4	41.8	文久2年	1862	10 /00			130021001600	
20諸図	1214	釈迦親手華判梵書唵字譜	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.7	27.9	江戸時代後期	19世紀		5印		130021000100	
20諸図	1215	社日祭尊像	憲海	紙本白描	帖	1帖(8紙)	27.6	18.3	江戸時代後期	19世紀		6印		130020671100	聚成-4033
20諸図	1216	戒壇院如意図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	88.3	26.8	文政13年	1830	04 /22		唐招提寺戒壇院蔵本	130021010700	
20諸図	1217	錫杖図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	69.2	33.4	江戸時代後期	19世紀		2印		130021038200	
20諸図	1218	独鈷念珠袈裟図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	19.0	24.8	江戸時代後期	19世紀				130021038400	
20諸図	1219	念珠図註書	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	51.5	36.8	江戸時代後期	19世紀				130021038300	
20諸図	1220	五鈷図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.7	34.0	江戸時代後期	19世紀				130021038500	
20諸図	1221	三鈷鈴図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.4	33.9	江戸時代後期	19世紀				130021038600	
20諸図	1222	灌頂幡羯磨輪宝図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	61.2	37.8	江戸時代後期	19世紀				130020971700	
20諸図	1223	瑜祇三昧耶形図	憲海	紙本白描	まくり	1巻	27.5	422.5	弘化4年	1847	06_/08		梶尾山法鼓臺蔵本	130020011400	聚成-1007
20諸図	1224	瑜祇三昧耶形図	憲海	紙本白描淡彩	綴	1帖(13紙)	27.3	19.6	嘉永3年	1850	10_/08			130020011300	聚成-1006
20諸図	1225	瑜祇三昧耶形図	憲海	紙本白描	帖	1帖(18紙)	24.5	17.7	江戸時代後期	19世紀				130020011501	
20諸図	1226	瑜祇三昧耶形図袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	30.2	18.5	江戸時代後期	19世紀				130020011502	
20諸図	1227	印契図	作者不詳	紙本白描	帖	1帖(3紙)	12.0	34.0	江戸時代後期	19世紀				130020990100	聚成-4120
21書図	1228	鼠燈台・茶臼・祓縛咒影封袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	25.8	17.7	江戸時代後期	19世紀		5印		130021050200	
21書図	1229	茶臼・鼠燈台・六字名号・御影像封袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	26.2	16.5	江戸時代後期	19世紀		6印		130021050100	
21書図	1230	仏隆寺茶白図(一)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.1	55.8	江戸時代後期	19世紀		5印		130021033701	聚成-4164
21書図	1231	仏隆寺茶白図(二)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	40.2	54.3	江戸時代後期	19世紀			仏隆寺什物	130021033702	
21書図	1232	仏隆寺茶白図(三)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.7	69.3	江戸時代後期	19世紀			仏隆寺什物	130021033703	
21書図	1233	仏隆寺茶白図(四)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.7	43.0	江戸時代後期	19世紀			仏隆寺什物	130021033704	
21書図	1234	仏隆寺茶白図(五)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	27.8	39.4	江戸時代後期	19世紀				130021033705	
21書図	1235	仏隆寺茶白図(六)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.6	28.1	江戸時代後期	19世紀				130021033706	
21書図	1236	鼠燈台図(一)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	34.6	24.8	江戸時代後期	19世紀		5印		130021034101	
21書図	1237	鼠燈台図(二)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	34.6	24.9	江戸時代後期	19世紀				130021034102	
21書図	1238	鼠燈台図(三)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	41.1	27.9	江戸時代後期	19世紀				130021034103	
21書図	1239	鼠燈台図(四)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	34.1	23.7	江戸時代後期	19世紀				130021034104	
21書図	1240	鼠燈台図(五)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	20.6	23.4	江戸時代後期	19世紀				130021034105	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

21書図	1241	六字名号籠字書	憲海	紙本白描	まくり	1枚	423.0	140.0	安政5年	1858	06 /25		百萬遍知恩寺什寶	130021001900	
21書図	1242	六字名号書	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	55.3	18.0	江戸時代後期	19世紀				130021001200	
21書図	1243	六字名号書	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	27.8	11.2	江戸時代後期	19世紀				130021002900	
21書図	1244	六字名号書	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	39.4	19.3	江戸時代後期	19世紀				130021003500	
21書図	1245	興正菩薩真筆裏書	憲海	紙本墨書	まくり	1枚	27.7	38.7	江戸時代後期	19世紀		3印	叡尊真筆	130020730501	
21書図	1246	興正菩薩真筆裏書双鉤	憲海	紙本墨書	まくり	1枚	23.0	41.1	江戸時代後期	19世紀		3印		130020730502	
21書図	1247	興正菩薩真筆双鉤	憲海	紙本墨書	まくり	1枚	23.0	41.1	江戸時代後期	19世紀		3印		130020730503	
21書図	1248	興正菩薩真筆裏書双鉤	憲海	紙本墨書	まくり	1枚	82.3	23.3	江戸時代後期	19世紀		3印	叡尊真筆	130020730504	
21書図	1249	弘法大師五輪塔婆拓影	憲海	紙本墨拓	まくり	1枚	154.7	28.2	文政5年	1822	08 /14	3印	高貴寺蔵本(空海真筆)	130021002101	
21書図	1250	弘法大師五輪塔婆拓影	憲海	紙本墨拓	まくり	1枚	135.7	19.6	江戸時代後期	19世紀				130021002001	
21書図	1251	弘法大師五輪塔婆拓影封紙	憲海	紙本墨書	封紙	1枚	31.1	47.4	文政5年	1822	08 /14			130021002102	
21書図	1252	弘法大師五輪塔婆拓影封紙	憲海	紙本墨書	封紙	1枚	28.0	40.4	江戸時代後期	19世紀		3印	空海真筆	130021002002	
21書図	1253	弘法大師五輪塔婆騰写(表一)	憲海	紙本墨書	まくり	1枚	43.0	22.5	江戸時代後期	19世紀		7印		130021002201	
21書図	1254	弘法大師五輪塔婆騰写(表二)	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	43.1	22.5	江戸時代後期	19世紀				130021002202	
21書図	1255	弘法大師五輪塔婆騰写(裏一)	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	43.2	22.9	江戸時代後期	19世紀				130021002203	
21書図	1256	弘法大師五輪塔婆騰写(裏二)	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	42.9	22.3	江戸時代後期	19世紀				130021002204	
21書図	1257	弘法大師五輪塔婆墨書断片	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	29.2	4.8	文政5年	1822	08 /14		高貴寺蔵本(空海真筆)	130021052800	
21書図	1258	高貴寺弘法大師五輪塔婆略縁起	憲海	紙本墨書	まくり	1枚	40.8	55.7	文政5年	1822	08 /14			130021001300	
21書図	1259	神泉苑御修法之壇所図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	54.4	88.4	江戸時代後期	19世紀		6印		130021036300	聚成-4172
21書図	1260	神泉苑御修法之假屋図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	40.6	54.0	江戸時代後期	19世紀		6印		130021036400	
21書図	1261	請雨経法道場荘嚴并壇図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	87.6	江戸時代後期	19世紀				130020020800	聚成-4171
21書図	1262	請雨水鉢図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	51.5	51.5	江戸時代後期	19世紀				130020020700	聚成-4129
21書図	1263	輪蓋龍王供養法次第	念海	紙本墨書	まくり	1枚	27.6	40.6	安政6年	1859	03 /25			130020990601	
21書図	1264	輪蓋龍王供養法次第封紙	念海	紙本墨書	封紙	1枚	27.4	40.5	安政6年	1859	03 /25			130020990602	
21書図	1265	仁和寺握屋雛形図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	46.4	33.7	文政10年	1827	06 /09		仁和寺什物	130021034700	
21書図	1266	仁和寺幄屋部材図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	24.4	67.2	文政10年	1827	06 /00	7印	仁和寺御所之写	130021035101	
21書図	1267	仁和寺幄屋部材図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	33.7	24.4	文政10年	1827	06 /00	7印	仁和寺御所之写	130021035102	
21書図	1268	仁和寺幄屋部材図草稿	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.2	33.3	江戸時代後期	19世紀				130021036001	
21書図	1269	仁和寺幄屋部材図草稿	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.3	33.6	江戸時代後期	19世紀				130021036002	
21書図	1270	器具図(全図)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.0	23.9	江戸時代後期	19世紀				130021035201	
21書図	1271	器具図(部分)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.1	24.0	江戸時代後期	19世紀				130021035202	
21書図	1272	器具図(部分)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.0	33.0	江戸時代後期	19世紀				130021035203	
21書図	1273	器具図(部分)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.2	33.9	江戸時代後期	19世紀				130021035204	
21書図	1274	器具図(部分)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.0	34.0	江戸時代後期	19世紀				130021035205	
21書図	1275	火炎形懸台図(一)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	66.5	47.5	万延元年	1860	10 /06			130021033401	
21書図	1276	火炎形懸台図(二)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	44.8	15.8	万延元年	1860	10 /06			130021033402	
21書図	1277	火炎形懸台図(三)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	23.9	33.8	万延元年	1860	10 /06			130021033403	
21書図	1278	蓮華形鏡台座図(一)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	29.7	86.3	江戸時代後期	19世紀				130021031401	
21書図	1279	蓮華形鏡台座図(二)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.5	18.0	江戸時代後期	19世紀			仁和寺真乘院什物	130021031402	
21書図	1280	醍醐報恩院経台懸架図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.5	34.5	江戸時代後期	19世紀			醍醐報恩院什物	130021033601	
21書図	1281	醍醐報恩院懸架図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	25.1	50.5	江戸時代後期	19世紀				130021033602	
21書図	1282	醍醐報恩院懸架図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	25.2	34.5	江戸時代後期	19世紀				130021033603	
21書図	1283	醍醐報恩寺懸架図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	83.6	25.1	江戸時代後期	19世紀				130021033604	
21書図	1284	箱図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	23.9	34.1	江戸時代後期	19世紀				130021034800	
21書図	1285	箱図(部品)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.8	24.0	江戸時代後期	19世紀				130021035900	
21書図	1286	不明器物図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.7	24.1	江戸時代後期	19世紀				130021035500	
21書図	1287	不明部品図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.9	24.0	江戸時代後期	19世紀				130021035800	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

21書図	1288	不彫部材図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.3	33.8	江戸時代後期	19世紀					130021036500	
21書図	1289	押切図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	26.2	31.0	江戸時代後期	19世紀					130021032800	
21書図	1290	書物箆筒図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.5	24.8	江戸時代後期	19世紀					130021035000	
21書図	1291	唐紙懸下装置図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	32.9	24.0	江戸時代後期	19世紀					130021035700	
21書図	1292	脚立図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	32.3	25.0	江戸時代後期	19世紀					130021035600	
21書図	1293	華原馨図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	76.0	27.4	江戸時代後期	19世紀				興福寺什物	130021034300	
21書図	1294	金銅華鬘図	大忍	紙本白描淡彩	まくり	1枚	38.5	47.7	明治14年	1881	05 /17		櫻井氏所持本		130020986400	
21書図	1295	古代器物図巻	作者不詳	紙本白描	まくり	1巻	27.9	160.3	江戸時代後期	19世紀					130021034400	
21書図	1296	護身法灌頂図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.8	39.3	江戸時代後期	19世紀					130021032500	
21書図	1297	護摩壇図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.2	33.8	江戸時代後期	19世紀					130021034900	
21書図	1298	三井寺梵鐘図	宗立	紙本鉛筆	まくり	1枚	26.4	16.6	明治21年	1888	07 /21		三井寺什物		130021034500	
21書図	1299	三摩耶戒場高座図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.6	34.2	江戸時代後期	19世紀					130021030300	
21書図	1300	生駒聖天御団図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.2	7.6	江戸時代後期	19世紀				宝山寺什物	130021051900	
21書図	1301	息災護摩爐図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	61.1	51.2	江戸時代後期	19世紀					130021030700	
21書図	1302	梅尾山土砂壺図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	32.8	24.5	江戸時代後期	19世紀				高山寺什物	130021038100	
21書図	1303	髪切山慈光寺役行者笈図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	25.2	19.4	江戸時代後期	19世紀				慈光寺什物	130021038000	
21書図	1304	法金剛院台座蓮弁拓本	宗立	紙本墨拓	まくり	1枚	38.9	27.5	慶応2年	1866	12 /07		法金剛院弥陀如來來蓮座		130020987300	
21書図	1305	法隆寺文房具図	憲海・現光	紙本白描淡彩	まくり	1枚	27.7	188.3	嘉永元年	1848	08 /28		上田耕冲模本		130021033100	
21書図	1306	豊山方丈文台図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.0	34.3	江戸時代後期	19世紀					130021030400	
21書図	1307	龍口釣鐘形鉄瓶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.8	24.5	江戸時代後期	19世紀					130021032700	
21書図	1308	六角堂能満院護摩供物筥図	皆了	紙本白描	まくり	1枚	41.3	56.0	安政6年	1859	05 /00				130021030600	
21書図	1309	酒濱馨図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀				興福寺什物	130021034200	
21書図	1310	馨架部分図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	25.2	66.6	江戸時代後期	19世紀					130021033500	
21書図	1311	御座所図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.7	58.7	安政6年	1859	04 /10		比叡山西塔正教坊藏本		130021036600	
21書図	1312	壺坂山二十五菩薩屏風法量控図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.1	34.4	安政6年	1859	07 /01				130021035300	
21書図	1313	東大寺鴨毛屏風図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	40.5	27.3	江戸時代後期	19世紀				奈良東大寺ノ什宝写	130021035400	
21書図	1314	壁代箱・朽木形図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	17.5	9.2	江戸時代後期	19世紀					130021036100	
21書図	1315	芥子袋図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	22.2	28.2	文政10年	1827	06 /00	7印			130021032900	
21書図	1316	格狭間図案巾着袋図	現光	紙本白描	まくり	1枚	38.4	27.5	江戸時代後期	19世紀					130021030100	
21書図	1317	丸行燈図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.3	24.5	江戸時代後期	19世紀					130021033000	
21書図	1318	擬宝珠形器具図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.8	33.9	江戸時代後期	19世紀					130021034000	
21書図	1319	吉村周山作根付図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.4	34.5	江戸時代後期	19世紀					130021033800	
21書図	1320	五輪塔婆図鏝拓本	作者不詳	紙本墨拓	帖	1帖(2紙)	12.7	16.8	江戸時代後期	19世紀					130021032200	
21書図	1321	征伐軍旅用徳川幕府金銀分銅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	76.2	42.8	寛政5年	1793	08 /00				130021033200	
21書図	1322	茶牌図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	30.2	32.4	江戸時代後期	19世紀					130021031800	
21書図	1323	八角罌盤拓本	作者不詳	紙本墨拓	まくり	1枚	29.3	25.3	江戸時代後期	19世紀					130021000900	
21書図	1324	琵琶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.9	33.4	江戸時代後期	19世紀					130021038900	
21書図	1325	高井田長榮寺慈雲和上禪那台図	作者不詳	紙本白描	帖	1帖(3紙)	13.3	31.5	江戸時代後期	19世紀					130021030200	聚成-4173
21書図	1326	大鳥山寮舎図面	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.4	34.5	江戸時代後期	19世紀				神鳳寺堂舎	130021036200	
21書図	1327	醍醐報恩院道場大壇図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.5	101.4	江戸時代後期	19世紀					130021030500	
21書図	1328	東京錦御茵図	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	34.3	94.7	嘉永4年	1851	04 /22	6印	仁和寺御殿什物		130020984100	聚成-4161
21書図	1329	東京錦御茵図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	24.6	34.5	江戸時代後期	19世紀					130020983700	
21書図	1330	東京錦御茵図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	24.8	34.5	江戸時代後期	19世紀					130020983800	
21書図	1331	東京錦御茵図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	32.3	27.9	江戸時代後期	19世紀					130020983900	
21書図	1332	東京錦御茵図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	56.2	江戸時代後期	19世紀					130020984000	
21書図	1333	染色意匠図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	16.4	39.8	江戸時代後期	19世紀					130021032300	
21書図	1334	染色意匠図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.8	16.8	江戸時代後期	19世紀					130021032400	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

21書図	1335	染色図案(鳳凰蝶宝相華)	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	137.1	38.7	江戸時代後期	19世紀					130020986200	
21書図	1336	灌頂受者座図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	72.6	78.8	文政10年	1827	08/30	6印	長谷寺方丈藏本		130021030900	聚成-4130
21書図	1337	灌頂受者座図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	69.5	60.8	嘉永2年	1849	09/02				130021031100	聚成-4131
21書図	1338	灌頂受者座図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	80.0	69.2	嘉永2年	1849	09/04		醍醐寺報恩院藏本		130021031200	
21書図	1339	灌頂受者座図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	80.5	68.8	安政5年	1858	10/13				130021031300	
21書図	1340	灌頂受者座図	作者不詳	紙本着彩	まくり	1枚	94.5	100.6	江戸時代後期	19世紀					130020012400	
21書図	1341	灌頂受者座図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	73.2	78.5	江戸時代後期	19世紀					130021031000	
21書図	1342	灌頂受者座図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	49.5	51.2	江戸時代後期	19世紀					130021031500	
21書図	1343	灌頂受者座図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	49.5	49.5	江戸時代後期	19世紀					130021031600	
21書図	1344	灌頂受者座図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	43.0	38.8	江戸時代後期	19世紀					130021037500	
21書図	1345	三輪流神道灌頂敷曼茶羅図(初重)	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	58.2	58.2	嘉永5年	1852	04/21				130021010801	聚成-4038
21書図	1346	三輪流神道灌頂敷曼茶羅図(二重)	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	58.9	58.7	嘉永5年	1852	04/21				130021010802	聚成-4037
21書図	1347	三輪流神道灌頂敷曼茶羅図(三重)	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	58.0	58.5	嘉永5年	1852	04/21				130021010803	聚成-4036
21書図	1348	釋尊五十年之説五時八教諸宗所依経略図	憲海	紙本墨書	まくり	1枚	52.7	39.0	安政6年	1859	02/25		(版写本-竜安寺真珠院禪師所持本)		130021001700	
22絵紋	1349	高麗縁図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	23.7	33.0	江戸時代後期	19世紀					130020980400	
22絵紋	1350	高麗縁図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	13.0	20.7	江戸時代後期	19世紀					130020980700	
22絵紋	1351	高麗縁図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	15.5	51.3	江戸時代後期	19世紀					130020980800	
22絵紋	1352	高麗縁図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	14.8	38.2	江戸時代後期	19世紀					130020980900	
22絵紋	1353	唐花菱文図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	21.4	89.8	江戸時代後期	19世紀					130020987000	
22絵紋	1354	縹欄縁図	作者不詳	紙本着彩	まくり	1枚	28.7	41.2	江戸時代後期	19世紀					130020981300	
22絵紋	1355	菱文図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	36.9	53.5	江戸時代後期	19世紀					130020986900	
22絵紋	1356	菱格子文図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	72.0	82.0	江戸時代後期	19世紀					130020986800	
22絵紋	1357	櫻に立涌文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.7	44.6	江戸時代後期	19世紀					130020983500	
22絵紋	1358	飛天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.6	38.0	江戸時代後期	19世紀					130020982800	
22絵紋	1359	飛天像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	17.0	13.0	江戸時代後期	19世紀					130021041100	
22絵紋	1360	西本願寺建築裝飾図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	53.7	28.1	江戸時代後期	19世紀					130020986600	聚成-4139
22絵紋	1361	龍図	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	94.4	40.2	文政12年	1829	09/15		雲山和尚所持華陽先生所図中尾新平藏		130020931700	
22絵紋	1362	龍図	憲里	紙本墨画	まくり	1枚	39.0	83.5	弘化4年	1847	06/23		長谷川等叔図(紀州南隆院御霊屋天井雛形)		130020931000	聚成-4143
22絵紋	1363	龍図	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	24.0	59.0	文久元年	1861	11/21		東寺食堂天井之龍		130020931600	
22絵紋	1364	龍図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	28.2	39.3	江戸時代後期	19世紀		7印			130020930600	
22絵紋	1365	龍図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	38.8	176.7	江戸時代後期	19世紀		5印			130020930900	聚成-4142
22絵紋	1366	龍図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	38.5	54.5	江戸時代後期	19世紀		5印			130020931100	
22絵紋	1367	龍図	憲里	紙本着彩	まくり	1枚	57.5	27.5	江戸時代後期	19世紀			長谷川氏本(推定)		130020931200	聚成-4141
22絵紋	1368	龍図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	28.0	38.0	江戸時代後期	19世紀		5印			130020931300	
22絵紋	1369	龍図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	28.0	38.0	江戸時代後期	19世紀		5印			130020931400	
22絵紋	1370	龍図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	28.0	38.5	江戸時代後期	19世紀		5印			130020931500	
22絵紋	1371	龍図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	49.8	27.8	江戸時代後期	19世紀					130020931800	
22絵紋	1372	龍図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	28.0	38.5	江戸時代後期	19世紀		5印			130020931900	
22絵紋	1373	龍図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.1	48.7	江戸時代後期	19世紀					130020983200	聚成-4138
22絵紋	1374	龍図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	28.0	38.9	江戸時代後期	19世紀		5印			130020985400	
22絵紋	1375	龍図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.5	55.6	江戸時代後期	19世紀					130020986300	聚成-4137
22絵紋	1376	禽獸図(涅槃図)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.7	35.6	江戸時代後期	19世紀					130020941100	

別表1 《田村宗立旧藏仏画粉本》写本目録

22絵紋	1377	禽獸図(涅槃図)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.3	27.0	江戸時代後期	19世紀					130020941200	
22絵紋	1378	建築装飾図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	28.4	65.7	江戸時代後期	19世紀					130020986500	聚成-4140
22絵紋	1379	象図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.5	39.3	文久3年	1863	04 /10				130020930200	
22絵紋	1380	象図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	28.0	40.8	江戸時代後期	19世紀			7印		130020930501	
22絵紋	1381	象図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	28.0	40.8	江戸時代後期	19世紀			7印		130020930502	
22絵紋	1382	象図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	28.0	40.8	江戸時代後期	19世紀			7印		130020930503	
22絵紋	1383	象図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	28.0	40.8	江戸時代後期	19世紀			7印		130020930504	
22絵紋	1384	象図(涅槃図)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.5	66.2	江戸時代後期	19世紀					130020930100	
22絵紋	1385	獅子牡丹図	作者不詳	紙本墨画淡彩	まくり	1枚	28.4	152.5	江戸時代後期	19世紀					130020930400	
22絵紋	1386	獅子図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	186.5	124.5	嘉永6年	1853	03 /00		高野山行林院蔵本		130020930800	聚成-4146
22絵紋	1387	獅子図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	28.0	40.8	江戸時代後期	19世紀			7印		130020930505	
22絵紋	1388	獅子図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	28.0	40.8	江戸時代後期	19世紀			7印		130020930506	
22絵紋	1389	獅子図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	28.0	40.8	江戸時代後期	19世紀			7印		130020930507	
22絵紋	1390	獅子図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	28.0	40.8	江戸時代後期	19世紀			7印		130020930508	
22絵紋	1391	獅子図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	28.0	40.8	江戸時代後期	19世紀			7印		130020930509	
22絵紋	1392	獅子図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	28.1	39.1	江戸時代後期	19世紀			5印		130020930700	
22絵紋	1393	獅子図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	27.8	45.5	江戸時代後期	19世紀				長谷川氏本(推定)	130020932100	聚成-4147
22絵紋	1394	獅子図封袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	27.8	22.2	江戸時代後期	19世紀			5印		130021050400	
22絵紋	1395	西本願寺奏太鼓図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	50.5	51.0	江戸時代後期	19世紀			5印		130020982300	聚成-4128
22絵紋	1396	伝法院流秘具箱画獅子図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1巻	28.0	229.0	文政10年	1827	06u/13				130020932000	聚成-4148
22絵紋	1397	唐獅子図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	27.7	40.8	江戸時代後期	19世紀					130020986700	
22絵紋	1398	猿図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.9	49.3	江戸時代後期	19世紀					130020940700	
22絵紋	1399	猿図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.0	27.3	江戸時代後期	19世紀	12 /10				130020941000	
22絵紋	1400	犀図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	79.8	江戸時代後期	19世紀					130020985700	聚成-4144
22絵紋	1401	三猿図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	30.5	28.0	江戸時代後期	19世紀					130020940800	
22絵紋	1402	馬図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	27.6	32.6	江戸時代後期	19世紀					130020940400	
22絵紋	1403	馬図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	16.0	19.0	江戸時代後期	19世紀					130020940500	
22絵紋	1404	白澤図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.8	27.3	江戸時代後期	19世紀					130020940600	聚成-4145
22絵紋	1405	狸々図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.9	34.6	江戸時代後期	19世紀					130020940100	
22絵紋	1406	菊唐草文様図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.3	56.6	嘉永4年	1851	07 /18				130020983100	
22絵紋	1407	菊唐草文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	36.6	99.5	江戸時代後期	19世紀					130020984200	
22絵紋	1408	菊唐草文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	36.6	50.2	江戸時代後期	19世紀					130020984300	
22絵紋	1409	菊唐草文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	36.6	50.1	江戸時代後期	19世紀					130020984400	
22絵紋	1410	蓮華唐草扇面図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	50.5	江戸時代後期	19世紀					130020984500	聚成-4159
22絵紋	1411	蓮華唐草文図雲気文図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	27.9	130.6	江戸時代後期	19世紀			5印		130020984900	聚成-4156
22絵紋	1412	蓮華唐草文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	26.5	158.0	江戸時代後期	19世紀					130020982400	
22絵紋	1413	蓮華文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	19.7	45.7	江戸時代後期	19世紀				高山寺仏眼仏母表装方	130020982600	
22絵紋	1414	旭日波濤図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	39.0	83.0	万延元年	1860	11 /00		「沙門宗立」印		130020920400	
22絵紋	1415	雲に輪宝文図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.4	38.9	江戸時代後期	19世紀					130020985500	
22絵紋	1416	雲図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	36.6	81.0	江戸時代後期	19世紀					130020920600	
22絵紋	1417	雲図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.1	39.8	江戸時代後期	19世紀					130020986100	
22絵紋	1418	波に亀図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	52.5	47.8	江戸時代後期	19世紀					130020987100	聚成-4150
22絵紋	1419	波に鶴図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.1	81.0	江戸時代後期	19世紀					130020987200	聚成-4151
22絵紋	1420	波図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	39.0	50.3	江戸時代後期	19世紀			5印		130020921000	
22絵紋	1421	波文図宝相華文図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	23.2	211.0	江戸時代後期	19世紀					130020985600	
22絵紋	1422	波濤図	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	38.8	140.2	江戸時代後期	19世紀			5印		130020920300	聚成-4152

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

22繪紋	1423	波瀾図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.5	115.5	江戸時代後期	19世紀					130020920500	
22繪紋	1424	花丸紋図	作者不詳	紙本白描淡彩	帖	1帖(41紙)	43.0	35.0	江戸時代後期	19世紀					130020984600	
22繪紋	1425	花卉図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1帖(2紙)	27.5	38.0	江戸時代後期	19世紀			法橋琢舟		130020950200	
22繪紋	1426	花卉図(瓶と鉢)	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	106.2	38.5	江戸時代後期	19世紀					130020950600	
22繪紋	1427	柿図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.6	34.2	江戸時代後期	19世紀					130020950300	
22繪紋	1428	松竹梅図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.1	86.0	江戸時代後期	19世紀					130020981500	
22繪紋	1429	赤白咲分蓮図	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	114.0	29.6	文久元年	1861	04 /00				130020950500	
22繪紋	1430	草花鳥文様図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	12.2	27.5	江戸時代後期	19世紀					130020981100	
22繪紋	1431	東大寺唐櫃図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	27.5	151.2	江戸時代後期	19世紀			高山寺蔵本(東大寺什物)		130020985200	聚成-4149
22繪紋	1432	藤桐柳図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	46.0	江戸時代後期	19世紀					130020981400	
22繪紋	1433	蓮図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	18.2	12.8	江戸時代後期	19世紀					130020951100	
22繪紋	1434	蓮池図	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	38.9	106.3	弘化4年	1847	06 /30		長谷川等鶴図?		130020950100	
22繪紋	1435	蓮池図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	18.0	12.9	江戸時代後期	19世紀					130020951200	
22繪紋	1436	蓮池文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.6	59.1	江戸時代後期	19世紀			高山寺十二天屏風裏		130020983600	聚成-4160
22繪紋	1437	散華葩図	憲海	紙本墨摺淡彩	帖	1帖(7紙)	14.0	20.3	江戸時代後期	19世紀		5印	萩原盤山筆墨摺淡彩散華帖込		130021038800	
23荘厳	1438	金剛界曼荼羅界線三結図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.1	29.5	江戸時代後期	19世紀					130020970300	
23荘厳	1439	金剛界曼荼羅界線文様図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	80.6	13.9	文政9年	1826	07 /15	5印	長谷川等鶴写本		130020970109	聚成-1016
23荘厳	1440	金剛界曼荼羅界線文様帯等図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	28.1	82.0	文政9年	1826	07 /15		長谷川等鶴写本		130020970105	聚成-1012
23荘厳	1441	金剛界曼荼羅外縁隅文様帯図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	40.5	38.2	文政9年	1826	07 /15	5印	長谷川等鶴写本		130020970108	聚成-1015
23荘厳	1442	金剛界曼荼羅外縁文様帯図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	27.9	69.3	文政9年	1826	07 /15	5印	長谷川等鶴写本		130020970107	聚成-1014
23荘厳	1443	金剛界曼荼羅月輪花瓶文様帯等図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	28.2	79.2	文政9年	1826	07 /15		長谷川等鶴写本		130020970101	聚成-1008
23荘厳	1444	金剛界曼荼羅賢劫十六尊地文様図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	106.3	28.0	文政9年	1826	07 /15	5印	長谷川等鶴写本		130020970104	聚成-1011
23荘厳	1445	金剛界曼荼羅四供養菩薩雲図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	28.0	40.6	文政9年	1826	07 /15	5印	長谷川等鶴写本		130020970106	聚成-1013
23荘厳	1446	金剛界曼荼羅四方蓮華文図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	17.3	36.2	文政9年	1826	07 /15		長谷川等鶴写本		130020970102	聚成-1009
23荘厳	1447	金剛界曼荼羅縮図界線図	憲海	紙本白描	綴	1帖(4紙)	40.6	27.8	文政9年	1826	07 /15	5印	長谷川等鶴写本		130020970103	聚成-1010
23荘厳	1448	金剛界曼荼羅内四供養菩薩三昧耶形及雲図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	32.5	30.5	江戸時代後期	19世紀					130020970200	
23荘厳	1449	金剛界曼荼羅内四供養菩薩三昧耶形及雲図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	32.7	江戸時代後期	19世紀					130020985300	
23荘厳	1450	金剛界曼荼羅蓮華草図等袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	30.2	20.1	文政9年	1826	07 /15		長谷川等鶴写本		130020970112	聚成-1017A
23荘厳	1451	胎藏界曼荼羅光背地文図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	14.0	24.3	文政9年	1826	07 /15	5印	長谷川等鶴写本		130020970110	聚成-1017
23荘厳	1452	胎藏界曼荼羅除蓋障院地藏院東西四隅縁図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.6	28.1	江戸時代後期	19世紀					130020972900	
23荘厳	1453	敷曼荼羅文様帯等図	作者不詳	紙本白描	綴	1帖(4紙)	27.8	38.6	江戸時代後期	19世紀		1印	森田氏蔵本		130020972800	
23荘厳	1454	曼荼羅雲気図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	30.0	36.8	江戸時代後期	19世紀					130021037300	
23荘厳	1455	曼荼羅花瓶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	16.7	11.1	江戸時代後期	19世紀					130021037400	
23荘厳	1456	曼荼羅四隅花瓶及界線図	皆了	紙本白描	まくり	1枚	33.0	24.3	万延元年	1860	11 /00				130020972201	
23荘厳	1457	曼荼羅四隅花瓶及界線図	皆了	紙本白描	まくり	1枚	33.0	22.0	万延元年	1860	11 /00				130020972202	
23荘厳	1458	曼荼羅四隅花瓶及界線図	皆了	紙本白描	まくり	1枚	33.0	24.4	万延元年	1860	11 /00				130020972203	
23荘厳	1459	天蓋・宝冠・龍・飛龍図巻	憲海	紙本白描	まくり	1巻	27.9	864.5	天保2年	1831	10 /02		長谷川等鶴写本		130020970600	聚成-4125
23荘厳	1460	天蓋莊嚴金剛界三昧耶形図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	52.0	27.6	江戸時代後期	19世紀					130020970401	
23荘厳	1461	天蓋莊嚴金剛界三昧耶形図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	52.0	27.6	江戸時代後期	19世紀					130020970402	
23荘厳	1462	天蓋莊嚴金剛界三昧耶形図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	52.0	27.6	江戸時代後期	19世紀					130020970403	
23荘厳	1463	天蓋莊嚴金剛界三昧耶形図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	52.0	27.6	江戸時代後期	19世紀					130020970404	
23荘厳	1464	天蓋莊嚴金剛界三昧耶形図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	51.7	38.5	江戸時代後期	19世紀		1印			130020970501	
23荘厳	1465	天蓋莊嚴金剛界三昧耶形図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	51.7	38.5	江戸時代後期	19世紀		1印			130020970502	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

23荘藏	1466	天蓋荘藏金剛界三昧耶形図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	51.7	38.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020970503	
23荘藏	1467	天蓋荘藏金剛界三昧耶形図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	51.7	38.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020970504	
23荘藏	1468	天蓋図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.5	111.8	江戸時代後期	19世紀		5印		130020970700	
23荘藏	1469	花瓶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.3	20.2	江戸時代後期	19世紀				130020971800	
23荘藏	1470	花瓶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	25.0	33.6	江戸時代後期	19世紀				130020971901	聚成-4121
23荘藏	1471	花瓶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.8	16.8	江戸時代後期	19世紀				130020971902	
23荘藏	1472	花瓶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.6	11.1	江戸時代後期	19世紀				130020971903	
23荘藏	1473	花瓶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.6	19.7	江戸時代後期	19世紀				130020971904	
23荘藏	1474	花瓶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	19.4	13.7	江戸時代後期	19世紀				130020972001	聚成-4122
23荘藏	1475	花瓶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	19.2	13.7	江戸時代後期	19世紀				130020972002	
23荘藏	1476	花瓶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	19.5	13.7	江戸時代後期	19世紀				130020972003	
23荘藏	1477	花瓶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	19.5	13.6	江戸時代後期	19世紀				130020972004	
23荘藏	1478	花瓶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.0	17.0	江戸時代後期	19世紀				130020972100	
23荘藏	1479	花瓶図封紙	作者不詳	紙本墨書	封紙	1枚	32.3	33.5	江戸時代後期	19世紀				130020971905	聚成-4121A
23荘藏	1480	花瓶図封紙	作者不詳	紙本墨書	封紙	1枚	30.2	47.4	江戸時代後期	19世紀				130020972005	聚成-4122A
23荘藏	1481	水瓶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.9	23.9	江戸時代後期	19世紀		1印	高山寺蔵本	130020972300	聚成-4127
23荘藏	1482	水瓶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.4	19.1	江戸時代後期	19世紀				130021038700	
23荘藏	1483	大随求菩薩水瓶図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.0	27.1	江戸時代後期	19世紀				130020281500	
23荘藏	1484	宝冠図	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	27.8	62.3	嘉永2年	1849	09 /02	1印		130020971200	聚成-4123
23荘藏	1485	宝冠図	憲里	紙本着彩	まくり	1枚	28.4	81.5	嘉永3年	1850	08 /27			130020971300	聚成-4124
23荘藏	1486	宝冠図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	67.6	江戸時代後期	19世紀				130020971400	
23荘藏	1487	牡丹図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	21.4	江戸時代後期	19世紀				130020980500	
23荘藏	1488	牡丹唐草文図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	33.6	48.7	文政9年	1826	07 /15		長谷川等鶴写本	130020970111	
23荘藏	1489	牡丹文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	12.6	84.4	江戸時代後期	19世紀				130020980600	
23荘藏	1490	牡丹文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	25.0	33.7	江戸時代後期	19世紀				130020981600	聚成-4153
23荘藏	1491	牡丹文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	25.1	34.0	江戸時代後期	19世紀				130020981700	
23荘藏	1492	牡丹文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	15.6	34.2	江戸時代後期	19世紀				130020982100	聚成-4154
23荘藏	1493	菊梅牡丹文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.4	49.4	江戸時代後期	19世紀				130020983000	
23荘藏	1494	菊立涌文様図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	27.7	39.4	元治元年	1864	07 /29			130020983300	
23荘藏	1495	草花文様図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	56.1	67.0	江戸時代後期	19世紀		5印		130020982500	聚成-4155
23荘藏	1496	草花文様図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	14.0	120.2	江戸時代後期	19世紀		5印		130020983400	
23荘藏	1497	如来衲衣図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	54.7	27.8	江戸時代後期	19世紀				130020980200	聚成-4133
23荘藏	1498	宝相華唐草文様図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	38.6	26.1	安政6年	1859	12 /00			130020981200	聚成-4158
23荘藏	1499	宝相華唐草文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	52.7	39.5	江戸時代後期	19世紀				130020982000	
23荘藏	1500	宝相華唐草文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.6	27.0	江戸時代後期	19世紀				130020982900	
23荘藏	1501	宝相華唐草文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.1	48.1	江戸時代後期	19世紀			弘法大師御筆、智積院什物	130020984700	
23荘藏	1502	宝相華唐草文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	13.6	96.3	江戸時代後期	19世紀				130020984800	
23荘藏	1503	宝相華唐草文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.0	48.8	江戸時代後期	19世紀				130020985100	
23荘藏	1504	宝相華文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	25.1	34.3	江戸時代後期	19世紀				130020981800	
23荘藏	1505	宝相華文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.7	34.4	江戸時代後期	19世紀				130020981900	
23荘藏	1506	宝相華文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	11.1	68.7	江戸時代後期	19世紀				130020982200	
23荘藏	1507	宝相華文様図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	18.7	62.3	江戸時代後期	19世紀				130020982700	聚成-4157
23荘藏	1508	御簾幕図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	27.0	44.0	弘化4年	1847	08 /01			130020613000	
23荘藏	1509	四摂幡三昧耶形図	憲海	紙本白描	綴	1帖(7紙)	41.0	28.0	文政9年	1826	09 /19		智積院蔵本、醍醐寺三宝院蔵本・遍智院蔵本	130020971501	
23荘藏	1510	四摂幡三昧耶形図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	50.9	27.4	江戸時代後期	19世紀			豊山勸学院什物	130020971600	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

23荘藏	1511	四摂幡三昧耶形図袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	30.2	11.2	文政9年	1826	09_/19		智積院藏本、醍醐寺三寶院藏本・遍智院藏本	130020971502	
23荘藏	1512	幡図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	27.0	38.9	文政11年	1828	08_/00		仁和寺真光院殿什物	130020972500	聚成-4126
23荘藏	1513	幡図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	23.5	19.5	江戸時代後期	19世紀		不明印		130020972400	
23荘藏	1514	幡図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	45.6	16.1	江戸時代後期	19世紀				130020972600	
23荘藏	1515	幡図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.2	12.2	江戸時代後期	19世紀				130020972700	
23荘藏	1516	幡部分図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.2	24.2	江戸時代後期	19世紀				130021033900	
23荘藏	1517	幔幕図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	40.8	72.8	江戸時代後期	19世紀				130020980100	聚成-4135
23荘藏	1518	解脱上人五条袈裟図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	25.0	34.5	嘉永3年	1850	05_/01		宝静写本(僧護所持本)	130021037006	聚成-4170
23荘藏	1519	鑑真九条袈裟図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	25.3	34.8	嘉永3年	1850	05_/01		宝静写本(僧護所持本)	130021037004	聚成-4168
23荘藏	1520	鑑真請来九条袈裟図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	25.2	34.7	嘉永3年	1850	05_/01		宝静写本(僧護所持本)	130021037001	聚成-4166
23荘藏	1521	鑑真請来五条袈裟図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	25.4	34.4	嘉永3年	1850	05_/01		宝静写本(僧護所持本)	130021037002	聚成-4167
23荘藏	1522	袈裟図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.1	31.9	江戸時代後期	19世紀				130021037800	
23荘藏	1523	袈裟図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	23.9	31.9	江戸時代後期	19世紀				130021037900	
23荘藏	1524	袈裟図封紙	憲海	紙本墨書	包紙	1枚	23.8	25.8	嘉永3年	1850	05_/01		宝静写本(僧護所持本)	130021037600	
23荘藏	1525	行基僧祇支図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	25.6	34.7	嘉永3年	1850	05_/01		宝静写本(僧護所持本)	130021037005	聚成-4169
23荘藏	1526	袈図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.2	34.4	江戸時代後期	19世紀				130021036700	
23荘藏	1527	袈唐衣図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.2	32.3	江戸時代後期	19世紀				130021036900	
23荘藏	1528	聖武帝五条袈裟図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	25.4	34.7	嘉永3年	1850	05_/01		宝静写本(僧護所持本)	130021037003	聚成-4165
23荘藏	1529	唐衣図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.2	34.2	安政5年	1858	10_/04			130021036800	
23荘藏	1530	密教法式九條図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	48.6	96.8	江戸時代後期	19世紀				130021037700	
24賢聖	1531	歳徳八将神像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	94.0	38.8	江戸時代後期	19世紀			仁和寺藏本	130020613300	聚成-4115
24賢聖	1532	真武帝君像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.8	22.8	江戸時代後期	19世紀				130020651200	
24賢聖	1533	真武帝君像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	187.8	105.5	江戸時代後期	19世紀				130020660900	聚成-4118
24賢聖	1534	黄幡神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	32.5	21.0	江戸時代後期	19世紀				130020661500	
24賢聖	1535	八将神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	32.7	21.0	江戸時代後期	19世紀				130020633300	
24賢聖	1536	豹尾神像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	32.0	21.0	江戸時代後期	19世紀				130020661400	
24賢聖	1537	孔子像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	58.0	37.5	文政10年	1827	04_/30			130020660200	聚成-4179
24賢聖	1538	孔子十哲像	現光	紙本白描	まくり	1枚	127.0	72.5	弘化4年	1847	10_/02		長谷川氏本	130020660300	聚成-4180
24賢聖	1539	魏照像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	56.3	39.0	江戸時代後期	19世紀				130020661200	
24賢聖	1540	老子像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	71.5	59.5	江戸時代後期	19世紀			永真筆	130020660100	聚成-4175
24賢聖	1541	郭子儀像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	53.5	38.5	安政5年	1858	08_/12			130020890600	聚成-4176
24賢聖	1542	王仁像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.3	28.0	江戸時代後期	19世紀				130020661300	聚成-4181
24賢聖	1543	高士騎馬図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	27.9	38.8	江戸時代後期	19世紀		5印		130020661100	
24賢聖	1544	高士遊棋図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	40.5	28.3	江戸時代後期	19世紀				130020890300	
24賢聖	1545	竹林高士図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	39.8	168.0	文久3年	1863	01_/29	「沙門宗立」印	龍安寺南源院藏本	130020890200	
24賢聖	1546	伏羲聖賢像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	79.5	39.0	江戸時代後期	19世紀		6印		130020660400	聚成-4177
24賢聖	1547	神農像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	68.0	46.0	江戸時代後期	19世紀				130020660600	
24賢聖	1548	神農像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	53.0	40.7	江戸時代後期	19世紀		7印		130020660700	聚成-4178
24賢聖	1549	神農像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	68.3	54.2	江戸時代後期	19世紀				130020660800	
24賢聖	1550	鐘馗悪魔降伏図	宗立	紙本墨画	まくり	1枚	53.0	78.1	文久3年	1863	04_/09			130020651100	
24賢聖	1551	呂洞賓図	重次郎	紙本墨画淡彩	まくり	1枚	10.0	56.0	江戸時代後期	19世紀		有不明印		130020660500	
24賢聖	1552	蓬萊神仙図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	80.3	38.3	江戸時代後期	19世紀				130020612500	聚成-4105
24賢聖	1553	藤原鎌足像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	115.3	42.3	天保2年	1831	04_/13	6印	鹿路村薬師寺什宝	130020880500	聚成-4184
24賢聖	1554	維摩詰像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	36.2	36.9	江戸時代後期	19世紀				130020860600	聚成-4174
24賢聖	1555	舍利弗・目連像	憲里	紙本白描淡彩	帖	1帖(3紙)	44.9	27.2	明治19年	1886	09_/11		法金剛院藏本	130020860200	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

24賢聖	1556	十六羅漢図	山本探淵	紙本白描淡彩	まくり	1巻	31.0	343.5	文化元年	1804	10 /00			130020860100	聚成-3288
24賢聖	1557	十六羅漢図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	130.5	56.3	文久2年	1862	08 /00			130020861200	
24賢聖	1558	十六羅漢図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	129.3	59.3	文久3年	1863	03 /23			130020860300	
24賢聖	1559	十六羅漢図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	130.3	59.7	江戸時代後期	19世紀				130020860400	
24賢聖	1560	十六羅漢図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	93.5	52.0	江戸時代後期	19世紀				130020860700	聚成-3287
24賢聖	1561	十六羅漢図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	106.0	43.6	江戸時代後期	19世紀				130020861400	
24賢聖	1562	閻迦多像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	94.3	56.0	江戸時代後期	19世紀				130020861000	
24賢聖	1563	羅漢図	現光	紙本墨画	まくり	1枚	102.2	57.4	江戸時代後期	19世紀			長谷川等舟写本	130020861100	聚成-3286
24賢聖	1564	羅漢図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	46.7	江戸時代後期	19世紀				130020861300	
25真言八祖	1565	真言八祖図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.0	211.0	安永3年	1774	02 /08		上州光榮寺什物	130020740500	
25真言八祖	1566	両界曼荼羅及真言八祖図(右)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	89.2	52.7	弘化5年	1848	02 /19			130020743101	聚成-3095
25真言八祖	1567	両界曼荼羅及真言八祖図(左)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	89.1	50.4	弘化5年	1848	02 /19			130020743102	聚成-3096
25真言八祖	1568	真言八祖像	憲海	紙本白描	綴	1帖(12紙)	41.0	28.5	嘉永4年	1851	09 /15	1印	平等寺什宝	130020740200	聚成-3094
25真言八祖	1569	両界曼荼羅及真言八祖図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	89.1	50.4	嘉永5年	1852	07 /18	1印		130020743000	
25真言八祖	1570	真言八祖図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	105.5	61.0	嘉永7年	1854	07 /30			130020740701	
25真言八祖	1571	真言八祖図	憲海	紙本白描	綴	1帖(10紙)	39.5	28.0	江戸時代後期	19世紀			東寺ほか	130020740100	
25真言八祖	1572	真言八祖図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	90.5	38.5	江戸時代後期	19世紀				130020740301	
25真言八祖	1573	真言八祖図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	90.5	38.5	江戸時代後期	19世紀				130020740302	
25真言八祖	1574	真言八祖図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	109.0	50.0	江戸時代後期	19世紀				130020740401	
25真言八祖	1575	真言八祖図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	109.0	50.0	江戸時代後期	19世紀			御筆本縮写	130020740402	
25真言八祖	1576	真言八祖図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	105.5	60.5	江戸時代後期	19世紀				130020740702	
25真言八祖	1577	善無畏像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.3	27.1	嘉永5年	1852	07 /09	1印	御筆本縮写	130020742500	
25真言八祖	1578	龍猛像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.3	27.3	嘉永5年	1852		1印	御筆本縮写	130020742600	
25真言八祖	1579	金剛智像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	37.9	27.3	嘉永5年	1852		1印	御筆本縮写	130020742700	
25真言八祖	1580	龍智像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.3	27.2	嘉永5年	1852	07 /17	1印	御筆本縮写	130020742800	
25真言八祖	1581	不空像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	37.9	27.2	嘉永5年	1852	07 /07	1印	御筆本縮写	130020742900	
25真言八祖	1582	惠果像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	嘉永5年	1852		1印	御筆本縮写	130020742400	
25真言八祖	1583	弘法大師空海像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.0	27.3	嘉永5年	1852	07 /18	1印		130020744201	
25真言八祖	1584	御請来形八大高祖像袋	作者不詳	紙本墨書	袋	1枚			江戸時代後期	19世紀				130020744202	
25真言八祖	1585	龍猛像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	37.7	27.2	嘉永5年	1852	07 /05		御筆本縮写	130020741600	
25真言八祖	1586	一行像	皆了	紙本白描淡彩	まくり	1枚	75.7	81.3	嘉永6年	1853	12 /00		信貴山千手院本(原本教興寺浄厳夢想), 龍肝所持本	130020743205	聚成-3104
25真言八祖	1587	金剛智像	皆了	紙本白描淡彩	まくり	1枚	75.5	81.1	嘉永6年	1853	12 /00		信貴山千手院本(原本教興寺浄厳夢想), 龍肝所持本	130020743203	聚成-3101
25真言八祖	1588	善無畏像	皆了	紙本白描淡彩	まくり	1枚	75.4	81.1	嘉永6年	1853	12 /00		信貴山千手院本(原本教興寺浄厳夢想), 龍肝所持本	130020743204	聚成-3103
25真言八祖	1589	八大高祖侍者附像袋	皆了	紙本墨書	袋	1枚	31.0	21.0	嘉永6年	1853	12 /00			130020743208	聚成-3105A
25真言八祖	1590	不空像	皆了	紙本白描淡彩	まくり	1枚	75.1	81.2	嘉永6年	1853	12 /00		信貴山千手院本(原本教興寺浄厳夢想), 龍肝所持本	130020743206	聚成-3102
25真言八祖	1591	龍智像	皆了	紙本白描淡彩	まくり	1枚	75.2	81.1	嘉永6年	1853	12 /00		信貴山千手院本(原本教興寺浄厳夢想), 龍肝所持本	130020743202	聚成-3100
25真言八祖	1592	龍猛像	皆了	紙本白描淡彩	まくり	1枚	75.2	81.1	嘉永6年	1853	12 /00		信貴山千手院本(原本教興寺浄厳夢想), 龍肝所持本	130020743201	聚成-3099
25真言八祖	1593	惠果像	皆了	紙本白描淡彩	まくり	1枚	75.3	81.0	嘉永6年	1853	12 /00		信貴山千手院本(原本教興寺浄厳夢想), 龍肝所持本	130020743207	聚成-3105
25真言八祖	1594	一行像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.0	38.5	嘉永7年	1854	04 /11		御筆本縮写	130020740900	聚成-3111
25真言八祖	1595	金剛智像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.5	49.0	嘉永7年	1854	04 /00		御筆本縮写	130020741300	聚成-3108
25真言八祖	1596	弘法大師空海像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	59.8	39.0	嘉永7年	1854	04 /12			130020741100	聚成-3113

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

25真言八祖	1597	善無畏像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	59.0	39.0	嘉永7年	1854	04 /11		御筆本縮写	130020741000	聚成-3110
25真言八祖	1598	不空像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.2	39.0	嘉永7年	1854			御筆本縮写	130020741200	聚成-3109
25真言八祖	1599	龍智像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.5	39.0	嘉永7年	1854	04 /10		御筆本縮写	130020741400	聚成-3107
25真言八祖	1600	龍猛像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.5	39.0	嘉永7年	1854	04 /09		御筆本縮写	130020741500	聚成-3106
25真言八祖	1601	惠果像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.4	43.0	嘉永7年	1854	04 /12		御筆本縮写	130020740800	聚成-3112
25真言八祖	1602	龍智像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.4	27.3	江戸時代後期	19世紀			御筆本縮写	130020741900	
25真言八祖	1603	龍智像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.5	27.3	江戸時代後期	19世紀			御筆本縮写	130020742000	
25真言八祖	1604	龍智像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.3	27.4	江戸時代後期	19世紀			御筆本縮写	130020742100	
25真言八祖	1605	龍猛像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	45.3	37.7	江戸時代後期	19世紀				130020741700	
25真言八祖	1606	龍猛像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	112.6	62.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020741800	
25真言八祖	1607	一行像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.2	江戸時代後期	19世紀		1印	御筆本縮写	130020742300	
25真言八祖	1608	真言天台高僧像	憲海	紙本白描	まくり	1帖(9紙)	39.6	28.2	江戸時代後期	19世紀		5印・1印		130020742200	聚成-3098
25真言八祖	1609	中台八葉型真言祖師座位図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.0	24.2	江戸時代後期	19世紀				130020743400	聚成-3097
25真言八祖	1610	水瓶図(善無畏)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.1	27.2	江戸時代後期	19世紀				130020744100	
25真言八祖	1611	水瓶図(不空)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.2	27.3	江戸時代後期	19世紀				130020743600	
25真言八祖	1612	水瓶図(竜智)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.1	27.2	江戸時代後期	19世紀				130020743500	
25真言八祖	1613	水瓶図(竜猛)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.2	27.3	江戸時代後期	19世紀				130020743300	
25真言八祖	1614	真言八祖像袋	作者不詳	紙本墨書	袋	1枚	30.2	17.3	江戸時代後期	19世紀				130020744300	聚成-3113A
26大師	1615	弘法大師空海像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	114.5	67.5	天保3年	1832	08 /24	1印	高野山真藏院什宝	130020751701	聚成-3115
26大師	1616	弘法大師空海像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	168.4	142.0	嘉永2年	1849	03 /28	1印	東寺蔵(後宇多法皇筆)	130020750100	聚成-3114
26大師	1617	弘法大師空海像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	97.5	38.6	嘉永2年	1849	08 /27	1印	智積院月輪院蔵本	130020751600	
26大師	1618	弘法大師空海像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	81.7	39.0	嘉永2年	1849	10 /13	1印	東寺御宇多法王宸翰	130020752700	
26大師	1619	弘法大師空海像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.0	27.6	嘉永2年	1849	12 /04	1印		130020750600	
26大師	1620	弘法大師空海像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	62.0	27.8	嘉永3年	1850		1印		130020752400	
26大師	1621	弘法大師空海像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	56.6	41.8	嘉永3年	1850	01 /07	1印		130020752500	
26大師	1622	弘法大師空海像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.4	27.6	嘉永3年	1850	06 /24	1印		130020752200	
26大師	1623	弘法大師空海像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	59.7	38.0	嘉永5年	1852	10 /21	1印		130020752300	
26大師	1624	弘法大師空海像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	112.5	79.0	安政4年	1857	11 /04			130020750500	
26大師	1625	弘法大師空海像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	112.6	77.4	安政5年	1858	09 /28			130020750200	
26大師	1626	弘法大師空海像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.6	27.5	万延2年	1861	01 /07			130020751100	
26大師	1627	弘法大師空海像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	37.3	25.6	明治17年	1884	11 /09		越後万善寺蔵本	130020752100	
26大師	1628	弘法大師空海像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	129.0	117.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020750300	
26大師	1629	弘法大師空海像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	71.5	51.2	江戸時代後期	19世紀				130020750700	
26大師	1630	弘法大師空海像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	113.0	65.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020750800	
26大師	1631	弘法大師空海像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.5	27.5	江戸時代後期	19世紀				130020750900	
26大師	1632	弘法大師空海像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	134.0	81.0	江戸時代後期	19世紀				130020751200	
26大師	1633	弘法大師空海像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	93.5	46.0	江戸時代後期	19世紀				130020751300	
26大師	1634	弘法大師空海像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020751400	
26大師	1635	弘法大師空海像	現光	紙本白描	まくり	1枚	38.0	27.5	江戸時代後期	19世紀			長谷川より注文、依長谷川等鶴図(面貌部)	130020751500	
26大師	1636	弘法大師空海像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.6	27.5	江戸時代後期	19世紀				130020751801	
26大師	1637	弘法大師空海像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	38.6	27.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020751802	聚成-3116
26大師	1638	弘法大師空海像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	38.2	27.6	江戸時代後期	19世紀				130020751900	
26大師	1639	弘法大師空海像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	65.5	30.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020752000	
26大師	1640	弘法大師空海像	十如	紙本白描	まくり	1枚	52.7	39.0	江戸時代後期	19世紀		1印	高野山光勝院蔵本(真如真筆)	130020752600	聚成-3118
26大師	1641	弘法大師空海像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.5	25.3	江戸時代後期	19世紀				130020753200	

26大師	1642	弘法大師空海像	現光	紙本白描	まくり	1枚	31.3	27.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020753300	
26大師	1643	弘法大師空海像(室生摩尼曼荼羅形式)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	116.0	41.8	江戸時代後期	19世紀				130020755400	聚成-3117
26大師	1644	弘法大師空海像(日輪大師)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	70.7	39.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130020753000	
26大師	1645	秘鍵大師像	憲暢	紙本白描	まくり	1枚	149.0	101.0	天保3年	1832	08/24	1印	光勝院蔵本	130020750400	聚成-3119
26大師	1646	稚児大師像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	36.5	28.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020752800	聚成-3120
26大師	1647	稚児大師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	93.5	42.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020752900	聚成-3121
26大師	1648	弘法大師空海像(互ノ御影)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.6	18.9	江戸時代後期	19世紀				130020754400	
26大師	1649	弘法大師空海像(互ノ御影)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.2	33.7	江戸時代後期	19世紀				130020754500	
26大師	1650	弘法大師空海像(互ノ御影)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.5	19.1	江戸時代後期	19世紀				130020754600	
26大師	1651	弘法大師空海像(互ノ御影)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.7	18.4	江戸時代後期	19世紀				130020754700	
26大師	1652	空海寛鏡寛全像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	50.8	38.5	嘉永2年	1849	08/29	1印		130020793600	
26大師	1653	弘法大師空海手部	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	35.5	36.5	江戸時代後期	19世紀			親如法親王筆	130020751000	
26大師	1654	弘法大師空海手部	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.8	35.2	江戸時代後期	19世紀				130020751702	
26大師	1655	弘法大師空海頭部	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.5	17.7	江戸時代後期	19世紀				130020753100	
26大師	1656	弘法大師行状絵	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	39.2	101.8	江戸時代後期	19世紀				130020755800	
26大師	1657	弘法大師行状曼荼羅図包紙	作者不詳	紙本墨書	封紙	1枚	37.6	51.0	江戸時代後期	19世紀				130020755502	
26大師	1658	弘法大師像讃	憲海	紙本墨書	まくり	1枚	27.7	76.0	江戸時代後期	19世紀				130020754800	
26大師	1659	弘法大師像讃	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	37.5	42.8	江戸時代後期	19世紀				130020754900	
26大師	1660	弘法大師像讃	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	24.0	34.2	江戸時代後期	19世紀				130020755000	
26大師	1661	弘法大師像讃	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	34.5	50.8	江戸時代後期	19世紀				130020755100	
26大師	1662	弘法大師像讃	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	34.9	37.0	江戸時代後期	19世紀				130020755200	
26大師	1663	弘法大師像讃	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	34.2	50.4	江戸時代後期	19世紀				130020755300	
27古徳	1664	円明像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.4	60.0	嘉永5年	1852	02u/15			130020760103	聚成-3126
27古徳	1665	真濟像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.4	60.9	嘉永5年	1852	02u/15			130020760102	聚成-3123
27古徳	1666	真如像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.3	61.0	嘉永5年	1852	02u/15			130020760108	聚成-3127
27古徳	1667	泰範像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.3	60.9	嘉永5年	1852	02u/15			130020760109	聚成-3129
27古徳	1668	智泉像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.1	61.0	嘉永5年	1852	02u/15			130020760105	聚成-3130
27古徳	1669	忠延像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.1	61.0	嘉永5年	1852	02u/15			130020760110	聚成-3131
27古徳	1670	道興大師実恵像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.8	60.8	嘉永5年	1852	02u/15			130020760101	聚成-3122
27古徳	1671	道雄像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.1	61.1	嘉永5年	1852	02u/15			130020760107	聚成-3125
27古徳	1672	法光大師真雅像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.4	60.8	嘉永5年	1852	02u/15			130020760106	聚成-3124
27古徳	1673	吳隣像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.2	61.8	嘉永5年	1852	02u/15			130020760104	聚成-3128
27古徳	1674	弘法大師十大弟子像袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	27.0	19.2	嘉永5年	1852	02u/15			130020760111	聚成-3131A
27古徳	1675	円明像	現光	紙本白描	まくり	1枚	48.1	38.1	弘化4年	1847	12/22		室生山什物	130020760203	
27古徳	1676	真濟像	現光	紙本白描	まくり	1枚	47.9	38.3	弘化4年	1847	12/22		室生山什物	130020760202	
27古徳	1677	真如像	現光	紙本白描	まくり	1枚	47.8	38.1	弘化4年	1847	12/22		室生山什物	130020760208	
27古徳	1678	泰範像	現光	紙本白描	まくり	1枚	48.0	38.0	弘化4年	1847	12/22		室生山什物	130020760209	
27古徳	1679	智泉像	現光	紙本白描	まくり	1枚	47.9	38.1	弘化4年	1847	12/22		室生山什物	130020760205	
27古徳	1680	忠延像	現光	紙本白描	まくり	1枚	47.9	38.1	弘化4年	1847	12/22		室生山什物	130020760210	
27古徳	1681	道興大師実恵像	現光	紙本白描	まくり	1枚	48.2	38.2	弘化4年	1847	12/22		室生山什物	130020760201	
27古徳	1682	道雄像	現光	紙本白描	まくり	1枚	47.9	38.2	弘化4年	1847	12/22		室生山什物	130020760207	
27古徳	1683	法光大師真雅像	現光	紙本白描	まくり	1枚	48.4	38.0	弘化4年	1847	12/22		室生山什物	130020760206	
27古徳	1684	吳隣像	現光	紙本白描	まくり	1枚	48.0	38.2	弘化4年	1847	12/22		室生山什物	130020760204	
27古徳	1685	智泉像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	28.3	28.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130020764900	
27古徳	1686	道興大師実恵像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	82.9	38.7	江戸時代後期	19世紀		1印・5印	東寺観智院常什	130020764800	

27古徳	1687	道雄像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	56.0	43.7	江戸時代後期	19世紀		1印	長谷川氏本, 原本撰州生玉地藏院什物	130020764700	聚成-3145
27古徳	1688	法光大師真雅像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	84.2	39.0	江戸時代後期	19世紀		1印・5印	東寺観智院常什	130020763600	
27古徳	1689	観賢像	現光	紙本白描	まくり	1枚	49.0	38.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130020763100	聚成-3139
27古徳	1690	義範像	現光	紙本白描	まくり	1枚	49.0	38.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020763400	聚成-3142
27古徳	1691	慧慧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.1	39.0	江戸時代後期	19世紀		1印	仏隆寺什宝(堅慧真筆)	130020721000	
27古徳	1692	元泉像	現光	紙本白描	まくり	1枚	49.2	38.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130020762700	聚成-3141
27古徳	1693	源仁像	現光	紙本白描	まくり	1枚	49.5	38.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020762500	聚成-3135
27古徳	1694	源仁像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	55.2	51.4	江戸時代後期	19世紀				130020764600	聚成-3147
27古徳	1695	済信像	現光	紙本白描	まくり	1枚	49.1	38.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130020762900	聚成-3138
27古徳	1696	宗叡像	現光	紙本白描	まくり	1枚	49.3	38.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020762600	聚成-3134
27古徳	1697	淳祐像	現光	紙本白描	まくり	1枚	49.2	38.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130020763000	聚成-3140
27古徳	1698	真紹像	現光	紙本白描	まくり	1枚	49.1	38.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130020762400	聚成-3132
27古徳	1699	真然像	現光	紙本白描	まくり	1枚	49.3	38.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130020762200	聚成-3133
27古徳	1700	房玄像	現光	紙本白描	まくり	1枚	49.1	38.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130020763200	聚成-3143
27古徳	1701	益信・聖宝・源仁紙形	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	53.5	39.4	江戸時代後期	19世紀		1印		130020764100	
27古徳	1702	憲深像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	53.0	39.4	文政12年	1829	02/26	1印・6印	長谷寺勸学院蔵本	130020772000	聚成-3159
27古徳	1703	憲深像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	46.1	39.0	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020771900	聚成-3158
27古徳	1704	憲深像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	77.0	44.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020790300	
27古徳	1705	元泉像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	63.7	51.0	江戸時代後期	19世紀				130020771500	聚成-3151
27古徳	1706	実雅像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	62.7	38.3	嘉永3年	1850	10/23	1印	醍醐報恩院蔵本	130020772200	聚成-3161
27古徳	1707	淳覚像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.7	48.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020772300	聚成-3162
27古徳	1708	淳祐像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	74.9	61.3	嘉永6年	1853	10/21			130020771400	聚成-3150
27古徳	1709	勝覚像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	60.1	39.4	江戸時代後期	19世紀		1印		130020771700	聚成-3154
27古徳	1710	勝賢像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	59.0	54.2	江戸時代後期	19世紀				130020771800	聚成-3155
27古徳	1711	真言某高僧像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	68.0	42.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020772400	
27古徳	1712	仁海像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.5	45.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020771600	聚成-3152
27古徳	1713	成賢像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	45.5	39.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020794200	聚成-3156
27古徳	1714	聖憲像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	58.8	50.7	文政10年	1827	11/28	1印		130020800600	聚成-3160
27古徳	1715	醍醐祖師像袋	作者不詳	紙本墨書	袋	1枚	31.8	21.0	江戸時代後期	19世紀			六角堂能満院製	130020772500	
27古徳	1716	道教像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	48.7	45.2	江戸時代後期	19世紀				130020772100	聚成-3157
27古徳	1717	明算像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	63.5	38.3	天保4年	1833	09/02	1印		130020791700	
27古徳	1718	明算像	現光	紙本白描	まくり	1枚	54.7	38.0	嘉永元年	1848	04/27	1印		130020791800	聚成-3153
27古徳	1719	理源大師聖宝像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	59.2	39.2	文政12年	1829	09/17	1印	竹田明照院蔵本	130020771100	聚成-3149
27古徳	1720	理源大師聖宝像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	45.3	27.4	嘉永7年	1854	02/00			130020770300	
27古徳	1721	理源大師聖宝像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	149.8	105.4	安政2年	1855	09/17		室生山什物	130020770100	
27古徳	1722	理源大師聖宝像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	60.8	42.7	明治38年	1905	01/09		智積院蔵本	130020771200	
27古徳	1723	理源大師聖宝像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.5	29.4	江戸時代後期	19世紀				130020770200	
27古徳	1724	理源大師聖宝像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.4	27.4	江戸時代後期	19世紀				130020770400	
27古徳	1725	理源大師聖宝像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	39.4	28.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130020770500	聚成-3148
27古徳	1726	理源大師聖宝像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.8	25.2	江戸時代後期	19世紀				130020770600	
27古徳	1727	理源大師聖宝像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.6	38.8	江戸時代後期	19世紀				130020770700	
27古徳	1728	理源大師聖宝像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.0	27.7	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020770800	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

27古徳	1729	理源大師聖宝像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.9	27.8	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020770900	
27古徳	1730	理源大師聖宝像	現光	紙本白描	まくり	1枚	57.9	38.1	江戸時代後期	19世紀				130020771000	
27古徳	1731	密教付法先師像	憲海	紙本白描	綴	1帖(11紙)	39.4	28.0	文政9年	1826	07 /07	5印		130020793900	
27古徳	1732	宇多法皇像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	78.5	47.9	文政10年	1827	07 /21	1印	横尾山平等心院蔵本	130020764500	聚成-3170
27古徳	1733	宇多法皇像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	48.9	38.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020763500	
27古徳	1734	宇多法皇像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	77.3	45.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020764400	聚成-3169
27古徳	1735	栄明像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	54.0	39.1	江戸時代後期	19世紀				130020800300	聚成-3186
27古徳	1736	永厳像	憲里	紙本着彩	まくり	1枚	76.3	60.4	嘉永4年	1851	06 /16	1印	真乘院殿宝庫	130020790600	聚成-3172
27古徳	1737	快尊像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.4	57.4	文政4年	1821	11 /17	1印・3印・7印	長谷寺小池坊講堂蔵本	130020800500	聚成-3185
27古徳	1738	寛空像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	113.9	96.6	安政5年	1858	07 /20			130020791100	聚成-3171
27古徳	1739	寛空像	現光	紙本白描	まくり	1枚	49.2	38.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020762300	聚成-3137
27古徳	1740	寛遍像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	81.3	39.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130020790400	聚成-3173
27古徳	1741	興教大師覚鏝像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	58.2	38.0	文化14年	1817	10 /21	1印		130020781100	
27古徳	1742	興教大師覚鏝像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	94.6	41.6	嘉永3年	1850	06 /17	1印	小池坊蔵本(覺鏝真筆)	130020780400	聚成-3174
27古徳	1743	興教大師覚鏝像	現光	紙本白描	まくり	1枚	58.2	38.0	嘉永5年	1852	03 /15	1印	覚鏝自筆本	130020781000	
27古徳	1744	興教大師覚鏝像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	67.2	59.8	嘉永6年	1853	11 /13		覺鏝筆	130020780200	
27古徳	1745	興教大師覚鏝像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	57.1	49.5	嘉永6年	1853	11 /14			130020780500	
27古徳	1746	興教大師覚鏝像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	27.7	18.5	安政2年	1855	06 /00			130020781500	
27古徳	1747	興教大師覚鏝像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	54.1	38.6	文久2年	1862	03 /04		豊山弥勒院什物	130020781200	
27古徳	1748	興教大師覚鏝像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	81.1	37.8	江戸時代後期	19世紀			武蔵小田円能院蔵本	130020780100	
27古徳	1749	興教大師覚鏝像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	77.5	58.7	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020780300	聚成-3175
27古徳	1750	興教大師覚鏝像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.0	38.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020780600	
27古徳	1751	興教大師覚鏝像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	74.4	60.7	江戸時代後期	19世紀				130020780700	
27古徳	1752	興教大師覚鏝像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	50.8	45.4	江戸時代後期	19世紀				130020780800	
27古徳	1753	興教大師覚鏝像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	62.8	38.6	江戸時代後期	19世紀				130020780900	
27古徳	1754	興教大師覚鏝像	作者不詳	紙本鉛筆	まくり	1枚	280.2	42.1	明治時代	19世紀				130020781300	
27古徳	1755	興教大師覚鏝像	作者不詳	紙本鉛筆	まくり	1枚	74.6	45.2	明治時代	19世紀				130020781400	
27古徳	1756	興教大師覚鏝像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	114.5	77.6	江戸時代後期	19世紀				130020781600	
27古徳	1757	興教大師覚鏝像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	56.1	38.7	江戸時代後期	19世紀		1印・6印		130020782500	
27古徳	1758	後宇多法皇像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	69.1	39.4	文政10年	1827	07 /21	1印	平等心院蔵本	130020790100	聚成-4187
27古徳	1759	任助像	現光	紙本白描	まくり	1枚	49.1	37.9	江戸時代後期	19世紀		1印		130020763300	聚成-3144
27古徳	1760	某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	54.3	39.2	文政12年	1829	02 /26	1印・6印	長谷寺勸学院蔵本	130020800200	聚成-3182
27古徳	1761	本覚大師益信像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	83.0	39.2	嘉永4年	1851	09 /01	1印		130020764200	
27古徳	1762	本覚大師益信像	現光	紙本白描	まくり	1枚	49.1	38.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020762800	聚成-3136
27古徳	1763	本覚大師益信像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	78.0	59.7	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020763800	
27古徳	1764	本覚大師益信像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	65.2	43.6	江戸時代後期	19世紀		1印		130020763900	
27古徳	1765	本覚大師益信像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	115.0	85.8	江戸時代後期	19世紀		5印		130020764000	聚成-3168
27古徳	1766	本覚大師益信像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	77.8	42.8	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020764300	
27古徳	1767	頼瑜像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	59.5	38.4	安政5年	1858	10 /05			130020800800	
27古徳	1768	頼瑜像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	58.8	38.7	安政5年	1858	10 /05			130020800900	聚成-3180

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

27古徳	1769	頼瑜像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	64.4	37.6	明治38年	1905	01 /09			130020801100	
27古徳	1770	頼瑜像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	53.0	39.2	江戸時代後期	19世紀		1印・6印	智積院勸学院什物	130020800700	
27古徳	1771	頼瑜像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	54.8	47.2	江戸時代後期	19世紀		5印		130020801000	
27古徳	1772	良誉像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	53.5	39.3	文政12年	1829	02 /26	1印・6印	長谷寺勸学院蔵本	130020800400	聚成-3181
27古徳	1773	浄覚像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	46.4	38.9	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020791200	聚成-3167
27古徳	1774	文覚像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	54.1	34.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020791300	聚成-3165
27古徳	1775	文覚像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	86.6	44.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020791400	聚成-3166
27古徳	1776	真興像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.3	28.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020792000	
27古徳	1777	真興像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	55.0	44.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020792100	聚成-3020
27古徳	1778	真興像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.7	39.9	江戸時代後期	19世紀		1印		130020792200	聚成-3021
27古徳	1779	真興像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	48.3	51.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020792300	
27古徳	1780	慶円像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	75.0	47.4	嘉永4年	1851	09 /12	1印		130020792700	聚成-3030
27古徳	1781	徳道像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	53.0	38.1	嘉永6年	1853	03 /22	2印	京都花山院本	130020800100	聚成-3017
28茶羅	1782	五部心観	憲海	紙本白描	帖	1帖(76紙)	40.4	27.7	嘉永6年	1853	10 /09		円融无相本(自敬彦所持本)	130020011900	聚成-1001
28茶羅	1783	東寺宝庫曼荼羅図	憲海	紙本白描	帖	1帖(52紙)	31.5	50.5	嘉永7年	1854	02 /20		御室真乘院殿蔵本(水精紙搦本)	130020012000	
28茶羅	1784	金剛界敷曼荼羅尊位図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	137.0	139.0	嘉永5年	1852	02u/01			130020010102	
28茶羅	1785	金剛界曼荼羅尊位図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	86.2	78.2	嘉永7年	1854	04 /03			130020010500	
28茶羅	1786	金剛界曼荼羅三昧耶形図	坂田幸治郎	紙本白描	帖	1帖(20紙)	40.0	27.9	安政2年	1855	03 /23		勢州津西来院前住清浄院所持本	130020010600	聚成-1005
28茶羅	1787	金剛界八十一尊曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	140.8	119.5	万延元年	1860	12 /24			130020010700	聚成-1002
28茶羅	1788	胎藏界敷曼荼羅尊位図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	139.4	137.9	江戸時代後期	19世紀				130020010101	
28茶羅	1789	両界曼荼羅尊位図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	68.4	38.5	江戸時代後期	19世紀				130020010200	
28茶羅	1790	理趣経曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	105.2	90.8	文政13年	1830	11 /15		高雄曼荼羅理趣会	130020010901	聚成-1004
28茶羅	1791	理趣経曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	113.3	88.7	天保4年	1833	08 /03		福島県本寺恵日寺蔵本	130020011100	聚成-1044
28茶羅	1792	理趣経曼荼羅図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	102.2	92.5	江戸時代後期	19世紀		6印	高雄曼荼羅理趣会	130020010800	聚成-1003
28茶羅	1793	理趣経曼荼羅図袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	28.7	20.8	江戸時代後期	19世紀		6印		130020010902	聚成-1004A
28茶羅	1794	華嚴海会善知識曼荼羅図	憲海	紙本白描	裏打	1枚	116.0	84.5	安政5年	1858	02 /08		大坂高津報恩院本(元禄6:1693:伝俊賀筆)	130020024500	聚成-1027
28茶羅	1795	阿字観本尊図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	65.8	39.1	文政10年	1827	06 /29	6印	梅尾山十無盡院経庫本	130020032300	
28茶羅	1796	阿字観本尊図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	66.0	53.3	文政10年	1827	06u/02		明恵自筆本	130020032100	
28茶羅	1797	阿字観本尊図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.2	39.0	天保2年	1831	02 /15			130020034000	
28茶羅	1798	阿字観本尊図	憲海	紙本墨画	まくり	1枚	46.7	34.0	嘉永3年	1850	02 /14			130020032600	
28茶羅	1799	阿字観本尊図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	45.0	37.8	嘉永3年	1850	03 /03			130020031900	聚成-1082
28茶羅	1800	阿字観本尊図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.6	63.8	嘉永4年	1851	05 /19			130020032400	
28茶羅	1801	阿字観本尊図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	88.6	54.2	嘉永6年	1853	12 /02		江戸護国寺観音堂常什, 龍肝写本	130020032500	聚成-1081
28茶羅	1802	阿字観本尊図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.0	60.0	安政2年	1855	09 /26			130020032200	
28茶羅	1803	阿字観本尊図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	73.0	60.1	安政3年	1856	02 /08			130020032000	
28茶羅	1804	阿字観本尊図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	74.9	60.5	江戸時代後期	19世紀				130020032700	
28茶羅	1805	阿字観本尊図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.5	28.2	江戸時代後期	19世紀		5印		130020032800	
28茶羅	1806	宝大菩提心観想本尊図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	85.8	38.8	安政3年	1856	08 /17		清澄寺より来る	130020032900	聚成-1083
28茶羅	1807	宝大菩提心観想本尊図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	55.1	25.1	江戸時代後期	19世紀				130021000400	
28茶羅	1808	宝光如意輪種子本尊図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	89.2	27.8	江戸時代後期	19世紀				130020033000	聚成-1084
28茶羅	1809	宝光如意輪種子本尊図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	84.5	27.7	江戸時代後期	19世紀				130020033100	
29近世密宗	1810	快净像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.2	54.6	安政6年	1859	02 /15			130020794300	聚成-3199
29近世密宗	1811	快净像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	53.5	38.3	嘉永3年	1850	03 /13	1印	宝生院什物	130020802700	聚成-3190
29近世密宗	1812	照遍像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	66.0	38.6	明治37年	1904	04 /00			130020802300	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

29近世密宗	1813	信海像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	58.6	39.3	文政12年	1829	02_/26	1印・ 6印		130020802800	聚成-3184
29近世密宗	1814	了純像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	53.1	42.2	嘉永3年	1850	03_/00	1印		130020801700	
29近世密宗	1815	了純像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	42.5	37.7	嘉永3年	1850	03_/13	1印		130020801600	聚成-3191
29近世密宗	1816	智積院僧正像	現光	紙本白描淡彩	まくり	1枚	68.0	44.1	嘉永元年	1848	05_/04	1印	長谷川等叔図	130020801400	聚成-3189
29近世密宗	1817	智積院僧正像	現光	紙本白描	まくり	1枚	67.9	48.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020801500	聚成-3188
29近世密宗	1818	智積院大僧正像	現光	紙本白描	まくり	1枚	58.2	42.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020801200	聚成-3187
29近世密宗	1819	大聖寺某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	59.4	39.4	文政12年	1829	04_/00	1印		130020853200	聚成-3195
29近世密宗	1820	田刀像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	58.3	38.2	嘉永5年	1852	10_/13	1印		130020801800	聚成-3192
29近世密宗	1821	田刀像	憲里	紙本着彩	まくり	1枚	58.2	38.2	嘉永5年	1852	10_/17	1印		130020802200	
29近世密宗	1822	田刀像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	58.6	38.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020801900	
29近世密宗	1823	田刀像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.8	36.5	江戸時代後期	19世紀				130020802000	
29近世密宗	1824	田刀像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	53.3	38.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020802100	
29近世密宗	1825	知脱像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	53.7	40.5	江戸時代後期	19世紀		1印・ 3印		130020852900	
29近世密宗	1826	秀陽像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	52.7	39.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020802500	聚成-3193
29近世密宗	1827	諄聖像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	61.7	43.4	嘉永5年	1852	02_/25	1印		130020802400	聚成-3194
29近世密宗	1828	寛深像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.2	45.5	嘉永元年	1848	05_/02		智積院蔵本	130020790200	聚成-3177
29近世密宗	1829	頭證像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	62.5	39.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020792800	聚成-3179
29近世密宗	1830	御室某僧像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	88.0	69.5	嘉永4年	1851	04_/22	1印	仁和寺御殿什物	130020794000	
29近世密宗	1831	孝源像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	76.8	50.5	嘉永4年	1851	07_/02	1印		130020790800	聚成-3178
29近世密宗	1832	涪仁像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	114.2	76.0	嘉永4年	1851	07_/10	1印		130020791000	聚成-4188
29近世密宗	1833	蒼淳像	憲里	紙本着彩	まくり	1枚	109.0	36.5	江戸時代後期	19世紀			原在明筆	130020790500	聚成-3176
29近世密宗	1834	曇寂像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	94.0	39.3	文政10年	1827	06u/22	1印		130020790700	聚成-3183
29近世密宗	1835	満空像	現光	紙本白描	まくり	1枚	51.1	45.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020801300	聚成-3163
29近世密宗	1836	石山密蔵院大僧正像	現光	紙本白描	まくり	1枚	68.6	41.6	江戸時代後期	19世紀		1印		130020790900	聚成-3196
29近世密宗	1837	智足院某僧像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	51.2	41.9	文政12年	1829	03_/00	1印		130020791500	聚成-3197
29近世密宗	1838	寛全像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	64.8	38.8	天保14年	1843	08_/22	1印		130020793700	聚成-3198
29近世密宗	1839	某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.1	56.5	嘉永元年	1848	05_/03	1印	長谷川氏本	130020793400	聚成-3200
29近世密宗	1840	某僧像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	77.5	61.8	嘉永元年	1848	05_/15	1印	長谷川氏本	130020793000	
29近世密宗	1841	某僧像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	54.4	46.2	嘉永元年	1848	05_/15	1印	長谷川氏本	130020793100	
29近世密宗	1842	某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	49.8	40.9	江戸時代後期	19世紀		1印		130020791900	
29近世密宗	1843	某僧像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	112.0	70.3	江戸時代後期	19世紀				130020792400	
29近世密宗	1844	某僧像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	62.0	47.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020792500	
29近世密宗	1845	某僧像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.3	38.3	江戸時代後期	19世紀				130020793200	
29近世密宗	1846	某僧像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	66.6	47.1	江戸時代後期	19世紀				130020793300	
29近世密宗	1847	某僧像	作者不詳	紙本着彩	まくり	1枚	59.6	38.7	江戸時代後期	19世紀				130020793500	
29近世密宗	1848	某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	52.3	40.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020793800	
29近世密宗	1849	某僧像(持牡丹)	作者不詳	紙本着彩	まくり	1枚	68.0	38.3	文久2年	1862	03_/21			130020803100	
29近世密宗	1850	某僧像(持五鈷杵念珠)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.5	54.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130020794500	
29近世密宗	1851	某僧像(持三鈷)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	74.1	61.6	江戸時代後期	19世紀				130020792900	
29近世密宗	1852	某僧像(持扇念珠)	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	53.8	37.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020802600	
29近世密宗	1853	某僧像(持独鈷念珠)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	61.5	43.7	嘉永元年	1848	10_/10	1印		130020802900	
29近世密宗	1854	某僧像(法界定印上塔)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	89.4	50.6	江戸時代後期	19世紀				130020794400	
30諸宗高僧	1855	般若多羅三蔵像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.7	38.1	嘉永6年	1853	11_/15		円融无相本(自敬彦所持本)	130020722800	聚成-3010
30諸宗高僧	1856	羅雲像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	114.8	47.8	天保3年	1832	06_/27	1印		130020720500	聚成-3031
30諸宗高僧	1857	嘉祥大師吉蔵像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	63.9	46.3	嘉永3年	1850	02_/03	1印・ 6印	宇治惠心院本	130020720100	聚成-3012

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

30諸宗高僧	1858	慈恩大師窠基像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	58.3	27.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020720200	聚成-3014
30諸宗高僧	1859	高僧図	作者不詳	紙本白描	帖	1帖(8紙)	28.1	39.7	江戸時代後期	19世紀		1印	高山寺關伽井坊藏本	130020860500	聚成-3013
30諸宗高僧	1860	役行者像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	93.7	60.0	弘化4年	1847	08_/10		長谷川氏本(長谷川等叔写本?)(天保8:1837),原本泉州花林寺什物	130020710100	聚成-3048
30諸宗高僧	1861	役行者像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	51.5	27.2	江戸時代後期	19世紀				130020710200	
30諸宗高僧	1862	役行者像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	60.5	25.0	江戸時代後期	19世紀				130020710400	
30諸宗高僧	1863	役行者像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	94.7	46.8	江戸時代後期	19世紀		2印・5印		130020710500	聚成-3049
30諸宗高僧	1864	前鬼後鬼像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	66.5	24.1	江戸時代後期	19世紀				130020613200	
30諸宗高僧	1865	泰澄像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	68.2	59.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020710600	聚成-3050
30諸宗高僧	1866	報恩像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	46.5	34.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020720800	
30諸宗高僧	1867	報恩大師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	54.1	35.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020720900	聚成-3016
30諸宗高僧	1868	行基像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.3	28.2	江戸時代後期	19世紀		1印・6印		130020723600	聚成-3015
30諸宗高僧	1869	解脱上人貞慶像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	66.2	28.2	文政10年	1827	06u/21	1印	御室真乘院殿藏本	130020721100	聚成-3022
30諸宗高僧	1870	勤操像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	76.7	54.4	文久2年	1862	11_/22		勢州神宮寺本	130020720700	聚成-3019
30諸宗高僧	1871	十八師影	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.5	57.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020730600	聚成-3023
30諸宗高僧	1872	華嚴祖師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	101.3	45.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020720600	聚成-3026
30諸宗高僧	1873	香象大師法藏像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	114.5	57.0	天保3年	1832	06_/27	1印	東大寺戒壇院藏本	130020720300	聚成-3024
30諸宗高僧	1874	至相大師智儼像	憲海	紙本白描朱彩	まくり	1枚	95.5	56.1	天保3年	1832	06_/27	1印		130020721200	聚成-3025
30諸宗高僧	1875	良弁像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	54.6	39.0	文政5年	1822	01_/21	1印	竹林寺藏本	130020720400	聚成-3018
30諸宗高僧	1876	明恵坐禪図額板裏賛	憲海	紙本墨書	まくり	1枚	23.9	32.3	江戸時代後期	19世紀				130020723700	
30諸宗高僧	1877	明恵上人高辨像	憲里	紙本墨画	まくり	1枚	51.2	27.2	嘉永7年	1854	04_/17			130020721400	聚成-3027
30諸宗高僧	1878	明恵上人高辨像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	28.2	39.5	江戸時代後期	19世紀		1印	久米田寺藏本	130020723300	聚成-3028
30諸宗高僧	1879	明恵西行対面図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	28.3	42.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020721300	
30諸宗高僧	1880	明恵像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.9	55.4	天保2年	1831	10_/15		梅尾山藏本(宅間澄賀筆)	130020723500	
30諸宗高僧	1881	明恵像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	82.2	39.1	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020723400	
30諸宗高僧	1882	鳳潭像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	66.0	51.0	文久3年	1863	09_/03		智積院藏本	130020722400	聚成-3029
30諸宗高僧	1883	覺本舍利礼拝図	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	66.2	29.8	文久3年	1863	02_/29			130020723200	
30諸宗高僧	1884	日朝像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	76.5	58.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020850400	聚成-3282
30諸宗高僧	1885	日潮像	現光	紙本白描	まくり	1枚	57.4	34.5	嘉永2年	1849	02_/05	1印	長谷川氏本(元文3:1738)	130020850500	聚成-3283
30諸宗高僧	1886	日蓮像道元像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	66.6	28.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020850100	聚成-3280
30諸宗高僧	1887	妙法寺某僧像	現光	紙本白描	まくり	1枚	42.2	38.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020850600	聚成-3284
30諸宗高僧	1888	某僧像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.6	38.5	弘化5年	1848	02_/04	1印	長谷川等鶴図	130020850200	聚成-3281
30諸宗高僧	1889	某僧像	現光	紙本白描	まくり	1枚	26.6	27.8	嘉永元年	1848	05_/03	1印		130020853100	
30諸宗高僧	1890	某僧像	現光	紙本著彩	まくり	1枚	51.1	47.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020851500	聚成-3278
30諸宗高僧	1891	某僧像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.4	24.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020852700	
30諸宗高僧	1892	某僧像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	44.9	46.5	江戸時代後期	19世紀				130020852800	聚成-3279
30諸宗高僧	1893	某僧像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.1	20.8	江戸時代後期	19世紀				130020853600	
30諸宗高僧	1894	某僧像(合掌)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	49.1	34.1	江戸時代後期	19世紀		1印	長谷川氏本	130020850800	
30諸宗高僧	1895	某僧像(合掌)	現光	紙本白描	まくり	1枚	51.5	53.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020851000	
30諸宗高僧	1896	某僧像(合掌)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	101.5	50.8	江戸時代後期	19世紀				130020851200	
30諸宗高僧	1897	某僧像(持扇)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	67.2	48.5	江戸時代後期	19世紀				130020851100	
30諸宗高僧	1898	某僧像(持扇・念珠)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.1	40.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020851300	
30諸宗高僧	1899	某僧像(持念珠)	現光	紙本白描	まくり	1枚	47.3	50.4	江戸時代後期	19世紀		1印		130020852400	

別表1 《田村宗立旧藏仏画粉本》写本目録

30諸宗高僧	1900	某僧像(持念珠)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	53.5	38.0	江戸時代後期	19世紀					130020852500	
30諸宗高僧	1901	某僧像(持念珠)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	49.7	38.1	江戸時代後期	19世紀		1印			130020853000	
30諸宗高僧	1902	某僧像(持念珠)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	99.0	39.5	江戸時代後期	19世紀					130020853400	
30諸宗高僧	1903	某僧像(持念珠)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.3	24.8	江戸時代後期	19世紀		1印			130020853700	
30諸宗高僧	1904	某僧像(持念珠・扇)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	46.0	40.2	江戸時代後期	19世紀		1印			130020853300	
30諸宗高僧	1905	某僧像(持念珠・扇)	作者不詳	紙本白描著彩	まくり	1枚	59.5	49.2	江戸時代後期	19世紀					130020853500	
30諸宗高僧	1906	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	78.3	41.3	嘉永2年	1849	01/08	1印	長谷川等鶴図		130020851900	
30諸宗高僧	1907	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	64.0	34.5	嘉永2年	1849	02/05	1印	長谷川等鶴図		130020852200	
30諸宗高僧	1908	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	67.7	53.4	嘉永2年	1849	02/09	1印	長谷川氏本		130020851800	
30諸宗高僧	1909	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	48.6	34.3	嘉永2年	1849	02/12	1印	長谷川等鶴図		130020852100	
30諸宗高僧	1910	某僧像(持弘子)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.5	24.8	江戸時代後期	19世紀		1印			130020850300	
30諸宗高僧	1911	某僧像(持弘子)	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	180.7	86.6	江戸時代後期	19世紀			狩野探幽筆		130020850700	
30諸宗高僧	1912	某僧像(持弘子)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	50.5	37.8	江戸時代後期	19世紀		1印			130020852300	
30諸宗高僧	1913	某僧像(持蓮花)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	5.0	8.6	江戸時代後期	19世紀		1印			130020854200	
30諸宗高僧	1914	某僧像(定印)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	54.5	39.9	江戸時代後期	19世紀		1印			130020850900	
30諸宗高僧	1915	某僧像(定印)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.2	34.4	江戸時代後期	19世紀		1印			130020851400	
30諸宗高僧	1916	某僧像(定印)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	19.7	江戸時代後期	19世紀		1印			130020851600	
30諸宗高僧	1917	某僧像(定印)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.1	38.0	江戸時代後期	19世紀		1印	長谷川氏本		130020851700	
30諸宗高僧	1918	某僧像(定印)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	65.5	39.2	江戸時代後期	19世紀		1印・5印			130020852000	
30諸宗高僧	1919	某僧像(面貌)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.9	7.0	江戸時代後期	19世紀		1印			130020853800	
30諸宗高僧	1920	某僧像(面貌)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.0	24.3	江戸時代後期	19世紀					130020853900	
30諸宗高僧	1921	某僧像(面貌)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.0	35.9	江戸時代後期	19世紀					130020854000	
30諸宗高僧	1922	某僧像(面貌)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	32.5	23.4	江戸時代後期	19世紀					130020854100	
30諸宗高僧	1923	某僧像(拱手)	現光	紙本白描	まくり	1枚	49.0	44.0	江戸時代後期	19世紀		1印			130020852600	
30諸宗高僧	1924	諸宗僧伽御影袋	作者不詳	紙本墨書	袋	1枚	32.0	21.0	嘉永元年	1848	05/16		智積院惣持院蔵本		130020854300	
31律衣	1925	飲光像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.5	52.3	江戸時代後期	19世紀		1印			130020820400	
31律衣	1926	飲光像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	54.7	40.3	江戸時代後期	19世紀		1印・3印			130020820800	聚成-3043
31律衣	1927	飲光像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	81.5	57.5	江戸時代後期	19世紀		1印			130020835400	聚成-3044
31律衣	1928	饗慶像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.4	39.0	文政10年	1827	05/00	1印			130020820600	聚成-3045
31律衣	1929	饗慶像	宗立	紙本着彩	まくり	1枚	65.6	38.8	万延2年	1861	02/00				130020820700	
31律衣	1930	饗慶像	皆了	紙本白描	まくり	1枚	27.4	21.4	文久元年	1861	04/13				130020820500	
31律衣	1931	一雲像	現光	紙本白描	まくり	1枚	48.8	46.0	江戸時代後期	19世紀		1印			130020820900	聚成-3164
31律衣	1932	大願像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	104.8	55.7	元治元年	1864	11/21				130020900100	聚成-3046
31律衣	1933	大願像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	59.0	47.8	元治元年	1864	11/21				130020900200	
31律衣	1934	大願像袋	憲里	紙本墨書	袋	1枚	30.9	17.6	元治元年	1864	11/21				130020900300	
31律衣	1935	南山大師道宣像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	92.2	34.6	嘉永2年	1849	01/21	1印	長谷川等鶴図		130020722700	聚成-3033
31律衣	1936	南山大師道宣像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.5	53.0	嘉永6年	1853	12/02		智積院蔵本、龍肝所持本		130020722600	聚成-3032
31律衣	1937	鑑真像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	92.0	62.3	天保4年	1833	02/23	1印	下野安国寺蔵本(旧薬師寺不動院本)		130020723000	聚成-3036
31律衣	1938	鑑真像	現光	紙本墨画一部朱彩	まくり	1枚	112.4	62.8	嘉永5年	1852	03/14	1印			130020722300	
31律衣	1939	鑑真像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	131.0	67.0	嘉永6年	1853	04/13		円光院什物		130020722500	聚成-3035
31律衣	1940	鑑真像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	76.3	27.4	文久3年	1863	02/18		(版写本)		130020722000	
31律衣	1941	鑑真像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.6	33.7	明治3年	1870	05/28				130020722100	
31律衣	1942	鑑真像	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	51.7	27.3	江戸時代後期	19世紀					130020722200	
31律衣	1943	鑑真像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	66.0	29.7	江戸時代後期	19世紀					130020723100	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

31律衣	1944	了安像	現光	紙本白描	まくり	1枚	93.9	54.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020794100	聚成-3034
31律衣	1945	興正菩薩般若尊像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	160.3	65.0	文政4年	1821	09/20	1印・3印	和州三輪大御輪寺藏本(般若真筆)	130020730100	聚成-3039
31律衣	1946	興正菩薩般若尊像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	136.0	57.8	文政5年	1822	01/21	1印	竹林寺藏本(般若真筆)	130020730400	聚成-3040
31律衣	1947	興正菩薩般若尊像	現光	紙本白描	まくり	1枚	69.7	38.0	江戸時代後期	19世紀		1印	今里村妙法寺什物	130020730200	
31律衣	1948	大悲菩薩覺盛像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	110.5	59.4	江戸時代後期	19世紀				130020721500	聚成-3037
31律衣	1949	大悲菩薩覺盛像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	66.0	30.2	江戸時代後期	19世紀				130020721600	
31律衣	1950	円覚像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	139.0	83.0	安政6年	1859	04/08			130020721900	聚成-3038
31律衣	1951	円覚像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	75.7	38.7	文久元年	1861	11/22		御室法金剛院藏本	130020721800	
31律衣	1952	円覚像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	109.3	64.2	江戸時代後期	19世紀				130020820100	
31律衣	1953	月輪大師俊仍像	現光	紙本白描	まくり	1枚	93.4	54.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020791600	聚成-3041
31律衣	1954	浄嚴像	現光	紙本白描	まくり	1枚	75.0	51.4	嘉永元年	1848	04/28	1印		130020820200	聚成-3042
31律衣	1955	某僧像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	50.7	38.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020821601	
31律衣	1956	某僧像封袋	作者不詳	紙本白描	袋	1枚	50.7	38.2	江戸時代後期	19世紀				130020821602	
31律衣	1957	某僧像(泉涌寺天瑞か)	宗立	紙本白描	まくり	1枚	107.3	37.6	明治2年	1869	06/00			130020820300	
31律衣	1958	某僧像	現光	紙本白描	まくり	1枚	42.4	38.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020821000	
31律衣	1959	某僧像	北川林篁子	紙本白描	まくり	1枚	42.3	38.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020821200	
31律衣	1960	某僧像(合掌)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.5	24.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020821300	
31律衣	1961	某僧像(持如意)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.5	38.5	文久3年	1863	08/13		智積院藏本	130020821400	
31律衣	1962	某僧像(持扨子)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.9	39.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020821500	
32天台	1963	天台智者大師智顛像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	109.6	14.1	寛政4年	1792	08/01	1印		130020815400	
32天台	1964	天台智者大師智顛像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.2	27.4	文久3年	1863	08/14		智積院藏本	130020816000	
32天台	1965	天台智者大師智顛像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	98.4	67.5	文久3年	1863	09/03		智積院藏本	130020815500	
32天台	1966	天台智者大師智顛像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	85.8	33.2	文久3年	1863	09/16		智積院藏本	130020815300	
32天台	1967	天台智者大師智顛像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	107.0	54.6	江戸時代後期	19世紀		1印		130020810100	
32天台	1968	天台智者大師智顛像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	39.8	28.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020810200	
32天台	1969	天台智者大師智顛像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	80.6	61.6	江戸時代後期	19世紀		1印		130020815100	聚成-3051
32天台	1970	天台智者大師智顛像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.0	46.6	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020815200	聚成-3052
32天台	1971	章安大師灌頂像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.0	47.7	文久3年	1863	08/11	1印	智積院藏本	130020817300	聚成-3054
32天台	1972	荆溪大師湛然像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.2	47.0	文久3年	1863	09/03		智積院藏本	130020817200	聚成-3053
32天台	1973	四明像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.0	46.0	文久3年	1863	08/11	1印	智積院藏本	130020816900	聚成-3063
32天台	1974	智惠輪三蔵像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	57.7	38.0	嘉永6年	1853	11/15		円融无相本(自冷泉為恭本)	130020722900	聚成-3011
32天台	1975	法全像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.2	39.1	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020810300	聚成-3055
32天台	1976	天台祖師図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.0	132.3	文政9年	1826	06/16	1印・5印		130020812200	聚成-3069
32天台	1977	天台祖師像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	113.5	56.7	文久3年	1863	08/12		智積院藏本	130020815900	
32天台	1978	天台高僧図(右)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.3	254.4	江戸時代後期	19世紀		1印		130020813901	
32天台	1979	天台高僧図(左)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.6	279.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020813902	
32天台	1980	天台高僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.9	51.5	文久3年	1863	09/29	1印	智積院藏本	130020816100	
32天台	1981	天台高僧像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	67.5	41.2	江戸時代後期	19世紀				130020813200	
32天台	1982	伝教大師・恵亮大師像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.0	70.5	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020810500	
32天台	1983	伝教大師・慈源大師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.3	30.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020810400	
32天台	1984	伝教大師最澄像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.5	48.3	文久3年	1863	08/11	1印	智積院藏本	130020815600	聚成-3056
32天台	1985	慈覚大師円仁像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	124.5	54.0	文久2年	1862	09/25		比叡山金胎院(版下冷泉為恭)	130020813500	
32天台	1986	慈覚大師円仁像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	94.0	48.0	文久3年	1863	08/12		智積院藏本	130020815800	聚成-3057

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

32天台	1987	慈覚大師円仁像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	54.2	40.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020810700	
32天台	1988	慈覚大師玉体加持図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	229.0	83.9	嘉永4年	1851	04 /02		梅尾山蔵本	130020810800	聚成-3058
32天台	1989	慈覚大師渡海図	深如	紙本白描	まくり	1枚	70.0	42.5	文久2年	1862	11 /28			130020810600	聚成-3059
32天台	1990	智證大師円珍像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	87.8	46.6	文久3年	1863	09 /03		智積院蔵本	130020816200	聚成-3060
32天台	1991	円珍・八幡・訶梨帝母像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.3	40.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020812100	
32天台	1992	安然像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.0	51.8	文久3年	1863	08 /13		智積院蔵本	130020817100	聚成-3061
32天台	1993	安然像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	52.0	41.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020817000	
32天台	1994	慈恵大師良源像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.5	41.3	文政9年	1826	05 /05	1印・5印		130020811600	
32天台	1995	慈恵大師良源像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.8	44.0	文久3年	1863	08 /25		智積院蔵本	130020811500	
32天台	1996	慈恵大師良源像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	130.3	70.0	文久3年	1863	09 /01		智積院蔵本	130020811300	聚成-3065
32天台	1997	慈恵大師良源像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	162.0	85.5	文久3年	1863	09 /02		智積院蔵本	130020811100	
32天台	1998	慈恵大師良源像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	146.0	79.2	文久3年	1863	09 /03		智積院蔵本	130020811000	
32天台	1999	慈恵大師良源像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	82.2	51.6	江戸時代後期	19世紀		1印		130020810900	
32天台	2000	慈恵大師良源像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.6	28.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020811200	
32天台	2001	慈恵大師良源像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	130.6	62.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020811400	
32天台	2002	慈恵大師良源像(角大師)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.6	28.5	文久3年	1863	08 /13		智積院蔵本	130020814200	
32天台	2003	慈恵大師良源像(角大師)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.5	27.8	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020460100	聚成-3066
32天台	2004	恵心僧都源信像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	75.3	49.5	安政元年	1854	10 /10		京都知恩寺善導院(源信真筆)	130020814100	
32天台	2005	恵心僧都源信像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	95.0	38.5	文久2年	1862	11 /00			130020813700	
32天台	2006	恵心僧都源信像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.8	19.6	江戸時代後期	19世紀		2印		130020812501	聚成-3067
32天台	2007	恵心僧都源信像封紙	作者不詳	紙本墨書	封紙	1枚	24.7	34.7	江戸時代後期	19世紀				130020812502	
32天台	2008	慈眼大師天海像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	51.5	46.5	寛政6年	1794	03 /24	1印		130020812000	
32天台	2009	慈眼大師天海像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.5	61.5	文久3年	1863	08 /11	1印	智積院蔵本	130020811900	
32天台	2010	慈眼大師天海像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	122.0	72.5	文久3年	1863	08 /12	1印	智積院蔵本(原本寛永寺凌雲院, 良恭写本)	130020811800	聚成-3084
32天台	2011	慈眼大師天海像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	44.5	28.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020811700	聚成-3083
32天台	2012	遍昭像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.2	41.0	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020812900	聚成-3064
32天台	2013	空也像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	47.7	26.8	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020813600	聚成-3071
32天台	2014	一遍上人智真像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.0	16.5	弘化5年	1848	02 /10	1印	長谷川氏本	130020848800	聚成-3263
32天台	2015	相実像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.6	51.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020814500	聚成-3080
32天台	2016	聖応大師良忍像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	47.0	47.2	文政4年	1821	09 /27	1印		130020812801	聚成-3070
32天台	2017	叡空像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.5	51.3	嘉永元年	1848	06 /07	1印		130020814900	聚成-3078
32天台	2018	湛恵像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	68.5	45.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020721700	聚成-3047
32天台	2019	暹賀像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	71.7	39.4	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020812300	聚成-3068
32天台	2020	覺超像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.8	52.5	文久3年	1863	08 /12		智積院蔵本	130020816700	聚成-3062
32天台	2021	覺超像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.2	38.6	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020814700	聚成-3081
32天台	2022	安恵像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.1	51.5	文久3年	1863	09 /03		智積院蔵本	130020814800	聚成-3077
32天台	2023	公澄像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.0	41.5	文久3年	1863	08 /14		智積院蔵本	130020816800	聚成-3277
32天台	2024	慈海像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.4	38.9	文久3年	1863	08 /14		智積院蔵本	130020817700	聚成-3087
32天台	2025	周海像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.0	41.5	文久3年	1863	08 /13		智積院蔵本	130020817600	聚成-3086
32天台	2026	亮運像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.2	41.2	文久3年	1863	08 /14		智積院蔵本	130020817500	聚成-3085
32天台	2027	寂隠像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	67.9	48.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020815000	聚成-3079

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

32天台	2028	玄明像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	68.5	47.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020816500	聚成-3072
32天台	2029	妙立像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.9	51.6	文久3年	1863	08 /12		智積院蔵本	130020815700	聚成-3073
32天台	2030	靈空像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	65.8	41.0	文久3年	1863	09 /04		智積院蔵本	130020816400	聚成-3090
32天台	2031	榮雄像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	50.6	38.4	文久3年	1863	08 /13		智積院蔵本	130020813800	聚成-3088
32天台	2032	英昌像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	54.1	43.4	嘉永元年	1848	06 /07	1印		130020803000	聚成-3089
32天台	2033	君慶像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	68.3	46.2	嘉永3年	1850	02 /07	1印		130020813400	聚成-3082
32天台	2034	額足院某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	48.4	45.9	天保11年	1840	01 /20+	1印		130020812700	聚成-3075
32天台	2035	恵心院大僧正像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	45.7	34.5	天保11年	1840	02 /22	1印		130020812600	聚成-3074
32天台	2036	正観院大僧正像	憲海	紙本著彩	まくり	1枚	54.7	46.3	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020814400	聚成-3076
32天台	2037	大並山某僧像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	68.0	45.3	嘉永2年	1849	02 /09	1印	長谷川氏本	130020818000	聚成-3092
32天台	2038	葉宝山僧正像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	49.7	43.0	文政4年	1821	05 /00	1印		130020817900	聚成-3091
32天台	2039	高僧像	遠藤弁蔵	紙本白描	まくり	1枚	28.0	14.0	享和3年	1803	06 /20	1印		130020812400	
32天台	2040	高僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	40.0	34.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020813100	
32天台	2041	天台某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	66.0	42.6	文久3年	1863	09 /06		智積院蔵本	130020816600	
32天台	2042	某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.0	41.8	文久3年	1863	08 /11	1印	智積院蔵本	130020817400	
32天台	2043	某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	65.5	53.7	文久3年	1863	09 /03		智積院蔵本	130020816300	
32天台	2044	某僧像	現光	紙本白描	まくり	1枚	67.8	62.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020813000	
32天台	2045	某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚			江戸時代後期	19世紀		1印・6印		130020813300	
32天台	2046	某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	40.0	39.2	江戸時代後期	19世紀		6印		130020817800	
32天台	2047	某僧像(体のみ)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	34.2	47.4	江戸時代後期	19世紀		1印		130020818100	
32天台	2048	某僧像(定印)	作者不詳	紙本着彩	まくり	1枚	87.8	44.0	文政6年	1823	12 /15	1印		130020814600	
33禪家	2049	達磨像	現光	紙本白描	まくり	1枚	63.5	34.7	嘉永元年	1848	05 /17	1印	長谷川氏本	130020830500	聚成-3203
33禪家	2050	達磨像	宗立	紙本墨画	まくり	1枚	132.5	60.2	文久2年	1862	11 /00			130020830900	
33禪家	2051	達磨像	宗立	紙本墨画	まくり	1枚	82.6	39.6	文久3年	1863	02 /00		西源院本(常信筆)	130020830700	
33禪家	2052	達磨像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.5	46.5	文久3年	1863	09 /02		智積院蔵本	130020830100	聚成-3201
33禪家	2053	達磨像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.5	46.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020830200	聚成-3202
33禪家	2054	達磨像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	59.5	34.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020830300	
33禪家	2055	達磨像	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	62.0	40.1	江戸時代後期	19世紀				130020830400	
33禪家	2056	達磨像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	52.4	27.7	江戸時代後期	19世紀		1印・6印		130020830600	
33禪家	2057	達磨像	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	63.7	39.6	江戸時代後期	19世紀				130020830800	
33禪家	2058	禪宗諸師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	39.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020832101	聚成-3205
33禪家	2059	禪宗諸師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	39.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020832102	聚成-3206
33禪家	2060	禪宗諸師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.2	28.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020832103	聚成-3207
33禪家	2061	禪宗諸師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	39.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020832104	聚成-3208
33禪家	2062	禪宗諸師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	39.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020832105	聚成-3209
33禪家	2063	禪宗諸師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	39.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020832106	聚成-3210
33禪家	2064	禪宗諸師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	39.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020832107	聚成-3211
33禪家	2065	禪宗諸師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	39.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020832108	聚成-3212
33禪家	2066	禪宗諸師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	39.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020832109	聚成-3213
33禪家	2067	禪宗諸師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	39.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020832110	聚成-3214
33禪家	2068	禪宗諸師像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	39.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020832111	聚成-3215
33禪家	2069	隠元隆琦像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.6	49.5	文久3年	1863	08 /11	1印	智積院蔵本, 永真筆	130020833700	聚成-3231
33禪家	2070	隠元隆琦像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	52.1	38.3	文久3年	1863	08 /14		智積院蔵本	130020833800	聚成-3232
33禪家	2071	永覚元賢像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.4	38.4	文久3年	1863	08 /14		智積院蔵本	130020834000	聚成-3217
33禪家	2072	大鑑禪師清拙正澄像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	68.2	55.8	江戸時代後期	19世紀				130020839915	聚成-3223

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

33禪家	2073	洞山良价像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	52.2	40.9	享和3年	1803	01 /06	1印		130020836800	聚成-3204
33禪家	2074	蓮池大師像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	44.0	34.0	文久3年	1863	09 /06		智積院蔵本	130020839916	聚成-3216
33禪家	2075	承陽大師希玄道元像	遠藤満智	紙本白描?	まくり	1枚	27.5	13.7	享和2年	1802		1印		130020837300	
33禪家	2076	承陽大師希玄道元像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	36.5	28.0	江戸時代後期(明)	19世紀	08 /07	1印		130020839904	聚成-3218
33禪家	2077	隠之像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.5	44.0	嘉永2年	1849	02 /12	1印	長谷川氏本(元文4:1739)	130020838300	
33禪家	2078	機前像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	55.8	41.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020839912	聚成-3221
33禪家	2079	月江院某僧像	現光	紙本白描	まくり	1枚	66.0	34.6	嘉永2年	1849	01 /30	1印	長谷川氏本	130020837500	
33禪家	2080	雪山像	現光	紙本白描	まくり	1枚	56.2	34.0	嘉永2年	1849	02 /06	1印	長谷川氏本(宝暦6:1756)	130020832600	聚成-3219
33禪家	2081	大溪院某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.2	28.0	江戸時代後期	19世紀		1印・6印		130020835300	聚成-3222
33禪家	2082	宝福寺某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	51.5	34.2	嘉永2年	1849	02 /12	1印	長谷川氏本(宝暦6:1756)	130020836300	聚成-3220
33禪家	2083	関山慧玄像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	84.6	41.9	江戸時代後期	19世紀				130020839907	聚成-3225
33禪家	2084	惠雲像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	44.8	34.4	嘉永2年	1849	02 /12	1印	長谷川氏本(延享元:1744)	130020834400	聚成-3234
33禪家	2085	寂湛像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	67.3	41.6	江戸時代後期	19世紀		1印		130020832800	聚成-3227
33禪家	2086	水月像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	75.3	38.3	慶応2年	1866	09 /00			130020834900	聚成-3229
33禪家	2087	是照院某僧像	現光	紙本白描	まくり	1枚	50.0	34.0	嘉永2年	1849	02 /04	1印	長谷川氏本	130020838200	聚成-3237
33禪家	2088	達源像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	101.7	52.8	嘉永2年	1849	02 /05	1印	長谷川氏本	130020834600	聚成-3226
33禪家	2089	鉄眼道光像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.5	38.5	文久3年	1863	08 /14		智積院蔵本	130020831900	聚成-3233
33禪家	2090	不願像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.1	46.1	嘉永2年	1849	01 /29	1印	長谷川氏本	130020832700	聚成-3230
33禪家	2091	妙心寺盛岳院某僧像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	64.5	63.8	明治3年	1870	01 /00			130020839100	聚成-3228
33禪家	2092	蘭提正具像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	113.5	49.8	明治31年	1898	10 /00			130020839000	聚成-3224
33禪家	2093	セリツ像	遠藤弁蔵	紙本白描	まくり	1枚	69.3	32.8	享和元年	1801	05 /03	1印		130020831000	聚成-3238
33禪家	2094	光禪像	現光	紙本白描	まくり	1枚	80.5	52.8	嘉永2年	1849	02 /05	1印	長谷川氏本	130020839918	
33禪家	2095	水南像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	78.1	52.7	江戸時代後期	19世紀		1印・5印		130020838900	聚成-3236
33禪家	2096	大賢像	憲里	紙本白描	まくり	1枚	39.2	27.3	嘉永2年	1849	01 /29	1印		130020837700	
33禪家	2097	嶺山像	憲里	紙本白描淡彩	まくり	1枚	76.0	42.6	嘉永2年	1849	01 /26	1印	長谷川氏本	130020838700	聚成-3235
33禪家	2098	曹洞宗某僧像(持扨子)	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	54.5	40.0	享和2年	1802	02 /15	1印		130020838500	
33禪家	2099	曹洞宗某僧像(持扨子)	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	39.2	24.0	文化6年	1809	03 /18	1印		130020835500	
33禪家	2100	曹洞宗某僧像(持扨子)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	54.9	40.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020831700	
33禪家	2101	黄蘗宗某僧像(持扨子・杖)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	47.2	28.0	文政5年	1822	05 /00	1印		130020836500	
33禪家	2102	臨濟宗某僧像(持竹篋)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	44.5	38.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020836600	
33禪家	2103	某僧像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	37.3	26.3	寛政12年	1800	03 /30	1印		130020837100	聚成-3239
33禪家	2104	某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	33.8	42.5	文久3年	1863	09 /06		智積院蔵本	130020831100	
33禪家	2105	某僧像(合掌)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	56.8	33.5	天明9年	1789	01 /00	1印		130020838800	
33禪家	2106	某僧像(持杖)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.0	24.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020837800	
33禪家	2107	某僧像(持竹篋)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.4	42.6	嘉永2年	1849	02 /02	1印	長谷川氏本	130020833100	
33禪家	2108	某僧像(持竹篋)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	66.0	49.0	嘉永2年	1849	05 /29	1印	長谷川氏本	130020836000	
33禪家	2109	某僧像(持竹篋)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	66.0	51.0	文久3年	1863	09 /03		智積院蔵本	130020835000	
33禪家	2110	某僧像(持竹篋)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	69.0	28.4	江戸時代後期	19世紀		1印		130020832500	
33禪家	2111	某僧像(持竹篋)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	80.5	55.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020834100	
33禪家	2112	某僧像(持竹篋)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	51.4	34.4	嘉永2年	1849	02 /06	1印	長谷川氏本	130020837000	
33禪家	2113	某僧像(持竹篋)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	66.7	53.5	江戸時代後期	19世紀				130020839906	
33禪家	2114	某僧像(持如意)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	76.3	42.8	江戸時代後期	19世紀				130020833900	
33禪家	2115	某僧像(持如意)	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	68.0	42.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020838600	
33禪家	2116	某僧像(持如意・半身)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	50.0	34.0	文久3年	1863	09 /06		智積院蔵本	130020835900	
33禪家	2117	某僧像(持扨子)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	60.6	30.3	寛政10年	1798	05 /21	1印		130020832200	

33禪家	2118	某僧像(持弘子)	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	67.8	40.8	寛政12年	1800	04u/11	1印		130020838400
33禪家	2119	某僧像(持弘子)	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	68.5	40.0	寛政12年	1800	04u/20	1印		130020834700
33禪家	2120	某僧像(持弘子)	遠藤弁蔵	紙本白描	まくり	1枚	46.5	27.5	享和2年	1802	08 /17	1印		130020835800
33禪家	2121	某僧像(持弘子)	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	73.0	34.3	享和2年	1802	09 /20	1印		130020838000
33禪家	2122	某僧像(持弘子)	山口明雅	紙本白描	まくり	1枚	72.2	34.5	文化6年	1809	09 /02	1印		130020831400
33禪家	2123	某僧像(持弘子)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	45.0	19.5	文政7年	1824	11 /30	1印		130020837600
33禪家	2124	某僧像(持弘子)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	55.5	39.2	文政8年	1825	03 /20	1印		130020839917
33禪家	2125	某僧像(持弘子)	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	46.2	27.3	文政10年	1827	07 /20	1印		130020839911
33禪家	2126	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	55.7	34.2	嘉永2年	1849	01 /19	1印	長谷川等鶴図	130020836400
33禪家	2127	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	67.3	42.7	嘉永2年	1849	01 /22	1印		130020833200
33禪家	2128	某僧像(持弘子)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	85.8	56.8	嘉永2年	1849	02 /01	1印	長谷川氏本	130020839700
33禪家	2129	某僧像(持弘子)	現光	紙本白描	まくり	1枚	67.9	44.7	嘉永2年	1849	02 /02	1印	長谷川氏本	130020831600
33禪家	2130	某僧像(持弘子)	現光	紙本白描	まくり	1枚	66.3	44.1	嘉永2年	1849	02 /02	1印	長谷川氏本	130020833600
33禪家	2131	某僧像(持弘子)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	64.0	38.3	嘉永2年	1849	02 /02	1印	長谷川氏本	130020837200
33禪家	2132	某僧像(持弘子)	現光	紙本白描	まくり	1枚	68.2	34.3	嘉永2年	1849	02 /05	1印	長谷川氏本	130020834800
33禪家	2133	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	65.5	34.2	嘉永2年	1849	02 /06	1印	長谷川氏本	130020834300
33禪家	2134	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描一部 淡彩	まくり	1枚	68.2	42.2	嘉永2年	1849	02 /06	1印	長谷川氏本	130020839909
33禪家	2135	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	67.9	44.1	嘉永2年	1849	02 /07	1印	長谷川等鶴図	130020839800
33禪家	2136	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	57.5	34.2	嘉永2年	1849	02 /08	1印	長谷川氏本	130020839300
33禪家	2137	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	65.1	34.7	嘉永2年	1849	02 /08	1印	長谷川等鶴図	130020839600
33禪家	2138	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	66.0	40.6	嘉永2年	1849	02 /09	1印	長谷川氏本	130020831500
33禪家	2139	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	53.1	34.6	嘉永2年	1849	02 /09	1印	長谷川等鶴図	130020834500
33禪家	2140	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	68.4	43.5	嘉永2年	1849	02 /09	1印	長谷川氏本	130020835200
33禪家	2141	某僧像(持弘子)	憲里	紙本白描	まくり	1枚	68.0	43.9	嘉永2年	1849	02 /12	1印	長谷川氏本	130020839500
33禪家	2142	某僧像(持弘子)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.8	52.2	文久3年	1863	08 /13	1印	智積院蔵本	130020835100
33禪家	2143	某僧像(持弘子)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	64.5	40.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020730300
33禪家	2144	某僧像(持弘子)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	61.0	40.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020832400
33禪家	2145	某僧像(持弘子)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	73.4	40.6	江戸時代後期	19世紀		1印		130020833000
33禪家	2146	某僧像(持弘子)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.8	28.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020833500
33禪家	2147	某僧像(持弘子)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	58.5	33.9	江戸時代後期	19世紀		1印		130020835700
33禪家	2148	某僧像(持弘子)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.5	18.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020836100
33禪家	2149	某僧像(持弘子)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.5	22.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020836200
33禪家	2150	某僧像(持弘子)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	38.7	27.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020836700
33禪家	2151	某僧像(持弘子)	北川林篁子	紙本白描	まくり	1枚	58.6	34.0	江戸時代後期	19世紀		1印・ 「林篁」 印		130020836900
33禪家	2152	某僧像(持弘子)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.5	23.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020837900
33禪家	2153	某僧像(持弘子)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.5	25.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020838100
33禪家	2154	某僧像(持弘子)	現光	紙本白描	まくり	1枚	48.2	38.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020839908
33禪家	2155	某僧像(持弘子)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	74.7	39.3	江戸時代後期(年)	19世紀	08 /29	1印		130020839200
33禪家	2156	某僧像(持弘子・乗象)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.5	53.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020839914
33禪家	2157	某僧像(持弘子・杖)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	52.9	37.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020832300
33禪家	2158	某僧像(持弘子・杖)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.3	24.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020839910
33禪家	2159	某僧像(持弘子・半身)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	79.9	37.6	江戸時代後期	19世紀		1印		130020831800
33禪家	2160	某僧像(定印)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.3	8.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020835600
33禪家	2161	某僧像(定印)	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	28.0	19.0	江戸時代後期(明)	19世紀	09 /??	1印		130020837400
33禪家	2162	某僧像(拱手・半身)	現光	紙本白描	まくり	1枚	56.5	34.6	江戸時代後期	19世紀		1印		130020839900

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

33禪家	2163	某僧像(拱手・半身)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.5	24.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020839905	
33禪家	2164	某僧像袋	作者不詳	紙本墨書	袋	1枚	31.0	20.5	江戸時代後期	19世紀				130020832000	
33禪家	2165	座禪某僧像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	80.5	46.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020839400	
33禪家	2166	持鈴雲水像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	21.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020834200	
33禪家	2167	寒山拾得図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	97.3	39.5	江戸時代後期	19世紀				130020839913	聚成-3285
34浄土	2168	善導像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	50.7	24.5	寛政3年	1791	02 /24	1印		130020840801	聚成-3244
34浄土	2169	善導像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	38.2	26.5	寛政4年	1792	01 /27	1印		130020842100	聚成-3243
34浄土	2170	善導像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	55.5	23.2	文政6年	1823	02 /28			130020842200	
34浄土	2171	善導像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	27.7	12.9	文政9年	1826	06 /20			130020840201	
34浄土	2172	善導像	靈海	紙本白描	まくり	1枚	115.0	27.5	弘化5年	1848	02 /00	1印	長谷川氏本	130020846600	
34浄土	2173	善導像	現光	紙本白描	まくり	1枚	75.8	54.2	弘化5年	1848	02 /08	1印		130020846500	
34浄土	2174	善導像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	68.5	36.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020840501	
34浄土	2175	善導像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	19.3	11.0	江戸時代後期	19世紀				130020841600	
34浄土	2176	善導像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	20.3	13.5	江戸時代後期	19世紀				130020841700	
34浄土	2177	善導像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.5	9.6	江戸時代後期	19世紀				130020841800	
34浄土	2178	善導像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.4	11.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020841900	聚成-3242
34浄土	2179	善導像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	51.4	46.2	江戸時代後期	19世紀				130020845600	
34浄土	2180	善導像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.6	24.0	江戸時代後期	19世紀				130020846400	
34浄土	2181	善導大師絵詞	現光	紙本白描	まくり	1枚	27.2	38.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020842000	
34浄土	2182	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	20.0	12.2	安永8年	1779	03 /20			130020843900	
34浄土	2183	法然(円光大師源空)像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	51.0	24.7	寛政3年	1791	02 /00	1印		130020840802	聚成-3245
34浄土	2184	法然(円光大師源空)像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	38.6	27.5	寛政4年	1792	01 /27	1印		130020844000	
34浄土	2185	法然(円光大師源空)像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	47.2	23.7	文政6年	1823	02 /28			130020842500	
34浄土	2186	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	55.2	38.4	弘化5年	1848	02 /09	1印	長谷川氏本	130020843600	
34浄土	2187	法然(円光大師源空)像	現光	紙本白描	まくり	1枚	140.0	79.3	弘化5年	1848	02 /09	1印	長谷川氏本(原本粟生光明寺什物)	130020844700	聚成-3252
34浄土	2188	法然(円光大師源空)像	現光	紙本白描	まくり	1枚	112.2	92.3	弘化5年	1848	02 /10	1印	長谷川氏本	130020843300	
34浄土	2189	法然(円光大師源空)像	靈海	紙本白描	まくり	1枚	56.2	46.1	弘化5年	1848	02 /15	1印	長谷川氏本	130020844500	
34浄土	2190	法然(円光大師源空)像	靈海	紙本白描	まくり	1枚	112.5	61.8	弘化5年	1848	02 /15	1印	長谷川氏本	130020844800	
34浄土	2191	法然(円光大師源空)像	靈海	紙本白描	まくり	1枚	65.8	42.5	文久3年	1863	09 /04		智積院蔵本	130020843700	聚成-3250
34浄土	2192	法然(円光大師源空)像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	27.7	13.1	江戸時代後期	19世紀				130020840202	
34浄土	2193	法然(円光大師源空)像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	69.5	36.4	江戸時代後期	19世紀		1印		130020840502	
34浄土	2194	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	29.2	9.0	江戸時代後期	19世紀				130020842300	
34浄土	2195	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.4	24.0	江戸時代後期	19世紀				130020842400	
34浄土	2196	法然(円光大師源空)像	靈海	紙本白描	まくり	1枚	38.7	27.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020843800	聚成-3251
34浄土	2197	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	25.8	16.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020844200	
34浄土	2198	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	36.0	28.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130020844300	
34浄土	2199	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	82.5	53.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020844600	
34浄土	2200	法然(円光大師源空)像(鏡御影)	隆川	紙本白描	まくり	1枚	46.4	31.4	安政5年	1858				130020843400	
34浄土	2201	法然(円光大師源空)像(鏡御影)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.8	31.0	江戸時代後期	19世紀				130020843500	
34浄土	2202	善導法然図画巻	作者不詳	紙本白描	まくり	1巻	27.2	341.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020847500	聚成-3249
34浄土	2203	善導法然像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	42.5	28.0	享和2年	1802	08 /12			130020840700	
34浄土	2204	善導法然像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	40.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020840100	
34浄土	2205	善導法然像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.3	7.1	江戸時代後期	19世紀				130020840300	
34浄土	2206	善導法然像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	35.9	28.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020840400	聚成-3248
34浄土	2207	善導法然像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.0	22.0	江戸時代後期	19世紀				130020840600	
34浄土	2208	善導法然対面図	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	18.5	30.3	文政8年	1825	09u/13			130020841400	

34浄土	2209	善導法然対面図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.4	160.3	弘化5年	1848	02 /15	1印	長谷川氏本	130020841000	聚成-3246
34浄土	2210	善導法然対面図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	49.8	27.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020840900	
34浄土	2211	善導法然対面図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	111.5	62.1	江戸時代後期	19世紀		1印	吉野郡志賀村安楽寺什宝	130020841100	聚成-3247
34浄土	2212	善導法然対面図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	49.8	98.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020841200	
34浄土	2213	善導法然対面図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	94.2	55.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020841500	
34浄土	2214	善導法然対面図	遠藤満智	紙本白描	まくり	1枚	96.0	39.8	江戸時代後期(90)	19世紀	07 /28	1印		130020841300	
34浄土	2215	浄土宗三祖像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	56.5	51.2	江戸時代後期	19世紀		1印	長谷川氏本	130020846300	聚成-3254
34浄土	2216	浄土宗五祖像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	27.7	91.4	弘化5年	1848	02 /07	1印	嵯峨二尊院方丈什物	130020846100	聚成-3241
34浄土	2217	浄土宗五祖像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	149.5	157.3	安政4年	1857	01 /29			130020846000	聚成-3240
34浄土	2218	浄土宗五祖像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	112.2	65.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130020846200	
34浄土	2219	七高僧像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	86.2	38.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020845800	
34浄土	2220	七高僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	46.5	27.7	江戸時代後期	19世紀		1印	長谷川氏本	130020845900	
34浄土	2221	法然山中居住図	現光	紙本白描	まくり	1枚	97.0	53.6	弘化5年	1848	02 /08	1印		130020845000	聚成-3253
34浄土	2222	法然・聖徳太子像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	10.2	17.0	慶応元年	1865	05 /00			130021041200	
34浄土	2223	蓮生像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	64.4	26.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020845300	
34浄土	2224	蓮生像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	51.3	27.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020845400	聚成-3261
34浄土	2225	辨長・良忠像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	28.1	27.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020845700	聚成-3255
34浄土	2226	辨長像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	45.5	28.7	江戸時代後期	19世紀		1印		130020843000	聚成-3256
34浄土	2227	證空像	現光	紙本白描	まくり	1枚	55.7	38.5	弘化5年	1848	02 /09	1印		130020847000	
34浄土	2228	證空像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	48.4	34.5	江戸時代後期	19世紀				130020846700	聚成-3257
34浄土	2229	證空像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	54.1	38.5	江戸時代後期	19世紀		1印	長谷川元東写本(原粉本宇津宮綱之写本、原本京都市三結寺所什物)	130020846800	聚成-3258
34浄土	2230	證空像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.9	27.4	江戸時代後期	19世紀		1印		130020846900	
34浄土	2231	蓮誉像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	44.5	39.0	江戸時代後期	19世紀		6印		130020847100	聚成-3268
34浄土	2232	一也像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	53.5	52.3	江戸時代後期	19世紀		1印		130020845200	聚成-3093
34浄土	2233	榮弘像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	67.5	39.0	文政12年	1829	03 /06	1印	忍辱山知恩院什物	130020842700	聚成-3266
34浄土	2234	何門像	現光	紙本白描	まくり	1枚	58.4	53.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020842800	聚成-3269
34浄土	2235	觀光像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	49.5	36.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020842900	聚成-3270
34浄土	2236	祥空像	遠藤	紙本白描	まくり	1枚	83.5	28.0	江戸時代後期	19世紀		1印		130020843100	聚成-3271
34浄土	2237	浄音像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	38.7	27.4	江戸時代後期	19世紀		1印		130020848000	聚成-3273
34浄土	2238	髮染院願誓雲生信尼像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.5	24.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020847400	聚成-3276
34浄土	2239	安楽寺某僧像	現光	紙本白描	まくり	1枚	34.4	38.2	江戸時代後期	19世紀		1印		130020821100	
34浄土	2240	西福寺某僧像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	63.3	48.8	江戸時代後期	19世紀		1印		130020792600	聚成-3272
34浄土	2241	入信院某僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	48.8	45.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130020845500	聚成-3267
35一向俗人	2242	親鸞(見真大師)像	現光	紙本白描	まくり	1枚	37.4	51.0	弘化5年	1848	02 /09			130020847700	
35一向俗人	2243	親鸞(見真大師)像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	60.5	48.5	弘化5年	1848	02 /09		長谷川氏本	130020847800	聚成-3260
35一向俗人	2244	親鸞(見真大師)像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	27.7	13.1	文久元年	1861	03 /29			130020848500	
35一向俗人	2245	親鸞(見真大師)像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	75.0	52.8	文久3年	1863	08 /14		智積院蔵本	130020848100	
35一向俗人	2246	親鸞(見真大師)像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	56.6	46.7	文久3年	1863	08 /14		智積院蔵本	130020848200	聚成-3259
35一向俗人	2247	親鸞(見真大師)像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	55.6	51.6	江戸時代後期	19世紀			長谷川氏本	130020847600	
35一向俗人	2248	親鸞(見真大師)像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.6	38.5	江戸時代後期	19世紀				130020848400	
35一向俗人	2249	稚児蓮如像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	40.5	28.0	江戸時代後期	19世紀		5印		130020848600	聚成-3265
35一向俗人	2250	蓮如(慧燈大師)像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	41.5	37.0	江戸時代後期	19世紀			長谷川氏本	130020848700	聚成-3264
35一向俗人	2251	浄土真宗七高僧像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	106.2	37.9	弘化5年	1848	02 /15		長谷川氏本	130020848300	聚成-3262
35一向俗人	2252	浄土真宗七高僧像袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	28.0	20.3	江戸時代後期	19世紀				130020848302	聚成-3262A
35一向俗人	2253	似雲像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	45.5	34.5	江戸時代後期	19世紀		1印		130020870500	聚成-4196

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

35一向俗人	2254	宗阿像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.2	39.5	江戸時代後期	19世紀					130020870900	
35一向俗人	2255	中将姫像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	60.2	44.8	天保2年	1831	04 /19				130020847200	聚成-3274
35一向俗人	2256	中将姫像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	49.3	39.5	天保2年	1831	04 /19				130020847300	聚成-3275
35一向俗人	2257	神功皇后像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	53.3	54.6	慶応元年	1865	08 /26				130020880800	
35一向俗人	2258	神功皇后像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.5	55.0	江戸時代後期	19世紀					130020880700	
35一向俗人	2259	聖武天皇像	宗立	紙本白描	まくり	1枚	150.0	65.2	文久3年	1863	07 /03		長谷寺蔵本		130020880100	聚成-4185
35一向俗人	2260	聖武天皇像替	英岳	紙本墨書	まくり	1枚	24.8	34.0	元禄14年	1701	11 /02				130021002800	
35一向俗人	2261	鳥羽法皇像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	76.9	44.1	文政12年	1829	09 /13	1印	竹田明照院蔵本		130020880200	聚成-4186
35一向俗人	2262	鳥羽法皇像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	206.0	56.5	慶応4年	1868	04u/17				130020880300	
35一向俗人	2263	伝万里小路藤房像	宗立	紙本白描淡彩	まくり	1枚	80.0	37.5	文久元年	1861	02 /01				130020880600	聚成-4190
35一向俗人	2264	阿字義	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	38.9	79.8	嘉永4年	1851	07 /18	1印	水無瀬家所蔵本		130020880400	
35一向俗人	2265	内裏雛図	現光	紙本白描	まくり	1枚	39.4	59.8	弘化4年	1847	08 /01				130020891200	
35一向俗人	2266	内裏雛図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	46.5	62.2	弘化4年	1847	08 /03		長谷川氏本		130020891100	
35一向俗人	2267	東照神君像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	75.8	38.3	江戸時代後期	19世紀					130020680100	
35一向俗人	2268	東照神君像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	88.0	45.7	江戸時代後期	19世紀			最上大運所持本		130020680300	
35一向俗人	2269	徳川家康(東照神君)像	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	113.5	59.0	弘化2年	1845	07 /30				130020680200	聚成-4192
35一向俗人	2270	徳川歴代将軍像	憲海	紙本白描	まくり	1巻	27.5	151.1	文政11年	1828	04 /15		長谷寺本堂蔵本		130020870100	聚成-4193
35一向俗人	2271	武田信玄二十四将図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	118.0	62.8	江戸時代後期	19世紀		7印			130020872300	聚成-4191
35一向俗人	2272	武者図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	28.2	38.7	江戸時代後期	19世紀		7印			130020872400	
35一向俗人	2273	柿本人麿像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.0	28.1	江戸時代後期	19世紀		5印・6印			130020870800	聚成-4189
35一向俗人	2274	松尾芭蕉像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	48.6	34.2	江戸時代後期	19世紀					130020871100	聚成-4195
35一向俗人	2275	千利休像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	70.2	39.0	江戸時代後期	19世紀		5印	長谷川等鶴画自賛		130020870600	聚成-4194
35一向俗人	2276	長谷川等観像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	76.8	103.8	江戸時代後期	19世紀			長谷川等鶴(等観等廓)画自賛		130020872800	聚成-4198
35一向俗人	2277	芭蕉・其角像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.2	39.5	江戸時代後期	19世紀					130020871000	
35一向俗人	2278	和歌三神図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	27.5	67.5	江戸時代後期	19世紀					130020890700	
35一向俗人	2279	杉田平助両親像	憲海	紙本着彩	まくり	1枚	28.0	39.1	弘化2年	1845	09 /20		江戸大塚護持院大官杉田平助両親		130020871900	聚成-4197
35一向俗人	2280	中村石之助像	作者不詳	紙本着彩	まくり	1枚	59.0	34.1	江戸時代後期	19世紀					130020871800	
35一向俗人	2281	某氏像(羽織)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.4	27.6	江戸時代後期	19世紀		5印			130020870400	
35一向俗人	2282	某氏像(羽織)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	40.3	28.1	江戸時代後期	19世紀		5印			130020871700	
35一向俗人	2283	某氏像(持扇・袴)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.0	27.8	江戸時代後期	19世紀		5印			130020871500	
35一向俗人	2284	某氏像(持扇・袴)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.4	27.8	江戸時代後期	19世紀		5印			130020871600	
35一向俗人	2285	某氏像(持念珠・羽織)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	40.5	28.1	江戸時代後期	19世紀		5印			130020871300	
35一向俗人	2286	某氏像(持念珠・羽織)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.0	27.6	江戸時代後期	19世紀		5印			130020871400	
35一向俗人	2287	某氏像(袴)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	38.8	27.6	江戸時代後期	19世紀		5印			130020870200	
35一向俗人	2288	某氏像(袴)	憲海	紙本白描	まくり	1枚	39.3	27.7	江戸時代後期	19世紀		5印			130020870300	
35一向俗人	2289	某夫婦像(右)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	54.7	39.2	江戸時代後期	19世紀					130020872502	
35一向俗人	2290	某夫婦像(左)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	54.3	29.3	江戸時代後期	19世紀					130020872501	
35一向俗人	2291	人形持児童図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	90.5	54.2	江戸時代後期	19世紀					130020890500	
35一向俗人	2292	静御前像	宗立	紙本墨画	まくり	1枚	75.0	55.5	慶応2年	1866	05 /16				130020960600	
35一向俗人	2293	白拍子図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.3	16.0	江戸時代後期	19世紀					130021040200	
35一向俗人	2294	美人図	宗立	紙本墨画	まくり	1枚	102.5	39.0	文久3年	1863	03 /03				130020960700	
35一向俗人	2295	美人図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	111.0	46.5	江戸時代後期	19世紀					130020960100	
35一向俗人	2296	美人図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	90.5	33.5	江戸時代後期	19世紀					130020960200	
35一向俗人	2297	美人図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	103.5	44.0	江戸時代後期	19世紀					130020960800	
35一向俗人	2298	美人図	雲道	紙本墨画	まくり	1枚	111.0	43.5	江戸時代後期	19世紀					130020961000	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

35一向俗人	2299	婦人像	宗立	紙本墨画	まくり	1枚	109.5	44.5	江戸時代後期	19世紀					130020960500	
35一向俗人	2300	婦人像	作者不詳	紙本鉛筆	まくり	1枚	50.0	35.9	明治時代	19世紀					130020961300	
35一向俗人	2301	物売女(お勝)像	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.1	23.9	慶応3年	1867	06 /13				130020872100	
35一向俗人	2302	某婦人像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	27.7	39.4	江戸時代後期	19世紀			5印		130020872000	
35一向俗人	2303	某婦人像	憲海	紙本白描	まくり	1枚	40.4	27.9	江戸時代後期	19世紀			5印		130020872200	
35一向俗人	2304	遊女図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	34.0	24.5	江戸時代後期	19世紀					130020960900	
35一向俗人	2305	本朝俗人影封袋	憲海	紙本墨書	袋	1枚	29.1	22.2	江戸時代後期	19世紀					130021050300	
35一向俗人	2306	唐美人図	宗立	紙本墨画	まくり	1枚	49.5	72.0	江戸時代後期	19世紀			「十方明宗立」印		130020961200	
35一向俗人	2307	唐美人図(義波像)	宗立	紙本墨画	まくり	1枚	36.5	53.5	江戸時代後期	19世紀	08 /13				130020961100	
35一向俗人	2308	奈女像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	115.0	38.5	江戸時代後期	19世紀					130020960400	聚成-4183
35一向俗人	2309	平沙王像	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	106.0	38.7	江戸時代後期	19世紀					130020891000	聚成-4182
36雑画	2310	獄卒図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.5	27.8	江戸時代後期	19世紀					130020910400	
36雑画	2311	地獄図(阿弥陀三尊来迎図)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.5	27.8	江戸時代後期	19世紀					130020690206	
36雑画	2312	地獄図(釋衣婆図)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.6	27.9	江戸時代後期	19世紀					130020690201	
36雑画	2313	地獄図(地獄図)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.5	27.8	江戸時代後期	19世紀					130020690204	
36雑画	2314	地獄図(地獄図)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.5	27.8	江戸時代後期	19世紀					130020690205	
36雑画	2315	地獄図(亡者図)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.6	27.8	江戸時代後期	19世紀					130020690202	
36雑画	2316	地獄図(閻魔王図)	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	39.5	27.8	江戸時代後期	19世紀					130020690203	
36雑画	2317	九相図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.3	66.6	江戸時代後期	19世紀					130020870700	
36雑画	2318	骸骨図	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	39.0	27.5	江戸時代後期	19世紀					130020990300	
36雑画	2319	梵字書	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	38.7	27.3	江戸時代後期	19世紀					130021003800	
36雑画	2320	梵字真言書	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	27.9	40.5	江戸時代後期	19世紀					130021000600	
36雑画	2321	梵字真言書	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	48.2	34.0	江戸時代後期	19世紀					130021001100	
36雑画	2322	梵字法身偈	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	9.2	34.2	江戸時代後期	19世紀					130021001000	
36雑画	2323	アラビア語綴	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	25.4	40.7	江戸時代後期	19世紀					130021003300	
36雑画	2324	東南筭語表	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	14.2	15.9	江戸時代後期	19世紀					130021003200	
36雑画	2325	祇園社頭風俗図	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	27.0	43.2	江戸時代後期	19世紀					130021020400	
36雑画	2326	祭礼往来図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.4	151.8	江戸時代後期	19世紀					130020890900	
36雑画	2327	西湖山水図	雪曾	紙本白描淡彩	まくり	1枚	108.6	65.6	江戸時代後期	19世紀					130020920100	
36雑画	2328	宴会人物図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	23.6	34.0	江戸時代後期	19世紀					130021040300	
36雑画	2329	茅屋柴門詩画	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.2	33.8	江戸時代後期	19世紀					130021003700	
36雑画	2330	鶏声茅店月人跡板橋霜ノ図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	85.3	45.7	江戸時代後期	19世紀					130020920200	
36雑画	2331	職人尽図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	28.2	126.2	江戸時代後期	19世紀					130020890100	
36雑画	2332	神像断片	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	6.7	6.2	江戸時代後期	19世紀					130021052900	
36雑画	2333	僧形図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	37.8	26.8	江戸時代後期	19世紀					130021040500	
36雑画	2334	僧面貌図・錫杖図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.0	37.5	江戸時代後期	19世紀					130021040600	
36雑画	2335	彈琴図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.8	49.7	江戸時代後期	19世紀					130020890800	
36雑画	2336	唐画帖	宗立	紙本白描	綴	1帖(3紙)	28.5	39.5	文久3年	1863	03 /09				130020891300	
36雑画	2337	福神戯児図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.7	69.4	江戸時代後期	19世紀					130020890400	
36雑画	2338	万歳図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.0	29.5	江戸時代後期	19世紀					130021040100	
36雑画	2339	鮎図	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	27.9	11.9	江戸時代後期	19世紀					130020940300	
36雑画	2340	足犬図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	28.0	12.0	江戸時代後期	19世紀			5印		130021041300	
36雑画	2341	双鶴図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	27.3	39.4	明治時代	19世紀					130020950400	
36雑画	2342	柳下群馬図	現光	紙本白描淡彩	まくり	1枚	111.5	48.6	弘化2年	1845	11 /00		江戸四ッ谷愛染院什物		130020940900	
36雑画	2343	狢犬図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	118.0	200.5	江戸時代後期	19世紀					130020940200	
36雑画	2344	御室御所会符図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	61.1	38.8	江戸時代後期	19世紀				仁和寺什物	130021033300	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

36雑画	2345	御節重箱図	宗立	紙本着彩	綴	1綴(3紙)	24.3	33.9	文久3年	1863	01 /02	「宗立」印		130020950700	
36雑画	2346	団扇図(花鳥)	現光	紙本着彩	まくり	1枚	28.0	40.4	嘉永6年	1853	04 /30			130020950800	
36雑画	2347	団扇図(花鳥)	現光	紙本着彩	まくり	1枚	28.0	40.3	嘉永6年	1853	04 /30			130020950900	
36雑画	2348	団扇図(山水)	現光	紙本着彩	まくり	1枚	28.0	40.4	嘉永6年	1853	04 /30			130020951000	
36雑画	2349	文人書齋図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.3	33.0	江戸時代後期	19世紀				130021032600	
36雑画	2350	北条虫図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	36.5	38.2	江戸時代後期	19世紀				130021002600	
36雑画	2351	北条虫図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	88.8	46.0	江戸時代後期	19世紀				130021002700	
36雑画	2352	立雛草稿図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	40.0	27.6	江戸時代後期	19世紀				130021040900	
36雑画	2353	雲座図	現光	紙本白描	まくり	1枚	39.0	71.2	弘化4年	1847	08 /14			130020920700	聚成-4134
36雑画	2354	雲座図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.5	38.5	江戸時代後期	19世紀				130020920800	
36雑画	2355	円光断片	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.1	17.8	江戸時代後期	19世紀				130021052300	
36雑画	2356	円光断片	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	32.7	24.2	江戸時代後期	19世紀				130021052400	
36雑画	2357	円光断片	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	34.2	25.0	江戸時代後期	19世紀				130021052500	
36雑画	2358	環形罨紙	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	35.3	38.0	江戸時代後期	19世紀				130021051700	
36雑画	2359	観相図	憲海	紙本白描	まくり	1枚	50.4	27.8	江戸時代後期	19世紀		6印		130020990200	聚成-4162
36雑画	2360	岩座図	宗立	紙本墨画	帖	1帖(4紙)	28.0	41.5	元治元年	1864	08 /10	「十方明宗立」印		130020921100	
36雑画	2361	岩壁波濤図	作者不詳	紙本墨画	まくり	1枚	17.8	47.7	江戸時代後期	19世紀				130020920900	
36雑画	2362	弘法大師贊罨紙	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	33.2	29.5	江戸時代後期	19世紀				130021051500	
36雑画	2363	軸表装図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	92.0	50.5	江戸時代後期	19世紀				130021050800	
36雑画	2364	軸表装図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	91.5	38.5	江戸時代後期	19世紀				130021050900	
36雑画	2365	軸表装図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	106.5	44.6	江戸時代後期	19世紀				130021051200	
36雑画	2366	軸表装図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	41.0	52.0	江戸時代後期	19世紀				130021051400	
36雑画	2367	手控帖	作者不詳	紙本白描	帖	1帖(17紙)	17.6	12.0	江戸時代後期	19世紀				130021039000	
36雑画	2368	須弥壇図	憲里	紙本白描	まくり	1枚	28.2	48.7	嘉永4年	1851	08 /22		長谷川氏本	130020985000	聚成-4136
36雑画	2369	台座図	憲海	紙本白描淡彩	まくり	1枚	39.9	28.3	安政2年	1855	07 /01			130020971000	
36雑画	2370	台座図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	13.3	12.9	元治元年	1864	06 /23			130021037200	
36雑画	2371	台座図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.6	34.2	江戸時代後期	19世紀				130020980300	
36雑画	2372	唐椅子図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.2	44.1	江戸時代後期	19世紀		1印		130021037100	
36雑画	2373	不動明王像台座図	宗立	紙本白描	まくり	1枚	26.7	39.9	万延元年	1860	03u/26			130021031700	
36雑画	2374	仏画彩色覚書	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.5	34.5	江戸時代後期	19世紀				130021050601	
36雑画	2375	仏画彩色覚書	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.5	34.5	江戸時代後期	19世紀				130021050602	
36雑画	2376	仏刻指図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.6	119.5	江戸時代後期	19世紀				130020990400	聚成-4163
36雑画	2377	方眼罨紙	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	48.5	37.0	江戸時代後期	19世紀				130021051000	
36雑画	2378	方眼罨紙	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	27.4	38.8	江戸時代後期	19世紀				130021051100	
36雑画	2379	方眼罨紙	宗立	紙本白描	まくり	1枚	52.2	39.5	江戸時代後期	19世紀		「宗/立」印		130021051800	
36雑画	2380	本朝画家雑系・狩氏画工道統譜	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	34.8	82.7	天保15年	1844	08 /29		佐藤氏所持本	130020990500	
36雑画	2381	蓮華座図	作者不詳	紙本白描淡彩	まくり	1枚	27.8	135.5	弘化5年	1848	01 /01		空海筆, 明恵筆	130020971100	聚成-4132
36雑画	2382	蓮華座図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	28.0	39.2	江戸時代後期	19世紀				130020970800	
36雑画	2383	蓮華座図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	26.7	39.5	江戸時代後期	19世紀				130020970900	
36雑画	2384	蓮台座断片	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	31.5	24.0	江戸時代後期	19世紀				130021052200	
36雑画	2385	蓮台図	作者不詳	紙本白描	まくり	1枚	24.0	34.2	江戸時代後期	19世紀				130020981000	
36雑画	2386	扁命十方墨書断片	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	24.3	16.7	江戸時代後期	19世紀				130021052600	
36雑画	2387	源空浄土安心抄書	重嗣	紙本墨書	まくり	1枚	37.7	27.4	江戸時代後期	19世紀				130021001400	
36雑画	2388	後宇多法皇宸筆大師御影画贊書	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	34.4	38.9	江戸時代後期	19世紀				130021003000	
36雑画	2389	此界一人墨書断片	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	39.5	8.7	江戸時代後期	19世紀				130021052700	
36雑画	2390	舎利礼文	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	24.1	32.3	江戸時代後期	19世紀				130020990700	

別表1 《田村宗立旧蔵仏画粉本》写本目録

36雑画	2391	制底略縁起書反古	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	27.9	38.4	江戸時代後期	19世紀				130021003600	
36雑画	2392	西国札所由緒記	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	24.7	34.2	江戸時代後期	19世紀				130021003400	
36雑画	2393	先師入寂記	淳心	紙本墨書	まくり	1枚	12.4	34.5	文政4年	1821	09 /20			130020990800	
36雑画	2394	曇寂像讃書	作者不詳	紙本墨書	まくり	1枚	34.2	45.4	江戸時代後期	19世紀				130021001500	
36雑画	2395	和歌三首刷物	作者不詳	紙本墨拓	まくり	1枚	37.8	29.8	江戸時代後期	19世紀				130021003900	
36雑画	2396	書簡綴(八通)	作者不詳	紙本墨書	綴	1帖(8紙)	15.6	7.6	江戸時代後期	19世紀				130021052000	

別表2 《田村宗立旧蔵仏画粉本》版本目録											
			<p>注 *本目録は、《田村宗立旧蔵仏画粉本》2673点のうち版本のみ277点を、施印の主体に従って分類して一覧としたものである。各項目の凡例は下記のとおり。</p> <p>(通番) 本目録における目録番号。本論において()書で示される。 (備考) 印番号が記される場合は、本論第1章「図1-1能満院粉本主要印影一覧」における印影番号。 (資料番号) 京都市立芸術大学芸術資料館における資料の取蔵番号。</p>								
通番	名称	原画作者	材質技法	形状	員数	法量 縦cm	法量 横cm	出版年	備考	資料番号	
A：憲海もしくは能満院による施印											
版-001	種字星曼荼羅図	憲海	紙本木版	まくり	1枚	59.4	32.9	江戸時代後期	19世紀	能満院施印	130020022000
版-002	釈迦親手華判梵書唵字讚	憲海	紙本木版	まくり	1枚	58.9	33.1	安政3年	1856	能満院施印	130021000300
版-003	六字名号	憲海	紙本木版	まくり	1枚	109.2	40.1	安政6年	1859	能満院施印	130021001800
版-004	光明真言字輪曼荼羅図	憲海	紙本木版	まくり	1枚	81.6	40.0	安政5年	1858	能満院施印, 志州木下再版 (原本智積院方丈)	130020030801
版-005	光明真言字輪曼荼羅図封紙	作者不詳	紙本木版	封紙	1枚	20.2	13.2	安政5年	1858	志州木下版	130020030802
版-006	勝敵毘沙門天像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	113.5	59.5	文久2年	1862	能満院施印(憲海下絵)	130020360701
版-007	勝敵毘沙門天像封紙	作者不詳	紙本木版	封紙	1枚	27.5	33.0	文久2年	1862	能満院施印	130020360702
版-008	請雨水鉢図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	54.5	51.5	江戸時代後期	19世紀		130020020500
版-009	請雨水鉢図	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	44.6	44.6	江戸時代後期	19世紀		130020020600
版-010	稻荷明神像	憲海	紙本木版	まくり	1枚	67.7	30.7	明治2年	1869	憲海施印(羽州宗賢再版)	130020620500
版-011	稻荷明神像	憲海	紙本木版	まくり	1枚	67.6	30.7	明治2年	1869	憲海施印(羽州宗賢再版)	130020620700
版-012	稻荷明神像	憲海	紙本木版	まくり	1枚	66.2	30.1	明治時代	19世紀	(版-10・11の異版)	130020620600
版-013	稻荷明神像	憲海	紙本木版	まくり	1枚	66.7	30.0	明治時代	19世紀	(版-10・11の異版)	130020620800
版-014	宝相恵喜神・宝相寛童神像	宗立	紙本木版	まくり	1枚	27.3	19.7	江戸時代後期	19世紀	能満院施印	130020614200

版-015	宝相恵喜神・宝相寛童神像	宗立	紙本木版	まくり	1枚	27.5	19.7	文久元年	1861	能満院施印	130020642400
版-016	宝相七神図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	69.9	33.8	江戸時代後期	19世紀	能満院施印(宗立下絵)	130020642000
版-017	船玉明神像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	123.9	58.2	江戸時代後期	19世紀	能満院施印(大成下絵)	130020550600
版-018	船玉明神像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	122.6	58.3	江戸時代後期	19世紀	能満院施印(大成下絵)	130020550900
版-019	聖徳太子像	憲里	紙本木版	まくり	1枚	35.2	24.6	嘉永6年	1853	頂法寺施印	130020701000
版-020	帝釈天像	宗立	紙本木版	まくり	1枚	138.2	64.8	明治4年	1871	能満院大成刻(原本備中靈雲寺, 憲海写本(安政7:1860))	130020421600
B: 能満院工房解散後の版本-1(尊峰とその関係者による施印)											
版-021	金剛智像	憲里	紙本木版	まくり	1枚	181.5	130.1	明治時代	19世紀	志州尊峰施印	130020743700
版-022	一行像	憲里	紙本木版	まくり	1枚	187.2	130.0	明治時代	19世紀	志州尊峰施印	130020743800
版-023	善無畏像	憲里	紙本木版	まくり	1枚	182.7	128.4	明治時代	19世紀	志州尊峰施印	130020743900
版-024	龍猛像	憲里	紙本木版	まくり	1枚	208.2	129.5	明治2年	1869	志州尊峰施印(原本平等寺多楽院, 憲海写本(嘉永4:1851))	130020744000
版-025	地天像	宗立	紙本木版	裏打	1枚	127.0	47.3	明治10年	1877	志州尊峰施印	130020421001
版-026	毘沙門天像	宗立	紙本木版	裏打	1枚	126.5	47.2	明治10年	1877	志州尊峰施印	130020421002
版-027	風天像	宗立	紙本木版	裏打	1枚	126.5	27.2	明治10年	1877	志州尊峰施印	130020421003
版-028	水天像	宗立	紙本木版	裏打	1枚	126.7	47.0	明治10年	1877	志州尊峰施印	130020421004
版-029	孔雀明王像	憲里	紙本木版	まくり	1枚	183.0	125.3	嘉永元年	1848	(原本智積院方丈, 長谷川等鶴(賀一)写本(享和元:1801), 憲海模本(文政12:1829))	130020320200
版-030	不動明王像	憲海	紙本木版	まくり	1枚	193.4	118.2	明治9年	1876	志州大円ほか施印	130020306700
版-031	不動明王像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	54.8	40.3	明治時代	19世紀	(御室版-胎五大院)	130020306600
版-032	不動明王像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	60.0	35.6	明治時代	19世紀	(御室版-胎五大院校合)	130020304100
版-033	不動明王像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	60.1	35.6	明治時代	19世紀	(御室版-胎五大院校合)	130020306800

版-034	仏眼仏母像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	54.5	39.5	明治時代	19世紀	(御室版-胎遍知院)	130020100900
版-035	金剛界大日如来像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	55.5	36.7	明治時代	19世紀	志州岡村氏施印(御室版-金四印会)	130020091200
版-036	金剛界大日如来像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	49.3	37.4	明治時代	19世紀	志州岡村氏施印(御室版-金四印会)	130020091300
版-037	如意輪観音像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	57.7	33.8	明治時代	19世紀	志州佐七ほか施印(御室版-胎蓮華会)	130020181100
版-038	大随求菩薩像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	46.6	31.9	明治4年	1871	志州山田屋長七ほか施印(御室版-胎蓮華会)	130020281201
版-039	大随求菩薩像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	42.6	30.0	明治4年	1871	志州山田屋長七ほか施印(御室版-胎蓮華会)	130020281202
版-040	大随求菩薩像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	43.6	29.5	明治4年	1871	志州山田屋長七ほか施印(御室版-胎蓮華会)	130020281203
版-041	馬頭観音像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	38.0	33.6	明治時代	19世紀	志州大円施印(御室版-胎蓮華会)	130020190301
版-042	馬頭観音像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	55.9	32.1	明治時代	19世紀	志州大円施印(御室版-胎蓮華会)	130020190302
版-043	金剛界曼荼羅三昧耶会図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	40.1	28.4	明治時代	19世紀		130020012600
C:能満院工房解散後の版画-2(晩年の大成下絵)											
版-044	出羽三山像	憲里	紙本木版	まくり	1枚	37.4	43.8	明治時代	19世紀	羽州羽黒山本道寺施印	130020551000
版-045	興教大師覚鑿像	憲里	紙本木版	まくり	1枚	79.6	63.7	明治21年	1888	榊原了月・齋藤隆現施印	130020781900
版-046	興教大師覚鑿像封紙	作者不詳	紙本木版	封紙	1枚	24.1	15.8	明治21年	1888	榊原了月・齋藤隆現施印(原本智積院)	130020782400
版-047	弘法大師空海像	憲里	紙本木版	まくり	1枚	25.0	17.4	明治時代	19世紀	平田職兄施印	130020753901
版-048	弘法大師空海像	憲里	紙本木版	まくり	1枚	25.0	17.4	明治時代	19世紀	平田職兄施印	130020753902
版-049	弘法大師空海像	憲里	紙本木版	まくり	1枚	30.0	16.5	明治時代	19世紀	平田職兄施印	130020754100
版-050	弘法大師空海像	憲里	紙本木版	まくり	1枚	95.0	46.0	明治時代	19世紀	平田職兄施印(原本憲海開版, 大成模)	130020753500
版-051	弘法大師空海像	憲里	紙本木版	まくり	1枚	97.7	45.0	明治時代	19世紀	平田職兄施印	130020755700
D:海如施印版画											

版-052	胎蔵界種子曼荼羅図	森田重治 郎	紙本木版著彩	まくり	1枚	59.2	52.9	弘化2年	1845	海如施印(覚鏝筆護国寺本 より大願臨写)	130020010401
版-053	金剛界種子曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	59.3	52.9	江戸時代後期	19世紀	海如施印	130020010402
版-054	両界種字曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	65.6	28.7	江戸時代後期	19世紀	海如施印	130020012500
版-055	法華曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	61.6	48.4	天保13年	1842	海如施印	130020024701
版-056	法華曼荼羅図袋	作者不詳	紙本木版	袋	1枚	24.7	15.6	天保13年	1842	海如施印(朱文方印:「興教 大師七百年/忌法楽莊 嚴」,「願以此功德報/麟四 息回四菩/提比丘海如意 施」)	130020024702
版-057	不動明王像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	65.5	30.2	江戸時代後期	19世紀	海如施印(朱文朱方印)海如 /恭施	130020304300
版-058	弘法大師空海像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	65.5	30.1	江戸時代後期	19世紀	海如施印(朱文朱方印)海如 /恭施	130020753700
版-059	理源大師聖宝像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	65.2	29.6	江戸時代後期	19世紀	海如施印(朱文朱方印)海如 /恭施	130020771300
E:龍肝施印版画											
版-060	胎蔵界種字曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	48.4	36.3	江戸時代後期	19世紀	龍肝施印	130020012701
版-061	金剛界種字曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	48.5	36.4	江戸時代後期	19世紀	龍肝施印	130020012702
版-062	両界曼荼羅解説	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	18.4	12.8	江戸時代後期	19世紀	龍肝施印	130020012703
F:長谷寺関係版画											
版-063	胎蔵界曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	77.0	136.0	文政12年	1829	和州長谷寺施印(長谷寺版)	130020011800
版-064	十一面観音像(長谷寺式)	作者不詳	紙本木版貼紙 補正	まくり	1枚	97.1	37.2	江戸時代後期	19世紀	和州長谷寺施印	130020150300
版-065	十一面観音像(長谷寺式)	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	91.0	37.3	江戸時代後期	19世紀	和州長谷寺施印	130020150400
版-066	釈迦如来文殊弥勒像(授戒本 尊)	森田易信	紙本木版	まくり	1枚	129.0	59.6	江戸時代後期	19世紀	和州長谷寺能満院施印	130020052500
版-067	加行本尊并両大師像袋	森田易信	紙本木版	袋	1枚	29.5	12.7	江戸時代後期	19世紀	和州長谷寺能満院施印	130021051300

G: 有憲海所蔵印版画											
版-068	当麻曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	57.6	46.2	江戸時代後期	19世紀	和州当麻寺施印(憲海印3)	130020066400
版-069	真言八祖図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	49.1	25.5	江戸時代後期	19世紀	讃州印山施印(能満院印1)(無言蔵印5)	130020740600
版-070	天神像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	96.0	29.2	文政元年	1818	菅原長親氏施印(無言蔵印5)	130020632300
版-071	辨才天像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	94.4	39.7	江戸時代後期	19世紀	奥州金華山施印(無言蔵印6)(朱文額形方印:「日本最初金華山/聖武皇帝勅願所」)	130020382800
版-072	地藏菩薩像	作者不詳	紙本木版	裏打	1枚	105.5	29.1	江戸時代後期	19世紀	河州現光寺施印(高野山圓通寺本)(無言蔵印7)	130020250800
版-073	釈迦親手華判梵書唵字讚	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	66.0	27.9	明和7年	1770	豊後白杵多福寺施印(無言蔵印6)	130021000200
版-074	理趣経曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	折本	1冊	32.0	15.2	江戸時代後期	19世紀	和州高野山補陀洛院施印(無言蔵印6)	130020011200
版-075	承陽大師希玄道元像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	46.0	17.0	江戸時代後期	19世紀	(無言蔵印1)(能満院印6)	130020839903
版-076	宝珠曼荼羅図	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	59.3	33.3	江戸時代後期	19世紀	(無言蔵印6)	130020033900
版-077	随求曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	36.0	37.5	江戸時代後期	19世紀	(無言蔵印6)	130020040400
版-078	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	12.0	26.0	江戸時代後期	19世紀	(無言蔵印6)	130020842600
版-079	宝篋印塔図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	90.1	38.9	江戸時代後期	19世紀	(無言蔵印6)	130021032000
H: 有能満院所蔵印版画											
版-080	某僧像(持拈子)	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	39.6	14.6	江戸時代後期	19世紀	智照施印(能満院印1)(朱文朱方印:「智照」「佛瀆僧賓」)	130020833400
版-081	某僧像(定印)	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	39.6	14.6	江戸時代後期	19世紀	播州大洞施印(能満院印1)	130020833300
版-082	当麻曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	59.5	44.2	文久3年	1863	和州当麻寺施印(能満院印1)	130020066500

版-083	当麻曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	69.2	44.3	文久3年	1863	和州当麻寺施印(能満院印1)	130020066600
版-084	如来荒神像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	94.0	41.1	江戸時代後期	19世紀	(能満院印1)	130020440200
版-085	承陽大師希玄道元像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	103.0	32.5	江戸時代後期	19世紀	(能満院印1)	130020831200
版-086	釈迦達磨道元像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	40.2	28.0	江戸時代後期	19世紀	(能満院印1)	130020831300
版-087	承陽大師希玄道元像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	109.1	41.0	江戸時代後期	19世紀	(能満院印1)	130020832900
版-088	某僧像(持如意・半身)	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	42.5	21.0	江戸時代後期	19世紀	(能満院印1)	130020839901
版-089	某僧像(持如意・半身)	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	28.3	14.3	江戸時代後期	19世紀	(能満院印1)	130020839902
I: その他有端書版画											
版-090	阿弥陀経变相図	森田易信	紙本木版	裏打	1枚	134.5	61.7	嘉永元年	1848	蝦夷善光寺施印(裏書)	130020066700
版-091	五趣生死輪図	姉崎織江	紙本木版	まくり	1枚	134.2	61.3	嘉永3年	1850	姉崎織江版(裏書)	130020690100
版-092	太上秘法鎮宅靈符	作者不詳	紙本木版	裏打	1枚	113.0	30.0	寛政12年	1800	石龍子施印(不明印3箇)(裏書)	130020614000
版-093	金剛界種字曼荼羅図	原在中	紙本木版	まくり	1枚	47.1	46.0	江戸時代後期	19世紀	京都阿弥陀寺施印(原画飲光)(裏書)	130020012100
版-094	胎藏界種字曼荼羅図	原在中	紙本木版	まくり	1枚	48.0	46.0	江戸時代後期	19世紀	京都阿弥陀寺施印(原画飲光)(裏書)	130020012200
版-095	牛頭天王歳徳八将神像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	65.5	30.3	江戸時代後期	19世紀	井筒屋藤兵版(裏書)	130020460400
版-096	牛頭天王像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	60.0	33.4	江戸時代後期	19世紀	井筒屋藤兵版(端書)	130020460300
版-097	大黒天像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	87.2	31.7	江戸時代後期	19世紀	会津恵日寺施印(端書)	130020411100
版-098	愛宕権現像	作者不詳	紙本木版	裏打	1枚	98.9	41.8	江戸時代後期	19世紀	京都愛宕山施印(裏書)	130020550400
版-099	千手観音像	作者不詳	紙本木版	裏打	1枚	67.8	30.6	嘉永元年	1848	京都清水寺施印(裏書)	130020160600
版-100	如来荒神像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	82.5	29.6	江戸時代後期	19世紀	摂州清澄寺施印(端書)	130020441200
版-101	天神像	作者不詳	紙本木版	裏打	1枚	92.8	43.4	江戸時代後期	19世紀	和州与喜天神施印(裏書)	130020632700
版-102	釈迦弥勒十六羅漢像	作者不詳	紙本木版	裏打	1枚	73.0	34.0	江戸時代後期	19世紀	(端書)	130020056700

版-103	青面金剛像	作者不詳	紙本木版	裏打	1枚	65.4	30.3	江戸時代後期	19世紀	(端書)	130020481000
版-104	太上秘法鎮宅靈符	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	103.5	61.8	江戸時代後期	19世紀	(下総千葉妙見寺より入手)(端書)	130020613900
版-105	真言密宗安心曼荼羅図(念珠図)	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	35.7	26.4	江戸時代後期	19世紀	(端書)	130021000800
J:無刊記絵師系下絵版画											
版-106	地藏菩薩像	円山応挙	紙本木版	裏打	1枚	60.5	27.5	江戸時代後期	19世紀	(原画円山応挙)	130020250100
版-107	釈迦十六羅漢図	山口城照	紙本木版	まくり	1枚	32.0	19.7	江戸時代後期	19世紀		130020056500
版-108	地藏菩薩像	杜多文雄	紙本木版	まくり	1枚	36.0	23.8	江戸時代後期	19世紀		130020250700
版-109	十三仏図	長谷川等鶴	紙本木版	まくり	1枚	102.7	41.6	嘉永2年	1849	(版下長谷川等鶴画, 版元中村善哉より天王寺屋へ)	130020293800
版-110	地藏菩薩像	冷泉為恭	紙本木版	まくり	1枚	112.3	40.8	嘉永7年	1854		130020250900
K:僧侶施印版画											
版-111	光明真言字輪曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	96.2	46.0	江戸時代後期	19世紀	慈光施印(原画以空)	130020030700
版-112	弘法大師十大弟子像并然慧像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	103.7	44.6	天明3年	1783	月心人施印	130020762101
版-113	弘法大師十大弟子像并然慧像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	103.7	44.6	天明3年	1783	月心人施印	130020762102
版-114	弘法大師空海像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	32.2	16.1	明治時代	19世紀	志州円隆施印	130020754201
版-115	弘法大師空海像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	32.2	16.1	明治時代	19世紀	志州円隆施印	130020754202
版-116	弘法大師空海像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	32.3	16.1	明治時代	19世紀	志州円隆施印	130020754301
版-117	弘法大師空海像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	32.3	16.1	明治時代	19世紀	志州円隆施印	130020754302
版-118	弘法大師空海像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	32.3	16.1	明治時代	19世紀	志州円隆施印	130020754303
版-119	弘法大師空海像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	32.3	16.1	明治時代	19世紀	志州円隆施印	130020754304
版-120	興教大師覚鑿像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	112.0	44.2	明治11年	1878	志州円隆施印	130020782000
版-121	興教大師覚鑿像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	118.0	46.6	明治11年	1878	志州円隆施印	130020782600
版-122	烏枢洪摩明王像	原在中	紙本木版	まくり	1枚	68.9	36.7	江戸時代後期	19世紀	志州円隆施印	130020611300
版-123	阿弥陀来迎図	中西誠應	紙本木版	まくり	1枚	66.9	31.1	江戸時代後期	19世紀	清涼室施印	130020064000

版-124	毘沙門天像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	86.5	30.6	弘化3年	1846	勢州田山施印(原画唐版本)	130020361400
版-125	慈恵大師良源像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	61.2	47.2	弘化3年	1846	勢州田山施印	130020814300
版-126	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	112.0	52.0	万延2年	1861	定円施印(白文方印:「百河 禪房」「寥蒼」)	130020844901
版-127	法然像封紙	作者不詳	紙本木版一部 墨書	封紙	1枚	31.8	42.4	万延2年	1861	定円施印(中原より到来)	130020844902
版-128	童子経曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	46.2	21.3	江戸時代後期	19世紀	武州成身院元映施印	130020491000
版-129	信暁曇藏像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	58.0	31.5	嘉永7年	1854	施印(81歳寿像)	130020847900
L:京都社寺施印版画											
版-130	地藏菩薩像	作者不詳	紙本木版	裏打	1枚	26.2	9.0	明治時代	19世紀	京都花園要地藏施印(不明 印1箇)	130020250200
版-131	聖徳太子像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	32.5	13.6	江戸時代後期	19世紀	京都広隆寺施印	130020701401
版-132	聖徳太子像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	32.5	13.6	江戸時代後期	19世紀	京都広隆寺施印	130020701402
版-133	聖徳太子像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	32.5	13.6	江戸時代後期	19世紀	京都広隆寺施印	130020701403
版-134	聖徳太子像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	32.5	13.6	江戸時代後期	19世紀	京都広隆寺施印	130020701404
版-135	聖徳太子像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	32.5	13.6	江戸時代後期	19世紀	京都広隆寺施印	130020701405
版-136	広隆寺刷物	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	31.3	5.2	江戸時代後期	19世紀	京都広隆寺施印	130021003100
版-137	青面金剛像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	24.7	11.3	江戸時代後期	19世紀	京都室町仏光寺庚申堂施印	130020481200
版-138	地藏菩薩像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	15.5	8.0	江戸時代後期	19世紀	京都新徳寺・万年寺施印	130020255300
版-139	地藏菩薩像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	27.7	15.3	江戸時代後期	19世紀	京都壬生寺施印	130020250600
版-140	地藏菩薩像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	18.8	10.2	江戸時代後期	19世紀	京都壬生寺施印	130020254700
版-141	准胝観音像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	15.7	8.1	江戸時代後期	19世紀	京都新徳寺施印	130020613400
版-142	千手観音二天王像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	24.0	15.9	江戸時代後期	19世紀	京都清水寺施印	130020160801
版-143	千手観音二天王像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	24.0	15.9	江戸時代後期	19世紀	京都清水寺施印	130020160802
版-144	大随求菩薩像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	19.9	15.6	江戸時代後期	19世紀	京都清水寺慈心院施印	130020281700

版-145	五大虚空蔵菩薩像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	39.0	28.0	江戸時代後期	19世紀	京都東寺観智院施印	130020261300
版-146	釈迦涅槃図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	46.6	31.0	江戸時代後期	19世紀	京都東福寺施印	130020055901
版-147	釈迦涅槃図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	46.6	31.0	江戸時代後期	19世紀	京都東福寺施印	130020055902
版-148	毘沙門天吉祥天善膩師像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	27.3	9.4	江戸時代後期	19世紀	京都東福寺北谷毘沙門堂施印	130020360300
版-149	薬師三尊十二神将像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	27.6	20.1	江戸時代後期	19世紀	京都平愈寺施印	130020070800
M: 諸国社寺施印版画											
版-150	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	36.5	15.3	江戸時代後期	19世紀	奥州往生寺施印	130020844100
版-151	大黒天像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	25.8	17.2	江戸時代後期	19世紀	会津恵日寺施印	130020411000
版-152	馬頭観音像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	29.5	16.4	江戸時代後期	19世紀	会津木流観音寺施印(不明印1箇)	130020190400
版-153	妙海禅尼像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	66.2	29.6	江戸時代後期	19世紀	紀州大日寺施印	130020872700
版-154	三井寺梵鐘図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.8	34.9	江戸時代後期	19世紀	江州三井寺施印	130021034600
版-155	阿弥陀二十五菩薩来迎図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	66.6	31.6	江戸時代後期	19世紀	江州西教寺施印	130020066100
版-156	訶利帝母像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	27.1	11.5	江戸時代後期	19世紀	志州庫蔵寺施印	130020400400
版-157	十一面観音像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	31.3	15.2	明治時代	19世紀	志州正福寺施印	130020151800
版-158	十一面観音像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	31.3	15.2	明治時代	19世紀	志州正福寺施印	130020151900
版-159	十一面観音像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	31.3	15.2	明治時代	19世紀	志州正福寺施印	130020152000
版-160	十一面観音像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	31.3	15.2	明治時代	19世紀	志州正福寺施印	130020152100
版-161	十一面観音像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	31.3	15.2	明治時代	19世紀	志州正福寺施印	130020152200
版-162	十一面観音像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	31.3	15.2	明治時代	19世紀	志州正福寺施印	130020152300
版-163	十一面観音像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	31.3	15.2	明治時代	19世紀	志州正福寺施印	130020152400
版-164	十一面観音像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	31.3	15.2	明治時代	19世紀	志州正福寺施印	130020152500
版-165	十一面観音像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	31.3	15.2	明治時代	19世紀	志州正福寺施印	130020152600
版-166	十一面観音像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	31.3	15.2	明治時代	19世紀	志州正福寺施印	130020152700
版-167	十一面観音像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	31.3	15.2	明治時代	19世紀	志州正福寺施印	130020152800
版-168	十一面観音像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	31.3	15.2	明治時代	19世紀	志州正福寺施印	130020152900

版-169	十一面觀音像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	31.3	15.2	明治時代	19世紀	志州正福寺施印	130020153000
版-170	十一面觀音像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	31.3	15.2	明治時代	19世紀	志州正福寺施印	130020153100
版-171	十一面觀音像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	31.3	15.2	明治時代	19世紀	志州正福寺施印	130020153200
版-172	両躰十一面觀音像	作者不詳	紙本木版	綴	1帖(3紙)	26.7	35.7	江戸時代後期	19世紀	勢州田宮寺施印	130020151600
版-173	子安觀音像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	75.3	61.1	江戸時代後期	19世紀	勢州觀音寺施印	130020241000
版-174	聖徳太子像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	38.1	29.9	江戸時代後期	19世紀	摂州四天王寺施印	130020701900
版-175	弘法大師空海像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	38.0	17.0	江戸時代後期	19世紀	摂州大日寺施印	130020754000
版-176	聖觀音像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	27.0	17.1	江戸時代後期	19世紀	武州安樂寺施印	130020141100
版-177	不空絹索觀音像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	17.5	8.0	江戸時代後期	19世紀	和州興福寺南円堂施印	130020170200
版-178	三面大黒天像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	56.5	21.5	江戸時代後期	19世紀	和州高野山金剛峯寺施印	130020410100
版-179	弘法大師空海像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	60.0	20.6	江戸時代後期	19世紀	和州高野山金剛峯寺灯籠堂施印	130020753400
版-180	馬鳴菩薩像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	53.2	67.5	江戸時代後期	19世紀	和州高野山清浄心院施印	130020500400
版-181	天神像	堀川興教	紙本木版	裏打	1枚	56.6	33.4	江戸時代後期	19世紀	玉田施印	130020871200
版-182	天神像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	34.0	14.5	弘化2年	1845	示水施印	130020630400
版-183	天神像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.7	14.3	弘化2年	1845	示水施印	130020632500
版-184	地藏菩薩像	作者不詳	紙本木版	裏打	1枚	27.7	11.6	江戸時代後期	19世紀	駿州如水施印	130020250300
版-185	釈迦十六羅漢図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	37.2	16.0	江戸時代後期	19世紀	信州丸山施印	130020860800
N:無刊記版画											
版-186	善導像	作者不詳	紙本木版一部著彩	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843201
版-187	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843202
版-188	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843203
版-189	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843204
版-190	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843205
版-191	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843206

版-192	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843207
版-193	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843208
版-194	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843209
版-195	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843210
版-196	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843211
版-197	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843212
版-198	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843213
版-199	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843214
版-200	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843215
版-201	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843216
版-202	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843217
版-203	善導像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843218
版-204	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版一部 著彩	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843219
版-205	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843220
版-206	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843221
版-207	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843222
版-208	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843223
版-209	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843224
版-210	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843225
版-211	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843226
版-212	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843227
版-213	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843228
版-214	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843229
版-215	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版一部 著彩	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843230
版-216	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版一部 著彩	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843231

版-217	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843232
版-218	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.0	15.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括	130020843233
版-219	善導法然像封紙	作者不詳	紙本木版	封紙	1枚	24.8	36.5	江戸時代後期	19世紀	186-219は一括(不明印1箇)	130020843234
版-220	胎蔵界種子曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	44.3	41.6	江戸時代後期	19世紀		130020010301
版-221	金剛界種子曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	44.4	41.8	江戸時代後期	19世紀		130020010302
版-222	理趣経曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	67.2	55.5	江戸時代後期	19世紀		130020011000
版-223	両界種字曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	55.5	33.5	江戸時代後期	19世紀		130020012300
版-224	宝珠曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	65.2	38.6	江戸時代後期	19世紀		130020033800
版-225	阿弥陀三尊像(善光寺式)	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	41.1	30.4	江戸時代後期	19世紀		130020067400
版-226	金剛界大日如来像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	26.3	12.7	明治時代	19世紀		130020091401
版-227	金剛界大日如来像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	26.3	12.7	明治時代	19世紀		130020091402
版-228	普賢延命菩薩像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	68.2	30.0	江戸時代後期	19世紀	(不明印1箇)	130020112000
版-229	普賢延命菩薩像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	45.2	20.2	江戸時代後期	19世紀		130020112100
版-230	准胝観音像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	33.5	20.2	江戸時代後期	19世紀		130020201400
版-231	地蔵菩薩像	作者不詳	紙本木版	裏打	1枚	65.8	31.3	江戸時代後期	19世紀		130020250400
版-232	地蔵菩薩六道図	作者不詳	紙本木版	裏打	1枚	67.5	31.0	江戸時代後期	19世紀		130020251100
版-233	十三仏図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	63.5	30.6	江戸時代後期	19世紀		130020292100
版-234	十三仏図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	66.7	29.2	江戸時代後期	19世紀		130020293900
版-235	不動明王像(黄不動)	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	97.3	42.3	江戸時代後期	19世紀		130020304500
版-236	不動明王像(黄不動)	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	97.6	42.6	江戸時代後期	19世紀		130020306900
版-237	不動明王二童子像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	27.0	14.8	江戸時代後期	19世紀		130020307200
版-238	辨才天像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	36.2	16.3	江戸時代後期	19世紀		130020382900
版-239	十二天図(右)	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	107.0	40.3	江戸時代後期	19世紀	239-240は一括	130020420701
版-240	十二天図(左)	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	107.0	40.3	江戸時代後期	19世紀	239-240は一括	130020420702
版-241	日天像	作者不詳	紙本木版	裏打	1枚	132.5	58.5	江戸時代後期	19世紀		130020421300

版-242	青面金剛像	作者不詳	紙本木版一部 著彩	まくり	1枚	67.5	30.8	江戸時代後期	19世紀		130020480900
版-243	青面金剛像	作者不詳	紙本木版	裏打	1枚	96.3	43.5	江戸時代後期	19世紀		130020481100
版-244	烏枢洪摩明王像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	55.3	39.3	江戸時代後期	19世紀		130020611200
版-245	秋葉権現像	作者不詳	紙本木版	裏打	1枚	30.2	13.0	江戸時代後期	19世紀	(不明印2箇所)	130020612200
版-246	蓬萊神仙図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	27.5	76.3	江戸時代後期	19世紀		130020612300
版-247	蓬萊神仙図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	64.0	27.1	江戸時代後期	19世紀		130020612400
版-248	歳徳八将神像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	59.7	29.7	江戸時代後期	19世紀		130020612700
版-249	稻荷明神像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	24.4	13.8	江戸時代後期	19世紀		130020620900
版-250	天神像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	112.0	30.0	江戸時代後期	19世紀		130020630300
版-251	渡唐天神像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	63.9	17.5	江戸時代後期	19世紀		130020632800
版-252	出世大黒天像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	12.8	9.2	江戸時代後期	19世紀		130020642701
版-253	出世大黒天像封紙	作者不詳	紙本木版	封紙	1枚	22.3	28.9	江戸時代後期	19世紀		130020642702
版-254	聖徳太子像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	36.5	15.1	江戸時代後期	19世紀		130020700200
版-255	聖徳太子像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	36.5	33.8	江戸時代後期	19世紀		130020701200
版-256	聖徳太子像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	48.8	36.4	江戸時代後期	19世紀		130020702300
版-257	役行者像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	53.7	26.7	江戸時代後期	19世紀		130020710300
版-258	弘法大師空海像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	66.2	46.0	江戸時代後期	19世紀		130020753600
版-259	弘法大師空海像	作者不詳	紙本木版著彩	まくり	1枚	24.5	16.0	江戸時代後期	19世紀		130020753800
版-260	弘法大師行状曼荼羅図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	64.7	43.8	江戸時代後期	19世紀		130020755501
版-261	法光大師真雅像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	59.2	28.2	文政11年	1828		130020763700
版-262	興教大師覚鑿像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	42.9	37.6	明治時代	19世紀		130020781700
版-263	興教大師覚鑿像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	44.6	37.6	明治時代	19世紀		130020781800
版-264	興教大師覚鑿像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	66.1	63.4	明治時代	19世紀		130020782100
版-265	興教大師覚鑿像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	79.8	62.9	明治時代	19世紀		130020782200
版-266	興教大師覚鑿像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	86.0	46.4	明治時代	19世紀		130020782300
版-267	法然(円光大師源空)像	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	30.2	14.5	江戸時代後期	19世紀		130020844400

版-268	西国三十三所靈場	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	37.9	19.8	江戸時代後期	19世紀		130021020200
版-269	宝篋印塔図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	40.5	28.0	江戸時代後期	19世紀		130021031900
O: 高僧伝記版本											
版-270	高野山清浄心院廿日大師略縁起	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	24.9	34.3	江戸時代後期	19世紀	和州高野山清浄院施印	130020755600
版-271	法然上人絵伝	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	53.2	30.0	江戸時代後期	19世紀		130020845101
版-272	法然上人絵伝	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	53.2	30.0	江戸時代後期	19世紀		130020845102
版-273	法然上人絵伝	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	53.2	30.0	江戸時代後期	19世紀		130020845103
版-274	法然上人絵伝	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	53.2	30.0	江戸時代後期	19世紀		130020845104
版-275	乙賣寺舍利縁起図	作者不詳	紙本石版	まくり	1枚	30.2	40.5	明治26年	1893	新写石版社印行	130021000500
P: 境内図版本											
版-276	巖島社頭図	作者不詳	紙本木版	まくり	1枚	29.8	44.0	江戸時代後期	19世紀	宮島西岩國屋廻廊店重兵衛板	130021020100
版-277	長谷寺図	中和	紙本木版	まくり	1枚	35.3	48.6	江戸時代後期	19世紀	平安法橋中和画	130021020300

別表3 智山書庫等憲海関係書籍文書目録

別表3 智山書庫等憲海関係書籍文書目録										
					<p>注 *本目録は「智山書庫」「金剛寺文書」「自在院資料」「長谷寺文書」「川島家文書」における憲海関係書籍及び文書を一覧としたものである。各項目の凡例は下記のとおり。</p> <p>(通番) 本目録における目録番号。本論において()書で示される。 (制作年) 月/日に小文字の「u」が付される場合は閏月を示す。 (関連地名) 原本の所在地または書写した場所などを示す。 (所蔵及び目録) “智山1-P”は『智山書庫所蔵目録第1巻』の掲載頁を著す。“智山2-P”は『智山書庫所蔵目録第2巻』の掲載頁を著す。“金剛寺”は『歴史資料館収蔵資料目録第21集』「金剛寺文書」の目録番号を示す。他の所蔵は記述に従う。</p>					
通番	名称	年号/日付		種別	員数	墨書等	書写者	関連地名	所蔵及び目録	
悉曇										
書-001	悉曇十不可大事	文化13年	1816	08閏/03	写本	1枚	文化十三丙子年閏八月初三日/於于豊山月輪院自當院主/悉曇御傳授之硯書写之/奥州會津釋沙門/世壽拾九歳/林岳憲海/天保五甲午年八月奉写得了/觀章/嘉永五壬子年師走廿五日夜奉写得了/本淨/三紙之内	憲海		川島家文書
書-002	梵文訳語部類集	天保3年	1832	03_/15	写本	2冊	(奥)天保三年壬辰三月十五日於河州葛城山高貴律寺写得之了 無言藏	無言藏	高貴寺	智山2-P332
書-003	梵学秘要篇	天保3年	1832	06_/20	写本	1卷1冊	(奥)天保三壬辰年六月二十日於和州龍門山菅生寺草之了	無言藏	菅生寺	智山2-P326
書-004	大悉曇章	天保4年	1833	04_/00	写本	1冊	(奥)永貞元年九月於大唐長安醴泉寺/日本國學法弟子空海謹書/延喜五年五月五日神日奏記了/天養元年十二月四日於光明山以/神日律師本奉書寫了/大法師惠什/年八十五/承久元年七月廿日於西山石水院/以件本奉書寫了/禪念沙門高辨/文政十年九月廿一日於梅尾山十無盡院/以明恵上人御本奉傳受書寫了/求法弟子無言藏/歳次癸巳天保二二年卯月於會陽/福聚山自在院授與之則貞竟/ <梵字:8字>	無言藏	福聚山自在院	自在院蔵本

書-005	梵本普賢行願讚	天保6年	1835	09_/09	写本	1冊	(奥)天保六乙未年九月九日於陸奥会津総鎮守八角宮社喜福精舎書了 小比丘無言藏」	無言藏	亀福院	智山2-P332
書-006	梵学宗要章	嘉永6年	1853	03_/00	刊本	1卷1冊	(刊記)于時嘉永六年癸丑三月 王城中真六角堂能滿院大願謹書刻」	大願	能滿院	智山2-P326
書-007	梵字胎藏曼陀羅諸尊名号	安政4年	1857	09_/00	写本	1冊	(奥)享保十四年九月二十六日於高野山新別所円通寺以無量寿院藏本謄写之畢 沙門覚勝/安政四年九月於王城中真六角堂能滿院 写之了 大願」	大願	能滿院	智山2-P329
書-008	梵本瑜伽課誦	安政6年	1859	09_/11	写本	3卷3冊	(奥)享保三戊戌年十一月十五日河南九華山藏版/安政六己未年九月十一日奉書写了 王城中真六角堂能滿院大願六十二」	大願	(能滿院)	智山2-P332
書-009	録外儀軌中梵字真言	安政7年	1860	03_/30	写本	1冊	(奥)以印版折經書写之了 安政庚申三月晦日初雷西方日 六角堂能滿院大願六十三」	大願	(能滿院)	智山2-P409
書-010	普通真言藏	明治17年	1883	01_/11	写本	5卷5冊	(奥)右普通真言藏從明治十六年末十月二十八日詣行村満福禪寺借寄松尾村仙城院藏中当本並大仏頂大隨求写書始半月逗留十一月十一日帰村昼夜精進書写苦辛終翌十七年申一月十一日写得了/于時明治十七年申一月十一日 王城中真六角堂能滿院大願和上弟子 沙門大成憲理五十六歳」	大成	満福寺	智山2-P278
書-011	高祖大師御請来梵本	天保3年	1832	04_/22	写本	2冊	(奥)天保三壬辰年四月二十二日於龍門山写得之了 小比丘無言藏」	無言藏	菅生寺	智山1-P205
声明										
書-012	佳水耳目言 (進流声明訣)	文政7年	1824	03_/00	写本	7卷7冊	(奥)文政七甲申年三月登于南山而入進流声明之門密隨如意輪寺弘栄老師請指南之余□於于南室院道場昼夜書写伝授了/御本紙一々各別分部類今恐紛亡私合七冊□□進流声明未資無言藏林岳憲海」	無言藏	高野山西谷如意輪寺	智山1-P471

書-013	東寺声明決疑抄	元治元年	1864	02_/22	写本	3卷1冊	(奥-下)本云 於和泉国家原寺西御堂書 写之卒爾之間老毛難見分可書直之如意輪 寺宥信/文政七甲申年三月二十三日於南 山西院谷南室院以如意輪寺弘榮老師御本 書写了重而 甲子二月二十二日諸南山ノ 古本於六角堂能滿院再写之了 大願/六 十七」	大願	能滿院	智山2-P165
伝授										
書-014	伝法灌頂諸作法 幸心	文政3年	1820	02_/20	写本	1冊	(奥)右諸加持五枚折紙文政三庚辰年於河 州髮切山慈光律寺伝受之御奉書写之了 無言藏」	無言藏	慈光寺	智山2-P148
書-015	曼陀羅供并汀庭儀式	文政10年	1827	03_/28	写本	1冊	(奥)右三宝院殿御灌頂内道場等承仕役勤 之自三月十三日夕御印可了同二十四日ヨ リ出勤旅宿所寺中六坊之内金蓮院ニ仮住 ス予教授僧正之徒僧役勤之初後夜等委曲 奉拝聴了 于時文政十年丁亥三月二十八 日也 無言藏写得了」	無言藏	醍醐寺三寶院	智山2-P343
書-016	伝法灌頂記	天保11年	1840	05_/17	写本	1冊	(奥)師主説云二卷尊勝軌可見之云云/ (中略)/天保十一庚子年五月十七日写得 了 無言藏」	無言藏	?	智山2-P140
書-017	勸流伝法灌頂三卷式全	嘉永2年	1849	08_/25	写本	1冊	(奥)嘉永二年己酉八月二十五日於皇都室 町通高辻上ル山王町書写了 無言藏」	無言藏	山王寺	智山1-P122
書-018	十八道念誦梵本	天保3年	1832	04_/00	写本	1冊	(奥)天保三年壬辰初夏中旬於龍門山修行 寺蘭若令書写校合弟子淳如房憲暢授与之 小比丘無言藏/(中略)/右十八道念誦梵 本者先師無言藏大願書写校合御自筆也依 <梵字2字>隆真師結願書写了 明治二十 年丁亥一月七日<梵字6字>六十歳/敬刻 此十八道念誦梵本一卷以行天下伏此願開 覺花菩提果者摸刻沙門隆真 執筆沙門大 成」	無言藏	菅生寺	智山1-P384
書-019	十八道念誦梵本行法真言集	天保3年	1832	04_/00	写本	1冊	(奥)天保三年壬辰初夏中旬於龍門山修行 寺蘭若令書写校合弟子淳如房憲暢授与之 小比丘無言藏」	無言藏	菅生寺	智山1-P384
書-020	灌頂聲明集 初夜	文政8年	1825	07_/00	写本	1冊	(奥)文政八年己酉孟秋上旬傳法汀之日/ 為奉讚歎没駄達磨草案之了/進流聲明未 資無言藏憲海」	無言藏	(高野山)	金剛寺-537

書-021	兩部讚草帙／初夜金剛界／後夜胎藏界	天保13年	1842		刊本	1冊	(版奥)右兩部讚草帙者灌頂會讚頭之／順次曼荼羅供等取捨通用法則／隨阿闍梨之所傳天保五年甲午／高祖大師一千年爲報恩集記畢／于時新義開山興教大師七百年／正當天保十三年壬寅夏安居中／書写彫刻記 聲明業進流末葉無言藏」	無言藏	?	自在院藏本
書-022	金剛界胎藏法念誦真言校合記	天保2年	1831	04_/22	写本	1冊	(奥-胎藏法)明和戊子六月十一日於京師一校／右以草本写得之了 無言藏 天保二年辛卯四月二十二日於竜門山菅生寺請葛城山御本」	無言藏	菅生寺	智山1-P248
書-023	幸心兩部合行法	文久2年	1862	04_/08	写本	1冊	(奥)天保二年辛卯五月十八日写得之了重而書／文久二年壬戌四月八日六角堂能滿院大願六十五」	大願	(能滿院)	智山1-P205
書-024	金剛界念誦	天保14年	1843	06_/20	写本	2冊	(奥-下)天保十四年夏六月二十一日於会津八角宮第三転書写之了 比丘無言藏」	無言藏	亀福院	智山1-P249
書-025	胎藏法真言	天保14年	1843	07_/12	写本	1冊	(奥)天保十四年癸卯七月十二日於会津八角宮喜福精舎奉集写了 比丘無言藏」	無言藏	亀福院	智山2-P075
書-026	大悲胎藏念誦法	天保14年	1843	07_/25	写本	2冊	(奥)天保十四癸七月二十五日校写私記了比丘無言藏」	無言藏	?	智山2-P096
書-027	不動護摩私記	天保13年	1842	03_/29	写本	1冊	(奥)天保十三壬寅年三月二十九日於羽州永居郷亀岡大聖寺伝授砌持参本無之故書写之了 無言藏」	無言藏	出羽国大聖寺	智山2-P283
書-028	勸流息災護摩次第	嘉永2年	1849	04_/19	写本	1冊	(奥)嘉永二年己酉卯月十九日梅尾山經庫之本 東第十二箱 方便智院朱印右表紙御修復依令奉修補了因之早々写得之了無言藏皇都山王寺寓中」	無言藏	(山王寺)	智山1-P122
書-029	印融二十四帖並後記	嘉永元年	1848	08_/10	写本	2卷2冊	(奥)于嘉永元年戊申八月十日以戒龍師書本本書之原本竪四寸横三寸薄用紙小本二十九帖有之今私改之為件本二冊偏散失如此 於皇都室町山王町山王密寺 寓居沙門無言藏」	無言藏	山王寺	智山1-P057
諸尊法										
書-030	伝流次第集	文政12年	1829	07_/24	写本	9冊	(奥-北斗曼荼羅秘記他)安永元年六月二十一日使門生書写之訖 權僧正如室／(中略)／文政十二年七月二十四日以右御本書写之了 無言藏」	無言藏	?	智山2-P159

書-031	幸心 秘鈔	天保2年	1831	08_/09	写本	1冊	(奥)貞応元年九月十日於遍智院奉伝受了 ／(中略)／右以御本奉早写得了 天保二 年辛卯八月九日 無言藏	無言藏	?	智山1-P203
書-032	秘密諸儀軌	天保3年	1832	12_/09	写本	1冊	(奥)天保三壬辰年十二月九日以印板折本 写得之了 無言藏	無言藏	?	智山2-P258
書-033	録外儀軌中画像法	安政7年	1860	03_/20	写本	1冊	(奥)庚申三月二十日録外十三卷儀軌中拔 書 六角堂能満院大願六十三	大願	(能満院)	智山2-P409
書-034	諸菩薩部秘密儀軌 震十八	文久2年	1862	03_/06	写本	1冊	(奥)文久二年壬戌三月六日於王城中心六 角堂能満院写得之了 大願	大願	能満院	智山1-P453
書-035	大雲輪請雨經	文政10年	1827?	?	写本	1冊	(奥)御室心蓮院書写之畢 梵文以慧口護 阿闍梨自筆本梵漢並書之委悉校合了 求 法弟子無言藏	無言藏	仁和寺心蓮院	智山2-P001
書-036	清瀧肝腦神泉苑密	文政12年	1829	06_/25	写本	1冊	(奥)文政十二年丑六月二十五日於梅尾山 關伽井坊十無尽院一昼夜写得之了 本紙 定真上人筆甚虫入難見後日帰山而欲令清 書耳 無言藏大願	無言藏	高山寺十無尽 院	智山1-P477
書-037	請雨秘決	安政2年	1855	02_/28	写本	1冊	(奥)文政十二己丑年六月二十五日於梅尾 山關伽井坊伝受書写畢 無言藏大願／安 政二乙卯二月二十八日以匱紙稿写了追而 可清書之也	無言藏	高山寺關伽井 坊	智山1-P396
書-038	請雨經龍王名字	安政2年	1855	03_/08	写本	1卷1冊	(奥)建久九年之比以榮然公令清書 一老 比丘興然七十九／文政十三年三月日写得 之了 無言藏大願／安政二年乙卯三月八 日重写之了	無言藏	?	智山1-P396
書-039	天台善女龍王招請法・請雨法	安政6年	1859	07_/05	写本	1冊	(奥)安政六己未年七月五日 王城中真六 角堂能満院大願	大願	(能満院)	智山2-P134
書-040	金剛光焰止風雨密咒	天保3年	1832	10_/00	写本	1冊	(奥)以上十首以校合之本写之／亮榮 天 保三年辰十月日 無言藏	無言藏	?	自在院藏本
書-041	止風雨陀羅尼經 (金剛光焰止風 雨陀羅尼經)	万延元年	1860	05_/10	写本	1冊	(奥)辛丑歲高麗国大藏都監奉勅雕造／万 延元庚申五月十日以南山城上狛延命院儀 軌中一校了 六角堂大願	大願	(延命院)	智山1-P347
書-042	大孔雀明王經	文政13年	1830	06_/27	写本	1冊	(奥)右孔雀明經三卷以古写本奉書写之了 于時文政十三年庚寅六月廿七日於和州龍 門郷龍門山龍花台院菅生寺写得梵漢比校 再三了 声明業兼学沙門無言藏	無言藏	菅生寺	智山2-P002

書-043	如法尊勝法 勸流	嘉永4年	1851	01_/15	写本	1冊	(奥)右一帖勸流聖經也醍醐山報恩院御本写之了 嘉永四辛亥正月十五日無言藏」	無言藏	(醍醐寺報恩院)	智山2-P201
書-044	守護国界經念誦次第・持宝金剛念誦次第	文政6年	1823	12_/02	写本	1冊	(奥)文政六癸未年十二月二日於洛東智積院方丈請故僧正弘基御所持之本奉写之了 豊山留学积沙門林岳憲海」	憲海	智積院	智山1-P388
書-045	宝樓閣念誦次第 略法	嘉永3年	1850	04_/06	写本	1冊	(奥)嘉永三庚戌四月六日辰刻书写之了 無言藏」	無言藏	?	智山2-P307
書-046	仏頂尊陀羅尼	安政6年	1859	02_/19	写本	1卷1冊	(奥)安政六年己未二月十九日夜丑刻於王城中真六角堂能滿精舍以梅尾明恵上人御本奉写了 沙門大願(六十二歳) 授与雲道房憲伝」	大願	能滿院	智山2-P318
書-047	仏頂尊陀羅尼	安政7年	1860	09_/19	写本	1冊	(奥)万延元庚申九月十九日奉書写了 王城中心紫雲山頂法寺沙門大願六十三」	大願	(能滿院)	智山2-P318
書-048	誑羅婆俱舍念誦略次第	安政3年	1856	01_/18	写本	1冊	(奥)安政三丙辰正月十八日以梅尾山藏本一軸三十一紙写得之了 京六角堂能滿院大願五十九」	大願	(高山寺)	智山1-P132
書-049	仏眼仏母念誦次第	嘉永3年	1850	04_/05	写本	1冊	(奥)嘉永三年庚戌四月五日於山王寺書写了 無言藏」	無言藏	山王寺	智山2-P279
書-050	五種密儀軌	天保7年	1836	09_/05	写本	1冊	(奥)天保七申年九月五日奉写得了 小比丘無言藏」	無言藏	?	智山1-P226
書-051	安流八字文殊念誦法要	嘉永4年	1851	06_/14	写本	1冊	(奥)嘉永四年辛亥六月十四日於京六角能滿院書写一校了」	?	能滿院	智山1-P028
書-052	求闍持伊勢朝熊岳口説	文久元年	1861	11_/19	写本	1冊	(奥)文久元辛酉年十一月十九日此口決勢州到来仍早々写得了 王城中真紫雲山六角堂頂法寺内能滿院大願」	大願	(能滿院)	智山1-P157
書-053	伊勢朝熊求闍持作法	文久元年	1861	11_/30	写本	1冊	(奥)文久元辛酉年十一月三十日右本從勢州為一見到来仍而写得之又別有口決書半紙四十五丁書写了 王城中心六角堂能滿院 大願」	大願	(能滿院)	智山1-P031
書-054	大随求陀羅尼略句義	文政12年	1829	12_/06	写本	1冊	(奥)寛政戊午仲冬京師阿弥陀寺拜写 <梵字6字>/時文政十二己丑歲臘月六日為先師尊慶和上仏果書写以奉無言阿闍梨了如海和南」	海如	?	智山2-P070
書-055	随求大明王	天保6年	1835	08/27	写本	1冊	(奥)天保六乙未年八月二十七日於陸奥会津若松八角宮精舍奉書写 小比丘無言藏」	無言藏	龜福院	智山2-P220

書-056	隨求大明王	安政6年	1859	02_/13	写本	1冊	(奥)安政六年己未二月十三日於王城中真紫雲山頂法寺能滿院奉書写訖 沙門大願六十二歳」	大願	能滿院	智山2-P220
書-057	隨求大明王	安政6年	1859	03閏/11	写本	1冊	(奥)文政十三年庚寅閏三月十一日於梅尾山關伽井坊以右御本写得之重而安政六己未交写之了 大願六十二 王城中心六角堂能滿院」	大願	高山寺關伽井坊	智山2-P219
書-058	如意輪觀世音護摩法	嘉永7年	1854	07_/00	写本	1冊	(奥)嘉永七年甲寅七月 王城中真六角堂能滿院 大願草之了」	大願	? (能滿院)	智山2-P199
書-059	如法(不動愛染)勝軍地藏法	天保2年	1831	05_/18	写本	1冊	(奥)天保二年辛卯五月十八日写得之了 無言藏」	無言藏	?	智山2-P201
書-060	毘沙門天王經	文久2年	1862	01_/05	写本	1冊	(奥)文久二壬戌年正月五日節日以印板校合本写得了 王城中心六角堂能滿院大願六十五」	大願	(能滿院)	智山2-P230
書-061	摩訶吠室囉末那野提婆囉闍	安政2年	1855	11_/01	写本	1冊	(奥)安政二年乙卯十一月朔日右本写得之了 王城中真六角堂能滿院大願」	大願	(能滿院)	智山2-P338
書-062	十二天報恩經和訓	安政4年	1857	06_/26	写本	1冊	(奥)安政四丁巳六月二十六日夕口以諸学真影本誓集内写之了 王城中心六角堂能滿院大願六十」	大願	(能滿院)	智山1-P378
書-063	十二天報恩品護摩頌 (供養十二天威德天報恩品一卷)	万延元年	1860	03_/22	写本	1冊	(奥)安政七改元万延元年三月二十二日以録外印版本書写之了 六角堂能滿院大願六十三」	大願	(能滿院)	智山1-P378
書-064	摩利支天法	嘉永7年	1854	02_/05	写本	1冊	(奥)于時嘉永七甲寅二月五日 出羽莊内鶴ヶ岡龍覺寺宗賢法印依頼主命而異国軍船消除祈願仍而右天法申来早々書集了六角堂能滿院大願」	大願	(能滿院)	智山2-P341
書-065	大使咒法經並含光記	安政7年	1860	03閏/03	写本	1冊	(奥)延宝九天(辛酉)仲春日 經藏院住英信書写之/安政七庚申閏三月三日以上狛村延命院藏本写之 六角堂能滿院大願」	大願	(能滿院)	智山2-P011
書-066	常求利天女作法	天保3年	1832	05_/22	写本	1冊	(奥)天保三壬辰年五月二十二日奉書写了後日可有清書校合者也 無言藏」	無言藏	菅生寺	智山1-P398
書-067	大黒天和讚	嘉永5年	1852	08_/00	写本	1冊	(奥)嘉永五壬子年八月吉祥日 王城中真六角堂 紫雲山頂法寺中真言密宗能滿院」	?	能滿院	智山2-P006
書-068	大黒天神法	文久元年	1861	01_/24	写本	1冊	(奥)万延二年辛酉正月二十四日夜書写了王城中心六角堂頂法寺能滿院大願六十四」	大願	(能滿院)	智山2-P005

書-069	摩怛利神法	文政5年	1822	12_/28	写本	1冊	(奥)文政五壬午十二月二十八日以御本奉書写之了 林岳憲海	憲海	?	智山2-P338
書-070	八千枚荒神供	天保2年	1831	09_/12	写本	1冊	(奥)天保二年辛卯九月十二日写得之了 無言藏	無言藏	?	智山2-P218
書-071	青面金剛法	嘉永7年	1854	08_/12	写本	1冊	(奥)時嘉永七年甲寅八月十二日於王城中心六角堂能滿院大願草書之	大願	能滿院	智山1-P415
書-072	梅尾山伝授次第	文政11年	1828	07_/28	写本	1冊	(奥)于時文政十一年戊子七月二十八日於梅尾山十無尽院隨僧護阿闍梨奉伝授書写了 無言藏	無言藏	高山寺十無尽院	智山2-P168
書-073	瑜伽集要焰口施食儀	弘化2年	1845	02_/18	写本	1冊	(奥)弘化二乙巳年二月十八日於会津八角宮以藏經本写得之了	?	龜福院	智山2-P378
書-074	施諸餓鬼飲食及水法	文久2年	1862	08_/19	写本	1冊	(奥)以上尾州八事山興正寺諦忍著施餓鬼問弁二出 文久二壬戌年八月十九日六角能滿院大願	大願	(能滿院)	智山1-P479
諸作法										
書-076	諸雜集	天保3年	1832	08_/12	写本	1冊	(奥)時文政十一戊子仲冬中浣使慧澄仏子拝写焉一校了 <梵字4字>/天保三壬辰年八月十二日卯一点写得之了 無言藏	無言藏	?	智山1-P431
書-077	作法集雜記	天保4年	1833	02_/18	写本	1冊	(奥)天保四年癸巳二月十八日於江戸麻布六軒町不動院以真福寺弘賢阿闍梨所持古本書写了 無言藏	無言藏	麻布不動院	智山1-P279
書-078	御室方散華理趣三昧法則	安政6年	1859	02_/02	写本	1冊	(奥)安政六年己未二月二日御室書写小本清書之了王城中心六角堂 能滿院 大願六十二	大願	(仁和寺)	智山1-P089
書-079	天台 例講法則 三十三卷經千卷心經	安政7年	1860	03閏/16	写本	1冊	(奥)万延元庚申閏三月十六日以下鴨松林院亮薰師本写之了 六角堂能滿院大願六十三	大願	(能滿院)	智山2-P407
書-080	墓所地取作法	文久元年	1861	03_/12	写本	1冊	(奥)文久元年辛酉三月十二日書写了 大願	大願	?	智山2-P312
諸經軌										
書-081	大宝積經	天保5年	1834	04_/11	写本	3卷1冊	(奥-卷56)于時天保五甲午年卯月十一日奉写得之了 右五十五卷以自在院藏經之本校書 無言藏	無言藏	?	智山2-P103

書-082	八角宮喜福院無言藏書刻 金剛 壽命陀羅尼經	天保7年	1836	08_/00	刊本	1冊	(版銘)日日受持此經者/宿緣業障忽消滅 /無病患更增壽命/諸願圓滿皆言祥」 (刊記)秘密高祖弘法大師和讚講中 印 施」奥州會津總鎮守八角宮社中 喜福院 現住/小比丘無言藏敬書」天保七丙申年 八月吉辰」(墨印)會陽/森川昌茂/施 經」	無言藏	龜福院	金剛寺-162
書-083	金剛壽命陀羅尼經	天保7年	1836	08_/00	刊本	1冊	(版銘)日日受持此經者/宿緣業障忽消滅 /無病患更增壽命/諸願圓滿皆言祥」 (刊記)秘密高祖弘法大師和讚講中 印 施」奥州會津總鎮守八角宮社中 喜福院 現住/小比丘無言藏敬書」天保七丙申年 八月吉辰」	無言藏	龜福院	金剛寺-163
書-084	科註 佛遺教經 施印	天保12年	1841	02_/00	刊本	1冊	(刊記)天保十二辛丑二月日<梵字5>」	無言藏		自在院藏本
書-085	金剛頂蓮華部大儀軌	天保14年	1843	05_/28	写本	1冊	(奥)天保十四癸卯五月二十八日書写了 比丘無言藏」	無言藏	?	智山2-P423
書-086	最勝王經陀羅尼	嘉永2年	1849	01_/00	写本	1冊	(奥)嘉永二己酉正月梅尾山写本写之了 無言藏」	無言藏	(高山寺)	智山1-P269
書-087	金光明最勝王經 六	嘉永3年	1850	07_/25	写本	1冊	(奥)文政十三年卯月十四日於南都東大寺 真言院書写之/時嘉永三年庚戌七月二十 五日於皇都室町山王寺重而書写了 無言 藏」	無言藏	山王寺	智山2-P423
書-088	宝篋印陀羅尼經	嘉永4年	1851	04_/30	写本	1冊	(奥)嘉永四年辛亥卯三十日於京都山王寺 以亮汰鈔三卷書写之了追而可遂清書者也 沙門無言藏」	無言藏	山王寺	智山2-P304
書-089	改訂博士/科註新版 佛遺教經	安政5年	1858	01_/25	刊本	1冊	(刊記)于時安政五戊午年正月二十五日 皇都弘所 伏見街道五條南エ入ル町藤井 文敬堂/寺町通五條北エ入ル町 山城屋 文政堂」	能滿院大 願		智山2-P281
書-090	華嚴經 般若訳 [大方広仏華 嚴經卷第十五]	安政5年	1858	12_/07	写本	1冊	(奥)安政五戊午十二月七日以黄蘗山印本 書写之了 能滿院大願六十一」	大願	(黄蘗山万福 寺)	智山1-P162
書-091	大随求陀羅尼	安政7年	1860	01_/??	刊本	1冊	(版奥)右原本梅尾山高山寺經庫現在嘉祿 二年丙戌喜海上人真筆也」安政七年庚申 正月吉祥日 王城中心六角堂頂法寺能滿 院大願敬書」	能滿院大 願	能滿院	自在院藏本

書-092	大仏頂陀羅尼	安政7年	1860	01_/??	刊本	1冊		能滿院大願	能滿院	自在院藏本
書-093	安像三昧儀軌經	万延元年	1860	04_/26	写本	1冊	(奥)万延元年庚申四月二十六日極晴天書写了 王城中心六角堂 能滿院大願六十三」	大願	(能滿院)	智山1-P024
書-094	聖觀自在菩薩心真言瑜伽觀行儀軌	文久2年	1862	01_/12	写本	1冊	(奥)文久二壬戌年正月十二日於王城中心六角堂能滿院大願六十五」	大願	(能滿院)	智山1-P397
書-095	陀羅尼集經	文久2年	1862	02_/05	写本	4卷2冊	(奥)文久二年壬戌二月五日写得之了 王城中心六角堂能滿院大願六十五」	大願	(能滿院)	智山2-P111
書-096	金剛頂瑜伽他化自在理趣會普賢修行念誦儀軌 他	文久2年	1862	02_/28	写本	1冊	(奥)文久二年壬戌二月二十八日王城中心六角堂能滿院 大願六十五」	大願	(能滿院)	智山1-P259
書-097	成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌	文久2年	1862	03_/10	写本	1冊	(奥)文久二年壬戌三月十日於六角堂能滿院書写了 大願」	大願	能滿院	智山1-P406
諸章疏										
書-098	大疏第三重	文化13年	1816	02_/18	写本	5冊	(第三奥)于時文化十三丙子春二月十八日於豐嶺珠光院随住ノ之砌以快道公御本校写之了<梵字:2字>憲海」于時文政十年丁亥秋七月四日於豐嶺方丈写之了ノ釈沙門榮山主」	憲海	長谷寺珠光院	金剛寺-202
書-099	論草談判 快道記	文化13年	1816	05_/02	写本	1冊	(奥)文化十三丙子年仲夏五月初二日寓豐嶺珠光庵之砌以ノ快師御校記之本書写此一巻畢 奥州會陽釈沙門林岳憲海」文政九年丙戌年九月十有三日書写之畢會津沙門慈文榮弘」	憲海	長谷寺珠光院	金剛寺-280
書-100	大日經大讚・悉地出現品第六阿利沙・大師所撰書刊定目錄	文政10年	1827	06閏/20	写本	1冊	(奥)文政十年丁亥閏六月二十日於御室心蓮院以梅尾山十無尽院本写得之了 無言藏憲海」	無言藏	仁和寺心蓮院	智山2-P092
書-101	摧勝述記	文政12年	1829	09_/13	写本	1卷1冊	(奥)右一冊義宝法印製作當時可在之處未能披閱之然從根來寺或客僧持來之間則以他筆写留者也殊自流之祖師(從先師三代前)之著述自然之到来随喜之余旁令書之矣写本云文字云文言不審繁多之上此筆者又以外之訛謬多之俊後日求正本可書之而已 于時永祿六年林鐘二十一日 法印堯運七十有六ノ(中略)ノ文政十二年己丑九月十三日於洛南竹田安樂寿院明照院以智積院山内之本写得之了 無言藏」	無言藏	安樂寿院明照院	智山1-P270

書-102	阿字秘釈	嘉永4年	1851	11_/17	写本	1冊	(奥)嘉永四年亥十一月十七日於京六角能満院 以醍醐山報恩院蔵古本写得之了 無言蔵」	無言蔵	能満院	智山1-P007
書-103	即身成仏義	安政4年	1857	12_/01	刊本	1冊	(版奥)承応二年二月中澁 高野山宝光院第二十四世末葉 心盛/謹書」時安政四年丁巳十二月一日夜奉写校合訖偏為令法久住報恩謝徳也/王城中心 雲山六角堂頂法寺能満院大願謹記」書肆 京都寺町五条上ル所 額田正三郎版」	大願	? (能満院)	智山1-P492
書-104	科註 立世阿毘曇論日月行品	安政5年	1858	08_/09	写本	1冊	(奥)右印本八行十二字二十丁一冊也 安政五戊午八月九日夜書写了 能満院大願六十一」	大願	(能満院)	智山2-P397
書-105	一乗戒壇院雜記	万延元年	1860	03_/27	写本	1卷1冊	(奥)安永五年丙申十月二十二日 一乗沙弥敬光謹記/(中略)/近頃三聖影版彩色之頼時々有之仍為弟子等心得早々遂書写了/安政七庚申三月二十七日夕方 六角堂能満院 大願六十三」	大願	(能満院)	智山1-P033
書-106	金剛般若經驗益集	文久元年	1861	10_/29	写本	1冊	(奥)文久元年辛酉十月二十九日夜丑ノ上刻書写了 六角堂能満院 大願六十四」	大願	(能満院)	智山1-P260
書-107	毘廬遮那成仏神變加持經義釈	元治元年	1864	05_/13	写本	2冊	(奥)元治元年甲申五月十三日右一軸彼社人松田新兵衛持来写得了 六角堂能満院大願六十七」	大願	(能満院)	智山2-P270
書-108	大元大藏勘同総録	天保2年	1831	04_/00	写本	1冊	(奥)天保二年辛卯孟夏中旬於竜門山菅生寺以葛城山高貴律寺御本写得此一巻了 無言蔵」	無言蔵	菅生寺	智山2-P004
記録										
書-109	文化八年冬座位帳	文化8年	1811		原本	1冊	廓然房憲海	廓然		長谷寺文書
書-110	交衆帳 從享和三年 至文化十年	文化8年	1811	10_/01	原本	1冊	廓然	廓然房憲海		長谷寺文書
書-111	文化十年春座位帳	文化10年	1813		原本	1冊	廓然	廓然		長谷寺文書
書-112	文化十二年春座位帳	文化12年	1815		原本	1冊	廓然	廓然		長谷寺文書
書-113	文化十二年冬座位帳	文化12年	1815		原本	1冊	林岳	林岳		長谷寺文書

書-114	文政七年春座位帳	文政7年	1824		原本	1冊	林岳		林岳		長谷寺文書
書-115	天保四年春座位帳	天保4年	1833		原本	1冊	林岳		林岳		長谷寺文書
書-116	伝法許可灌頂印信	文政3年	1820	02_/20	原本	2枚	伝燈大阿闍梨 = 薊鏤慶 → 憲海 文政三年(歳次庚辰)二月二十日丙午(尾宿日曜)於慈光律寺	鏤慶(憲海)	慈光寺		智山2-P153
書-117	本願方 印信 血脈	文政10年	1827	03_/11	原本	2枚	(印信)阿闍梨前法務権僧正法印大和尚位 禅忍 → 阿闍梨憲海 文政十年歳次丁亥三月十一日(血脈)大日如来 → 阿闍梨憲海	禅忍(憲海)	?		智山2-P327
書-118	西院流大事並血脈	文政10年	1827	03_/23	原本	2枚	深融 → 憲海 文政十年三月二十三日	深融(憲海)	?		智山2-P191
書-119	西院流大事	文政10年	1827	03_/23	原本	1枚	深融 → 憲海 文政十年三月二十三日	深融(憲海)	?		智山2-P191
書-120	伝法許可灌頂紹書血脈	文政10年	1827	03_/30	原本	3枚	大阿闍梨僧正法印大和尚位淳覚 → 法印憲海 文政十年(歳次丁亥)三月晦日乙巳水曜畢宿於醍醐山報恩院	淳覚(憲海)	醍醐寺報恩院		智山2-P153
書-121	西院流大事印信並血脈	文政10年	1827	08_/26	原本	2枚	大阿闍梨法印権大僧都龍肝 → 憲海 文政十年八月二六日乙亥火曜尾宿授与	龍肝(憲海)	?		智山2-P191
書-122	大宝積經百二十卷真讀 竟 文書	天保4年	1833	05_/27	原本	1枚	奉真讀大寶積經百二十卷/時天保四年癸巳從四月八日至/同五月二十七日五十箇日/未申二時/奉為高祖大師一千御遠忌報恩/謝德并為庄園泰平五穀成就/御武運長久諸人快樂/奉廻向供養」小比丘無言藏」	無言藏	(自在院)		自在院藏本
書-123	書状(京六角能満院より会津若松弥勒寺法印)	嘉永5年	1852	11_/16	原本	1枚					金剛寺-049
学芸											
書-124	太政官符	文政11年	1828	07_/29	写本	1冊	(奥)文政十一年戊子七月二十九日酉ノ刻於皇都烏丸通旅宿所書寫之了本紙智積院沢寮居住力猛法印相承之本請之者 無言藏」	無言藏	京都烏丸旅宿所		智山2-P472
書-125	高野雜筆集	文政11年	1828	08_/03	写本	1冊	(奥)承安元年六月八日於理趣院書寫了範泉本也一交了/文政十一年戊子八月三於梅尾山高山寺楞伽山羅婆那宮 無言藏」	無言藏	高山寺		智山1-P214

書-126	沙門空海学法目錄	嘉永6年	1853	02_/15	写本	1冊	(奥)正安四年十一月二十日高野山愚老沙門慶賢八十二／嘉永六年癸丑二月十五日以印本校合之了 王城中央六角堂能滿院住 無言	無言藏	(能滿院)	智山2-P418
書-127	文鏡秘府論	安政5年	1858	12_/06	写本	6卷3冊	(奥-5・6卷)安政二年丙辰十二月六日書写了 王城中真六角堂能滿院大願五十九安政五戊午四月六日夜如印本点等委ク校合了 印本云万治三年十月吉日雲樹宣音房之二百二十年成安政五年迄右ノ本智山淨客院淨眼法印ヨリ借受自四日夜至間六日夜校合訖大願六十一印版本ハ九行也」	大願	(能滿院)	智山2-P293
書-128	高祖大師年譜要略	安政6年	1859	07_/12	写本	1冊	(奥)続弘法大師年譜第九卷二所載抜書之安政六己未年七月十二日 京城六角堂能滿院大願六十二」	大願	(能滿院)	智山1-P205
書-129	いろは帳 (宥真)	明治11年	1878	04_/27	写本	1冊	(奥)明治十一年寅四月二十七日書ノ京姉小路大宮西入姉西町ノ蓮光院ノ沙門大成憲理ノ五十一才ノ宥真法印様」	大成	蓮光院	自在院蔵本
書-130	方服歌讚儀	天保4年	1833	03_/00	刊本	1冊	(版奥)右方服哥替以印施志趣真實佛弟子常不離法衣ノ願遍照金剛尊像但三衣頭陀行三昧奉仰御本誓ノ正當一千歳御遠忌禮拜為報恩謝德聊發願敬白ノ天保四年癸巳三月吉祥日ノ汚道沙門弘賢ノ執筆沙門無言藏」	無言藏	?	金剛寺-640
書-131	瑜伽伝灯抄	嘉永5年	1852	02閏/03	写本	10卷5冊	(奥)享祿四年十月三日写之畢ノ嘉永五(壬子)年閏二月三日於皇都六角堂中能滿院以西西山宝幢院御本写得之了 無言藏」	無言藏	能滿院	智山2-P379
書-132	恵心僧都引接曼陀羅縁起	文久2年	1862	11_/28	写本	1冊	(奥)文久二年壬戌十一月二十八日夜於王城中心六角堂能滿院恵心僧都真筆曼陀羅大願六十五歳写得之了」	大願	能滿院	智山1-P042
書-133	疑仏四論	天保9年	1838	11_/06	写本	1冊	(奥)天保九年戊戌十一月六日写得之了 小比丘 無言藏」	無言藏	?	智山1-P131
書-134	七書正義	安政5年	1858	12_/25	写本	7卷5冊	(奥)安政五年戊午十二月二十五日極寒書写了 王城中真紫雲山六角堂頂法寺能滿院大願ノ六十一」	大願	(能滿院)	智山2-P455
絵図										

書-135	一字塔 已上 高祖大師御真筆写	文政4年	1821	06_/28	写本	1枚	高祖大師御真筆寫昔知脱阿闍梨雙鉤之本／豐山能滿院二代之律師寶鏡閣梨付屬于今請／右御本予寫鉤之了」于時文政四辛巳年林鐘二十有八日 末資憲海」文政八乙酉年彌生二十一日請御本於龜鶴山寫之了／佛子 榮弘／廿四」	憲海	長谷寺能滿院	金剛寺-983
書-136	高祖大師御真蹟卒塔婆之写	文政5年	1822?	?	写本	1枚	高祖大師真筆卒塔婆兩面双鉤写 從來河州葛城山高貴律寺不動堂在焉」	?	高貴寺	智山1-P205
書-137	紫宸殿御修法之時拝見奉書写図宝輪羯磨図	文政7年	1824	01_/10	写本	1枚	高祖弘法大師御請来 文政七甲申年正月後七日御修法於秘密道場紫宸殿中奉拜写之了 釈沙門無言藏憲海二十七」文政八乙酉十二月廿八日請御本模写了 沙門榮弘廿四」	無言藏	内裏紫宸殿	金剛寺-322
書-138	紫宸殿御修法之時拝見奉書写図金剛盤図	文政7年	1824	01_/10	写本	1枚	高祖弘法大師御請来金剛盤之図。文政七甲申年正月後七日御修法於宮中紫宸殿奉拜写之。釋無言藏憲海」文政八乙酉十二月廿八日於豐山長谷寺山内弥勒院隨身砌奉排写之了 末資慈問榮弘廿四」文政九戊年五月初三日請御本摸奉拜写之了／慈問榮弘／廿四」	無言藏	内裏紫宸殿	金剛寺-323
書-139	紫宸殿御修法之時拝見奉書写図香水加持莊嚴図	文政7年	1824	01_/10	写本	1枚	香水加持莊嚴図。文政七甲申年正月後七日御修法於宮中紫宸殿奉拜写之。林岳無言藏。文政九戊年正月初三日請御本摸奉拜写之了／慈問榮弘／廿五」	無言藏	内裏紫宸殿	金剛寺-326
書-140	紫宸殿御修法之時拝見奉書写図舍利塔図	文政7年	1824	01_/10	写本	1枚	高祖弘法大師御請本舍利塔圖。文政七甲申年正月十日御修法秘密道場於紫宸殿拜写之 釋無言藏憲海／廿七」金之寶塔五色線八葉結之安置大壇上／文政九戊年正月初三日於豐山奉拜写之了 金剛佛子榮弘／廿五」	無言藏	内裏紫宸殿	金剛寺-327
書-141	金剛界三昧耶曼陀羅図	弘化5年	1848	08_/28	写本	1卷	(奥)今此写原本山城八幡田中善法院聖経ノ内有之云云 嘉永元戊申八月二十八日於梅尾山写得之了 無言藏並資現光」	無言藏	高山寺	智山1-P245
書-142	大曼陀羅惣図	嘉永7年	1854	03_/15	写本	5枚	大悲胎藏大曼陀羅新写五彩図牡丹草東西南於嘉永七甲寅三月十五日 京六角堂能滿院内 皆了房憲能写得之了」	皆了	能滿院	智山2-P104

書-143	道具図	嘉永4年	1851	11_/04	写本	1卷	(題)醍醐三宝院並遍智院灌頂道具絵様等」(奥)右醍醐報恩院御藏中本薄様紙奥書分鳥子紙也／嘉永四年辛亥十一月四日於皇都六角能満院写得畢 無言藏」	無言藏	能満院	智山2-P163
書-144	本朝法中衣服図	文政9年	1826	02_/28	写本	1卷	(奥)文政九丙戌年二月二十八日於和州豊山小池坊方丈親蒙亮恭僧正之免許図写之了 無言藏憲海」	無言藏	長谷寺小池坊方丈	智山2-P489
書-145	棟札写	文政12年	1829	01_/00	写本	6枚	高野山宝性院ヨリ申請書写了性運房頼甚文政十二年正月写得之了無言藏 天保五年五月写得之了慈問房榮弘」	無言藏	?	金剛寺-988

別表4 憲海略年譜

年号	憲海の事跡	区分	年齢	関係者の事跡	参考事項	
寛政2	1790	奥州会津安積郡赤津富永、越後富永(現西蒲原郡吉田町)より移住9軒にて開村。			・寛政異学の禁 ・寛政度内裏造営	
寛政3	1791					
寛政4	1792				・ロシア使節ラクスマン、根室に来航す。	
寛政5	1793				・『群書類従』刊行開始す	
寛政6	1794					
寛政7	1795			・慈雲飲光、高貴寺において曼荼羅を講義。 ・黙住信正美濃西光寺を戒律の道場とす。	・藤原貞幹『好古小録』編纂。	
寛政8	1796					
寛政9	1797					
寛政10	1798	奥州会津安積郡赤津富永にて定右エ門の次男として誕生。5月母逝去。	第一期 赤津安佐野時代	1	・本居宣長『古事記伝』脱稿	
寛政11	1799			2		
寛政12	1800			3	・『集古十種』編纂	
享和元	1801			4	・慧友僧護、高山寺報恩院に学ぶ。	
享和2	1802			5	・僧護、京都阿弥陀寺において慈雲飲光に進具す。	
享和3	1803	安佐野広伝寺憲梁に剃度す。		6	・光雲海如、上総に生まれる。	
文化元	1804			7	・飲光、阿弥陀寺にて寂(87歳)。高貴寺奥院に埋葬せらる。	・ロシア使節レザノフ、長崎に来航す。
文化2	1805			8		
文化3	1806			9	・僧護、高山寺三尊院に移住。山務に補せられ、十無尽院主を兼ねる。	
文化4	1807			10	・鳳寛鏤慶、昇覚寺で黄檗版大般若経勸進を行う。	
文化5	1808			11		・間宮林蔵樺太を探検す。

別表4 憲海略年譜

文化6	1809		第一期 野津安佐	12	・海如、上総徳蔵寺の尊慶により剃度。 ・鏝慶、昇覚寺を退く。	
文化7	1810			13	・長谷川等鶴死去。(54歳)	
文化8	1811	10月：廓然房憲海長谷寺初交衆。		14	・鏝慶、長栄寺にて黄檗版大般若経勸進を行	
文化9	1812			15	・僧護の師謙順、高山寺報恩院にて寂。 ・鏝慶、慈光寺に入る。	
文化10	1813	10月：廓然房憲海長谷寺中下ル。		16	・広伝寺に《光明真言二百万遍供養塔》建立。	
文化11	1814	11月：廓然房憲海長谷寺居継。		17		
文化12	1815	・廓然房憲海、林岳憲海と字を改める。		18	・鏝慶、伝香寺において真言三部経の書写をは じめる。	・杉田玄白『蘭学事 始』を著す。
文化13	1816	8月：長谷寺月輪院主より悉曇を伝授される。		19	・鏝慶、慈光寺において大般若経勸進を行う。 海如、慈光寺にて智懂法樹より八斎戒を受ける	
文化14	1817			20	・鏝慶、慈光寺において真言三部経の書写を終 える。	
文政元	1818	6月：広伝寺欄間墨書に「憲海代」とあり。		21		
	1819	9月：林岳、会津から初交衆の滋文・順祐・恵光の主 坊となる。		22	・鏝慶、昇覚寺七世光岳とともに長谷寺本両界 曼荼羅の模本を浅草の画工金治良に模写させ	
文政3	1820	2月：慈光寺において鳳寛鏝慶より報恩院流の『伝 法許可灌頂印信』を受け阿闍梨となる。 6月：《瑜祇塔図》を写す(憲海在銘最古の粉本)		23		
文政4	1821	6月：豊山能満院本大師双鈎本写す。	24		・伊能忠敬「大日本沿 海実測全図」完成	
文政5	1822	1月：大和竹林寺に行く。 6月：仏隆寺に行く。 8月：高貴寺にて慈雲草案《天神七代図》を写す。 ・この頃長谷寺にて《法界安立塔》版木彫刻す。	25		・『続群書類従』編纂 終わる。	
文政6	1823	9月：智積院に行く。 12月：智積院に行く。	26	・冷泉為恭、京都に生まれる。 ・願海、上州高崎に生まれる。		
文政7	1824	1月：宮中後七日御修法に参加。 3月：高野山南室院にて弘栄に進流声明を学ぶ。 5月：憲海中下ル。	27			

第二期
豊山長谷寺交衆時代

文政8	1825	9月：灌頂声明集を写す。 12月：「神祇灌頂志願者」墨書の《十種神宝図》を写す。 ・この年憲海長谷寺に戻る。
文政9	1826	7月：久修恩院にて長谷川等鶴本を写す。 9月：醍醐寺及び智積院に行く。
文政10	1827	3月：深融より『西院流大事並血脈』を受ける。 3月：大阿闍梨僧正法印大和尚淳覚より『伝法許可灌頂紹書血脈』を受ける。 5月：慈光寺に行く。 6-9月：仁和寺、平等心院、高山寺に行く。 9月：僧護より悉曇の伝授を受ける。 8月：大阿闍梨法印権大僧都龍肝より『西院流大事印信并血脈』を受ける。 10月：高貴寺にて靈符神を写す。 11月：長谷の与喜天神を写す。
文政11	1828	7月：高山寺方便智院にて両界曼荼羅敷曼荼羅の模写のため僧護を助筆す。 8月：仁和寺に行く。
文政12	1829	1月：憲海の父、逝去(半沢家墓碑)。 6月：高山寺にて《毘盧遮那如来像》を写す。 7月：長谷寺にて海如に悉曇を伝授する。 7月：南都真言院にて龍肝より伝法院流を伝授される。 9月：京都竹田明照院に行く。 10月：吉野山に行く。 ・この年高山寺方便智院での僧護の助筆を終了。
天保元	1830	6月：菅生寺に行く。
天保2	1831	4月：菅生寺に行く。 7月：高貴寺に行く。 (翌年までの間に海如に報恩院流を伝授する。)

第二期 豊山長谷寺交衆時代

28	・憲梁、広伝寺に《百万遍日課塔》建立。	・外国船打払令
29		
30		
31	・大成憲里、越後に生まれる。	・シーボルト事件
32	・鏝慶、慈光寺にて寂。(82歳) ・海如、慈光寺にて智懂法樹より八斎戒を受ける(2月)。 ・《長谷寺版両部曼荼羅》版木成る(1月)。	
33	・明堂諦濡、長栄寺にて寂。(81歳)	
34		

天保3	1832	3月：長栄寺黙住信正律師により具足戒を受ける。 3月：『梵文訳語部類集』（智山文庫）高貴寺にて書写。 4月：菅生寺にて淳如憲暢に伝授。 6月：『梵学秘要篇』に「発願し奉る誓の文」を著す。 8月：高野山真蔵院什宝の《弘法大師像》を書写（高野山西院谷光勝院）。 10月：『止風雨密咒』（自在院蔵）高野山にて書写	豊山二期 長谷寺交衆時代	35		
天保4	1833	春・長谷寺を下山。 1月：聖林寺蔵版憲海書『弘法大師和讃』開版。 2月：江戸麻布六軒町不動院に滞在。 4月：会津自在院に滞在。 5月 自在院『大宝積経』を真読。 8月《理趣経曼荼羅図》に「亀福院現住」とあり。		36	・黙住信正長栄寺にて寂。（69歳）	
天保5	1834		第三期 会津亀福院住持時代	37	・法雲尊峰志摩河内村に生まれる。 ・海如、弘法大師千年忌に種字両部曼荼羅を印行。	
天保6	1835	9月：『梵本普賢行願讃』（智山文庫）を書写（亀福		38		
天保7	1836	8月：『金剛寿命陀羅尼経』を亀福院にて開版。		39	・海如、豊山能満院の住持となる。	
天保8	1837			40		
天保9	1838			41	・会津赤津定右衛門祿御免（半沢を名乗るか）	
天保10	1839			42	・皆了憲能生まれる。 ・憲里字大成初出。	・蛮社の獄
天保11	1840			43	・雲道憲伝彦根に生まれる。	
天保12	1841			44	・為恭、この頃から高山寺に通う。 ・僧護、03/21兼意筆心覚所伝両部曼荼羅粉本修補。 ・長谷川等叔死去。（58歳）	・天保の改革始まる。
天保13	1842	『両部讃草帋／初夜金剛界／後夜胎蔵界』を書写彫刻。		45	・一雲龍乗、寂。（71歳）	
天保14	1843	6月：『金剛界念誦』（智山文庫）会津八角宮にて書写。 ・この頃絵師荻原盤山と交流あり。		46	・願海、比叡山に登る。 ・為恭、高山寺《五髻文殊像》描く。	

別表4 憲海略年譜

弘化元	1844	7月：会津若松融通寺《阿弥陀三尊来迎図》を模	第三期 院住持時代 会津 龜福	47	・願海、日光山に登る。		
弘化2	1845	2月：『瑜伽集要焰口施食儀』を龜福院で書写。 7-9月：江戸護持院に滞在か。		48	・現光江戸金剛院で模写す。 ・願海比叡山に登る。		
弘化3	1846			49	・宗立、丹波園部に生まれる。 ・願海、回峰行開始。		
弘化4	1847	(この頃入洛か?) 6月：梅尾関井坊舎において《瑜祇三昧耶形》を書写。 6月：長谷川家に仮寓す。 8月：山王寺における模写のはじめ。		50	・憲里、星高の号を使用。	・『丹鶴叢書』刊行開始	
嘉永元	1848	6月：大願号の初出。能満院の名と年紀が同一資料の中にそろそろ初出(十二天図袋)。 8-9月 高山寺に仮寓。 9月：《勝敵毘沙門天像》に「大願施印一千種内」とあり。		第四期 山王寺 寄寓時代	51	・僧護、智積院にて伝法院流・保寿院流の伝授を行う。	
嘉永2	1849	4月：梅尾護法神祠に《護法神像》奉納。			52	・憲里、沙門となる。 ・憲里、星高号の下限(6月)。	
嘉永3	1850	1-2月：宇治恵心院本を模写す。 5月：宝静写本袈裟図僧護所持本より写す。 10月：醍醐寺報恩院に行く。 10月山王寺における模写の終わり。			53	・為恭、西洞院下立売上ルに住す。	
嘉永4	1851	(この頃六角堂能満院に入るか?) 7月：この頃から年紀のある能満院粉本が確認できる。 9月：三輪平等寺で真言八祖像を写す。			54	・願海、5月比叡山常楽院主となる。宗淵より円頓大戒を受ける。	
嘉永5	1852			第五期 能満院 住持時代	55	・法雲尊峯、庫蔵寺尊裏を師として剃度。	
嘉永6	1853	3月：『梵学宗要章』を開版。 3月：高野山長谷寺に行く。			56	・僧護、十無尽院にて寂(79歳)。 ・願海、千日回峰行満行す。 ・為恭、烏丸下長者町八条家に仮住す。	・ペリー浦賀に来航す。
安政元	1854	10月：紺地金銀泥《薬師如来像》(自在院)。 ・この年赤津長福寺大般若経寄進を仲介。	57		・智懂、示寂。(79歳) ・願海、正月に養寿院《仏頂尊勝曼荼羅》を為恭に描かせる。		

安政2	1855	1月：《大般若守護十六善神像》赤津長福寺に寄進。 9月：室生寺初瀬に行く。	第五期 能満院住持時代	58	・宗立、京都に出て大雅堂清亮の門に入る。	・安政度内裏造営
安政3	1856			59	・宗立、能満院に入る。 ・願海、梅尾石雲庵に仮寓す。 ・為恭、大樹寺障壁画製作開始	
安政4	1857	1月：梅尾護法神祠に《訶利帝母像》奉納。		60	・宗立、剃度を受ける。 ・願海、冬東叡山勸善院に仮寓す。 ・為恭、大樹寺障壁画製作開始	
安政5	1858			61	・願海、粉河寺御池坊に入る。	・日米修好通商条約調
安政6	1859	9月：兄吉蔵(二代半沢定右衛門)逝去。		62		
万延元	1860			63		
文久元	1861	1月：安佐野春日神社に神号1軸寄進。 ・この頃仁和寺にて『覺禪鈔』『十卷抄』を写すと伝う。		64		
文久2	1862			65	・雲道この年までに能満院に入る。	
文久3	1863	8-9月：智積院所蔵肖像粉本群を写す。		66		
元治元	1864	7月20日六角堂能満院焼失。蓮光院に仮寓す。 9月3日：同寺にて寂。		67	・為恭、大和丹波市にて没。(42歳) ・海如、豊山能満院を隠居す。	・禁門の変
慶応元	1865					
慶應2	1866					
慶應3	1867				・願海、願海葛川明王院に隠棲す。	
明治元	1868					・鳥羽伏見の戦い
明治2	1869			・春、《御室版両部曼荼羅》開版事業開始。 ・憲里、雲道、宗立御室尊寿院に仮寓す。	・神仏分離令布告 ・東京奠都	
明治3	1870			・《御室版両部曼荼羅》開版事業完成。(6月)		
明治4	1871			・長谷川等舟死去。(54歳) ・長谷川等栄死去。(23歳)	・廢藩置県	
明治5	1872					
明治6	1873			・海如、能満院にて寂。(71歳) ・願海、葛川明王院にて寂。(51歳)		
明治7	1874					

別表4 憲海略年譜

明治8	1875				
明治9	1876				
明治10	1877				・西南戦争 ・第1回内国勸業博覧 会開催
明治11	1878				
明治12	1879				
明治13	1880			・宗立、京都府画学校に出仕する。 ・大成・宗立ら蓮光院に憲海の墓塔を建立。 (6月)	
明治14	1881			・宗立、京都府画学校西宗教員となる。	
明治15	1882				
明治16	1883				
明治17	1884			・憲里、越後三嶋万寿寺に滞在。	
明治18	1885				
明治19	1886			・憲里、京都法金剛院に仮寓。	
明治20	1887				
明治21	1888				
明治22	1889			・尊峰、泉涌寺雲龍院にて寂（56歳）。 ・宗立、京都府画学校を退任。	・大日本帝国憲法発布
明治23	1890				
明治24	1891			・憲理、越後潟東村にて寂（64歳）。	
明治25	1892			・宝生院火災、尊峰の八祖像・十二天像版木焼 失。	